北埋調報 165

八雲町

山　崎　5　遺　跡

—北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財発掘調査報告書—

第 1 分冊

平成 13 年度

財団法人　北海道埋蔵文化財センター

北埋調報165

八雲町

山崎5遺跡

—北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財発掘調査報告書—

第1分冊

平成13年度

財団法人　北海道埋蔵文化財センター

口絵1



山崎5遺跡と周辺の空中写真（南西から　平成12年9月7日撮影）



1　H－1（南西から）



2　H－3（北から）



1　山崎 5 遺跡出土のⅡ群 b 類土器(1)



2　山崎 5 遺跡出土のⅡ群 b 類土器(2)

例　言

1．本書は日本道路公団北海道支社が行う北海道縦貫自動車（七飯～長万部）建設工事に伴い、㈶北海道埋蔵文化財センターが平成11年度、同12年度に実施した八雲町山崎５遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．発掘調査は平成11年度については第２調査部第５調査課が、同12年度は第１調査部第４調査課が担当した。

3．本書の執筆はⅥ章、Ⅶ章を除き遠藤香澄、皆川洋一、藤原秀樹、立田理、広田良成、柳瀬由佳が分担し、全体の編集は遠藤が行った。文責は文末に記してある。

4．整理作業は２か年分をまとめて平成12年度と平成13年度に第１調査部第４調査課が行った。遺物の整理は土器を皆川が、石器を藤原が担当した。また写真・図面の整理は立田が担当した。

5．現場での写真撮影は各調査員が、室内での遺物の撮影は第１調査部第１調査課の立川トマスが行った。

6．遺跡の全体写真の空中撮影および最終面の地形測量と遺構位置図の作成は㈱シン技術コンサルに委託した。

7．黒曜石の原材産地分析は京都大学原子炉実験所の藁科哲男氏に依頼した。

8．土壙の土壌の脂肪酸分析は㈱ズコーシャ総合科学研究所に委託した。

9．放射性炭素年代の測定は㈱地球科学研究所に委託した。

10．炭化種子の同定は札幌国際大学の吉崎昌一氏、北海道大学埋蔵文化財調査室の椿坂恭代氏に依頼した。

11．火山灰分析および住居跡から検出された砂の分析は第１調査部第１調査課の花岡正光による。

12．石器の石材鑑定は第１調査部第１調査課花岡正光の指導のもと藤原秀樹が行った。

13．土器の実測・トレースは小林晴美と木下はるみが行った。包含層および一部の遺構出土の石器は主に小林晴美と木下はるみが行い、その他の遺構の石器については㈱シン技術コンサルに委託した。

14．整理、報告書作成が終了後、出土資料及び記録類は八雲町教育委員会が保管する。

15．調査にあたっては下記の諸機関、諸氏にご協力、ご指導をいただいた。

北海道教育庁文化課、八雲町教育委員会、長万部町教育委員会、森町教育委員会、北海道文化財保護協会、八雲町立山崎小学校、八雲町郷土資料館　三浦孝一・柴田信一、八雲町教育委員会　横山英介・菊池　博、長万部町教育委員会　佐藤　稔・大根田雅美・山田明美、森町教育委員会　藤田　登、南茅部町教育委員会　阿部千春・福田裕二、松前町教育委員会　久保　泰、上ノ国町教育委員会　松崎水穂・斉藤邦典・松田輝哉、函館市教育委員会　長谷部一弘・野村祐一、木古内町教育委員会　鈴木正語・菅野文二・三上英則・大谷内愛史・木元　豊・山田　央、七飯町教育委員会　石本省三、伊達市教育委員会　大島直行・青野友哉、虻田町教育委員会　角田隆志、上磯町教育委員会　森　靖裕、秋田県埋蔵文化財センター　桜田　隆・五十嵐一治・高橋　学・小島朋夏

凡　例

1．本文中および図、表中では以下の記号を用い、原則として確認順に番号を付した。

Ｈ：住居跡・住居様遺構　Ｐ：土壙　ＴＰ：Ｔピット　Ｆ：焼土　Ｓ：集石

ＦＣ：フレイク集中域　Ｍ：再堆積層　ＳＰ：柱穴状小土壙　ＨＰ：住居付属ピット

ＨＣ：住居跡に伴う炭化物　ＨＦ：住居跡に伴う焼土

2．挿図中の遺物のシンボルマークについては個々に凡例をつけた。

3．掲載した実測図等の縮尺は原則として以下のとおりである。

遺構図	1：40	遺物出土状況図	1：20
復元土器	1：3	土器拓本	1：3
剥片石器	1：2	礫石器	1：3
石斧および関連する石器	1：2		
土製品	1：3	石製品	1：2

4．遺物写真の縮尺は土器片、礫石器が1：3、剥片石器と石斧および関連する石器が1：2である。ただし復元土器については任意である。

5．土器の実測図・拓本は、接合、未接合に関わらず同一個体と判断される破片が一片でも出土している場合、同じ資料をそのすべての遺構欄に掲載した。このため異なる遺構（包含層）から出土した資料には図番号の肩に・印を付け、それが実際に出土した遺構、包含層を( )内に示した。また、遺物写真については重複掲載を避け、主に接合し実際に出土した遺構にのみ掲載した。

6．遺構の規模については以下の要領で示した。一部破壊されているものについては現存の長さを( )で示した。

住居跡、竪穴状遺構、土壙、土壙墓、Ｔピット

確認面での長軸の長さ×短軸の長さ／床（底）面での長軸の長さ×短軸の長さ／最大の深さ

（単位）cm

焼土、集石、フレイク集中域、柱穴状小ピット

確認面での長軸の長さ×短軸の長さ／最大の厚（深）さ（単位）cm

7．土層の標記は、基本土層はローマ数字、遺構の覆土についてはアラビア数字で示した。

土層注記および本文中では駒ケ岳ｄ火山灰は略号Ｋｏ－ｄ、駒ケ岳ｇ火山灰は略号Ｋｏ－ｇを用いている。

8．土層説明には『新版標準土色帖（1997年版）』を使用した。

9．遺構図中の方位は真北を、細数字（単位m）は標高を示している。

10．石器、土・石製品の大きさは「最大長×最大幅×最大厚」で記し、破損している場合は現存の大きさを( )で示した。

剥片石器、礫石器は機能部にこだわらず、長軸を長さ、短軸を幅、厚さは最大値を採用した。なお遺物実測図中でたたき痕は「∨―∨」、すり痕は「⊢⟷⊣」　で範囲を示した。

目　次

第１分冊

口絵カラー
例　言
凡　例
目　次
挿図目次
表目次

Ⅰ　調査の概要……1
　1　調査要項……1
　2　調査体制……1
　3　調査に至る経緯……2
　4　調査の概要……3
Ⅱ　遺跡の位置と環境……11
　1　遺跡の位置と環境……11
　2　周辺の遺跡……13
Ⅲ　調査の方法……17
　1　発掘区の設定……17
　2　調査の方法……17
　(1)　発掘調査の方法……17
　(2)　整理の方法……19
　3　基本土層……21
　4　遺物の分類……21
　(1)　土器……21
　(2)　石器等……24
Ⅳ　遺構と遺構出土の遺物……27
　1　削平部分および関連する遺構……27
　概要……27
　(1)　住居様遺構……28
　(2)　再堆積層……42
　(3)　土壙……56
　(4)　焼土……80
　(5)　集石……81
　(6)　方形柱穴列……81
　2　周辺の遺構……84
　(1)　竪穴住居跡……84

(2) 土壙墓 ……233
(3) 土壙 ……241
(4) Tピット ……271
(5) 柱穴状土壙群と方形柱穴列 ……272
(6) 焼土 ……285
(7) 集石 ……292
(8) フレイク集中域 ……302
遺構規模一覧　遺構出土遺物一覧　住居跡・住居様遺構出土遺物一覧　遺構出土掲載土器一覧
遺構出土実測土器一覧　遺構出土掲石器等一覧
Ⅴ 包含層出土の遺物 ……355
1 土器 ……355
(1) 縄文時代前期の土器 ……355
(2) 縄文時代早期の土器 ……383
(3) 縄文時代中期の土器 ……386
(4) 縄文時代後期の土器 ……386
(5) 続縄文時代の土器 ……388
2 石器等 ……389
包含層出土掲載土器一覧　包含層出土実測土器一覧　包含層出土掲載石器等一覧
Ⅵ 自然科学的分析 ……455
1 山崎5遺跡から出土した土壙に残存する脂肪の分析
中野益男・㈱ズコーシャ総合科学研究所 ……455
2 放射性炭素年代測定結果 ㈱地球科学研究所 ……465
3 山崎5遺跡から出土した炭化植物種子について 吉崎昌一・椿坂恭代 ……477
4 平成11年度山崎5遺跡、山崎4遺跡、山越2遺跡出土の黒曜石製石器の原材産地分析
京都大学原子炉実験所 藁科哲男 ……480
Ⅶ 成果と問題点 ……489
1 山崎5遺跡の遺構について ……489
2 円筒土器文化圏における墓制について ……494
3 H－15付属土壙から出土した砂について ……512
4 フレイク集中域について ……513
5 むすびにかえて ……514

引用参考文献 ……516
報告書抄録
奥付け

第2分冊
図版目次
写真図版
奥付け

挿図目次

Ⅰ　調査の概要
図Ⅰ－1　年度別調査範囲……2
図Ⅰ－2　遺跡周辺の地形と調査区……4
図Ⅰ－3　最終面地形と遺構位置図……9

Ⅱ　遺跡の位置と環境
図Ⅱ－1　遺跡の位置……12
図Ⅱ－2　周辺の遺跡……14

Ⅲ　調査の方法
図Ⅲ－1　発掘区設定図……18
図Ⅲ－2　土層柱状図……22
図Ⅲ－3　石器の分類(1)……24
図Ⅲ－4　石器の分類(2)……25
図Ⅲ－5　石器の分類(3)……26

Ⅳ　遺構と遺構出土の遺物
図Ⅳ－1　削平部分……28
図Ⅳ－2　Ｈ－10(1)……31
図Ⅳ－3　Ｈ－10(2)……32
図Ⅳ－4　Ｈ－10遺物出土状況……33
図Ⅳ－5　Ｈ－10出土の遺物……35
図Ⅳ－6　Ｈ－11……36
図Ⅳ－7　Ｈ－11遺物出土状況……37
図Ⅳ－8　Ｈ－11出土の遺物……39
図Ⅳ－9　Ｈ－13……40
図Ⅳ－10　Ｈ－13遺物出土状況と出土遺物……41
図Ⅳ－11　Ｍ－１(1)とＭ－１直上遺物出土状況……45
図Ⅳ－12　Ｍ－１(2)……46
図Ⅳ－13　Ｍ－１遺物出土状況……47
図Ⅳ－14　Ｍ－１出土の遺物(1)……49
図Ⅳ－15　Ｍ－１出土の遺物(2)……50
図Ⅳ－16　Ｍ－２(1)……51
図Ⅳ－17　Ｍ－２(2)……52
図Ⅳ－18　Ｍ－２(3)……53
図Ⅳ－19　Ｍ－２出土の遺物(1)……54
図Ⅳ－20　Ｍ－２出土の遺物(2)……55
図Ⅳ－21　土壙（Ｐ－２・７）と出土遺物……57
図Ⅳ－22　Ｐ－７出土の遺物・土壙（Ｐ－９）と出土遺物……59
図Ⅳ－23　土壙（Ｐ－８）と出土遺物……60
図Ⅳ－24　土壙（Ｐ－10・14）と出土遺物……62
図Ⅳ－25　土壙（Ｐ－11・24・25）と出土遺物……64
図Ⅳ－26　土壙（Ｐ－18・28）と出土遺物……67
図Ⅳ－27　土壙（Ｐ－22・29）と出土遺物……69
図Ⅳ－28　土壙（Ｐ－27・30・32）と出土遺物……70
図Ⅳ－29　土壙（Ｐ－35）と出土遺物……73
図Ⅳ－30　土壙（Ｐ－31・34・45・54・59・61）と出土遺物……75
図Ⅳ－31　土壙（Ｐ－62・63・66・67・73・74）と出土遺物……77
図Ⅳ－32　土壙（Ｐ－75）と出土遺物……79
図Ⅳ－33　焼土（Ｆ－11・Ｆ－18・19）と出土遺物……82
図Ⅳ－34　集石（Ｓ－４）と方形柱穴列４……83
図Ⅳ－35　Ｈ－１(1)……85
図Ⅳ－36　Ｈ－１(2)、掘り上げ土検出状況……86
図Ⅳ－37　Ｈ－１覆土中検出の焼土……87
図Ⅳ－38　Ｈ－１覆土２ｂ層遺物出土状況……89
図Ⅳ－39　Ｈ－１覆土３層遺物出土状況(1)……90
図Ⅳ－40　Ｈ－１覆土３層遺物出土状況(2)……91
図Ⅳ－41　Ｈ－１覆土３ｂ層遺物出土状況……93
図Ⅳ－42　Ｈ－１床面遺物出土状況……95
図Ⅳ－43　Ｈ－１覆土２層・２ｂ層遺物出土状況……97
図Ⅳ－44　Ｈ－１覆土３層・３ｂ層遺物出土状況……99
図Ⅳ－45　Ｈ－１覆土４層・５層遺物出土状況……101
図Ⅳ－46　Ｈ－１剥片石器群出土状況……103
図Ⅳ－47　Ｈ－１礫石器群出土状況……105

図Ⅳ－48　Ｈ－１出土の土器(1) ……107
図Ⅳ－49　Ｈ－１出土の土器(2) ……108
図Ⅳ－50　Ｈ－１出土の土器(3) ……110
図Ⅳ－51　Ｈ－１出土の土器(4) ……111
図Ⅳ－52　Ｈ－１出土の土器(5) ……112
図Ⅳ－53　Ｈ－１出土の土器(6) ……114
図Ⅳ－54　Ｈ－１出土の土器(7) ……115
図Ⅳ－55　Ｈ－１出土の土器(8) ……117
図Ⅳ－56　Ｈ－１出土の土器(9) ……118
図Ⅳ－57　Ｈ－１出土の土器(10) ……119
図Ⅳ－58　Ｈ－１出土の石器(1) ……120
図Ⅳ－59　Ｈ－１出土の石器(2) ……122
図Ⅳ－60　Ｈ－１出土の石器(3) ……123
図Ⅳ－61　Ｈ－１出土の石器(4) ……124
図Ⅳ－62　Ｈ－１出土の石器(5) ……125
図Ⅳ－63　Ｈ－１出土の石器(6) ……126
図Ⅳ－64　Ｈ－１出土の石器(7) ……127
図Ⅳ－65　Ｈ－２ ……128
図Ⅳ－66　Ｈ－３(1) ……130
図Ⅳ－67　Ｈ－３(2) ……131
図Ⅳ－68－(1)　Ｈ－３床面遺物出土状況 ……132
図Ⅳ－68－(2)　Ｈ－３覆土土器出土状況 ……133
図Ⅳ－68－(3)　Ｈ－３覆土石器出土状況 ……134
図Ⅳ－69　Ｈ－３出土の土器(1) ……136
図Ⅳ－70　Ｈ－３出土の土器(2) ……137
図Ⅳ－71　Ｈ－３出土の土器(3) ……139
図Ⅳ－72　Ｈ－３出土の土器(4) ……140
図Ⅳ－73　Ｈ－３出土の土器(5) ……141
図Ⅳ－74　Ｈ－３出土の土器(6) ……142
図Ⅳ－75　Ｈ－３出土の石器(1) ……144
図Ⅳ－76　Ｈ－３出土の石器(2) ……145
図Ⅳ－77　Ｈ－３出土の石器(3) ……146
図Ⅳ－78　Ｈ－３出土の石器(4) ……147
図Ⅳ－79　Ｈ－４(1) ……149
図Ⅳ－80　Ｈ－４遺物出土状況 ……150
図Ⅳ－81　Ｈ－４(2)と出土の土器(1) ……151
図Ⅳ－82　Ｈ－４出土の土器(2) ……152
図Ⅳ－83　Ｈ－４出土の石器 ……153
図Ⅳ－84　Ｈ－５(1) ……155
図Ⅳ－85　Ｈ－５(2) ……156
図Ⅳ－86　Ｈ－５遺物出土状況 ……157
図Ⅳ－87　Ｈ－５出土の石器(1) ……159
図Ⅳ－88　Ｈ－５出土の石器(2) ……160
図Ⅳ－89　Ｈ－６(1) ……161
図Ⅳ－90　Ｈ－６(2) ……162
図Ⅳ－91　Ｈ－６(3) ……163
図Ⅳ－92　Ｈ－６出土の土器 ……164
図Ⅳ－93　Ｈ－６出土の石器(1) ……165
図Ⅳ－94　Ｈ－６出土の石器(2) ……166
図Ⅳ－95　Ｈ－７(1) ……168
図Ⅳ－96　Ｈ－７(2) ……169
図Ⅳ－97　Ｈ－７遺物出土状況 ……170
図Ⅳ－98　Ｈ－７出土の土器・石器(1) ……172
図Ⅳ－99　Ｈ－７出土の石器(2) ……173
図Ⅳ－100　Ｈ－７出土の石器(3) ……174
図Ⅳ－101　Ｈ－７出土の石器(4) ……175
図Ⅳ－102　Ｈ－８(1) ……177
図Ⅳ－103　Ｈ－８(2) ……178
図Ⅳ－104　Ｈ－８出土の土器(1) ……179
図Ⅳ－105　Ｈ－８出土の土器(2) ……180
図Ⅳ－106　Ｈ－８出土の土器(3) ……182
図Ⅳ－107　Ｈ－８出土の土器(4)・石器(1) ……183
図Ⅳ－108　Ｈ－８出土の石器(2) ……184
図Ⅳ－109　Ｈ－８出土の石器(3) ……185
図Ⅳ－110　Ｈ－９とＨ－９遺物出土状況 ……187
図Ⅳ－111　Ｈ－９出土の遺物 ……188
図Ⅳ－112　Ｈ－12(1) ……190
図Ⅳ－113　Ｈ－12(2)と出土遺物 ……191
図Ⅳ－114　Ｈ－12覆土中検出の焼土・炭化物集中 ……192
図Ⅳ－115　Ｈ－12遺物出土状況 ……193
図Ⅳ－116　Ｈ－14と出土遺物 ……196
図Ⅳ－117　Ｈ－15(1) ……198
図Ⅳ－118　Ｈ－15(2) ……199
図Ⅳ－119　Ｈ－15覆土中検出の焼土、砂と覆土３層（ローム）検出状況 ……200
図Ⅳ－120　Ｈ－15覆土１層・２ｂ層石皿・台石出土状況、覆土２ｂ層遺物出土状況図の位置 ……201
図Ⅳ－121　Ｈ－15覆土２ｂ層遺物出土状況 …202

図Ⅳ－122 Ｈ－15覆土３層遺物出土状況、２ｃ層遺物出土状況図の位置 ……203
図Ⅳ－123 Ｈ－15覆土２ｃ層遺物出土状況 …204
図Ⅳ－124 覆土中検出のＰ－50・51と遺物出土状況 ……205
図Ⅳ－125 Ｈ－15土器出土状況 ……207
図Ⅳ－126 Ｈ－15剥片石器群、磨製石器群出土状況 ……209
図Ⅳ－127 Ｈ－15礫石器群出土状況 ……211
図Ⅳ－128 Ｈ－15出土の土器(1) ……214
図Ⅳ－129 Ｈ－15出土の土器(2) ……215
図Ⅳ－130 Ｈ－15出土の土器(3) ……216
図Ⅳ－131 Ｈ－15出土の土器(4) ……217
図Ⅳ－132 Ｈ－15出土の土器(5) ……218
図Ⅳ－133 Ｈ－15出土の土器(6) ……219
図Ⅳ－134 Ｈ－15出土の土器(7) ……221
図Ⅳ－135 Ｈ－15出土の石器(1) ……222
図Ⅳ－136 Ｈ－15出土の石器(2) ……223
図Ⅳ－137 Ｈ－15出土の石器(3) ……224
図Ⅳ－138 Ｈ－15出土の石器(4) ……225
図Ⅳ－139 Ｈ－15出土の石器等(5) ……226
図Ⅳ－140 Ｈ－16と出土の遺物 ……229
図Ⅳ－141 Ｈ－17 ……231
図Ⅳ－142 Ｈ－17出土の遺物 ……232
図Ⅳ－143 土壙墓（Ｐ－１・４・38・39）と出土遺物 ……234
図Ⅳ－144 土壙墓（Ｐ－55・56・68・69）と出土遺物 ……236
図Ⅳ－145 土壙墓（Ｐ－71・72・76）と出土遺物 ……240
図Ⅳ－146 土壙（Ｐ－３・６・12・13・15）と出土遺物 ……242
図Ⅳ－147 土壙（Ｐ－５）と出土遺物(1) ……244
図Ⅳ－148 Ｐ－５出土の遺物(2) ……245
図Ⅳ－149 土壙（Ｐ－16・17・19・58）と出土遺物 ……247
図Ⅳ－150 土壙（Ｐ－20・21・23・26・33）と出土遺物 ……249
図Ⅳ－151 土壙（Ｐ－36・37・41）と出土遺物 ……252
図Ⅳ－152 土壙（Ｐ－40） ……253
図Ⅳ－153 土壙（Ｐ－42） ……254
図Ⅳ－154 Ｐ－42出土の遺物(1) ……255
図Ⅳ－155 Ｐ－42出土の遺物(2) ……256
図Ⅳ－156 Ｐ－42出土の遺物(3) ……257
図Ⅳ－157 Ｐ－42出土の遺物(4) ……258
図Ⅳ－158 土壙（Ｐ－43）と出土遺物 ……260
図Ⅳ－159 土壙（Ｐ－44・46・47・49・52）と出土遺物 ……262
図Ⅳ－160 土壙（Ｐ－53）と出土遺物 ……264
図Ⅳ－161 土壙（Ｐ－57）と出土遺物 ……266
図Ⅳ－162 土壙（Ｐ－60・64・65）と出土遺物 ……268
図Ⅳ－163 土壙（Ｐ－70）・Ｔピット（ＴＰ－１）と出土遺物 ……270
図Ⅳ－164 柱穴状土壙（ＳＰ）群(1) ……273
図Ⅳ－165 柱穴状土壙（ＳＰ）群(2) ……274
図Ⅳ－166 柱穴状土壙（ＳＰ）群(3) ……275
図Ⅳ－167 柱穴状土壙（ＳＰ）群(4) ……276
図Ⅳ－168 柱穴状土壙（ＳＰ）群(5)・方形柱穴列１ ……277
図Ⅳ－169 方形柱穴列２・３ ……278
図Ⅳ－170 柱穴状土壙出土の遺物 ……284
図Ⅳ－171 焼土（Ｆ－１～８） ……290
図Ⅳ－172 焼土（Ｆ－９・10・12～17・22～24） ……291
図Ⅳ－173 集石（Ｓ－１～３・９・10） ……296
図Ⅳ－174 集石（Ｓ－５～８） ……297
図Ⅳ－175 集石出土の遺物(1) ……298
図Ⅳ－176 集石出土の遺物(2) ……299
図Ⅳ－177 集石出土の遺物(3) ……300
図Ⅳ－178 集石出土の遺物(4)・Ｆ－15出土の遺物 ……301
図Ⅳ－179 フレイク集中域（ＦＣ－１～５・９） ……303
図Ⅳ－180 フレイク集中域（ＦＣ－６～８・10・11・18・19） ……304
図Ⅳ－181 フレイク集中域（ＦＣ－12・13）…307
図Ⅳ－182 フレイク集中域（ＦＣ－14～17）…308
図Ⅳ－183 フレイク集中域（ＦＣ）出土の土器

……311
図Ⅳ－184 フレイク集中域（ＦＣ）出土の石器(1)
……312
図Ⅳ－185 フレイク集中域（ＦＣ）出土の石器(2)
……313
図Ⅳ－186 フレイク集中域（ＦＣ）出土の石器(3)
……316
図Ⅳ－187 フレイク集中域（ＦＣ）出土の石器(4)
……317
図Ⅳ－188 フレイク集中域（ＦＣ）出土の石器(5)
……319
図Ⅳ－189 フレイク集中域（ＦＣ）出土の石器(6)
……320
図Ⅳ－190 フレイク集中域（ＦＣ）出土の石器(7)
……321
Ⅴ　包含層出土の遺物
図Ⅴ－１　包含層出土土器の分布(1)Ⅰ群ａ類・Ⅱ群ｂ類・Ⅲ群ａ類 ……356
図Ⅴ－２　包含層出土土器の分布(2)Ⅲ群ｂ類・Ⅳ群ａ類・Ⅵ群 ……357
図Ⅴ－３　包含層出土のⅡ群ｂ類土器(1) ……359
図Ⅴ－４　包含層出土のⅡ群ｂ類土器(2) ……360
図Ⅴ－５　包含層出土のⅡ群ｂ類土器(3) ……361
図Ⅴ－６　包含層出土のⅡ群ｂ類土器(4) ……363
図Ⅴ－７　包含層出土のⅡ群ｂ類土器(5) ……364
図Ⅴ－８　包含層出土のⅡ群ｂ類土器(6) ……365
図Ⅴ－９　包含層出土のⅡ群ｂ類土器(7) ……367
図Ⅴ－10　包含層出土のⅡ群ｂ類土器(8) ……368
図Ⅴ－11　包含層出土のⅡ群ｂ類土器(9) ……369
図Ⅴ－12　包含層出土のⅡ群ｂ類土器(10) ……371
図Ⅴ－13　包含層出土のⅡ群ｂ類土器(11) ……373
図Ⅴ－14　包含層出土のⅡ群ｂ類土器(12) ……374
図Ⅴ－15　包含層出土のⅡ群ｂ類土器(13) ……375
図Ⅴ－16　包含層出土のⅡ群ｂ類土器(14) ……377
図Ⅴ－17　包含層出土のⅡ群ｂ類土器(15) ……378
図Ⅴ－18　包含層出土のⅡ群ｂ類土器(16) ……379
図Ⅴ－19　包含層出土のⅡ群ｂ類土器(17) ……380
図Ⅴ－20　包含層出土のⅡ群ｂ類土器(18) ……381
図Ⅴ－21　包含層出土のⅡ群ｂ類土器(19) ……382
図Ⅴ－22　包含層出土のⅠ群ａ類土器 ……384
図Ⅴ－23　包含層出土のⅢ群ａ類・Ⅲ群ｂ類土器
……384
図Ⅴ－24　包含層出土のⅣ群ａ類土器(1) ……385
図Ⅴ－25　包含層出土のⅣ群ａ類土器(2) ……387
図Ⅴ－26　包含層出土のⅣ群ａ類土器(3) ……388
図Ⅴ－27　包含層出土のⅥ群土器 ……388
図Ⅴ－28　包含層出土の石器(1)石鏃、石槍またはナイフ ……391
図Ⅴ－29　包含層出土の石器(2)石槍またはナイフ、石錐 ……392
図Ⅴ－30　包含層出土の石器(3)つまみ付きナイフ
……393
図Ⅴ－31　包含層出土の石器(4)つまみ付きナイフ
……394
図Ⅴ－32　包含層出土の石器(5)つまみ付きナイフ
……395
図Ⅴ－33　包含層出土の石器(6)スクレイパー
……397
図Ⅴ－34　包含層出土の石器(7)スクレイパー
……398
図Ⅴ－35　包含層出土の石器(8)スクレイパー
……399
図Ⅴ－36　包含層出土の石器(9)スクレイパー …400
図Ⅴ－37　包含層出土の石器(10)スクレイパー、両面調整石器 ……401
図Ⅴ－38　包含層出土の石器(11)石核 ……402
図Ⅴ－39　包含層出土の石器(12)石核 ……403
図Ⅴ－40　包含層出土の石器(13)石核 ……405
図Ⅴ－41　包含層出土の石器(14)石斧、擦り切り残片 ……406
図Ⅴ－42　包含層出土の石器(15)擦り切り残片、石のみ ……407
図Ⅴ－43　包含層出土の石器(16)たたき石 ……409
図Ⅴ－44　包含層出土の石器(17)たたき石 ……410
図Ⅴ－45　包含層出土の石器(18)すり石 ……411
図Ⅴ－46　包含層出土の石器(19)半円状扁平打製石器 ……412
図Ⅴ－47　包含層出土の石器(20)半円状扁平打製石器 ……413
図Ⅴ－48　包含層出土の石器(21)半円状扁平打製石

器 ……414
図Ⅴ－49　包含層出土の石器㉒北海道式石冠 …415
図Ⅴ－50　包含層出土の石器㉓北海道式石冠 …416
図Ⅴ－51　包含層出土の石器㉔北海道式石冠 …417
図Ⅴ－52　包含層出土の石器㉕北海道式石冠、すり石 ……419
図Ⅴ－53　包含層出土の石器㉖石鋸 ……420
図Ⅴ－54　包含層出土の石器㉗石鋸、砥石 …421
図Ⅴ－55　包含層出土の石器㉘台石・石皿 …422
図Ⅴ－56　包含層出土の石器㉙台石・石皿、石錘、加工痕ある礫、石製品 ……424
図Ⅴ－57　包含層出土石器の器種別分布(1)石鏃、石槍またはナイフ、石錐 ……425
図Ⅴ－58　包含層出土石器の器種別分布(2)つまみ付きナイフ、スクレイパー、両面調整石器 ……426
図Ⅴ－59　包含層出土石器の器種別分布(3)石核、原石、Ｒフレイク ……427
図Ⅴ－60　包含層出土石器の器種別分布(4)Ｕフレイク、フレイク（頁岩以外）、石斧…428
図Ⅴ－61　包含層出土石器の器種別分布(5)擦り切り残片、たたき石、すり石 ……429
図Ⅴ－62　包含層出土石器の器種別分布(6)半円状扁平打製石器、北海道式石冠、石鋸 ……430
図Ⅴ－63　包含層出土石器の器種別分布(7)砥石、台石・石皿、石錘 ……431
図Ⅴ－64　包含層出土石器の器種別分布(8)加工痕ある礫、擦り切り痕のある礫、軽石 ……432
図Ⅴ－65　包含層出土石器の器種別分布(9)フレイク（頁岩） ……433
図Ⅴ－66　包含層出土石器の器種別分布⑽フレイク（頁岩） ……434
図Ⅴ－67　包含層出土石器の器種別分布⑾礫・礫片 ……435
図Ⅴ－68　包含層出土石器の器種別分布⑿礫・礫片 ……436
図Ⅴ－69　包含層出土石器の器種別分布⒀土製円盤、石製品、焼成粘土塊 ……437
図Ⅴ－70　包含層出土石器の器種別分布⒁有孔自然石、その他　集石のグラフ(1) …438
図Ⅴ－71　集石のグラフ(2) ……439
図Ⅴ－72　集石のグラフ(3) ……440
Ⅵ　自然科学的分析
Ⅵ－1
図1　土壌試料採取地点 ……456
図2　試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成 …460
図3　試料中に残存する脂肪のステロール組成 ……460
図4　試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図 ……462
図5　試料中の残存する脂肪の脂肪酸組成による種特異性相関 ……462
Ⅵ－4
図1　黒曜石原産地 ……484
Ⅶ　成果と問題点
図Ⅶ－1　山崎５遺跡の削平部分とその周辺の遺構 ……490
図Ⅶ－2　山崎５遺跡における集落構造と墓域 ……495
図Ⅶ－3　土壙墓床面の規模と長軸方向 ……496
図Ⅶ－4　道南部における前期後半の墓制(1) …499
図Ⅶ－5　道南部における前期後半の墓制(2) …500
図Ⅶ－6　道南部における前期後半の墓制(3) …501
図Ⅶ－7　道南部における前期後半の墓制(4) …502
図Ⅶ－8　道南部における前期後半の墓制(5) …503
図Ⅶ－9　道央部における前期後半の墓制(1) …504
図Ⅶ－10　道央部における前期後半の墓制(2) …505
図Ⅶ－11　道央部における前期後半の墓制(3) …506
図Ⅶ－12　Ｈ－15と砂の検出された付属土壙 …511
図Ⅶ－13　フレイク・チップ集中の分布と分類 ……513

表目次

表Ⅰ－1　遺構一覧……8
表Ⅰ－2　出土土器一覧……8
表Ⅰ－3　出土石器等一覧……8
表Ⅱ－1　八雲町内の遺跡……15
表Ⅳ－1　柱穴状土壙一覧……280
表Ⅳ－2　遺構規模一覧(1)住居様遺構……323
表Ⅳ－3　遺構規模一覧(2)再堆積層……323
表Ⅳ－4　遺構規模一覧(3)削平部分の土壙……323
表Ⅳ－5　遺構規模一覧(4)削平部分の焼土……323
表Ⅳ－6　遺構規模一覧(5)削平部分の集石……324
表Ⅳ－7　遺構規模一覧(6)竪穴住居跡……324
表Ⅳ－8　遺構規模一覧(7)土壙墓……324
表Ⅳ－9　遺構規模一覧(8)土壙・Ｔピット……324
表Ⅳ－10　遺構規模一覧(9)焼土……325
表Ⅳ－11　遺構規模一覧(10)集石……325
表Ⅳ－12　遺構規模一覧(11)フレイク集中域……326
表Ⅳ－13　遺構別出土遺物一覧……326
表Ⅳ－14　住居跡・住居様遺構出土遺物一覧……329
表Ⅳ－15　遺構出土掲載土器一覧(1)住居様遺構……331
表Ⅳ－16　遺構出土掲載土器一覧(2)再堆積層……331
表Ⅳ－17　遺構出土掲載土器一覧(3)削平部分の土壙……332
表Ⅳ－18　遺構出土掲載土器一覧(4)竪穴住居跡……333
表Ⅳ－19　遺構出土掲載土器一覧(5)土壙・Ｔピット……341
表Ⅳ－20　遺構出土掲載土器一覧(6)柱穴状土壙……342
表Ⅳ－21　遺構出土掲載土器一覧(7)フレイク集中域……342
表Ⅳ－22　遺構出土実測土器一覧……343
表Ⅳ－23　遺構出土掲載石器等一覧(1)削平部分および関連する遺構……343
表Ⅳ－24　遺構出土掲載石器等一覧(2)周辺の遺構……344
表Ⅴ－1　包含層出土掲載土器一覧(1)Ⅱ群ｂ類……441
表Ⅴ－2　包含層出土掲載土器一覧(2)Ⅰ群ａ類……449
表Ⅴ－3　包含層出土掲載土器一覧(3)Ⅲ群ａ類……449
表Ⅴ－4　包含層出土掲載土器一覧(4)Ⅲ群ｂ類……449
表Ⅴ－5　包含層出土掲載土器一覧(5)Ⅳ群ａ類……449
表Ⅴ－6　包含層出土掲載土器一覧(6)Ⅵ群……449
表Ⅴ－7　包含層出土実測土器一覧……450

表Ⅴ－８　包含層出土掲載石器等一覧 ……450
Ⅵ章－１
表１　土壌試料の残存脂肪抽出量 ……457
表２　試料中に分布するステロールの割合 ……457
Ⅵ章－２
表１　放射性炭素年代測定一覧 ……468
Ⅵ章－３
表１　山崎5遺跡炭化種子出土表……479
Ⅵ章－４
表１　各黒曜石の原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値 ……485
表２　山崎５、山崎４、山越２遺跡出土黒曜石製遺物の元素比分析 ……487
表３　平成11年度山崎５遺跡、山崎４遺跡、山越２遺跡出土の黒曜石石器の原産地推定結果 ……488
表Ⅶ－１　フレイク・チップ集中統計表……512

Ⅰ　調査の概要

1　調査要項

事　業　名	北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財発掘調査
委　託　者	日本道路公団北海道支社
受　託　者	㈶北海道埋蔵文化財センター
受託期間	平成11年４月１日～平成12年３月31日（現地調査期間６月３日～８月31日）
	平成12年４月１日～平成13年３月31日（現地調査期間５月８日～９月14日）
	平成13年４月１日～平成14年３月31日（整理作業）
遺　跡　名	山崎５遺跡
登載番号	Ｂ－16－62
所　在　地	北海道山越郡八雲町字山崎195－１ほか
調査面積	平成11年度　855㎡
	平成12年度　5,410㎡　　合計　6,265㎡

2　調査体制

財団法人　北海道埋蔵文化財センター

平成11年度

理事長	大澤　満	第５調査課長	熊谷仁志（発掘担当者）
専務理事	佐藤哲人（５月31日まで）	主査	谷島由貴（発掘担当者）
専務理事	宮崎　勝（６月１日から）	主任	笠原　興
常務理事	木村尚俊	文化財保護主事	広田良成
第２調査部長	鬼柳　彰	文化財保護主事	柳瀬由佳

平成12年度

理事長	大澤　満	主任	藤原秀樹
専務理事	宮崎　勝	文化財保護主事	立田　理
常務理事	木村尚俊	第２調査部長	鬼柳　彰
第１調査部長	木村尚俊（兼務）	主任	中田裕香（２部１課）
第４調査課長	遠藤香澄（発掘担当者）	文化財保護主事	柳瀬由佳（２部５課）
主任	皆川洋一（発掘担当者）		

平成13年度

理事長	大澤　満	第４調査課長	遠藤香澄
専務理事	宮崎　勝	主任	藤原秀樹
常務理事	木村尚俊	文化財保護主事	立田　理
第１調査部長	木村尚俊（兼務、７月17日逝去）	第1調査部普及活用課	皆川洋一
第２調査部長	大沼忠春（第１調査部長兼務、７月18日から）		

3　調査に至る経緯

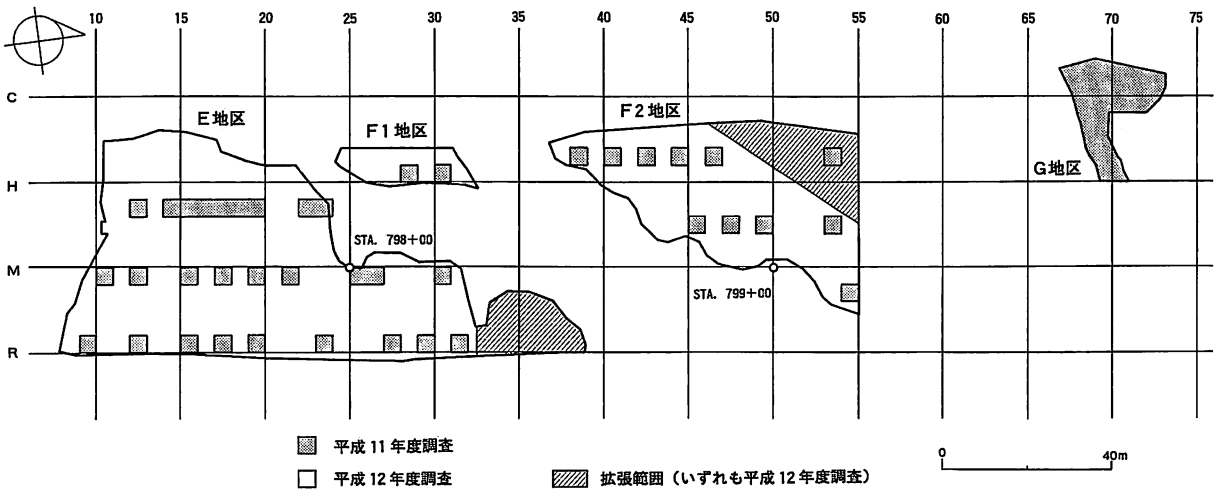
北海道縦貫自動車道（函館～名寄間）は函館・苫小牧・札幌市を経由し名寄市にいたる総延長488kmの路線で、このうち長万部国縫ＩＣ～和寒ＩＣ間は既に供用されている。七飯～長万部間の路線については平成５年11月から事業が進められている。この事業に関する埋蔵文化財包蔵地については平成２年４月、日本道路公団北海道支社からその取り扱いについて北海道教育委員会教育長あて事前協議書が提出された。これを受けて北海道教育庁生涯学習部文化課により平成２年４月と平成７年11月に所在確認調査が、平成７年10月以降は順次、範囲確認調査が実施されている。山崎５遺跡については平成２年４月と平成７年11月に所在確認調査が、平成10年10月および12月には範囲確認調査が実施されて、発掘調査の必要な面積5,020㎡が決定された。

長万部工事事務所八雲北工事区管内（八雲町字立岩から長万部町字富野間の33.3km区間）についてみると、工事計画の変更が不可能なことから発掘調査を必要とする遺跡は13か所である。このうち八雲町内には５か所あり、残りの８か所は隣接する長万部町内に所在する。

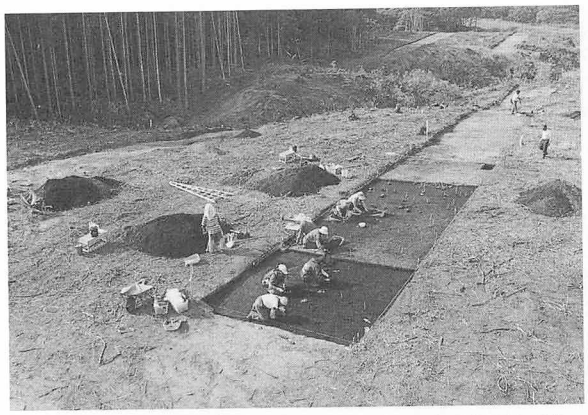
八雲町の遺跡については㈶北海道埋蔵文化財センターが平成10年度から委託を受け、初年度は山崎４遺跡の一部（カルバートボックス部分）3,000㎡を調査した。平成11年度は黒岩地区にあるシラリカ２遺跡と山崎４遺跡（一部6,905㎡）、山崎５遺跡（一部855㎡）、大川地区にあるポンシラリカ１遺跡（一部1,352㎡）計４か所の調査を行った。山崎5遺跡については遺跡の全体像を把握するため全体の25％程度の面積を調査した(25％調査)。シラリカ２遺跡については調査を完了し報告書(道埋文2000ｂ)を刊行している。このほか当センターでは新たに立岩地区より以南の八雲南工事区所管の遺跡(山越２遺跡）の調査も一部手がけている。

平成12年度は３課体制で、平成11年度一部調査を実施した３遺跡と新たに黒岩３遺跡を加えた４か所の調査を行った。いずれの遺跡も８月末から９月中旬には現地での調査を完了した。山崎５遺跡は面積の増加と遺構および遺物が予想以上に多く出土したことから予定終了日を２週間延長し９月14日に終了した。このほか12年度当センターでは、函館工事事務所八雲南工事区所管の山越２、山越３、山越４、野田生１、野田生２、野田生４、野田生５遺跡の７か所と森工事区所管の栄浜１遺跡の調査を行っている。前者の野田生１、野田生２、栄浜１遺跡の３遺跡を除き発掘調査は終了している。また､八雲町教育委員会では６月から浜松３遺跡､旭丘１遺跡､栄浜２遺跡の３か所の調査を行っている。

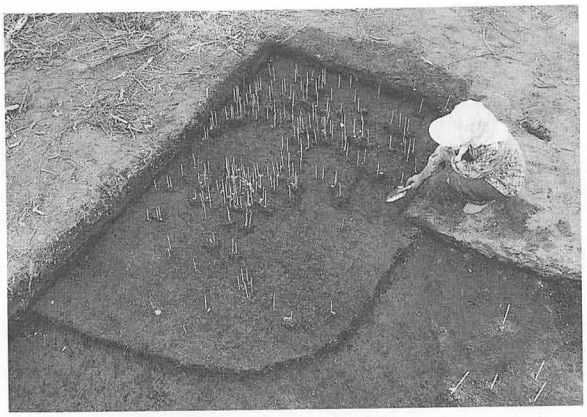
なお、八雲北工事区にかかる長万部町内の遺跡８か所については当センターと長万部町教育委員



図Ⅰ－1　年度別調査範囲



図版Ⅰ－1　調査状況(平成11年度E地区南西から)



図版Ⅰ－2　遺物出土状況(平成11年度　E地区)

会、北海道文化財保護協会が調査を担当し、平成11年度をもって完了している。これにより八雲町遊楽部川までの間に所在する高速道路関連の遺跡の発掘調査は全て終了したことになる。

4　調査の概要

遺跡は噴火湾に面する標高30m～40mの海岸線沿いの段丘縁辺に、総延長500m程で広がっている。平成11年度、平成12年度の2か年調査を行った。調査範囲は八雲市街地よりに位置し、海岸線から直線距離で250mほど内陸、南西に駒ケ岳が眺望できる段丘の平坦部にあたる。調査区はほぼ南北に260mを測り、大小の沢を挟んで4か所に分かれている。すぐ南側には大きな沢を挟んで縄文時代中期後半を主体とする山崎4遺跡が、北側1㎞程離れた大川地区には早期、中期が主体のポンシラリカ1遺跡がある。

平成11年度の調査結果

第2調査部第5調査課が担当した。当初計画5,020㎡のうち約4分の1に相当する面積について遺跡の詳細な状況を把握することを目的に主にトレンチ掘削を中心とした調査を実施した（図Ⅰ－1、図版Ⅰ－1・2）。最終的調査面積は855㎡である。調査範囲は大小4つの沢を挟んで点在していることから、便宜的に南側からE地区、F1地区、F2地区、さらに大きな沢をはさんで60m程はなれた地点をG地区と呼称し6月中旬から調査を開始した。E地区のMラインに沿って主にトレンチ調査を実施、最も北側に位置するG地区については包含層が削平されており遺物がほとんど出土しないことから全面発掘に切り替えた。この結果、E地区から土壙墓1基、フレイク集中域2か所、焼土跡4か所、F2地区から焼土跡1か所が検出された。遺物は主にE地区から土器、石器等あわせて約17,500点が出土した。このうち土器は約6,500点でそのほとんどが縄文時代前期後半の円筒下層式である。このほかE地区から縄文時代早期の貝殻文尖底土器が少量、F1地区から後期の土器がややまとまって出土した。またF2区では続縄文時代の恵山式土器が出土している。

現地での発掘調査終了後、この結果をもとに次年度の本格的調査に向けて調査範囲の見直しを行った。F2地区では当初は計画に取り込んでいなかった杭番号D－44とD－55付近および55ラインとを結ぶ三角形の範囲344㎡を遺構確認調査範囲として面積に組み込むこととした（図Ⅰ－1）。このような経過から新たに算出された調査対象面積は5,448㎡で、平成11年度終了した面積（855㎡）を減ずると次年度以降の調査対象面積は4,593㎡となった。このうちF2地区の45ライン以北の1,104㎡について遺構確認調査範囲とした（図Ⅲ－1）。また、地形に沿った実際の調査範囲と図面上の範囲に誤差があることが判明したが、次年度に最終的な調整をすることとした。



図Ⅰ－2　遺跡周辺の地形と調査区

平成12年度の調査結果

第１調査部第４調査課が担当した。調査面積は当初予定では4,593㎡であったが、業者に委託し実際の地形に沿った測量、求積の結果5,130㎡であることが判明した。またＥ地区の南端Ｐ－32区とＱ－32区にはその中央に小さな沢があり当初の調査範囲はその地点で線引きがなされていた。しかし東西に走る大きな沢で分断される39ラインまでは地形的には連続していることから、この範囲については調査当初から注意をしていたのである。表土を除去した部分がありそこから石皿、土器片が採集されため、文化課に連絡、協議をおこない280㎡について追加した。このような経過から最終的調査面積は817㎡増の5,410㎡となった。なお追加範囲からは住居跡が１軒検出された。

検出された遺構は住居跡（Ｈ）14軒、住居様遺構（Ｈ）３軒、土壙墓（Ｐ）10基、フラスコ状ピット含む土壙（Ｐ）64基、Ｔピット（ＴＰ）１基、焼土跡（Ｆ）19か所、柱穴状小ピット（ＳＰ）441基、フレイク集中域（ＦＣ）17か所、集石（Ｓ）10か所と排土を移動した結果である再堆積層（Ｍ）２か所である。これらに平成11年度検出分を加えると２か年の調査で検出された遺構は表Ⅰ－１の通りである。遺物はそのほとんどが縄文時代前期後半の円筒土器下層ｃ式期のもので、遺構は一部を除きこの時期のものである。

平成12年度の調査成果で注目されるのは、整地による“削平部分”とそれをとりまく“居住区域”の検出である。調査区の南側（Ｅ地区）は標高40ｍほどあるやや小高い地形となっているところであるが、トレンチ調査の結果このＭラインと20ラインに囲まれた範囲は縄文時代の包含層であるⅢ層の堆積が周辺地区よりも薄いことがわかり、とくにⅢ層下部からⅣ層・Ⅴ層にかけての土壌が人為的に削平されてローム層が露出している状況であることが判明した。削平部分とその周辺からは住居跡、土壙墓、埋設土器、住居様の竪穴、フラスコ状ピット等多数の遺構、人為的に動かされた土の堆積層が検出され、住居跡のある内側の削平部周辺が“墓域”としての性格を有することが想定された。このような検出状況から遺構間の関連性を有機的に捉えるために本書では遺構の記載（Ⅳ章）については削平部分および関連する遺構（Ⅳ章－１）と周辺部の遺構（Ⅳ章－２）に分け報告することとした。

削平部分から検出された遺構

住居様遺構３軒とフラスコ状ピット（３）、埋設土器（２）を含む土壙30基と焼土跡４か所、集石１か所である。住居様遺構は長軸長が６ｍ～８ｍほどで浅く皿状に掘りくぼめられている。２軒（Ｈ－10・Ｈ－13）が重複している。Ｈ－10の床面からは17基、Ｈ－11からは２基、Ｈ－13から１基それぞれ土壙が検出された。これらはいずれも径１ｍ前後の円形、楕円形を基調とするもので、重複するものが多い。またＰ－２、７、32は小型の浅いフラスコ状ピット、Ｐ－35とＰ－75は土器が正立の状態で埋設された土壙である。Ｐ－32とＰ－35については墓の可能性が考えられたことから土壙内の土壌を採取し残存脂肪酸分析を依頼した（Ⅵ章－１）。

焼土のうちＦ－11、20は土壙の壙口部で形成される特徴をもつ。なお、人為的に土が移動された結果形成された再堆積層はＨ－12周辺とその覆土中（Ｍ－１）、標高39ｍ～38ｍにかけての南側斜面（Ｍ－２）から検出された。これらの土壌はその検出位置から削平部分に起因するものと考えられる。再堆積層Ｍ－２は帯状の広がりをもち南東側でさらに調査区外に広がることが予想される。

削平部分周辺から検出された遺構

住居跡14軒、土壙墓11基、土壙35基、Ｔピット１基、焼土跡20か所、集石10か所、フレイク集中域19か所である。

住居跡のうち時期のわかるものは11軒である。前期後半期のものは10軒（Ｈ－１、３～５、７～９、14、15、17）あり、これらはＨ－５、Ｈ－14を除き削平部分と土壙墓の集中するその外側の一段低い

面にある。Ｈ－５はそこからやや離れた調査区（Ｅ地区）西端、Ｈ－14は北側にあり、いずれも前期後半の遺物の稀薄な地点にある。平面形は円形（Ｈ－１・９・15)、不整円形（Ｈ－５・８)、楕円形（Ｈ－３)、不整楕円形（Ｈ－４・７)、隅丸方形（Ｈ－14）のものがある。確認面からの深さが70cmをこえる深いもの（Ｈ－１、３、９、15）と50cmに満たない掘り込みの浅いもの（Ｈ－４、７、８）とがある。前者のうち、Ｈ－９を除く３軒は削平部の北側に４、５ｍほどの間隔で近接して位置するもので、これらには共通して住居廃絶後の半ば埋まった窪みに多量の遺物や焼土等が投げ込まれている。主柱穴は４本（Ｈ－１・５・15)、２本（Ｈ－３）が想定されている。Ｈ－１では床面から砥石、たたき石、台石等の礫石器と３個体分の土器が出土している。Ｈ－15からは砂が充填された小土壙が５基、またＨ－３では斜面下手から出入口部とみられる施設が検出された。またＨ－５では北海道式石冠と半円状扁平打製石器が住居壁際から重なるよう状況で検出されており、両石器の機能を考える上で興味深い。後者ではＨ－４、７が近接した位置にある。明瞭な主柱穴が無く、補助的な柱穴が壁際にあるもので仮小屋的な構造と見られる。

後期初頭余市式・天祐寺式期の住居跡（Ｈ－６）は前期後半期の住居跡を避けるかのような位置にあり、平面形は楕円形で「石囲い炉」、また「土器囲い炉」を有する可能性のあるものである。Ｈ－２、Ｈ－12、Ｈ－16は覆土中に5,000～6,000ｙＢＰ降下の駒ケ岳ｇ火山灰（Ｋｏ－ｇ）が堆積することおよび掘り込み面から推測し前期後半よりも古い時期のものである。特にＨ－２、Ｈ－16については周辺からⅠ群ａ類土器が検出されていることから確証はないが早期前半期（貝殻文・条痕文土器）に遡る可能性がある。

土壙墓は１基（Ｐ－76）が調査区の西端から検出されたのを除き、削平部分のすぐ外側から検出された。西側に８基、東側に２基あり、平面形は（不整）楕円形、卵形を基調とするものである。確認面での長軸長は1.5m以内に収まり、深さは50cmを超えない規模のもので、0.9m前後の小型のもの（Ｐ－39、55、69、76）もある。副葬されている遺物は多くはないがＰ－38からは器軸を同じくして埋納された石鏃２点、Ｐ－55からは大型のつまみ付きナイフが、Ｐ－56からはスクレイパーが検出されている。Ｐ－71、72は長軸方向を同じくし近接して検出されたもので、Ｐ－71からは黒曜石製のつまみ付きナイフ２点とスクレイパー、たたき石が、Ｐ－72からはスクレイパーが出土している。

土壙は35基である。このうちＰ－５・60は大型のフラスコ状ピットで、Ｐ－５は開口部の長軸長が３ｍ、深さが２ｍを超える。Ｐ－13・53・23は覆土が埋め戻しの様相を呈しており、前２者は土壙の規模から判断し墓の可能性も考えられる。Ｐ－12は人為的な堆積の認められる柱穴状の土壙で壙口部に焼土が形成されている。また削平部のすぐ北側から検出されたＰ－43は土器が正立に埋設された土壙である。この土器の口縁部は再堆積層（Ｍ－１）中とその直下から検出され接合している。

Ｔピットは調査区（Ｅ地区）北側から単独で検出された。長軸長3.7mを超える溝状のもので、いわゆるＴピットとするにはやや疑問の残る点もあるが、山崎４遺跡、野田生５遺跡に次ぐ検出である。

焼土跡は遺物を伴うのものは少ない。Ｆ－２はＰ－12の開口部で形成されていた。

集石にはＨ－１に関連すると見られるもの（Ｓ－５～７）がある。使用痕の不明瞭なたたき石、台石・石皿片と礫・礫片で構成されるものが多く、小型の礫が狭い範囲にまとまるものもある（Ｓ－10)。

フレイク集中域は削平部分を外れた位置に分布し、そのすぐ外側や住居跡近くにあるもの、南端の段丘縁辺から斜面にかけて分布するものがある。前者では再堆積層（Ｍ－１）との関連性が伺われるもの（ＦＣ－４・８）もある。いずれの集中域でもフレイクのなかに石核、両面調整石器が混入するが、剥片石器は石槍またはナイフ、スクレイパー等が10数点あるのみである。石器製作に関連すると

みられるたたき石、台石・石皿片等の礫石器が出土している。

柱穴状小土壙はＥ地区南東部の削平部を含む段丘の最も高い部分に集中している。底部の形態は尖り気味のもの、平らなもの、丸いもの等があり、また覆土の堆積状態からいくつかのタイプに分けられ複数の性格を持つものが混在しているとみられる。図面整理の段階で断面形が比較的しっかりとした覆土の明瞭な柱穴を選び出しその配列を検討した結果、上屋のある建物跡あるいは何らかの施設とみなせる「方形柱穴列」が４か所確認できた。このうち削平部にある「方形柱穴列４」は上屋のない施設とみられ住居用遺構（Ｈ－10）と北側部分で一部重なる。また「方形柱穴列１」は隣接するＨ－５に関連する可能性がある。

遺　物

２か年の調査で出土した遺物は土器が53,938点、石器等が165,306点、あわせて219,244点である。包含層、遺構別および土器の分類別、石器の器種別の一覧は表に示してある（表Ⅰ－２・３）。

土器は遺構から18,185点、包含層から35,753点出土し、その96.5％に相当する52,047点が縄文前期後半の円筒土器下層式（Ⅱ群ｂ類）である。Ｆ地区では散点的であるが、Ｇ地区を除く調査区のほぼ全域から出土している。とくにＨ－１の覆土中と床面、Ｈ－15からは良好な資料が得られている。丈の高い円筒形のものに加え、丈が低く寸胴形のものもある。平縁が多く、４か所に頂部のある波状口縁のものもある。口縁部文様帯の区画に指でつまみ上げたような偏平な隆帯のあるものがあり、隆帯の上下には縄の圧痕のあるもの、隆帯上に刺突や刻みの加えられたものがある。このほか文様帯との区画に刺突文、縄線文、綾絡文の施されたものもみられる。文様帯には縄線文、絡条体圧痕文、綾絡文等で文様の描かれるもの、地文と同じあるいは異なる原体による縄文の施されたものがある。不整綾絡文の施されるものも少量ながら見られる。体部には単節、複節の斜行・縦行縄文、撚り戻し縄文、撚糸文、自縄自巻的縄文、付加条の縄文が施され、結束羽状縄文、撚糸文では多軸絡条体のものも極わずかにある。地文に貝殻条痕の重ねられるもの、原体の異なる縄文、撚糸文が施されものがあり、原体の施文方向を変えるものもみられる。これらはその特徴から大半が円筒下層ｃ式に相当するものと見られ、やや古い段階のものもある。Ｈ－１では床面から覆土にかけて、土器が多量に出土し土器の特徴に若干の差異が認められる。Ⅱ群ｂ類土器は胎土に繊維を多量に含むほか海綿状骨針を含む資料が多くある点が注意される。

早期の土器は前半期のもので（Ⅰ群ａ類）、住吉町式に相当する尖底土器や条痕文・無文の平底土器がわずかにあり、後者はＥ地区北端の調査を拡張した範囲から復元個体が得られている。後期初頭（Ⅳ群ａ類）の土器は天祐寺式・余市式相当のもの、大津式相当のものが当該期の住居跡Ｈ－６と周辺の包含層とから少量、また35ライン以南の調査拡張範囲とＦ－38区、Ｆ－40区からややまとまって得られている。中期の土器は円筒上層式（Ⅲ群ａ類）が包含層とＨ－１の覆土からごく少量、またⅢ群ｂ類土器は少量ながらもＦ１地区にまとまりがある。続縄文期（Ⅵ群）の土器は前半期のものでⅣ群土器同様、Ｆ－38区、Ｆ－40区に比較的多くある。

石器等は包含層から101,524点、遺構から63,782点出土した。Ｅ地区のほぼ全域から出土し、その８割強を頁岩のフレイクが占め、また礫・礫片が１割強で使用痕・加工痕のあるフレイクを含めても定型的石器は非常に少なく、合わせて96％以上が頁岩のフレイクと礫、礫片である。剥片石器群には石鏃、石槍または両面加工のナイフ、石錐、つまみ付きナイフ、スクレイパー、両面調整石器、くさび形石器がある。スクレイパーが最も多く石鏃、つまみ付きナイフが続く。つまみ付ナイフには小型の黒曜石製のものがある。ほかに石核および石器の素材である頁岩原石が多い。なお、黒曜石製遺物は平成11年度調査出土分４点について原材産地分析を依頼した。その結果、豊浦町豊泉産、赤井川産それ

表Ⅰ－1　遺構一覧

	竪穴住居跡	住居様遺構	土壙墓	土壙	Tピット	柱穴状小土壙	集石	焼土跡	フレイク集中域	再堆積層
平成11年度			1					5	2	
平成12年度	14	3	10	64	1	441	10	19	17	2
計	14	3	11	64	1	441	10	24	19	2

表Ⅰ－2　出土土器一覧

分　類	Ⅰ群a類	Ⅱ群b類	Ⅲ群a類	Ⅲ群b類	Ⅳ群･Ⅳ群a類	Ⅵ群	不明	合計
包含層	127	34,340	38	246	635	197	170	35,753
遺　構		17,707	49		421		8	18,185
計	127	52,047	87	246	1,056	197	178	53,938

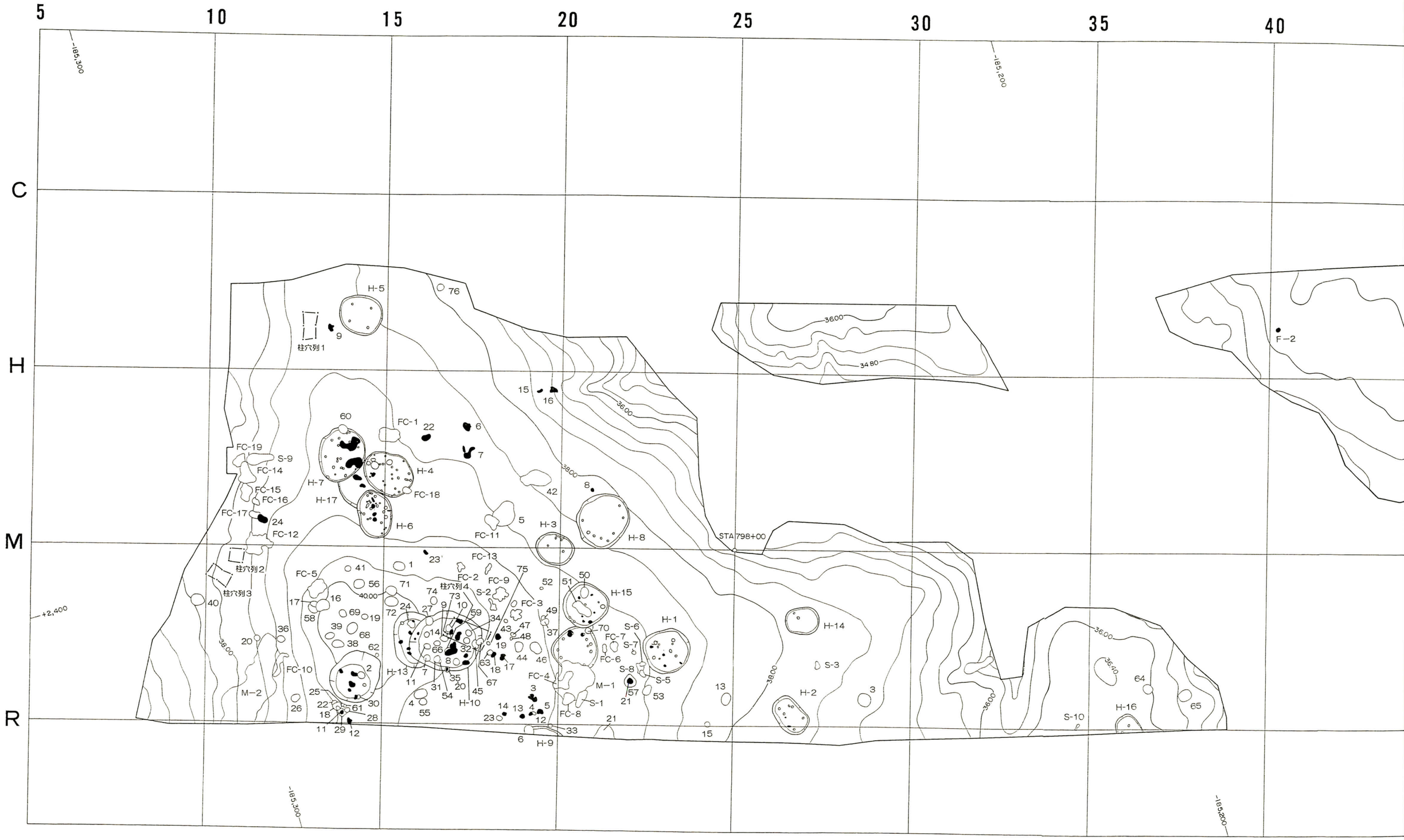
表Ⅰ－3　出土石器等一覧

器　種	包含層	遺　構	合　計
石　鏃	142	37	179
石槍・ナイフ	33	13	46
石　錐	17	16	33
つまみ付きナイフ	108	18	126
スクレイパー	475	193	668
両面調整石器	74	43	117
石　核	454	145	599
頁岩原石	130	32	162
Rフレイク	51	25	76
Uフレイク	453	153	606
楔形石器		3	3
フレイク	82,331	57,215	139,546
小　計	84,268	57,893	142,161
石　斧	62	41	103
擦り切り残片	18	8	26
研磨石材		2	2
石のみ	1	2	3
小　計	81	53	134

器　種	包含層	遺　構	合　計
たたき石	474	317	791
すり石	21	18	39
半円状扁平打製石器	235	40	275
北海道式石冠	113	52	165
石　鋸	51	41	92
砥　石	126	260	386
台石・石皿	249	402	651
石　錘	5		5
擦り切り痕のある礫	5	2	7
加工痕のある礫	7	2	9
礫・礫片	15,430	4,583	20,013
軽　石	40	7	47
小　計	16,756	5,724	22,480
土製円盤	2	1	3
石製品	9	6	15
焼成粘土塊	402	99	501
有孔自然石	5	1	6
不　明	1	5	6
小　計	419	112	531
合　計	101,524	63,782	165,306

ぞれ2点との結果が出ている（Ⅵ章－4参照）。このほか掲載遺物については肉眼観察ではあるが白滝産かと見られる資料がある。器種ではつまみ付きナイフに黒曜石の使用が多く豊泉産を選択する傾向が見られる。磨製石器群は少なく緑色泥岩製の石斧、石のみ、研磨石材があり、擦り切り残片は欠損したものがわずかにある。礫石器群はたたき石が最も多く、石皿・台石（片）類が続く。後者は遺構から多く出土する傾向がある。ほかに半円状扁平打製石器、北海道式石冠を含むすり石類、砥石、石鋸等がある。半円状扁平打製石器や石鋸には板状節理の礫を用いるもの多く、石材が共通する。両者が複合された石器がある点も興味深い。石錘は長軸長に打ち欠きのあるものが出土している。

土製品、石製品の出土はわずかであるが、円盤状土製品3点と小さな刻みのある片岩製の加工品1点が出土している。　（遠藤）



1:400

図Ⅰ－3　最終面地形と遺構位置図

40　45　50　55　60　65　70　75

C　H　M　R

+2,400　-185,100

30.00　28.00　2800

37.20　34.00　36.00　36.00

F－2

STA 799＋00　STA 800＋00

65

凡　例

H-2	＝	住居跡
44　46	＝	土壙
6	＝	焼土
FC-11	＝	フレイク・チップ集中域
S-3	＝	集石
M－1	＝	再堆積層

0　10　20m

-185,200　-185,100　+2,500　+2,500

1：400

図Ⅰ－3　最終面地形と遺構位置図

Ⅱ　遺跡の位置と環境

1　遺跡の位置と環境

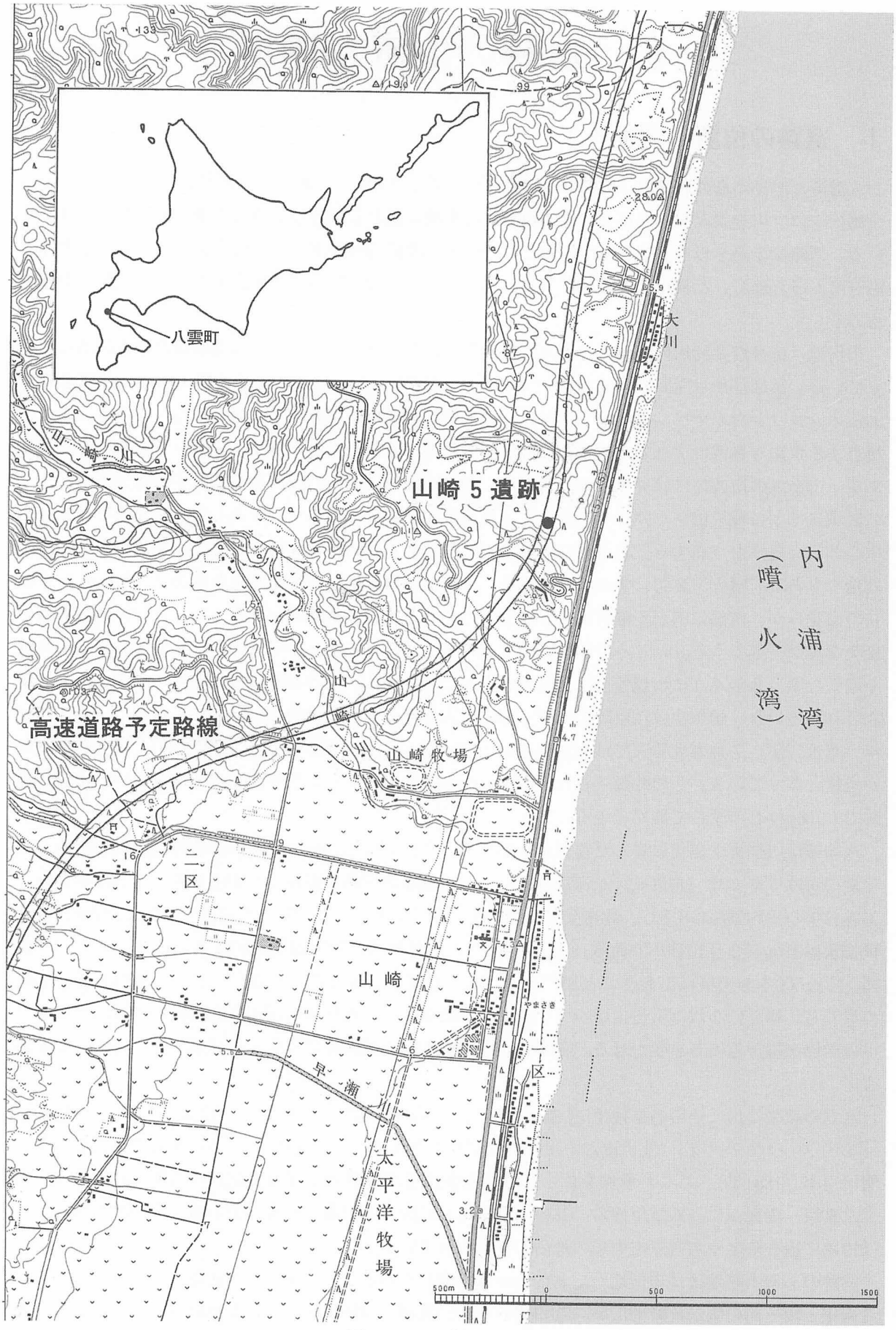
八雲町は渡島半島の北東部、内浦湾（噴火湾）に面し渡島管内で最も広い面積736.47km²を有する。北側はルコツ川を挟み長万部町と南側は茂無部川を境に森町と隣接しこの間の海岸線は34kmに及んでいる。西側は半島を日本海側と太平洋側とに二分する渡島山地を挟んで、桧山支庁の５町（今金町、熊石町、厚沢部町、乙部町、北桧山町）と接している。町域の82％はスギ、トドマツが主体の山林が占める。

市街地は清流遊楽部川の河口、その支流である砂蘭部川によって形成された扇状地の末端部に発達している。遊楽部川は全長28.5kmの河川であるが、「サケ」が自然産卵のため遡上し、天然記念物であるオジロワシやオオワシのほかシギ等多くの鳥類が飛来する中継地としても知られている。また、棲息する魚類も豊富でアユの天然分布の太平洋側における北限、キュウリウオ、シャモモの南限でもある。市街地の南西部には奥津内川、落部川、野田追川をはじめ内浦湾に注ぐ大小の河川があり、その流域には主に種子用ジャガイモを栽培する農耕地が広がり、緩やかに発達した丘陵地帯には酪農を中心とした農家が点在する。北海道の酪農の先進地であり、同時に道南を代表する養殖ホタテの生産基地でもある。噴火湾を背にすると砂蘭部岳、雄鉾岳、渡島半島の最高峰遊楽部岳（1,276m）、太櫓岳の山並みが、南部に広がる町営乳牛育成牧場に立つと北東に羊蹄山、南東方向には北海道駒ヶ岳の優美な姿が一望できる。ところで駒ヶ岳は平成12年９月５日未明、２年目の山崎５遺跡の調査が終盤を迎えた頃、２年ぶりに小規模な水蒸気噴火を起こしている。隣の森町尾白内ではわずかな降灰も確認されたという。駒ケ岳は江戸時代以降４回の噴火を繰り返し破壊的な山として知られている。1640年（寛永17年）７月の大噴火では大量の岩屑が噴火湾に流れ津波が発生し沿岸の700人以上もの住民が犠牲となっている。その時降下した火山灰（駒ケ岳ｄ火山灰）は噴火湾周辺地域を覆い、山崎５遺跡でも10cmほどの厚さで観察できる。

八雲町は四季折々変化に富んだ色彩があふれる“自然美術館の町”である。海洋性気候のため春から夏にかけてやませ（北東風）が海霧をもたらし冷涼な日があり盛夏でも30度を超える日は少ない。平成11年の平均気温は8.6℃、最高気温は33.5度、最低気温は－15.3℃、年間降水量は1,330㎜、最深積雪量は91cm（２月10日）である（消防署調べ）。５月初旬、発掘調査が始まる頃には「さらんべ公園」で2,500本もの桜に出会うことができる。また６月には町の花であるツツジが「落部公園」を埋め尽くし、初夏になれば浜辺にはハマナスが、また山崎・花浦地区の国道５号線沿いにはエゾカンゾウの群性が橙黄色の花を咲かせる。冬は北西風が吹き噴火湾沿岸では最も積雪量が多いところでもある。

八雲の旧名は川にその名を残す。「遊楽部」、アイヌ語で「ユー・ラップ」（温泉下る川）、一説では「イ・ウ・ラア・ペッ」（共に流れる川―支流がたくさん集まって流れ下る―）と呼んでいたものを、明治14年（1881年）、ここに農場を作った旧尾張藩主徳川慶勝候が『古事記』の古歌「八雲立つ　出雲八重垣　妻籠みに　八重垣作る　其の八重垣を」に因んで改名したものである。町内のあちこちには古歌に因む町名や名古屋市周辺の地名がつけられている。

遺跡のある山崎地区は市街地から北へ７kmほど離れたのところにある。市街地から山崎付近までは海岸線と段丘間の幅は比較的広い。この間の立岩、花浦、山崎地区にかけて形成されている海岸平野


八雲町
山崎５遺跡
高速道路予定路線
内浦湾
（噴火湾）
山崎牧場
山崎
太平洋牧場
二区
一区
大川
山崎川
早瀬川
500m
0
500
1000
1500

図Ⅱ－１　遺跡の位置

は泥炭層や青粘土層で構成され低湿な軟弱地盤が発達している。しかし、山崎川付近では急激に狭くなり段丘の縁辺が海に突き出た様子は八雲側から眺めると文字通り「岬」である。

遺跡は山崎川の左岸にあり海岸線から直線距離で250mほどの地点、噴火湾に面する標高30m～40mの段丘縁辺に、総延長500mほどで広がっている。南東には駒ケ岳を眺望できる。すぐ南側には大きな沢を挟んで縄文時代中期後半を主体とする山崎４遺跡が、また沢を挟んで１kmほど離れた北側には縄文早期主体のポンシラリカ１遺跡がある。

山崎に関する記録は文化６年（1809年）の『東蝦夷地山越内場所村鑑帳』にみえる（八雲町編1984）。「此所蝦夷家有。大、小川弐ヶ所有共板橋　土橋懸渡し人馬共往来よし。…」とある。幕府直轄施政が敷かれた寛政12年（1800年）以降、ユーラップ川上流では森林伐採が本格的に行われており、山崎地区も例外ではなく、椴の木が沢山有り、材木の伐出しが行われていたことがわかる。江戸末期にこの地を旅した松浦武四郎は日誌に「山サキ」の名を残しているけれど特別な記載はない。

山崎地区の開拓が本格的に始まるのは明治半ば、八雲町のほかの地域同様、旧尾張藩士による組織的な集団移住および農場の創設からである。明治28年（1895）年に愛知県人により創設された「蟹江開墾地」がその先駆である。代が替わり明治31年には「石川牧場」と改称され、その翌年から移民を受入れ本格的な拓殖事業が開始され山崎の地は活況を呈するようになる。遺跡周辺の丘陵地や平野部には現在も酪農を中心とした農家が点在する。

2　周辺の遺跡

平成13年４月現在、八雲町内では旧石器時代から縄文時代、続縄文時代、擦文時代にかけての77か所の遺跡が登載されている。縄文時代を主体とする時期の複合する遺跡が８割以上を占め、その多くが内浦湾に面した標高20m～40mほど、高いところでは標高60mの海岸段丘上に立地する。とくにハシノスベツ川から野田追川にかけての約７kmの間には、平成12年度新規登載された結果、遺跡は10か所増え、34か所となっている。これらは連綿と連なっており海岸線全域が遺跡といっても過言ではない。

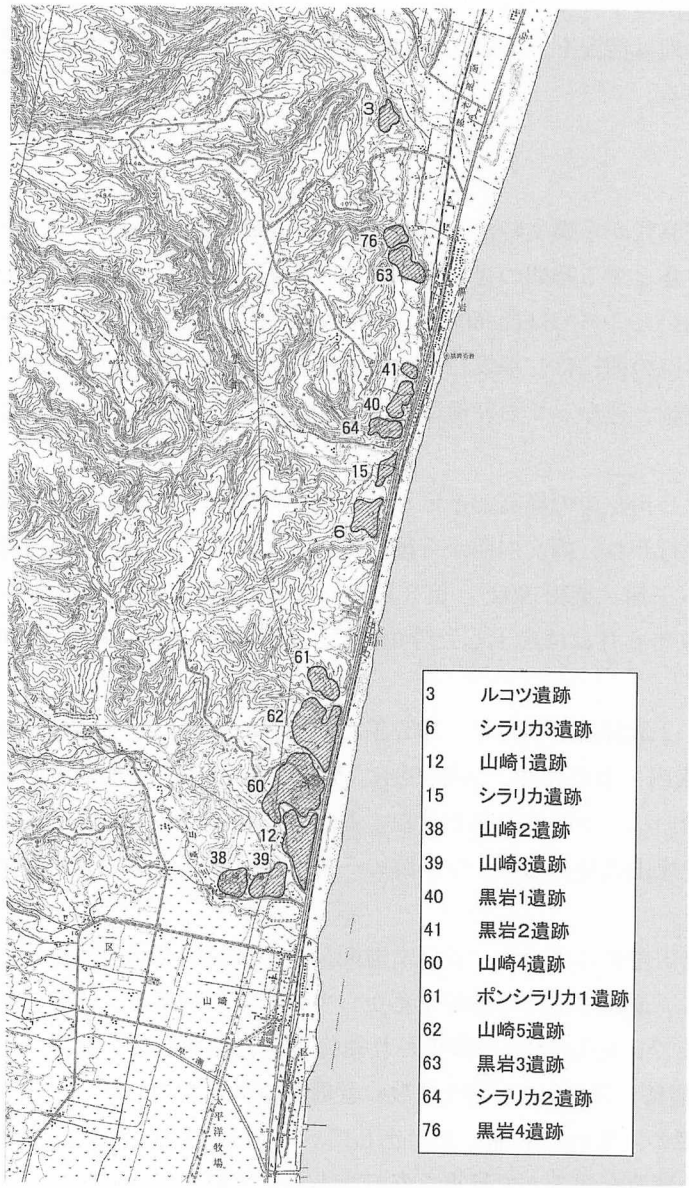
浜松地区にあるコタン温泉遺跡はブユウヒ川左岸の標高25mほどの段丘上に立地する遺跡で、昭和62年（1987年）から５か年にわたり調査が行われ、縄文中期から後・晩期にかけての、貝塚等の遺構と55万点にも上る遺物が検出されている（三浦・柴田1992）。第３貝塚のうち後期に形成された貝層からは骨角牙製品が多数発見され、平成９年６月には出土した骨角製品、貝製品、土器、石器等346点が国指定の重要文化財となっている。

熱田川左岸の段丘先端部にあるトコタン２遺跡は昭和42年（1967年）の調査で床面に土師器の甕形土器を伴った住居跡が報告されている（武内・山田1968、三浦1984）。野田追川以南では東野・旭丘地区に４か所、落部から栄浜地区の海岸沿いに７か所の遺跡が点在する。落部地区にある浜中１遺跡（落部遺跡）は昭和34年・同37年の調査で恵山式期の墓壙、住居跡の一部、小貝塚と魚形石器が発見されている（桜井1961・1964）

町の最も南側、森町との境を流れる茂無川左岸の段丘上には縄文前期後半から続縄文時代にかけての大規模な集落跡である栄浜１遺跡がある。遺跡の主体は前期末葉から中期末葉の時期で、昭和56年（1981年）以降４度の調査が行われこれまでに約9,200㎡が調査され報告書が刊行されている。48万点にも上る多量の遺物及び203軒の竪穴住居跡、502基の土壙等多数の遺構が検出されており、平成９年度の調査では全国でも類を見ない軽石製の『家形石製品』が出土している（三浦1998）。壁立て式の住居を模したもので、縄文時代の住居の構造を知る上で貴重な資料である。平成12年度には第５次

の調査が当センターにより行われ、縄文後期前葉のトリサキ式期のフラスコ状土壙が検出されている（道埋文2001ｅ）。最終的遺跡範囲は100,000㎡前後にも広がると予想されている（三浦・柴田1998）。

市街地の北部に目を転ずると、山崎川からルコツ川にかけて発達する標高30ｍ～40ｍの海岸段丘上には平成12年度調査した山崎５遺跡、山崎４遺跡、ポンシラリカ１遺跡、黒岩３遺跡をはじめ11か所の遺跡がある。町の最も北にあるのは長万部町との境のルコツ川右岸にあるルコツ遺跡である。このうち平成11年度調査した黒岩地区のシラリカ２遺跡では縄文前期後半、円筒下層ｃ～ｄ式期の４本柱のある住居跡と同時期のヒスイ製の垂飾りが出土している。ヒスイは分析の結果、糸魚川産の硬玉である可能性が高く北海道でも最古の例として注目される（道埋文2000ｂ）。黒岩３遺跡はシラリカ２遺跡から北西に１㎞ほど離れた同じ段丘面にあり、早期の貝殻文・条痕文系の土器や中茶路式等の縄文系の土器、および中期末ノダップⅡ式頃の住居跡、後期の資料が検出されている（道埋文2001ａ）。また山崎５遺跡と大きな沢を挟んで南側にあるポンシラリカ１遺跡では平成11・12年度の調査で早期前葉住吉町式、虎杖浜式等の資料および東釧路Ⅲ式期の住居跡、中茶路式土器等早期を中心とした資料が見つかっている（道埋文2001ａ）。このほかシラリカ川右岸の標高10ｍの河岸段丘上に１か所、山崎川左岸河岸段丘上にも２か所縄文の遺跡がある。



図Ⅱ－２　周辺の遺跡

内陸部では遊楽部川上流の上八雲地区に発達した標高60ｍ～70ｍの河岸段丘上に、大関校庭遺跡、上八雲１遺跡（旧称トワルベツ遺跡）等８か所を数える旧石器時代の遺跡群のあることが古くから知られている。大関校庭遺跡からは平成５年度の調査で細石器文化の良好な資料が検出されている（三浦・柴田1993）。

遊楽部川中流域の春日地区では河岸段丘上に１か所後・晩期の遺跡がある。また、町の南東部を流れる野田追川中下流域の河岸段丘上には桜野１遺跡をはじめ４か所の遺跡がある。市街地の西側を北流する（遊楽部川の支流である）砂蘭部川によって形成された標高10ｍ～14ｍの平坦な扇状地上には４か所の遺跡がある。町内でも最も低い地点（標高10ｍ～11ｍ）位置する八雲３遺跡には有珠川下層の資料に対比される押引き文の土器や石錘等の早期の比較的まとまった資料がある（三浦1990）。

なお、一覧表については先の報告（道埋文2000ｂ）のものに一部加筆、修正した。　（遠藤）

表Ⅱ－1　八雲町内の遺跡

登載番号	遺跡名	所在地	立地（　）内標高m	時期	文献・内容・備考
B－16－1	オクツナイ遺跡	浜松1、31、39ほか	奥津内川右岸海岸段丘（8～20）	続縄文（恵山）	採集資料あり　柴田（1991b）
B－16－2	トコタン1遺跡	熱田44－20ほか	海岸段丘（20～25）	続縄文（恵山）	田川（1956）のトコタン遺跡C地点
B－16－3	ルコツ1遺跡	黒岩225ほか	海岸段丘（30～35）	縄文	平成12年度新規登載　頁岩剥片
B－16－4	浜松1遺跡	浜松259ほか	海岸段丘（25～28m）	中期	円筒上層
B－16－5	大関校庭遺跡	上八雲296－1ほか	遊楽部川河岸段丘（70～75）	旧石器	昭和35年調査大関遺跡。吉崎（1961）、千代（1965）三浦・柴田（1993）
B－16－6	シラリカ3遺跡	黒岩98、326	海岸段丘（25～40m）		平成12年度新規登載　頁岩剥片
B－16－7	上八雲1遺跡	上八雲286ほか	遊楽部川河岸段丘（70～80）	旧石器	昭和35・36・39年調査のトワルベツ遺跡　吉崎（1961）
B－16－8	富咲遺跡	富咲161ほか	遊楽部川河岸段丘（60～65）	旧石器	昭和35年10月函館博物館調査　伊藤千代吉所有畑採集の石鏃は町指定有形文化財（昭和44年9月）
B－16－9	コタン温泉遺跡	浜松281ほか	ブュウヒ川左岸の海岸段丘（21～34）	早期～晩期・続縄文	三浦・柴田（1992）　集落跡・土壙墓・貝塚　国の重要文化財指定骨角牙製品。昭和20・30年代田川賢三調査の無弓部遺跡　無弓部コタン遺跡。八雲高校郷土史研究部（1970）のコタンA遺跡
B－16－10	大新遺跡	大新47－1ほか	砂蘭部川扇状地の扇央（32）	早期・中期・晩期・続縄文（後北）	三浦・柴田（1997・1998a）円筒上層B、後北C2
B－16－11	山越1遺跡	山越434－1ほか	海岸段丘（30）	中期	
B－16－12	山崎1遺跡	山崎154－7ほか	ブイタウシナイ川左岸海岸段丘（28）	早期～晩期・続縄文	三浦（1980・1984）柴田（1991a・b）早期貝殻文・条痕文土器、魚形石器
B－16－13	台の上遺跡	東野505ほか	シラリカ川河岸段丘（15～20）	中期～晩期・続縄文	三浦（1987）後北式と弥生系土器（天王山式）が伴出
B－16－14	八雲1遺跡	出雲町40ほか	砂蘭部川扇状地（10）	中期・晩期	円筒上層式　タンネトウL式
B－16－15	シラリカ遺跡	黒岩100ほか	シラリカ川河岸段丘（5～10）	続縄文（恵山）・擦文	採集資料あり（魚形石器）。柴田（1991a）
B－16－16	小金沢遺跡	東野625ほか	野田追川右岸の河岸段丘（40）	中期	円筒上層式　北大式？
B－16－17	浜中1遺跡	落部470ほか	海岸段丘（15～17）	続縄文（恵山式）	桜井（1961・1964）昭和34・37調査の落部遺跡　墓壙・小貝塚・住居跡、魚形石器　及川（1987）
B－16－18	桜野1遺跡	桜野25－1ほか	野田追川河岸段丘（60～65）	中期	円筒上層式
B－16－19	上八雲2遺跡	上八雲334－1ほか	遊楽部川の河岸段丘（85）	旧石器	ブレイド・ポイント・ナイフ・石刃
B－16－20	ハシノスベツ遺跡	大新72－3ほか	砂蘭部川の扇状地（30～50）	中期	平成12年度新規登載　土器片　剥片（黒曜石・頁岩）
B－16－21	元山牧場遺跡	浜松105ほか	酒屋川左岸海岸段丘（20～30）	前期・中期	田川（1958）昭和32年調査の元山遺跡　住居跡6
B－16－22	八雲2遺跡	相生町116ほか	砂蘭部川扇状地（20～28）	晩期	タンネトウL式
B－16－23	トコタン2遺跡	熱田17－1ほか	海岸段丘（17～38）	中期・続縄文・擦文	武内・山田（1968）野村（1982）三浦（1984） 昭和42・55年調査の熱田遺跡。甕形土器を伴う住居跡　土師器は町指定有形文化財（昭和44年9月）
B－16－24	トコタン4遺跡	熱田105－1ほか	海岸段丘（25～45）	縄文	平成12年度新規登載　土器片　剥片
B－16－25	浜松2遺跡	浜松123－1ほか	ブュウヒ川右岸河岸段丘20～30）	早期～晩期	三浦（1989）三浦・柴田（1991）後期の配石遺構、住居跡
B－16－26	浜松6遺跡	浜松214－220	海岸段丘（10～20）	縄文	平成12年度新規登載　土器片
B－16－27	浜松3遺跡	浜松224ほか	海岸段丘（25～32）	中期	平成12年度町教委調査　住居跡1　土壙6　焼土9
B－16－28	熱田1遺跡	熱田223－1ほか	トコタン川右岸の砂丘（5～10）	続縄文（恵山）	
B－16－29	鉄山遺跡	浜松517ほか	海岸段丘（60）	後期	
B－16－30	新牧場遺跡	東野757ほか	海岸段丘（30）	後期	昭和49年町文化財調査員が所在確認調査　三浦（1984）
B－16－31	ナンマッカ遺跡	上八雲252ほか	遊楽部川の河岸段丘（105）	旧石器	採集資料（ブレードコア・ブレード）あり。三浦（1984）
B－16－32	トコタン3遺跡	熱田62ほか	海岸段丘（35）	中期	
B－16－33	栄浜1遺跡	栄浜72ほか	茂無川左岸の海岸段丘（32～36）	前期～晩期　続縄文（恵山・後北）	三浦（1982・1983・1998）三浦・柴田（1986・1987）柴田（1991b・1995）前期末～中期末にいたる大集落（住居跡203軒ほか）、配石遺構。平成12年度調査ではトリサキ式期の土壙。平成13年度調査継続
B－16－34	春日1遺跡	春日24－1	遊楽部川左岸河岸段丘（14）	後期・晩期	
B－16－35	上八雲4遺跡	上八雲502－4・6	遊楽部川河岸段丘（100）	旧石器	

登載番号	遺跡名	所在地	立地（　）内標高m	時期	文献・内容・備考
B－16－36	上八雲5遺跡	上八雲432・502	遊楽部川河岸段丘（60）	旧石器	
B－16－37	上八雲6遺跡	上八雲290ほか	独立丘（80）	旧石器	採集資料（石核・ブレード）あり。三浦（1984）
B－16－38	山崎2遺跡	山崎154－1ほか	山崎川の河岸段丘（17～25）	前期・中期・続縄文	
B－16－39	山崎3遺跡	山崎154－1ほか	山崎川左岸の河岸段丘（15～32）	前期・中期	円筒下層・円筒上層式
B－16－40	黒岩1遺跡	黒岩276－1ほか	海岸段丘（38）	中期	円筒上層式
B－16－41	黒岩2遺跡	黒岩257－1ほか	海岸段丘（40）	中期	
B－16－42	八雲3遺跡	三杉町26	砂蘭部川の扇状地（14）	早期・前期	三浦（1990）
B－16－43	浜松4遺跡	浜松254－1ほか	海岸段丘（20～40）	晩期・擦文	
B－16－44	山越2遺跡	山越349ほか	海岸段丘（20～30）	前期～後期・続縄文（後北）	平成11・12年度調査　住居跡10　土壙30ほか　北埋調報163
B－16－45	山越3遺跡	山越402－1ほか	海岸段丘（32～34）	前期～晩期	平成12年度調査　中期前半主体　住居跡3土壙17　焼土3ほか
B－16－46	山越4遺跡	山越324－1ほか	海岸段丘（30～39）	前期・中期・続縄文（後北）	平成12年度調査　中期前半主体　住居跡4　土壙11ほか
B－16－47	野田生1遺跡	野田生317－6ほか	海岸段丘（33～40）	中期・後期	平成12年度調査後期（ホッケマ式）主体　住居跡35　土壙28ほか　赤彩土器・石棒・朱塗り櫛　平成13年度調査継続
B－16－48	野田生2遺跡	野田生355－1ほか	海岸段丘（34～39）	早期～後期・続縄文（後北）	平成12年・平成13年度調査　住居跡7　土壙33ほか
B－16－49	野田生3遺跡	野田生394－1ほか	海岸段丘（25～37）	中期	
B－16－50	野田生4遺跡	野田生378ほか	海岸段丘（26～38）	前期～晩期・続縄文	平成12年度調査　住居跡2　土壙13　焼土1
B－16－51	野田生5遺跡	野田生303ほか	海岸段丘（30～35）	続縄文（恵山・後北）	平成12年度調査　土壙4　Tピット1　焼土8　北埋調報164
B－16－52	桜野2遺跡	桜野41－ほか	野田追川河岸段丘（70～75）	中期・晩期	タンネトウL
B－16－53	桜野3遺跡	桜野22ほか	野田追川河岸段丘（70～75）	中期・晩期	タンネトウL
B－16－54	浜中2遺跡	落部459ほか	海岸段丘（15～18）	続縄文（恵山）	
B－16－55	栄浜2遺跡	栄浜214ほか	海岸段丘（31）	早期～中期　続縄文　擦文	平成12年度八雲町教委調査　土壙1　平成13年調査継続　近世の畑跡
B－16－56	山越5遺跡	山越475・476	海岸段丘（14）	前期～晩期	三浦・柴田（1988）平成13年度八雲町教委調査
B－16－57	山越6遺跡	山越214・474・475	海岸段丘（14）	前期・中期　続縄文	三浦・柴田（1988）恵山式、後北式
B－16－58	浜松5遺跡	浜松114－1ほか	海岸段丘（10～30）	早・後・晩期　続縄文	三浦・柴田（1995）後期の住居と配石遺構（墓）
B－16－59	旭丘1遺跡	旭丘3～8ほか	海岸段丘（42～55）	前期・中期	平成12年度八雲町教委調査　住居跡3　土壙7
B－16－60	山崎4遺跡	山崎158－1ほか	海岸段丘（25～45）	早期～後期	平成10～12年度調査中期主体　住居跡18　土壙88　北埋調報162
B－16－61	ポンシラリカ1遺跡	黒岩692－1ほか	海岸段丘（30）	早期～中期	平成11・12年度調査　住居跡2　土壙4　焼土5　北埋調報155
B－16－62	山崎5遺跡	山崎195－1ほか	海岸段丘（35～45）	早期～後期・続縄文	平成11・12年度調査　本報告書
B－16－63	黒岩3遺跡	黒岩244	海岸段丘（45）	早期～中期・後期	平成12年度調査　住居跡3　焼土2ほか　北埋調報155
B－16－64	シラリカ2遺跡	黒岩289・290・586	海岸段丘（38～40）	早期～中期・続縄文	前期後半のヒスイ製垂飾り（糸魚川産）　北埋調報142
B－16－65	山越10遺跡	山越399～401	海岸段丘（40～50）		平成12年度新規登載
B－16－66	浜松7遺跡	浜松273－1ほか	海岸段丘（30～45）		平成12年度新規登載
B－16－67	浜松8遺跡	浜松280ほか	海岸段丘（50～60）	続縄文（恵山式）	平成12年度新規登載
B－16－68	浜松9遺跡	浜松302ほか	海岸段丘（30～50）		平成12年度新規登載
B－16－69	山越7遺跡	山越471ほか	海岸段丘（30～40）		平成12年度新規登載
B－16－70	山越8遺跡	山越438ほか	海岸段丘（30～40）		平成12年度新規登載
B－16－71	山越9遺跡	山越325ほか	海岸段丘（20～45）		平成12年度新規登載
B－16－72	野田生6遺跡	野田生434ほか	海岸段丘（20～30）	中期	平成12年度新規登載
B－16－73	東野遺跡	東野252ほか	海岸段丘（10～40）	後期・晩期・擦文	平成12年度新規登載
B－16－74	栄浜3遺跡	栄浜240・入沢411ほか	海岸段丘（10～40）	中期・続縄文　近世	平成12年度新規登載　平成13年度八雲町教調査　近世の畑跡
B－16－75	栄浜4遺跡	栄浜269ほか河川	海岸段丘（25～50）		平成12年度新規登載
B－16－76	黒岩4遺跡	黒岩593	海岸段丘（35～50）	前期（?）	平成12年度新規登載　北海道式石冠、すり石、たたき石、ナイフ
B－16－77	落部1遺跡	入沢374ほか	落部川左岸海岸段丘（23～39）	中期～続縄文	平成13年度調査　住居跡2　Tピット7　土壙7ほか

Ⅲ　調査の方法

1　発掘区の設定

発掘区の設定にあたっては北海道縦貫自動車道（七飯～長万部間）八雲北工事区測量図（縮尺1000分の１）を使用した。工事区予定中央線上の中心杭であるＳＴＡ.798とＳＴＡ.799とを結び延長しこれを基準のＭラインとしこれに平行に４ｍごと西側にむかってＬ、Ｋ…、東側も同様にＮ、Ｏ…とアルファベットを付した。またＳＴＡ.798ラインをとおりこれに直交する線を25ラインとし、４ｍごと南側に向かって24、23…、同様に北側にむかって26、27…とし、それぞれ交差する地点に杭を打設した。発掘区はこの４ｍ方眼を基本としその西側の交点のアルファベットと数字の組み合わせで呼称する。(例えばＩ－16)。また、平成12年度の調査では一部の遺物の稀薄な地区と遺構確認調査範囲を除きこの方眼を４分割し、２ｍ方眼で遺物の取り上げを行っている。この小発掘区は杭のある側から時計と反対周りにａ、ｂ、ｃ、ｄを付しＩ－16－ｂのように呼称することとし、遺構図等にも必要に応じこの小発掘区を示してある。

Ｍラインは真北に対しＮ－12.5°－Ｗである。

この方眼の平面直角座標は第Ⅸ系で以下のとおりである。(旧測量法、旧日本測地系による)

ＳＴＡ.798（調査区番号Ｍ－25）Ｘ＝－185,243.944　Ｙ＝＋2,415.249

ＳＴＡ.799（調査杭番号Ｍ－50）Ｘ＝－185,148.404　Ｙ＝＋2,444.700

なお、最終面地形と遺構位置図（図Ｉ－１）に座標値Ｘ＝－185.100～－185.300および座標値Ｙ＝＋2,400、＋2,500を示してある。

2．調査の方法

(1)発掘調査の方法

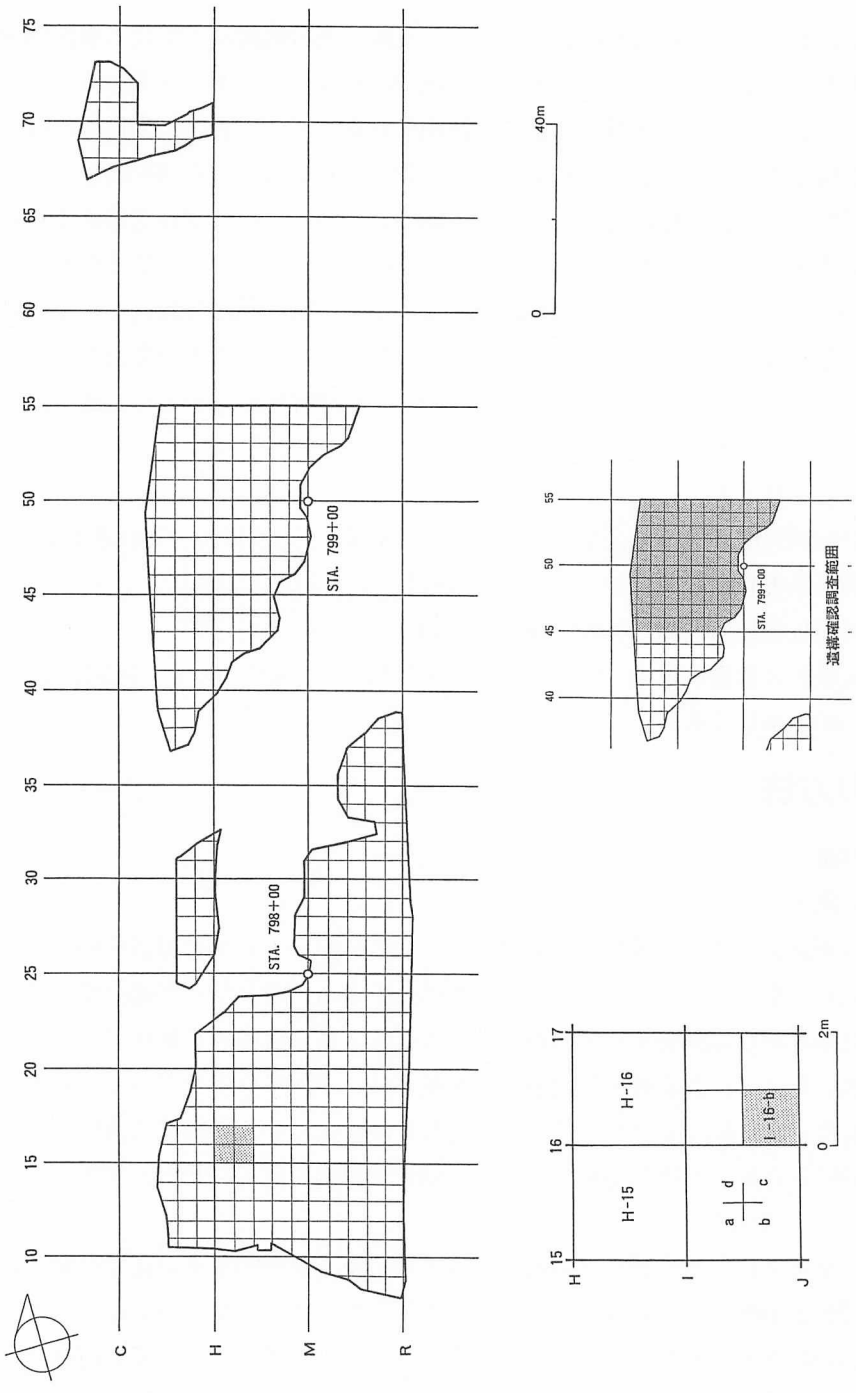
平成11年度の調査

平成11年度の調査は遺跡の詳細な状況を把握するために主にトレンチ掘削を中心とした調査を実施した。調査に先立ち業者に依頼しＭラインを基準に長さ８ｍ（２グリッド幅）で１本の割合で杭を打設した。その後あらかじめ調査する範囲の表土および駒ケ岳ｄ火山灰を重機によって除去した。概要のところでも触れたように調査範囲は大小の沢を挟んで４か所に分かれていることから、地区名を付して調査を進めた。Ａ～Ｄ区までの地区名は並行して調査していた隣接する山崎４遺跡で使用していたので混同を避けるため、山崎５遺跡ではそれに続けて南側からＥ、Ｆ１、Ｆ２、Ｇ地区と呼称することとした。

Ｅ地区ではＩラインに沿ってグリッド幅（４ｍ）で14ライン～20ラインまでの間に長さ16ｍのトレンチを入れたほか３か所についてはグリッド調査を行った。また、ＭラインとＱラインでは基本的に１グリッド置きの調査を行った。Ｆ２地区ではＦライン、Ｊラインについても同様に行った。Ｇ地区については包含層がほとんど残っていないため全面発掘に切り替えた。遺物の取り上げは４ｍの発掘区で層位毎取り上げたが、一部遺物の密なところは小発掘区で取り上げを行っている。

平成12年度の調査

発掘調査に先行して４月下旬、約１週間の工程で重機により表土、潅木類を除去した。調査区のほぼ全域に堆積している駒ケ岳ｄ火山灰（Ｋｏ－ｄ層）については、５～10㎝程残し掘削し、残りは５


75
70
65
60
55
50
45
40
35
30
25
20
15
10
C
H
M
R
STA. 799+00
STA. 798+00
40m
0
55
50
45
40
STA. 799+00
遺構確認調査範囲
17
16
15
H
I
J
H-16
H-15
I-16-b
a
b
c
d
2m
0

図Ⅲ－1　発掘区設定図

月の現地調査開始後ジョレン、スコップにより人力で除去した。表土除去後の調査区の設定および境界杭と４ｍ方眼杭の打設、調査範囲の求積については業者に委託した。包含層調査に先立ち調査範囲を全面精査したが、Ｅ地区ではこの時点で大小様々な規模の火山灰の落ち込みが認められ、大きなものは住居跡と考えられた。前年度の調査結果からＥ地区では25ラインを境にその南側に遺物・遺構の濃い範囲があることが予想されたため、包含層調査はＥ地区に重点を置くこととし同時に遺構調査も開始した。５月末には23ライン以南についてはほぼⅢ層１回目（３㎝～５㎝掘り下げ）の調査を終了し、この段階で８軒の竪穴住居跡が確認されており、順次全体をほぼ同じ段階で掘り下げながら調査を進めた。また、調査区南側Ｍラインと20ラインに囲まれた周辺は尾根状地形を見せるＥ地区でも最も標高のある地形のところであるが、その中央部付近はⅢ層上面を精査した時点で火山灰の堆積する浅い窪みとして確認されていた。Ⅲ層を数回掘り下げていくと落ち込みの周囲には掘上げ土とみられる黒褐色土があったことから、何軒かの竪穴住居跡の存在を想定し数本の直交するトレンチを入れ調査を進めた。この結果、当初落ち込みと予想していた範囲が広く人為的に削平されたもので、周辺の黒褐色土は掘上げ土ではなく削平の結果露出したⅢ層下部からⅣ層に相当することがわかった。削平範囲からは竪穴状遺構と多数の土壙がその周辺からは住居跡、土壙墓、土壙、柱穴状小ピット、また土壌を削平、移動した結果形成されたとみなされる再堆積層も検出されたことから、それぞれの遺構間の関連性、遺跡全体の構造を捉えることを目標に調査を進めていった。

小さな沢を挟んであるＦ１地区、Ｆ２地区については遺物、遺構が稀薄なことから移植ゴテとスコップを併用して遺構確認調査に準じた方法で行った。さらにＦ２地区の45ライン以北の遺構確認調査範囲については４月の段階で重機によりⅣ層まで掘削しその後、６月下旬に人力でジョレンとスコップにより全面を精査し遺構の有無を確認した。

７月末時点で包含層調査はほぼ順調に進んでいたが、前述のＥ地区の人為的な「削平範囲」からは予想以上に遺構・遺物が検出され、調査員の実測作業に遅れが生じる状況であった。このため８月上旬からお盆の５日間の休暇を挟んでの延べ２週間、第２調査部第１調査課と同第５調査課の調査員２名の応援を得て遺構の実測を進めた。この間、調査終了が予定よりも２週間遅れる旨を道路公団に伝え、了承を得、９月14日に全ての調査を終了した。

遺物の取り上げは包含層については遺構確認調査範囲を除き２ｍ方眼の小グリッドで取り上げた。また、包含層では移植ゴテで１回に掘り下げる深さを３㎝～５㎝程度とし、その掘り上げ回数についても取り上げの際にビニール袋に明記した（たとえばⅢ層４回目）。遺構の遺物についてほぼ全点について出土位置、標高、層位を計測、観察して取り上げてある。主に遺物収集帳を用いたが、一部パーソナルコンピュータを利用することを前提にトータル・ステーションにより取り上げたものもある。また、最終面の地形測量とラジコンヘリによる遺跡の空撮は㈱シン技術コンサルに委託した。なお遺構位置図は最終面の地形図と現場での実測図をもとに作成を委託したものである。

⑵整理の方法

現地では遺物取り上げ後、水洗し大まかな分類を行い遺物台帳、遺物カードを作成した。台帳は小グリッド毎に作成し、台帳、カードの備考欄には掘り上げ回数を記載した。平成11年度の調査で取り上げた遺物の台帳についてはこの段階で点検、補正を行っている。台帳整理が終了したものから順次注記作業を行った。土器片の全点、石器は磨製石器群と礫石器群、剥片石器群のうち両面調整石器、原石、石核等を注記の対象とした。また礫石器の破片の可能性がある礫片についても対象とした。山崎５遺跡を「ヤマ５」と略記し、小発掘区、遺構番号、出土層位を記入した。遺物番号を付けた礫・礫片ついては現場作業終了までに見直しを行った。そして石器の原材、破片などの可能性があると判

断した「有意な礫・礫片」については報告遺物の対象としたが、それ以外のものは発掘区単位で重量を計測するのみにとどめ、現場に遺棄することとした。また、土壙、住居跡の床面、焼土等から採取した土壌についてはバケツを用いたフローテーションを行い微細遺物の採取を行った。試料土壌を充分乾燥させ計量を行った後、浮遊物は２ｍｍメッシュ、1.4ｍｍメッシュ、0.425ｍｍメッシュ、残渣の回収には１ｍｍメッシュの地学用フルイを用いた。現地での一次整理を終了した遺物は土器・石器に分け、発掘区、遺構ごとに仮収納し順次江別センターの整理作業所に搬送した。現地での整理と並行しセンターにおいても、平成12年７月から一部注記作業、土器の接合、石器の実測作業を行った。

平成12年11月からの室内整理作業では遺物収集帳の点検、台帳の補正、土器の接合、復元作業、石器の接合作業、遺物の実測、報告書掲載遺物の写真撮影、および集計、一覧表・分布図の作成、記録類の整理等を行ない、一部遺構の仮図版作成も行った。

土器は接合作業を進めながら分類の見直しを行った。接合にあたっては同一個体を把握することに努め、ある程度器形の復元できると判断されたものも含め仮番号を付し作業を進めた。また遺構（とくに住居跡）出土のものについては層位間、各遺構間、さらに遺構と包含層の接合関係を把握することに努めた。包含層のものを含め接合し「整理番号」を付したものについては接合カードを作成した。遺構および包含層掲載遺物一覧表にある「整理番号」がこれに相当する。今年度の資料は口縁部と底部が直接接合されないものが比較的多く、このため器形、器高を想定し復元したものもある。実測にあたっては、断面の取る位置を器形の特徴を最もよく表わしている部分を対象としたため、90度回転あるいは残存状態が良好な位置で作図したもの、残存部位を合成して作成したものがある。整理作業終了後の収納は遺構・包含層ともに報告書掲載のものと、それ以外のものとに分けて行った。報告書掲載のものは図版に対応するように１点ずつ収納した。ただし複数の遺構に重複して拓影図が掲載してある土器片については、原則として写真図版の掲載してある遺構に収納することとした。その他のものは土器分類ごとに底部、口縁部、胴部にわけ包含層では大きな発掘区の範囲、例えば「Ｋライン、Ｌライン」のようにまとめて収納した。また接合作業の段階で同一個体と判断された、復元のされなかったものについては、同一個体を一袋にまとめ先の整理番号を付し同様に収納した。

石器については現場段階で分類の見直しを行いこれと並行して、包含層では完形品を中心に器種、形態の偏りの無いよう選び出し実測を行っている。遺構出土のものについては破片も含めでき得る限り掲載することとした。報告書掲載石器に限り最大長、最大幅、最大厚、重さを計測している。北海道式石冠、半円状扁平打製石器、石錘については欠損しているものが多く、これらについては予め礫片を含めた破片との接合を行っている。平成11年度調査で得られた黒曜石製の遺物については原材産地同定を依頼した（Ⅵ章－４）。整理終了後の収納は報告書掲載のものと、それ以外のものに分け、前者では図版に対応するように１点ずつ収納しそれ以外のものについては再分類した器種ごとに、包含層のものについては発掘区別あるいは土器同様大きな範囲でまとめて層位毎に収納した。遺構のものについては同様に図版に対応させ遺構別にまとめて収納した。

その他現場でのフローテーション、手取り採取等で得られた試料からの炭化種子（植物）の選別作業を行い、これらの試料についてはその同定を依頼した（Ⅵ章－３）。

平成13年４月からは図版作成を中心とした報告書の編集作業を進めた。４・５月には一部残っていた遺物実測図のトレースを終了、順次図版作成を行った。一部遺物の写真撮影もこの時期行い、写真図版を作成した。報告書の編集が進んだ段階で遺物収納を行った。（遠藤）

3　基本土層

基本的にはⅠ～Ⅵの６層に分層した。掲載した図（図Ⅱ－２）はＲラインのおよびＦラインの土層で主に柱状図で示した。なお、Ⅳ層とＶ層が分層できなかったところがあり、これについては図中では破線あるいは“~”で示してある。

Ⅰ　　層：黒色土（10ＹＲ2/1）耕作土・表土　Ｋｏ－ｄが混じる。
Ⅱ　　層：にぶい黄橙色土（10ＹＲ6/3～7/2）駒ケ岳起源の火山灰（Ｋｏ－ｄ）。1640年降下。
Ⅲ　　層：黒色土～黒褐色土（10ＹＲ2/1～10ＹＲ2/3）
　　以下の２層に分層されるところがある。
Ⅲ－１層：黒褐色土（10ＹＲ2/1）Ⅲ－２層よりも白味を帯びる。しまり、粘性ともにやや弱い。粒子は細かく緻密。
Ⅲ－２層：黒色土（10ＹＲ1.7/1）しまり、粘性ともにやや強い。乾燥によりクラックが入る。また、Ｅ地区南斜面、再堆積層（Ｍ－２）のあるところではその上下で以下のように分層された。
Ⅲ 層 上：黒色土（10ＹＲ2/1）粘性およびしまりなし。
Ⅲ 層 下：黒色土（10ＹＲ2/1）粘性なし。ややしまりあり。
Ⅳ　　層：黒褐色土（10ＹＲ2/3）やや粘性有り。しまり強い。黄褐色土が斑状に混じる。部分的に駒ケ岳ｇ火山灰かと見られる土粒が少量まじる。一部では早期の遺物が包含される。
Ⅴ　　層：黒褐色土（10ＹＲ3/3）漸移層　粘性強。しまり強。
Ⅵ　　層：黄褐色土（10ＹＲ5/4）黄褐色ローム
　　以下の２層に分層されるところがある。
Ⅵ－１層：にぶい黄褐色土（10ＹＲ5/4）色調明るい。硬くしまっている。粘性有り。
Ⅵ－２層：にぶい黄橙色土（10ＹＲ4/6）色調暗い。粘性、しまりともに強い。黒味を帯びた鉱物が混じる。

縄文時代前期～続縄文時代の遺物包含層はⅣ層上面～Ⅲ層である。また縄文時代早期の包含層はⅣ層である。　（藤原）

4　遺物の分類

(1)土器の分類

縄文時代の土器は早期をⅠ群、前期をⅡ群、中期をⅢ群、後期をⅣ群、晩期をＶ群とした。続縄文時代のものはⅥ群、擦文時代のものはⅦ群である。この各群にアルファベットを組み合わせ前半（ａ類）、後半（ｂ類）あるいは前葉（ａ類）、中葉（ｂ類）、後葉（ｃ類）に分類した。

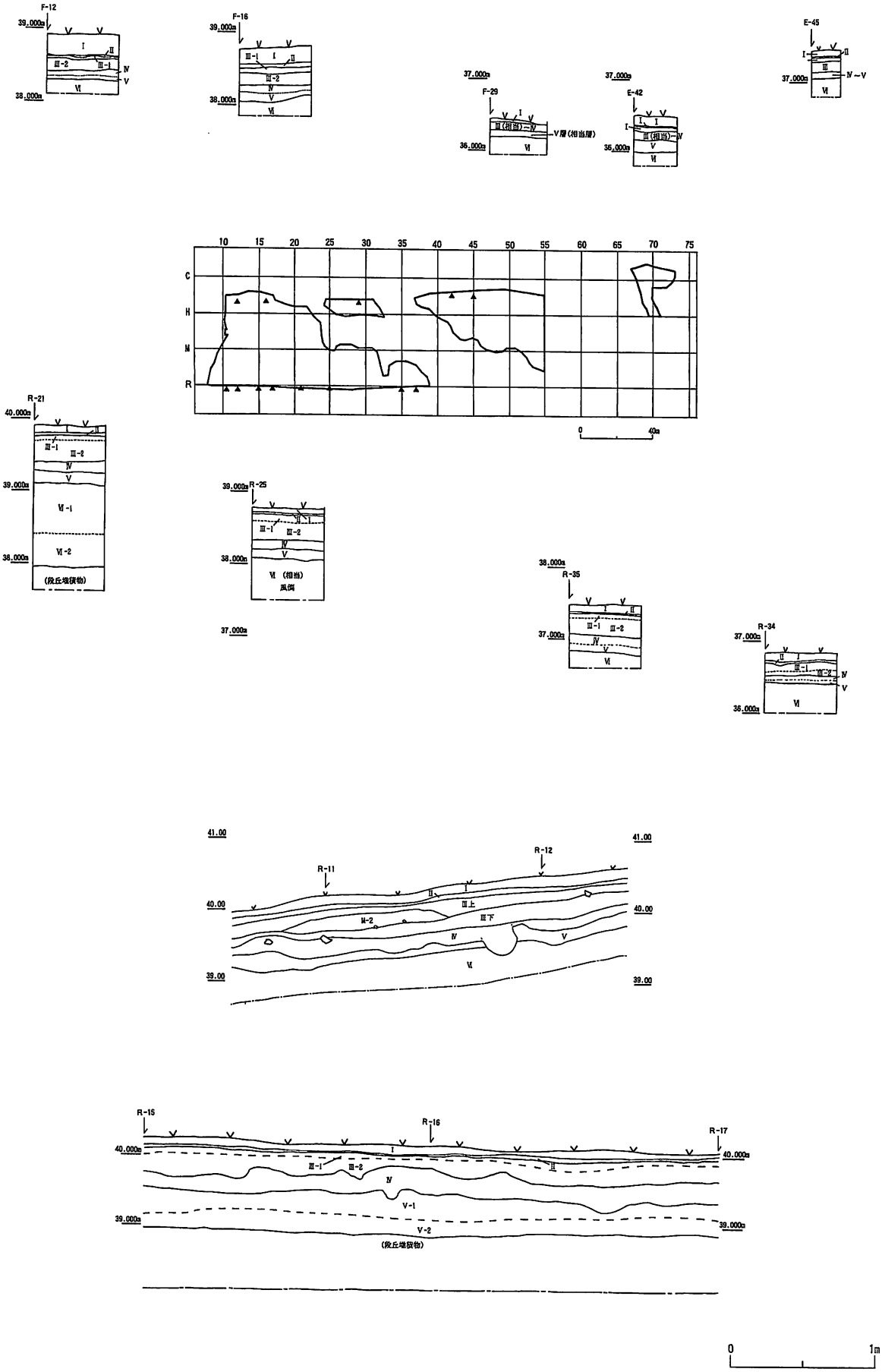
このうち、本遺跡ではＶ群、Ⅶ群に相当する資料は出土していない。

［Ⅰ群］縄文時代早期に属する土器群

本群はａ、ｂの２群に分類される。

ａ類：貝殻文尖底、条痕文・沈線文平底土器群。

ｂ類：縄文、撚糸文、組紐圧痕文、絡条体圧痕文、貼付文等のある縄文の施された土器群。


F-12
F-16
F-29
E-42
E-45
R-21
R-25
R-35
R-34
R-11
R-12
R-15
R-16
R-17
C
H
M
R
0
40m
0
1m

図Ⅲ－2　土層柱状図

［Ⅱ群］縄文時代前期に属する土器群

本群はａ、ｂの２群に分類される。

ａ類：縄文尖底土器群。

ｂ類：円筒土器下層式に相当する平底の土器群。

［Ⅲ群］縄文時代中期に属する土器群

本群はａ、ｂの２群に分類される。

ａ類：円筒土器上層式に相当する土器群。

ｂ類：中期後半の土器群。

［Ⅳ群］縄文時代後期に属する土器群

本群はａ、ｂ、ｃの３群に分類される。

ａ類：余市式、天祐寺式、タプコプ式、手稲砂山式、入江式、トリサキ式、大津式、白坂3式に相当するもの。

ｂ類：ウサクマイＣ式、船泊上層式、鰊澗式に相当するもの。

ｃ類：堂林式、三ツ谷式、湯の里３式に相当するもの。

［Ⅴ群］縄文時代晩期に属する土器群

本群はａ、ｂ、ｃの３群に分類される。

ａ類：大洞Ｂ式、大洞Ｂ－Ｃ式に相当するもの。

ｂ類：大洞Ｃ１式、大洞Ｃ２式に相当するもの。

ｃ類：大洞Ａ式、大洞Ａ’式に相当するもの。

［Ⅵ群］続縄文時代に属する土器群

本群はａ、ｂ、ｃの３群に分類される。

ａ類：恵山式以前に相当するもの。

ｂ類：恵山式に相当するもの。

ｃ類：後北式に相当するもの。

［Ⅶ群］擦文時代に属する土器群　（遠藤）

(2)石器等

石器の分類はシラリカ２遺跡（北埋調報142集）の分類を踏襲し剥片石器群、磨製石器群、礫石器群に大別した。更に従来当センターで行われている分類を参考にし、定形的石器群をⅠ～Ⅳ、Ⅵ～Ⅺ群に分け、石核・原石および定形的な石器としがたい加工痕や使用痕のある剥片をⅤ群、同様に加工痕や使用痕のある礫・礫片をⅫ群とした。いくつかの器種については細分類も行った。

なお、複数の器種が複合していると考えられるものは、形態をより多く残す分類もしくは下位の分類に含めている。分類記号を用いなかったものには土製品、石製品、焼成粘土塊がある。

剥片石器群

Ⅰ群　石鏃・石槍

（A類）石鏃　形態を中心に５細分した。

1　石刃鏃

2　薄手で細身のもの

a　柳葉形のもの

b　五角形のもの

3　三角形のもの

4　木葉形のも、菱形のもの

5　有茎のもの

（B類）石槍または両面加工のナイフ　尖頭部を持つ木葉形・柳葉形のもの。形態から２細分した。

1　有茎のもの

2　無茎で菱形、木葉形のもの

Ⅱ群　石錐　形態から３細分した。

1　剥片に刺突部を作り出したもの

2　棒状のもの

3　棒状のものにつまみ部を作り出したもの

Ⅲ群　ナイフ・スクレイパー類

（A類）つまみ付きナイフ　身部の加工状況から４細分した。

1　片面加工のもの

a　裏面の一側縁に表面調整の打面があるもの

b　片面のみ加工のもの

c　片面の周縁を加工したもの

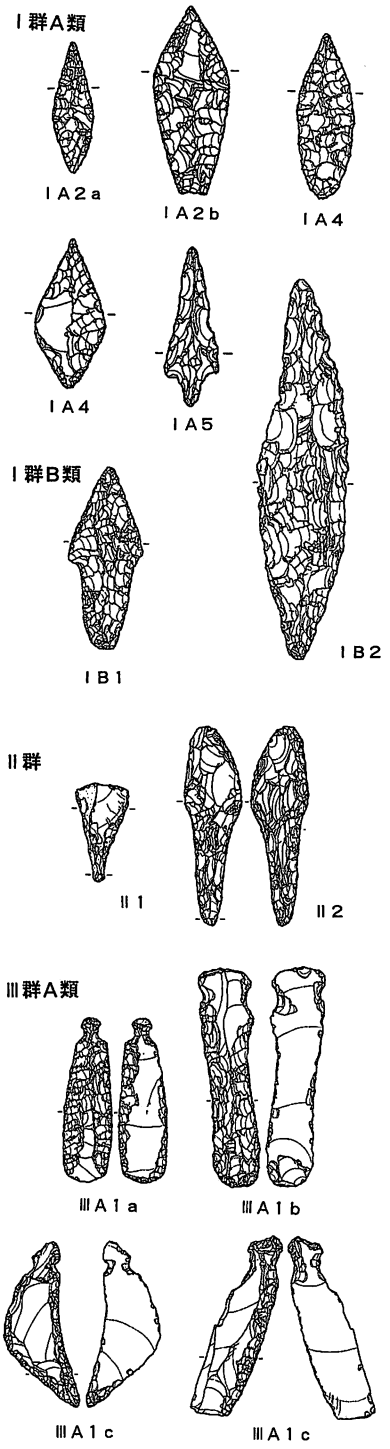
2　両面加工のもの

3　横形のもの

4　素材の剥片の形状を大きく変えないもの

（B類）スクレイパー　連続する剥離によって刃部を作り出しているもの。形態から８細分した。

1　石篦と称されるもの、篦状石器　三角形・方形に近い台形



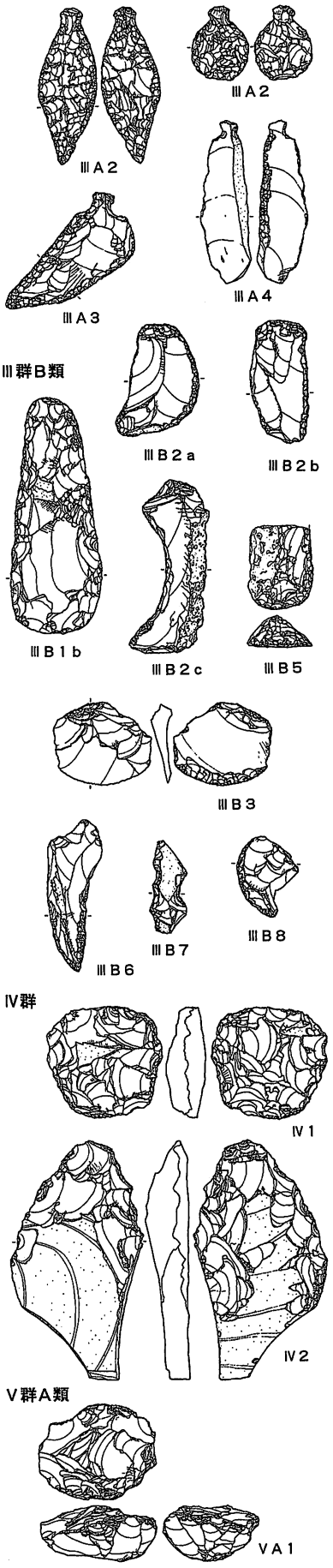
図Ⅲ－３　石器の分類(1)

状のもの。
　a　片面加工のもの
　b　両面加工のもの
2　縦長の剥片を用い、側縁を加工したもの
　a　刃部が外湾するもの
　b　刃部が直線的なもの
　c　刃部が内湾するもの
3　横長の剥片を用い、側縁を加工したもの
4　ラウンドスクレイパー
5　エンドスクレイパー
6　尖端部のあるもの
7　抉りこみのあるもの
8　素材となる剥片の形状をあまり変えず、一辺もしくは二辺に刃部を作りだしたもの

Ⅳ群　両面調整石器　両面が加工された石器のうち、上記分類に含めることができないもの。形態により3細分した。
1　円形・楕円形のもの
2　木葉形のもの
3　半円形で一方の側縁に平坦面をもつもの

Ⅴ群　石核、フレイク・チップ類
（A類）石核
1　石核
2　石器原石と考えられるもの
（B類）加工痕・使用痕のある剥片
1　剥片に加工痕のみられるもの（Rフレイク）
2　剥片に使用痕のみられるもの（Uフレイク）
3　楔形石器（ピエス・エスキーユ）と称されるもの
（C類）フレイク・チップ

磨製石器群
Ⅵ群　石斧
（A類）磨製石斧　製作技法から4細分した。
1　擦り切り技法により製作されたもの
2　打ち欠きにより整形されたもの
3　敲打（ペッキング）により整形されたもの
4　磨きのみにより整形されたもの
5　擦り切り残片
6　研磨石材



図Ⅲ－4　石器の分類(2)

（B類）石のみ

礫石器群

Ⅵ群　たたき石　素材の形態および、たたき痕の位置から4細分した。

1　棒状礫・扁平礫の一端もしくは両端にたたき痕のあるもの

2　扁平礫の周縁にたたき痕のあるもの

3　扁平礫の腹背面にたたき痕のあるもの

4　くぼみ石と称されるもの

Ⅶ群　すり石　素材の形態から5細分した。

1　断面三角形の礫の稜にすり面のあるもの

2　扁平礫の側縁にすり面のあるもの

3　半円状扁平打製石器と称されるもの

4　北海道式石冠と称せられるもの

5　円礫などの一部にすり面のあるもの

Ⅸ群　石鋸・砥石

（A類）石鋸　素材の断面幅が狭く、擦痕のある機能部の断面形がU字、V字状となるもの。

（B類）砥石　機能部の形態から2細分した。

1　砥面に溝のあるもの

2　砥面が平滑かやや凹状になるもの

Ⅹ群　台石・石皿

Ⅺ群　石錘　打ち欠きの位置から3細分した。

1　四ヶ所に打ち欠きをもつもの

2　長軸両端に打ち欠きをもつもの

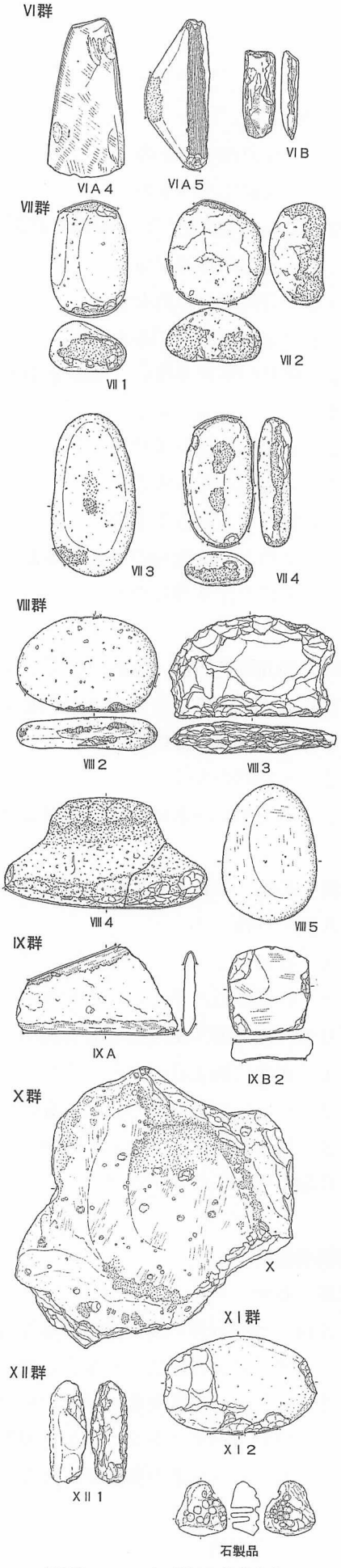
3　短軸両端に打ち欠きをもつもの

Ⅻ群　礫・礫片

1　加工痕・使用痕のある礫

2　礫・礫片

（藤原）



図Ⅲ－5　石器の分類(3)

Ⅳ　遺構と遺構出土の遺物

1　削平部分および関連する遺構

概要

調査区東端、ちょうど段丘の最頂部にあたる部分において、Ⅲ層を４～５回目ほど下げるとⅢ層の色調がやや薄くなる部分を検出した。その中心にはⅢ層相当とみられる黒褐色土の楕円形を呈する落ち込みが２ヵ所南北に連なっており、それぞれの落ち込みの直径は北側が約10m、南が７mであった。それらを含めた色調の薄いⅢ層の範囲は最も長いところで約22mの範囲におよんでいた。そのため大型住居または３軒以上の住居の重複を想定し、２ヵ所の落ち込みを貫く直線にトレンチを設け、それぞれの落ち込みの中心から直行するトレンチを範囲の外側まで設定しⅥ層付近まで掘り下げた。

その結果、２ヵ所の落ち込みは（後述のように住居様遺構Ｈ－10、11、13であるが）最大深24cmの浅い擂鉢状の遺構であることがわかり、色調の薄い部分では基本層序のⅣ層がほとんど堆積していないことがわかった。また範囲内から出土する遺物は、すべてが円筒土器下層式であり、落ち込みのいわゆる床面付近からも出土していた。これらの状況から以下の点を考えた。

・１　浅い住居が円筒下層の遺構を破壊して構築されており、色調の薄い部分は何らかの自然原因によってもともと堆積していなかった。

・２　色調が薄い部分は削平されており、落ち込みは特に深く削平された結果そうなっている。

どちらも可能性があることではあるが、落ち込みの下部からでも周囲と同じように円筒土器下層式のみが出土していること、また色調の薄い範囲と通常の自然堆積の層位とを比較すると、Ⅳ層の層厚に最低でも20cmの差があり、こうした状況が自然的に作られたものとは考えがたい。

それに対し、２の推論の通り削平を想定すると、その排土が周囲にあることが条件となる。このことを踏まえて先行調査の壁面を注意深く観察したところ、削平部分の北側と南側の２ヵ所において成因不明の褐色土の堆積を検出した（Ｍ－１・２）これらはその掘上土に対応する遺構が付近になく、この削平想定部分の先端部に位置することから、削平された土が堆積しているものである可能性が高いものであった。

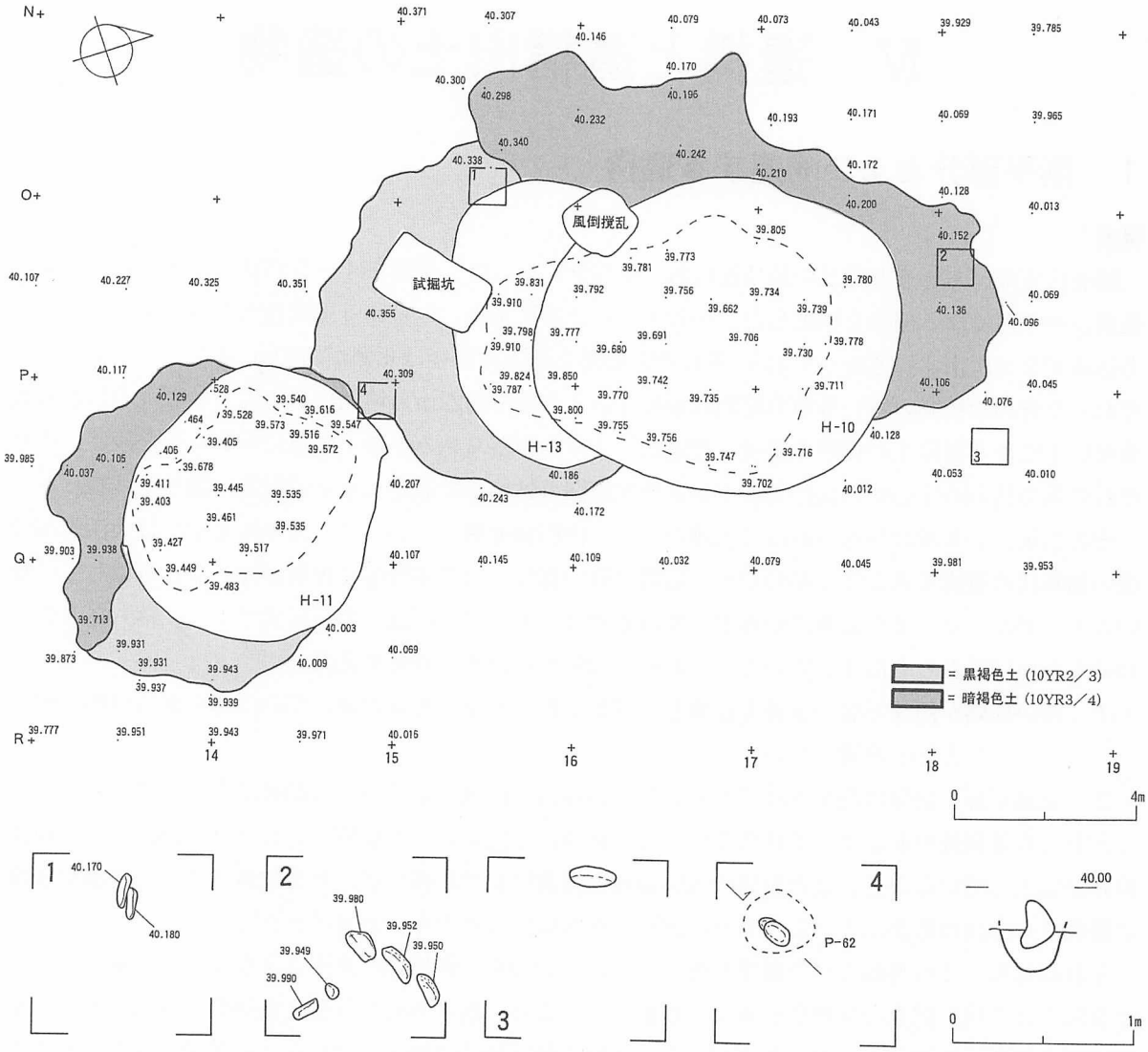
これらのことからこの色調の薄いⅢ層部分を削平部分と呼称し、その範囲内で検出された住居様遺構跡３軒、土壙30基、焼土４ヵ所、集石１ヵ所について、円筒下層ｂ式～ｃ式の範疇に収まる時期に構築された、機能的な限定はできないもののお互いに関連しあう遺構であろうとの考えから、まとめて報告することとした。

削平部分の状況

図Ⅳ－１は削平部分の検出状況である。Ⅲ層下位～Ⅳ層露出部分は北西～西側で明瞭であり、南東側で不明瞭である。住居跡内の標高数値は削平限界とみられるＶ'層（Ｈ－10、11、13床面相当）とした層位の検出面である。

また、この削平部分の周囲では、意図的におかれたとみられる自然礫がみられた。そのうちのいくつかについて図示しておいた（同図）。削平時にはこれらの礫は露出している状態であったとみられる。

（立田）



図Ⅳ－1　削平部分

(1)住居様遺構

削平部分において検出された２ヵ所の落ち込みは、トレンチ調査の結果、浅い皿状の落ち込み２ヵ所で、うち一方が重複しているため計３つの遺構であることがわかった。これらの遺構は規模において、また床面付近から遺物が出土し、焼土も検出されているため住居跡の可能性がある。しかし、明確な生活面がなく、重複する多数の土壙は出土遺物、検出状態から住居が遺構として機能していた時期に繰り返し掘られていたとみられること。また検出される焼土が窪みの中央を離れて作られるか、あるいは土壙と重複して検出されていることから、遺跡内で検出される他の住居跡との違いを考慮して「住居様遺構」とすることとした。

H－10（図Ⅳ－２～５、図版５・６・53、表Ⅳ－２・15・23）

位　置　Ｎ－16－ｂ・ｃ、Ｎ－17－ｂ、Ｏ－15－ｃ・ｄ、Ｏ－16、Ｏ－17、Ｐ－16、Ｐ－17－ａ～ｃ

規　模　836×648／709×575／71cm

床面積　28.37㎡

平面形　不整楕円形

長軸方向　Ｎ－４°－Ｗ

確認・調査　削平部分において検出された２ヵ所の落ち込みのうち、北側に位置するものである。落ち込みの中央部を通るようにトレンチを設定しⅥ層付近まで掘り下げたが、壁の立ち上がりは不明瞭であった。また床面は複数の土壙が重複していたため明瞭にとらえることができなかった。このため部分的にⅥ層をさらに掘り下げ検出に努めた。この結果落ち込みは重複する２つの浅い皿状の遺構（Ｈ－10・Ｈ－13）であることがわかった。南側に重複してＨ－13がある。本遺構の方が新しい。床面から焼土が５ヵ所、17基の土壙が検出されている。焼土は北側に集中して、土壙はほぼ全域に分布する。

覆　土　２層に分層した。Ⅲ層中位に相当するとみられる黒褐色土の自然堆積とその漸移層とみられる。

壁・床面　壁の立ち上がりは緩やかで全体として浅い皿状を呈する。床面は凸凹がある。

炉　床面から焼土が５基検出されている。しかし土壙と重複するものや、壁面近くに位置するものであり、炉と判断できるものはない。

付属ピット・柱穴　床面を10～15cm下げた時点で多数の柱穴状土壙（ＳＰ）を検出した。同様の土壙は住居周辺にも広がっており、区別がつかないためすべてＳＰとして判断した。住居内で検出されたものは47基あるが、明確に本遺構に伴うと推定される柱穴列は確認できなかった。

遺物出土状況　覆土１層下部から土器32点、Ｕフレイク１点、フレイク76点、たたき石２点、台石・石皿１点、礫・礫片が36点出土している。床面直上とした覆土と床面の漸移層から、土器12点、石錐１点、フレイク22点、たたき石１点、半円状扁平打製石器１点、礫・礫片が３点出土している。床面から土器77点、石槍１点、ナイフ１点、石錐１点、スクレイパー１点、両面調整石器１点、Ｕフレイク５点、フレイク111点、石斧１点、たたき石１点、すり石１点、北海道式石冠１点、台石・石皿１点、石製品１点、礫・礫片43点、焼成粘土塊２点が出土している。（立田）

遺　物

（土器）識別された１～12のⅡ群ｂ類土器12点を掲載した。主な出土層位は１・３・４・６～９・11・12遺物が床面、２・５・10が覆土１層である。これらの胎土には繊維が混入する。１は横位の貝殻条痕文の施された断面が角形を呈する口縁部である。２・３はＲの網目状の撚糸文が施された胴部、４はＲの撚糸文が密に施されている胴部である。５はＬＲの縄線文が施される先端が丸みを帯びた尖り気味の断面を持つ口縁部である。６～９は胴部である。地紋は、６がＲＬの自縄自巻的縄文、７がＬＲの斜行縄文、８がＲＬの斜行縄文とＲＬＲの三段複節の二種、９がＲＬＲの三段複節とＬＬＲの撚り戻しとが施されたもので、同一個体の破片がＨ－１覆土２ｂ層から出土している。10はＨ－15覆土２ｂ層出土のもの（Ｈ－15－44）。本遺構からは未接合の破片１点が出土している。ＲＬＲの三段複節の上にＲＬの縄線文を施した文様帯を有する口縁部で、胎土に微量の海綿骨針が入る。11・12は無文の底部である。12の胎土には無数の長石或いは石英が含まれている。（皆川）

（石器）13、14は石槍またはナイフ（ＩＢ）である。13は２分の１以上が欠損している。背面先端部左側縁に比較的細かい調整が施される他は全体に調整が粗い。やや厚手で、基軸も直線ではない。14は無茎で菱形を呈するもの（ＩＢ２）である。比較的粗い調整により整形される。15は石錐で棒状のもの（Ⅱ２）である。16は両面調整石器のうち、木葉形を呈するものである（Ⅳ２）。背面上部の左側縁と腹面下部の左側縁に刃こぼれ状の細かい調整が施される他は全体に調整が粗く、刃部の稜線は鋸歯状を呈する。17、18はＵフレイク（ＶＢ２）である。17は縦長剥片を素材とし、背面側の端部と両側縁に刃こぼれ状の調整が施されるものである。18は背面に原石面が残るもので、背面左側縁に細かい調整が施されるものである。13～18の剥片石器の石材はすべて頁岩である。19、20はたたき石である。19は光沢のある滑らかな礫を素材とするもので、端部にわずかなたたき痕があるもの（Ⅶ１）

である。19は先端がやや太くなる棒状の礫を素材とし、太いほうの側縁の１ヵ所にたたき痕があるものである。20は半円状扁平打製石器（Ⅷ３）である。扁平な礫の一側縁に打ち欠きが施される。打ち欠いた稜線が明瞭に観察されることから、整形したのみで使用されてはいないと思われる。19～21までの礫石器の石材はすべて安山岩である。出土した層位は13～16、18が床、17、19、20が覆土１層、21が床直上である。

時　期　床面から出土した遺物から縄文時代前期後半の時期とみられる。（立田）

Ｈ－11（図Ⅳ６～８、図版６・７・54、表Ⅳ－２・15・23）

位　置　Ｏ－14－ｂ・ｃ、Ｐ－13－ｃ・ｄ、Ｐ－14、Ｑ－13－ｄ、Ｑ－14－ａ・ｄ

規　模　605×390／547×407／37cm

床面積　11.71㎡

平面形　楕円形

長軸方向　Ｎ－44°－Ｗ

確認・調査　削平部分において検出された２ヵ所の落ち込みのうち、南側に位置するものである。落ち込みの中心に直交するトレンチを設定し、Ⅵ層付近まで掘り下げた結果、Ｈ－10のような浅い皿状の遺構であることがわかった。床面から焼土５ヵ所が検出された。また床面を５～10cm掘り下げた段階で２基の土壙（Ｐ－２、Ｐ－30）が検出された。

覆　土　２層に分層した。Ⅲ層中位に相当するとみられる黒褐色土の自然堆積とその漸移層である。

壁・床面　壁の立ち上がりは緩やかで全体として浅い皿状を呈する。床面は凸凹がある。

炉　床面から焼土は５ヵ所検出されている。いずれも土壙と重複するものや、壁面近くに位置するものであり、炉と考えられるものはない。

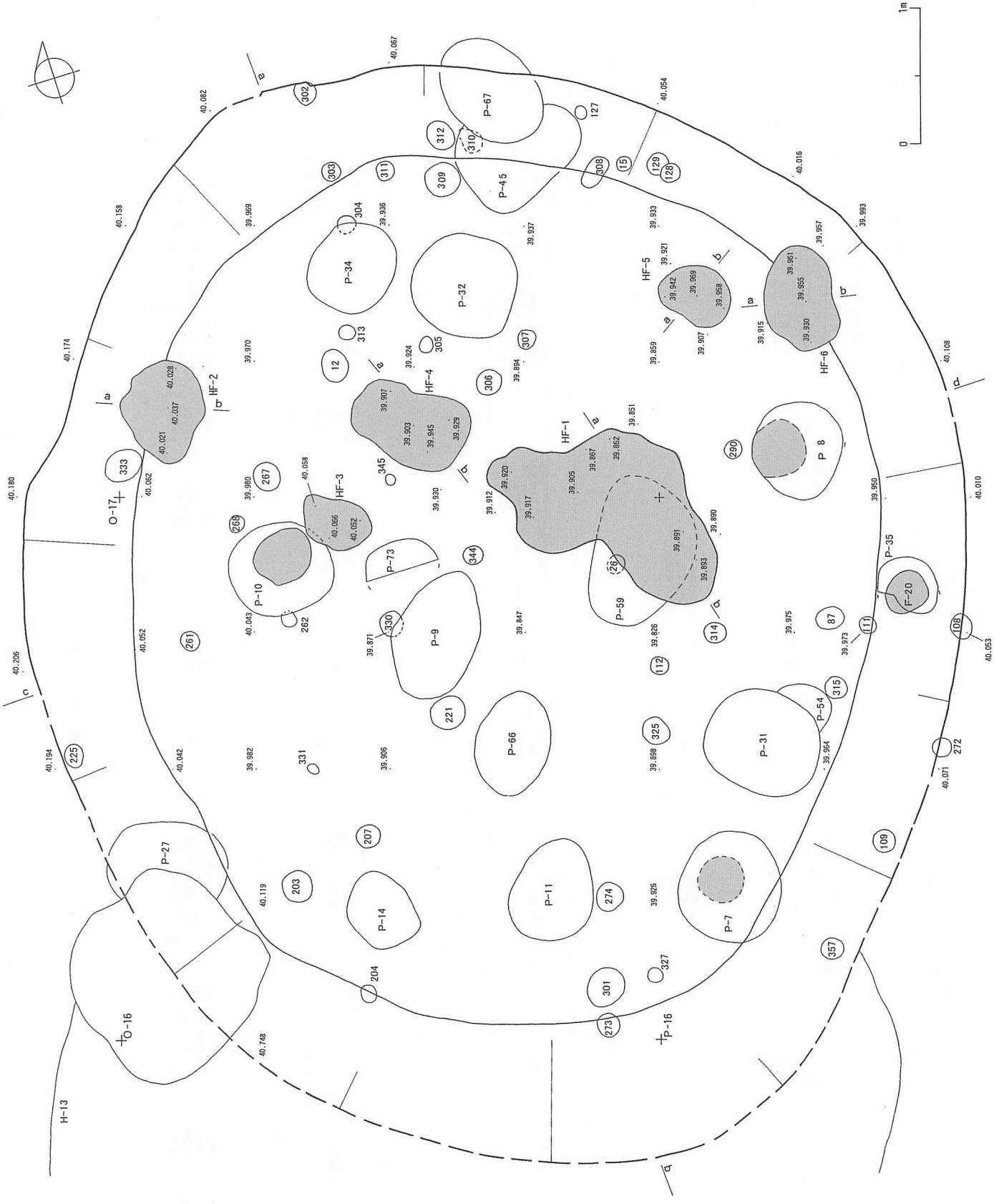
付属ピット・柱穴　床面を精査している段階で明瞭な落ち込みとして検出された土壙をＨＰ－１とした。また床面を下げた段階で柱穴状小土壙（ＳＰ）が25基検出されたが、本遺構に伴うと推定される柱穴列は確認できなかった。

遺物出土状況　床面から土器39点、スクレイパー１点、Ｕフレイク１点、フレイク36点、礫・礫片17点が出土し、ＨＰ－１覆土から土器13点、石核１点、フレイク８点、石鋸１点、礫・礫片１点が出土している。遺物の集中やまとまりは検出されなかった。（立田）

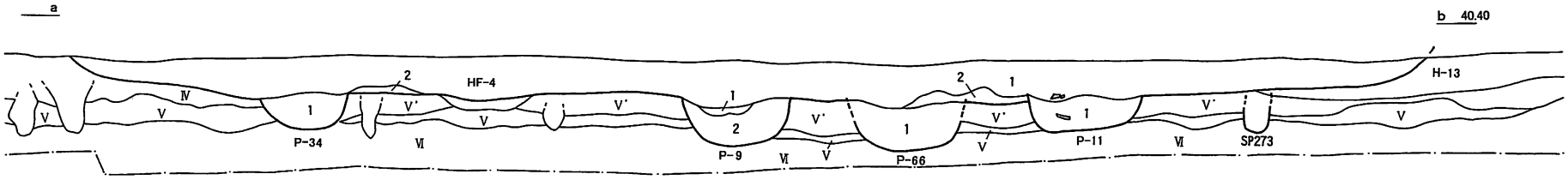
遺　物

（土器）個体別に識別された１～９のⅡ群ｂ類土器９点を掲載した。主な出土層位は、２がＨＰ－１、それ以外が床面で、これらの胎土には繊維が混入する。１はＬＲの斜行縄文あるいはＬＬＲの撚り戻しの施された胴部（１ａ）と底部（１ｂ）である。１ａの器面上端には沈線状の溝が認められるが、これは製作時の輪積みの一部が剥落した可能性も僅かにある。２は地紋にＬＲの斜行縄文が施され、その上から指頭状の道具で刻みを施した厚みの無い粘土紐を貼り付けた胴部である。３・４・９はＲの撚糸を使った文様を持つもので、３は網目状に、４・９は撚糸を密に施文している。５～８はＲＬの斜行縄文が施された胴部である。（皆川）

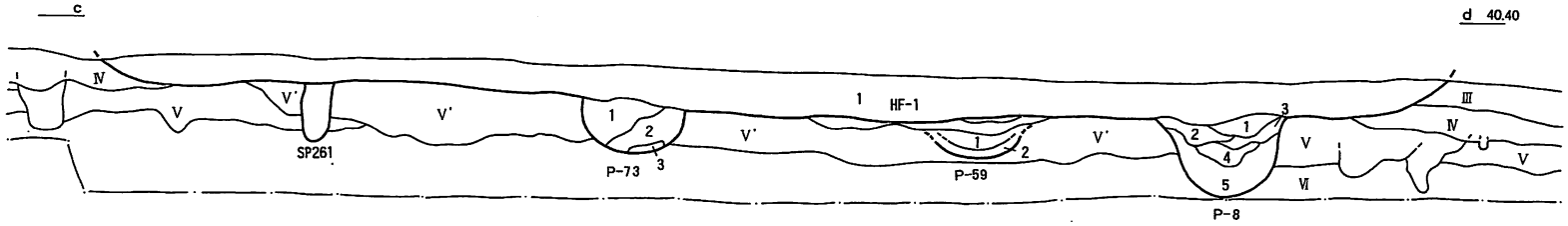
（石器）10はスクレイパー（ⅢＢ２ｂ）である。背面の左側縁に刃部が作出されるが、上下端が欠損しているため形状は不明である。11はＵフレイク（ＶＢ２）、12は石核（ＶＡ１）、13は石鋸（ⅨＡ）である。節理を利用して得られた扁平な安山岩を素材とする。刃部の断面形は部位により一定ではないが、概ねＶ字状を呈する。左右の端部は破断しておりその後は使用されていないと思われる。石材は10～12は頁岩、13は安山岩である。また、それぞれの出土層位は10、11が床、12、13がＨＰ－１覆

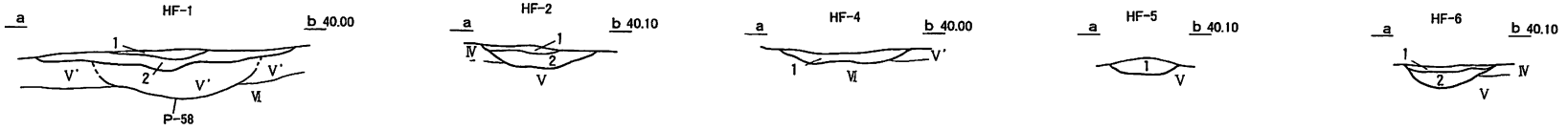

H－10
H-13
O-16
O-17
P-16
P-67
P-45
P-34
P-32
P-10
P-73
P-9
P-66
P-59
P-11
P-14
P-27
P-7
P-31
P-54
P-35
P 8
F-20
HF-1
HF-2
HF-3
HF-4
HF-5
HF-6
1m
0

図Ⅳ－2　H－10(1)



1　黒色土　(7.5YR2／1)　粘性なし しまりあり 黒褐色土が若干混じる
2　明黄褐色土　(10YR7／6)　粘性なし しまりあり 褐灰色土が斑状に混じる
V´　黄橙色土　(10YR8／8)　粘性なし しまりあるが均一ではない 褐灰色土がまだら状に混じる





HF−1　1　黒褐色土　(7.5YR3／1)　粘性なし しまりあり 橙色土粒が若干混じる
　　2　橙色土　(5YR6／8)　粘性ややあり しまりなし 褐灰色土が斑状に混じる
HF−2　1　黒褐色土　(7.5YR3／1)　粘性なし しまりなし 橙色土が若干混じる
　　2　橙色土　(2.5YR6／8)　粘性なし しまりなし 黒褐色土が若干まじる

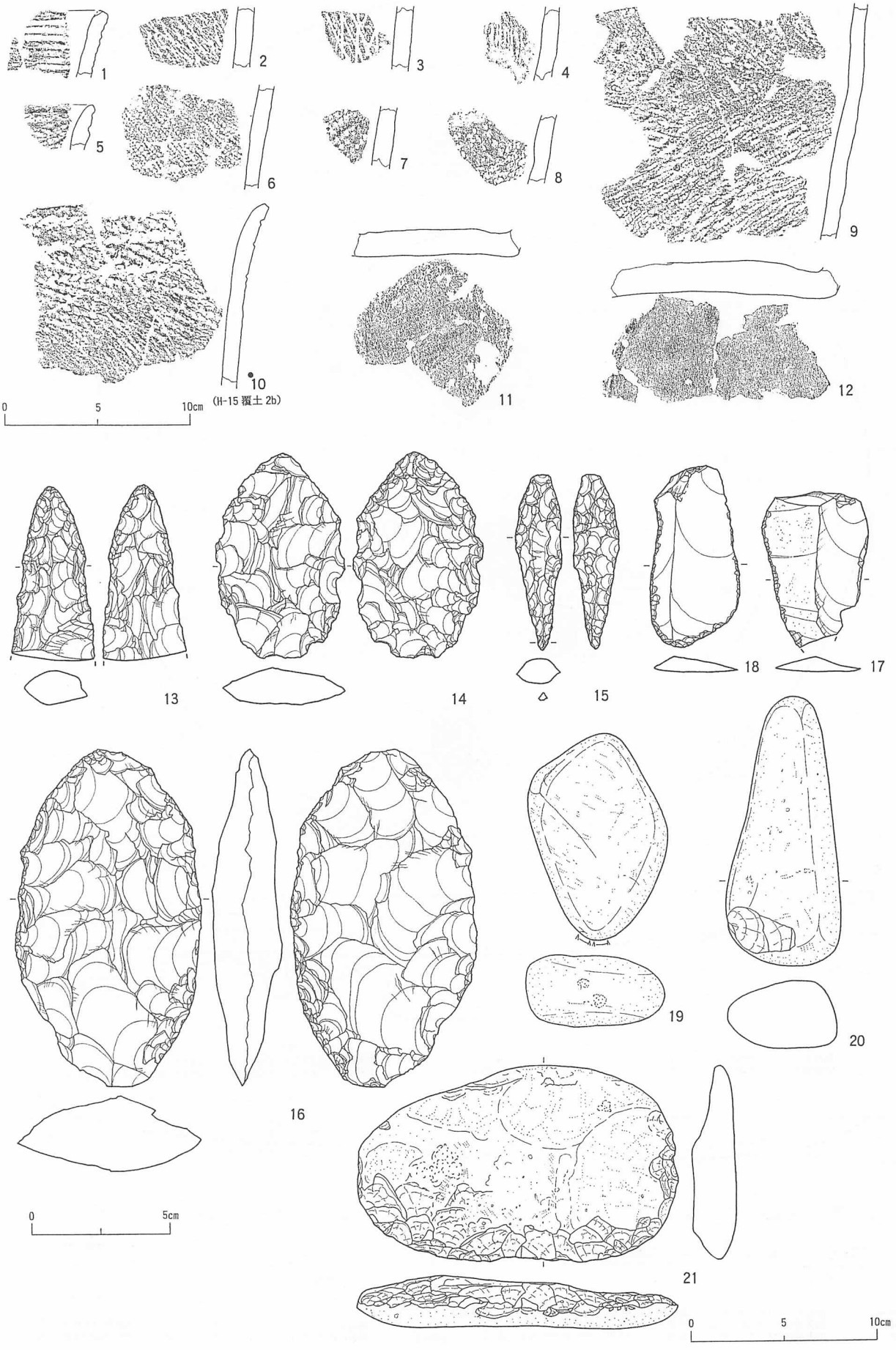
HF−4　1　橙色土　(2.5YR6／8)　粘性ややあり しまりなし 黒色土が若干まじる
HF−5　1　明赤褐色土　(5YR5／8)　粘性なし しまりあり 黄褐色土が斑状にまじる
HF−6　1　黒褐色土　(7.5YR3／1)　粘性なし しまりなし 橙色土が若干混じる
　　2　橙色土　(2.5YR6／8)　粘性なし しまりなし 黒褐色土が若干まじる

0　1m

図Ⅳ−3　H−10(2)

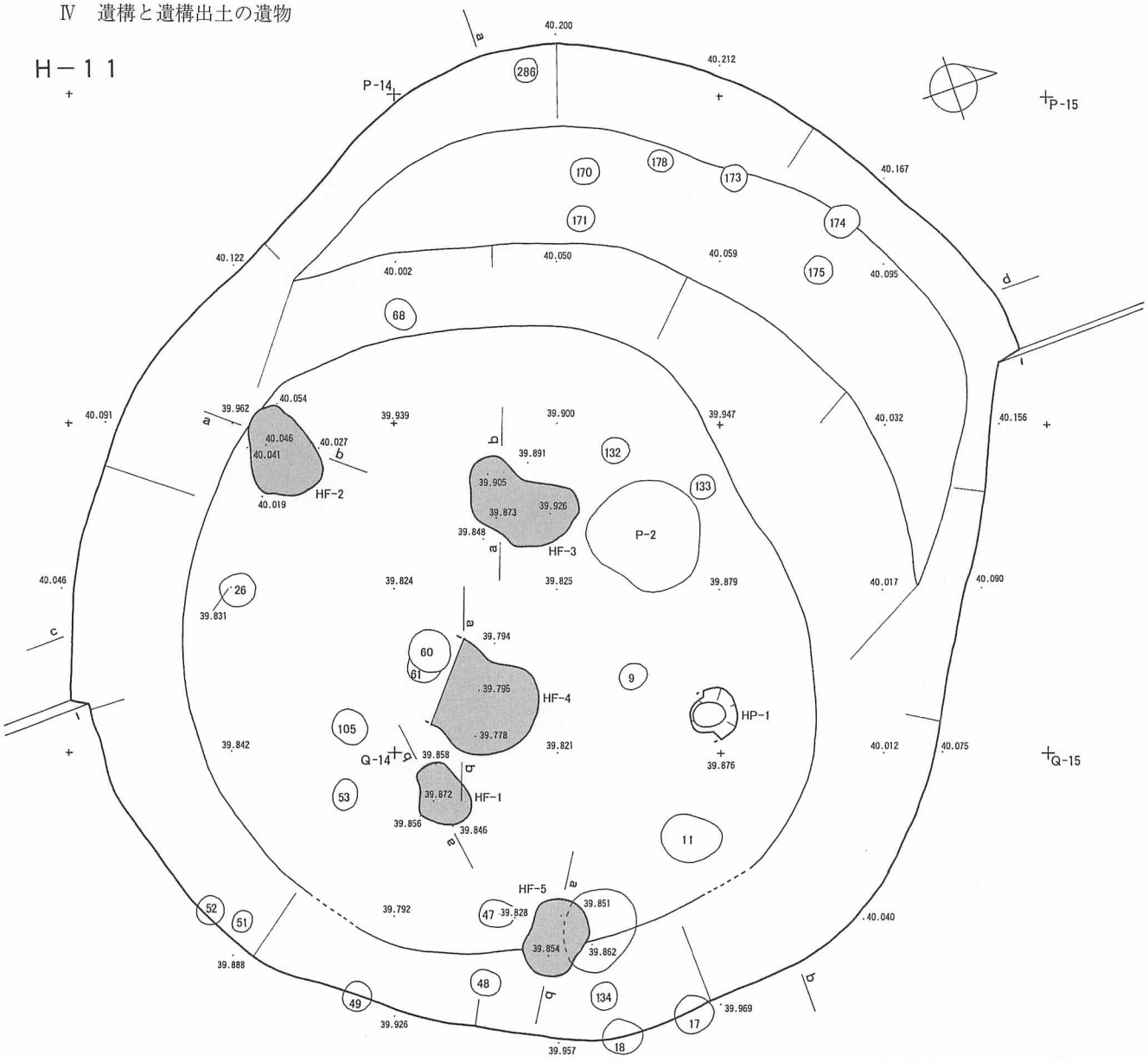


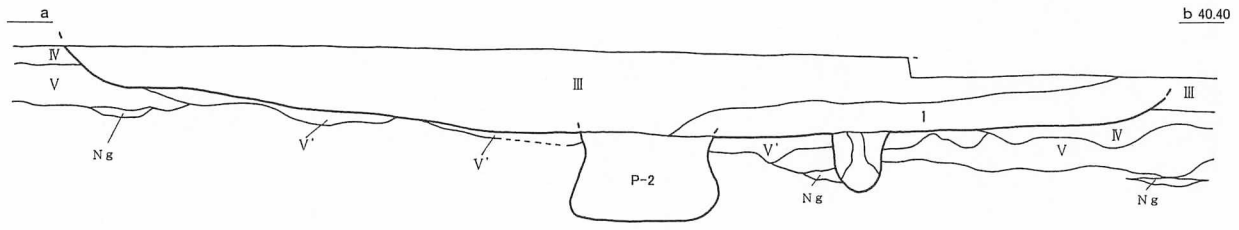
図Ⅳ－4　H－10遺物出土状況



図Ⅳ－5　H－10出土の遺物

H－11



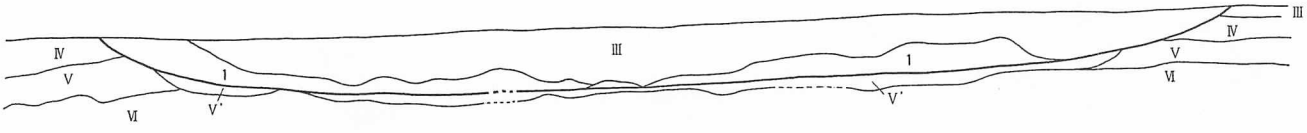


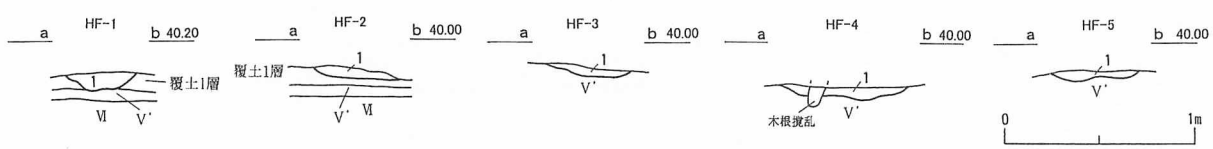
HP－1

c　1　黒色土　(7.5YR2／1)　粘性なし　しまりあり　黒褐色土が若干混じる
　　2　明黄褐色土　(10YR7／6)　粘性なし　しまりあり　褐灰色土が斑状に混じる

1　黒褐色土　(10YR3／1) 粘性なし　しまりあり
2　黄橙色土　(10YR7／8) 粘性なし　しまりなし　黒褐色土が若干まじる

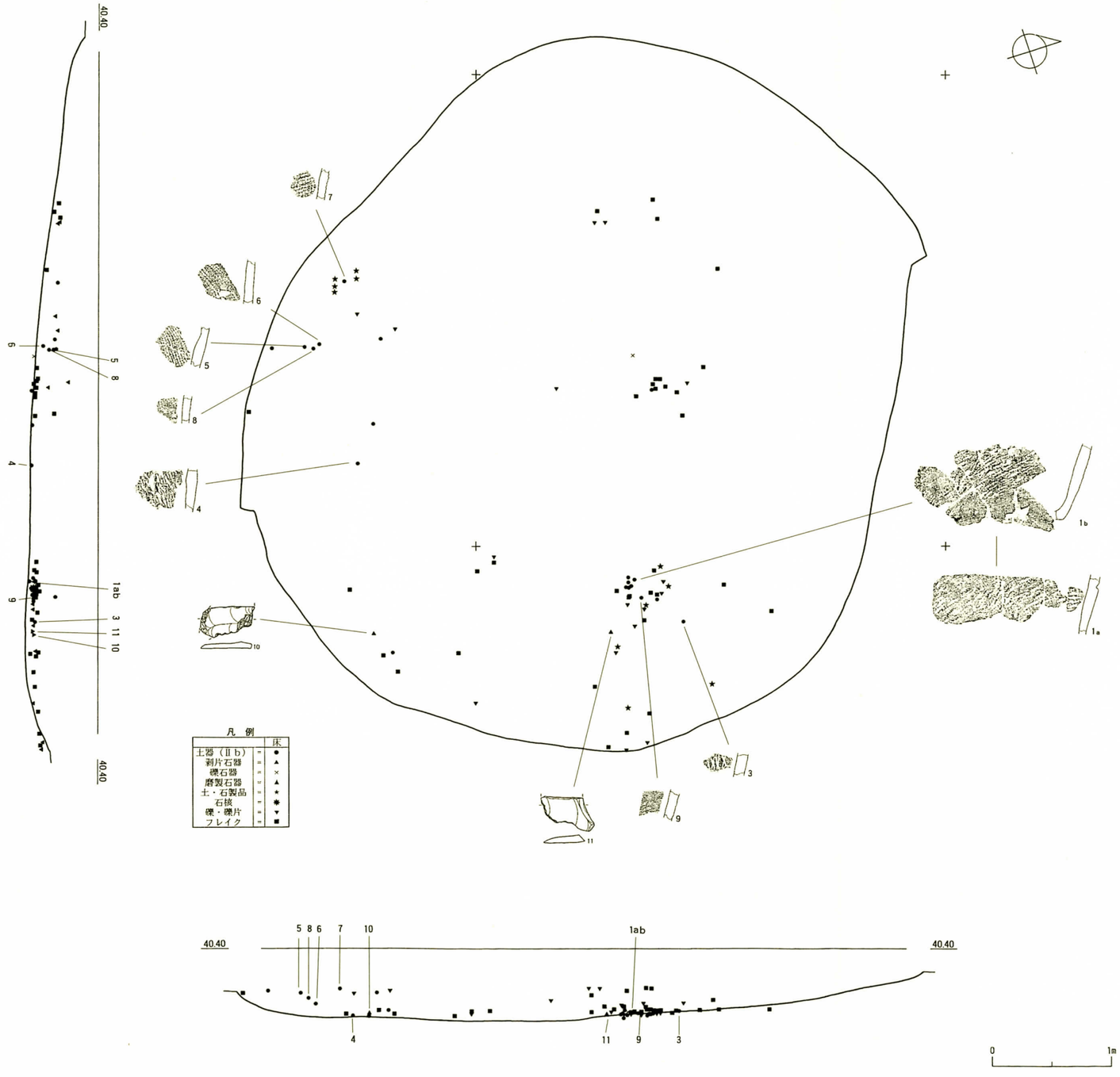
d 40.40



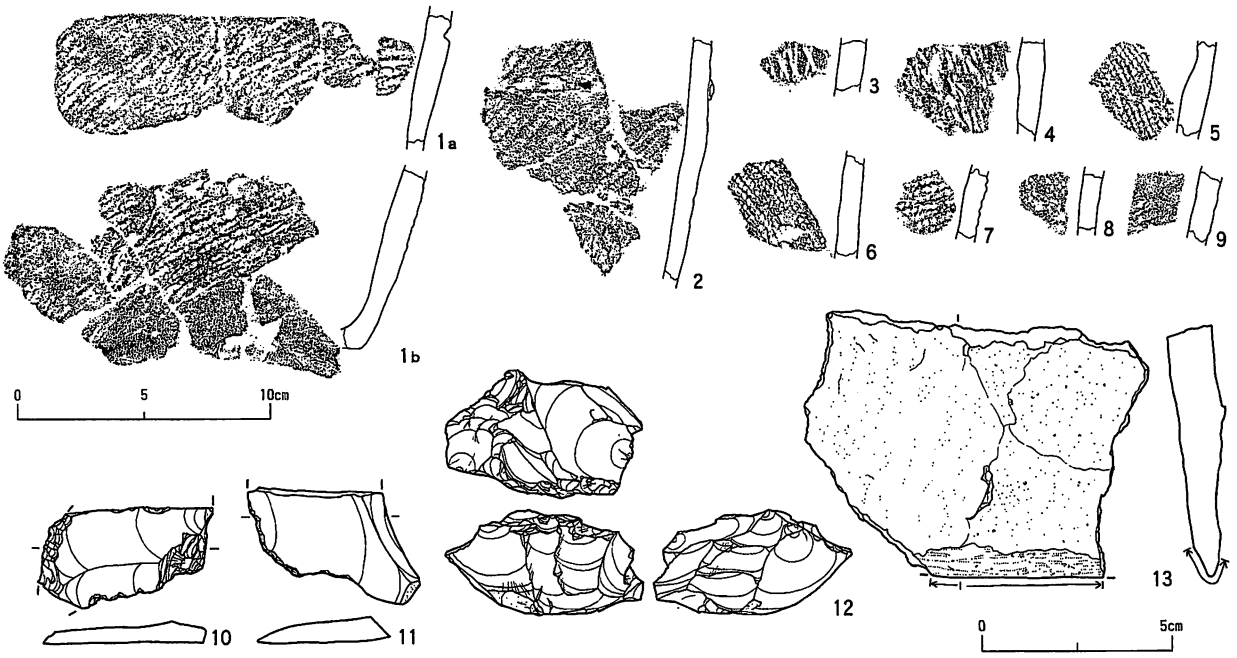


HF－1　1　橙色土　(5YR6／8)　粘性なし　しまりなし　粒子状　褐灰色土が若干混じる
HF－2　1　明黄褐色土(10YR7／6)　明赤褐色土の粒子が若干混じる
HF－3　1　明赤褐色土(5YR5／6)　粘性なし　しまりなし　褐灰色土が斑状に混じる
HF－4　1　褐灰色土　(7.5YR4／1)　粘性なし　しまりなし　明赤褐色土粒子が混じる
HF－5　1　明赤褐色土(5YR5／6)　粘性なし　しまりなし　褐灰色土が斑状に混じる

図Ⅳ－6　H－11



図Ⅳ－7　H－11覆土遺物出土状況



図Ⅳ－8　H－11出土の遺物

土である。

時　期　床面出土の遺物から、縄文時代前期後半の時期とみられる。　（立田）

H－13（図Ⅳ－9・10、図版8・54、表Ⅳ－2・15・23）

位　置　N－15－b・c、N－16－b、O－15、O－16－a・b、P－15－a・d、P－16－a

規　模　636×490／（272）×（201）／58cm

床面積　10.34㎡

平面形　楕円形

長軸方向　—

確認・調査　削平部分で検出された2ヵ所の落ち込みのうち、北側に位置する落ち込みのものである。トレンチ調査中H－10とは長軸方向が異なる広がりとして確認した。改めてトレンチをいれて精査したところ、緩やかに立ち上がる壁、凸凹のある床が検出された。西側を風倒木により破壊されるが、H－10と共通する形状から、H－13とした。また焼土HF－3の下位から土壙（P－24）が検出された。

覆　土　2層に分層した。Ⅲ層中位に相当するとみられる黒褐色土の自然堆積とその漸移層である。

壁・床面　壁の立ち上がりは緩やかで、床面は凸凹がある。

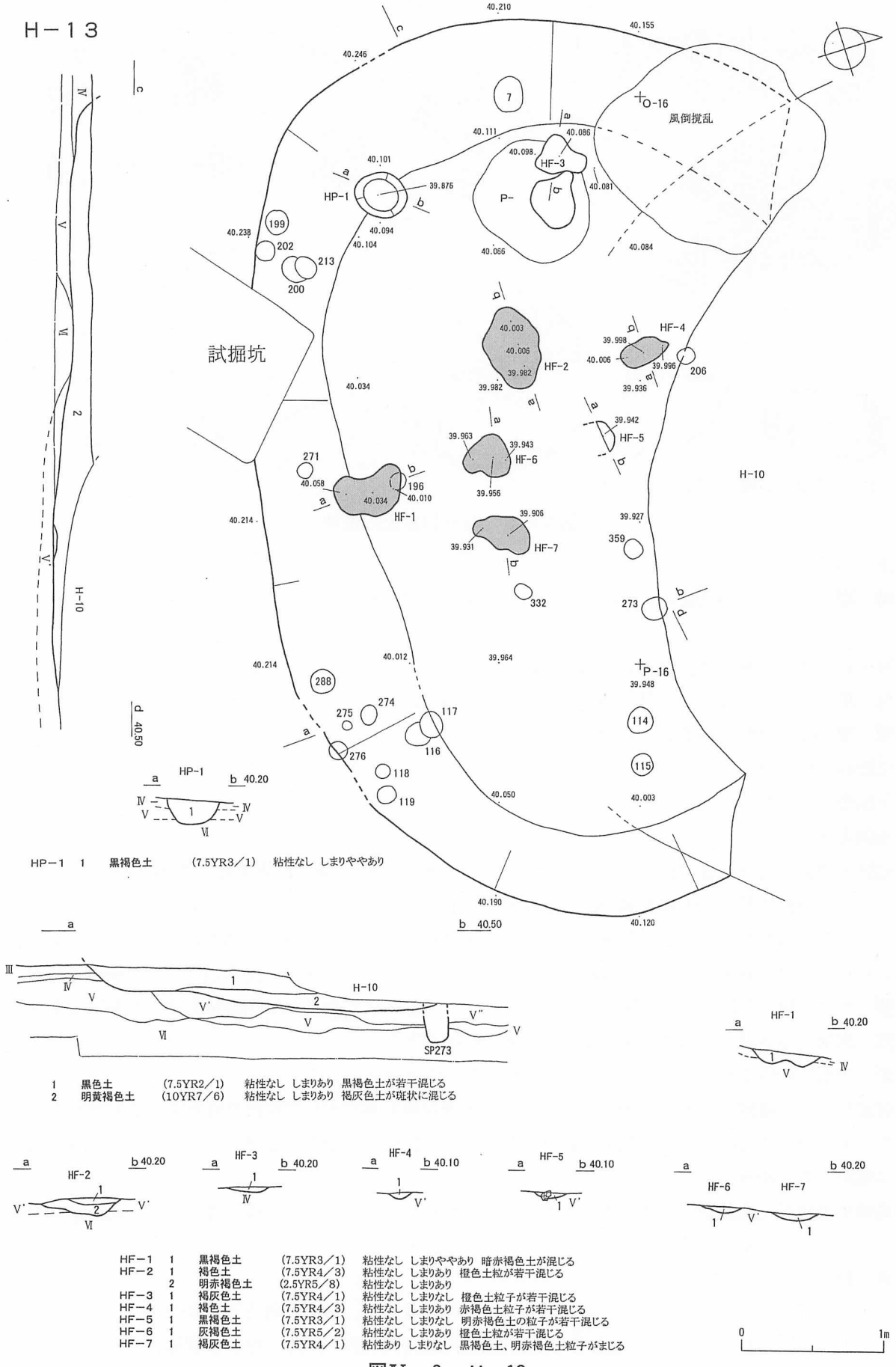
炉　床面から焼土が7ヵ所検出されたが、位置的に炉とは考えにくい。

付属ピット・柱穴　床面を精査している段階で明瞭な落ち込みとして検出された土壙をHP－1とした。床面を下げた段階で柱穴状小土壙（SP）21基を検出したが、本遺構に伴うと推定される柱穴列は確認できなかった。

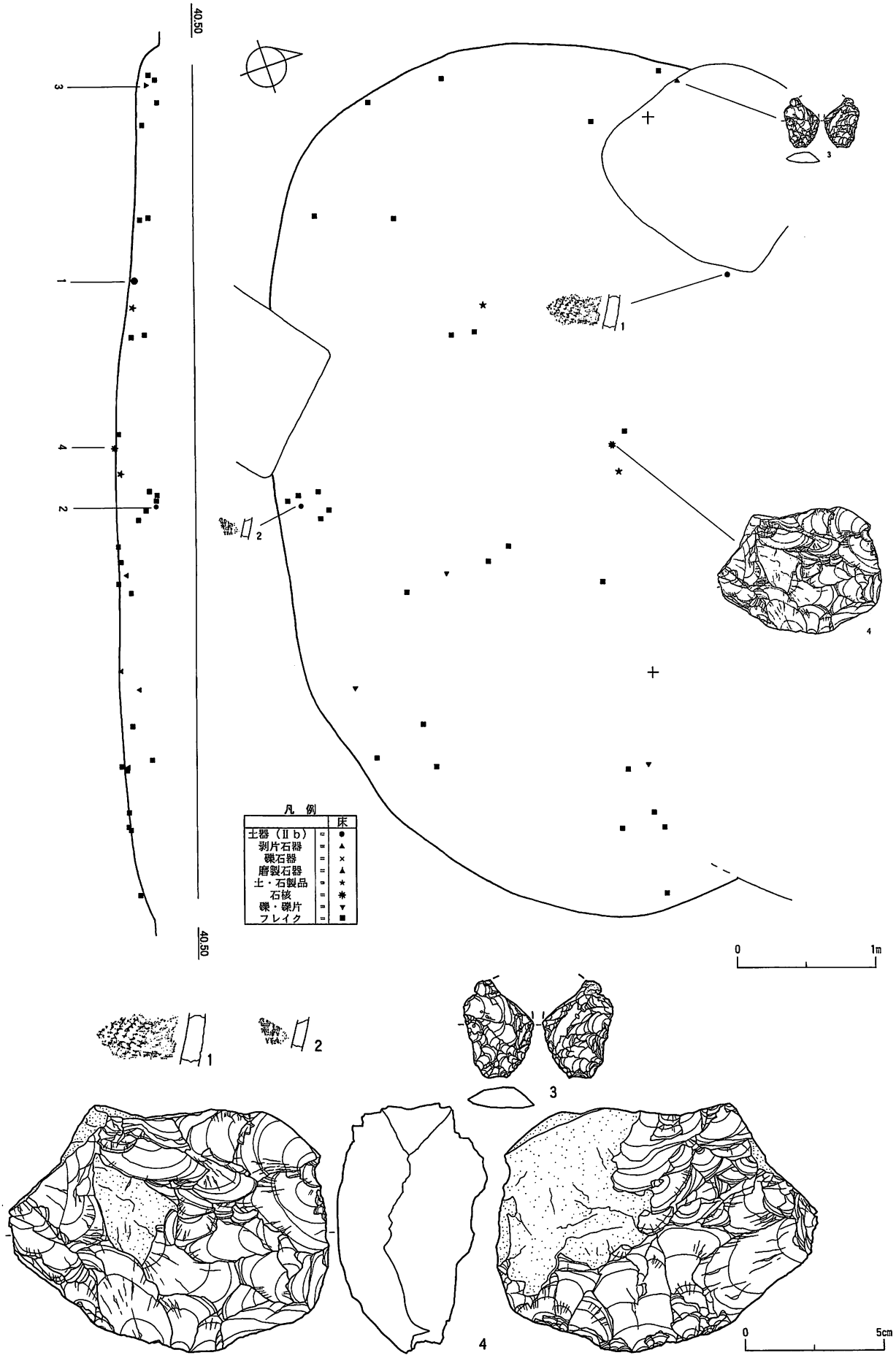
遺物出土状況　床面から土器5点、スクレイパー1点、フレイク28点、礫・礫片4点、焼成粘土塊4点が出土している。遺物の集中域、まとまりなどは検出できなかった。　（立田）

遺　物

（土器）個体別に識別された2点のⅡ群b類土器を掲載した。全て床面出土のもので、これらの土器の胎土には繊維が混入する。1はLRの斜行縄文の施された胴部で、胎土中には海綿骨針が混入する。


H－13
試掘坑
風倒撹乱
HP-1
HF-1
HF-2
HF-3
HF-4
HF-5
HF-6
HF-7
P-
O-16
P-16
H-10
SP273
40.210
40.155
40.246
40.111
40.086
40.098
40.101
39.876
40.081
40.238
40.094
40.104
40.066
40.084
40.003
40.006
39.982
39.998
40.006
39.996
39.936
206
39.942
39.963
39.943
39.956
271
40.058
196
40.010
40.034
40.214
39.906
39.931
359
39.927
332
273
40.012
39.964
39.948
288
275
274
117
116
276
118
119
114
115
40.050
40.003
40.190
40.120
199
202
213
200
7
HP-1 a b 40.20
HP-1　1　黒褐色土　(7.5YR3／1)　粘性なし しまりややあり
a
b 40.50
H-10
SP273
1　黒色土　(7.5YR2／1)　粘性なし しまりあり 黒褐色土が若干混じる
2　明黄褐色土　(10YR7／6)　粘性なし しまりあり 褐灰色土が斑状に混じる
HF-1 a b 40.20
HF-2 a b 40.20
HF-3 a b 40.20
HF-4 a b 40.10
HF-5 a b 40.10
HF-6 HF-7 a b 40.20
HF－1　1　黒褐色土　(7.5YR3／1)　粘性なし しまりややあり 暗赤褐色土が混じる
HF－2　1　褐色土　(7.5YR4／3)　粘性なし しまりあり 橙色土粒が若干混じる
2　明赤褐色土　(2.5YR5／8)　粘性なし しまりあり
HF－3　1　褐灰色土　(7.5YR4／1)　粘性なし しまりなし 橙色土粒子が若干混じる
HF－4　1　褐色土　(7.5YR4／3)　粘性なし しまりあり 赤褐色土粒子が若干混じる
HF－5　1　黒褐色土　(7.5YR3／1)　粘性なし しまりなし 明赤褐色土の粒子が若干混じる
HF－6　1　灰褐色土　(7.5YR5／2)　粘性なし しまりあり 橙色土粒が若干混じる
HF－7　1　褐灰色土　(7.5YR4／1)　粘性あり しまりなし 黒褐色土、明赤褐色土粒子がまじる
0　1m

図Ⅳ－9　H－13



図Ⅳ－10　H－13遺物出土状況と出土遺物

2は器面に多軸絡条体の施された胴部の小破片である。（皆川）

（石器） 3はスクレイパー（ⅢＢ２ａ）である。石材は黒曜石で、球果や節理が多く肉眼観察では赤井川産とみられる。背腹両面に比較的入念な細部調整が施される。背面上部右側は欠損とも解釈できるが、黒曜石製であることを重視しつまみ部の加工のないつまみ付きナイフとすることもできる。4は石核（ＶＡ１）である。節理割れの多い頁岩片を利用している。最も明確な打面を上にした。作業面は表裏両面とみられ、打点をかえて剥離されるが、階段状剥離や節理が多く、目的とする石器素材となりうる剥片を得られたかどうか疑わしい。石材は3、4とも頁岩、出土層位は3が床、4はＨＦ－5の確認面で出土している。

時　期　周囲で検出される遺構の時期から、縄文時代前期後半の時期とみられる。（立田）

⑵再堆積層

再堆積層（Ｍ－１・２）について

削平部分の南北端において成因不明の褐色土層を検出した。これらについては後の説明で詳しく述べるが、前述したように削平部分と対応関係にあることから削平した土の排土が堆積したものである可能性が高いものであった。この名称に関しては、本遺跡とほぼ同時期の遺跡である木古内町釜谷遺跡（鈴木1999）の調査から判明した遺構の名称を借用した。これはこれまで検出された遺構の中でもっとも類似点が多いからである。以下に類似点を列挙する。

時期的類似） 釜谷遺跡の再堆積層も、円筒下層ｂ式後半の時期に行われたとみられること。

検出状況的類似） 削平された部分、その土が堆積している部分が対で検出されていること。

土地利用的類似） 削平され、ローム層が露出した部分において焼土や人為的堆積のフラスコピットが検出されていること。

の３点である。また、相違点としては釜谷遺跡例には動物遺存体が出土していること、また本遺構は層と呼べるほどの広がりがない点である。同時期の遺構としては盛土が考えられるが、上記の類似点を重要視し、また墓地としての利用状況の違い（本遺構では再堆積層中からは墓などの遺構は検出されなかった）から、造成の目的としての機能を同一視できないため、現在のところは「再堆積層」の名称を使用したい。（立田）

Ｍ－１（図Ⅳ－13～15、図版８・55・60、表Ⅳ－３・16・23）

位　置　Ｐ－19－ｃ、Ｐ－20、（Ｐ－21－ｂ、Ｑ－19－ｄ、）Ｑ－20－ａ(・ｄ)

規　模　460×（319）／16cm

面　積　（14.80）㎡

確認・調査　Ⅲ層を５cmほど掘り下げた際に周囲よりも色調が若干明るい土が堆積していた。当初はＨ－12の掘り上げ土と考え調査を進めた。更に５cmほど掘り下げると、より明るさが増し周囲の黒色土＝Ⅲ層との差が明瞭となった。トレンチ調査の結果、下位にも黒色土＝Ⅲ層があったため人為的に土を移動した盛土状のものと考えられた。Ｈ－12との関係は、Ｈ－12廃絶後のやや窪んでいる範囲にＭ－１の一部が位置している。また、Ｍ－１よりやや浮いてＦＣ－４、Ｍ－１上面にＦＣ－８があり、盛土中からも剥片の出土が多い。更に、直上から１個体のつぶれた土器、盛土中および直下から土器のまとまりが検出された（図Ⅳ－11、図版８－５）。後者の土器は口縁部破片でＰ－43出土の埋設土器の底部と接合し１個体となった。

これらのことから、Ｍ－１造成とフレイク・チップ集中および土器集中は密接な関連を有していた

と言える。また、M－1の明るい土（Ⅳ・Ⅴ層主体）の起源については、掘り上げ土と考えるには周辺に対応する住居が無く、むしろ土器の接合や他のフレイク・チップ集中の配置などから調査区中央の竪穴住居様遺構H－10・13との関連が考えられる。中央部の微高地を削平し、竪穴住居様遺構H－10・13を構築した際の排土を持ってきたものがM－1の起源で、そのM－1造成時に土器をそのまま置いたり、フレイク・チップをまとめた行為を行ったと推測されるのである。なお、明瞭な明るい土の平均層厚は10cm前後で推測される土量は少なくとも1.5m³ほどである。

遺　物　盛土中からは土器161点、石器など2,796点の合計2,957点が出土した。このうち、フレイク・チップは2,733点である。（藤原）

遺　物

（土器）識別された23点を掲載した。全て胎土に繊維を含むⅡ群b類土器である。

1は全面にRLRの三段複節が施された復元土器である。本遺構出土の破片は1点で、残りの部分はP－35覆土1層から出土している。口縁部のやや下の器面には指頭状の施文具で刻みを入れた厚みの殆ど無い粘土紐が貼付され、その直下には綾絡文が施文される。2～4は口縁部、5～7は口縁部付近の破片で、これらにはLRの斜行縄文が施されている。2はRとLの撚糸2本を一束にした撚糸の押捺が二段に分けて施文されている。3は縄文の上からRの綾絡文が施されたもので、この地紋は自縄自巻の原体かもしれない。4・5は口縁部文様帯と胴部との間にLRの縄線文が施されている。5の胎土には海綿骨針が混入する。8a～cはRの撚糸を使って網目状の撚糸文を施したもので底部は上げ底である。8a・bは周辺の包含層から出土したもの。8cはH－15覆土2・2c・3層出土のものと接合している。

9～18は胴部で9はLLRの撚り戻し、10がRの撚糸を使った多軸絡条体、11・12・16・17がLRの二段単節、13・19がRLRの三段複節、14が網目状の撚糸文、15がLRの自縄自巻を施文している。9の胎土には海綿骨針が混入している。18はRLRの三段複節が施されている胴部で、H－3覆土1・3層出土のものと接合した。同一個体の破片はH－15、M－2からも出土している。

19～23は底部である。器面に施された文様は、19がLRの自縄自巻的縄文、20・23がRの撚糸を密に施した撚糸文、21がRの撚糸を網目状に施したもの、22が付加条である。20・21の胎土には海綿骨針が混入する。23a・bは内面が研磨され胎土に白色の岩片を多く含む大型器形の土器で、23aがH－15覆土2・2c層（H－15－41a）、23bがP－75覆土1層から出土した（P－75－1b）。未接合の破片3点が本遺構から出土している。同一個体の破片がH－3、H－15、P－75、M－2から出土している。（皆川）

（石器）24は刃部が外湾する半両面加工のスクレイパー（ⅢB2a）。25は一側縁に平坦面のある両面調整石器（Ⅳ3）。26は作業面を固定し打点を移動させた石核（VA1）。石材はいずれも頁岩である。27は下端にたたき痕のあるたたき石（Ⅶ1）。28は下端と左側縁の一部にたたき痕のあるたたき石（Ⅶ2）。石材は27が安山岩、28が流紋岩である。

時　期　確認面およびM－1中、および上下出土の遺物から縄文時代前期後半、円筒土器下層c式に相当する時期の遺構である。（藤原）

M－2（図Ⅳ－16～20、図版9・56、表Ⅳ－3・16・23）

位　置　O－11－b・c、P－10－c、P－11、Q－10、Q－11－a・b・d

規　模　1,032×312／24cm

面　積　26.27m²

確認・調査　Q－11区において壁面を精査中に成因不明の褐色土層を確認した。広がりを確かめるため付近を精査すると、この土層は北西から南東方向に延びており、幅の平均は約２m、広いところでは４～５mの規模で帯状に検出された。南東端ではさらに調査区外におよんでいる。遺構形成面に近いⅣ層上面の標高で38～39mの斜面にある。住居様遺構３軒、土壙30基、焼土４ヵ所、集石１ヵ所が検出されている削平部分の南端から５mほどしか離れていない地点でこれらを囲むように広がっていることがわかった。

この褐色土層はⅢ層（黒褐色土）とⅣ層以下の黄褐色土が混交してできたものと考えられ、成因としては掘上土のように自然堆積層を掘削した結果生じたものであるとみられる。削平部分との位置関係、また周辺にこれほどの規模で土を移動させる遺構が存在しないことから、この土は斜面の上方にある削平部分に起因するものであると考えられる。この堆積層はⅢ層下部で形成され、最も厚い部分はR－11区付近で24cmあり、一部に10～12cmと薄い部分もある。斜面の下で厚くなる傾向はあるが、極端な層厚の差はなく比較的均質に堆積する。土層は単一層であり、削平過程を復元できる土の堆積は認められなかった。

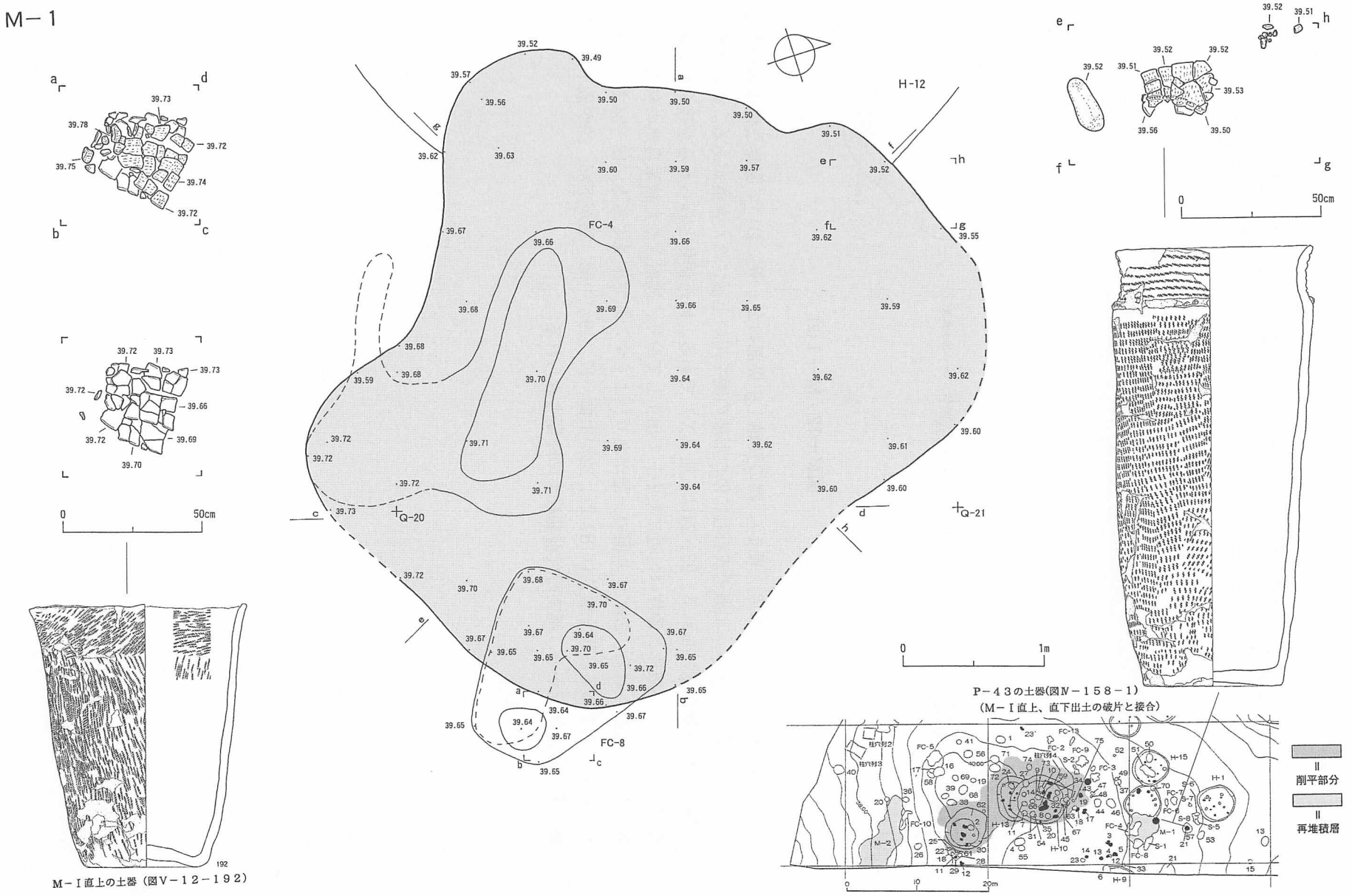
遺　物　土器78点、石鏃１点、石錐１点、石核３点、原石３点、Uフレイク２点、フレイク335点、たたき石６点、すり石１点、台石・石皿３点、礫・礫片45点が出土している。土層の中位から下部にかけて出土し、遺物集中域はない。（立田）

（土器）識別された16点を掲載した。全て胎土に繊維を含むⅡ群ｂ類土器である。これらは１～６がM－２の下位から出土したもの、７～11が中位から出土したもの、12～15が上位から出土したもの、16ｃが上位出土のものである。

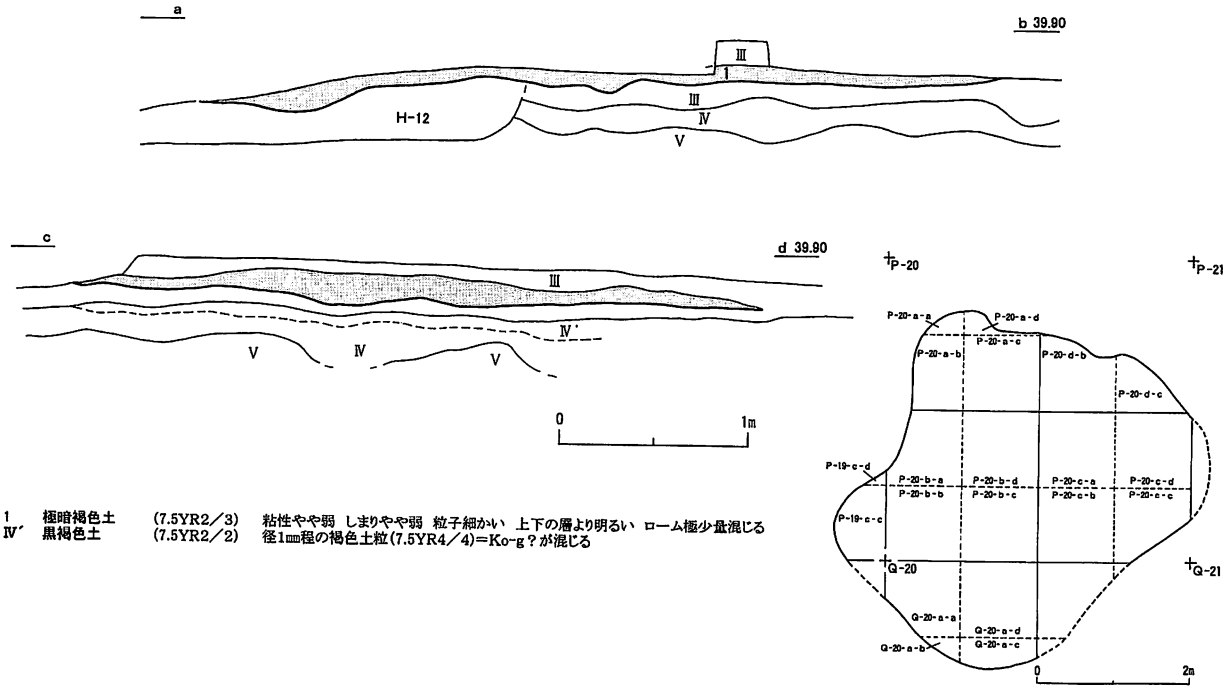
１～５は胴部で、各器面に施されているのは１がＲＬＲの三段複節、２・５がＬＲの縄文、３がＲの撚糸文、４がＲＬの縄文である。５は条が縦になる方向で施文されたものである。６は器面にＬＲの縄文あるいは自縄自巻的縄文の施された底部である。

７はＬＲの斜行縄文が施された山形突起を有する口縁部で、口唇部は断面形が円く軽い研磨が施されている。同じ個体の土器がH－３の覆土４層、P－53の覆土１・２層からも出土している。10ａ・ｂは胎土中に白色の岩片が混入する大型の深鉢形土器下半部で、10ａがH－15覆土2・2ｃ層（H－15－41ａ）、10ｂがP－75覆土１層出土のもの（P－75－１ｂ）。本遺構から未接合の破片が２点出土している。8・9・11は口縁部である。８の文様はＬＲの斜行縄文である。９はＬＲの縄線文と縦の貼付が施されたもので、11は無地の器面に、細いＲの撚糸文を使った絡条体圧痕文が施されている。12～14は口縁部を持つものである。12は細いＲの撚糸を使った絡条体圧痕文で文様帯を構成したもので、その下位の器面にはＲＬＲの三段複節が施されている。補修孔が穿たれており、胎土中には石英あるいは長石の混入が顕著である。13は横位の条痕文の施されたもので、施文具は恐らくサルボウもしくはハイガイのような貝殻によるものであろう。14はＲの撚糸文が施された胴部。15はＲＬＲの三段複節が施されている胴部で、H－３覆土、M－１出土の破片が接合したもの。本遺構からは未接合の破片が１点出土している。16ａ～ｃは口縁部とその文様帯部分のある胴部である。無地の器面には、撚りの異なった三本の組み合わせから構成される撚糸のユニットを五条巡らせ、その下に棒状の工具を用いた横位の刺突を連続させて施している。胴部の地紋はＬＲの自縄自巻的縄文と考えられる。16ａがH－１覆土２ｂ層（H－１－78ａ）、16ｂがH－９覆土２層出土のもの（H－９－８ｂ）。（皆川）

（石器）17は石錐（Ⅱ１）。棒状の縦長剥片を素材とし、末端部に両面から細部調整を施して先端部を作出するものである。石材は頁岩である。18～21はたたき石（Ⅶ）。18、19は礫の一端にたたき痕のあるもの（Ⅶ１）、20は扁平な礫の周縁部分に断続的に不明瞭なたたき痕の認められるもの（Ⅶ２）、



図Ⅳ－11　M－1(1)とM－1直上遺物出土状況

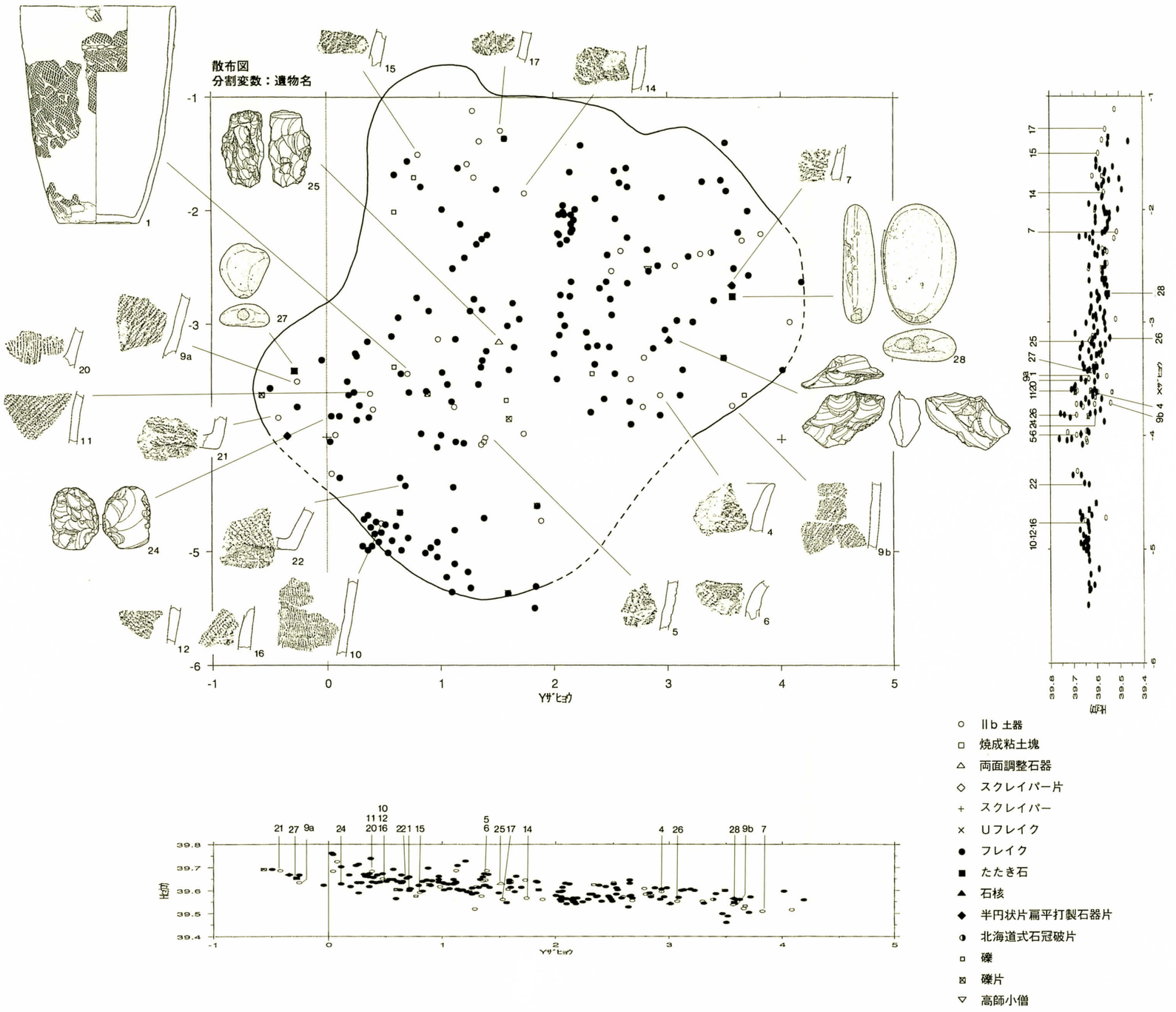


1　極暗褐色土　(7.5YR2／3)　粘性やや弱 しまりやや弱 粒子細かい 上下の層より明るい ローム極少量混じる
Ⅳ'　黒褐色土　(7.5YR2／2)　径1㎜程の褐色土粒(7.5YR4／4)＝Ko-g？が混じる

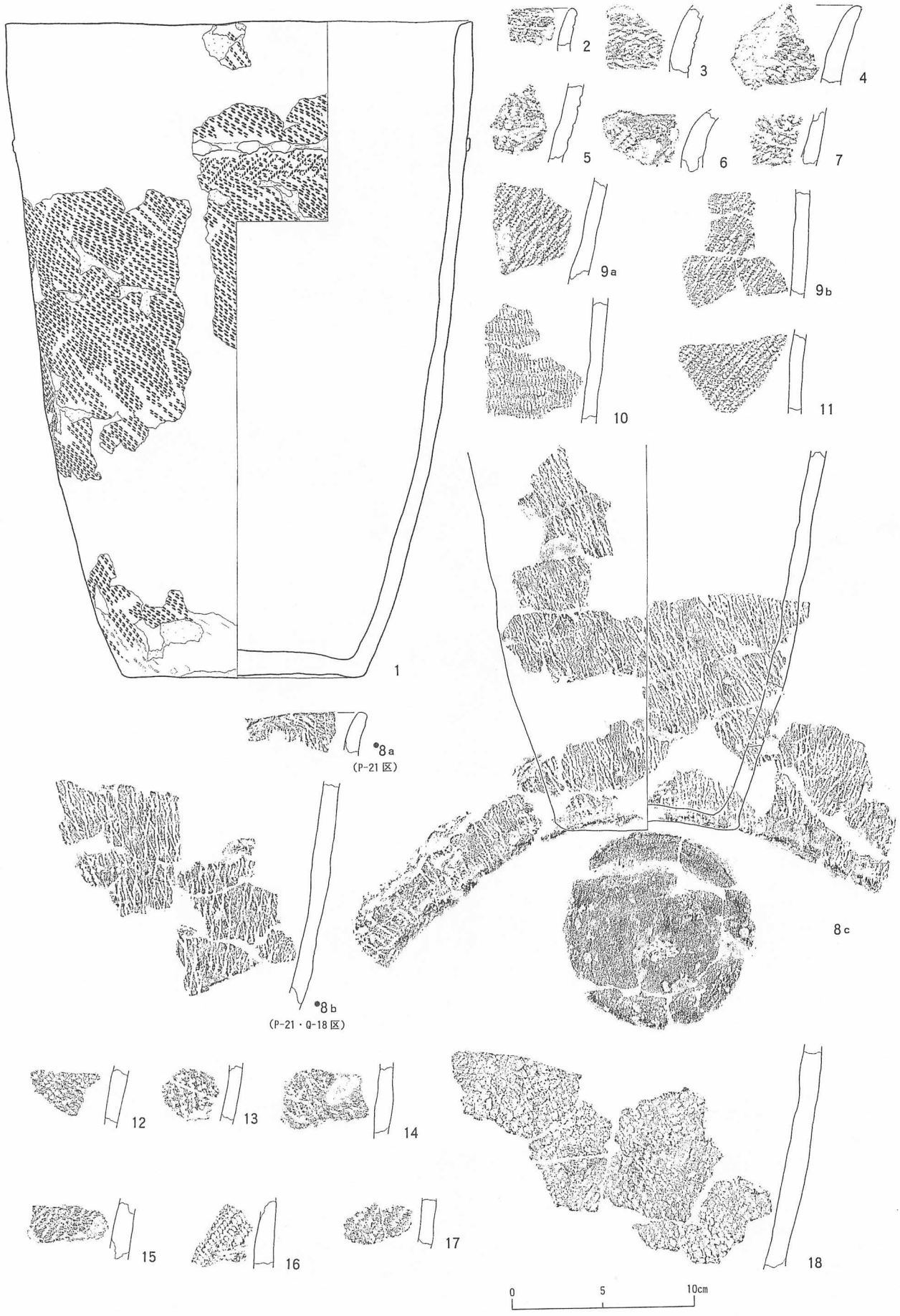
図Ⅳ－12　M－1(2)

21はくぼみ石と称されるもの（Ⅶ4）、礫の長軸上中央部の2ヵ所において明瞭な使用痕がある。22はすり石（Ⅷ）である。北海道式石冠に似た形態の礫を用い上端にたたき痕がある。たたき痕周辺には黒色の付着物が認められる。23、24は石皿（X）である。同一個体とみられるが接合しなかった。他にも接合しない破片、砕片は付近に集中して出土しており、放置された結果自然の営為によって破砕したものとみられる。23にすり面の一部があり、よくすられて平滑である。18～24までの礫石器の石材は安山岩である。出土層位は18、21、22が上面、17、19が中部、23が下部、20が最下層である。

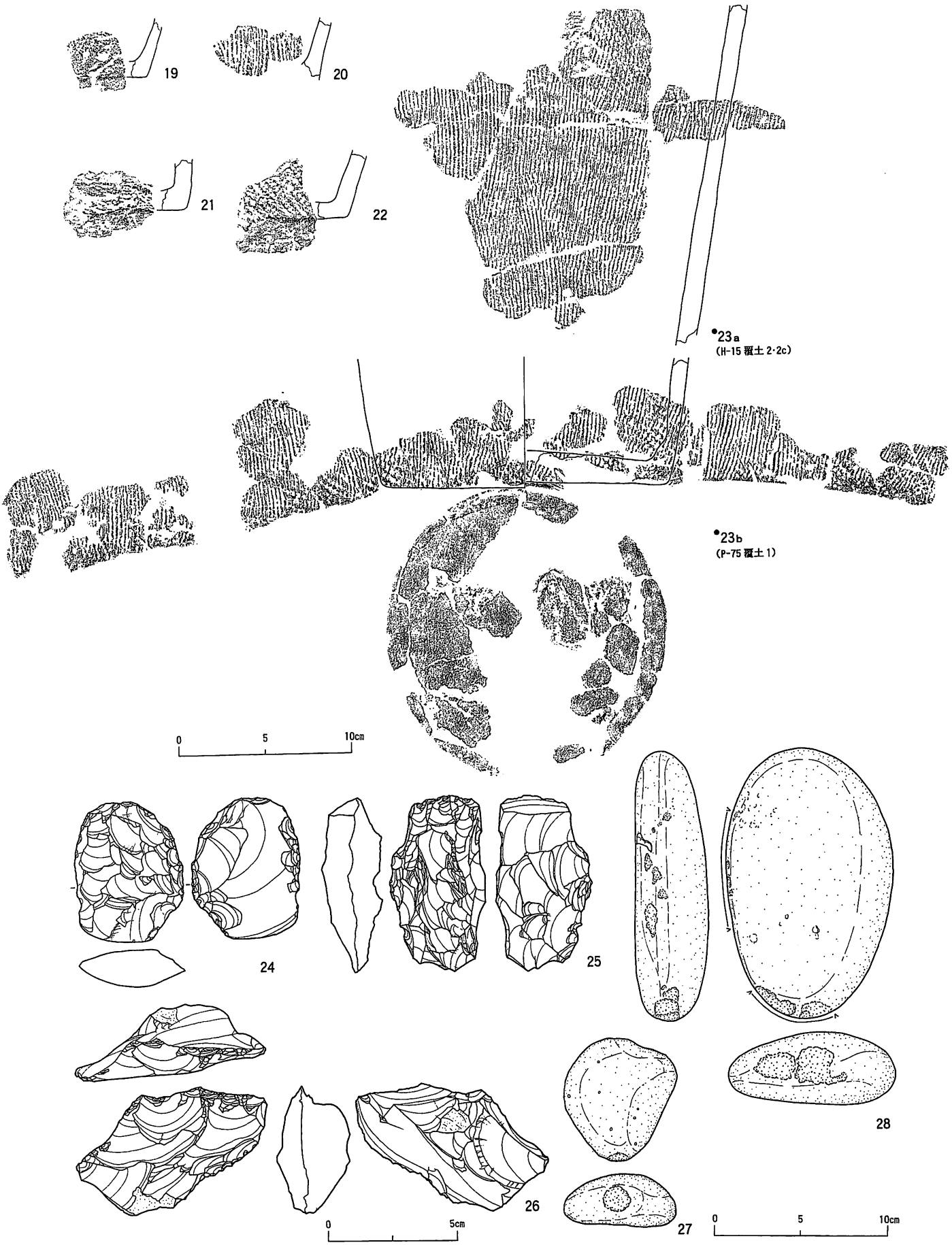
時　期　確認状況から、縄文時代前期後半の時期とみられる。　（立田）



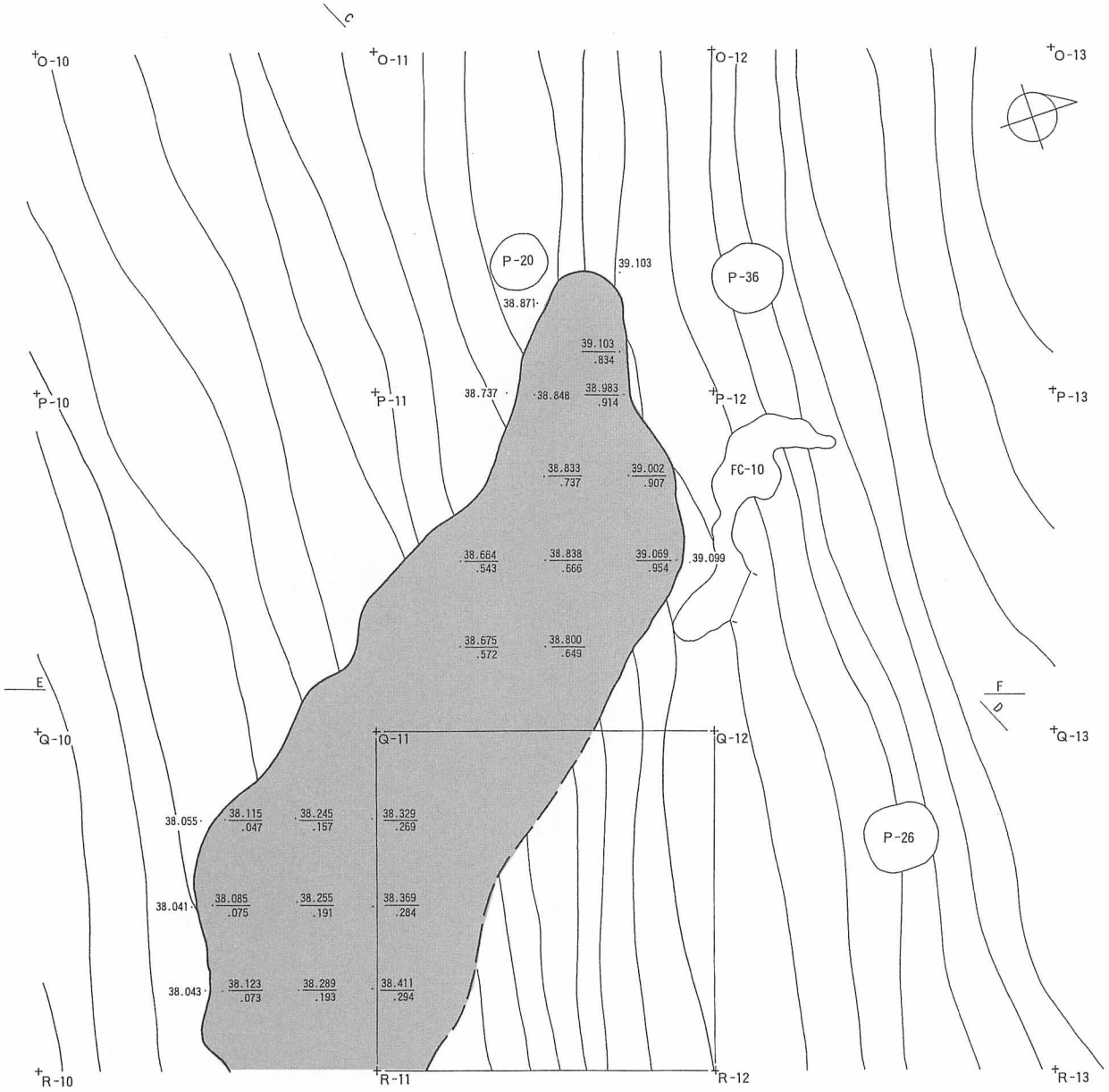
図Ⅳ－13　M－1遺物出土状況

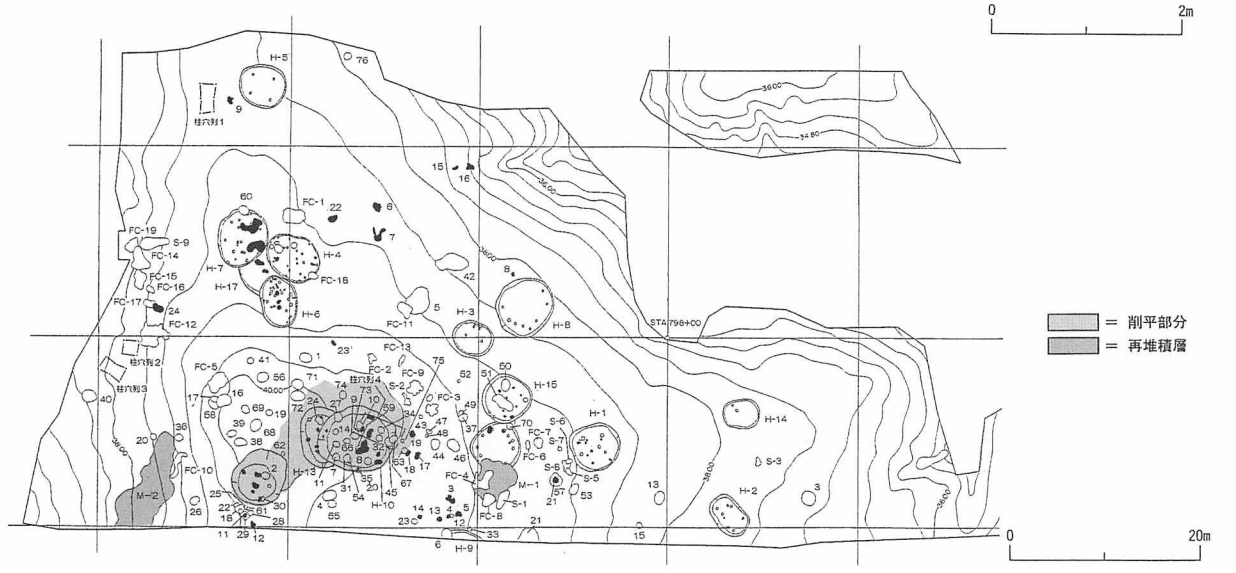


図Ⅳ－14　M－1出土の遺物(1)

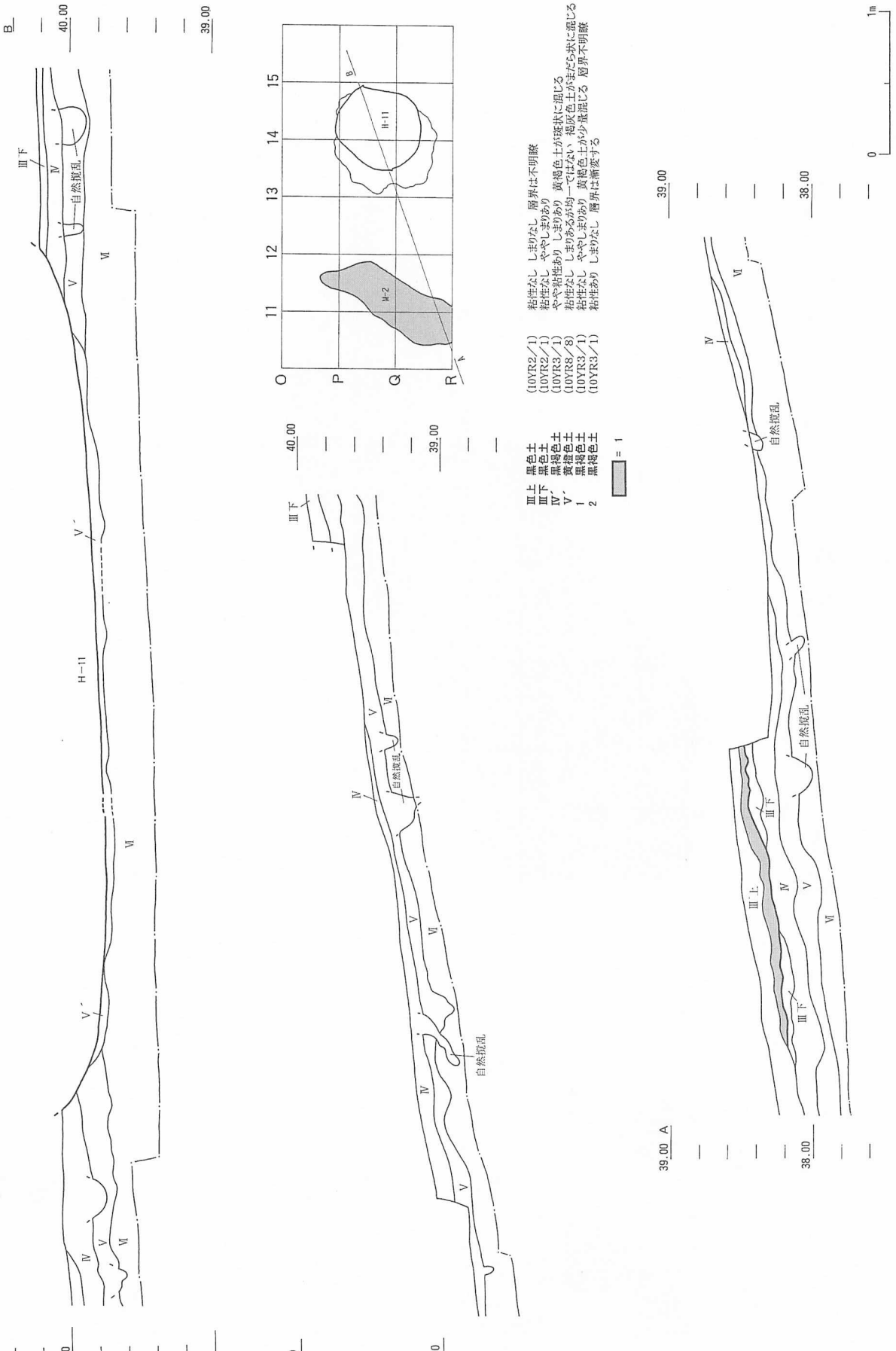


図Ⅳ－15　M－1 出土の遺物(2)

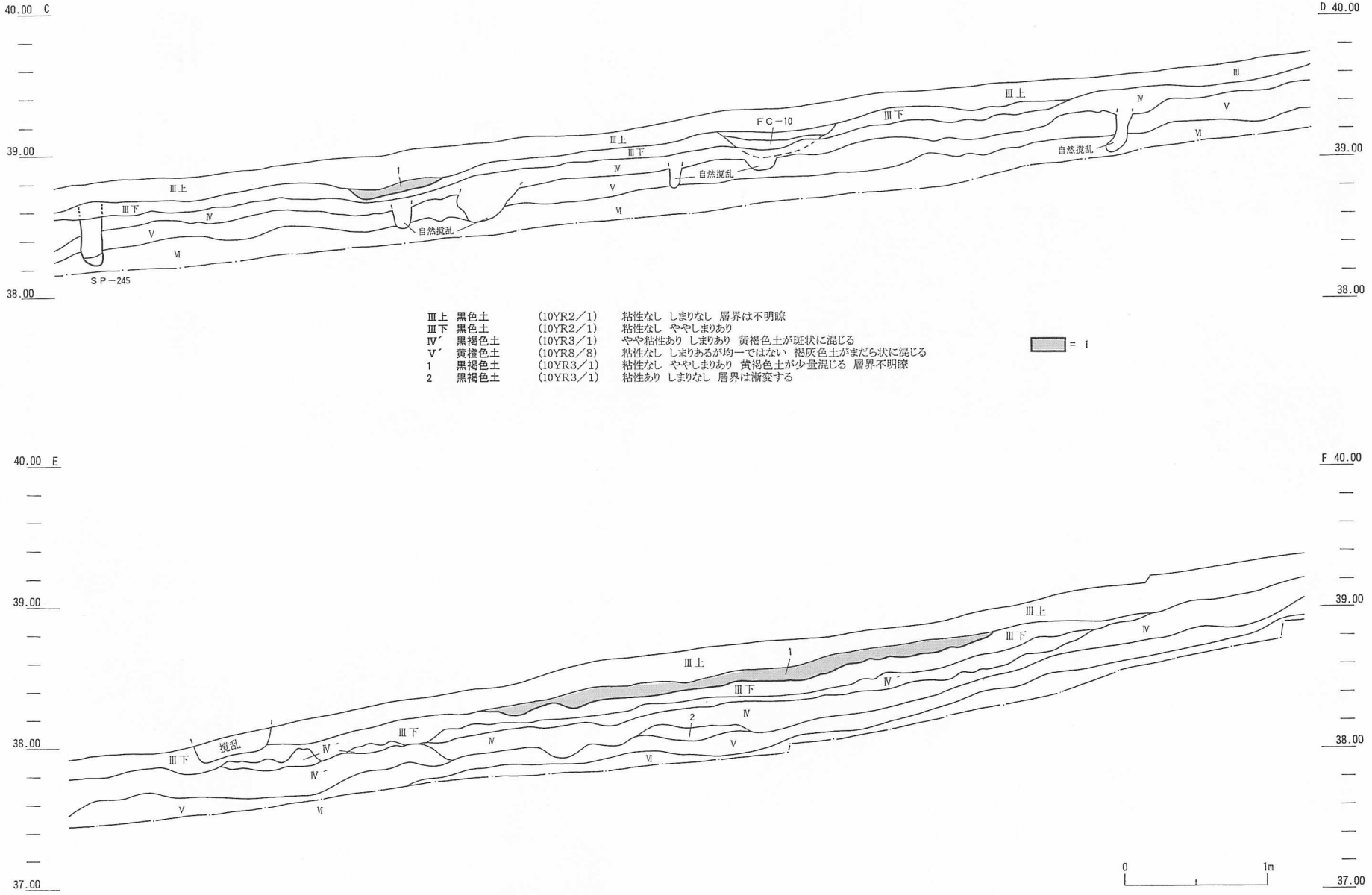

O-10
O-11
O-12
O-13
P-10
P-11
P-12
P-13
Q-10
Q-11
Q-12
Q-13
R-10
R-11
R-12
R-13
P-20
P-36
P-26
FC-10
39.103
38.871
38.737
38.848
38.983
.914
39.103
.634
38.833
.737
39.002
.907
38.664
.543
38.838
.666
39.069
.954
39.099
38.675
.572
38.800
.649
38.055
38.115
.047
38.245
.157
38.329
.269
38.041
38.085
.075
38.255
.191
38.369
.284
38.043
38.123
.073
38.289
.193
38.411
.294
E
F
D


0
2m
0
20m
= 削平部分
= 再堆積層
STA 796+00

図Ⅳ－16　M－2(1)

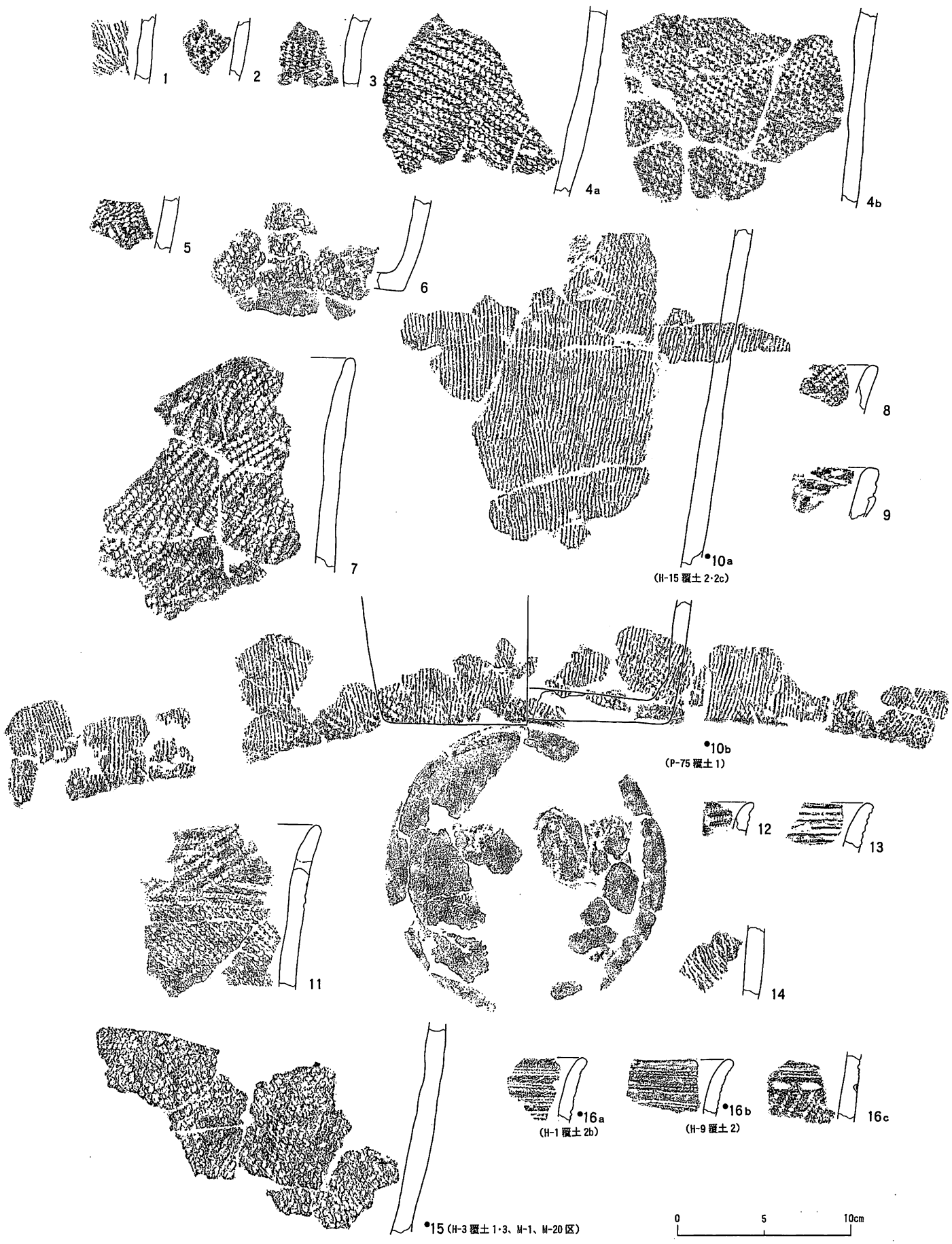

B
40.00
39.00
Ⅲ下
Ⅳ
自然撹乱
Ⅴ
Ⅵ
H-11
Ⅴ′
O
P
Q
R
11
12
13
14
15
H-2
H-11
A
B
Ⅲ上 暗色土 粘性なし しまりなし 層界は不明瞭
Ⅲ下 暗色土 粘性なし ややしまりあり
Ⅳ′ 黒褐色土 やや粘性あり しまりあり 黄褐色土が斑状に混じる
Ⅴ′ 黄橙色土 粘性なし しまりある ただ均一ではない 褐灰色土がまだら状に混じる
1 黒褐色土 粘性なし ややしまりあり 黄褐色土が少量混じる 層界不明瞭
2 黒褐色土 粘性あり しまりなし 層界は漸変する
(10YR2/1)
(10YR2/1)
(10YR3/1)
(10YR8/8)
(10YR3/1)
(10YR3/1)
= 1
38.00
0
1m

図Ⅳ－17　M－2(2)

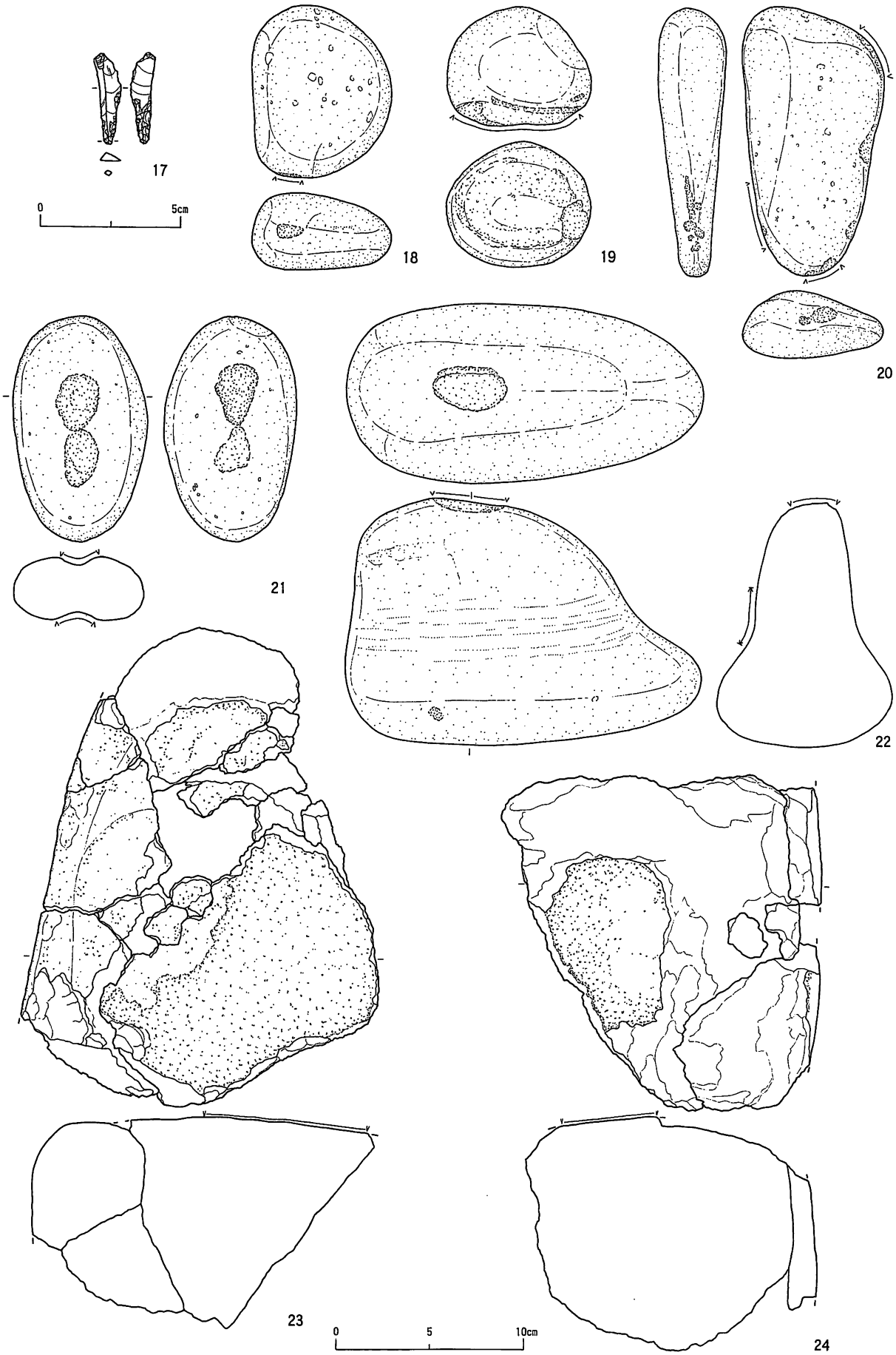


Ⅲ上	黒色土	(10YR2／1)	粘性なし しまりなし 層界は不明瞭
Ⅲ下	黒色土	(10YR2／1)	粘性なし ややしまりあり
Ⅳ´	黒褐色土	(10YR3／1)	やや粘性あり しまりあり 黄褐色土が斑状に混じる
Ⅴ´	黄橙色土	(10YR8／8)	粘性なし しまりあるが均一ではない 褐灰色土がまだら状に混じる
1	黒褐色土	(10YR3／1)	粘性なし ややしまりあり 黄褐色土が少量混じる 層界不明瞭
2	黒褐色土	(10YR3／1)	粘性あり しまりなし 層界は漸変する

図Ⅳ－18　M－2(3)



図Ⅳ－19　M－2 出土の遺物(1)



図Ⅳ－20　M－2出土の遺物(2)

(3)土壙

Ｐ－２（図Ⅳ－21、図Ⅳ－10・57、表Ⅳ－４・17・23）

位　置　Ｐ－14－ｂ

規　模　71×88／67×79／50cm

平面形　円形

長軸方向　－

確認・調査　Ｈ－11床面を掘り下げていたところ、暗褐色土の不明瞭な落ち込みを検出した。落ち込みの中心部を通るようにトレンチを設定して10cmほど掘り下げるとほぼ円形を呈する平面形が明らかになった。南側を半截して壁・壙底を確認し土壙であることがわかった。土壙の形状は中位から壙底にかけて袋状に膨らむフラスコ状である。壁は全周でオーバーハングする。

覆　土　６層に分層した。覆土の上部は褐灰色土を基調とし、黄褐色土を挟んで壙底付近には黒褐色土が堆積している。上部の堆積には炭化物、ロームブロックが混じるため、埋め戻された土の可能性がある。

遺　物　覆土から土器４点、石槍１点、つまみ付きナイフ１点、たたき石１点、半円状扁平打製石器１点、台石・石皿２点、フレイク91点が出土し、北側の壁面から石鏃が１点突き刺さるような状態で出土した。（立田）

（土器）Ⅱ群ｂ類土器３点を掲載した。１は無地の器面に絡条体圧痕文と綾絡文を施した口縁部である。２はＬＲの自縄自巻的と考えられる縄文の施された胴部である。３は器面にＲＬの斜行縄文が施され胎土に海綿骨針が入る底部近くの胴部である。１～３の胎土には繊維も混入する。（皆川）

（石器）４は石鏃（ＩＡ４）である。背腹両面に入念な細部調整が施され、薄く仕上げられる。５はつまみ付ナイフ（ⅢＡ１ｃ）。やや薄手の縦長剥片を利用し、背面左右両側縁に細部調整が施され刃部が作出されるものである。つまみ部の加工は粗い。石材は４が光沢のある珪質頁岩、５は頁岩である。６はたたき石（Ⅶ２）である。被熱し赤変している。側縁に断続的なたたき痕が認められる。正面右側縁のたたき痕中には被熱による赤変がみられないため、この部分の敲打は被熱後に形成されたものとみられる。石材は安山岩である。７は砥石（ⅨＢ２）である。軽石製で作業面は円滑である。出土した層位は４、６が覆土２層、５、７が覆土１層である。

時　期　壁面（壙底）から出土した石鏃の形態から、縄文時代前期後半の時期のものとみられる。（立田）

Ｐ－７（図Ⅳ－21・22、図版10・57、表Ⅳ－４・17・23）

位　置　Ｐ－16－ａ

規　模　79×80／71×78／41cm

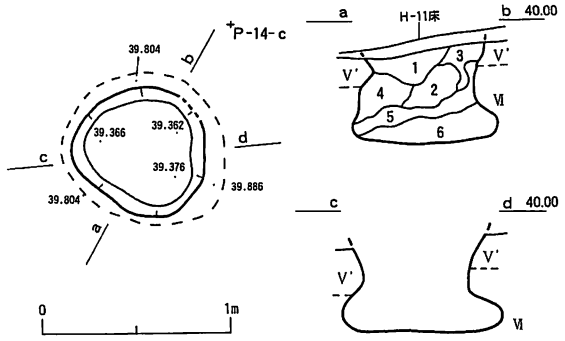
平面形　円形

長軸方向　－

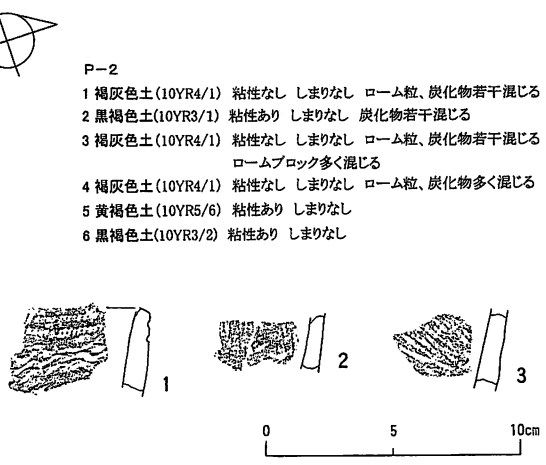
確認・調査　Ｈ－10の床面を精査中に暗褐色土の落ち込みを検出した。平面形が不明瞭であったためＨ－10の中心から南東方向にトレンチを設定してⅥ層まで掘り下げた。その結果フラスコ状を呈する断面を確認した。北東側の壁面を追って半截し、土壙であることがわかった。壁は北東方向で直角に立ち上がる他はやや緩くオーバーハングする。壙底は東西方向で平坦、南北方向で椀状を呈する。

覆　土　５層に分層した。３層には焼土粒子が混じる。３層以下の堆積には黄褐色土、褐灰色土などが混じっている。

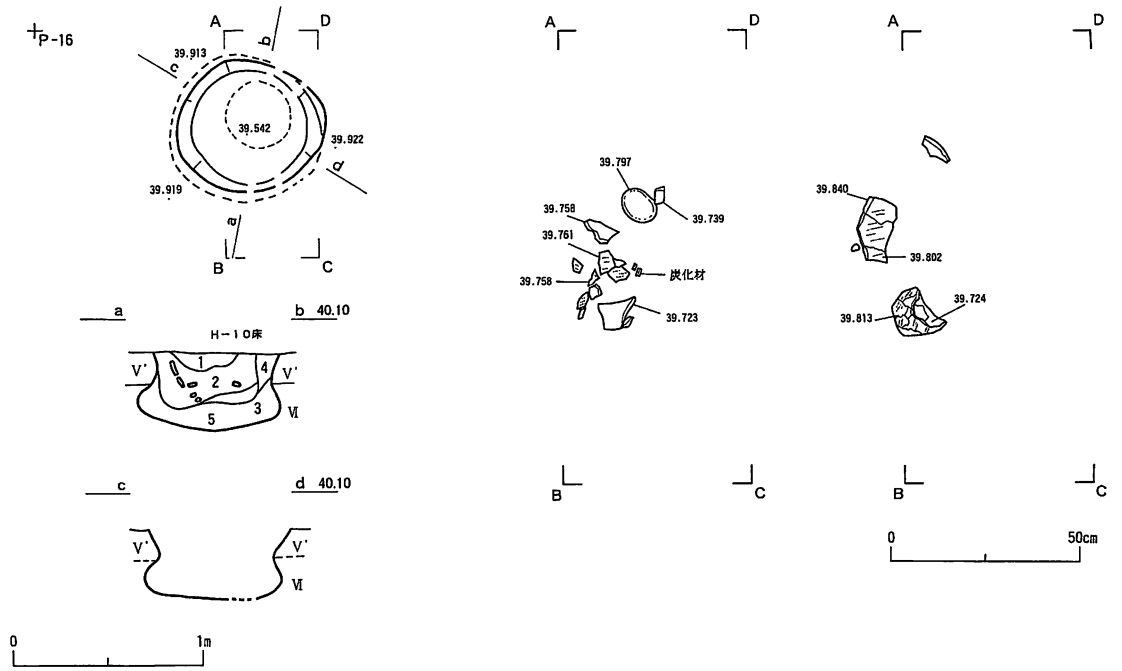
P－2



P－2
1 褐灰色土(10YR4/1) 粘性なし しまりなし ローム粒、炭化物若干混じる
2 黒褐色土(10YR3/1) 粘性あり しまりなし 炭化物若干混じる
3 褐灰色土(10YR4/1) 粘性なし しまりなし ローム粒、炭化物若干混じる
ロームブロック多く混じる
4 褐灰色土(10YR4/1) 粘性なし しまりなし ローム粒、炭化物多く混じる
5 黄褐色土(10YR5/6) 粘性あり しまりなし
6 黒褐色土(10YR3/2) 粘性あり しまりなし



P－7



P－7
1 灰黄褐色土(10YR5/2) 粘性なし しまりなし
2 黒褐色土(7.5YR3/1) 粘性なし しまりなし
3 褐色土(7.5YR4/6) 粘性なし しまりなし 2+焼土、ローム粒を若干含む
4 褐灰色土(10YR5/1) 粘性なし しまりなし にぶい黄橙色土を少量混じる
5 明黄褐色土(10YR7/6) 粘性あり ややしまりあり 褐灰色土(10YR5/1)を少量混じる

図Ⅳ－21　土壙（Ｐ－２・７）と出土遺物

遺　物　覆土２層から底部付近まで復元できる程のややまとまった土器片の他、炭化物、礫が出土している。土器が103点、フレイク29点、石斧１点、たたき石２点、礫・礫片18点である。　（立田）

（土器）Ⅱ群ｂ類土器５点を掲載した。１は低く緩やかな山形突起を有する深鉢形土器の上半部で、口縁部文様帯に８条の細い撚糸を用いた絡条体圧痕文、胴部に撚り戻しと考えられる縄文が施されている。それらの境には指頭による連続した刻み或いは押捺の施された太い粘土紐が貼付されている。胎土中には白色の小岩片が無数に混入している。Ｈ－１の覆土２ｂ層（Ｈ－１－86）、Ｈ－７の覆土２層（Ｈ－７－１）の遺構などからも出土している。２～４は胴部で、地紋はＬＲの斜行縄文が施されている。５はＲＬの自縄自巻的縄文が施される上げ底気味の底部である。　（皆川）

（石器）６、７はたたき石（Ⅶ２）である。不明瞭なたたき痕が礫の周縁に断続的に認められるものである両者とも石材は安山岩、出土した層位は覆土２層である。

時　期　出土した土器から、縄文時代前期後半の時期のものとみられる。　（立田）

Ｐ－８（図Ⅳ－23、図版11・58、表Ⅳ－４・17・23）

位　置　Ｐ－16－ｄ、Ｐ－17－ａ

規　模　71×22／67×17／38cm

平面形　円形

長軸方向　－

確認・調査　Ｈ－10の南東側の立ち上がりを探すために設定したトレンチにおいて、やや不明瞭な焼土が検出されたため上面で記録をとって掘り下げたところ検出したものである。壁は緩やかに立ち上がり、壙底は椀状を呈する。

覆　土　５層に分層した。２層は焼土、４層は火山灰類似の黄褐色土で、肉眼観察ではＫｏ－ｇに類似する。覆土の色調から早期の遺構とは考えがたく、堆積は埋め戻しとみられることから意図的にこの土壙に入れられた可能性がある。

遺　物　覆土から土器36点、スクレイパー２点、Ｕフレイク１点、フレイク３点、礫・礫片１点が出土している。　（立田）

（土器）Ⅱ群ｂ類土器５点を掲載した。これらの胎土中には繊維が混入する。１～４は胴部で、施文は１・２がＲの撚糸文、３が多軸絡条体の回転文、４がＬＲの自縄自巻的縄文と綾絡文である。２の胎土には海綿骨針が混入する。５はＬＬＲの撚り戻しと考えられる地紋が施される底部である。Ｈ－15覆土２ｃ層から出土した破片と接合している（Ｈ－15－34）。　（皆川）

（石器）６、７はスクレイパー（ⅢＢ２ａ）。８はＵフレイク（ＶＢ２）である。６と８は同一母岩から得られた剥片を素材としているとみられる。石材は両者とも頁岩製である。出土した層位は６、８が覆土５層、７が覆土２層である。

時　期　周辺で検出される遺構の時期から、縄文時代前期後半の時期のものとみられる。　（立田）

Ｐ－９　（図Ⅳ－22、図版11・57、表Ⅳ－４・17・23）

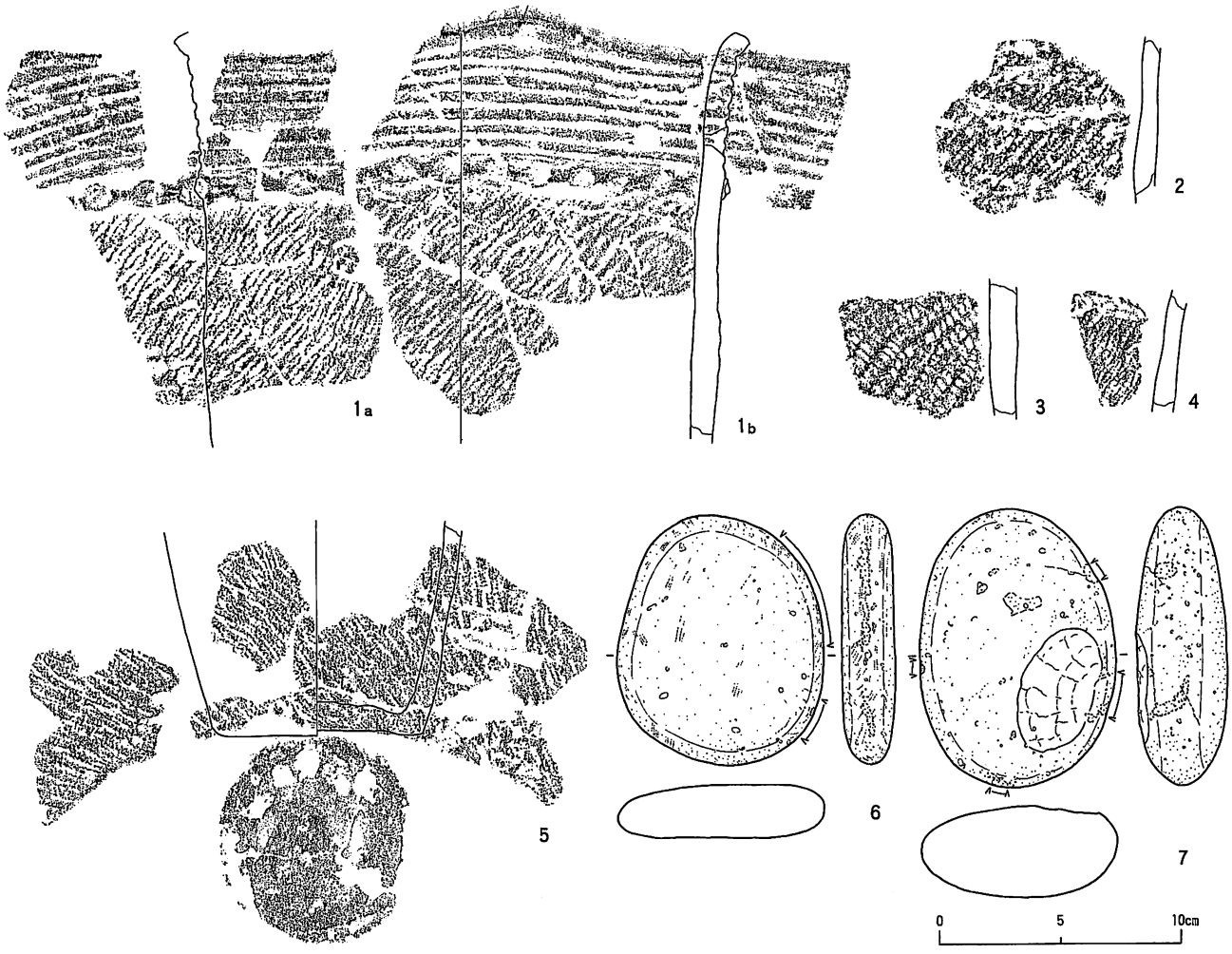
位　置　Ｏ－16－ｃ

規　模　98×70／63×43／23cm

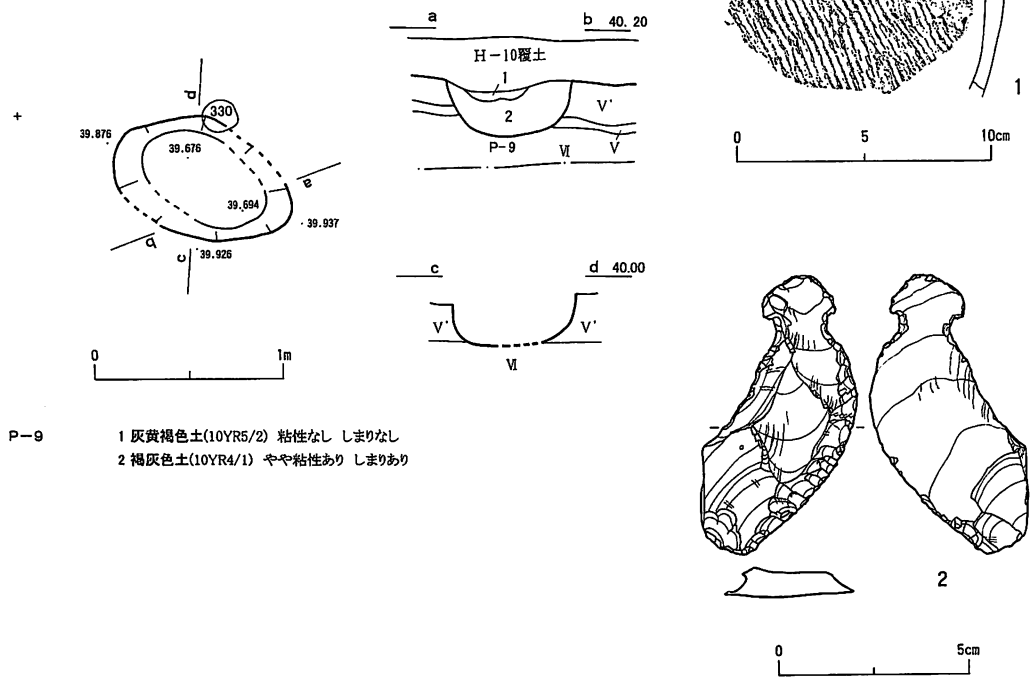
平面形　楕円形

長軸方向　Ｎ－141°－Ｗ

確認・調査　Ｈ－10のほぼ中央で床面を確認するトレンチに断面形が現れていたものである。半截し

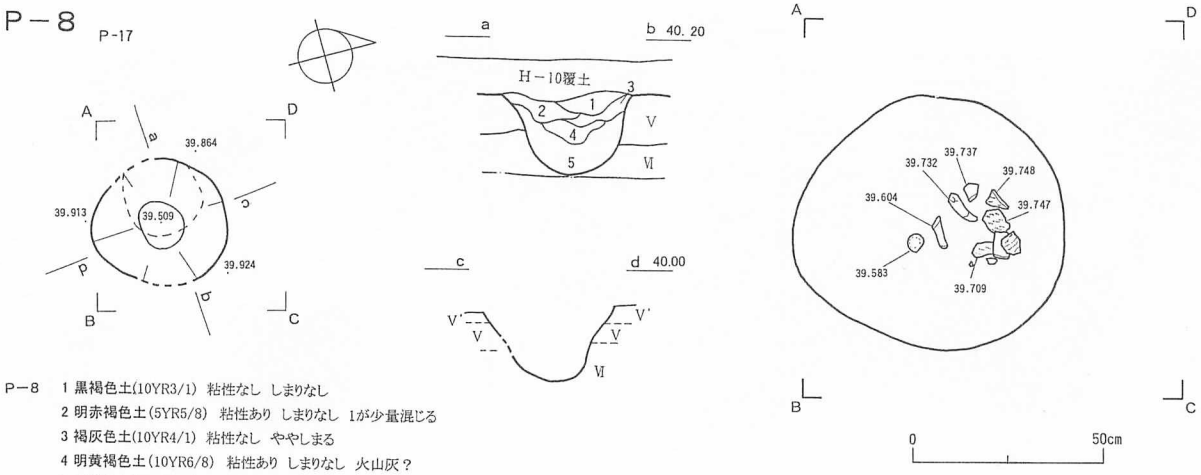


P－9

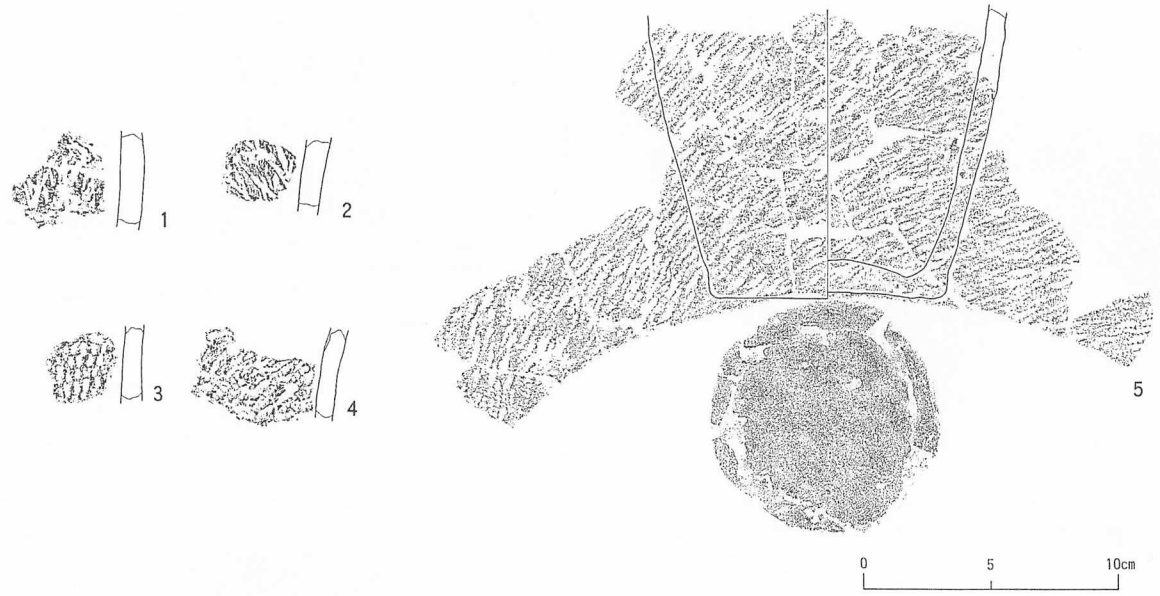


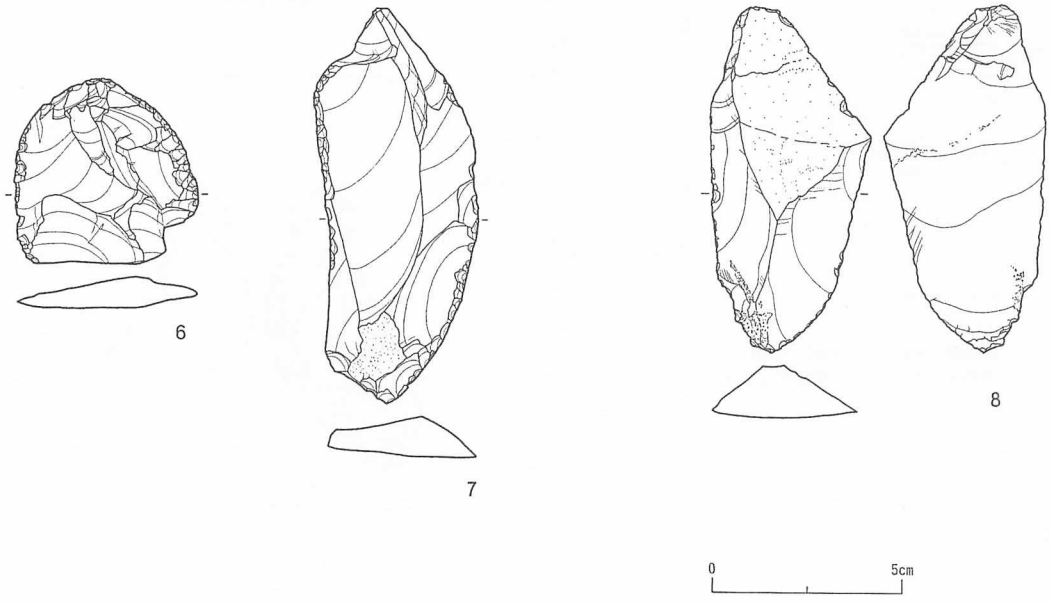
P－9　1 灰黄褐色土(10YR5/2) 粘性なし しまりなし
2 褐灰色土(10YR4/1) やや粘性あり しまりあり

図Ⅳ－22　Ｐ－７出土の遺物・土壙（Ｐ－９）と出土遺物



P－8　1 黒褐色土(10YR3/1)　粘性なし　しまりなし
2 明赤褐色土(5YR5/8)　粘性あり　しまりなし　1が少量混じる
3 褐灰色土(10YR4/1)　粘性なし　ややしまる
4 明黄褐色土(10YR6/8)　粘性あり　しまりなし　火山灰？
5 暗褐色土(10YR3/3)　しまりなし　ロームブロック混入





図Ⅳ－23　土壙（Ｐ－８）と出土遺物

た結果、壙底、壁を確認し土壙であることがわかった。断面形は椀状を呈するが、壙底にはわずかに平坦な部分がある。

覆　土　2層に分層した。褐灰色土を基調とする。

遺　物　覆土から土器15点、つまみ付きナイフ1点、フレイク8点、礫・礫片15点が出土している。

（土器）Ⅱ群b類土器1点を掲載した。この土器の胎土中には繊維が混入する。1はRの撚糸文が密に施されている胴部である。（皆川）

（石器）2は片面周縁加工（ⅢＡＩc）のつまみ付ナイフである。

時　期　周辺で検出されるの遺構の時期から、縄文時代前期後半の時期とみられる。（立田）

Ｐ－10（図Ⅳ－24、図版11・58、表Ⅳ－4・23）

位　置　O－16－d

規　模　78×46／70×48／19cm

平面形　不整楕円形

長軸方向　N－67.5°－W

確認・調査　H－10床面を精査中、中央からやや北寄りの位置で、不明瞭な灰褐色土の落ち込みを検出した。落ち込みの中心には灰褐色土ブロックの混じる焼土があり、上面に焼土を伴う土壙であることが予想された。そのため落ち込みの中心を通るようにトレンチを設定しⅥ層まで掘り下げた。その結果、浅い皿状の断面を確認した。さらに直交するトレンチを追加して南側の壁を確認し、土壙であることがわかった。土壙の壁は緩やかで皿状を呈し、壙底は南北方向でわずかに平坦面がある。

なお、本土壙の覆土1層（上面焼土）と覆土2・3層（埋め戻し土）採取の土壌について残存脂肪酸の分析を依頼した。その結果ヒトの骨部分をよく含むヒト遺体全般の脂肪に類するという結果が得られた（Ⅵ章1参照）。分析結果、埋め戻しとみられる堆積状況から土壙墓の可能性が高い。

覆　土　3層に分層した。1は上面で検出した焼土の層である。2、3層はロームブロックが混じる灰褐色土で、埋め戻したものとみられる。

遺　物　覆土から礫・礫片が2点出土している。

1はスクレイパー（ⅢＢ２ａ）である。背面側の片面調整によって外湾する刃部が作出されるものである。石材は頁岩で、覆土2層から出土している。

時　期　周辺で検出される遺構の時期から、縄文時代前期後半の時期のものとみられる。（立田）

Ｐ－11（図Ⅳ－25、図版11・58、表Ⅳ－4・17）

位　置　O－16－b

規　模　（76）×（41）／62×36／16cm

平面形　不整楕円形

長軸方向　N－151°－W

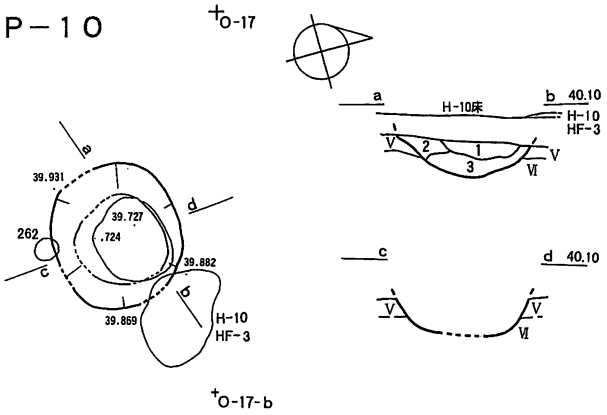
確認・調査　H－10のトレンチで断面を確認したものである。半截して壁、壙底を確認し、土壙であることがわかった。壁はやや急で、壙底は椀状を呈する。

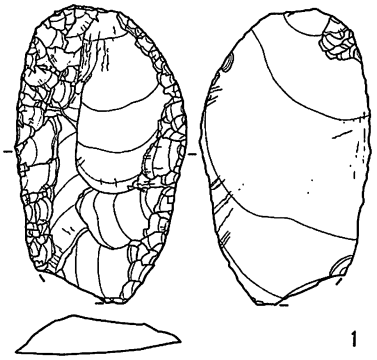
覆　土　黄褐色土のブロックの混じる灰褐色土で構成される。埋め戻しとみられる。

遺　物　覆土上面と中位から円筒下層式土器片がややまとまって出土している。出土点数は土器48点、フレイク10点、礫・礫片が11点である。（立田）

1は口縁部に低く緩やかな4箇所の山形突起を有する小型の土器である。地紋はＬＲの斜行縄文が

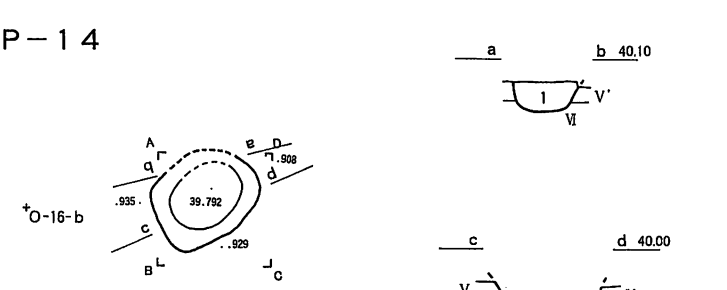
P－10

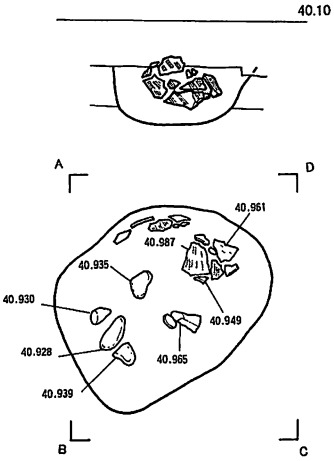




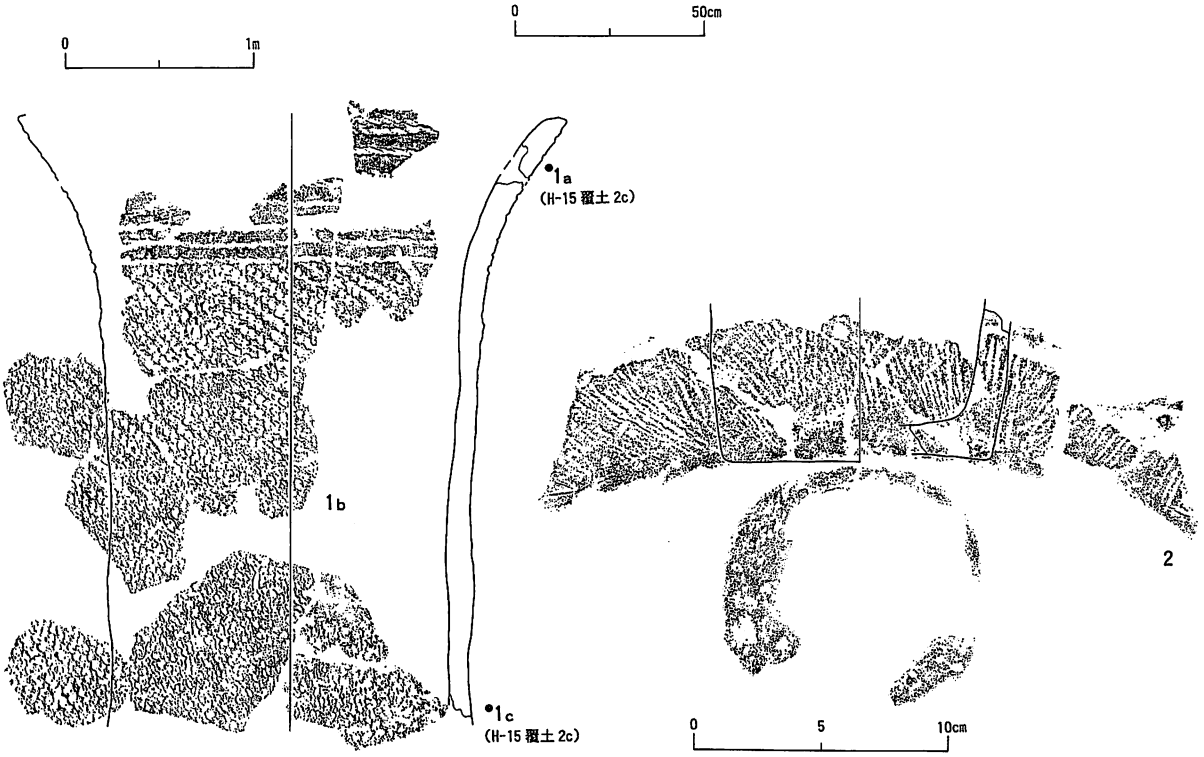
P－10　1 明赤褐色焼土(5YR5/8)　粘性弱 しまりやや弱
黒褐色土(7.5YR3/1)ブロック斑状に混じる
2 黄褐色土(2.5Y5/3)　粘性あり よくしまる
黄灰色土(2.5Y4/1)ブロック少量混じる
3 黄褐色土(2.5Y5/4)　粘性やや強 よくしまる
黒色土粒わずかに混じる

P－14





P－14　1　灰褐色土　(7.5YR4／1)　粘性なし しまりあり 層界やや画然



図Ⅳ－24　土壙（P－10・14）と出土遺物

施され、口縁部ではその上からＬＲの縄線文が4条巡らされている。底部は僅かに上げ底で、胎土には白色の岩片が混入する。この土器の胎土中には繊維が混入する。（皆川）

時　期　周辺で検出される遺構の時期から、縄文時代前期後半の時期のものとみられる。（立田）

Ｐ－14（図Ⅳ－24、図版12・58、表Ⅳ－４・17）

位　置　Ｏ－16－ａ・ｄ

規　模　58×36／（50）×（34）／16cm

平面形　隅丸方形？

長軸方向　Ｎ－170°－Ｗ

確認・調査　Ｈ－10床面を精査中、灰褐色土の落ち込みとそれに伴うややまとまった土器を検出した。落ち込みが明瞭でなかったため、長軸とみられる方向にトレンチを設定してⅥ層まで掘り下げた。その結果、壁面を確認して土壙であることがわかった。壁は急で壙底は平坦である。

覆　土　灰褐色土の単一層である。

遺　物　覆土中から円筒土器下層式土器の底部付近の破片がややまとまって出土している（図Ⅳ－24－２）。出土遺物は土器44点、フレイク３点、砥石２点、礫・礫片３点である。（立田）

Ⅱ群ｂ類土器２点を掲載した。これらの胎土中には繊維が混入する。１ａ～ｃは口縁部が外側に広がる深鉢形土器の上半部である。無文の面にＬＲの縄線文が８条以上巡らされる口縁部は恐らく平縁を呈すると考えられるもので、胴部にはＲＬＲの三段複節の縄文が施されている。１ａ・ｃはＨ－15の覆土２ｃ層から出土したもの（Ｈ－15－14ａ・c)。１ｂには本遺構の破片が１点接合している。同一個体の破片はＨ－３の覆土１層からも出土している。２は太いＲの撚糸文が密に施された器壁の厚い底部である。（皆川）

時　期　覆土出土の土器から、縄文時代前期後半の時期のものとみられる。（立田）

Ｐ－18（図Ⅳ－26、図版12・58、表Ⅳ－４・17）

位　置　Ｑ－13－ｃ・ｄ

規　模　99×60／96×62／40cm

平面形　不整円形

長軸方向　Ｎ－70°－Ｗ

確認・調査　Ｈ－11から南に延ばしたトレンチの壁面で、黒色土と黄褐色土が混じる落ち込みとして検出されたが、当初は自然撹乱と判断していた。調査を進めていくうちにⅣ層上面でこの落ち込みと重なるようにＳ－４が検出された。このためＳ－４の調査終了後、その中央部から南にトレンチを延長したところ、壁、壙底を確認でき、土壙であることがわかった。壁は急で壙底はやや平坦である。また重複してＰ－22、25、29があり、25との関係が不明である他は本遺構が新しい。

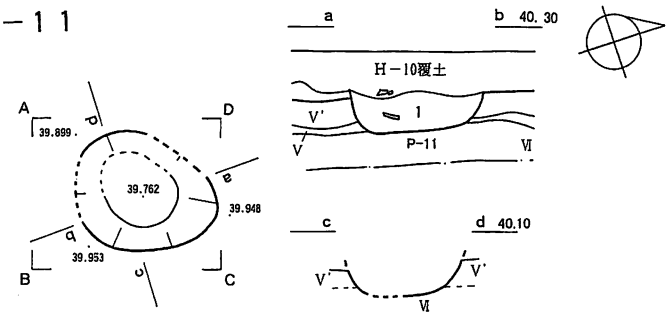
覆　土　７層に分層した。

遺　物　覆土から土器22点、スクレイパー１点、フレイク24点、たたき石１点、礫・礫片16点が出土している。

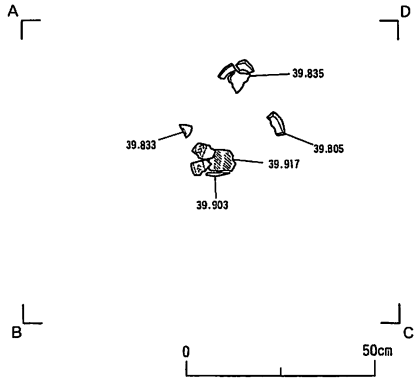
（土器）土器はⅡ群ｂ類土器３点を掲載した。これらの胎土中には繊維が混入する。１・２は胴部で、地紋は１がＬＲの撚り戻し、２はＬＲの斜行縄文である。２はＰ－42－16と同一個体の可能性がある。３はＬＬＲの撚り戻しと考えられる地紋が施される底部である。（皆川）

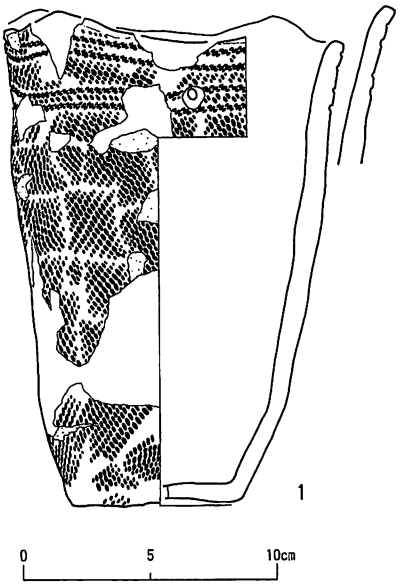
（石器）４はスクレイパー（ⅢＢ２ａ）である。２分の１以上を欠損する。石材は頁岩、出土層位は

P－11

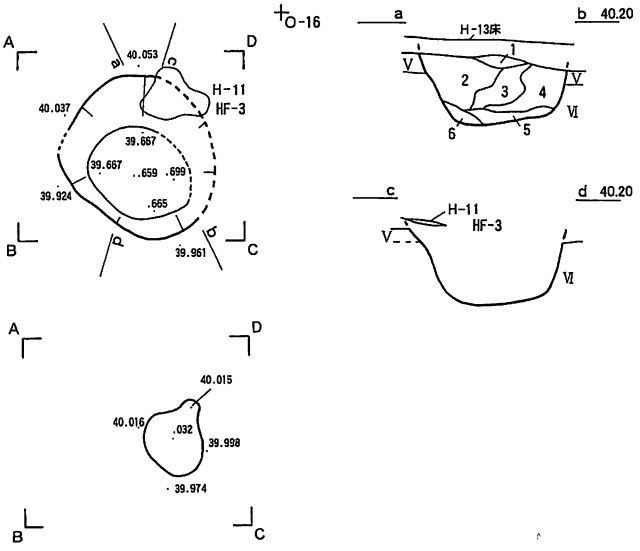


P－11　　1 褐灰色土(10YR4/1)　灰黄褐色土(10YR6/2)が若干混じる



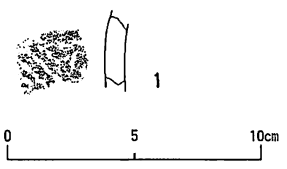


P－24

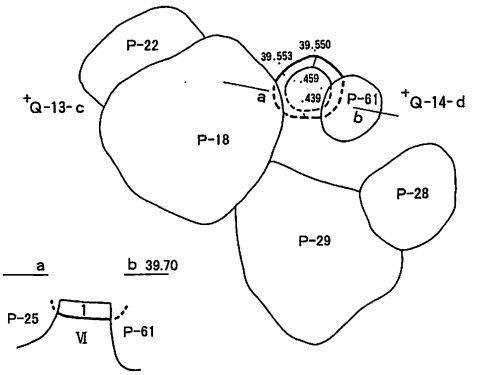


P－24

1 橙色土(5YR6/6)　粘性あり　しまりあり　焼土層、暗灰褐色色土が斑状に混じる
　中心付近が最も濃いが層中に1mm程の焼土粒、黄褐色土粒が混じる
2 褐灰色土(10YR5/1)　粘性あり　しまりあり　2mm以下のローム粒を混入する
3 褐灰色土(10YR5/1)　粘性あり　しまりあり　やや大きめのロームブロックが混じる層　暗褐色土も若干混じる
4 にぶい黄橙色土(10YR7/4)　粘性あり　しまりあり　やや淡いローム
5 褐灰色土(10YR5/1)　ややしまりなし　ローム粒、赤色顔料を若干含む

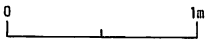


P－25



P－25

1 褐色土(10YR4/4)　黒色土、大ブロック状に含む　明赤褐色焼土粒わずかに混じる



図Ⅳ－25　土壙（P－11・24・25）と出土遺物

覆土６層である。
時　期　付近から検出される遺構の時期から、縄文時代前期後半の時期とみられる。　（立田）

Ｐ－22（図Ⅳ－27、図版12、表Ⅳ－４）
位　置　Ｑ－13－ｃ・ｄ
規　模　70×50／（32）×（19）／29cm
平面形　楕円形？
長軸方向　Ｎ－2.5°－Ｗ
確認・調査　Ｐ－18の覆土を調査中、西側に黒褐色の落ち込みを確認した。落ち込みの中心付近とみられる場所にトレンチを設定して掘り下げたところ壁を確認できた。Ｐ－18とは重複関係にある。不明瞭だが、本遺構が古いとみられる。壁は急激に立ち上がる。
覆　土　灰褐色土の単一層である。
遺　物　フレイク２点、礫・礫片１点が出土している。
時　期　周辺から検出される遺構の時期から、縄文時代前期後半の時期のものとみられる。（立田）

Ｐ－24（図Ⅳ－25、図版13・58、表Ⅳ－４・17）
位　置　Ｏ－15－ｄ
規　模　88×49／79×47／36cm
平面形　楕円形？
長軸方向　Ｎ－89°－Ｗ
確認・調査　Ｈ－13のＨＦ－３の調査終了後、床面を５cmほど掘り下げたところ、灰褐色土の不明瞭な落ち込みを検出した。落ち込みは中央に焼土を伴っていたため、土壙の存在を想定して半截した。その結果、壁と壙底を確認して土壙であることがわかった。壁は急で壙底は少し凸凹がある。
覆　土　６層に分層した。
遺　物　覆土から土器２点、フレイク３点、礫・礫片が１点出土している。　（立田）
Ⅱ群ｂ類土器１点を掲載した。この土器の胎土中には繊維が混入する。１はＲの撚糸文が施された口縁近くの胴部である。　（皆川）
時　期　周辺から検出される遺構の時期から、縄文時代前期後半の時期とみられる。　（立田）

Ｐ－25（図Ⅳ－25、表Ⅳ－４）
位　置　Ｑ－13－ｃ・ｄ
規　模　－×－／－×－／９cm
平面形　不明
長軸方向　－
確認・調査　Ｐ－18の北側の壁面にその断面が現れていた。長軸方向にトレンチを設定してⅥ層まで掘り下げたところ、落ち込みは２つの土壙で、Ｐ－18と重複する浅い土壙（Ｐ－25）と円筒形のやや深い土壙で（Ｐ－61）あることがわかった。Ｐ－61より古く、Ｐ－18との先後関係は不明である。確認できる部分の壁は緩やかで、壙底は平坦である。
覆　土　灰褐色土の単一層である。自然堆積とみられる。
遺　物　出土していない。

時　期　周辺から検出される遺構の時期から、縄文時代前期後半の時期とみられる。　（立田）

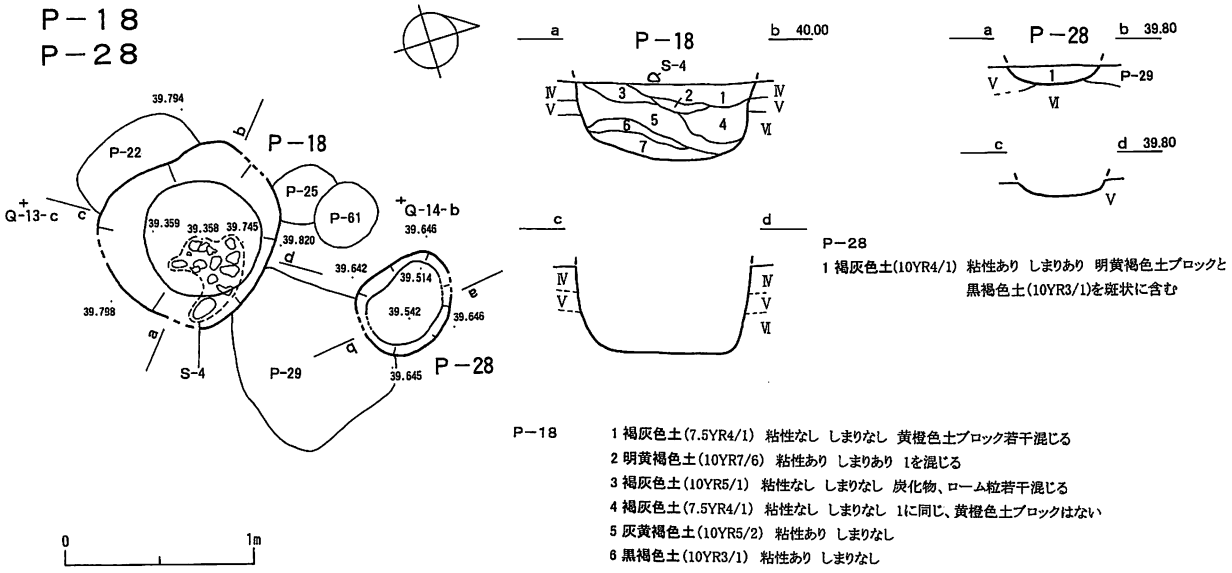
Ｐ－27（図Ⅳ－28、図版13・59、表Ⅳ－４・23）
位　置　Ｎ－16－ｂ、Ｏ－16－ａ
規　模　89×74／38×25／23cm
平面形　楕円形？
長軸方向　Ｎ－65°－Ｗ
確認・調査　Ｈ－10の西側の風倒木による撹乱部分に設けたトレンチで黒褐色土の落ち込みとして確認されたが、当初は撹乱の影響であると考えていた。トレンチの壁面を精査すると不明瞭ながら立ち上がりを確認できたため、新たにトレンチを設定して調査を進めた。この結果明瞭な壁を確認し、土壙であることがわかった。土壙は南西半分を風倒木に、壙底の２ヵ所には木根により撹乱されている。
覆　土　３層に分層した。ロームブロックの混じる黒褐色土を基調とする。
遺　物　覆土から土器３点、たたき石１点が出土している。１はたたき石（Ⅶ２）である。石材は安山岩、出土層位は覆土１層である。
時　期　周辺から検出される遺構から、縄文時代前期後半の時期のものとみられる。　（立田）

Ｐ－28（図Ⅳ－26、図版13・59、表Ⅳ－４・17）
位　置　Ｑ－13－ｃ、Ｑ－14－ｂ
規　模　58×46／50×36／９cm
平面形　不整円形
長軸方向　Ｎ－55°－Ｗ
確認・調査　Ⅴ層上面を精査中に黒褐色土の落ち込みとそれに伴う土器片を検出した。重複関係を想定して南北方向にトレンチを設けⅥ層まで掘り下げたところ、浅い皿状の２つの土壙（Ｐ－28・29）であることがわかった。壙底、壁は緩やかな椀状を呈する。
覆　土　灰褐色土の単一層である。
遺　物　土器６点、フレイク１点、礫・礫片１点が出土している。　（立田）

Ⅱ群ｂ類土器３点を掲載した。これらの胎土中には繊維が混入する。１ａ～ｄは太いＲの撚糸文が全面に施された平縁で器壁の厚い土器である。包含層（Ｋ－18区、Ｌ－18区）出土のもので、本遺構から未接合の破片が１点出土している。２・３は胴部で、地紋は２がＬＲの斜行縄文、３がＲの撚糸である。　（皆川）

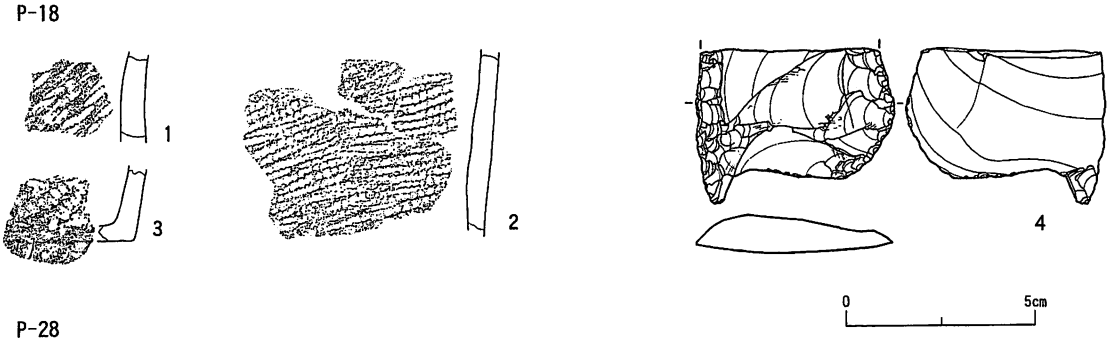
時　期　周辺から検出される遺構の時期から、縄文時代前期後半の時期とみられる。　（立田）

Ｐ－29（図Ⅳ－27、図版13・59、表Ⅳ－４・17）
位　置　Ｑ－13－ｃ
規　模　98×77／（83）×（73）／18cm
平面形　不整形
長軸方向　Ｎ－85°－Ｗ
確認・調査　Ⅴ層上面を精査中に検出した。確認の経緯はＰ－28で触れている。Ｐ－28、Ｐ－18とは重複関係にあるが、本遺構が古い。Ｆ－11は本遺構が埋まった後壙口部で形成された可能性が高い。壁は緩やかで壙底は段状で中心付近が浅くくぼんでいる。



P－28
1 褐灰色土(10YR4/1) 粘性あり しまりあり 明黄褐色土ブロックと黒褐色土(10YR3/1)を斑状に含む

P－18
1 褐灰色土(7.5YR4/1) 粘性なし しまりなし 黄橙色土ブロック若干混じる
2 明黄褐色土(10YR7/6) 粘性あり しまりあり 1を混じる
3 褐灰色土(10YR5/1) 粘性なし しまりなし 炭化物、ローム粒若干混じる
4 褐灰色土(7.5YR4/1) 粘性なし しまりなし 1に同じ、黄橙色土ブロックはない
5 灰黄褐色土(10YR5/2) 粘性あり しまりなし
6 黒褐色土(10YR3/1) 粘性あり しまりなし





図Ⅳ－26　土壙（P－18・28）と出土遺物

覆　土　２層に分層した。

遺　物　検出面で土器片、礫、石製品がややまとまって出土している。覆土から土器25点、スクレイパー１点、フレイク２点、たたき石１点、石製品が１点出土している。（立田）

（土器）Ⅱ群ｂ類土器４点を掲載した。これらの胎土中には繊維が混入する。１はＲの撚糸文が施される口縁部である。２は指頭状の刻みが施される幅広の粘土紐が貼付される口縁部である。それより上位の器面にはＬＲの斜行縄文、下位にはＲの撚糸文が密に施文されている。３はＲＬの斜行縄文が施される胴部で、部分的に地紋の上に貝殻条痕のような痕跡が認められる。４は器面にＲＬの斜行縄文が施された底部である。（皆川）

（石器）５はスクレイパー（ⅢＢ２ｂ）、石材は頁岩である。６はたたき石（Ⅶ２）である。扁平な礫の側縁に弱いたたき痕が断続的に認められる。７は石製品である。粘板岩状の節理の多い礫を打ち欠きと研磨によって整形されている。石材は６が安山岩、７は片岩である。出土層位はすべて覆土１層。

時　期　周辺から検出される遺構の時期、また検出面で出土している土器から縄文時代前期後半の時期のものとみられる。（立田）

Ｐ－30（図Ⅳ－28、図版14、表Ⅳ－４）

位　置　Ｑ－14－ａ

規　模　51×30／43×22／17cm

平面形　楕円形

長軸方向　Ｎ－66°－Ｗ

確認・調査　Ｈ－11の床面を10cm掘り下げた段階で、灰褐色土の落ち込みを検出した。短軸方向にトレンチを設定してⅥ層まで掘り下げた結果、壁と壙底を確認して土壙であることがわかった。Ｈ－11のＨＦ－５と位置的に一部重なる部分があるため、この焼土は本土壙が埋没した後壙口付近で形成されたものとみられる。壁は急で壙底は平坦である。

覆　土　３層に分層した。

遺　物　出土していない。

時　期　周辺から検出される遺構の時期から、縄文時代前期後半の時期とみられる。（立田）

Ｐ－31（図Ⅳ－30、図版14、表Ⅳ－４）

位　置　Ｐ－16－ａ・ｄ

規　模　86×63／73×53／17cm

平面形　楕円形

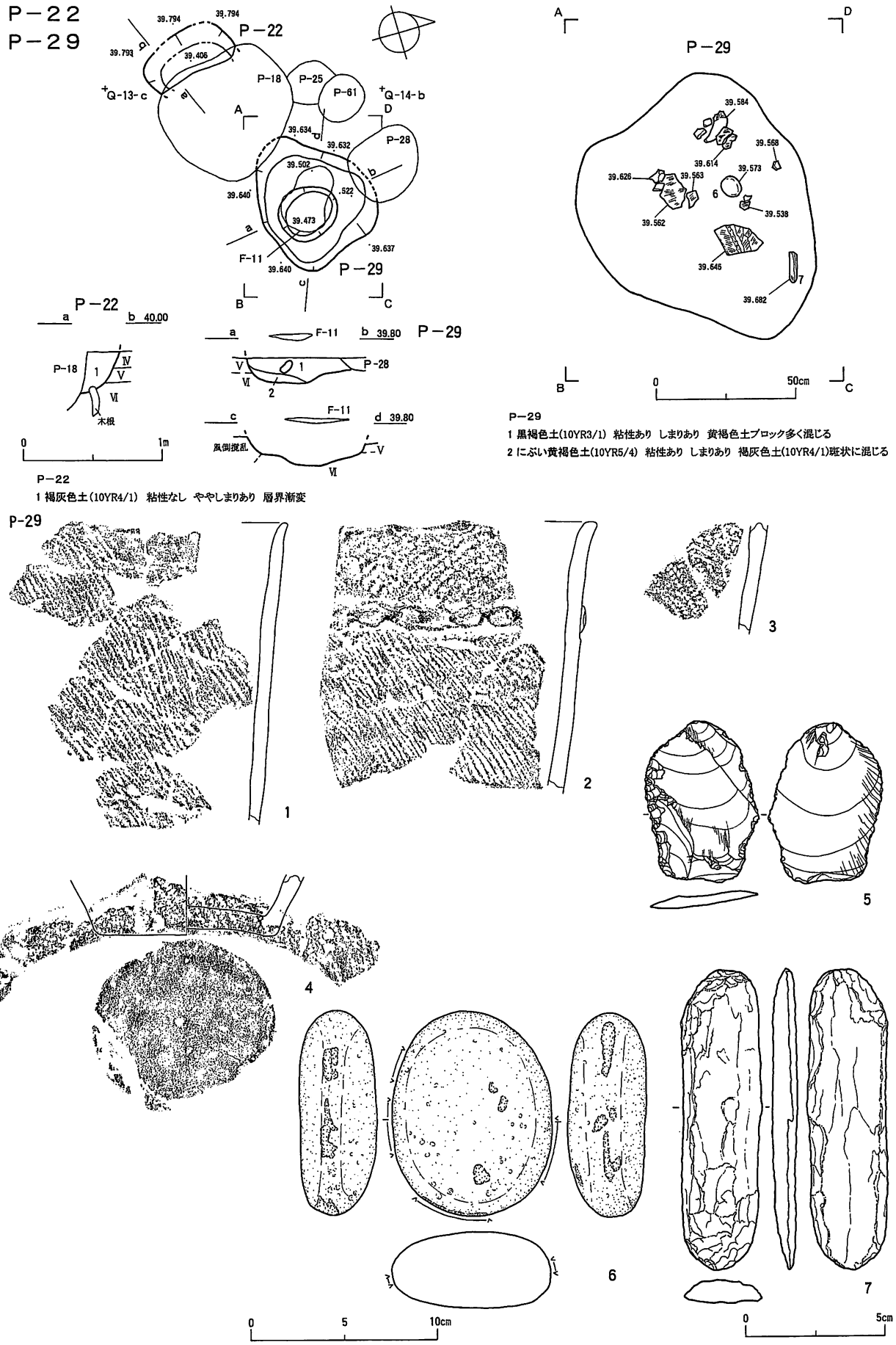
長軸方向　Ｎ－58°－Ｗ

確認・調査　Ｈ－10の床面10cm掘り下げた段階で、灰褐色土の不明瞭な落ち込みを確認した。長軸方向にトレンチを設定してさらに５cm掘り下げたところ、明瞭な落ち込みを確認できた。西側を半截して壁・壙底を確認し、土壙であることがわかった。Ｐ－54と重複関係にあり本遺構が新しい。

覆　土　４層に分層した。ローム粒子の混じる灰褐色土を基調とする。

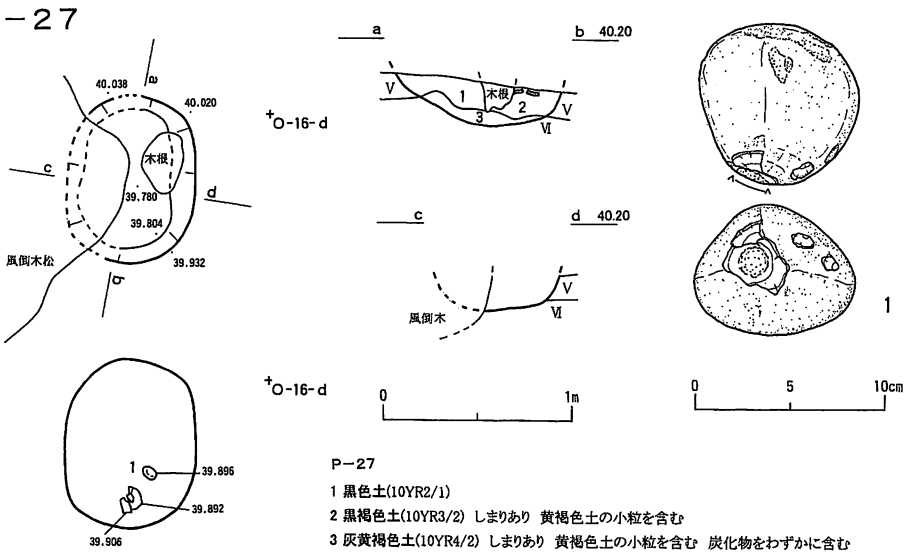
遺　物　土器３点、フレイク８点、礫・礫片５点が出土している。

時　期　周辺から検出される遺構の時期から縄文時代前期後半の時期とみられる。（立田）



図Ⅳ－27　土壙（Ｐ－22・29）と出土遺物

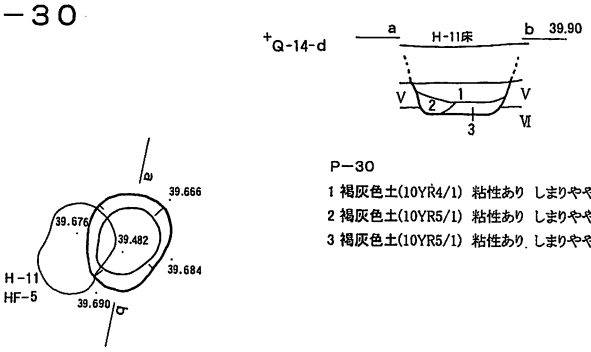
P－27



P－27

1 黒色土(10YR2/1)
2 黒褐色土(10YR3/2) しまりあり 黄褐色土の小粒を含む
3 灰黄褐色土(10YR4/2) しまりあり 黄褐色土の小粒を含む 炭化物をわずかに含む
4 灰黄褐色土(10YR4/2) 黄褐色土混じり

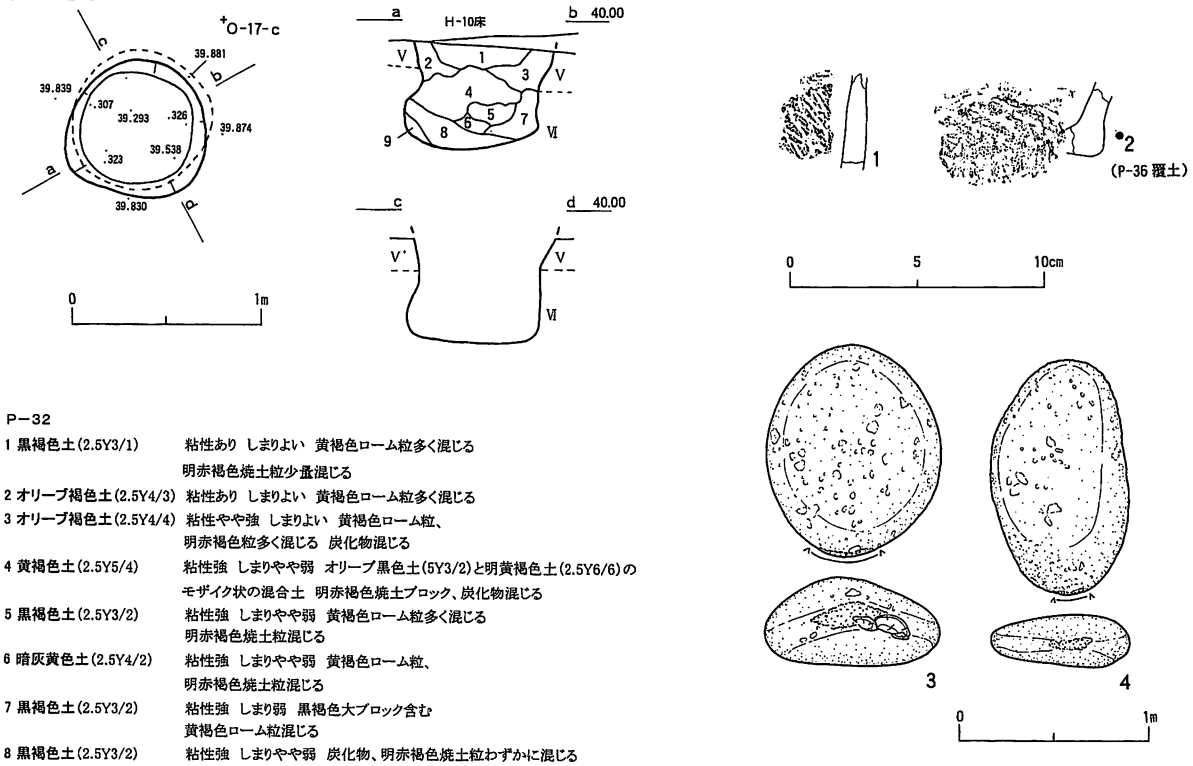
P－30



P－30

1 褐灰色土(10YR4/1) 粘性あり しまりややあり 明黄褐色土(10YR6/6)ブロックを少量含む
2 褐灰色土(10YR5/1) 粘性あり しまりややあり 明黄褐色土(10YR6/6)ブロックやや多く混じる
3 褐灰色土(10YR5/1) 粘性あり しまりややあり 明黄褐色土(10YR6/6)ブロックやや少なく混じる

P－32



P－32

1 黒褐色土(2.5Y3/1)　粘性あり しまりよい 黄褐色ローム粒多く混じる
明赤褐色焼土粒少量混じる
2 オリーブ褐色土(2.5Y4/3) 粘性あり しまりよい 黄褐色ローム粒多く混じる
3 オリーブ褐色土(2.5Y4/4) 粘性やや強 しまりよい 黄褐色ローム粒、
明赤褐色粒多く混じる 炭化物混じる
4 黄褐色土(2.5Y5/4)　粘性強 しまりやや弱 オリーブ黒色土(5Y3/2)と明黄褐色土(2.5Y6/6)の
モザイク状の混合土 明赤褐色焼土ブロック、炭化物混じる
5 黒褐色土(2.5Y3/2)　粘性強 しまりやや弱 黄褐色ローム粒多く混じる
明赤褐色焼土粒混じる
6 暗灰黄色土(2.5Y4/2)　粘性強 しまりやや弱 黄褐色ローム粒、
明赤褐色焼土粒混じる
7 黒褐色土(2.5Y3/2)　粘性強 しまり弱 黒褐色大ブロック含む
黄褐色ローム粒混じる
8 黒褐色土(2.5Y3/2)　粘性強 しまりやや弱 炭化物、明赤褐色焼土粒わずかに混じる
9 黒褐色土(2.5Y3/1)　粘性強 しまり弱 黄褐色ロームブロック斑状に少量混じる

図Ⅳ－28　土壙（P－27・30・32）と出土遺物

Ｐ－32（図Ⅳ－28、図版14・58、表Ⅳ－４・17）
位　置　Ｏ－17－ｂ
規　模　76×76／75×73／56cm
平面形　円形
長軸方向　－
確認・調査　Ｈ－10の床面を５cm掘り下げた段階で、赤色顔料、炭化物が混じる灰褐色土の落ち込みを検出した。落ち込みが不明瞭であったため、長軸方向にトレンチを設定してさらに５cmほど掘り下げた。その結果、明瞭な平面形を確認できた。半截したところ壁・壙底を確認し、土壙であることがわかった。土壙の形状は、壙口より壙底が大きくなるいわゆるフラスコピットである。なお、本土壙から採取した土壌について残存脂肪酸の分析を依頼した。その結果ヒトの骨部分をよく含むヒト遺体全般の脂肪に類するという結果が得られた（Ⅵ章１参照）。分析結果、埋め戻しとみられる堆積状況から土壙墓の可能性が高い。
覆　土　黄褐色土を基調とし、黒褐色土、灰褐色土を混じる。覆土４層は黄褐色ロームを基調とし赤色顔料、炭化物が混じる。埋め戻しによる堆積とみられる。
遺　物　土器11点、フレイク19点、たたき石２点、礫・礫片２点が出土している。　（立田）
（土器）Ⅱ群ｂ類土器２点を掲載した。これらの胎土中には繊維が混入する。１は網目状の撚糸文が施された胴部、２は器面にＲＬＲの三段複節が施された底部である。２は同一の土器片がＰ－36からも出土しており、Ｐ－32出土のものが掲載に耐えなかったため、Ｐ－36のもので代用している。
（皆川）
（石器）３、４はたたき石（Ⅶ１）である。扁平な礫の周縁にたたき痕があるものである。たたき痕は弱く、不明瞭である。また礫の端部周辺には黒色の付着物がある。４は扁平礫の端部にたたき痕のあるもので、全体が被熱しており赤変している。石材は両者とも安山岩である。出土した層位は３が覆土１層、４が覆土２層である。
時　期　周辺から検出される遺構の時期から、縄文時代前期後半の時期とみられる。　（立田）

Ｐ－34（図４－30、図版14、表Ⅳ－４）
位　置　Ｏ－17－ａ・ｂ・ｃ
規　模　（70）×（55）／61×41／21cm
平面形　不整楕円形
長軸方向　Ｎ－112.5°－Ｗ
確認・調査　Ｈ－10のトレンチに壁の立ち上がりを確認した。直交するトレンチを設定してⅥ層まで掘り下げたところ、壁・壙底を確認でき、土壙であることがわかった。
覆　土　２層に分層した。灰褐色土のレンズ状の堆積である。
遺　物　出土していない。
時　期　周辺から検出される遺構の時期から、縄文時代前期後半の時期とみられる。　（立田）

Ｐ－35（図Ⅳ－29、図版14・60、表Ⅳ－４・17）
位　置　Ｐ－16－ｃ・ｄ
規　模　49×23／34×21／38cm
平面形　円形

長軸方向　－

確認・調査　Ｈ－10の調査終了後、床面を掘り下げていたところ灰褐色土の混じる不明瞭な焼土（Ｆ－20）を検出した。焼土の縁を囲むように土器片が見えており、遺構の存在が想定されたため大きくトレンチを設定して半截した。その結果、円筒形を呈し、壙口部で広がる土壙であることがわかった。土壙中には正立状態で底部～胴部中位付近までの土器が割れた形で出土した。壁は緩やかで壙口は広がる。なお、本土壙から採取した土壌について残存脂肪酸の分析を依頼した。その結果ヒトの骨部分をよく含むヒト遺体全般の脂肪に類するという結果が得られた（Ⅵ章１参照）。

覆　土　７層に分層した。土器内部の覆土は炭化物の混じる埋め戻しとみられる土である。１層は上面で検出した焼土（Ｆ－20）である。位置的に重なることから本遺構を埋め戻した後、その場で形成されたものと考えられる。

遺　物　土器256点、フレイク２点が出土している。（立田）

１は全面にＲＬＲの三段複節が施された復元土器である。口縁部のやや下の器面には指頭状の施文具で刻みを入れた厚みの殆ど無い粘土紐が貼付され、その直下には綾絡文が施文される。Ｍ－１出土の破片が１点接合している。この土器の胎土中には繊維が混入する。（皆川）

時　期　覆土から出土している土器から、縄文時代前期後半円筒土器下層式の時期である。（立田）

Ｐ－45（図Ⅳ－30、図版14、表Ⅳ－４）

位　置　Ｏ－17－ｃ

規　模　96×69／（73）×（51）／21cm

平面形　楕円形

長軸方向　Ｎ－94.5°－Ｗ

確認・調査　Ⅴ層上面を精査中に不整形の黒褐色土の落ち込みを検出した。遺構の重複を想定してトレンチを設定し、Ⅵ層まで掘り下げた。その結果土壙２基（Ｐ－45、Ｐ－67）が重複関係にあることがわかった。本遺構が古い。壁は急で壙底は平坦である。

覆　土　２層に分層した。レンズ状の自然堆積である。

遺　物　出土していない。

時　期　周辺から検出される遺構の時期から、縄文時代前期後半の時期とみられる。（立田）

Ｐ－54（図Ⅳ－30、表Ⅳ－４）

位　置　Ｐ－16－ｄ

規　模　43×31／21×12／12cm

平面形　不明

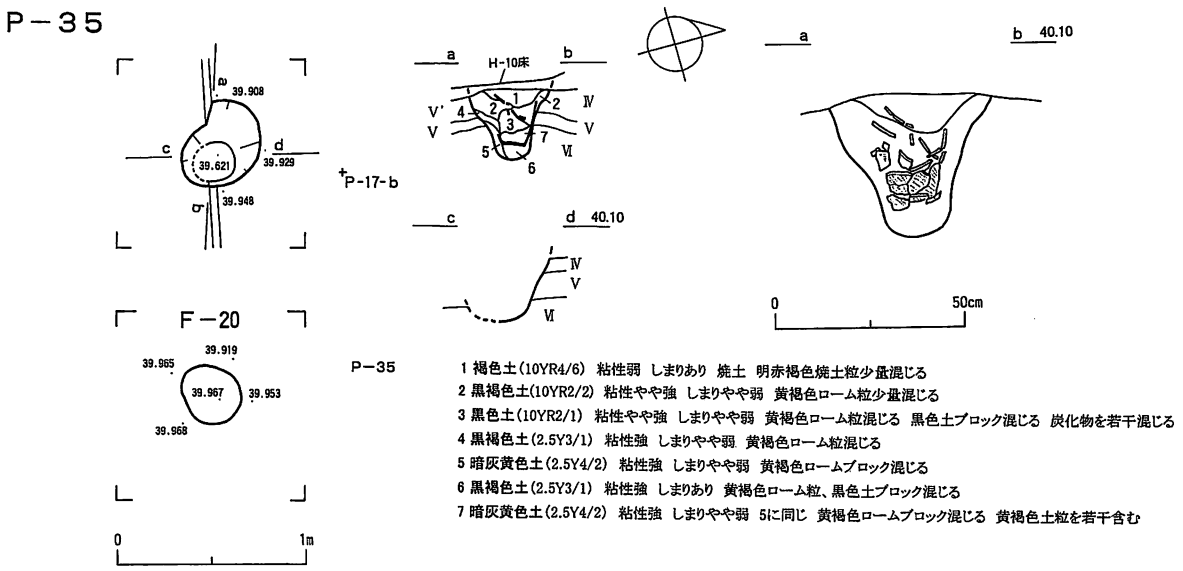
長軸方向　Ｎ－34.5°－Ｗ

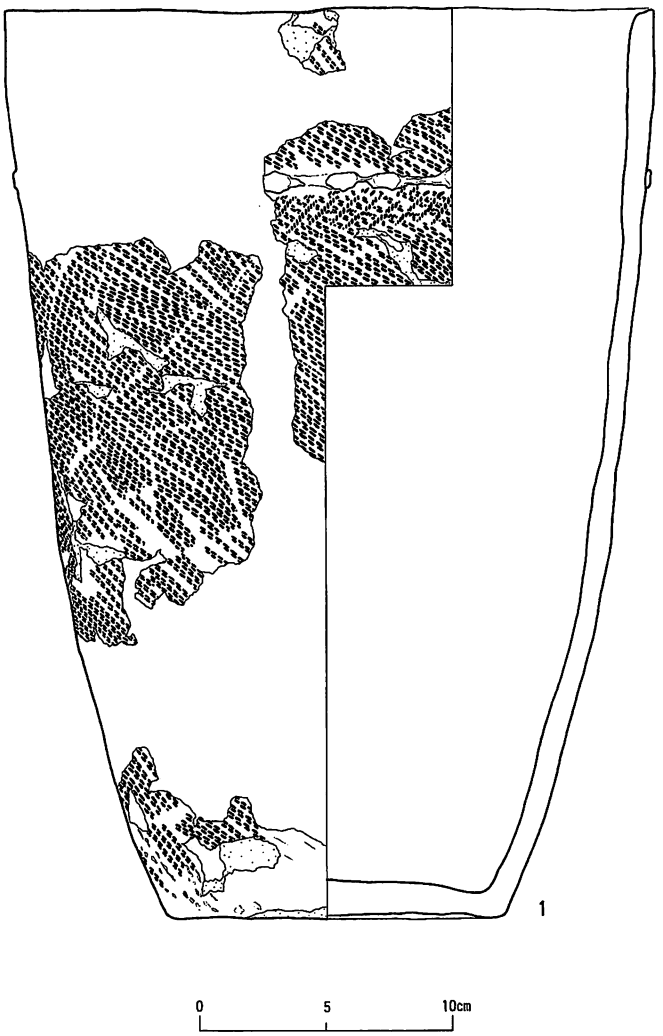
確認・調査　Ｐ－31の覆土を掘り下げていたところ、東側に別な落ち込みを確認した。トレンチを設定してⅥ層まで掘り下げると、急に立ち上がる壁が確認できた。断面の観察からは不明瞭ではあるが、本遺構が古いとみられる。

覆　土　黒褐色土の単一層である。

遺　物　出土していない。

時　期　周辺から検出される遺構の時期から、縄文時代前期後半の時期とみられる。（立田）





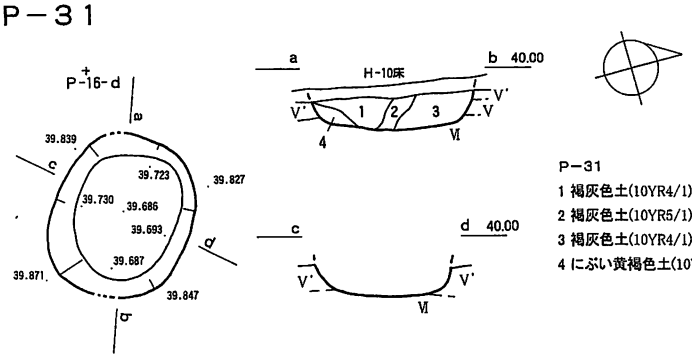
図Ⅳ－29　土壙（Ｐ－35）と出土遺物

Ｐ－59（図Ⅳ－30、図版15・59、表Ⅳ－４・17）
位　置　Ｏ－16－ｃ、Ｐ－16－ｄ、Ｏ－17－ｂ、Ｐ－17－ａ
規　模　106×86／（77）×（55）／15cm
平面形　不整楕円形
長軸方向　Ｎ－134°－Ｗ
確認・調査　Ｈ－10の床面を10cm掘り下げた段階で、黄褐色土ブロックを混じる灰褐色土の不明瞭な落ち込みを確認した。長軸と思われる方向にトレンチを設定してⅥ層まで掘り下げた。壁の立ち上がりが不明瞭であったためトレンチを追加してⅥ層まで掘り下げた。その結果浅い皿状の土壙を確認した。Ｈ－10のＨＦ－１と位置的に重なる。本遺構の覆土堆積後、ＨＦ－１が形成されたものとみられる。
覆　土　２層に分層した。黒色土の混じる黄褐色土を基調とする。埋め戻しの可能性がある。
遺　物　土器３点、フレイク８点、礫・礫片５点出土している。（立田）
Ⅱ群ｂ類土器２点を掲載した。これらの土器の胎土中には繊維が混入する。１は角軸を使用した多軸絡条体を施文した胴部、２はＲＬＲの撚り戻しが施された口縁部である。（皆川）
時　期　周辺から検出される遺構の時期から、縄文時代前期後半の時期とみられる。（立田）

Ｐ－61（図Ⅳ－30、図版15、表Ⅳ－４）
位　置　Ｑ－13－ｃ
規　模　35×23／31×21／36cm
平面形　円形
長軸方向　Ｎ－64°－Ｗ
確認・調査　Ｐ－25と重複関係にあり、本遺構が新しい。確認の経緯に関してはＰ－25で触れている。土壙は円筒形を呈し、壁は垂直に立ち上がり、壙底はほぼ平坦である。なお、本土壙から採取した土壌について残存脂肪酸の分析を依頼した。その結果ヒト遺体を直接埋葬したことに関わる遺跡資料の脂肪やヒトの脂肪に類するとの結果が得られた（Ⅵ章１参照）。分析結果、埋め戻しとみられる堆積状況から土壙墓の可能性もある。
覆　土　５層に分層した。灰褐色土にロームブロックが混じる堆積を基調とする。壙底付近に堆積する５層は炭化物が混じる黒褐色土である。埋め戻しとみられる。
遺　物　出土していない。
時　期　周辺から検出される遺構の時期から縄文時代前期後半の時期とみられる。（立田）

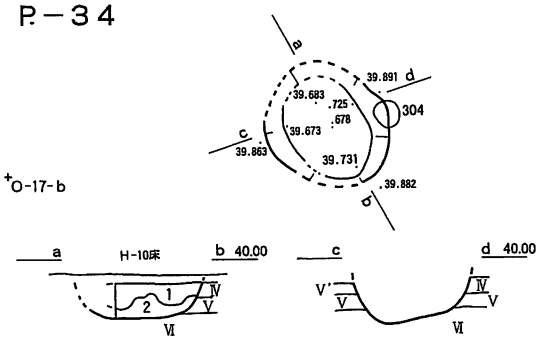
Ｐ－62（図Ⅳ－31、表Ⅳ－４）
位　置　Ｐ－14－ｄ
規　模　37×24／35×16／23cm
平面形　不整円形
長軸方向　Ｎ－29.5°－Ｗ
確認・調査　Ⅴ層上面を精査中に灰褐色土の落ち込みを検出した。その中央部からは壙口をふさいでいるかのようにソフトボール大の礫が出土している。南側にトレンチを設定してⅥ層まで掘り下げた。その結果壁、床を確認でき、土壙であることがわかった。土壙の形状は先端の丸い柱穴状を呈する。

P－31



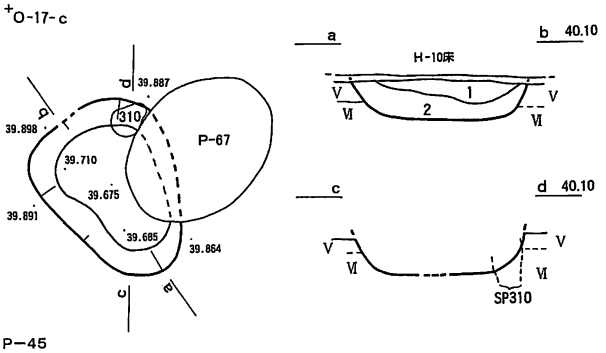
P－31
1 褐灰色土(10YR4/1) 粘性なし しまりあり ローム粒子若干含む
2 褐灰色土(10YR5/1) 粘性あり しまりなし ロームブロック状に混入
3 褐灰色土(10YR4/1) 粘性なし しまりあり 1に同じ ローム粒子若干含む ロームブロック、遺物混じる
4 にぶい黄褐色土(10YR5/4) 粘性あり しまりなし

P－34



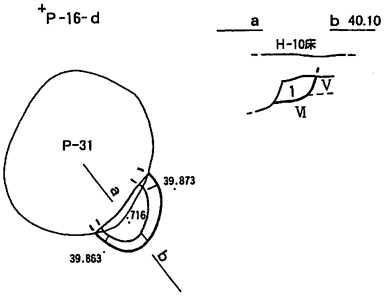
P－34
1 褐灰色土(10YR4/1) 粘性あり しまりなし にぶい黄橙色土(10YR6/4)を斑状に含む
2 灰黄褐色土(10YR5/2) 粘性あり しまりなし 1を斑状に含む

P－45



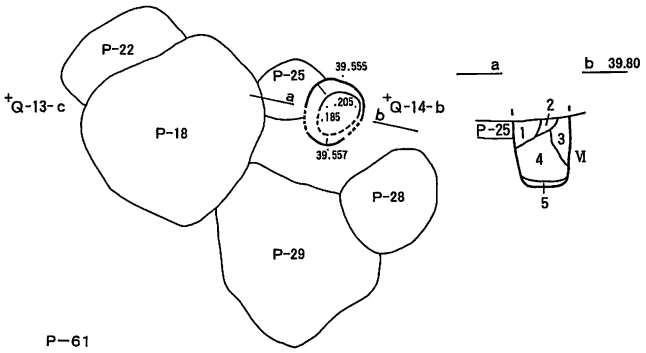
P－45
1 暗褐色土(10YR3/4) しまりあり 黄褐色土の小粒を含む
2 黄褐色土(10YR5/6) しまりあり 明黄褐色土の小ブロックをわずかに含む

P－54



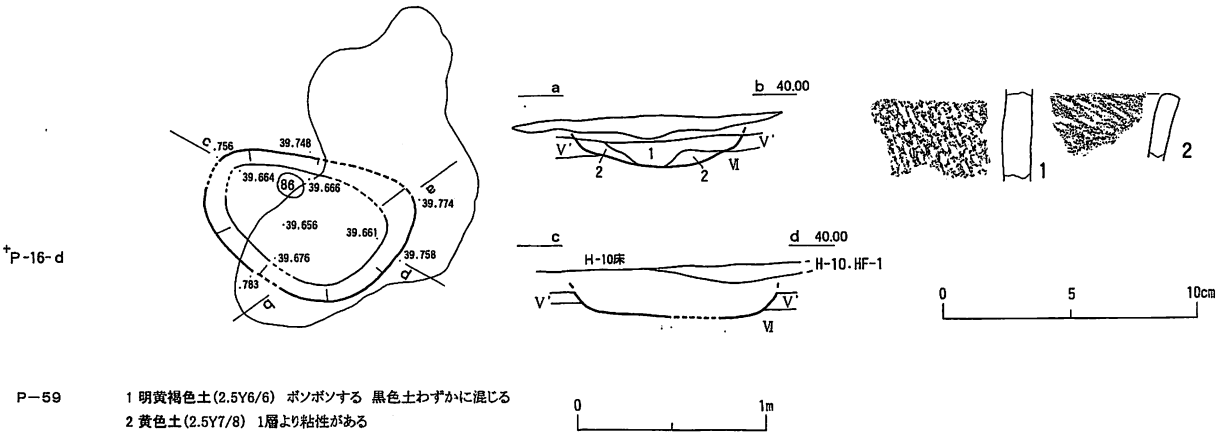
P－54
1 黒褐色土(10YR2/2) 粘性やや弱 しまりよい 黄褐色ローム粒、炭化物混じる

P－61



P－61
1 にぶい黄褐色土(10YR4/3) 粘性あり しまりやや弱 黄褐色ローム粒多く混じる
2 黒褐色土(10YR2/2) 粘性あり しまりやや弱 黄褐色ローム粒混じる
3 明黄褐色土(2.5Y6/6) 粘性強 しまり弱 暗灰黄褐色土(2.5Y4/2)ブロック含む
4 にぶい黄褐色土(10YR4/3) 粘性強 しまりなし 黄褐色ローム粒、
小ブロック多量に混じる 黒褐色土ブロック斑状に混じる
5 黒色土(10YR2/1) 粘性強 しまり弱 黄褐色ローム粒少量混じる

P－59



P－59
1 明黄褐色土(2.5Y6/6) ボソボソする 黒色土わずかに混じる
2 黄色土(2.5Y7/8) 1層より粘性がある

0　1m

図Ⅳ－30　土壙（P－31・34・45・54・59・61）と出土遺物

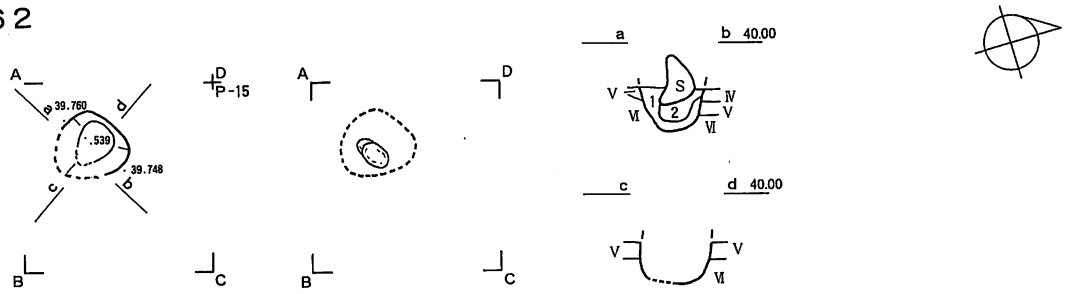
覆　土　２層に分層した。
遺　物　礫１点のみである。
時　期　周辺から検出される遺構の時期から、縄文時代前期後半の時期とみられる。　（立田）

Ｐ－63（図Ⅳ－31、図版59、表Ⅳ－４・23）
位　置　Ｏ－18－ｂ、Ｐ－18－ａ、Ｏ－17－ｃ、Ｐ－17－ｄ
規　模　70×53／（64）×（49）／23cm
平面形　楕円形
長軸方向　Ｎ－３°－Ｗ
確認・調査　Ｐ－18区の調査終了後、北西壁に壁の立ち上がりが現れていた。グリッドの軸線に沿って半截し、壁と壙底を確認した。壁と壙底は緩やかに連続し、椀状を呈する。断面の観察からＦ－18はＰ－63埋没後の窪みに形成された焼土である可能性が高い。
覆　土　２層に分層した。黄褐色土ローム粒子が斑状に混じる灰褐色土の堆積を基調とし、埋め戻しの可能性がある。
遺　物　土器１点、Ｕフレイク１点、フレイク４点が出土している。１はＵフレイク（ＶＢ２）である。覆土２層から出土している。
時　期　周辺から検出される遺構の時期から縄文時代前期後半の時期とみられる。　（立田）

Ｐ－66（図Ⅳ－31、表Ⅳ－４）
位　置　Ｏ－16－ｂ、ｃ
規　模　77×51／（55）×（32）／11cm
平面形　楕円形？
長軸方向　Ｎ－157.5°－Ｗ
確認・調査　Ｈ－10の調査時に断面の一部が確認されていたが、不明瞭なものであった。Ｈ－10のベルトを掘り下げた時点で平面形の輪郭を確認できた。直交するトレンチを新たに設け、Ⅵ層まで掘り下げた。その結果、壁と壙底を確認して土壙であることがわかった。壁は緩やかで壙底は平坦である。
覆　土　灰褐色土の単一層である。
遺　物　礫・礫片が２点出土している。
時　期　周辺から検出される遺構の時期から、縄文時代前期後半の時期とみられる。　（立田）

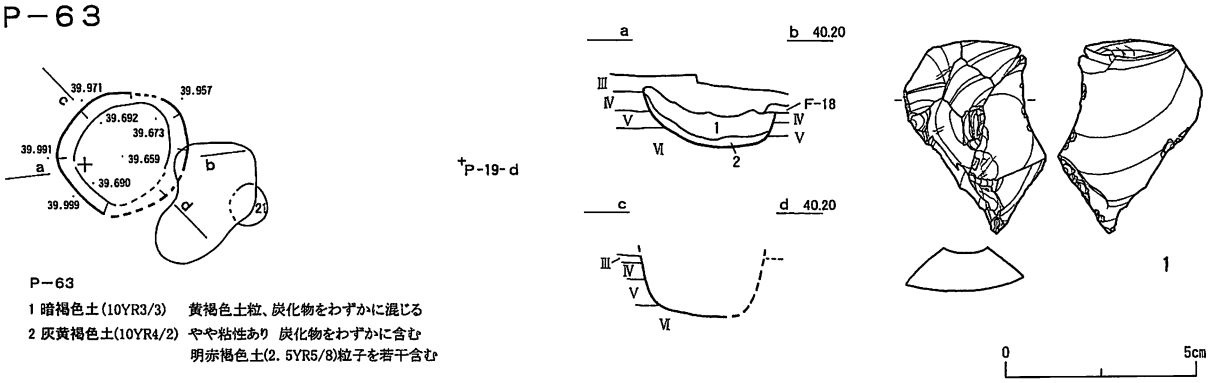
Ｐ－67（図Ⅳ－31、表Ⅳ－４）
位　置　Ｏ－17－ｃ
規　模　87×61／63×49／25cm
平面形　楕円形
長軸方向　Ｎ－29.5°－Ｗ
確認・調査　Ⅳ層上面を精査中に確認した。確認の経緯はＰ－45の項で触れている。本遺構はＰ－45と重複関係にあり、本遺構が新しい。壁は緩やかで壙底は凸凹がある。
覆　土　３層に分層した。灰褐色土を基調とする自然堆積である。
遺　物　出土していない。
時　期　周辺から検出される遺構の時期から、縄文時代前期後半の時期とみられる。　（立田）

P－62



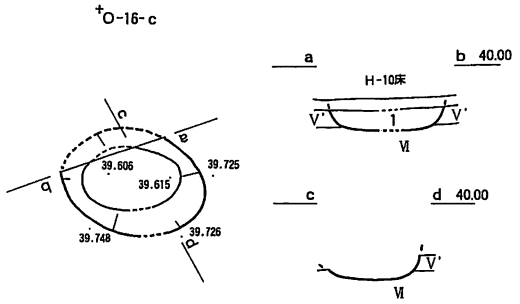
P－62　1 灰黄褐色土(10YR4/2)　粘性あり しまりあり
黄褐色ロームと黒褐色土のまだら状を呈する
2 黒褐色土(2.5Y3/1)　粘性やや弱 よくしまる
ローム粒、炭化物混じる

P－63



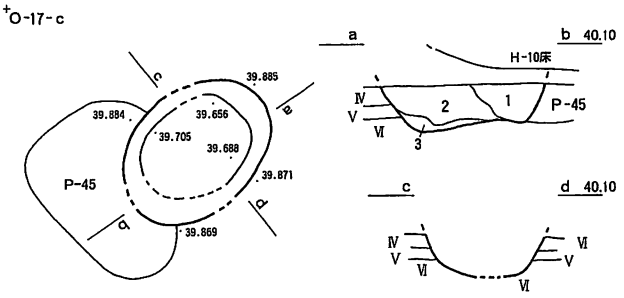
P－63
1 暗褐色土(10YR3/3)　黄褐色土粒、炭化物をわずかに混じる
2 灰黄褐色土(10YR4/2)　やや粘性あり 炭化物をわずかに含む
明赤褐色土(2.5YR5/8)粒子を若干含む

P－66



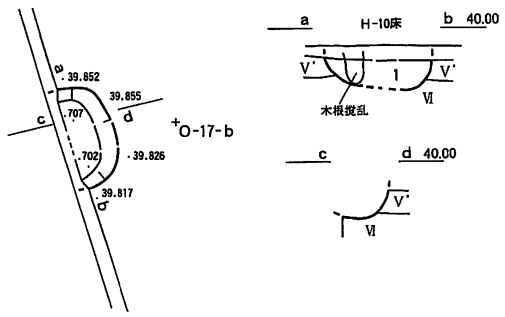
P－66　1 灰黄褐色土(10YR4/2)　粘性弱 しまりよい 黄褐色ローム粒多く混じる
炭化物わずかに混じる

P－67



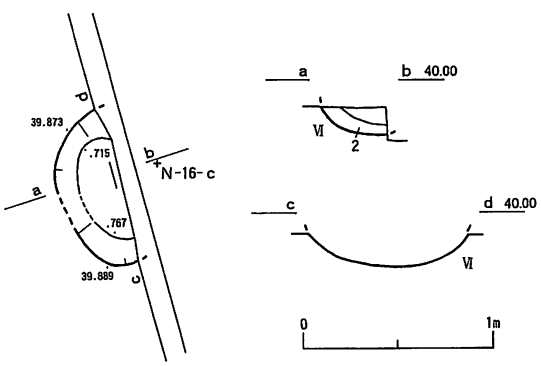
P－67
1 灰黄褐色土(10YR4/2)　粘性あり しまりあり 黄褐色ローム粒混じる
2 黒褐色土(2.5Y3/1)～褐色土(10YR4/4)　粘性やや強 しまりやや弱
黄褐色ローム粒わずかに混じる
3 オリーブ褐色土(2.5Y4/3)　黄褐色ロームブロック斑状に混じる

P－73



P－73
1 灰黄褐色土(10YR4/2)　粘性あり しまりなし にぶい黄褐色土(10YR5/3)
が斑状に混じる
2 黒褐色土(10YR3/2)　粘性なし しまりなし
3 黄褐色土(10YR5/8)　粘性なし しまりなし 1、2を斑状に混じる

P－74



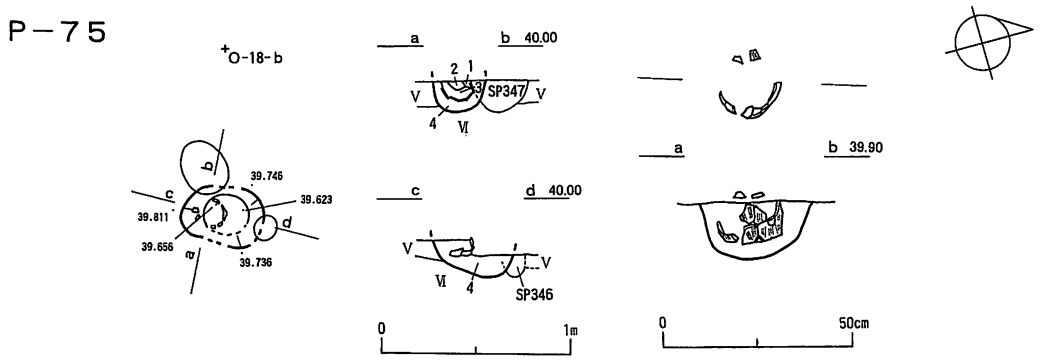
P－74　1 黒褐色土(7.5YR3/1)　粘性あり しまりなし
2 褐灰色土(7.5YR4/1)　粘性あり しまりなし (層界やや明瞭)

図Ⅳ－31　土壙（P－62・63・66・67・73・74）と出土遺物

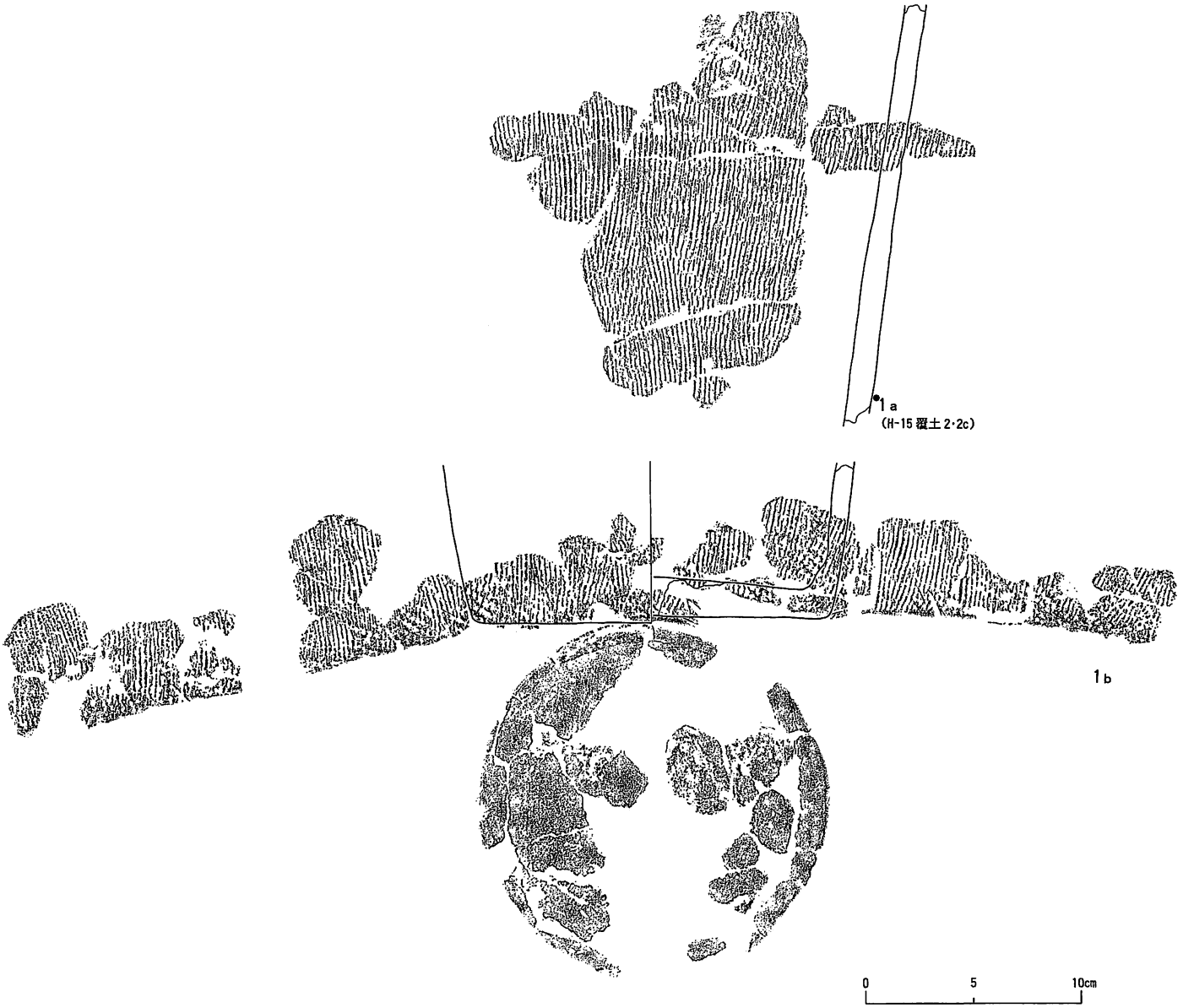
Ｐ－73（図Ⅳ－31、表Ⅳ－４）
位　置　Ｏ－16－ｃ・ｄ
規　模　56×43／（34）×（22）／16cm
平面形　楕円形？
長軸方向　Ｎ－91°－Ｗ
確認・調査　Ｈ－10の調査時に断面の一部が確認されていたが、不明瞭なものであった。Ｈ－10のベルトを掘り下げた時点で平面形の輪郭を確認できた。直交するトレンチを設けてⅥ層まで掘り下げたところ、壙底、壁を確認して土壙であることがわかった。壁はやや急で壙底は東に向かって若干傾斜する。
覆　土　灰褐色土の単一層である。自然堆積とみられる。
遺　物　出土していない。
時　期　周辺から検出される遺構の時期から、縄文時代前期後半の時期とみられる。（立田）

Ｐ－74（図Ⅳ－31、表Ⅳ－４）
位　置　Ｎ－16－ａ・ｂ
規　模　84×56／（34）×（22）／15cm
平面形　楕円形？
長軸方向　Ｎ－89.5°－Ｗ
確認・調査　Ⅵ層上面で灰褐色土の落ち込みを確認した。削平範囲を確認するトレンチ調査で、その半分ほどを掘りぬいてしまった。確認できた部分の壁と壙底は緩やかに連続し、浅い椀状を呈する。
覆　土　２層に分層した。灰褐色土のレンズ状の堆積からなる。自然堆積とみられる。
遺　物　出土していない。
時　期　周辺から検出される遺構の時期から、縄文時代前期後半の時期とみられる。（立田）

Ｐ－75（図Ⅳ－32、図版15・60、表Ⅳ－４・17）
位　置　Ｏ－17－ｃ、Ｏ－18－ｂ
規　模　44×24／（30）×（21）／16cm
平面形　楕円形？
長軸方向　Ｎ－158°－Ｗ
確認・調査　Ⅴ層上面を精査中に灰褐色土の不明瞭な落ち込みとその中心を巡るように土器片が出土しているのを確認した。そのため土器の断面が現れるようにトレンチを設けてⅥ層まで掘り下げたところ、壁・壙底を確認できた。覆土中から正立状態の円筒下層式土器の底部付近の破片を検出した。このことから埋設した土器片を伴う土壙であることがわかった。土壙の形状は短軸方向で先端の丸い柱穴状を呈し、長軸方向でいびつな椀状を呈する。土器は土壙の西側の覆土中位に幾分南西に傾斜した形で埋設されていた。
覆　土　４層に区分した。褐灰色土を基調とするが、土器内部の土には黄褐色土粒が多く混じっている。
遺　物　覆土から土器が120点出土している。（立田）
　Ⅱ群ｂ類土器１点を掲載した。この土器の胎土中には繊維が混入する。１ａ・ｂは器面にＲの撚糸文が施された大型土器の底部である。１ａはＨ－15覆土２・２ｃ層から出土した。（皆川）



P－75
1 褐灰色土(7.5YR4/1)　粘性あり　しまりなし
2 褐灰色土(7.5YR4/1)　粘性あり　しまりなし　黄褐色土粒を少量混じる
3 褐灰色土(7.5YR4/1)　粘性あり　しまりなし　黄褐色土粒を多量に混じる
4 褐灰色土(7.5YR4/1)　粘性あり　しまりなし　3より細かい黄褐色土粒を多量に混じる



図Ⅳ－32　土壙（P－75）と出土遺物

時　期　周辺から検出される遺構の時期から縄文時代前期後半の時期とみられる。　（立田）

⑷焼土

Ｆ－11（図Ⅳ－33、図版46、表Ⅳ－５）
位　置　Ｑ－13－ｃ
規　模　81×82／６cm
長軸方向　Ｎ－52°－Ｗ
確認・調査　Ⅲ層を15cmほど掘り下げたところで検出した。比較的不明瞭な焼土である。Ｐ－29の位置と重なる。本遺構はＰ－29埋没後のくぼみに形成された焼土である可能性がある。
遺　物　出土していない。
時　期　周辺から検出される遺構の時期から、縄文時代前期後半の時期とみられる。　（立田）

Ｆ－18（図Ⅳ－33、図版16、表Ⅳ－５）
位　置　Ｏ－18－ｂ、Ｐ－18－ａ
規　模　72×50／12cm
長軸方向　Ｎ－33.5°－Ｗ
確認・調査　Ⅳ層上面を精査中に検出した。比較的明瞭な焼土である。一部がＰ－63と重複関係にある。確認の経緯はＰ－63に述べてある。中心部が明瞭で漸移的に広がること、また焼土の下部に黒褐色土の堆積が一層あることからこの焼土はその場で形成された可能性が高い。
遺　物　出土していない。
時　期　周辺から検出される遺構の時期から縄文時代前期後半の時期とみられる。　（立田）

Ｆ－19（図Ⅳ－33、図版16、表Ⅳ－５・23）
位　置　Ｏ－18－ａ・ｂ
規　模　63×59／13cm
長軸方向　Ｎ－47°－Ｗ
確認・調査　Ⅳ層を精査中に、暗赤褐色の焼土と複数の礫が検出された。礫は５個あり、焼土からやや離れ、一部焼土を囲むような位置にあった。礫５個のうち４個までが扁平な礫または石器の側面を下にして置かれていることから、人為的に配置されたものとみられる。焼土との関係は不明瞭ではあるが、検出面から両者ともほぼ同時期のものである可能性は高い。
遺　物　たたき石１点、半円状扁平打製石器１点、台石・石皿２点、礫・礫片１点が出土している。
１はたたき石（Ⅶ１）。たたき痕は不明瞭である。２は半円状扁平打製石器（Ⅷ３）。扁平な礫の一側縁を打ち欠いて作業面が作出されるもので、作業面にみられる擦痕は不明瞭ではあるが前後方向とみられる。３～５は台石（Ｘ）。４は扁平な礫の表面にわずかな擦痕が認められるもの。５は礫の表面のややくぼんだ部分にたたき痕が認められるものである。石材はすべて安山岩で、１～５のすべての遺物が確認面で焼土を取り囲む位置で出土したものである。
時　期　周辺から検出される遺構の時期から縄文時代前期後半の時期とみられる。　（立田）

Ｆ－20（図Ⅳ－29、表Ⅳ－５）
位　置　Ｐ－16－ｃ

規　模　32×29／10cm
長軸方向　N－114.5°－W
確認・調査　H－10の床面精査中に検出した。やや不明瞭な焼土である。P－35の上面にあたるため伴うものの可能性がある。確認の経緯についてはP－35の項で述べている。
遺　物　出土していない。
時　期　周辺から検出される遺構の時期から、縄文時代前期後半の時期とみられる。　（立田）

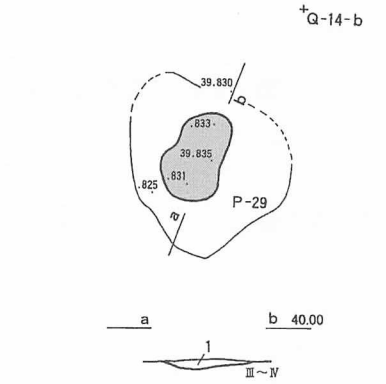
(5)集石

S－4（図Ⅳ－34、図Ⅴ－71、図版16・60、表Ⅳ－6・23）
位　置　Q－13－c
規　模　47×38cm
確認・調査　Ⅳ層上面を精査中に確認した。大きいもので拳2つ分ほどから小さいもので親指大ほどの不ぞろいな礫、石器の集中域である。遺物の分布する範囲が狭く、P－18の壙口中央部で重なることから、P－18に伴うものである可能性がある。
遺　物　土器3点、フレイク4点、たたき石11点、砥石1点、礫・礫片4点が出土している。
1～3はたたき石（Ⅶ1）である。
時　期　周辺から検出される遺構の時期から、縄文時代前期後半の時期とみられる。　（立田）

(6)方形柱穴列

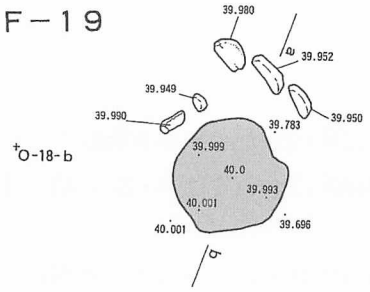
方形柱穴列4（図Ⅳ－34、図版16・55）（SP－126・323・330・333）
位　置　N－17－b、O－16－d、O－17、O－18－a
規　模　478×268cm
特　徴　調査区南東側、削平部分H－10の北側に位置する。SP－126・323・330・333の4基からなり、長方形を呈する。長軸は南西－北東方向にある。覆土はすべてがB－1に分類できる。南側の2本は断面形、壙底面の標高も類似しているのに対し、北側の2本は標高がやや高く、333はやや南側に傾斜している。このことから本遺構は建物ではなく上屋のない構築物である可能性もある。
遺　物　SP－126の覆土からフレイクが1点出土している。
時　期　周辺から検出される遺構の時期から縄文時代前期後半の時期とみられる。　（立田）

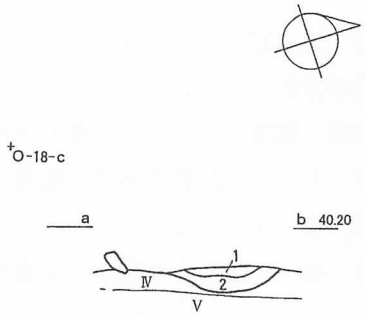
F－11



F－11
1 にぶい赤褐色土(2.5YR4/4) 粘性あり しまりなし
黒褐色土(5YR3/1)中に混じる

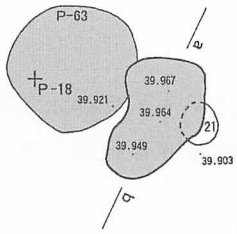
F－19

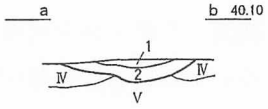




F－19
1 明赤褐色土(5YR5/8) 黒褐色土(7.5YR3/1)を多量に混じる層
2 明赤褐色土(5YR5/8) 粘性あり しまりあり 層界不明瞭

F－18

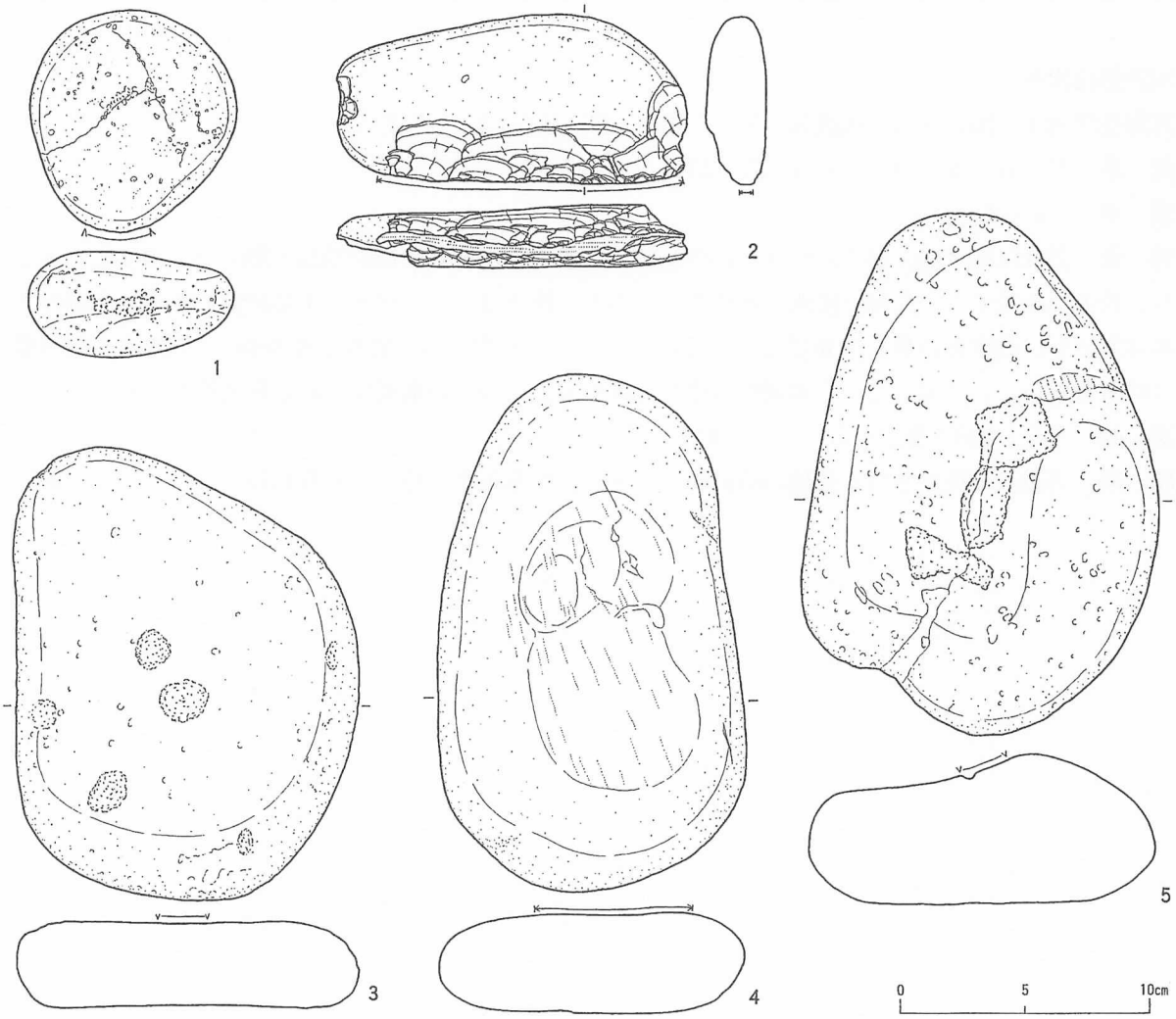




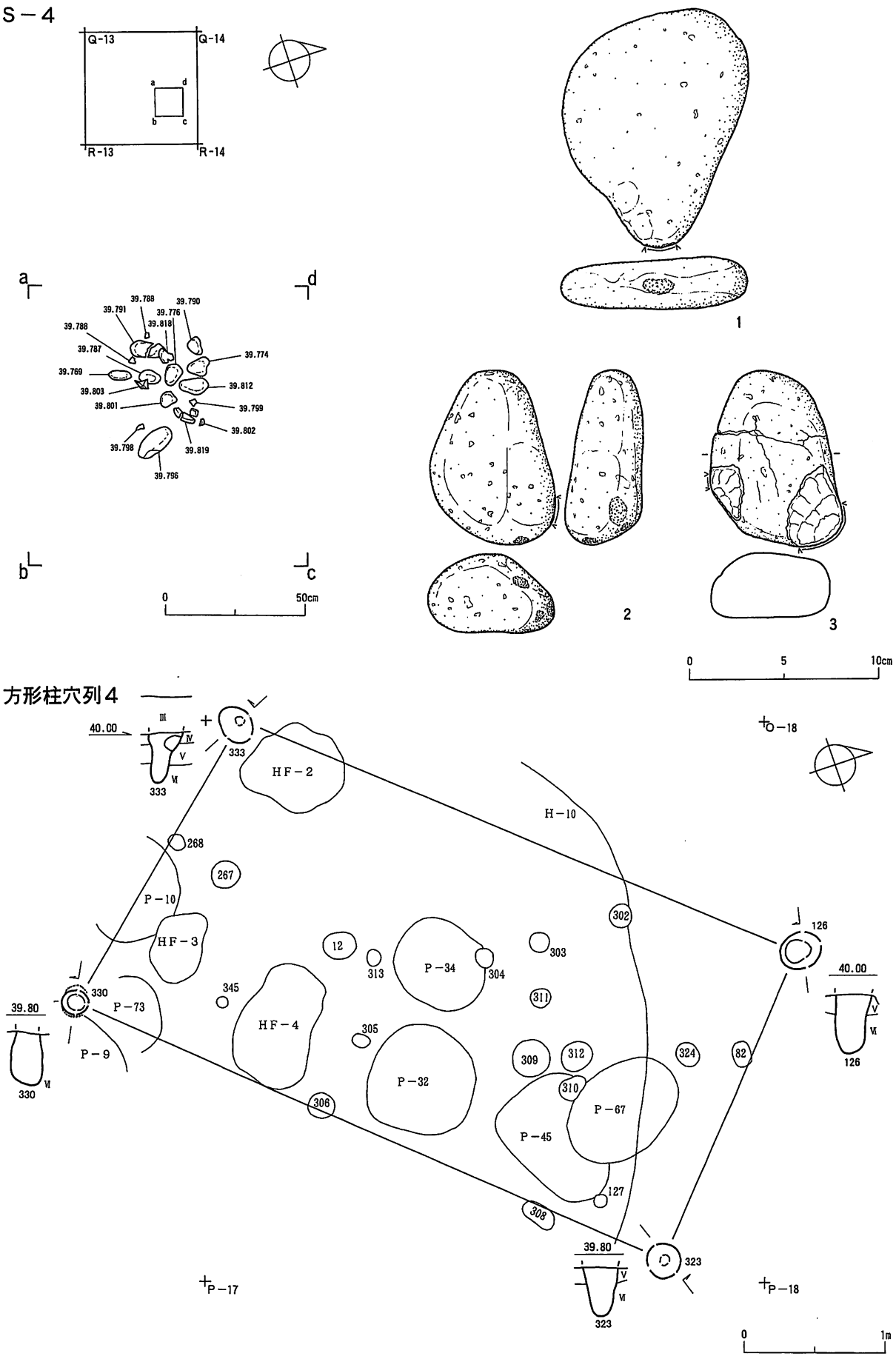
F－18
1 明赤褐色土(2.5YR5/8) 黒褐色土(7.5YR3/1)が斑状に混じる
2 明赤褐色土(2.5YR5/8) 粘性あり しまりなし 層界不明瞭 やや淡い

0　1m

F-19



図Ⅳ－33　焼土（F－11・F－18・19）と出土遺物



図Ⅳ－34　集石（Ｓ－４）と方形柱穴列４

2　周辺の遺構

(1)竪穴住居跡

Ｈ－１　（図Ⅳ－35～64、図版17～19・61～72、表Ⅳ－７・18・24）

位　置　Ｏ－22－ｂ・ｃ、Ｏ－23、Ｐ－22－ｄ、Ｐ－23－ａ・ｄ

規　模　508×469／506×472／93cm

床面積　（17.49）㎡

平面形　円形

長軸方向　－

確認・調査　表土を除去した際にＫｏ－ｄが円形に堆積していた（図版17－２）。住居の存在を想定してトレンチを入れると、覆土中から大量の遺物が出土し、急角度で立ち上がる壁と平坦な床面が検出できた。なお、南西側には木根攪乱があり、壁が明瞭に捉えられずやや掘りすぎた部分がある。住居の掘り込みはⅢ層上面から８cmほど下がった面で、掘り上げ土が周囲に確認できた（図Ⅳ－36）。また、主に南から西にかけての方向から住居跡の窪地に投げ捨てたかのように、まとまりとレベル差をもって土器片や焼成粘土塊などが出土し、焼土・焼土粒・炭化物が検出された。

覆　土　15層に分層した。自然堆積である。これらは、最上位のＫｏ－ｄ（１層）、黒色土でⅢ層を主体とするもの（２・３層）、黒色土主体であるがやや色調が明るいもの（４・５層）、黒色土にⅥ層のロームが混じるもの（６・７層）、Ⅵ層を主体とするロームブロックが主体となるもの（８・10～12層）、より下位にありロームブロックの混じりが少ないもの（９・13層）、いわゆる三角堆積で黒色土が主体となりしまりが弱いもの（14層）、住居中央部のくぼみにあり、しまりの強いもの（15層）、の大きく８層に大別できる。現場段階での遺物の取り上げはこの大別に準拠して行った。

なお、ロームが多く混じる下位の８～13層の起源は住居の周囲に堆積した構築時の掘り上げ土の流れ込み、もしくは土葺き屋根の崩落と推測される。

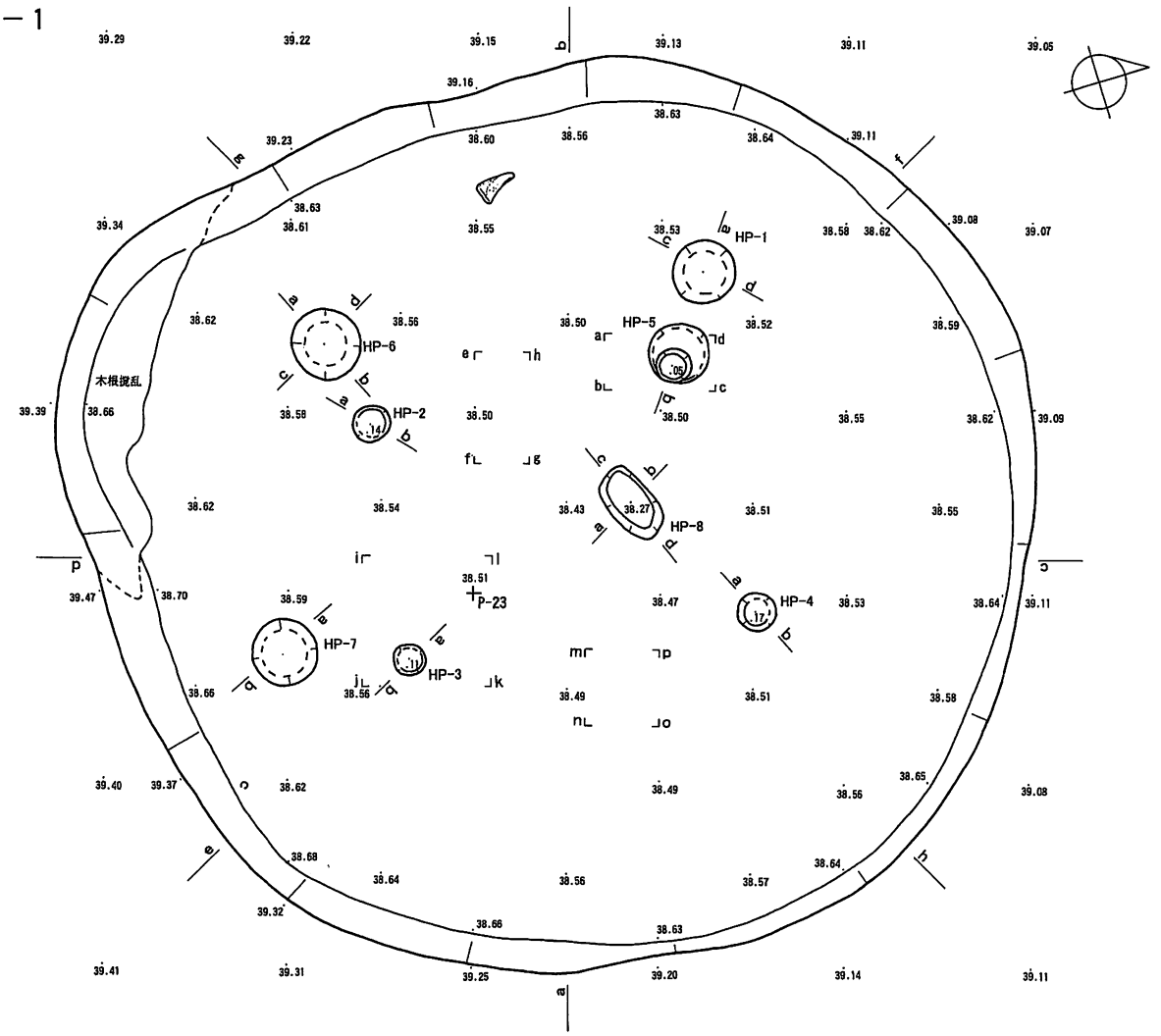
床面の出土の土器集中内および土器集中下の土壌およびＨＦ－６焼土についてはフローテーションを実施し炭化種子を検出した。詳細については第Ⅵ章３で述べている。

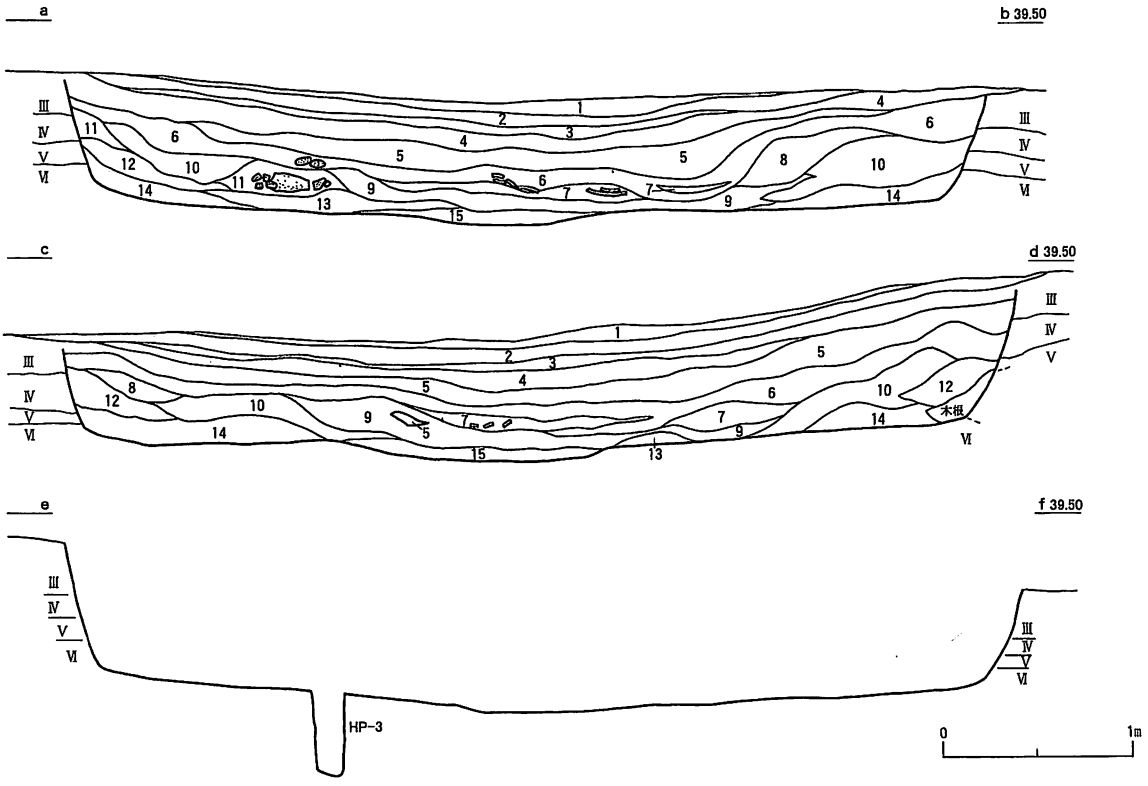
壁・床面　壁は南西部分が攪乱を受けていた他は明瞭にとらえられた。床面は全体的に凹状となり、特に中央部は直径1.4m、深さ８cmほどのくぼみとなっている。

炉　炉跡は確認できなかった。なお、覆土中には非常に多くの焼土粒・炭化物が散在していた。このうち、ある程度まとまりを持ったものをＨＦ－１～６として調査した。ＨＦ－１・３～５は覆土中に投げ込まれた、明らかな２次堆積の焼土である。ＨＦ－２は覆土10層上面で確認されたもので、レンズ状となることや漸移的に赤味が退色することから覆土中で焚かれたものと判断した。近接した同一レベルで台石・たたき石などがあたかも置かれたかのように出土したことからも、埋まりきらない住居のくぼみを一時的に利用したものと考えられる。ＨＦ－６は床面からやや浮いた状態で出土した土器片上で確認されたものである（図Ⅳ－37、図版19－１）。土器は二次焼成を受けボロボロとなっていた。床面からやや浮いているものの住居の中央部に近いことから、土器片を利用し床面に焼土の痕跡を残さないようにしたＨ－１に伴う炉跡の可能性がある。

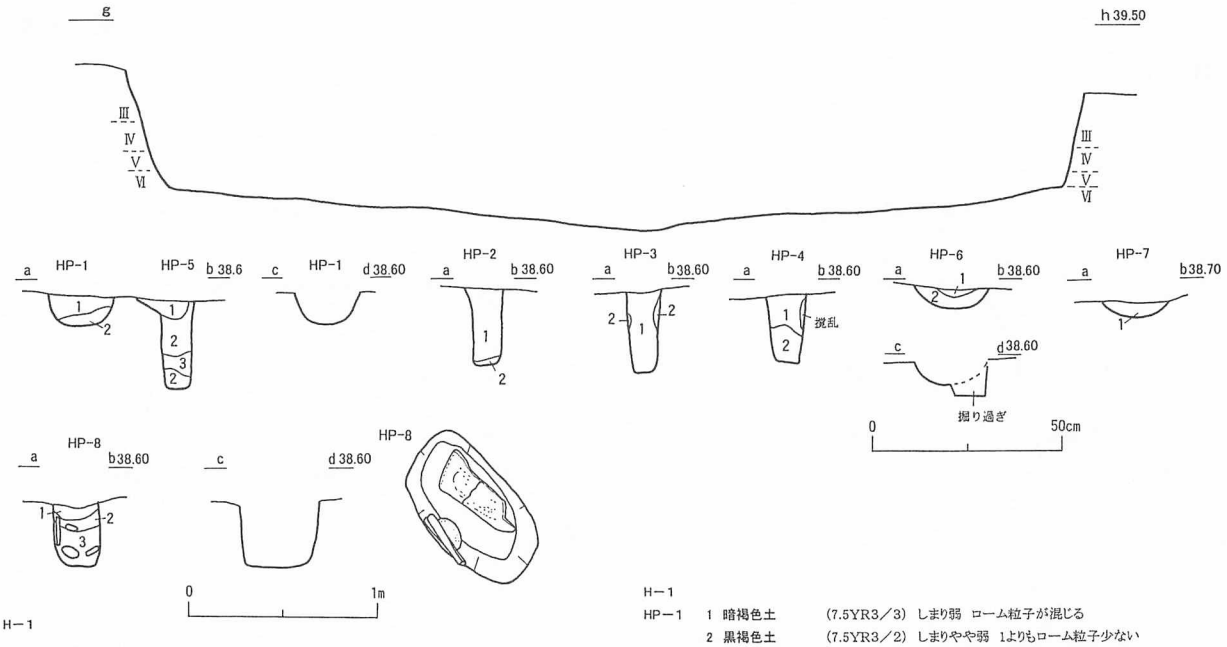
付属ピット・柱穴　主柱穴は４基（ＨＰ－２～５）、付属ピットは４基（ＨＰ－１・６～８）を検出した。柱穴は深さ40cm程で住居の中央部を囲むように配置されている。付属ピットのうち３基（ＨＰ－１・６・７）は主柱穴と対になって検出された皿状の土壙である。ＨＰ－８は中央部近くに深く掘り込まれた土壙で、たたき石、すり石、砥石が出土した（図Ⅳ－36、図版18－５）。覆土はほぼ純粋

H－1


HP-1
HP-2
HP-3
HP-4
HP-5
HP-6
HP-7
HP-8
P-23
木根撹乱


a
b 39.50
c
d 39.50
e
f 39.50
木根
HP-3
0
1m

図Ⅳ－35　H－1 (1)

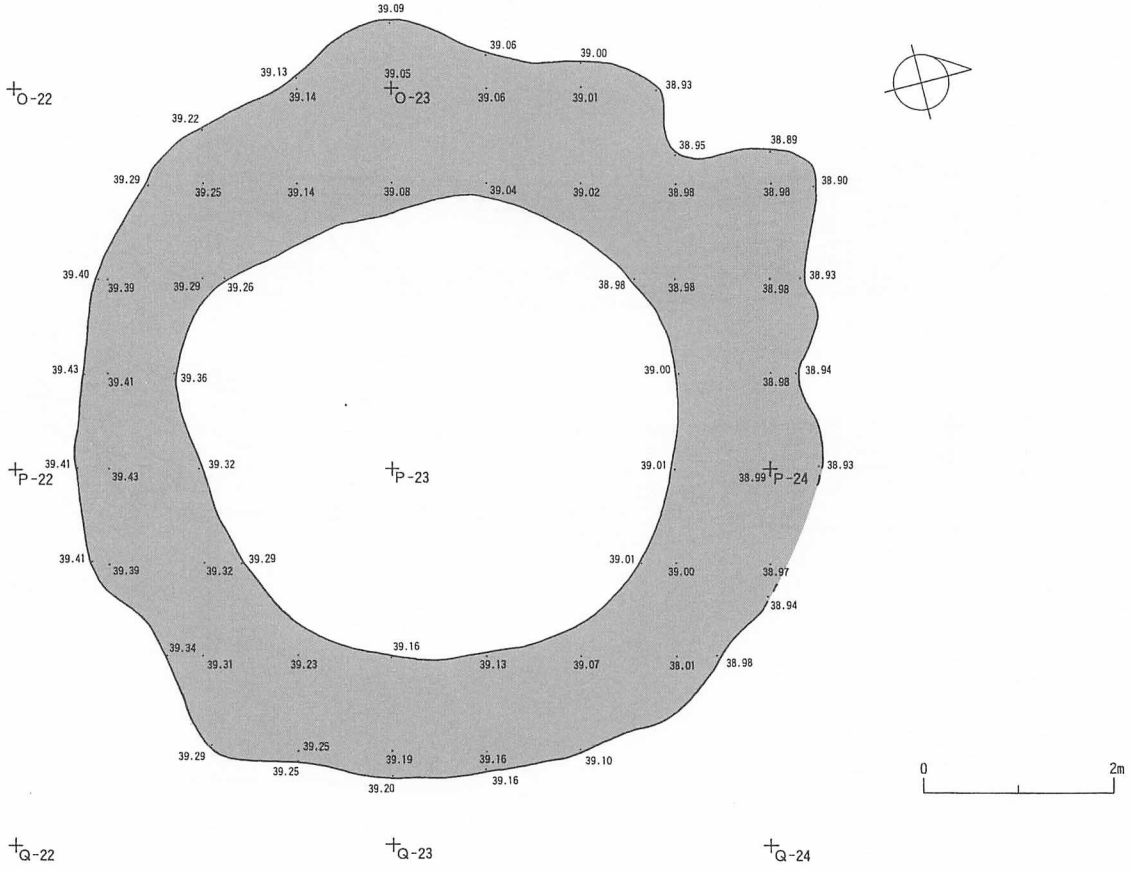


H－1

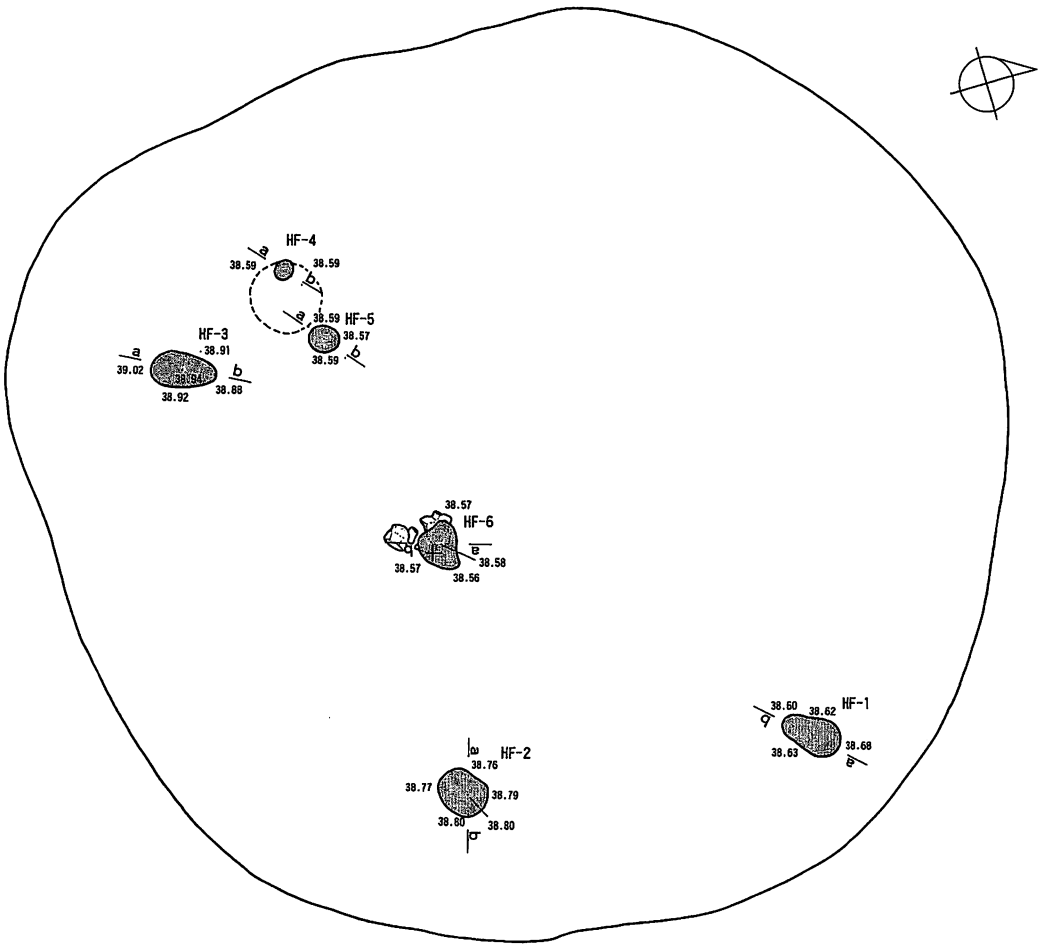
1 駒ケ岳火山灰(ko－d) (Ⅱ)
2 黒色土(7.5YR2/1) 粘性なし しまり弱 ko-dがごく少量混じり、白味を帯びる (Ⅲ>>Ⅱ)
3 黒色土(7.5YR1.7/1) 粘性なし しまり弱 乾燥するとクラックが入る (Ⅲ)
4 黒色土(7.5YR2/1) 粘性やや弱 しまり弱 3より褐色味を帯びる (Ⅲ)
5 黒色土(7.5YR1.7/1) 粘性なし しまり弱 (Ⅲ)
6 黒褐色土(7.5YR2/2) 粘性やや強 しまり弱 ローム、焼土粒が少量混じる (Ⅲ>Ⅳ)
7 黒色土(7.5YR2/1) 粘性やや強 しまり弱 6よりロームの混入が少ない (Ⅲ>>Ⅳ)
8 黒褐色土(7.5YR3/2) 粘性やや強 しまり弱 6よりも多くのロームが混じる (Ⅲ>Ⅳ+Ⅴ)
9 暗褐色土(7.5YR3/4) 粘性やや強 しまりやや強 径10㎜程のロームブロックが多く混じる (Ⅳ+Ⅵ)
10 褐色土(7.5YR4/3) 粘性強 しまりやや弱 ロームにごく少量の暗褐色土が混じる (Ⅵ)
11 黒褐色土(7.5YR2/2) 粘性弱 しまり弱 径5㎜以下のロームブロックが混じる (Ⅳ>Ⅴ)
12 暗褐色土(7.5YR3/3) 粘性弱 しまり弱 11より大きめのロームブロックが少量混じる (Ⅳ>Ⅴ+Ⅵ)
13 黒褐色土(7.5YR2/2) 粘性弱 しまり弱 ごく少量のロームブロックが混じる (Ⅲ>Ⅳ+Ⅵ)
14 黒褐色土(7.5YR3/2) 粘性弱 しまり弱 ロームブロックが少量混じる (Ⅲ+Ⅳ)
15 暗褐色土(7.5YR3/4) 粘性強 しまり強 ロームブロックが多く混じる 使用時の床面か (Ⅳ<Ⅵ)

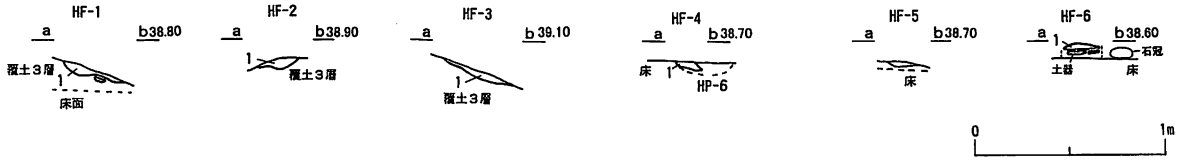
H－1

HP－1	1	暗褐色土	(7.5YR3／3) しまり弱 ローム粒子が混じる
	2	黒褐色土	(7.5YR3／2) しまりやや弱 1よりもローム粒子少ない
HP－2	1	黒褐色土	(7.5YR3／2) しまり弱 ロームブロックと炭化物が混じる
	2	褐色土	(7.5YR4／4) 粘性強 しまり弱 黒色土が少量混じる
HP－3	1	黒褐色土	(7.5YR2／2) しまり弱 少量のローム粒子、多量の炭化物が混じる
	2	褐色土	(7.5YR4／4) しまり弱 黒色土が混じる
HP－4	1	暗褐色土	(7.5YR3／4) 粘性やや強 しまりやや強 ローム粒子が混じる
	2	褐色土	(7.5YR4／4) ボソボソでしまり弱 黒色土が極少量混じる
HP－5	1	黒褐色土	(7.5YR3／2) しまりやや強 ローム粒子多く混じる
	2	黒褐色土	(7.5YR3／2) しまり弱 ロームブロックが多く混じる
	3	黒褐色土	(7.5YR4／6) 粘性、しまり強 極少量の黒色土が混じる
HP－6	1	暗褐色土	(7.5YR3／4) 粘性強 しまり弱 ロームブロックが混じる
	2	黒褐色土	(7.5YR3／2) しまり弱 1よりも少量のロームブロックが混じる
HP－7	1	黒褐色土	(7.5YR3／1) 粘性、しまり弱 ローム粒子が極少量混じる
HP－8	1	黒褐色土	(7.5YR3／2) しまり弱 φ7～8㎜程度のローム粒子が混じる
	2	褐色土	(7.5YR4／3) 極少量の黒色土が混じる
	3	明褐色土	(7.5YR5／6) 粘性強 Ⅵ層との違いは不明瞭



図Ⅳ－36　H－1(2)、掘り上げ土検出状況





H－1

HF－1	1	暗赤褐色土	(5YR3／4)	焼土粒子が混じる
HF－2	1	暗赤褐色土	(5YR3／4)	赤褐色(5YR4／8)の焼土粒子が混じる
HF－3	1	黒褐色土	(5YR2／2)	赤褐色(5YR4／9)の焼土粒子(φ10㎜程度)が混じる
HF－4	1	赤褐色土	(5YR4／8)	粘性やや強　しまりなし　HP-6に落ち込む
HF－5	1	赤褐色土	(5YR4／8)	粘性なし　しまり弱
HF－6	1	にぶい赤褐色土	(5YR4／4)	しまり弱　下の土器は二次焼成を受けていいる

図Ⅳ－37　H－1覆土中検出の焼土

なロームが主体の埋め戻しで、硬くしまっていた。砥石などを埋設したものであろう。

遺物出土状況　遺物の取り上げは覆土の大別に従い、覆土２・３層を取り上げの「１層」、覆土４・５層を「２層」、覆土６・７層を「２ｂ層」、覆土８・10～12層を「３層」、覆土９・13層を「３ｂ層」、覆土14層を「４層」、覆土15層を「５層」とした。

出土点数は１層から土器56点・石器など110点、２層から土器252点・石器など272点、２ｂ層から土器2,221点・石器など710点、３層から土器2,267点・石器など1,699点、３ｂ層から土器320点・石器など60点、４層から土器46点・石器など17点、５層から土器３点・石器など13点、床面から土器746点・石器など223点、付属ピット・柱穴から土器８点・石器など28点である。層位不明のもの２点加えて総出土点数は土器5,920点・石器など3,130点の合計9,050点である。土器の比率は65.4％で、フレイク25.7％、礫・礫片6.5％と続き、土器の比率が高いのが特徴である。遺物の多くは住居廃絶後のくぼみに投げ込まれたかのように出土し、層位的に土器の変遷が観察できる。

各層位毎に特徴を述べると、２ｂ層では主に南西側にやや大きめの破片が混在してまとまっており、レベル差を持って投げ込まれたかのように出土した（図Ⅳ－38）。３層では南西、南東にまとまった土器が出土した（図Ⅳ－39・40）。後者の土器および台石、たたき石などはＨＦ－２と関連するものであろう。３ｂ層では中央部および南東側に土器がまとまっていた。このうち、後者は一個体が横倒しになった状態で、一部の破片は床面から出土した（図Ⅳ－41）。床面ではつぶれた状態の土器３個体が主柱穴の内側から、台石３点・たたき石・砥石・石核が主柱穴の北西方向の外側から出土した（図Ⅳ－42、図版19－２・４～６）。このうち、砥石（160）はＨ－１に隣接するＰ－57、およびＨ－３、包含層Ｍ－21区などの包含層出土の破片と接合した。

なお、出土状況図中の復元土器については、多くの破片が出土したものは大きく、一部の破片が出土したものは小さく掲載し、区別している。　（藤原）

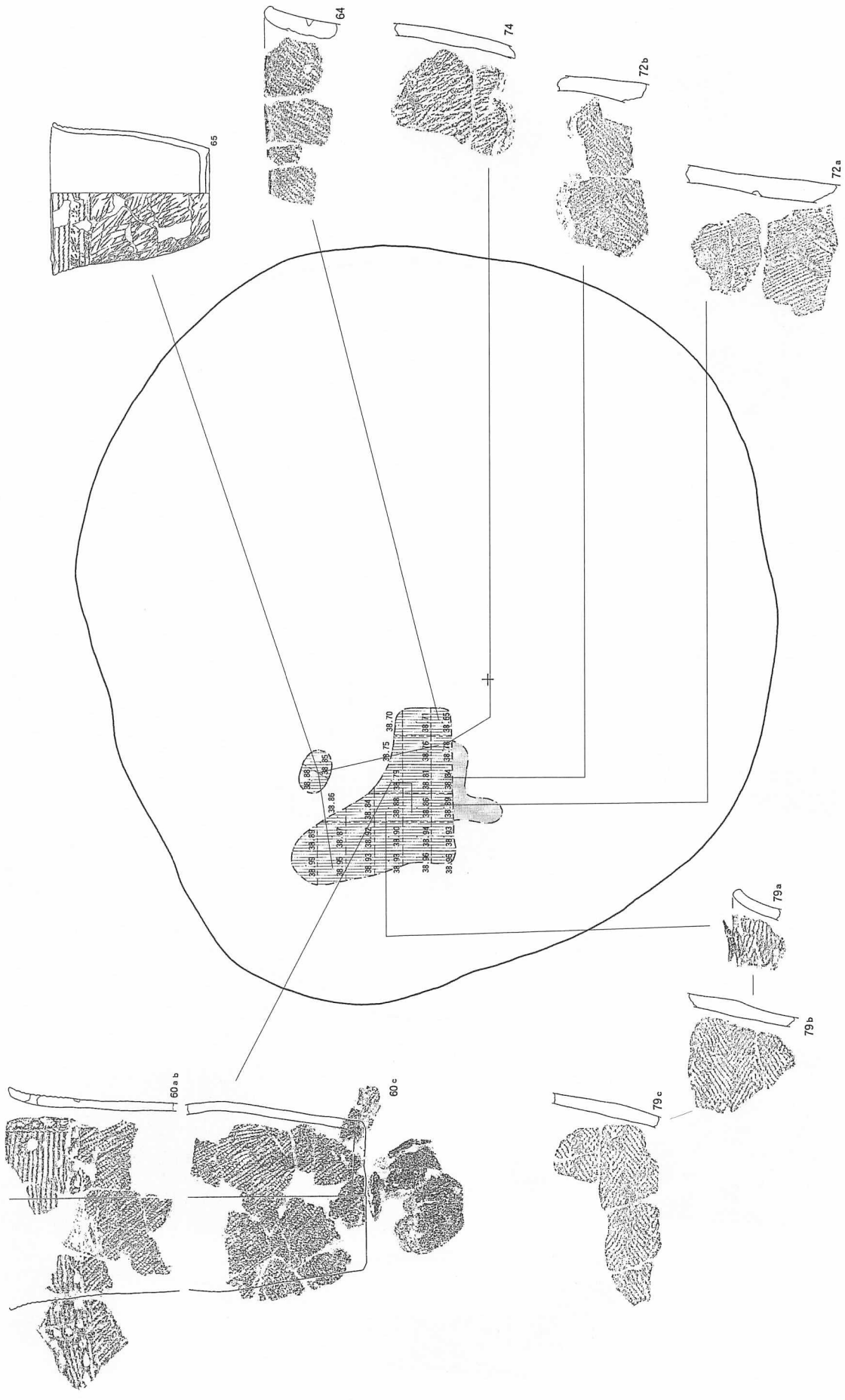
遺　物

（土器） 18,184点から識別した97個体をここに掲載する。１～92はⅡ群ｂ類土器、93～97はⅢ群ｂ類土器である。

Ⅱ群ｂ類土器は竪穴内に厚く堆積する覆土２～５層と床面などから出土したもので、包含される層序によって若干の時間差が想定されることから、上記の取り上げ層位により「第１～５段階」に分けてみた。「第１段階」は主体が床面付近から出土するもの（１～11）、「第２段階」は一部が床面から、主体部が覆土２ｂ・３・３ｂ層から出土するもの（12～15）、「第３段階」は主体が覆土３ｂ層あるいは覆土３～３ｂ層から出土するもの（20～32）、「第４段階」は主体が覆土３層から出土するもの（33～59）、「第５段階」は主体が覆土２ｂ層あるいは覆土２ｂ～３層から出土するもの（60～92）である。

「第１段階」のものは本竪穴以外からの出土が皆無であり、これらは周囲の遺構や包含層に大量の土器が廃棄される以前のものと考えられる。「第２～４段階」のものには他の竪穴住居の覆土や包含層との接合例が現れ始め、特に近接する深い竪穴を持つＨ－３やＨ－15出土のものとの接合例が目を引く。これら「第１段階」の土器群の時期に準ずる可能性が高い。また、第２・３・４の順に各土器群には若干の時間差が存在する可能性もある。「第５段階」には、細い撚糸文が用いられ口縁部文様帯や、胴部に結束第一種羽状縄文や二種類以上の地紋が使われるものなど一般的に円筒下層ｃ式に多いとされる特徴を持つものが認められる。また、これらの胎土中には繊維の混入が認められ、それ以外にも海綿骨針が混入するものがある。

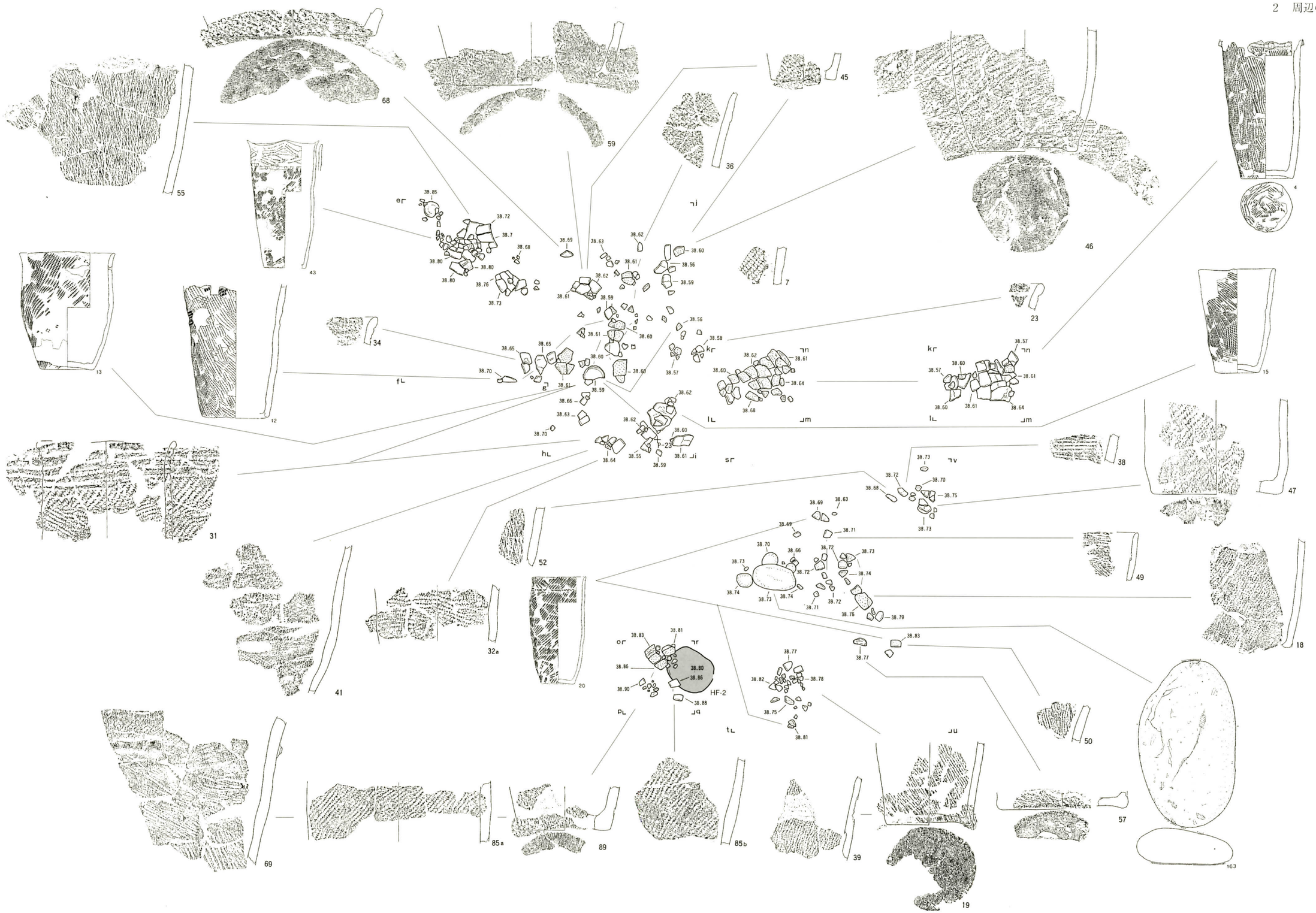
１～８は床面、９がＨＰ－２、10がＨＰ－３、11がＨＰ－５で出土したものである。これら床面付近のものはＨ－１の中で古い「第１段階」の土器群とする。これらは、同一個体の土器が竪穴外で出



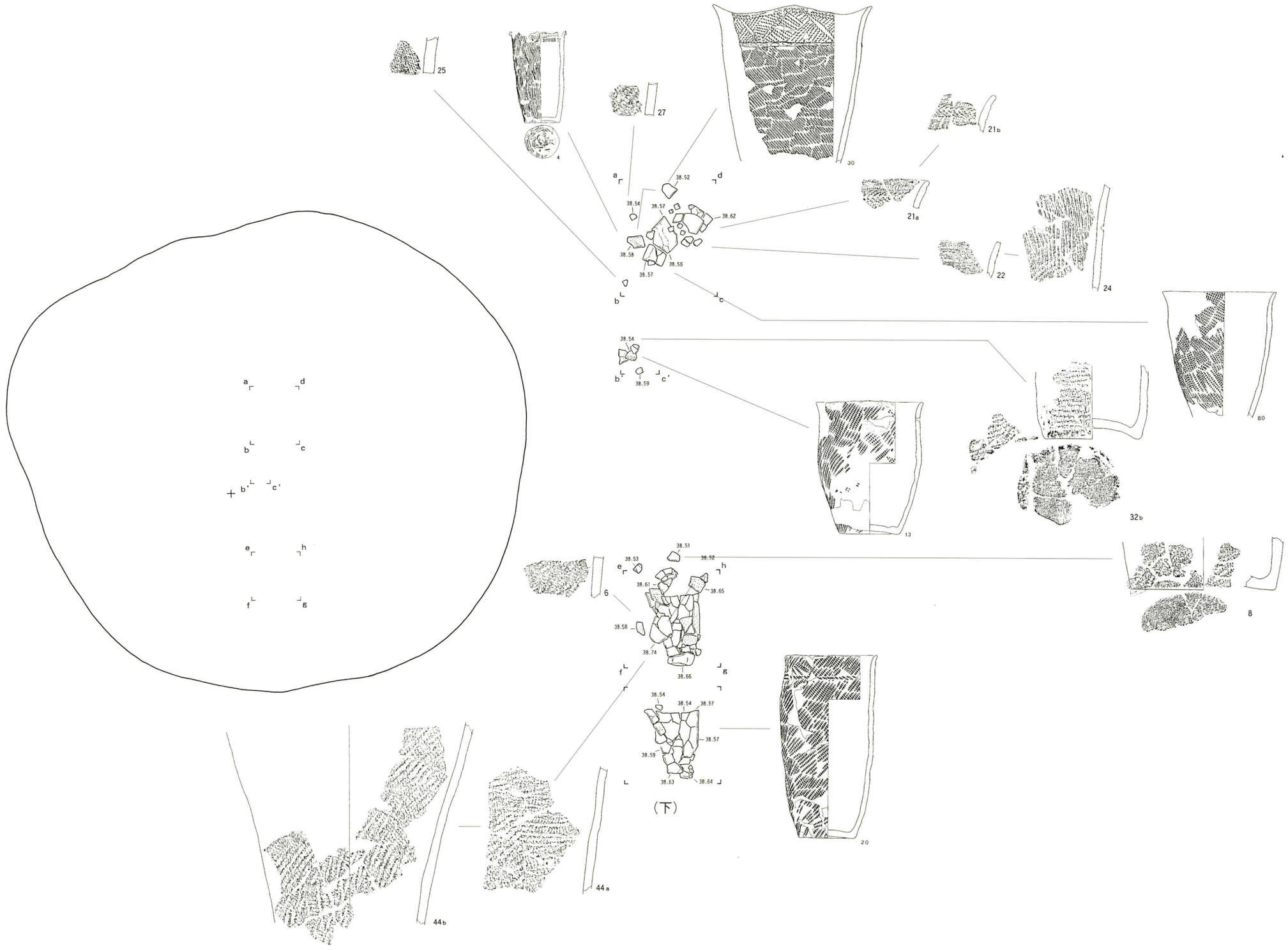
図Ⅳ－38　Ｈ－１覆土２ｂ層遺物出土状況



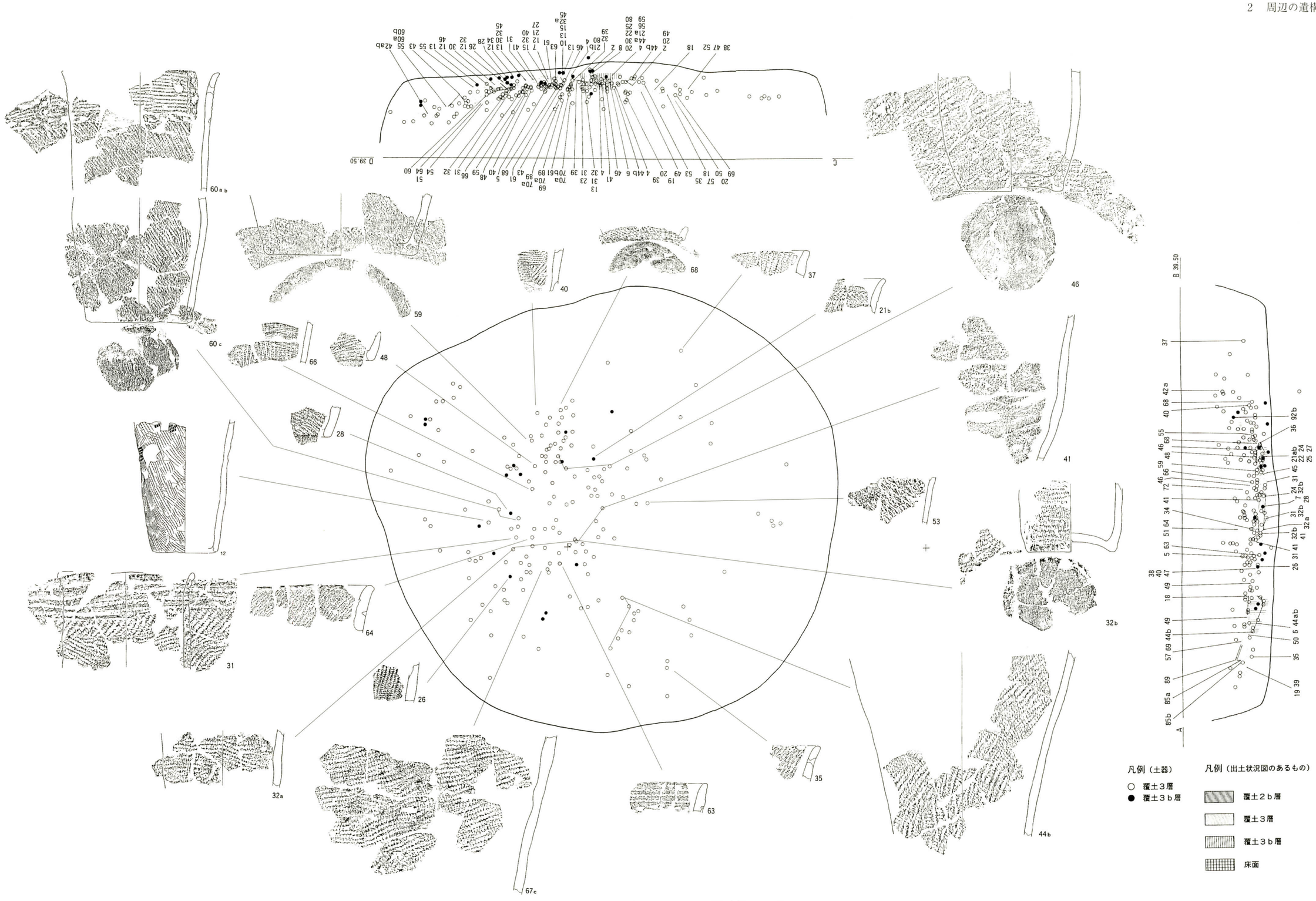
図Ⅳ－39　H－1覆土3層遺物出土状況(1)



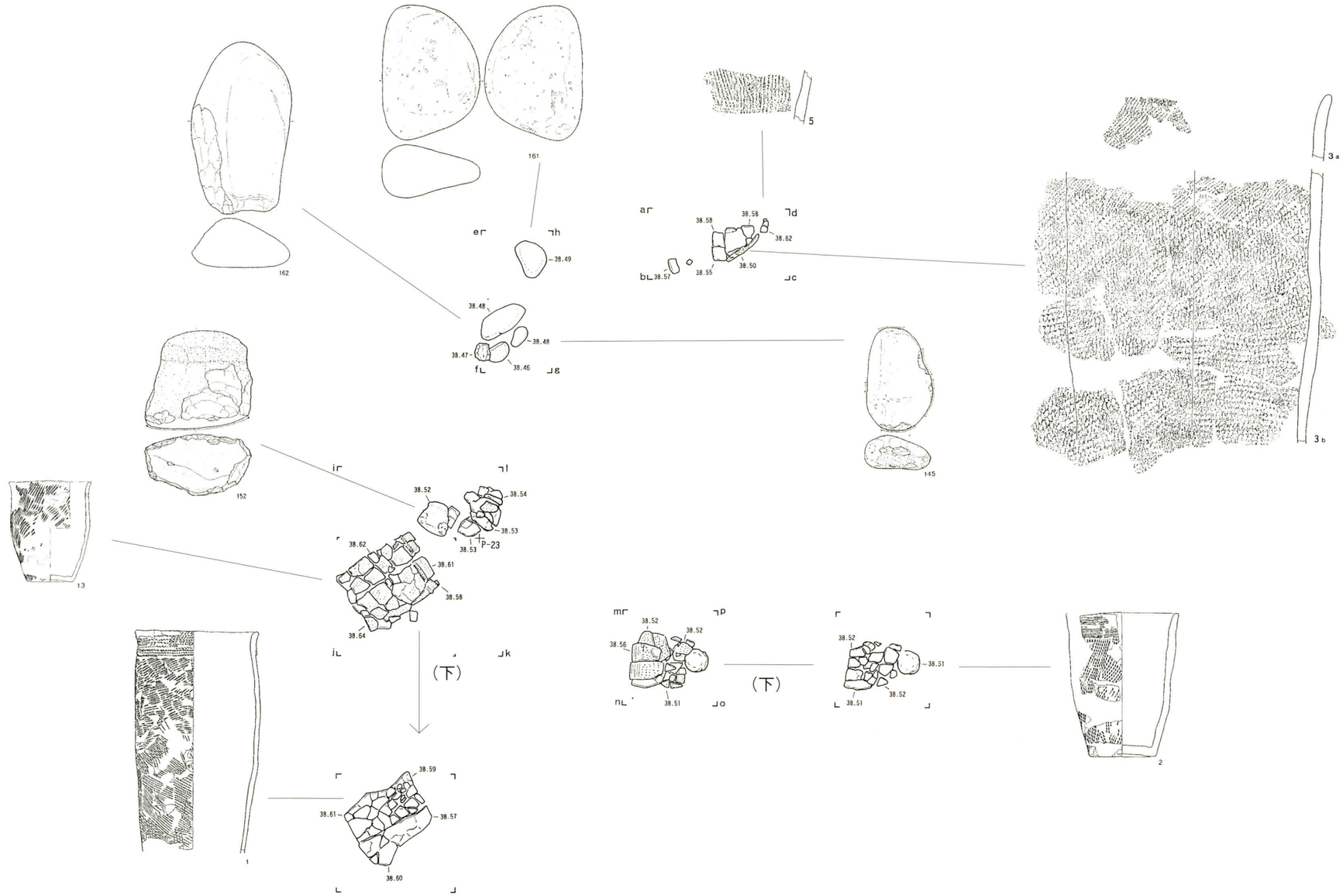
図Ⅳ－40　Ｈ－１覆土３層遺物出土状況(2)



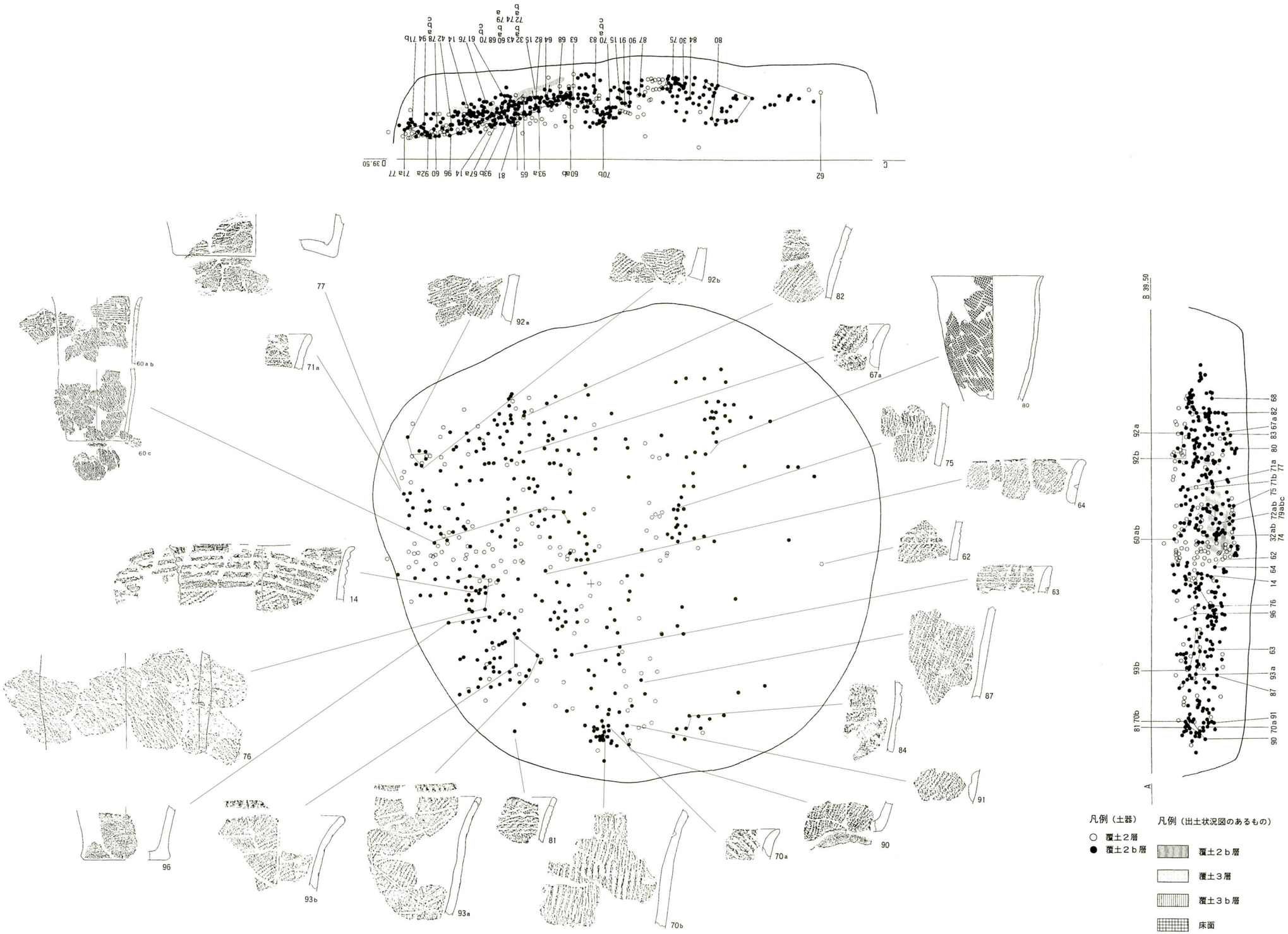
図Ⅳ－41　Ｈ－１覆土３ｂ層遺物出土状況



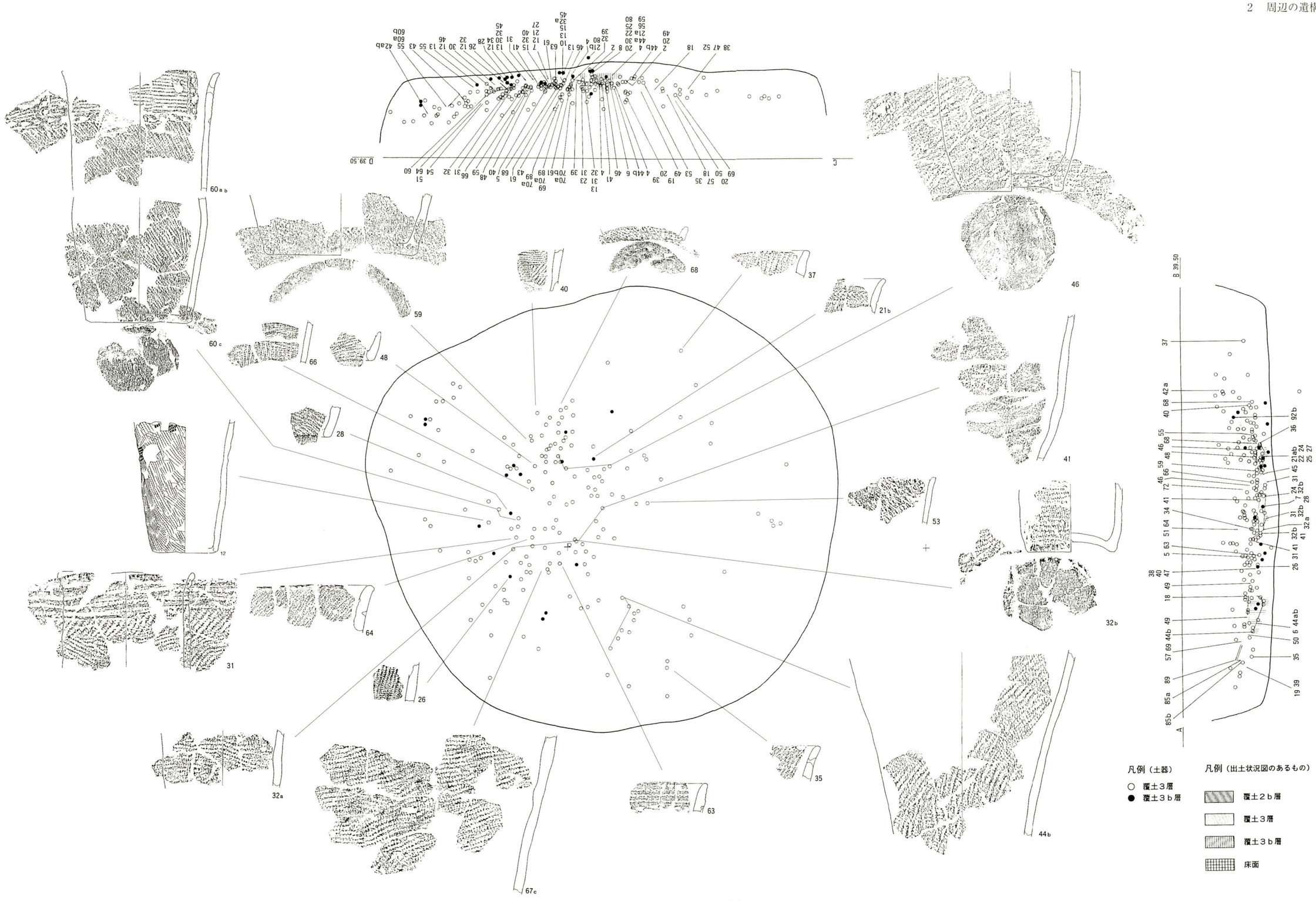
図Ⅳ－44　Ｈ－１覆土３層・３ｂ層遺物出土状況



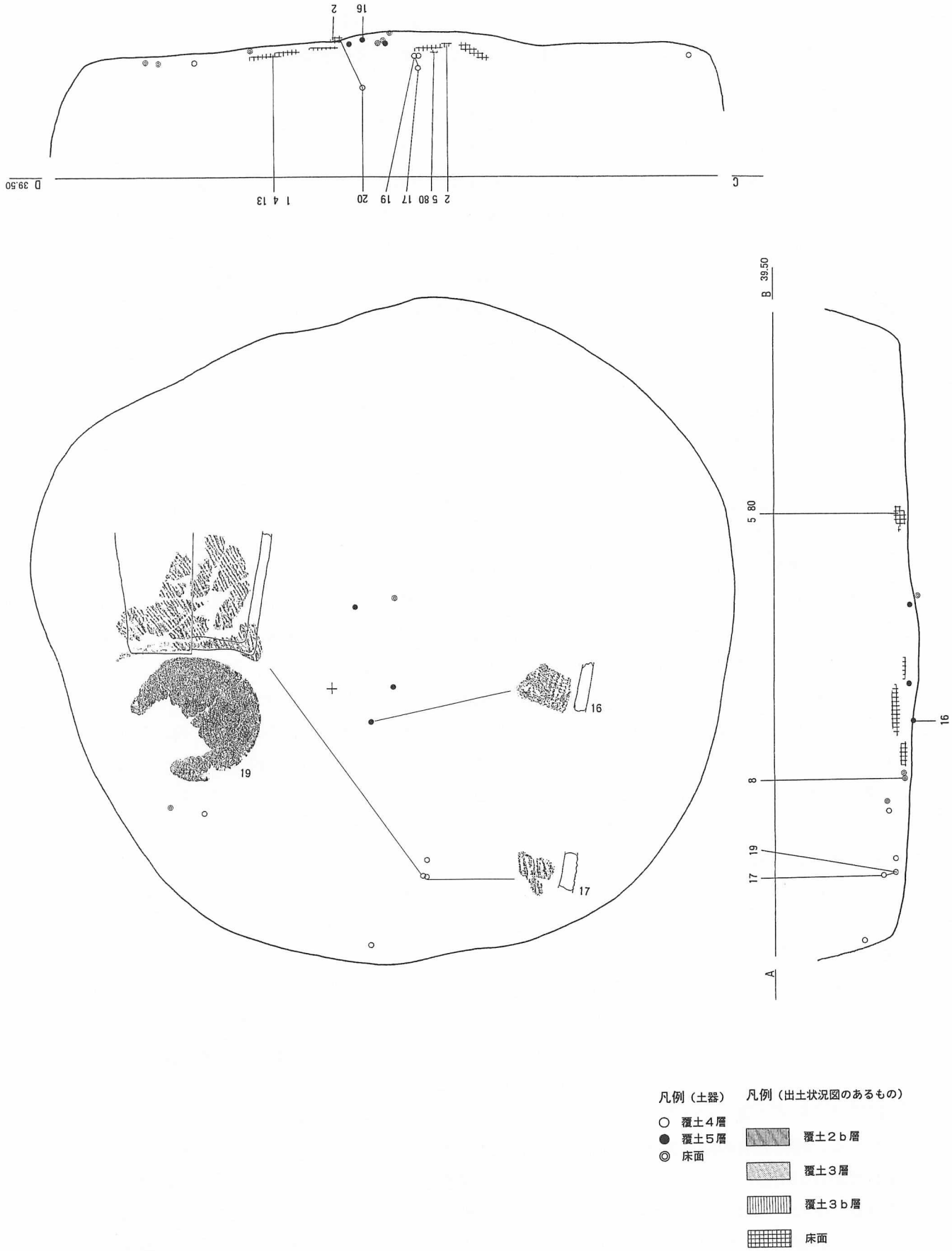
図Ⅳ－42　Ｈ－１床面遺物出土状況



図Ⅳ－43　Ｈ－１覆土２層・２ｂ層遺物出土状況



図Ⅳ－44　Ｈ－１覆土３層・３ｂ層遺物出土状況



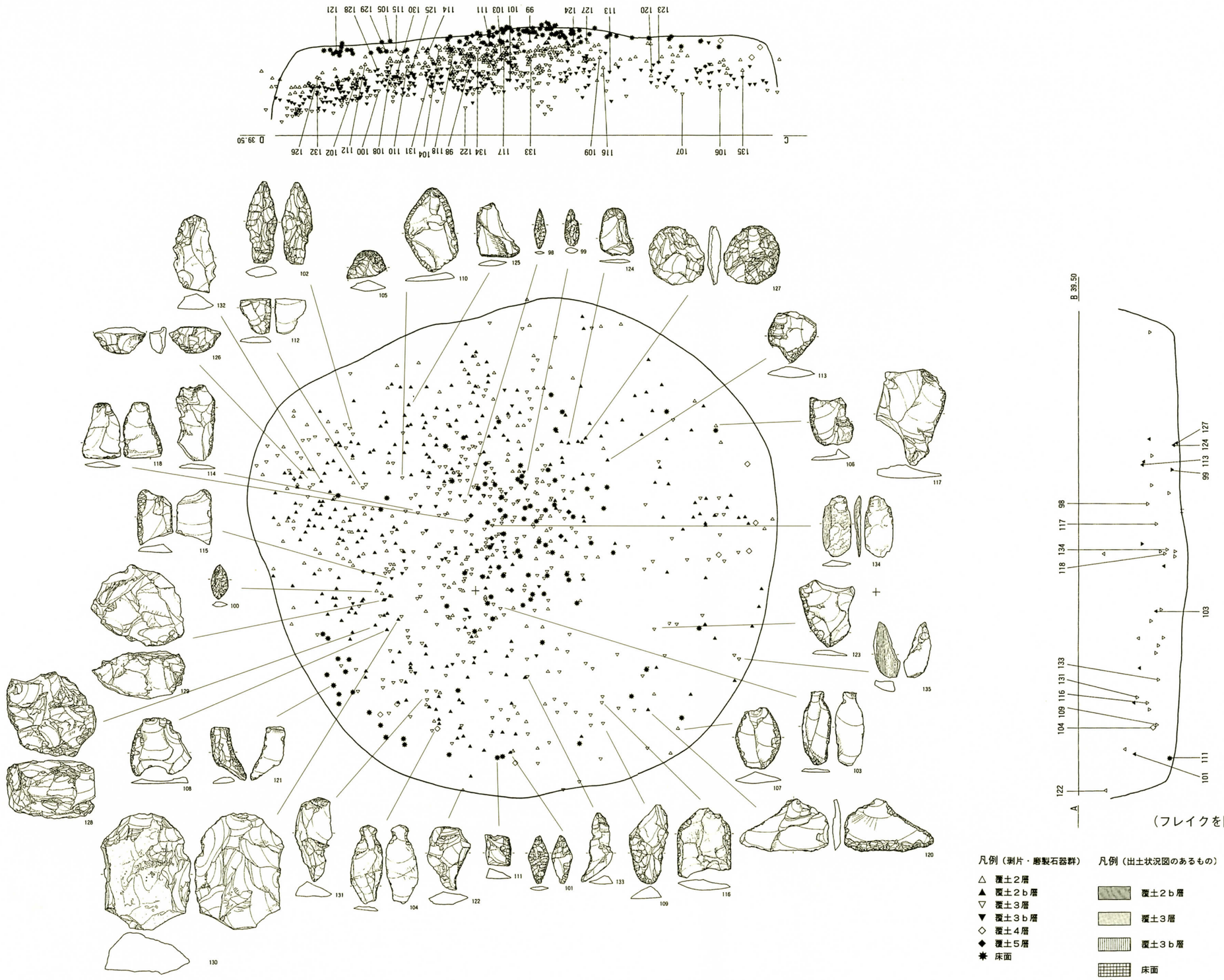
図Ⅳ－45　Ｈ－１覆土４層・５層遺物出土状況

土していない。1は底部周辺が欠失する円筒形の深鉢である。器壁は基本的に薄いもので、やや開き気味の口縁部では厚みが増しその口唇部は断面が円味を帯びている。口縁は平縁で、幅の狭い文様帯と胴部の境界には横環する小柄な隆帯が備わっている。口縁部文様帯はＬＲの縄を連続して押しつけた縄線文を並行させて4条巡らしたもので、先述の隆帯の上とその上下辺にも施されている。隆帯および縄線文の前に施された地紋は、胴部の中位を境に異なる文様が使われている。まず上位にＬＲの斜行縄文、次の胴部下位には交差気味のＲの撚糸文が各施されている。胴下半部は赤化し脆くなっていることから再焼成されたことは間違いなく、食糧などの煮沸に用いられたものと考えられる。内面は風化が進んでいるが研磨された様子が伺え、海綿骨針を含む胎土は独特の質感を有しており他のどれにも類似しない。2は丈の低い深鉢形土器である。平縁で口唇断面は角形を呈す。上げ底の底部は、内面よりも研磨が施される。器壁は厚く胎土には繊維が多く含まれる。文様は口縁部と胴部で異なり、前者はサルボウあるいはハイガイなどを用いたと考えられる横位の貝殻条痕文、後者には太いＲの撚糸文が縦位に施されている。施文順位は撚糸文→条痕文である。3は胴部の約半分だけが出土した深鉢形土器である。外に向かって僅かに開く口縁部の口唇断面は丸形を呈するもので、残存するものから口縁は恐らく平縁になるものと考えられる。文様はおおよそ地紋的な様相のものが、器面の上位から三段に分かれて施されている。口縁部を含む上位には細いＬＲの斜行縄文、中位には斜行するＬＲＬ三段複節の縄文、下位にはその原体を斜位に回転施文したものが施されている。上位の地紋に関しては、あるいは口縁部文様帯の意識が伴っていた可能性もある。内面は非常に丁寧な研磨がなされており、床面出土の中でも突出している。胎土中には繊維と共に白色の小岩片が多く含まれている。4は横環する隆帯から上位の口縁部が欠失する器壁の厚い深鉢形土器である。胴部の地紋は撚りの強いＲの撚糸文が明瞭に施文され、指頭状の工具で刻みが入る隆帯は、その上から施されている。撚糸文は非常に強く押捺されたもので、撚糸の間に見える器面には軸の凹凸が残っている。同じ撚糸文は上げ底の底面にも施されている。胎土中には多くの海綿骨針が含まれているが、それ以外にチャートの小礫や砂粒なども多く含まれており他と比べて一層重い土器に仕上がっている。

5～7・9～11は胴部片で、いずれも底部に近い位置のものと推定される。地紋に用いられている文様は、5がＲの撚糸文、6・7・9が太い縄を使ったＬＲの縄文、10が三段複節の縄によるＲＬＲの縄文、11が交差するＲの撚糸文が各施されている。8は太い縄を使ったＬＲ縄文の施される上げ底の底部である。この中で内面が研磨されているのは7・10・11で、10には胎土中に橄欖岩と目される黒色の重鉱物が混じる。

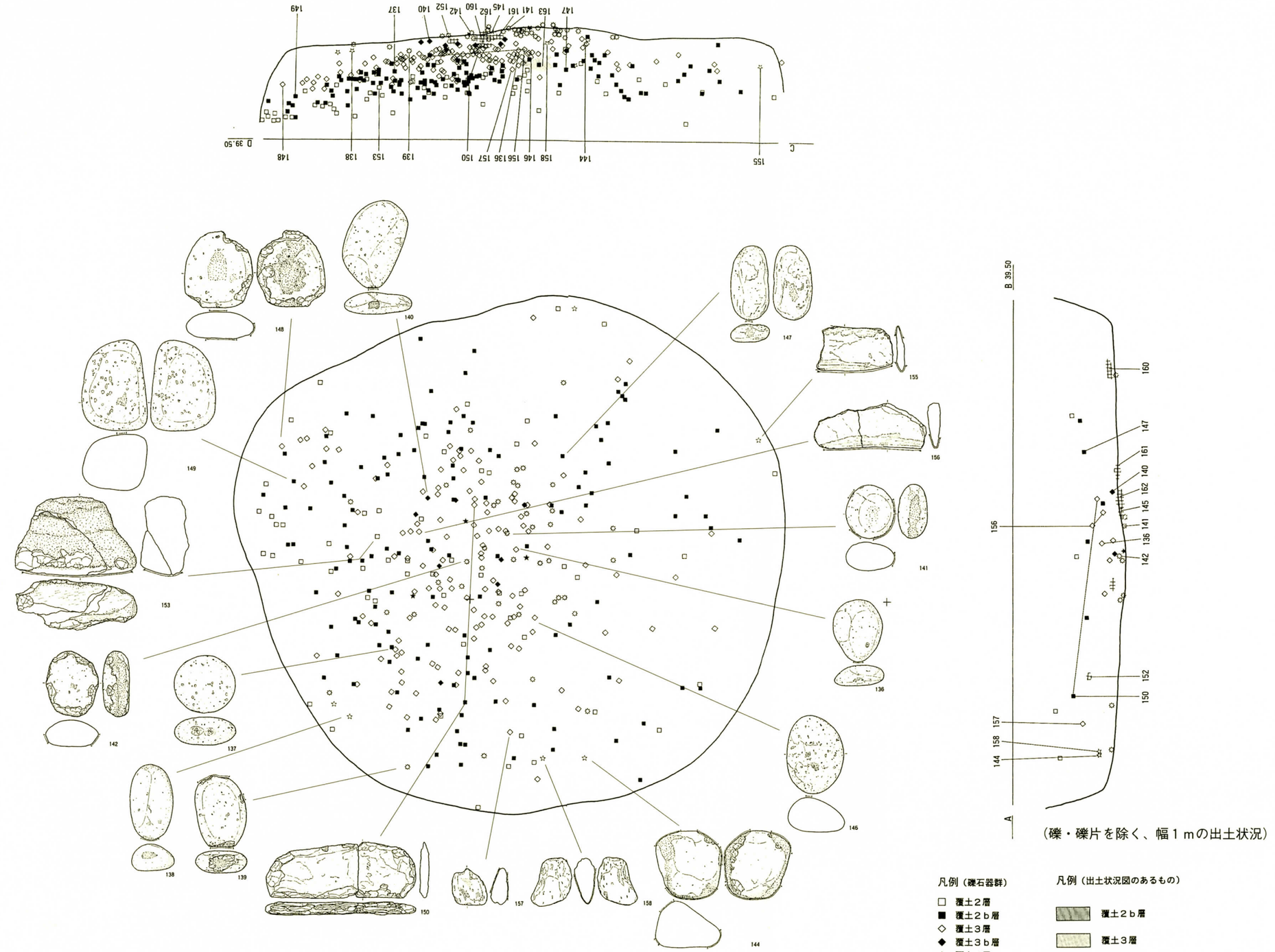
12～15は一部が床面から、主体部が覆土2ｂ・3・3ｂ層から出土したものである。これらは前述の土器群の時期に準ずる可能性があることから「第2段階」の土器群とした。これ以降の土器には竪穴外から同一個体が見つかるものが現れる。

12は破片の多くが覆土3層から出土した深鉢形土器の胴部から底部である。器壁は厚く、内面には丁寧な研磨が施されている。胎土中には微量の海綿骨針と繊維そして多くの砂粒が混入されており、そのせいか重量も他の土器と比べて重いものとなっている。文様は太く緩めのＲ撚糸文を地紋に施し、上半部に太いＬＲの縄文を部分的に加えている。この文様構成から見て、上半部あるいは口縁部文様帯には後者の縄文が使われていた可能性が高い。底面は欠失しているが、上げ底になるものと推定される。13はＬＲの斜行縄文が全面に施された丈の低い深鉢形土器である。破片の多くは覆土3～3ｂ層から出土したもので、さらに30m以上離れた包含層Ⅰ－16－ａからも接合するものが見つかっている。また、この13と後述する覆土2ｂ層出土の80に認められる口径と底径のバランスや頸部の括れなどの諸様相は、他の円筒形のものと比較して趣がやや異なる。器形は平縁で頸部に明瞭な括れを



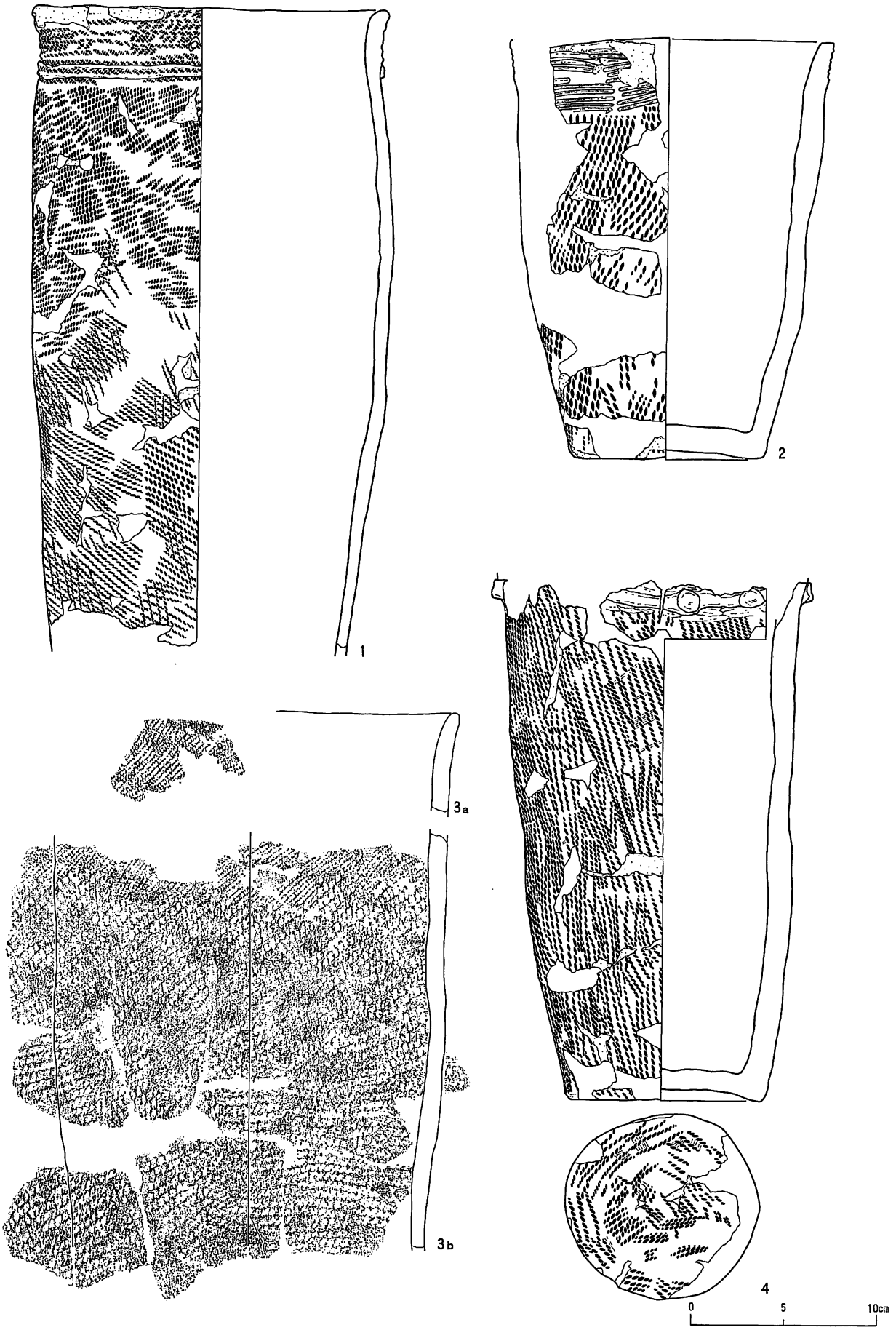
（フレイクを除く、幅１ｍの出土状況）

図Ⅳ－46　Ｈ－１剥片石器群出土状況

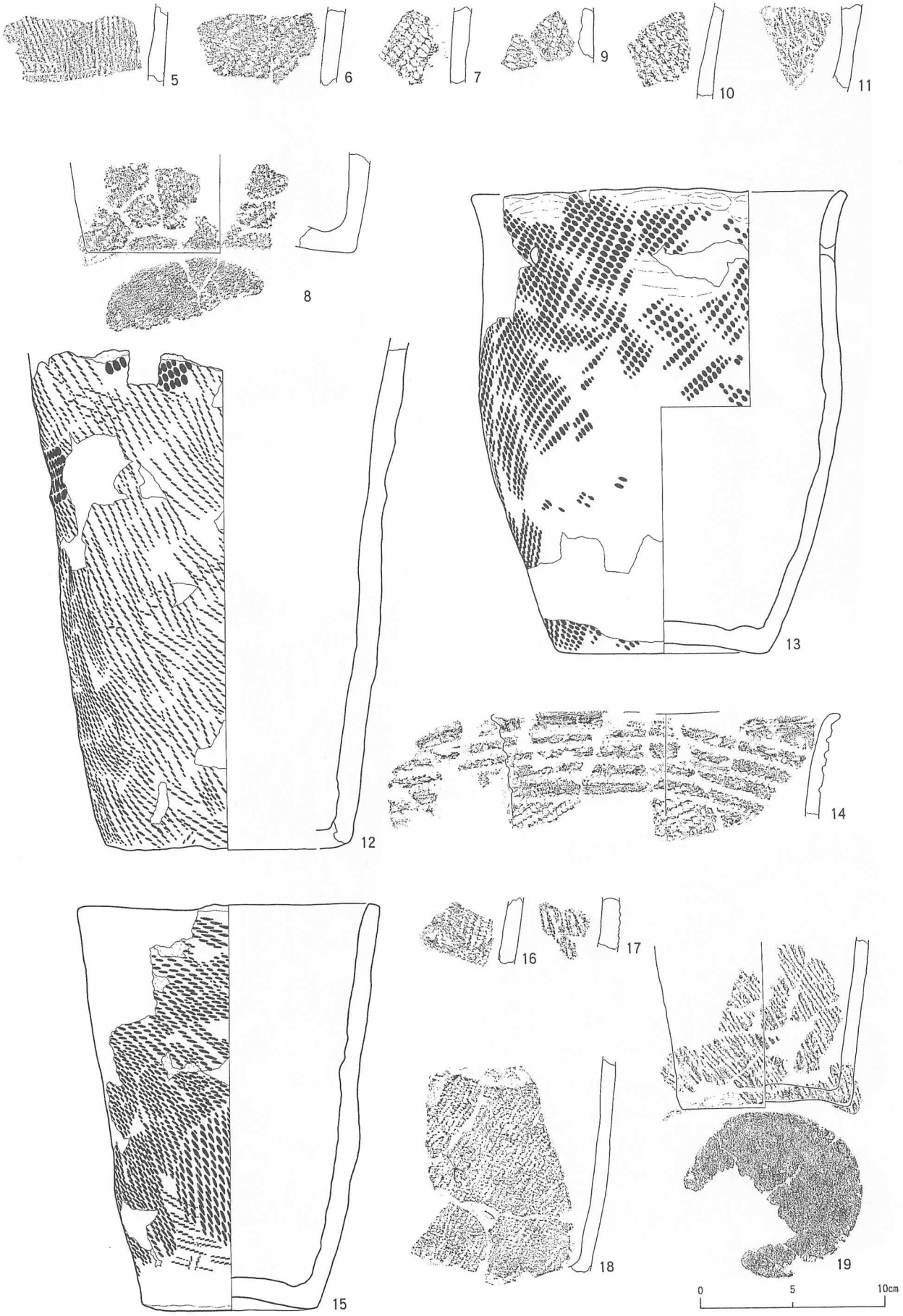


（礫・礫片を除く、幅１ｍの出土状況）

図Ⅳ－47　Ｈ－１礫石器群出土状況



図Ⅳ－48　H－1出土の土器(1)



図Ⅳ－49　Ｈ－１出土の土器(2)

有し、胴部から上げ底の底部へと繋がるラインにも明瞭な絞り込みが認められる。外に向かって開く口唇の断面形は円味を帯びたもので、器壁は比較的薄い部類に入る。口唇部直下の器面には口縁と並行する条痕状の文様らしきものが地紋の上から施されており、底面にも地紋と同じ文様が施されている。また、内面は丁寧な研磨が全面になされている。14はRの撚糸を使った絡条体圧痕文の施される口縁部である。平縁の口縁部に施される5条の絡条体圧痕文の下位にはLRの斜行縄文が施されている。内面は研磨され、胎土には繊維と多量の海綿骨針が混入する。これも土器の主体は覆土2b層で、これ以外では20m以上離れた包含層O－16－aからも同一個体の土器片が見つかっている。15は丈の低い円筒形の深鉢である。土器の主体は覆土2b層で、底面から出土したのは2点の土器片だけである。これ以外では周囲の包含層からも同一個体の土器片が見つかっている。口唇断面は円味を帯びた角形で、器壁は厚く底部が上げ底になっている。文様は太く緩めのR撚糸文を地紋に施しているが、器面の上半部は斜位、下半部は縦位を各意識したような構成となっている。胎土中には繊維と海綿骨針が混入する。

16は覆土5層、17が覆土4層、18・19が覆土3～4層からの出土である。16～18は底部に近い胴部片で、各器面には16がLRの縄文、17がRの撚糸文、18が撚り戻しのLLRの縄文が施されている。19はRの撚糸文が施される底部である。内面は研磨され、胎土中には多量の海綿骨針が含まれている。

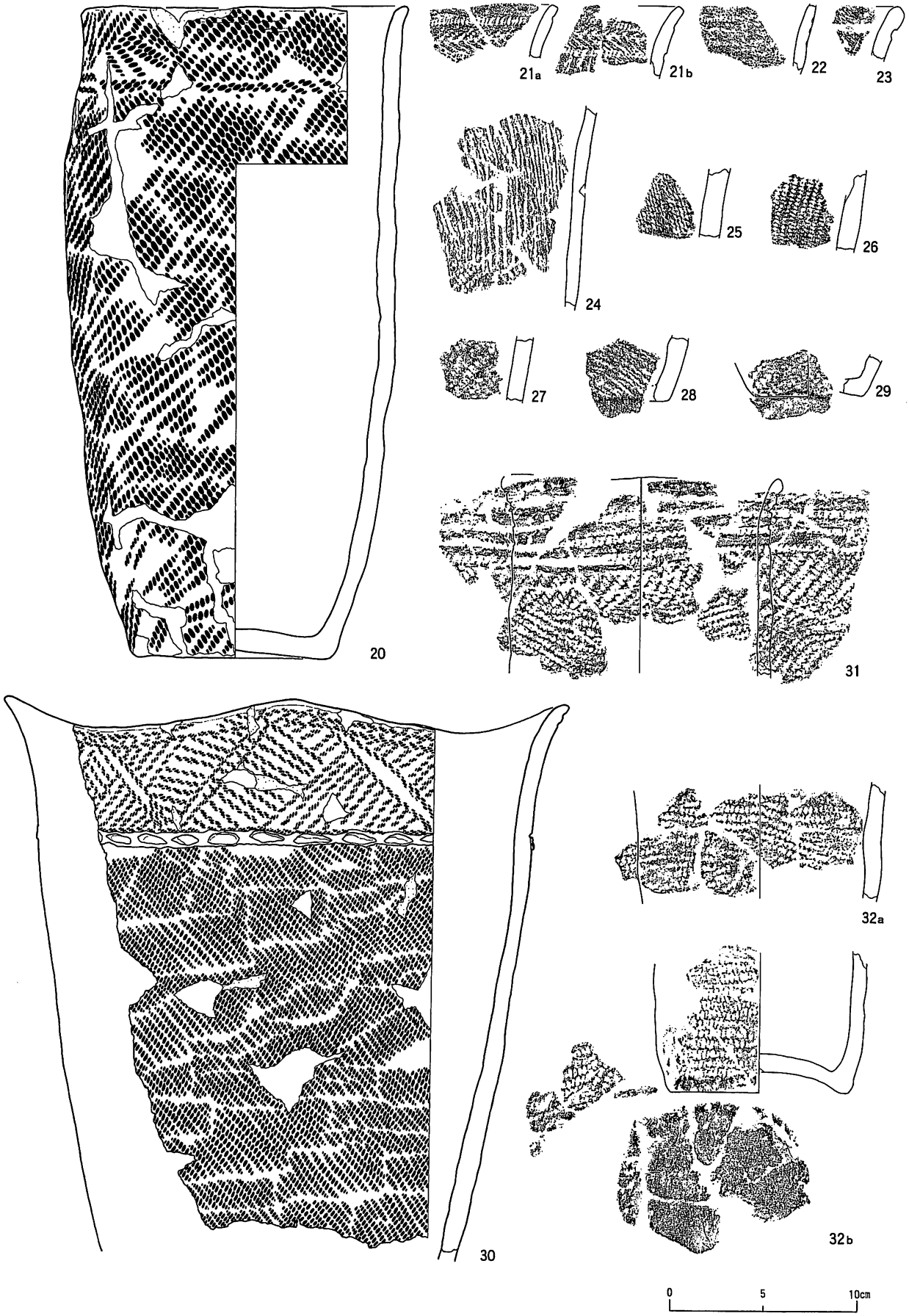
20～30は覆土3b層、31・32は覆土3～3b層から出土したものである。これらのものを「第3段階」とした。時期的な位置は「第2段階」よりも僅かに新しい可能性がある。

20は復元された円筒形の深鉢土器で、主要部は覆土3b層から出土した。口縁部は平縁で、外に向かって僅かに開く口唇の断面は円味の強いものである。底部は上げ底で、僅かに膨らむ胴部には焼成時のものと考えられる部分的な歪みが認められる。ほぼ全面に太いLRの縄文を使った地紋が施され、同じ原体は地紋の上から押捺される頸部の縄線文にも使われている。内面は研磨が施され、胎土中には微細な白色岩片が多数含まれている。21・22は絡条体圧痕文の施された口縁部で、21a・bには結束第一種の羽状縄文が併用されている。23は横方向に押し引きの様な刺突文の施された口縁部で、地紋は撚糸文である。24～27は胴部で、地紋は24が撚糸文と斜行縄文、25が撚糸文、26・27が斜行縄文である。28・29は底部で、29はやや上げ底気味である。30は緩やかな山の波状を呈する口縁を持つ大型深鉢形土器で、大半が本遺構の覆土3b層から大きな破片の状態で出土した。接合はしないが同一個体の破片1点がH－15覆土2b層から出土している。少し外に向かって開く口縁部と胴部の境には、太い棒状の施文具を使った刻みの施された、厚みのない粘土紐の貼付が横環している。口縁部文様帯にはLRの縄線文を用いた鋸歯的な幾何学模様が施され、胴部の地紋は比較的良く整ったRLの斜行縄文である。口縁の波頂部は四箇所と推定される。

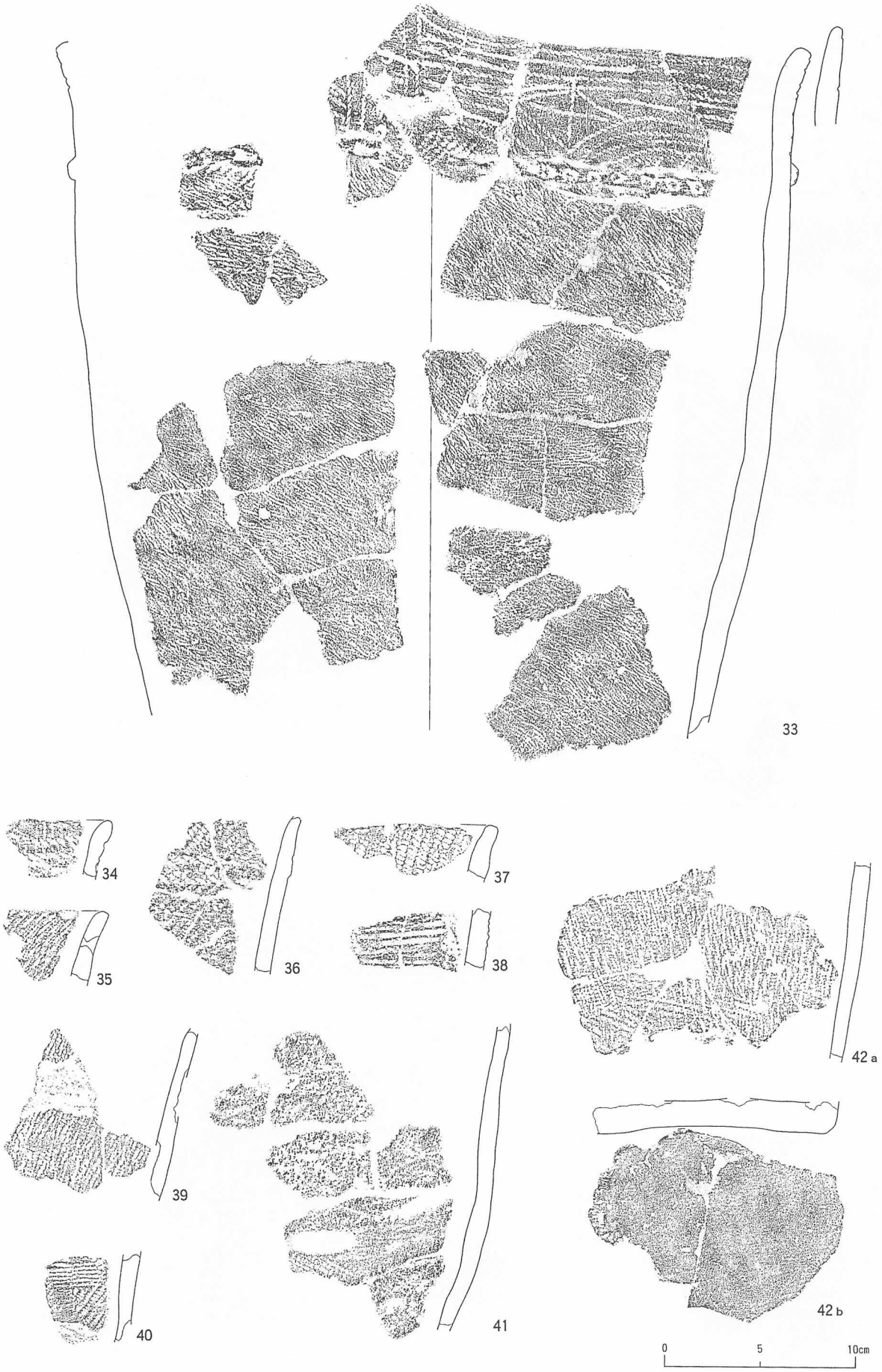
31は4条の絡条体圧痕文が施された口縁部である。平縁で口唇部の断面形は円く、胎土には海綿骨針が混入している。胴部の文様は縦横位に施されたLRの縄文で羽状を意図する文様構成が窺える。32a・bは条が横走気味のLR斜行縄文が施された胴部と上げ底の明瞭な底部である。胎土は海綿骨針入りである。

33～59は取り上げ層位の主体が覆土3層のもので、これらは「第4段階」のものである。

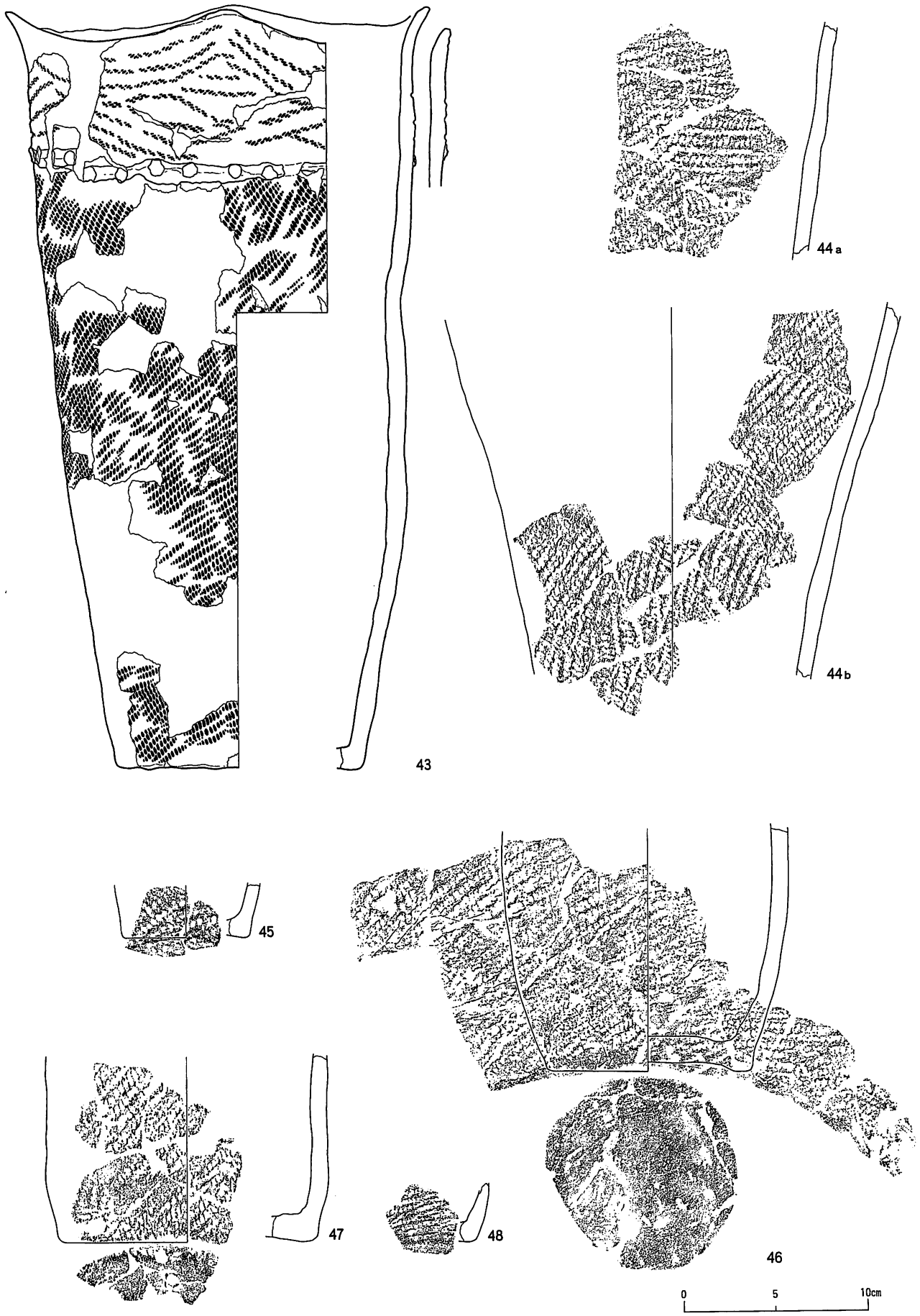
33は起伏の小さな波状口縁を有する大型の深鉢土器である。器壁は厚く、口唇の断面は丸形である。口縁部の文様帯には、LRの縄線文で菱形を含む文様が描かれており、その一部にはLRの縄文も施される。胴部の地紋は撚り戻されたRRの縄文である。口縁の文様帯と胴部との境を横環する隆帯は地紋の上から貼り付けられたもので、その隆帯上には竹管状の施文具による刻みが施される。内面の研磨は比較的丁寧なもので、胎土には繊維と小礫を含む砂粒が多量に含まれている。なお、33は10m



図Ⅳ－50　H－1出土の土器(3)



図Ⅳ－51　Ｈ－１出土の土器(4)



図Ⅳ－52　H－1出土の土器(5)

以上離れた包含層Ｍ－23－ｂから出土したものと接合している。34～37は口縁部で、地紋は34が撚糸文、35が撚り戻しの縄文、36・37が比較的太い原体を用いた斜行縄文である。34・36は口縁部に横環する二条の縄線文を持ち、36の縄線文は厚みの少ない隆帯の上下に施されている。38も口縁部と考えられるもので断面が角形の口唇部と貝殻を用いたと推定される横位の条痕文が施された文様帯を持つ。42はＲＬの自縄自巻を用いた縄文が施される胴部と底部で、胴部にはさらに上から貝殻条痕文も施されている。

39～46は斜行縄文の施された胴部である。原体は、39・40・42～46がＬＲで、41がＲＬである。40はその上から間隔の密なＲの撚糸文も施される。44ａ・ｂは胴部の上位と下位で施文の方向を変化させた胴部である。接合はしないが同じ個体の土器がＨ－15の覆土３層からも出土している。45～46は底部で、46は上げ底で、47にもその傾向が認められる。43は四箇所の低い山形突起とＬＲの縄を使った縄線文で菱形状に構成された口縁部文様帯を持つ深鉢形土器である。器壁は比較的薄く、全体からは僅かながら歪みが見て取れる。口縁部は先の方で開きが強くなるもので、口唇部の先端は丸味を帯びている部分と尖り気味の部分とがある。口縁部文様帯と胴部の境には、指頭で刻みの入る断面三角形の貼付が巡らされている。地紋はＬＲの斜行縄文が施されており、施文順位は胴部地紋→口縁部の縄線文→貼付文である。また、器面の下半には炭化物の付着や焼成によると思われる赤化を伴った「弾け」が良く見て取れる。胎土中には白色岩片の混入が顕著で、内面は研磨が施されている。

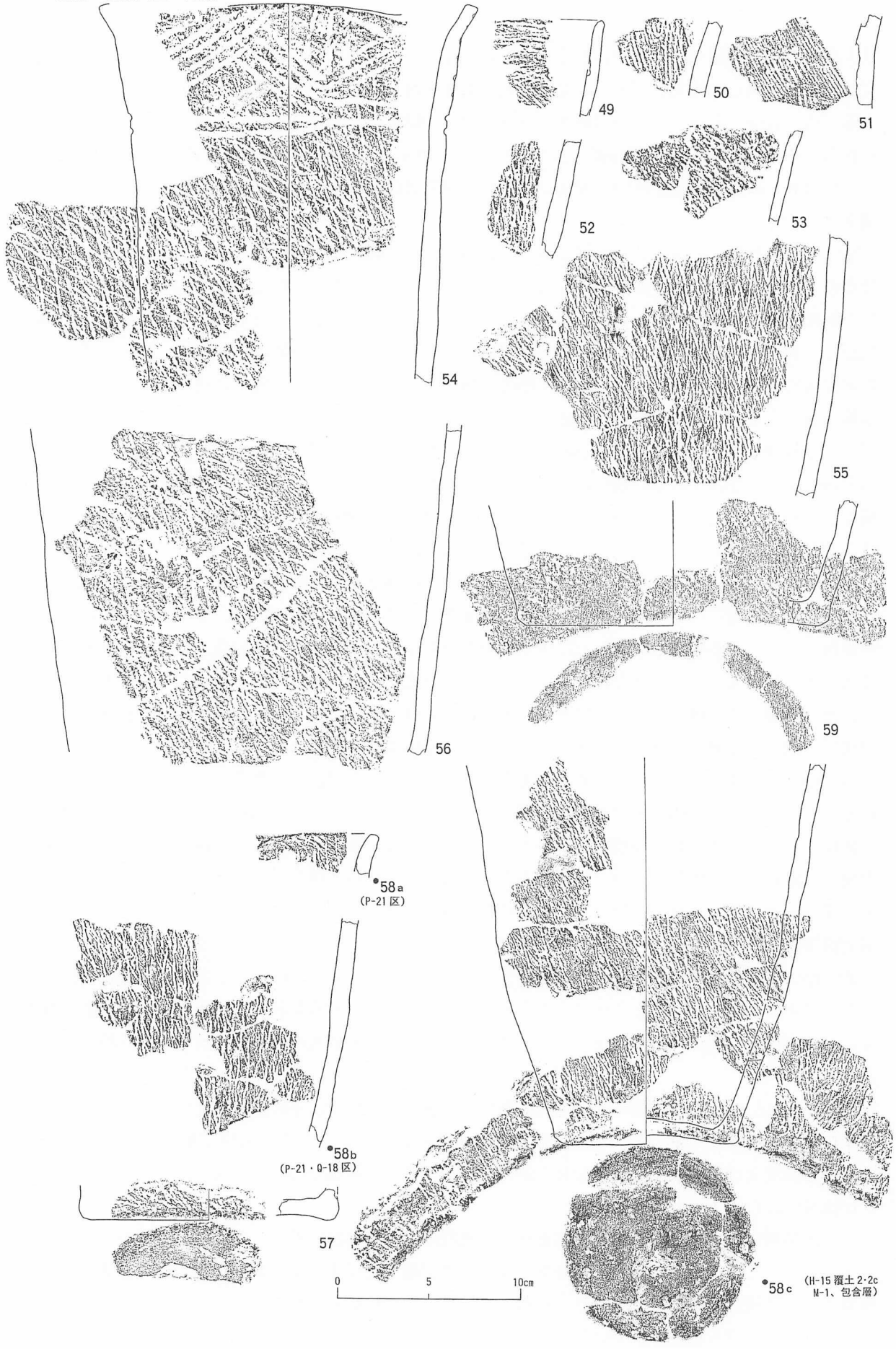
49～58は撚糸文の施されたものである。49～51はＲの撚糸文が比較的密に施された口縁（49）と胴部（50・51）である。49は同じ原体を横位に施文させた文様帯を持っており、その口唇部の外側上端が捲れ上がっている。49と50は胎土に少量の海綿骨針を含む。50はＨ－３の覆土２層から出土しているＨ－３－19とよく似た特徴を持つ。また、51の撚糸文には細い繊維を強く撚ったものが使われており、Ｈ－15覆土２ｃ層出土（Ｈ－15－41）土器とよく似た特徴を持つ。これらは各同一個体の可能性が高い。52・53は網目状撚糸文の施された胴部で、原体はＲが使われている。

54～59には、施文方向の角度を僅かに変えて条を交差させ、網目状になるようにした撚糸文が施されている。これらの原体もＲである。このうち、53・55・56の胎土には海綿骨針が混入する。54は弱い波状を呈する口縁を有する器壁の厚い土器である。口唇の断面は角形で、口縁部にはＬＲの縄線文を使った鋸歯状の文様帯を持つ。Ｈ－15の覆土３層出土のものと接合している。58ａ・ｂは包含層から、また58ｃはＨ－15覆土、Ｍ－１、周辺の包含層から出土し接合したもの（Ｈ－15－８ａ～ｃ）。本遺構覆土３ｂ層から未接合の破片が１点出土している。57・58ｃの底部は上げ底である。

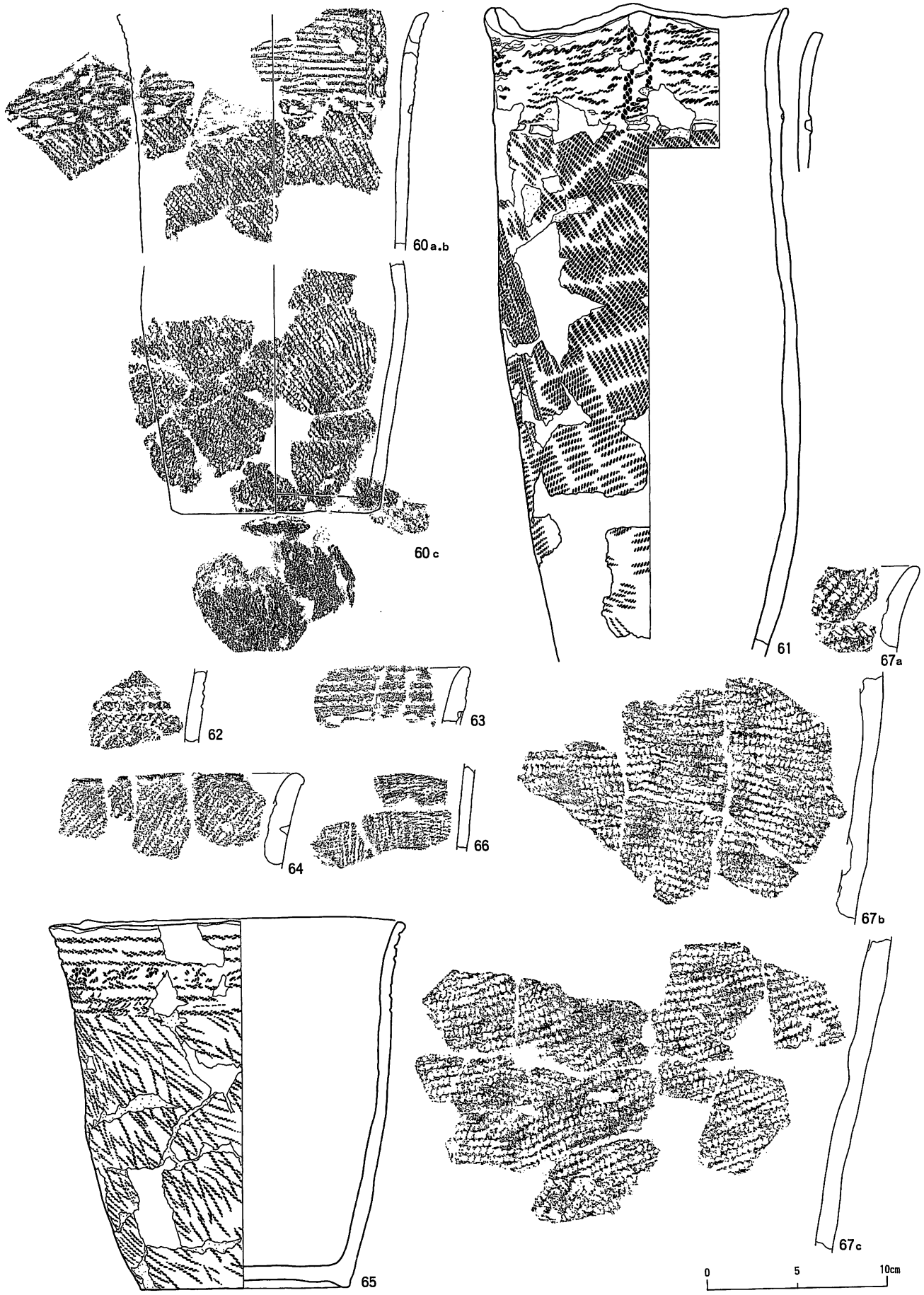
60～68は主体部が覆土２ｂ層で一部が覆土３層から出土したもの、69～92が覆土２ｂ層から出土したものである。覆土２ｂ層を主体に出土するものはＨ－１の中でも比較的新しいとされる文様的特徴を持つ土器群で、周囲の包含層から同一個体のものが出土する場合が多い。これを「第５段階」とした。

60ａ～ｃは口縁部の文様帯に横位の貝殻条痕文を施したもので、その条痕の上からは縦に施された二本のＬＲの縄線文の間に５箇所程の刺突を施す組み合わせを恐らく等間隔で数カ所付け加えている。同じ刺突文は口縁部文様帯とＬＲの斜行縄文の施された胴部との境にも加えられている。胎土中には海綿骨針の混入が認められる。

61は四箇所の低く緩やかな山形突起を有した波状口縁の深鉢形土器で、胴下半は歪みが大きく底部が欠失している。口縁部にはＲの綾絡文五条と山形突起下位に垂下する太い二本のＬＲの縄線文とで構成される文様帯が設けられており、胴部との境には太い棒状の工具で右から左に突き刺すように施された刺突文の列も加えられている。胴部の地紋は、基本的にＲＬの斜行縄文が使われている。しか



図Ⅳ－53　Ｈ－１出土の土器(6)



図Ⅳ－54　H－1出土の土器(7)

し、その施文方向は上半部で横位、下半部で縦位に施され、その上から更にＲの撚糸文も加えられる。内面は研磨され、胎土中には海綿骨針と白色岩片の混入が認められる。胴下半は二次焼成によるものか赤化が顕著である。62は口縁近くの胴部で、ＬＲの斜行縄文を施してからＬＲの縄線文を横位に三本加えている。63はＬＲの縄線文が横位に三本、その下位に刺突列が施された口縁部、64はＬＲの自縄自巻縄文の施された口縁部である。どちらの口唇断面も円味を帯びたもので、64は外側に捲れが見られる。

65は平縁と上げ底を有する比較的丈の低い深鉢形土器で、この器形は今回出土の中では少ない。口縁部には二本のＲの綾絡文とその上下段に各三本ずつＬＲの縄線文が施され文様帯を構成している。胴部地紋はＲの撚糸文の施文方向を僅かに変えて撚糸同士を交差させたもので、内面は研磨が成されている。胎土中には多数の海綿骨針が混入し、胴部下位には二次焼成のためか赤化した部分も見られる。

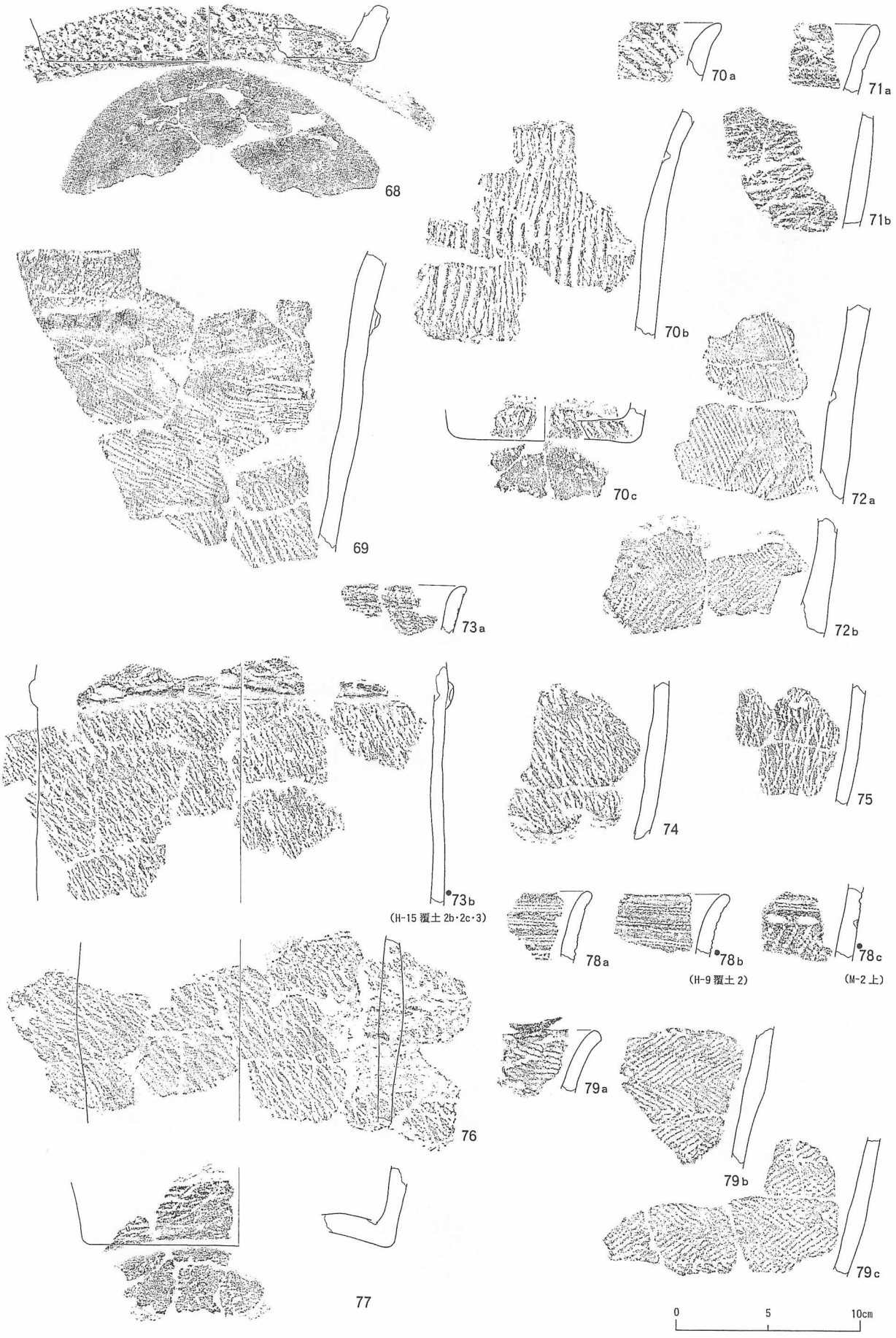
66はＲＬの自縄自巻的な縄文が施される底部近くの胴部である。67ａ～ｃは太いＬＲの原体を使って斜行縄文を施した口縁部から胴部で、条の方向を口縁部で右上がり、胴部で横方向に成るよう変化させている。68はＬＲＬの三段複節の縄文が施された大型の底部である。

69は器壁の厚めな口縁部近くの胴部の破片である。指頭状の道具で刻みの施された粘土紐の貼付を境に、上位はＬＲの斜行縄文、下位にはＲの撚糸文が施されている。撚糸文は下位になるほど施文密度が粗になっている。接合はしないが同じ個体の土器がＨ－15の覆土２ｃ・３層からも出土している。70ａ～ｃは太目で撚りの緩いＲの撚糸文が全面に施された器壁の厚い土器である。外側にややきつく広がる口縁部には条が斜位の撚糸文、胴部には縦位の撚糸文が施されている。71ａ・ｂは同じＲの撚糸文を二度施文する事で、撚糸文同士を交差させた地文を持つものである。72は上位にＲの撚糸文を密に施し、下位にＲＬの自縄自巻的縄文を施した器壁の厚い胴部である。胎土には海綿骨針と角閃石の混入が顕著である。

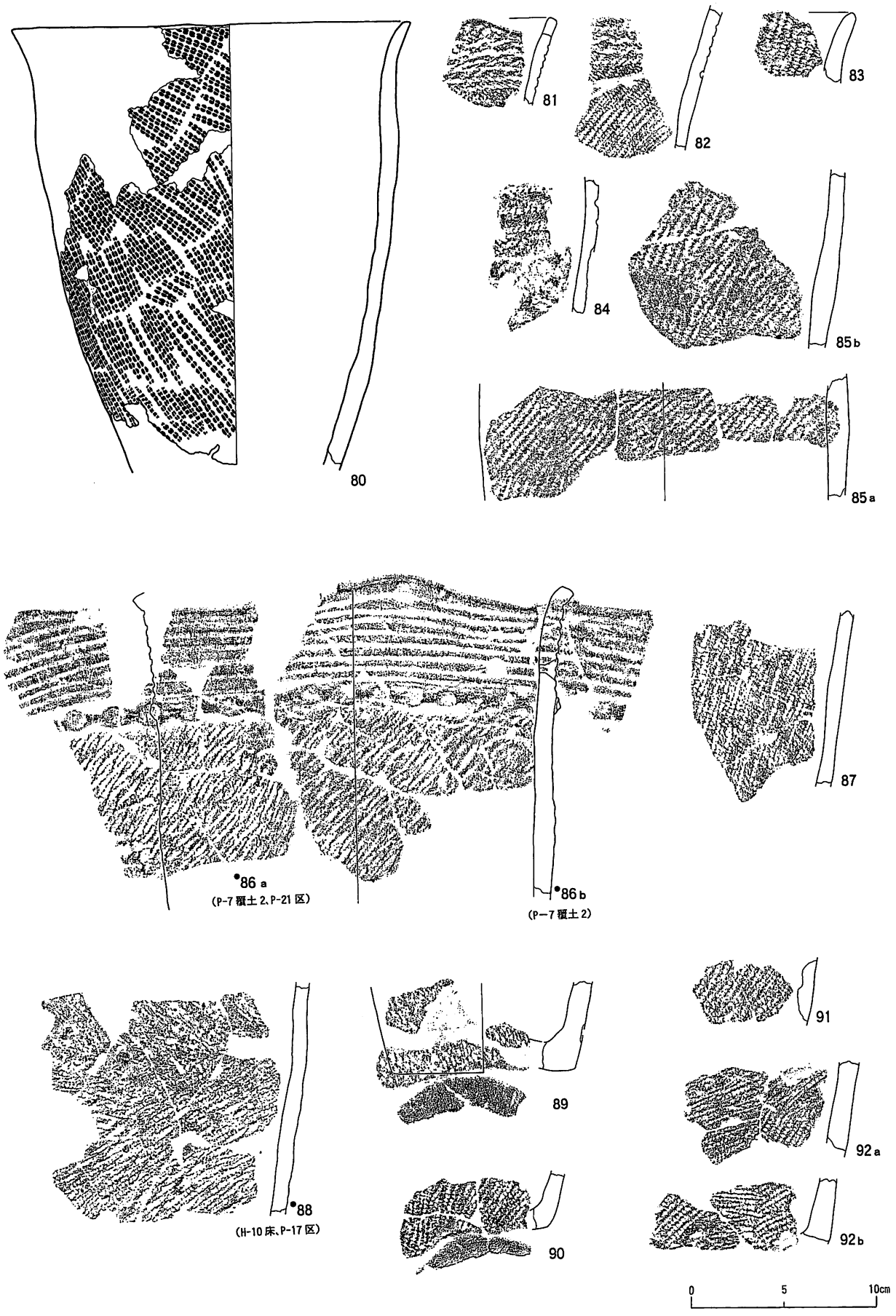
73～77はＲの撚糸文を交差させた地紋が施されたもので、73～76の胎土には海綿骨針が混入する。73ａ・ｂは口縁部文様帯に絡条体圧痕文が施され、胴部との境界には棒状の工具で連続刺突文の施された厚みのない粘土紐が貼付られている。推定される器形から見て器壁が薄い。73ｂはＨ－15覆土２ｂ、２ｃ、３層から出土したもの。75の地紋は網目状撚糸文の可能性もある。76の器面上端には部分的に異なる文様が見られることから、この土器の地紋は胴部上位にＬＲの斜行縄文、下位にＲの撚糸文を交差させた文様が用いられていたものと考えられる。77は上げ底の顕著な底部である。

78～92は縄文系の地紋を持つものである。78ａ～ｃは口縁部とその文様帯部分のある胴部である。78ｂはＨ－９（Ｈ－９－８ｂ）、78ｃはＭ－２（Ｍ－２－16ｃ）出土のもの。無地の器面には、撚りの異なった三本の組み合わせから構成される撚糸のユニットを五条巡らせ、その下に棒状の工具を用いた横位の刺突を連続させて施している。胴部の地紋はＬＲの自縄自巻的縄文と考えられる。

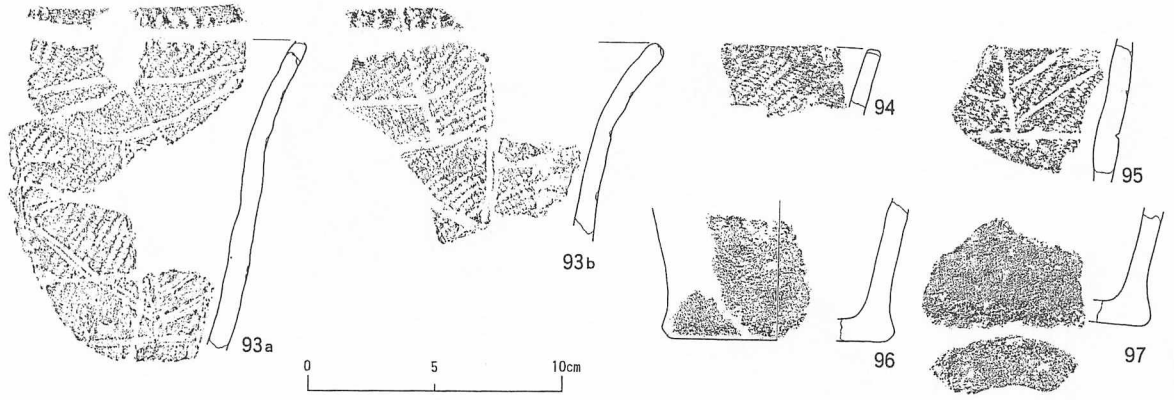
79ａ～ｃは口縁部が波状を呈すると考えられるもので、地紋は結束第一種羽状縄文、口縁部にはＲの無節の縄が施文される。80は口縁部が外に向かって小さく開く平縁の深鉢形土器で、欠失する底部へ向けてのカーブが強く、他の器形とはやや異なる印象を与える。地紋はＲＬＲの三段複節の縄文が、内面にも丁寧な研磨が施されている。胎土には微量の海綿骨針が混入する。81は波状口縁の山形突起部である。ＬＲの縄文の上に施された文様帯の構成は二本のＲの綾絡文と三本のＬＲの縄線文からなる。82は三本のＲの綾絡文が二本のＲＬの縄線文の間に施されている口縁近くの胴部である。83・85はＬＲの斜行縄文が施された口縁部と胴部である。84は口縁部の文様帯にＲの絡条体圧痕文を使った口縁部近くの胴部である。胴部の地紋はＬＲの斜行縄文、胎土中には海綿骨針が入る。



図Ⅳ－55　Ｈ－１出土の土器(8)



図Ⅳ－56　Ｈ－１出土の土器(9)



図Ⅳ－57　Ｈ－１出土の土器(10)

86は低く緩やかな山形突起を有する深鉢形土器の上半部で、口縁部文様帯に８条の細い撚糸を用いた絡条体圧痕文、胴部に撚り戻しと考えられる縄文が施されている。それらの境には指頭による連続した刻み或いは押捺の施された太い粘土紐が貼付されている。胎土中には白色の小岩片が無数に混入している。86ａがＰ－７と包含層から（Ｐ－７－１ａ）、86ｂがＰ－７から出土したもの（Ｐ－７－１ｂ）。本遺構の覆土２ｂ層から未接合の破片が出土している。同一個体の破片はＨ－７の覆土２層からも出土している。

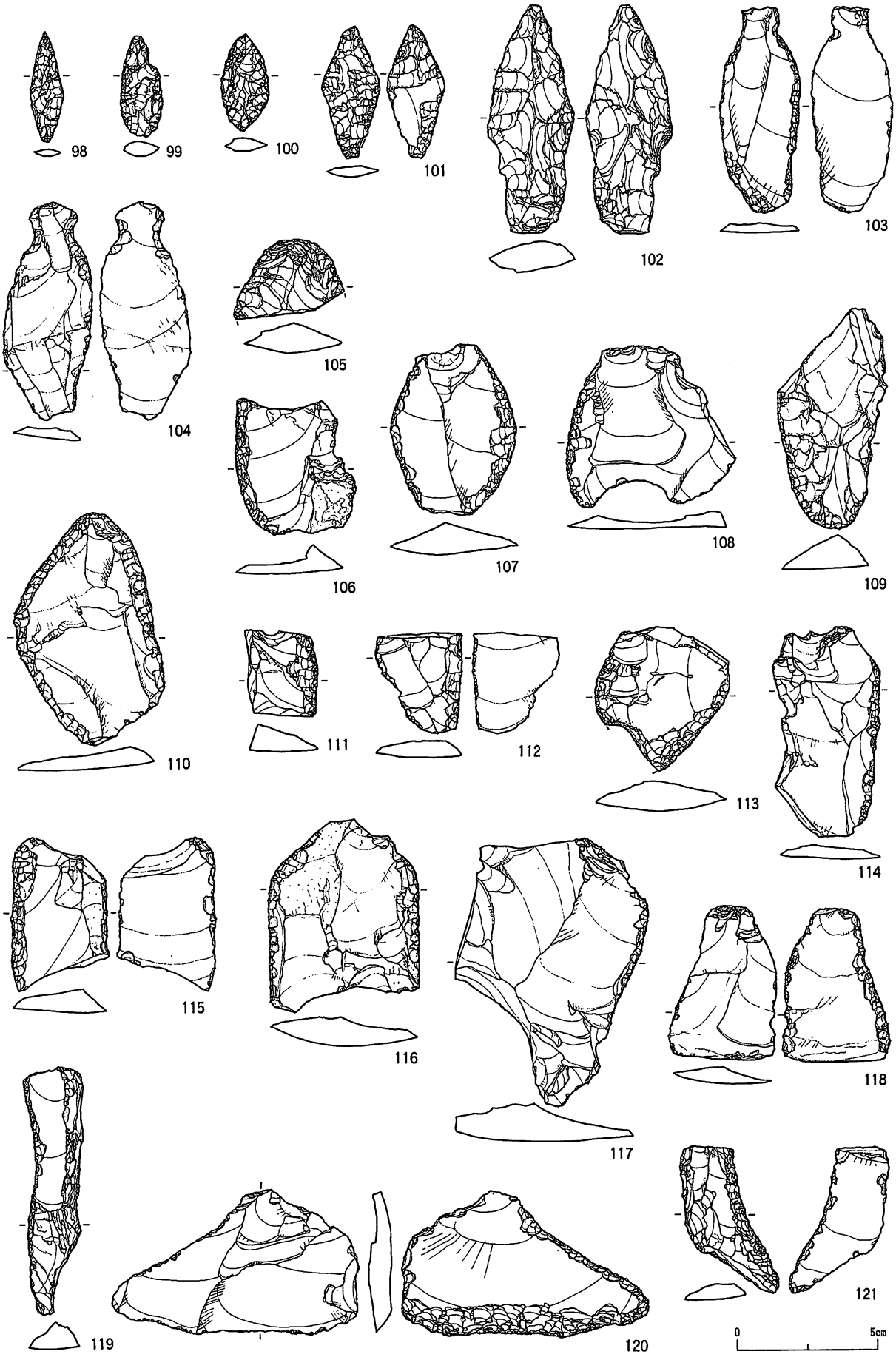
87はＬＲの自縄自巻的縄文、88はＲＬＲの三段複節とＬＬＲの撚り戻しとが施された各胴部で88はＨ－10床面、包含層から出土し接合したもの。未接合の破片が本遺構から出土している。92ａ・ｂはＬＲの斜行縄文が施された底部近くの胴部である。89～91は底部で、89はＬＲＬの三段複節、90・91はＬＲの斜行縄文が地紋となっている。

93～97はⅢ群ｂ類土器で、覆土２～２ｂ層の出土である。93・94は口唇部に縄の刻み、地紋にＬＲの斜行縄文が施される口縁部である。93ａ・ｂは波状を呈し、器面には沈線文も加えられている。95もＬＲの地紋とその上から沈線文が施された胴部、96・97は無文の底部である。　（皆川）

（石器） 98～101は無茎鏃で、98は柳葉形のもの（ＩＡ２ａ）、99・100は木葉形（ＩＡ４）、101は菱形のもの（ＩＡ４）。101は一次剥離面を残す。102は石槍またはナイフで凸基有茎のもの（ＩＢ１）。尖頭部を欠損する。103・104はつまみ付きナイフで片面の周縁を加工したもの（ⅢＡ１ｃ）。104は一側縁のみの加工である。105～125はスクレイパー。105～110は縦長剥片を用い刃部が外湾するもの（ⅢＢ２ａ）、111～117は刃部が直線状のもの（ⅢＢ２ｂ）、118・119は刃部が内湾するもの（ⅢＢ２ｃ）。120は横長剥片を用いたもの（ⅢＢ３）。121～123は尖頭部のあるもの（ⅢＢ６）。124・125は素材となる剥片の形状をあまり変えないもの（ⅢＢ８）。106・115・116は節理面を残す。119は石核の打面調整剥片を用いたもの。126・127は両面調整石器で円形のもの（Ⅳ１）。128～130は石核（ＶＡ１）でいずれも剥片剥離を行った後の残核と考えられる。128・129は少なくとも２回の打面転移が確認できる。130は作業面を固定し、打点を移動して剥片剥離を行ったもの。礫表皮面を多く残し、推測される原石の大きさはソフトボール大である。131～133はＵフレイク（ＶＢ２）で、131・132は使用部が外湾するもの、133は内湾するもの。131は礫表皮面を残す。石材はいずれも頁岩である。

134は擦り切り残片を素材とした小型の石斧片（ⅥＡ）と推測される。135は擦り切り残片（ⅥＡ５）で、剥離した腹面の端部および側面が磨かれており、刃部を作出したものと考えられる。石材はいずれも緑色泥岩である。

136～149はたたき石。136～140は扁平礫の一端もしくは両端にたたき痕のあるもの（Ⅶ１）。136はたたき痕が不明瞭である。141～143は扁平礫の周縁にたたき痕のあるもの（Ⅶ２）。144・145は断面

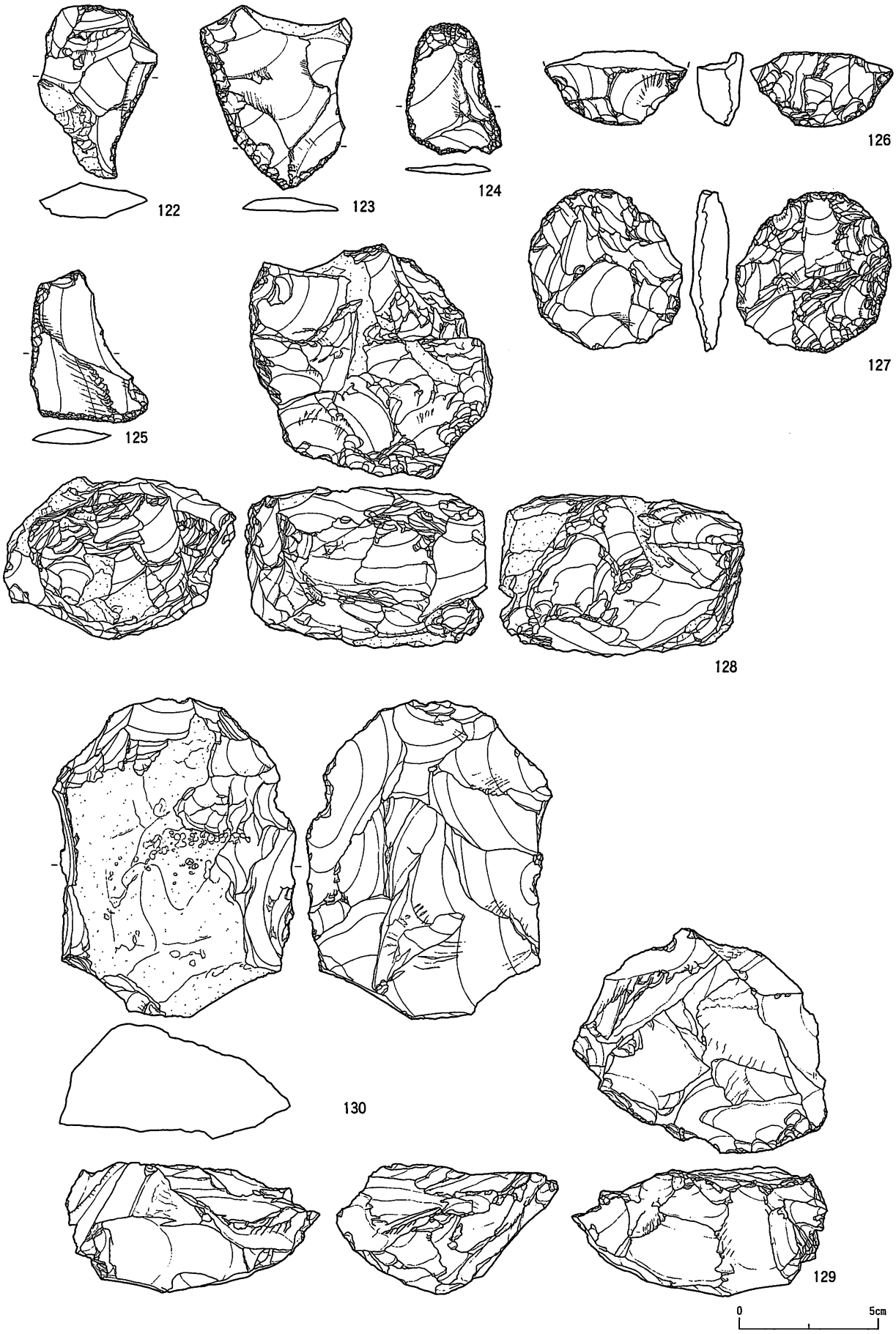


図Ⅳ－58　Ｈ－１出土の石器(1)

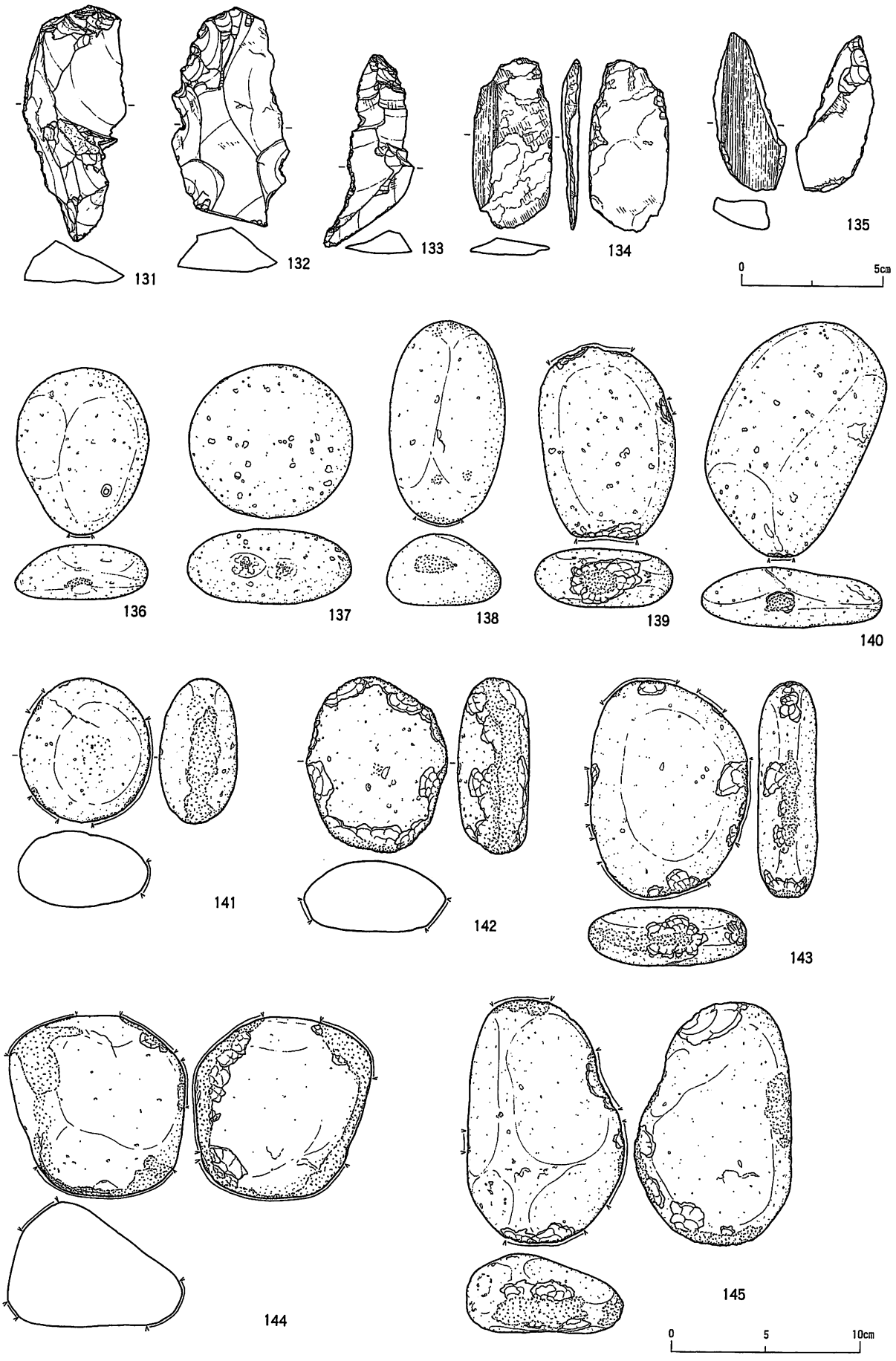
形が三角形に近い厚みのある礫を用い、稜部分にたたき痕があるもので、Ⅶ群２類に一応入れておく。146～148は扁平礫の腹背面にたたき痕があるもの（Ⅶ３）。148は周縁にもたたき痕がある。149は断面形が四角形で、安定性の良い厚みのある礫を用いたもの。背面にたたき痕がありⅦ群３類に一応入れておく。台石の可能性もある。137・143・146は焼成を受け、炭化物が付着している。150は半円状扁平打製石器（Ⅷ３）で、全周を打ち欠き、弦にすり面があるもの。覆土２ｂ層と３層出土のものが接合したもので、腹背面は平滑で、擦り整形がなされたと推測される。151～153は北海道式石冠（Ⅷ４）。151は礫面を残し、把握部を敲打により作出したもの。152・153は全面敲打整形のものである。152は住居跡中央部床面で復元土器１に近接して出土したものである（図Ⅳ－42、図版19－１）。154は円礫の一部にすり面のあるすり石（Ⅷ５）。159の砥石と伴に住居中央部のＨＰ－８に埋設されていたもの（図Ⅳ－36、図版18－５）。石斧製作に関わる石器と考えられる。155・156は板状節理の礫を用いた石鋸（ⅨＡ）。155は幅の狭い断面「Ｖ」字状の使用部（上）と、やや幅の狭い使用部（下）がある。156は幅の広い断面「Ｕ」字状の使用部がある。157～160は砥石（ⅨＢ）。157・158は軽石製の手持ち砥石で、158は腹背面におよぶ横方向の擦痕が確認できる。159はＨＰ－８に埋設されていたもの。腹背両面に砥面があり、全体の４分の１を欠損する。160はＨ－１床面出土のものと、隣接したＰ－57覆土２層、15mほど離れたＨ－３覆土２層、及び包含層Ｍ－21区、Ｎ－21・23区出土の破片が接合したもの。Ｈ－１のものは住居の南西壁近くで据え置かれたような状態で出土した（図版19－６）。Ｐ－57のものは埋め土中のまとまった破片であり、Ｐ－57がＨ－１と同時期に使用されたことを示すものである。上下２面とそれぞれの裏面、合計４面の砥面がある。中央は使用により薄くなり欠損したものであろう。161～163は台石・石皿（Ｘ）。161・162は床面出土の台石。145のたたき石、石核・台石（図示していない）と近接して出土した（図Ⅳ－42、図版19－２）。162は焼成を受けており、一部剥離している。163は覆土３層中からＨＦ－２に隣接し、被熱したたたき石（図示していない）とともに出土したもの（図Ⅳ－40）。たたき痕のある背面を上にして、据え置かれたような状態で出土した。腹面は平滑であり、石皿としても使用したと推測される。石材は150・153が凝灰岩、155・159が流紋岩、157・158が軽石、160が砂岩で残りは全て安山岩である。

時　期　床面出土の遺物から縄文時代前期後半、円筒土器下層ｃ式の古手に相当する時期の遺構である。なお、床面、取り上げの覆土３層から得られた炭化物、および同覆土２ｂ層から得られた炭化クルミについての^{14}Ｃ補正年代はそれぞれ4760±40ｙＢＰ・4820±50ｙＢＰ（床面）、4660±40ｙＢＰ（３層）、4590±50ｙＢＰ（２ｂ層）という結果が出ており（第Ⅵ章２）、考古学的所見と矛盾しない。

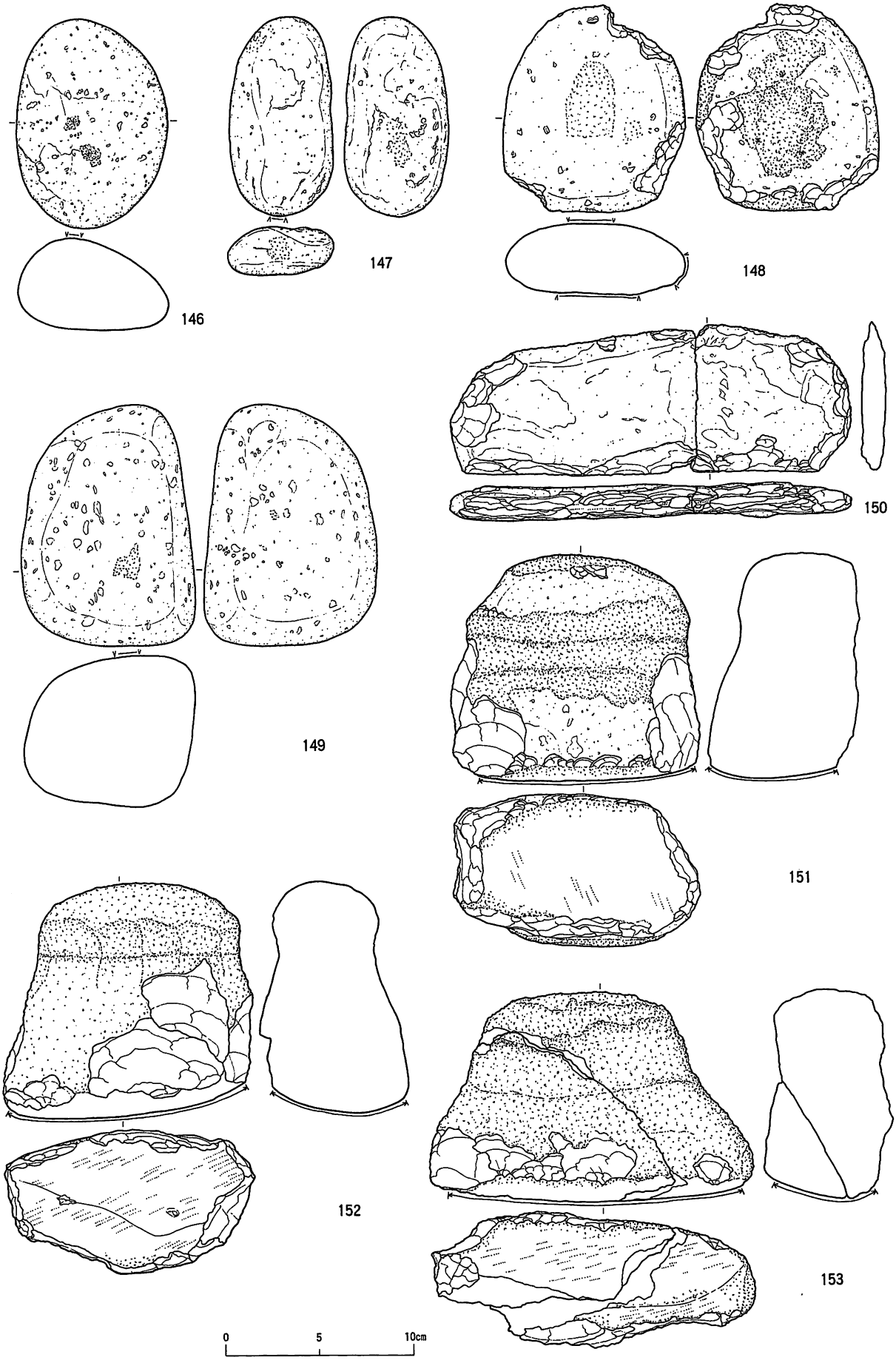
（藤原）



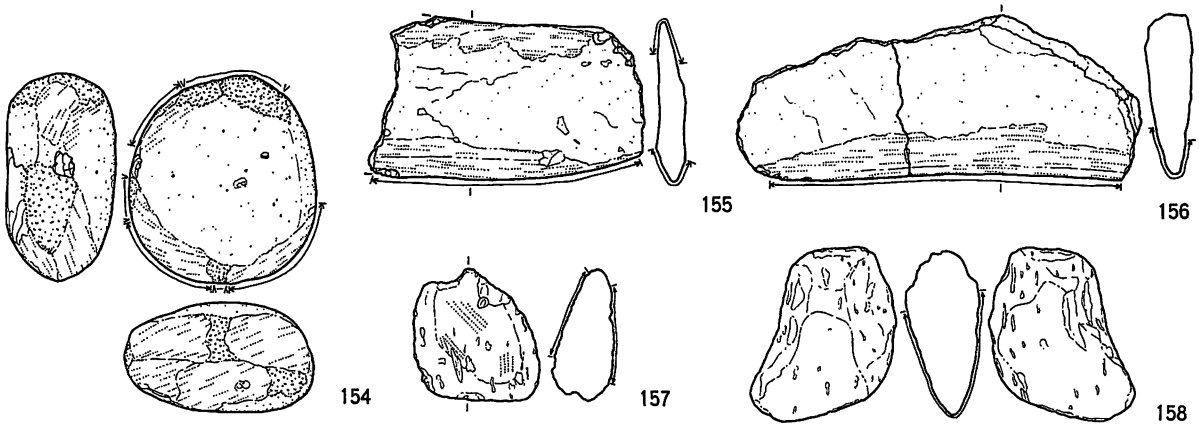
図Ⅳ－59　H－1出土の石器(2)

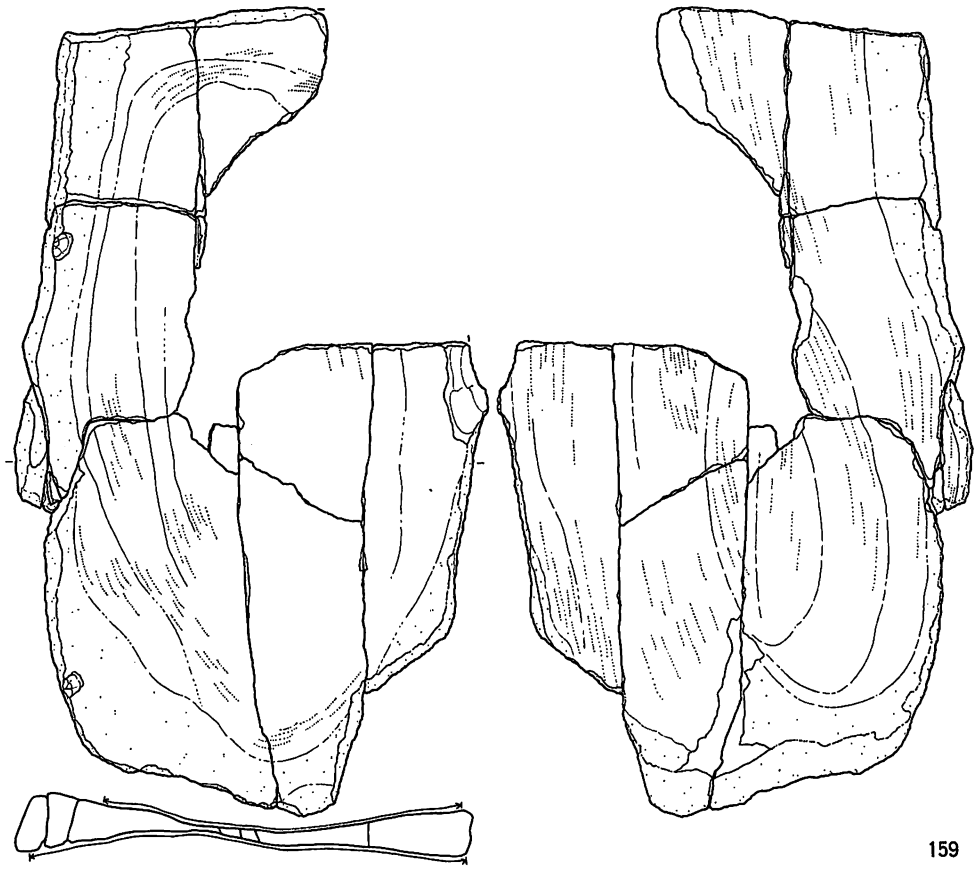


図Ⅳ－60　H－1出土の石器(3)



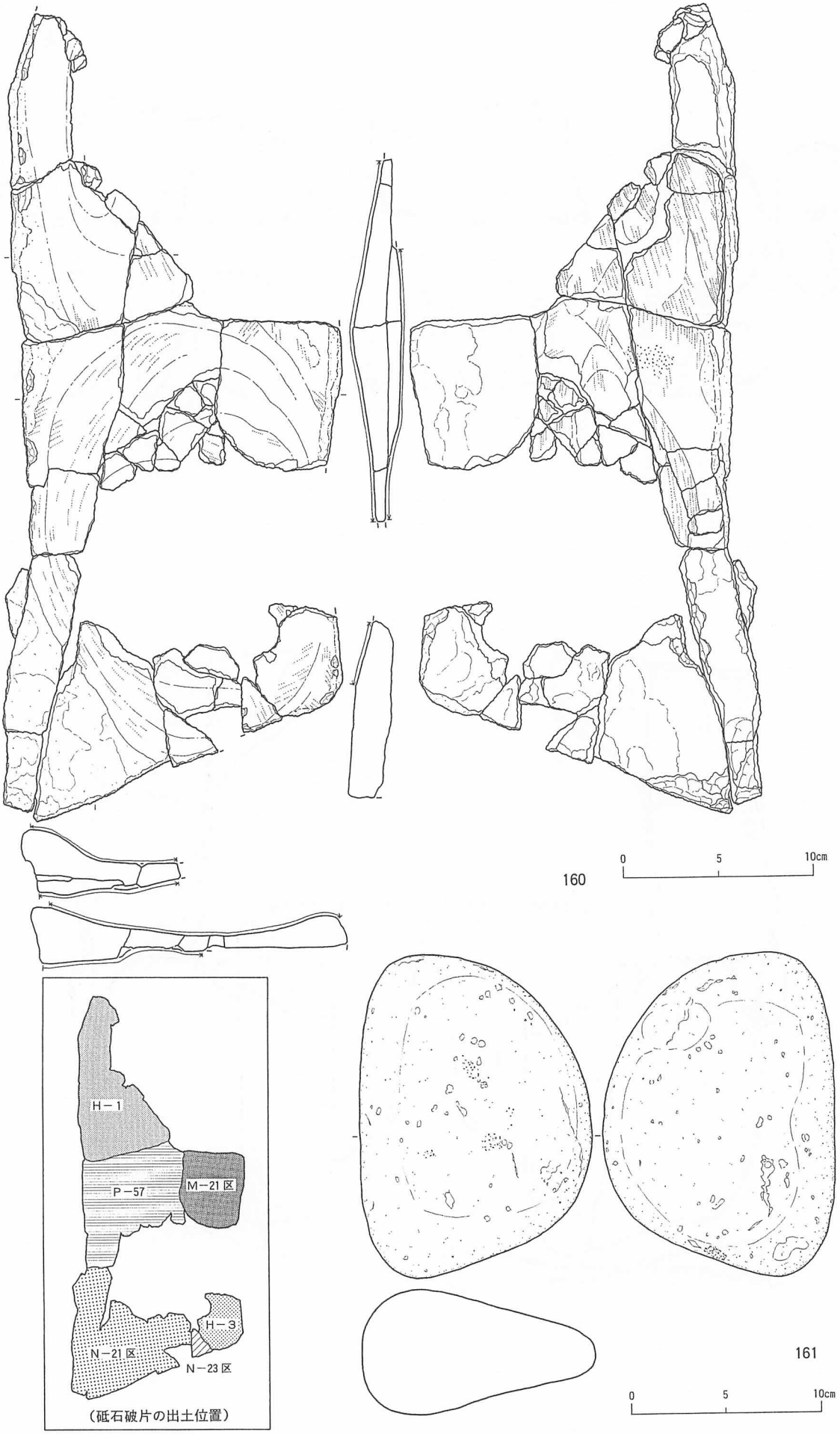
図Ⅳ－61　H－1出土の石器(4)



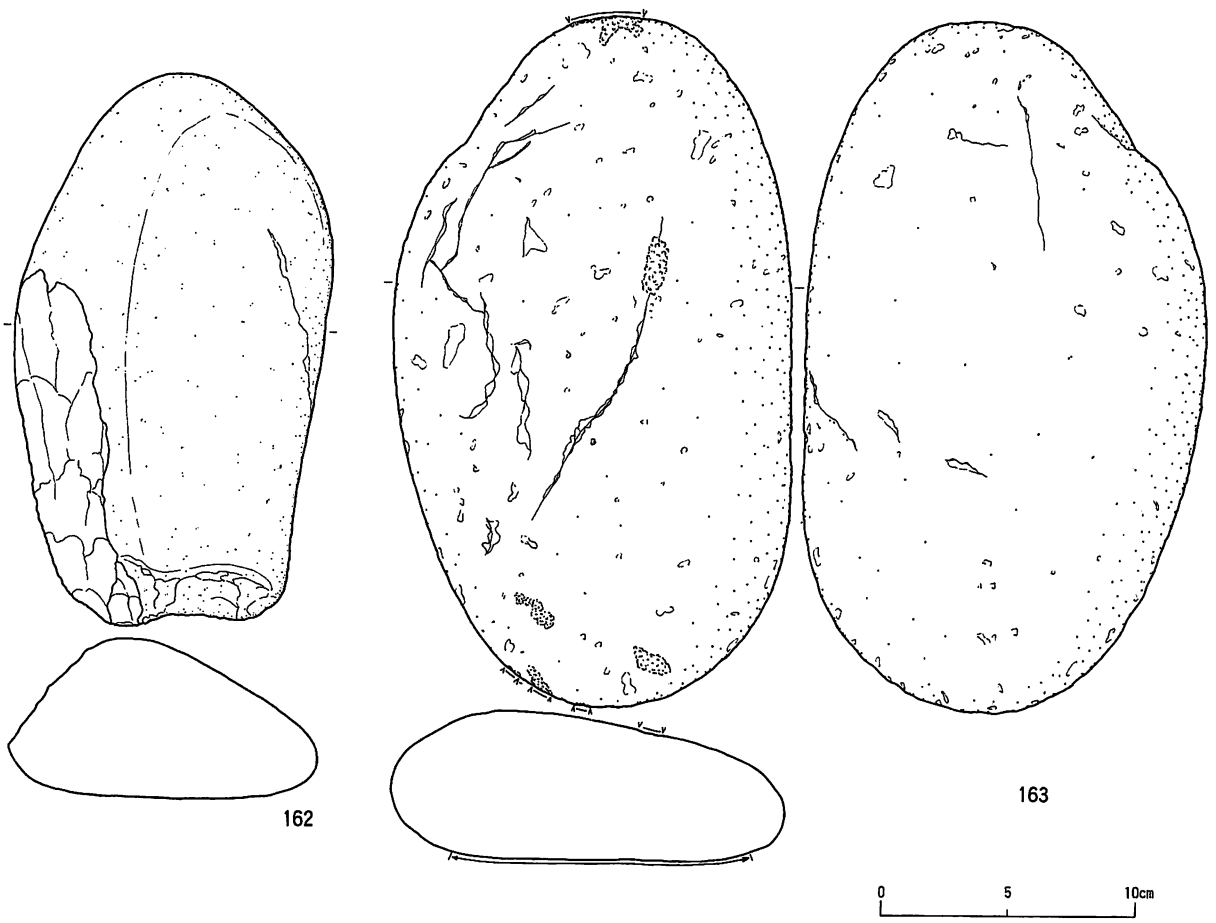


0　5　10cm

図Ⅳ－62　H－1出土の石器(5)



図Ⅳ－63　H－1 出土の石器(6)



図Ⅳ－64　Ｈ－１出土の石器(7)

Ｈ－２（図Ⅳ－65、図版20、表Ⅳ－７）

位　置　Ｑ－26、Ｒ－26－ａ・ｄ（、Ｑ－27－ｂ、Ｒ－27－ａ）

規　模　455×412／296×250／51cm

床面積　（7.98）㎡

平面形　隅丸長方形

長軸方向　Ｎ－113°－Ｗ

確認・調査　Ⅳ層上面まで掘り下げた際に黒褐色土のまとまりを確認した。トレンチを設定して更に掘り下げると、立ち上がりは不明瞭であったが、覆土下位に炭化物のまとまりがあったこと、床面に微細な炭化物が散在していたことから住居跡とした。断面観察からⅣ層中の掘り込みと考えられる。なお、一部は前年度調査範囲に及んでいるため確認できなかった。

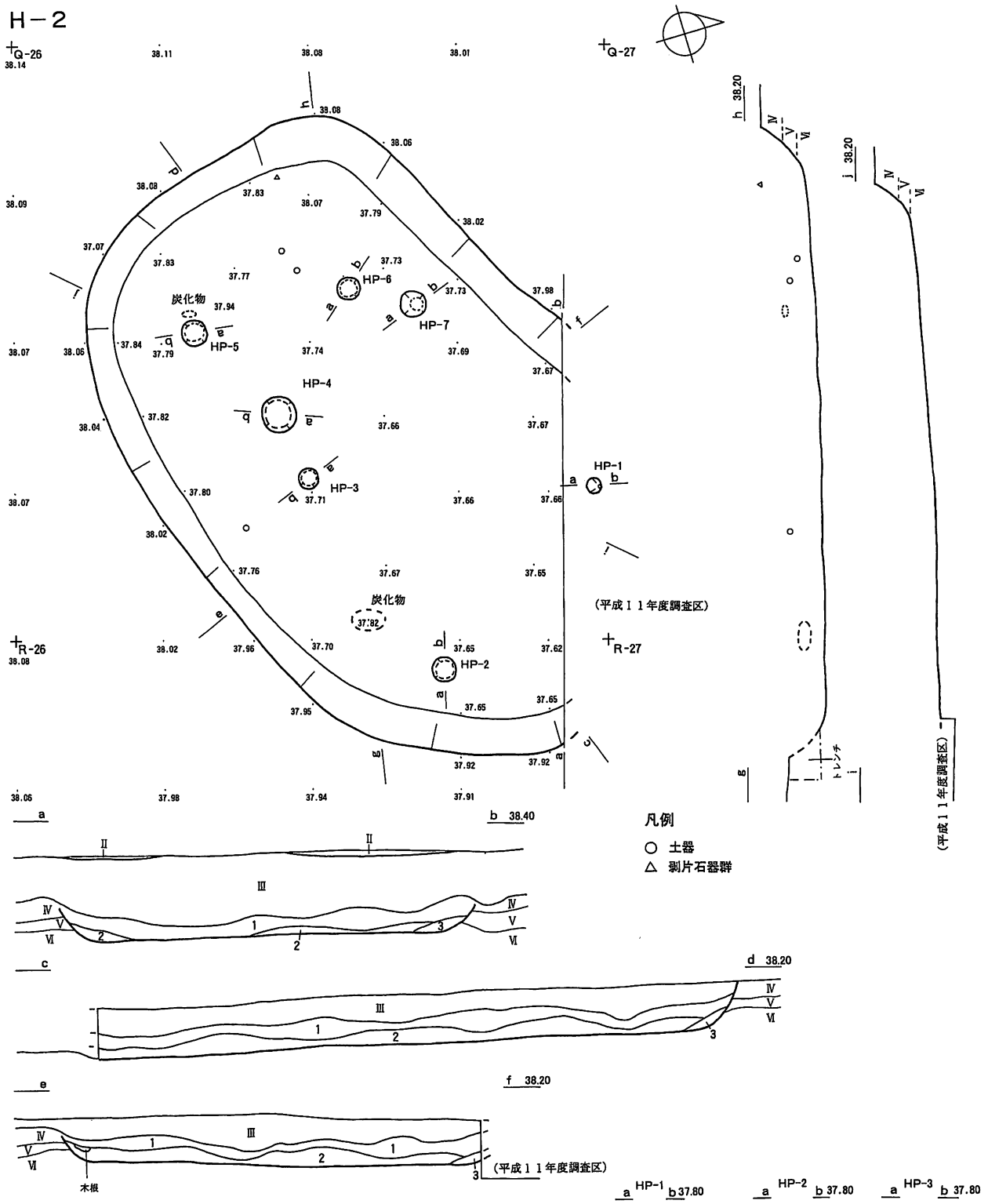
覆　土　３層に分層した。主にⅣ～Ⅵ層を主体としている。このうち、覆土１層にはＫｏ－ｇがごく少量混じっている。

壁・床面　壁は緩やかに立ち上がり不明瞭である。床面は緩やかに傾斜している。

炉　炉は確認できなかった。なお、覆土１層下位から２層上面にかけて炭化物のまとまりが検出された。

付属ピット・柱穴　柱穴は７基を検出した。いずれも浅く、規則的な配置はとらない。一部は木根攪乱の可能性もある。

遺物出土状況　覆土１層から土器３点、フレイク１点の合計４点が出土した。

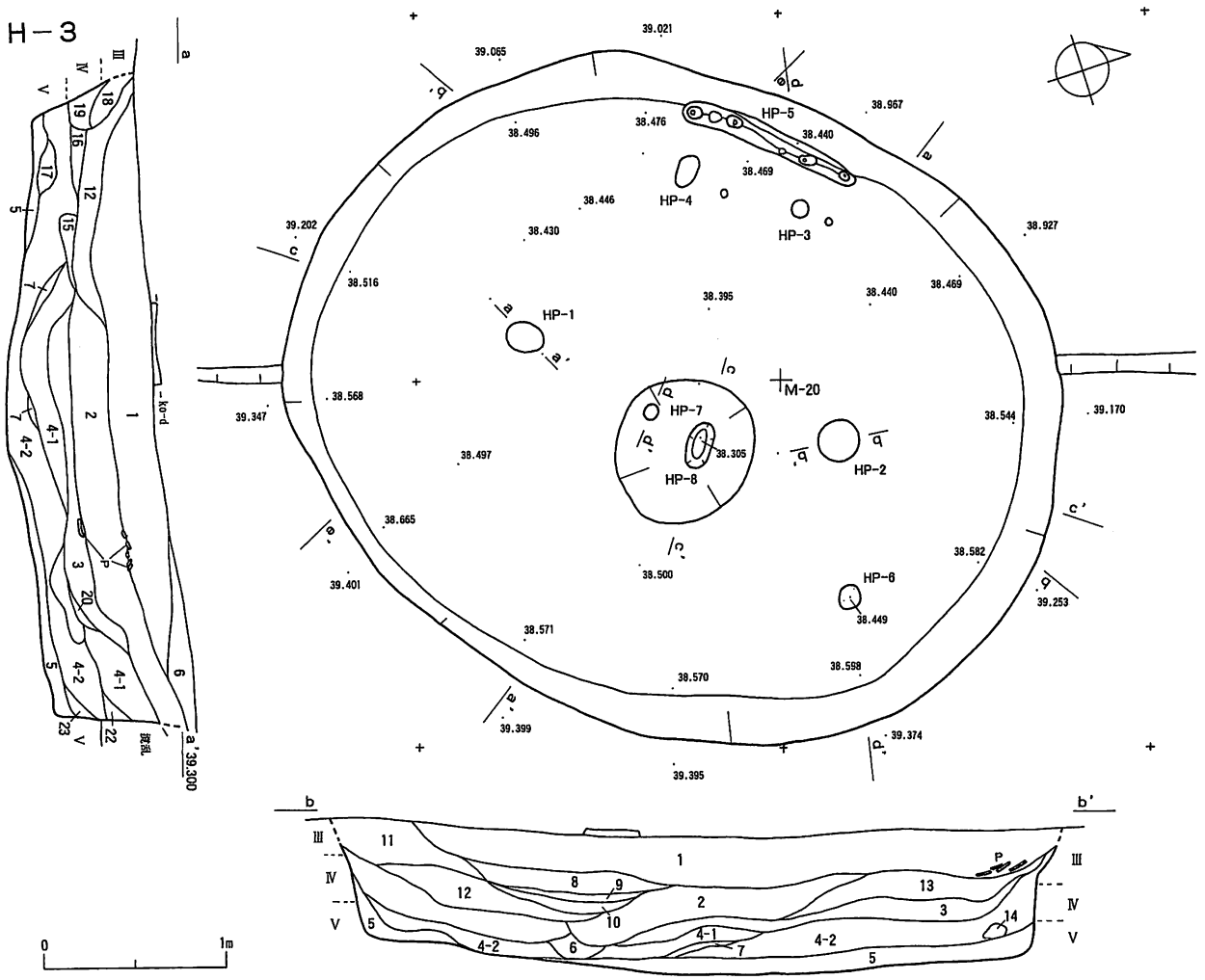


H－2　1 黒褐色土(7.5YR3/1) 粘性やや強 しまりやや弱 ロームが所々に混じる Ⅳ
2 褐色土(7.5YR4/4) 粘性やや強 しまりやや弱 暗褐色土が少量混じる Ⅴ>Ⅳ
3 褐色土(10YR4/4) 粘性強 しまりやや弱 2よりも少量の暗褐色土が混じる (Ⅴ+Ⅵ)
HP－1　1 褐色土(10YR4/4) 粘性強 しまり強 暗褐色土(10YR3/4)が斑状に混じる
HP－2　1 褐色土(10YR4/4) 粘性強 しまり強 暗褐色土(10YR3/4)が斑状に混じる
HP－3　1 褐色土(10YR4/4) 粘性強 しまり強 暗褐色土(10YR3/4)が斑状に混じる
HP－4　1 褐色土(10YR4/4) 粘性強 しまり強 暗褐色土(10YR3/4)が斑状に混じる
HP－5　1 褐色土(10YR4/4) 粘性強 しまり強 暗褐色土(10YR3/4)が斑状に混じる
HP－6　1 褐色土(10YR4/4) 粘性強 しまり強 暗褐色土(10YR3/4)が斑状に混じる
HP－7　2 黄褐色土(10YR5/8) 粘性強 しまり強

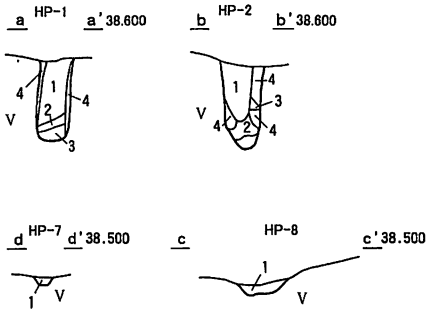
図Ⅳ－65　H－2

時　期　床面出土の遺物が無く不明である。掘り込み面がⅣ層中であること、覆土中にＫｏ－ｇが確認されたことから、その降下以前と考えられる。少し離れてⅠ群ａ類土器が出土していることから、あるいは縄文時代早期に相当する遺構の可能性がある。（藤原）

Ｈ－３（図Ⅳ－66～78、図版21・22、73～78、表Ⅳ－７・18・24）
位　置　Ｌ－19－ｂ・ｃ、Ｌ－20－ｂ、Ｍ－19－ａ・ｄ、Ｍ－20－ａ
規　模　429×356／351×319／74cm
床面積　9.89㎡
平面形　楕円形
長軸方向　Ｎ－138.5°－Ｗ
確認・調査　沢に向かって傾斜する北向きの緩斜面で検出した遺構である。Ⅲ層上面の僅かな窪みを手がかりに、トレンチを設けて確認した。遺物の接合した遺構は、Ｈ－１・15、Ｐ－43・57である。覆土１～３層から出土した土器は、Ｈ－15の覆土２層前後の土器と接合関係にある土器が多い。また、覆土２層から出土した砥石片が、Ｈ－１床面とＰ－57覆土２層から出土のものと接合している（Ｈ－１床面の遺物として掲載）。なお、床面から採取した炭化物(Beta－150464）に対してＡＭＳによる年代測定を依頼した結果、補正年代でＢＰ4590±50ｙの測定値が得られている（第Ⅵ章第２節）。また、炭化種子を目的に床上の土壌約5.0Ｌに対してフローテーションを実施したが抽出には至らなかった。
覆　土　大きく見て、上位に黒色土主体の覆土１～３層、下位にロームを主体とする覆土４・５層が形成されている。上位の黒色土は周囲から流れ込んだⅢ層と考えられるが、覆土２層に関してはローム質土を多く含み標高の高い方から流れ込んだ様子が伺えることから、削平部分の排土或いは盛土が流れ込んだ可能性がある。また、焼土が投げ込まれた様子で検出されたのもこの上位の覆土層中である。遺物を多く包含するのも覆土１～３層である。床面から堆積する下位のローム質土の層厚は、中央部で薄く竪穴の壁に近づくにつれて厚くなる。混じりのないロームがブロック状に混入することから、短時間に流れ込んだものと判断される。断面の観察から判断して、家屋の上屋を覆っていたローム質土が崩落した可能性が高い。掘り込み面はⅢ層中～上位と考えられる。
壁・床　床面は中央部で窪むもので、そこから立ち上がる壁は傾きが少なく、構築時には殆ど垂直であった可能性が高い。
炉　検出されていない。しかし、床面中央の窪み付近の床直上から焼土塊が出土しており、炉との関わりが推定される。
付属ピット・柱穴　床面から検出されたピットは８カ所（ＨＰ－１～８）である。ＨＰ－１・２は主柱穴と考えられるもので、配置から見て床面に作られた主柱穴はこの２本だけと考えられる。規模はどちらも径20cm、深さ50cm程である。この他で用途が比較的明瞭なピットは、出入り口部に関連すると考えられるものである（ＨＰ－３～５）。ＨＰ－５は沢に向かう緩斜面側の壁際に沿った位置から検出された長さ１ｍ程、最大幅10cmの溝状のピットである。これは小さく浅い複数のピットの連なりによって構成されており、恐らく径が10cm以内の枝あるいは丸太を横に連ねた様な構築物の痕跡と思われる。また、ＨＰ－３とＨＰ－４は共に、ＨＰ－５の近くに位置するもので、これらの配置から見て出入り口の構築物に関連するピットの可能性が高い。その他のピットは性格不明である。また、壁外柱穴に関して掘り込みがⅣ層に及ぶようなものは認められなかった。
遺物出土状況　遺物は、床面と覆土１～４・６層から5,957点が出土している。数量は床面216点、覆

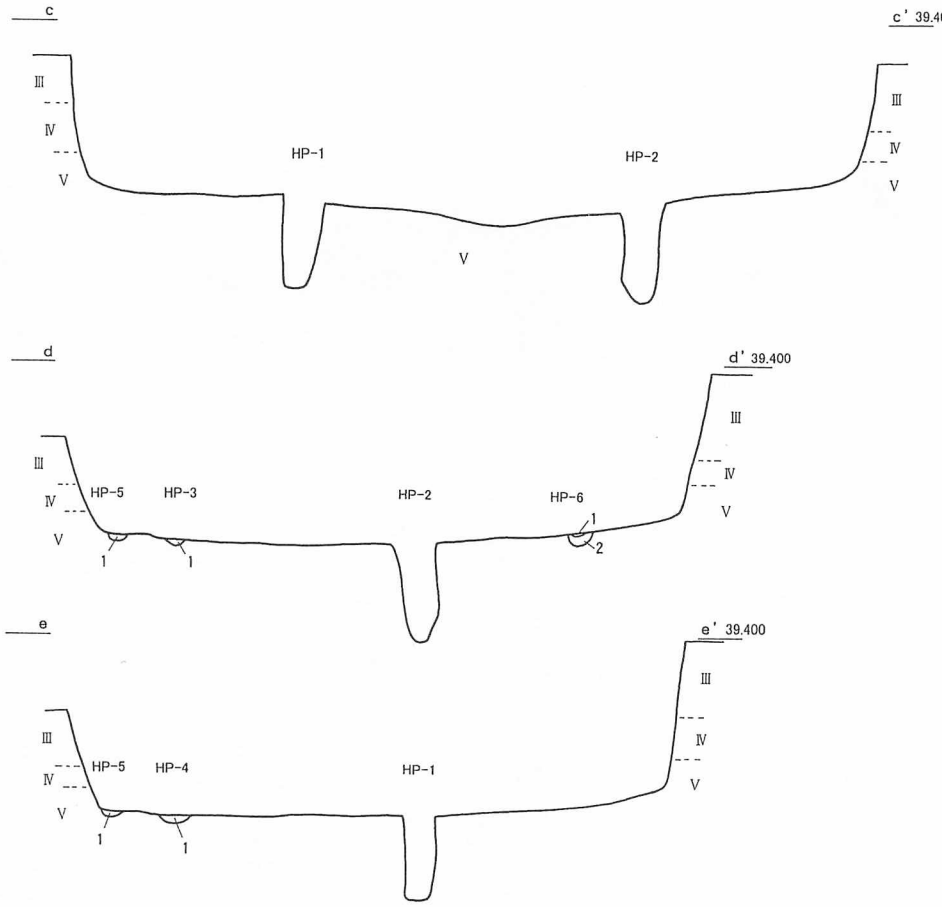


1	黒色土	(7.5YR1.7／1)	腐植土 Ⅲ層流れ込み 粒子細かく、乾くと細かいクラックが入りやすい 遺物が混じる
2	黒褐色土	(7.5YR2／1)	Ⅲ層腐植土にⅣ層が少量混じっている 上面からは、土器を主体とする大量の遺物が出土している
3	黒色土	(7.5YR1.7／1)	腐植土 Ⅲ層流れ込み 遺物を多数含む
4	黒褐色土	(10YR3／2)	Ⅳ層とブロック状のⅤ層が堆積している層
4－1	黒褐色土	(10YR3／2)	ロームブロックがやや小さく、腐植土の量も多い
4－2	黒褐色土	(10YR3／2)	ロームブロックが比較的大きく、腐植土の量がやや少ない
5	黒褐色土	(10YR3／1)	腐植土とロームがほぼ等しく混じる層 床付近の遺物を含むのはこの層
6	黒褐色土	(10YR3／1)	腐植土とロームブロックの混じる層
7	黒褐色土	(10YR3／1)	腐植土とロームブロックの混じる層
8	黒色土	(10YR1.7／1)	腐食土層 Ⅲ層流れ込み 覆土1層よりも黒が強い
9	黒褐色土	(10YR2／2)	腐植土にⅣ層が少量混じる
10	黒色土	(10YR1.7／1)	腐食土層 Ⅲ層流れ込み 覆土1層よりも黒が強い
11	黒褐色土	(10YR2／3)	腐植土にⅣ層が少量混じる
12	黒褐色土	(10YR2／2)	腐植土にⅣ層が少量混じる
13	黒褐色土	(10YR2／3)	腐植土にⅣ層が多く混じる
14	黒色土	(10YR1.7／1)	腐植土 崩落
15	黒褐色土	(10YR2／2)	腐植土にⅣ層が少量混じる ローム粒が多く入る
16	黒褐色土	(10YR2／2)	腐植土にⅣ層が少量混じる ローム粒が多く入る
17	黒褐色土	(10YR2／2)	腐植土にⅣ層が少量混じる ローム粒が多く入る
18	黒褐色土	(7.5YR2／1)	Ⅲ層腐植土にⅣ層が少量混じっている 層中の遺物は極めて少ない
19	黒色土	(7.5YR1.7／1)	腐植土の流れ込み 遺物を多数含む
20	赤褐色土	(5YR4／8)	焼土 2次堆積
21	黒色土	(7.5YR1.7／1)	腐植土の流れ込み 遺物を多数含む
22	黒褐色土	(10YR2／2)	腐植土崩落
23	黒褐色土	(10YR2／2)	腐植土崩落

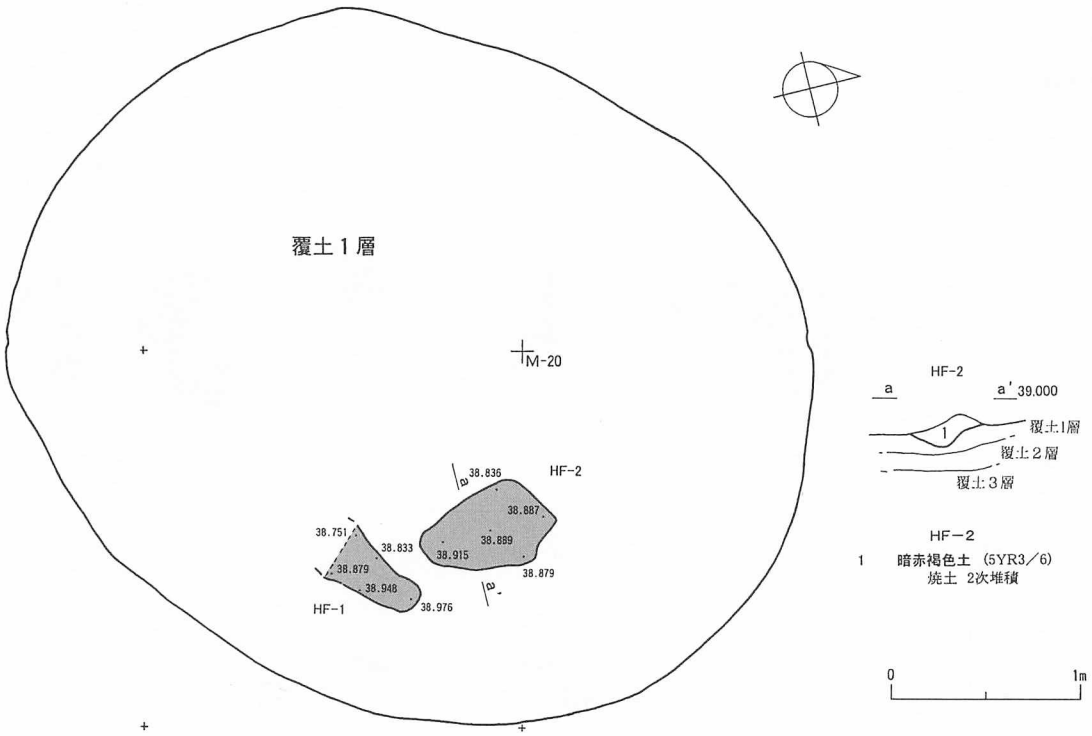


HP－1	1	黒褐色土	(7.5YR3／1)	しまりなし 腐植土に少量のロームが混じる
	2	にぶい黄褐色土	(10YR5／3)	しまりのないローム
	3	黒褐色土	(7.5YR3／1)	しまりなし 腐植土に少量のロームが混じる
	4	にぶい黄褐色土	(10YR5／3)	しまりがあるローム
HP－2	1	黒褐色土	(7.5YR3／1)	しまりなし 腐植土に少量のロームが混じる
	2	黒褐色土	(7.5YR3／2)	腐植土とロームが等しく混じる
	3	黒褐色土	(7.5YR3／2)	腐植土とロームが等しく混じる
	4	にぶい黄褐色土	(10YR5／3)	しまりのあるローム
	5	にぶい黄褐色土	(10YR5／3)	やわらかく、崩落ロームの可能性がある
HP－7	1	黒色土	(10YR2／1)	腐植土に微量のロームが混じる
HP－8	1	黒色土	(10YR2／1)	腐植土に微量のロームが混じる

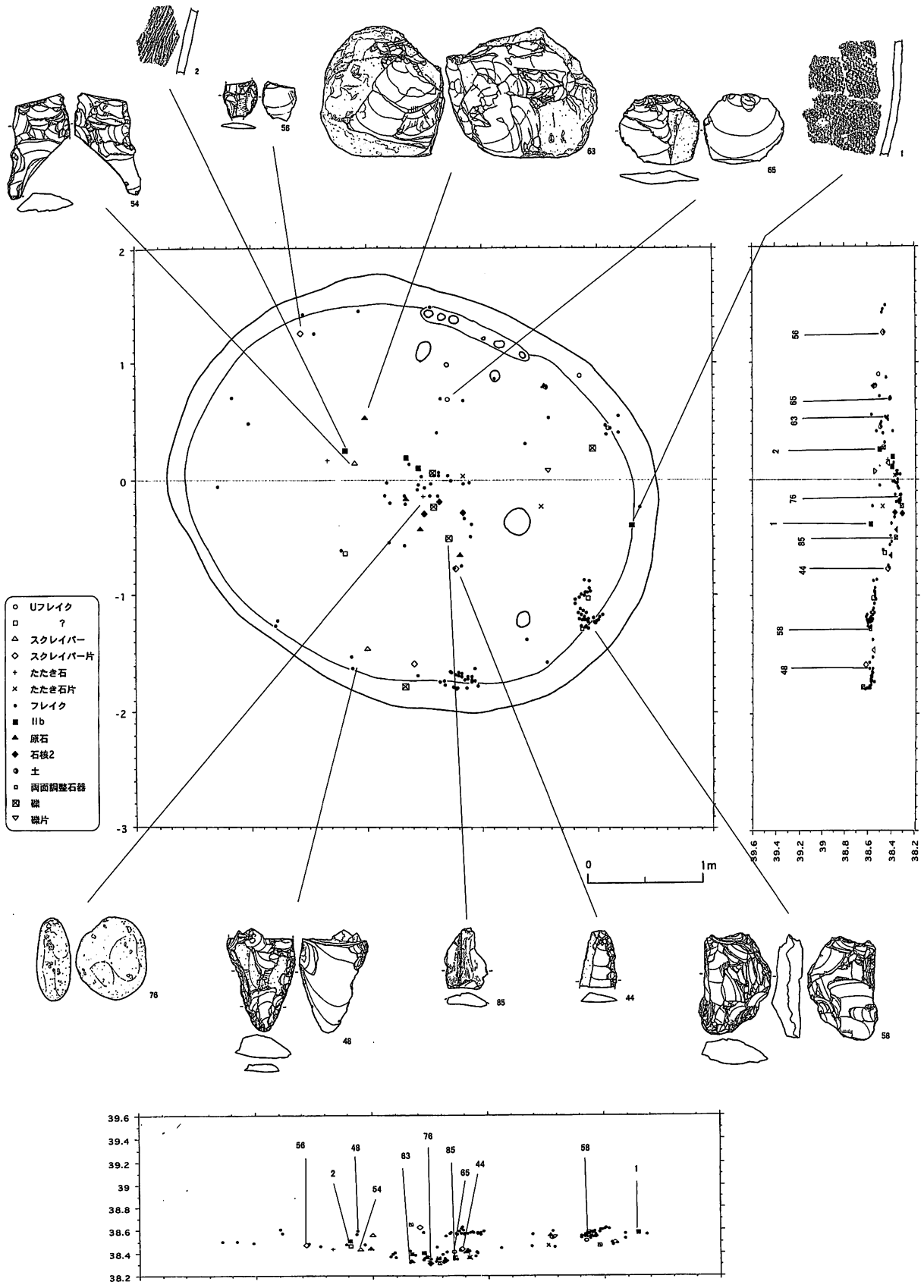
図Ⅳ－66　H－3(1)



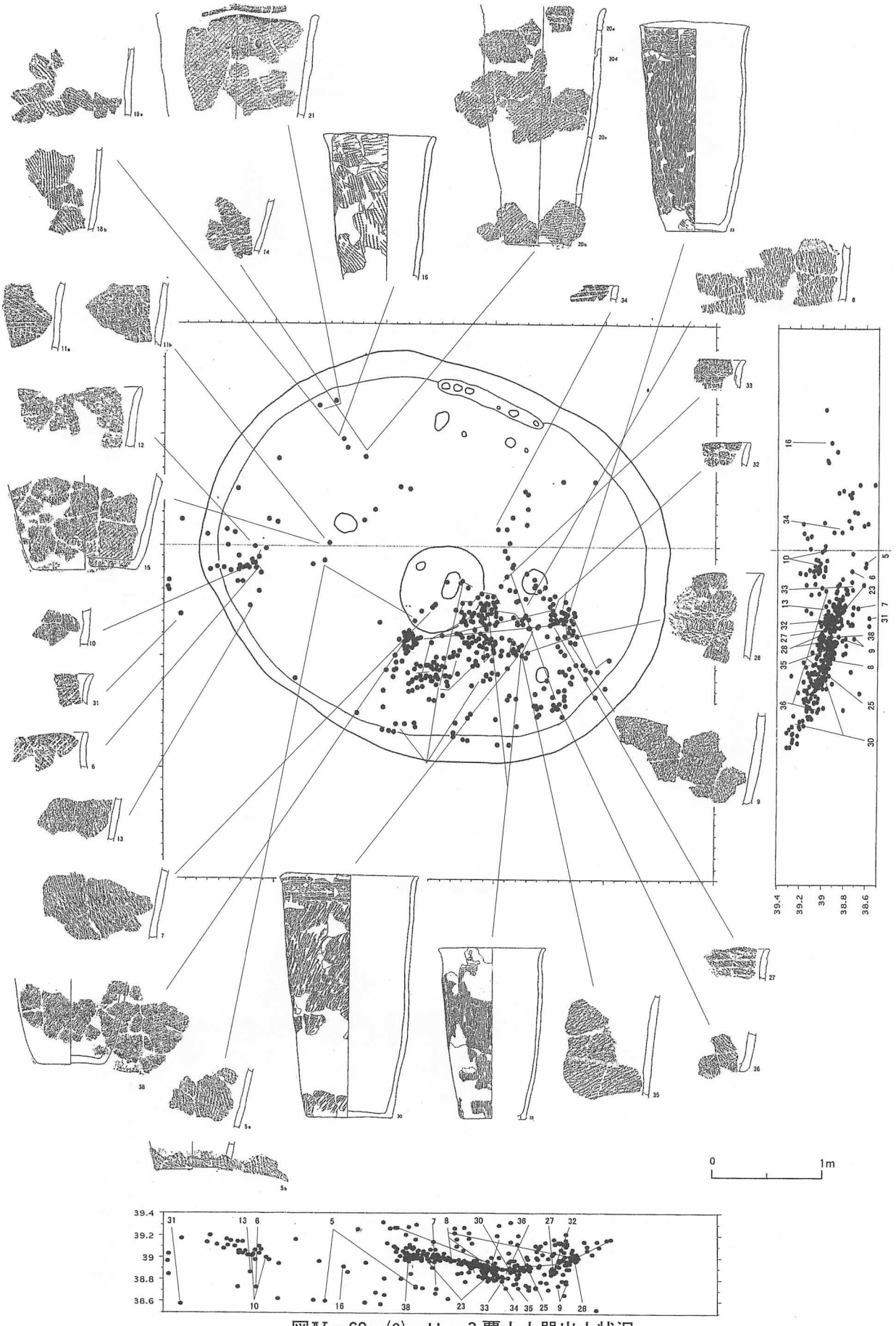
HP－3	1	黒褐色土	(7.5YR3／1)	しまりなし　腐植土に少量のロームが混じる
HP－4	1	黒褐色土	(7.5YR3／2)	腐植土にローム粒が混じる　炭化物を微量含む
HP－5	1	黒褐色土	(7.5YR3／2)	腐植土にローム粒が混じる　炭化物を微量含む
HP－6	1	黒褐色土	(7.5YR3／1)	しまりなし　腐植土に少量のロームが混じる
	2	灰黄色土	(2.5YR6／2)	やわらかい粘土状の腐植土にロームが混じる



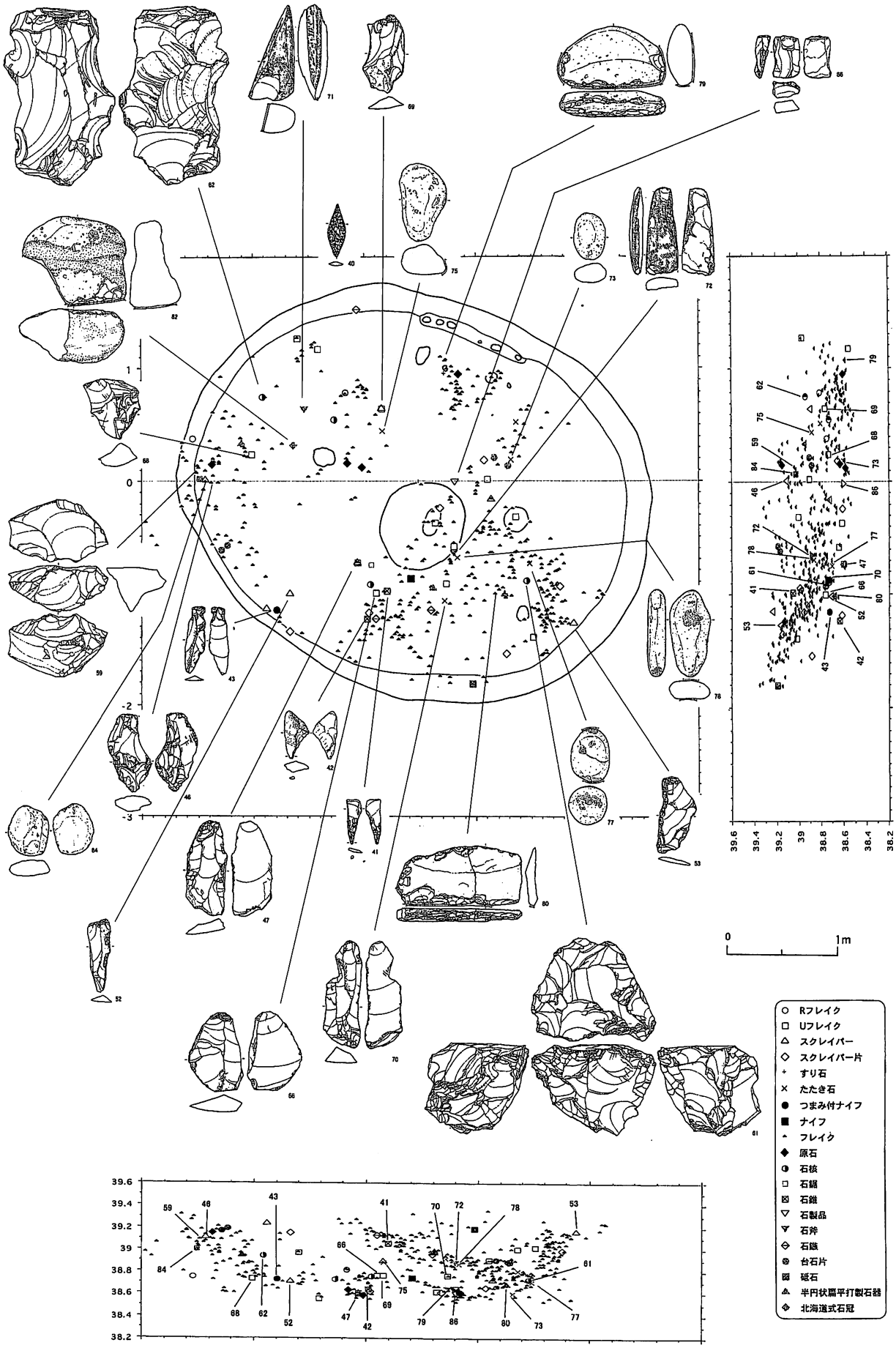
図Ⅳ－67　Ｈ－３(2)



図Ⅳ－68－(1)　H－3床面遺物出土状況



図Ⅳ－68－(2)　H－3覆土土器出土状況



図Ⅳ－68－(3)　H－3覆土石器出土状況

土5,735点、その他６点である。床面から出土したのは、Ⅱ群ｂ類土器、スクレイパー、両面調整石器、石核、原石、Ｕフレイク、フレイク、たたき石、礫などである。中でも比較的大型のフレイクが165点と突出しており、Ｕフレイク、たたき石、原石などと共に石器製作を窺わせる出土状況が目を引く。覆土から出土したのは、Ⅱ群ｂ類土器、石鏃、石錐、つまみ付ナイフ、スクレイパー、両面調整石器、石核、原石、Ｒフレイク、Ｕフレイク、フレイク、石斧、たたき石、半円状扁平打製石器、北海道式石冠、石錘、砥石、台石類、礫などである。この遺物に関しては先述の通り１～３層のものが圧倒的に多く、5,957点の内5,303点を占めている。特にⅡ群ｂ類土器は、覆土１層～２層上面（一覧表では覆土２層出土遺物に含める）から約2,300点と大量に出土しており、その復元率も高い。この覆土が堆積した頃に「土器の廃棄行為」が行われたことを示すものと考えられる。この土器と共に廃された遺物は、半円状扁平打製石器、北海道式石冠、石錘、砥石、台石類、フレイクなどが比較的多い。また、土器に次いで出土数の多い頁岩製のフレイクは、覆土４層から多くなり始めるため、フレイクの廃棄が土器よりも先行することが考えられる。これらのことは包含層に廃棄された遺物の先後関係を反映している可能性がある。

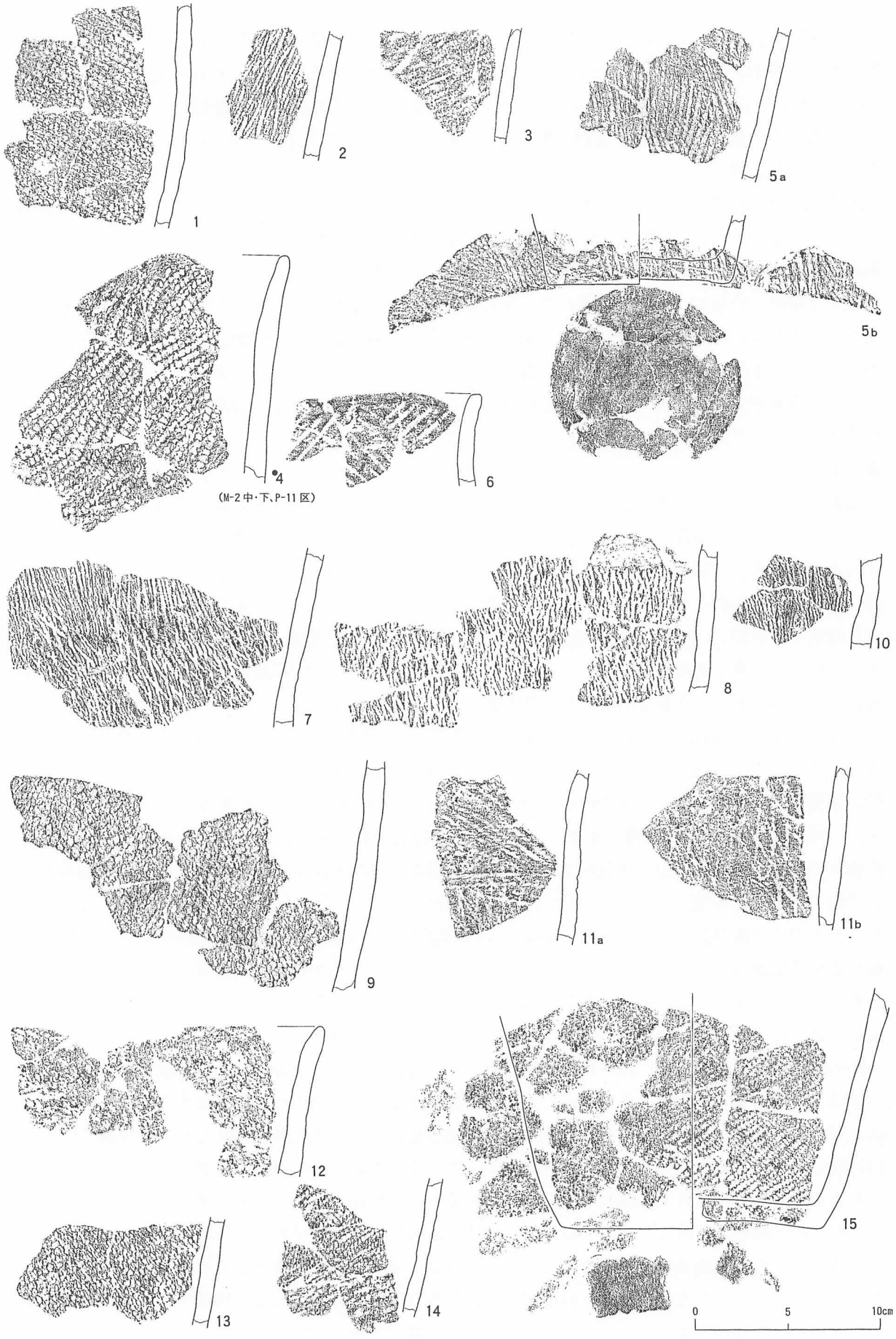
遺　物

（土器）38個体のⅡ群ｂ類土器を掲載している。削平部の排土或いは盛土の流れ込みと考えられる覆土２層より上位となる覆土１・２層出土の10～38は復元率も高く、中でも覆土１層のものは一般的な「円筒下層ｃ式」の特徴を有するものが多い。これらは、出土層位から見て削平部分を中心とした活動に伴う時期のものと言える。逆に、床面や覆土３・４層出土の１～９はそれらよりも古い時期のものと想定されるが、文様的にはそれ程大きな差異は認めがたく、時間的な差は少ないように思われる。全ての胎土に繊維が認められる。１～９の主な出土層位は、１・２が床面、３・４が覆土４層、５が覆土３～４層、６・７が覆土３層、８・９が覆土１～３層である。

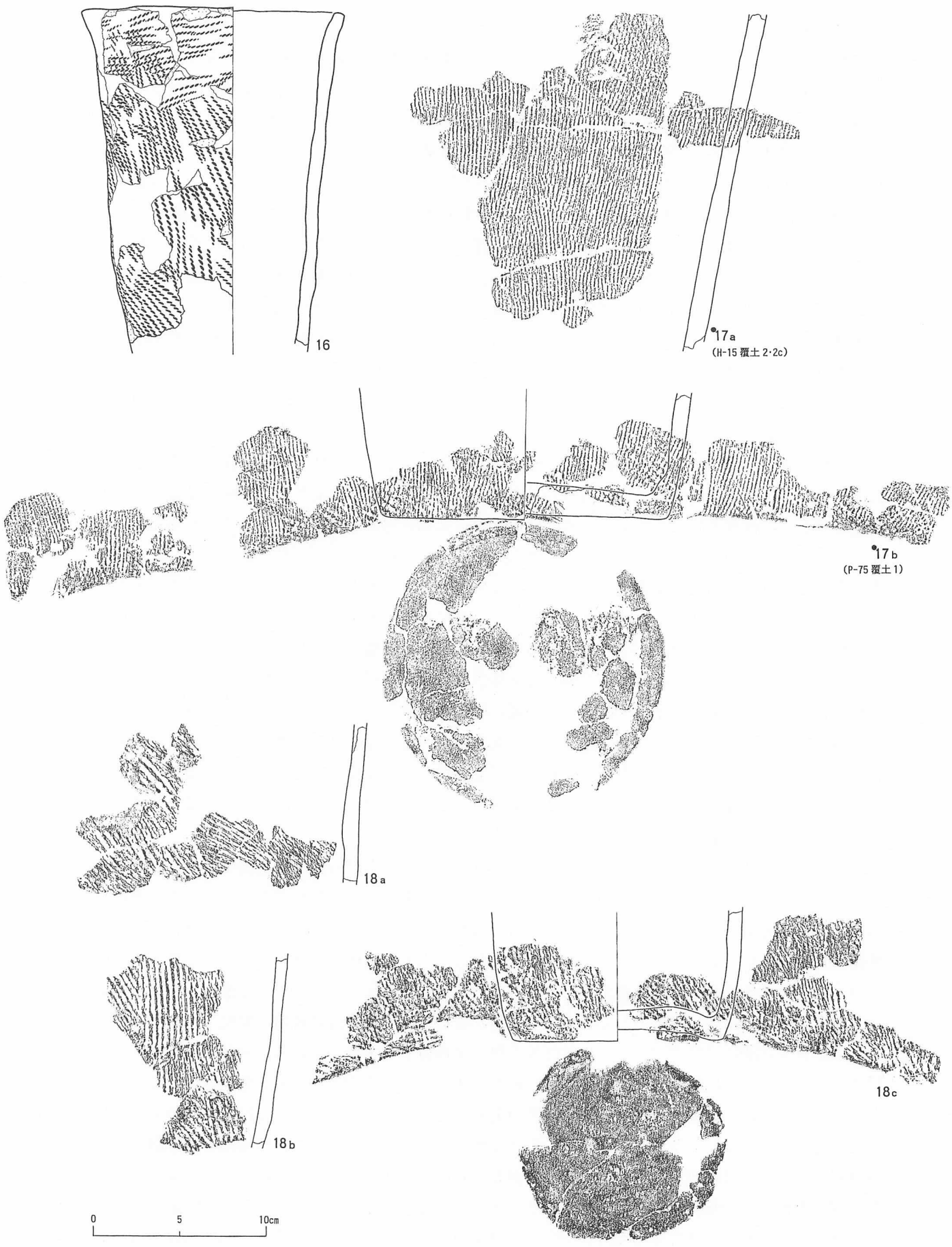
１はＲＬＲの三段複節、２はＬＲの自縄自巻を地紋とする各胴部である。２の内面は研磨が著しい。３・４はＬＲの斜行縄文が施された山形突起を有する口縁部と胴部で、３の口唇部は断面形が丸くて軽い研磨が施されている。４はＭ－２中・下位および包含層出土の破片が接合したもの（Ｍ－２－７）。未接合の破片が本遺構覆土４層に１点ある。５はＲの撚糸文が全面に施された底部とその近くの胴部で、底部は僅かに上げ底気味である。６は口縁の山形突起部で、細い撚糸を使った絡条体圧痕文で鋸歯状の文様が施されており胎土には海綿骨針が入っている。７・８は網目状の撚糸文が施され、胎土中に海綿骨針が混じる胴部である。７の器面の下位には間隔の密なＲの撚糸文も施され、内面が丁寧に研磨されている。この土器はＨ－15の覆土２ｃ～３層から出土したＨ－15－３と同一個体と考えられる。９はＲＬＲの三段複節が施文される胴部で、同一個体と考えられるものがＨ－15の覆土２ｂ層（Ｈ－15－56）、Ｍ－１（19）、Ｍ－２（15）などからも出土している。

10～38の主な出土層位は、10～17が覆土２層、18～22が覆土１～２層、23～38が覆土１層である。

10はＲの撚糸文が密に施された胴部で、器壁が比較的厚く内面は凹凸が顕著である。11ａはＲの撚糸文が多用される口縁近くの部分である。口縁部文様帯には鋸歯状に構成されたもの、胴部（11ｂ）の地紋には網目状のもの、これらの境界にも同じ撚糸文が横環する。内面は研磨が著しい。12はＲＲＬのより戻しが施文された口縁部である。断面が丸形の口唇部に沿ってＬＲの縄線文も施される。13はＲＬＲの三段複節、14はＬＲの二段単節の各縄文が施される胴部である。15は結束させた二本のＬＲの縄を使った斜行縄文の施された底部である。内面には炭化物の付着が認められる。16・17はＲの撚糸文が密に施された地紋を持ち、内面が良く研磨されているものである。16は下半部の欠失する小型のもので、地紋の施文方向は口縁部が横位、胴部が縦位である。17ａ・ｂは大型の深鉢形土器下半



図Ⅳ－69　Ｈ－３出土の土器(1)



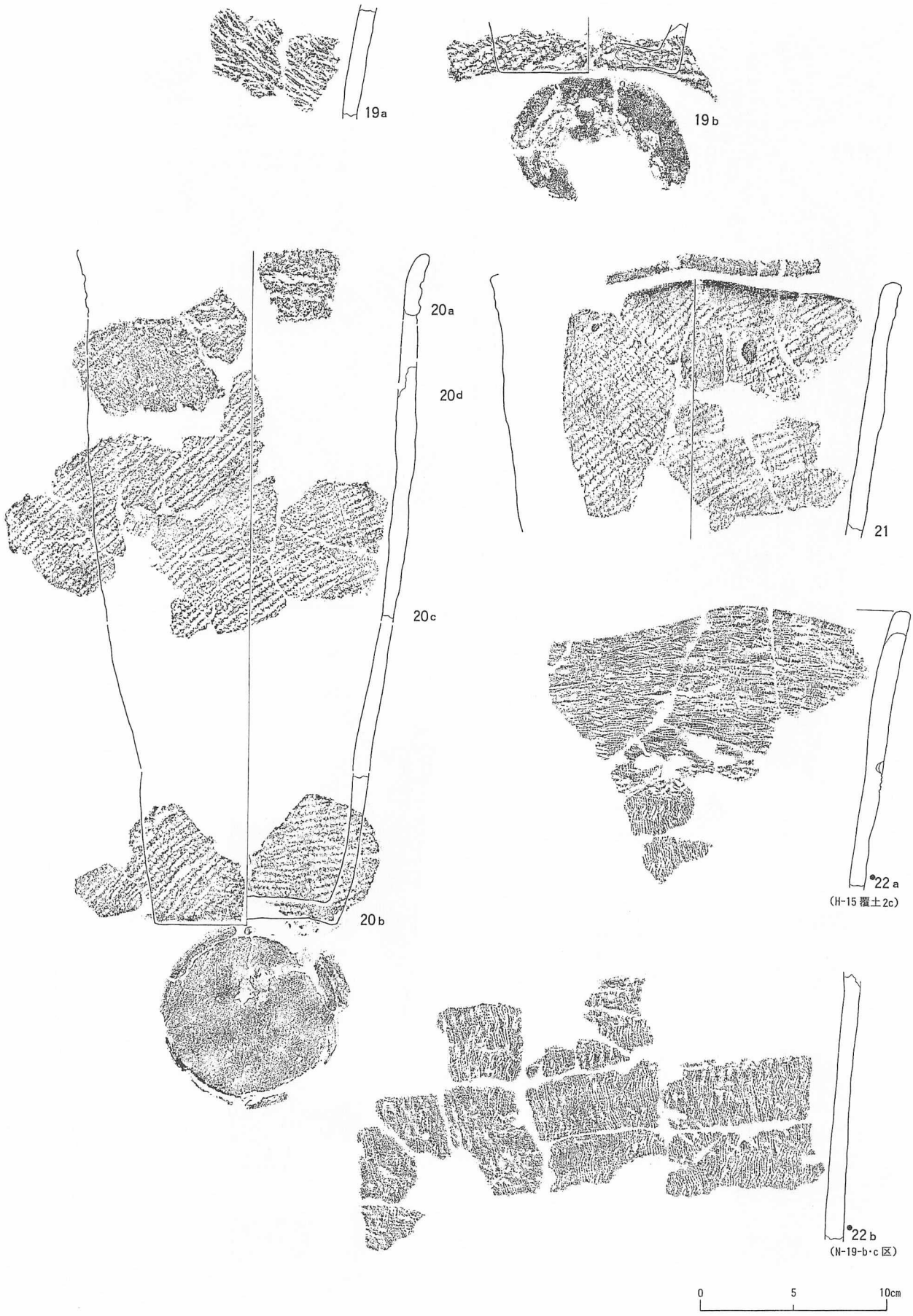
図Ⅳ－70　H－3 出土の土器(2)

部で、胎土中には白色の岩片が混入する。17ａはＨ－15覆土２・２ｃ層（Ｈ－15－41ａ）、17ｂがＰ－75覆土１層（Ｐ－75－１ｂ）から出土したもの。本遺構の覆土２層から未接合の破片２点が出土している。また同じ個体と考えられる破片はＨ－15の覆土２ｃ層、Ｍ－１・Ｍ－２でも出土している。

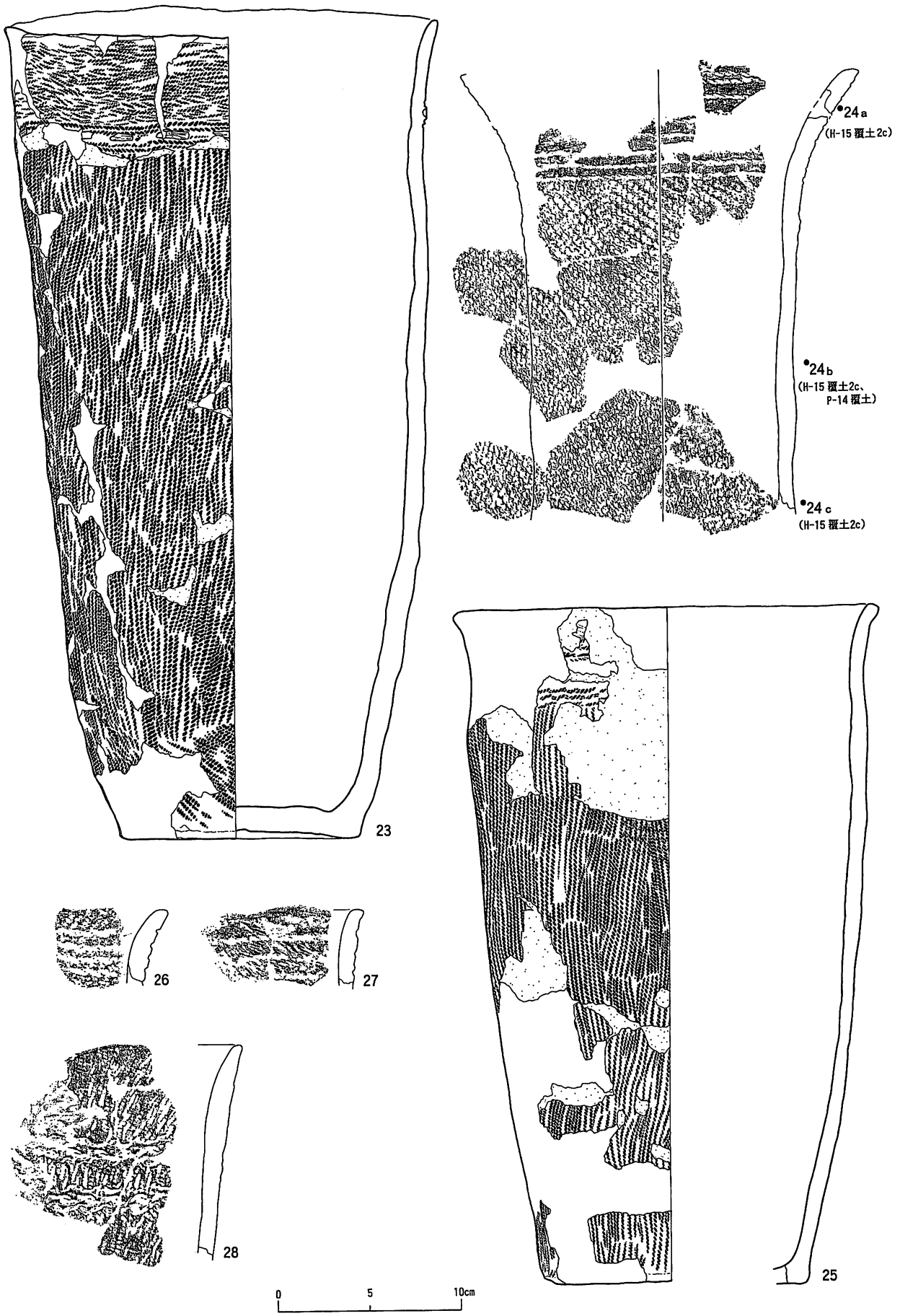
18ａ～ｃは内面に貝殻条痕の認められる深鉢形土器の胴下半部である。地紋は密に施されたＲの撚糸文で、底部は上げ底、器壁は薄い。胎土中には海綿骨針が見られる。同じものはＨ－15からも出土している。19ａ・ｂもＲの撚糸文が網目状に施された胴下半部である。上げ底の底部間際の器面にはＬＲの斜行縄文も施され、胎土中には大量の海綿骨針が混入する。20・21はＬＲの斜行縄文の施されるものである。20は平縁の口縁部に同じＬＲの縄線文が３～４条巡らされる。21は低く緩やかな山形突起を有し、その口唇部にも軽い研磨が施される。22ａ・ｂは全面に細い撚糸文の一種を施した口縁部と胴部で、掲載した破片はＨ－15の覆土２ｃ層（22ａ）と周辺の包含層（22ｂ）から出土したもの。本遺構の覆土１・２・３層から未接合の破片が出土している。低く緩やかな山形突起を有する口縁部には横位方向の施文が、胴部には縦位方向の施文がなされ、その境には太目の棒状工具の先端で横方向から刺した連続刺突文と２条の綾絡文が施されている。内面は良く研磨されており、胎土中には微量の海綿骨針が混入する。

23は断面が丸形の口唇部を有する平縁と僅かに上げ底になる底部を持つ大型の深鉢土器である。地紋であるＲＬの自縄自巻的縄文は、口縁部で条が横位になる方向に施文され、胴部では縦位になるよう施される。口縁部と胴部の施文の境界には棒状の施文具を用いた連続刺突文とそれを挟んで撚糸文が施されている。内面は研磨が著しい。24は主体がＨ－15の覆土２ｃ層（Ｈ－15－14ａ～ｃ）から出土した。24ｂはＰ－14覆土１層の破片も接合している。本遺構覆土１層から未接合の破片が１点出土している。口縁部が外側に広がる深鉢形土器の上半部である。無文の面にＬＲの縄線文が８条以上巡らされる口縁部は恐らく平縁を呈すると考えられるもので、胴部にはＲＬＲの三段複節の縄文が施されている。25は無地の器面に綾絡文を施した文様帯を有した口縁部と、Ｒの撚糸を密に施した撚糸文を地紋に用いた胴部を持つ土器で、内面には軽い研磨が施されている。26～28は口縁部である。26はＬＲの縄文を地紋にその上から同じ撚りの縄線文が施される。27はＲＲの撚り戻しの地紋にＬＲの縄線文を施したもので、胎土には多量の海綿骨針が混入する。28は緩やかな山形突起部で地紋はＬＲの自縄自巻的縄文が施され、その上からは２条が一組となるＲの綾絡文が二段に分かれて施文されている。この胎土にも微量の海綿骨針が混入している。

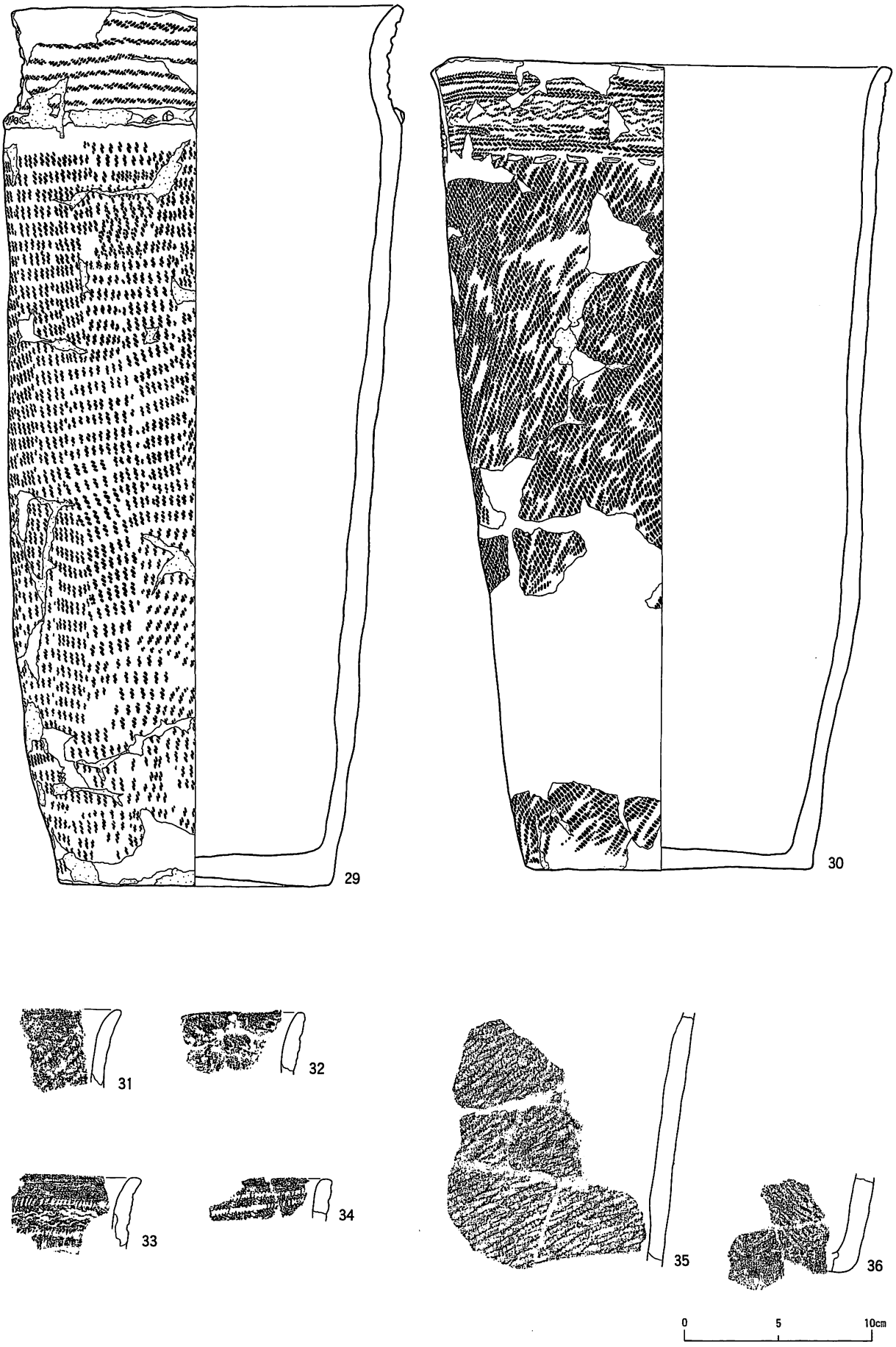
29は平縁で頸部に屈曲部を持ち上げ底の底部を有する比較的大型の深鉢形土器である。屈曲部には厚みのない粘土紐が貼付され、その上からは小柄な施文具を使って刺突が巡らされている。その上位にはＬＲの縄線文が６条施される口縁部文様帯が備わり、下位の胴部には比較的太い繊維を用いる多軸絡条体が施されている。器壁は比較的厚く、内面には丁寧な研磨が施されている。本遺構出土の破片は３点で、主体部はＰ－43の覆土１層と周辺の包含層から出土している。この遺構からは同じ系統の地紋を持つ土器が他にも出土していることから、これらの土器は近い時期に廃棄された可能性が高いと言えよう。30は平縁の口縁部に比較的幅の狭い文様帯を有する器壁の薄い深鉢形土器である。文様帯は３～４条のＲの綾絡文とその上下段に撚りの異なるものを交えた６～７条程の撚糸の束の押捺が施され、ＬＲの二段単節或いはＬＬＲの撚り戻しを地紋とする胴部との境には棒状の道具で連続刺突文が施されている。この土器の内面にも丁寧な研磨が施される。31～34は口縁部、35は胴部、36～38は胴下半部或いは底部である。文様は、31がＬＲの斜行縄文、32がＬＲの縄線文が２条施されるもので27の土器と同一個体の可能性もある。33・34は細い撚糸を使った絡条体圧痕文が施されるもので、前者は更にＲの綾絡文も加えられ胎土には微量の海綿骨針が含まれ、後者の内面には丁寧な研磨



図Ⅳ－71　Ｈ－３出土の土器(3)



図Ⅳ－72　Ｈ－３出土の土器(4)



図Ⅳ－73　H－3出土の土器(5)

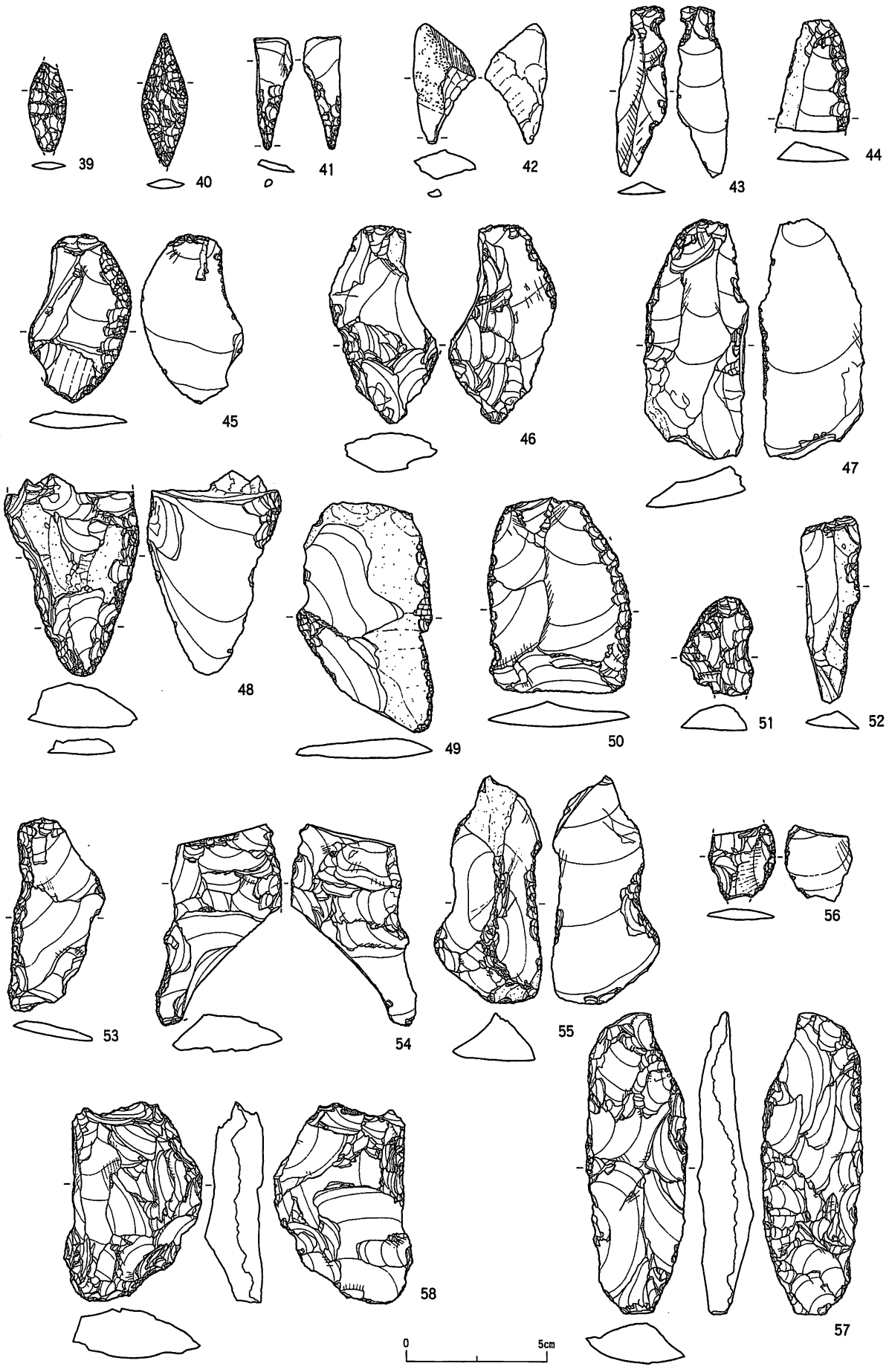


図Ⅳ－74　Ｈ－３出土の土器(6)

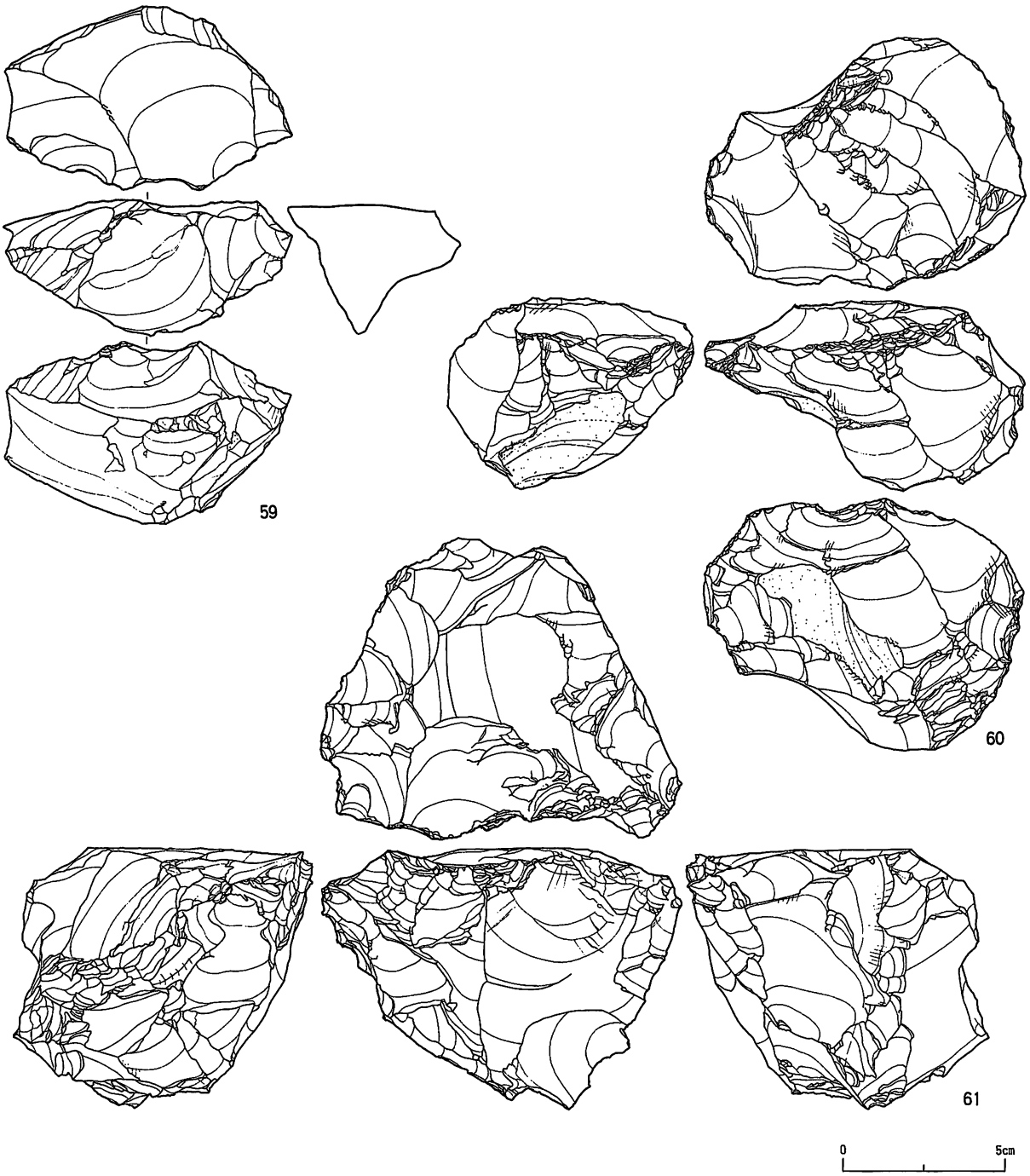
が施される。35はＬＬＲの撚り戻しと考えられる地紋を持つもので胎土に微量の海綿骨針が認められる。36はＲの撚糸文が密に施された底部である。37ａ・ｂはＲの撚糸文が施される胴下半部で、僅かに上げ底を呈する底面にはＬＲの斜行縄文が見られる。また、内面には丁寧な研磨が施されている。38はＬＲの斜行縄文が施された底部で、これも僅かに上げ底を呈している。

（石器）石器類3,405点の中からここには48点を掲載した。39（ＩＡ２ａ）と40（ＩＡ４）の石鏃は、いずれも覆土上位から出土したもので円筒下層に伴う特有の形態を有している。39の尖頭部と基部は使用によって破損している。41（Ⅱ１）と42（Ⅱ１）は石錐である。41は良く摩滅する尖頭部周辺にだけ加工を加えている。42は緑色泥岩製の擦り切り残片をそのまま使ったものである。43（ⅢＡ４）は小さな縦長剥片の一端につまみ部を作出しただけのつまみ付ナイフである。両側縁には僅かな使用痕が認められる。44～56はスクレイパーである（44～46：ⅢＢ２ａ、47～50：ⅢＢ２ｂ、51～55：ⅢＢ２ｃ、56：ⅢＢ８）。下半部が失われた44は床面出土のもので、刃部の作出は主に右側縁である。45は背面の右側縁に丁寧な加工を施したもので、その腹面には使用による光沢も認められる。46は主に左側縁下位を掻器として使ったものである。47は背面の右側縁上位に僅かな刃部を作出している。上部の失われている48は床面から出土したもので、背面の下端付近から右側縁に刃部を作出している。49、50は主に背面の右側縁部に刃部を有するものである。51は背面全面に加工が施され肉厚のスクレイパーで、下端の欠失部以外は刃部と考えられる。腹面の左側には明瞭な光沢が認められる。52は右側縁、53は左側縁に刃部を有するもので、53の刃部の一部は掻器として使われている。54は下端部の左側縁だけに加工を施したもので、腹面の光沢は先端に明瞭である。55は背面の右側を削器、左側をノッチ、下端部を掻器とするものである。ノッチの刃部は腹面に作出されている。56は背面の両側縁に加工が施されたもので、上下の端部が欠失しているが、製作途中で破損した石鏃の可能性もある。57（Ⅳ２）、58（Ⅳ３）は両面調整石器である。57は背面の右側縁上位と腹面の左側縁下位に整然とした剥離が施される。それ以外の剥離は粗雑で石槍あるいはナイフの未成品かもしれない。58は床面から出土した肉厚の剥片を用いたものである。背面の下端部周辺には掻器として使用した痕跡が認められる。59～62は石核である（ＶＡ１）。いずれも一定した打面を持つものではなく、全面に剥片を採取した痕跡が見られる。ただし、どれからも大型の石器製作に耐えられそうな剥片がはぎ取られた様子はなく全て残核と考えられる。63は床面から出土した原石である（ＶＡ２）。この周辺からは大型のフレイク類とたたき石が出土しており、石器製作の状況を窺わせる。64～70はＵフレイクである（ＶＢ２）。64～68は上記の石核からランダムにはぎ取られた不定形剥片、69・70は縦長剥片を核素材とする。これらの使用痕はいずれも剥片の比較的鋭利な部分にあり、中には64のように刃部が摩滅するような使われ方をするものや、67・68のように掻器状に使われたようなものも含まれている。

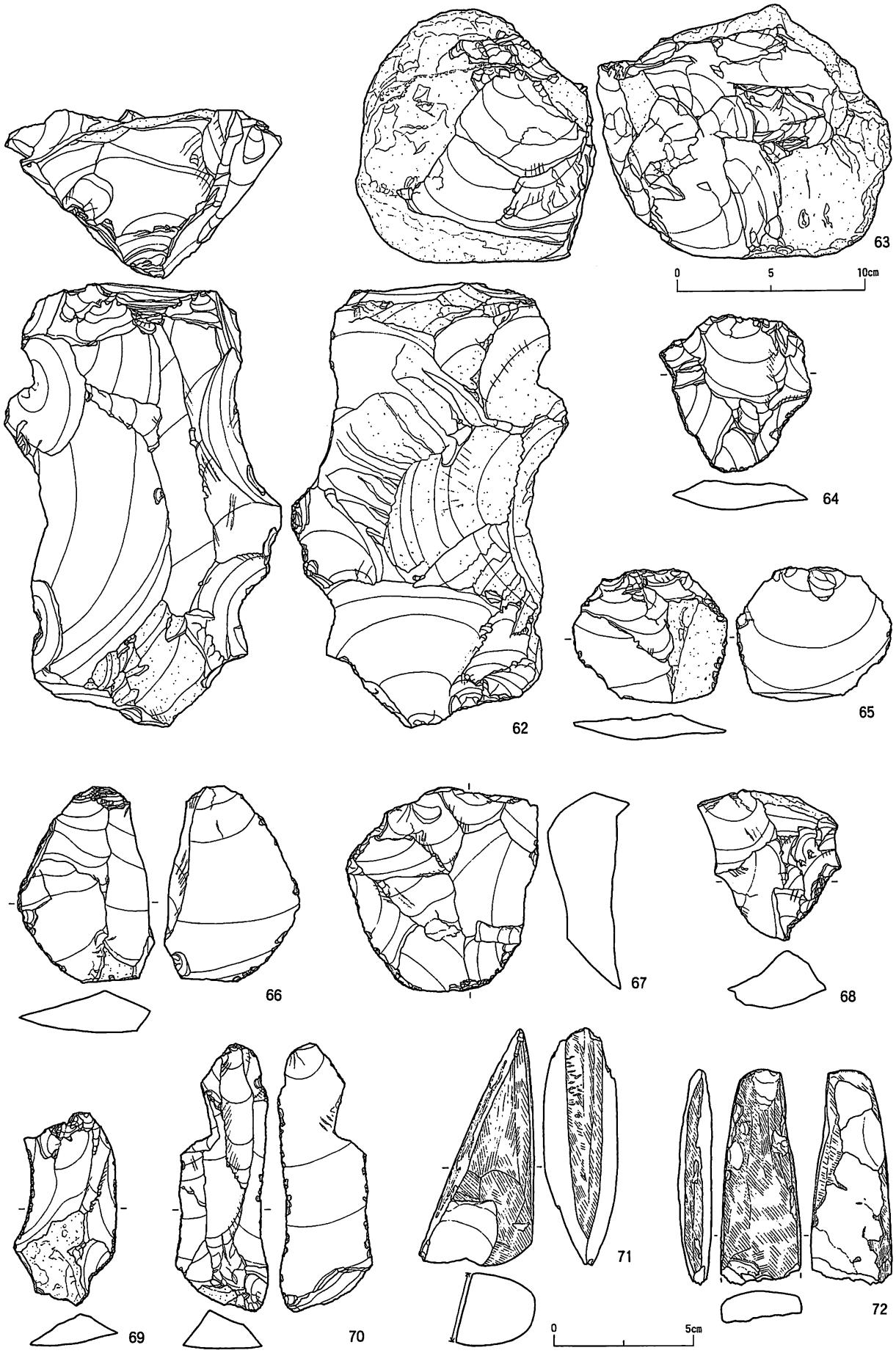
71・72は石斧である（Ⅵ４）。71は右側縁にすり切り痕を残す破損品である。その割れた面には若干の研磨が施されていることから別の道具に再加工する途中で遺棄した可能性がある。72は使用による刃部の破損が著しい小型の石斧で、色調と裏面の特徴から使用期間中に被熱した可能性がある。73～78はたたき石である（73～75：Ⅶ１、76：Ⅶ２、77・78：Ⅶ３）。主に長軸の端部を使用したもので、73・74・77のように両端部を使ったものや体部の突起部分を使ったもの（75）、平坦部を台石のように使い合わせたもの（78）もある。76は床面からフレイク類や原石などと共に出土したもので、石器製作時のハンマーストーンとして使われた可能性が高い。79は、扁平礫の側縁部に細長い平坦なすり面を持ったすり石である（Ⅷ２）。左右の両端部には著しい敲打痕が認められる。また、表裏の扁平面もまたすり石あるいは砥石として使われた可能性がある。80・81は各形状が異なる半円状扁平打製石器である（Ⅷ３）。80は、短冊形の礫片の上下側縁だけに加工を施したものである。81は扁平



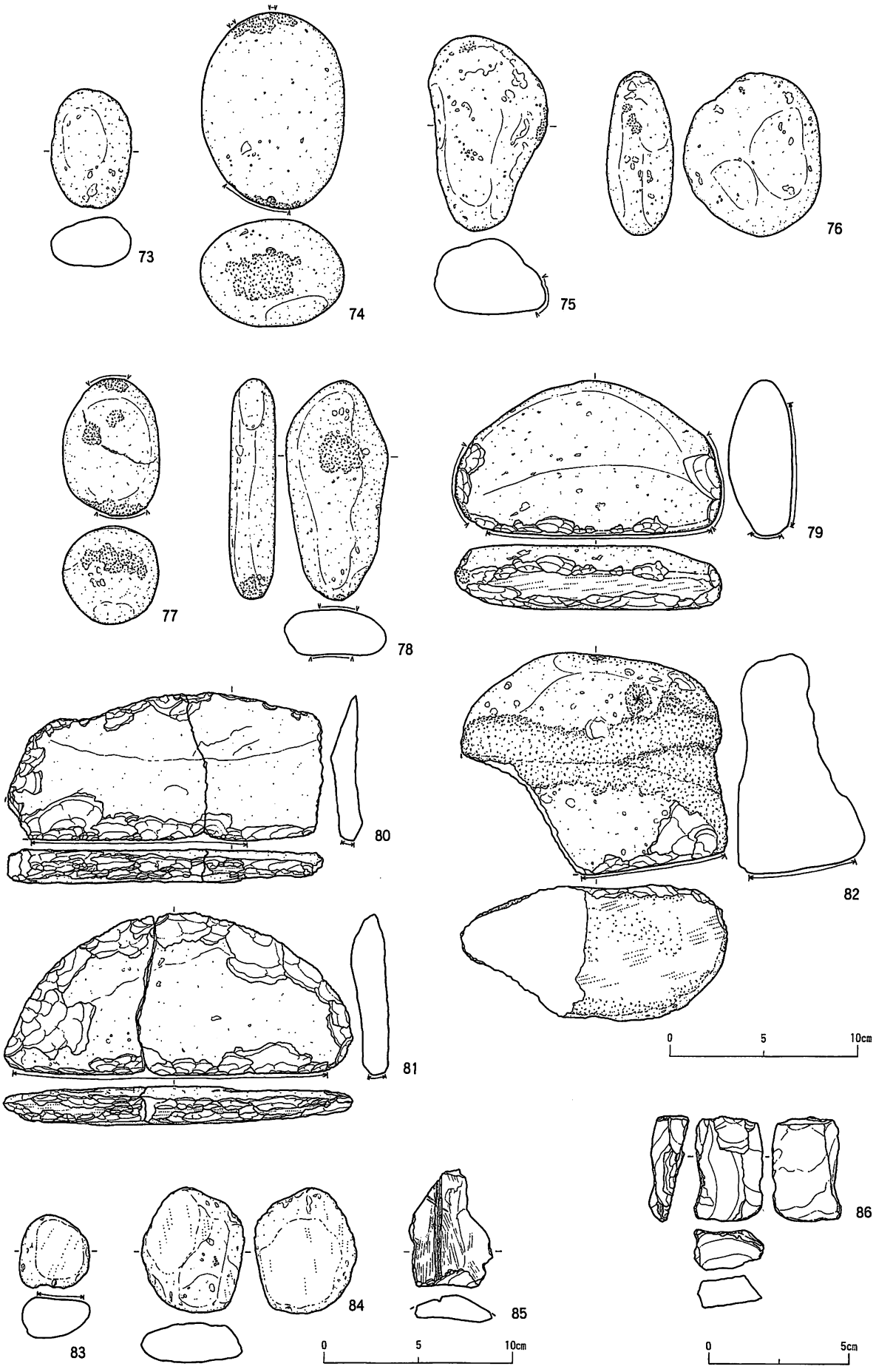
図Ⅳ－75　H－3出土の石器(1)



図Ⅳ－76　H－3出土の石器(2)



図Ⅳ－77　H－3出土の石器(3)



図Ⅳ－78　H－3出土の石器(4)

な礫片の全周に加工を加えて半円状に整形したもので、約20m離れた包含層から出土したものと接合している。使用痕は主に下端の側縁に認められるが、細長くて幅の狭い敲打痕からは使用頻度の多さが感じられない。82はすり面が破損した北海道式石冠である（Ⅷ４）。83・84は軽石製の砥石としたものである（ⅨＢ２）。85は研磨面に浅い擦り切り溝を有した加工痕のある礫である（Ⅻ１）。下端部の加工痕は、突起部が摩滅するもので、石錐あるいは掻器の様に使ったことが考えられる。86も緑色泥岩製の擦り切り残片を利用した石製品で、やはり下端部に著しい摩滅が認められる。

時　期　床面出土のⅡ群ｂ類土器から、縄文時代前期後半と考えられる。（皆川）

Ｈ－４（図Ⅳ－79～83、図版23・78・79、表Ⅳ－７・18・24）

位　置　Ｊ－14－ｂ～ｄ、Ｊ－15－ａ～ｃ、Ｋ－14－ａ・ｃ・ｄ

規　模　585×561／472×457／39㎝

床面積　19.89㎡

平面形　不整楕円形

長軸方向　Ｎ－126°－Ｗ

確認・調査　Ｈ－４は、包含層の遺物分布の薄い範囲に設けたトレンチによって確認された掘り込みの浅い竪穴式住居である。Ｈ－17を切って掘り込まれていることから、Ｈ－４はＨ－17よりも新しい遺構と考えられる。そして、近接するＨ－７もＨ－17を切って掘り込まれていることから、これらは同じ頃に作られた類似の形態と用途を持つ遺構と推定される。また、近接するＰ－60は本住居に伴う可能性がある。なお、床面から検出された32カ所のピットに関しては、「柱穴状小土壙」群の検出範囲と重なることからその一部を含む可能性が高い。これらを判別する手がかりは得られず、従って先後の関係も捉えるには至らなかった。同じ個体と考えられる遺物が出土した遺構は、Ｈ－１・７～９、Ｐ－42である。中でも、Ｈ－１は床面から、Ｈ－８、Ｐ－42は覆土から同じ個体の土器が複数出土している。また、炭化種子を目的に床上の土壌約5.0Ｌに対してフローテーションを実施したが抽出には至らなかった。

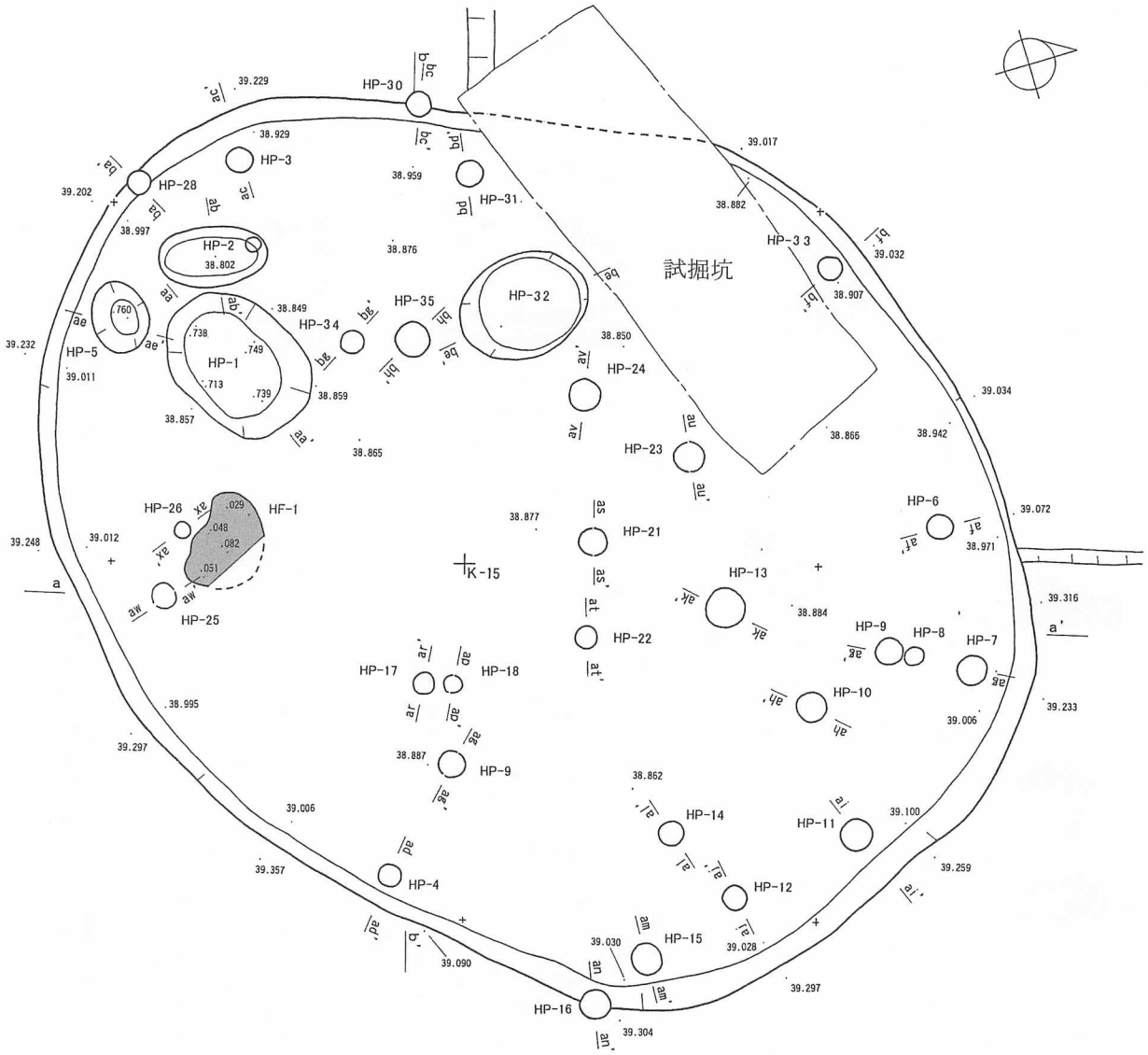
覆　土　大きく見て、上位に黒色土主体の覆土１層、下位に少量のロームを含む腐植土の覆土２層が形成されている。覆土１層は周囲から流れ込んだⅢ層と考えられ、覆土２層は周囲から流れ込んだ掘り上土が大半を占めるものと考えられ、遺物も主にこの層中から出土している。なお、覆土２層中位の図示した位置からは、赤化の弱い焼土（ＨＦ－１）が検出されている。

壁・床　掘り込みが浅く、床面、壁の立ち上がりは共に明瞭と言えない。図示した竪穴の平面と土層の断面形は、覆土２層の遺物の出土状況と堆積土壌の締まり具合から、かろうじて割り出したものである。なお、北西側の壁の立ち上がりと床の一部は、年次不明の試掘調査によって既に失われていた。

炉　検出されていない。しかし、赤化の弱い焼土（ＨＦ－１）が、竪穴南側の覆土２層からに検出されており、床面の不明瞭さと合わせて考えるなら炉跡である可能性もある。

付属ピット・柱穴　床面から検出されたピットはＨＰ－１～16、18～26、28、30～35の32カ所である（ＨＰ－17・27・29は欠番）。これらのピットは、柱穴状のもの（ＨＰ－３・４、６～16、18～26、28、30・31、33～35）と比較的大柄な性格不明のもの（ＨＰ－１・２・５・32）とに分かれる。柱穴状のピットは、竪穴の中央付近で少なく壁際付近に多い配置となっており、主柱穴は中央部のＨＰ－13・19・20・21・23・24・35に可能性がある。これらのことから住居の構築物は、中央部に主柱を持ち、竪穴の掘り込みの浅い分壁際にも支柱を必要とする上部構造を備えていたことが推定される。その他のピットについては、南西側の床面に集まり、ＨＰ－１・２の覆土に遺物が多く入っている以外に性

H－4



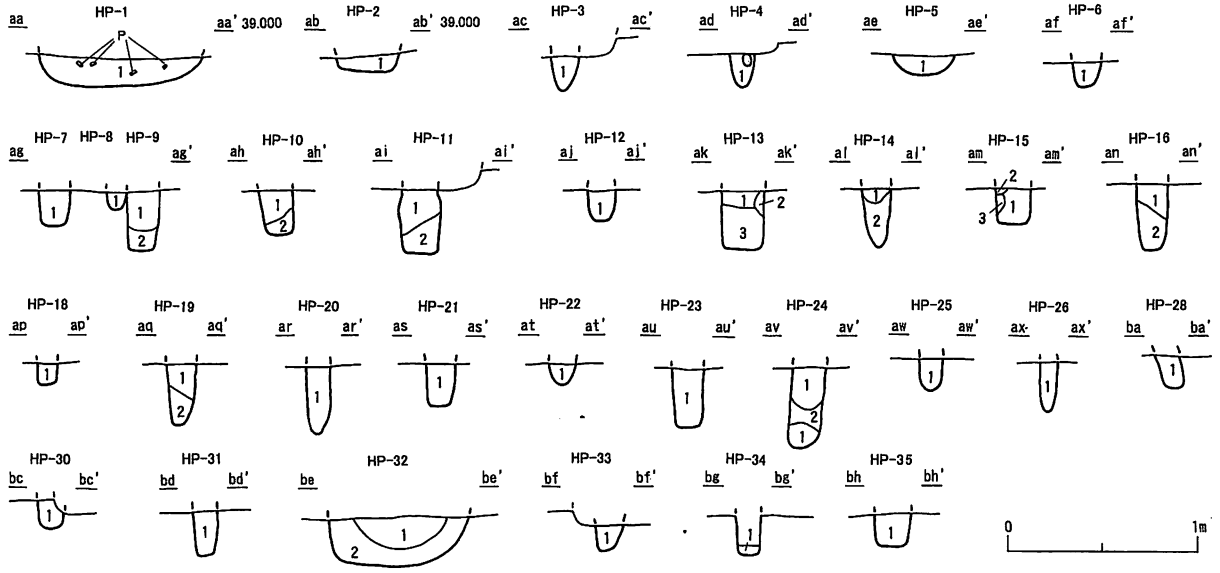
1　黒色土　(7.5YR1.7／1)　腐植土(Ⅲ層相当)　遺物が少量混入する
2　黒褐色土　(10YR2／3)　腐植土に少量のⅣ層が混じる　遺物が少量入る　焼土(HF－1)あり

0　1m

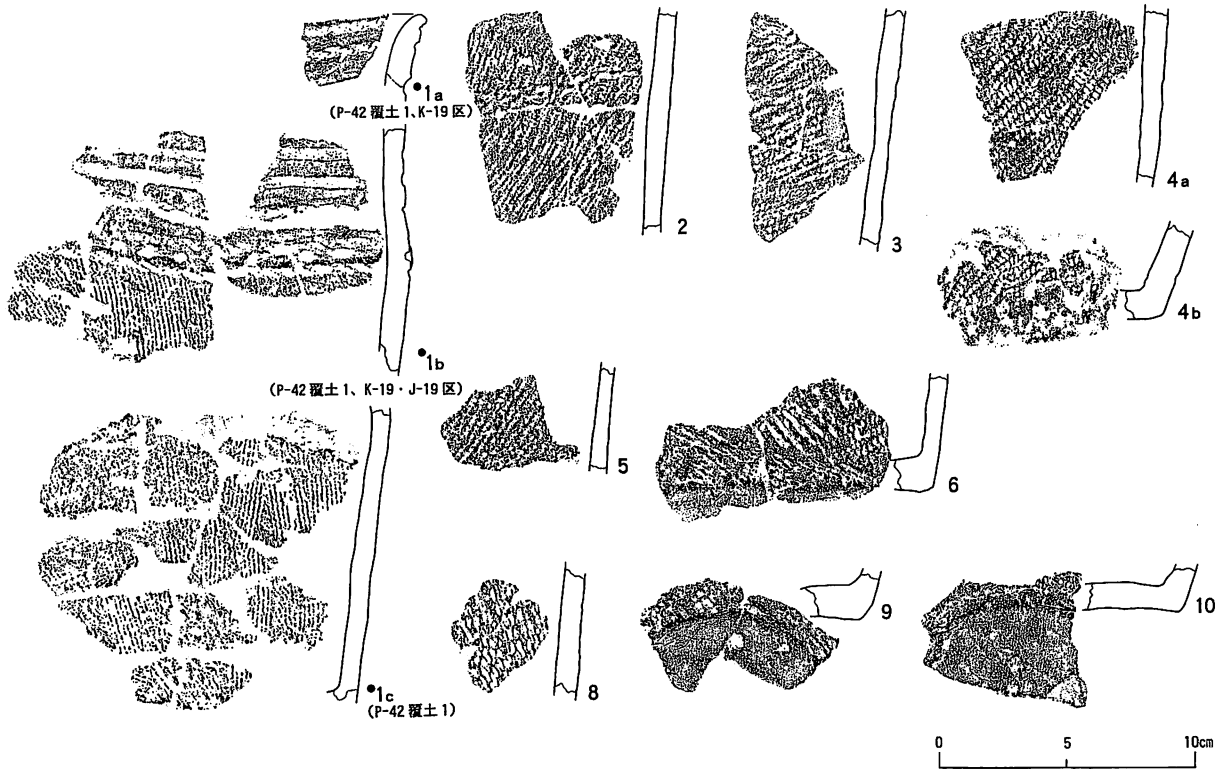
図Ⅳ－79　H－4(1)



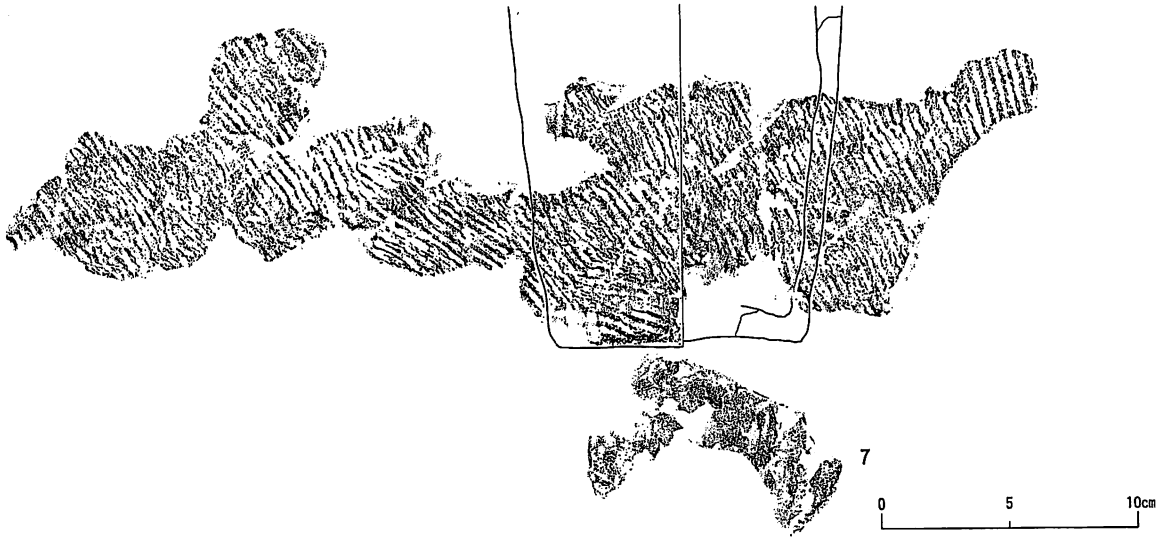
図Ⅳ－80　Ｈ－４遺物出土状況



HP−1	1	黒色土	(7.5YR1.7／1)	腐植土流れ込み 微量のロームブロックを含む 遺物は層の上位に入る
HP−2	1	黒褐色土	(10YR2／2)	遺物を多数含む 腐植土
HP−3	1	黒褐色土	(10YR2／3)	大粒のロームが混じる腐植土
HP−4	1	灰黄褐色土	(10YR4／2)	腐植土にロームが混じる
HP−5	1	黒褐色土	(10YR2／2)	腐植土
HP−6	1	黒色土	(10YR2／1)	腐植土
HP−7	1	黒褐色土	(10YR3／1)	腐植土にⅣ・Ⅴ層が微量入る
HP−8	1	黒褐色土	(10YR3／2)	ロームブロックの入る腐植土
HP−9	1	黒色土	(10YR1.7／1)	しまりのある腐植土
	2	黒色土	(10YR1.7／1)	ポソポソの腐植土
HP−10	1	黒色土	(10YR2／1)	ローム粒を含む腐植土
	2	黒褐色土	(10YR3／2)	ロームブロックの入る腐植土
HP−11	1	黒褐色土	(10YR2／2)	腐植土
	2	黒褐色土	(10YR2／2)	ポソポソの腐植土
HP−12	1	黒色土	(10YR2／1)	ローム粒を含む
HP−13	1	黒褐色土	(10YR3／1)	腐植土に、Ⅳ・Ⅴ層が微量入る
	2	灰黄褐色土	(10YR4／2)	腐植土にロームが混じる
	3	黒色土	(10YR2／1)	腐植土
HP−14	1	黒褐色土	(10YR3／1)	腐植土にⅣ・Ⅴ層が微量入る
	2	灰黄褐色土	(10YR4／2)	炭化物を含む腐植土にロームが混じる
HP−15	1	灰黄褐色土	(10YR4／2)	腐植土にロームが混じる
	2	黒褐色土	(10YR3／1)	腐植土にⅣ・Ⅴ層が微量入る
	3	にぶい黄褐色土	(10YR5／3)	ロームと腐植土が均等に混じる
HP−16	1	黒褐色土	(10YR3／2)	ロームブロックの入る腐植土
	2	黒褐色土	(10YR2／2)	ポソポソの腐植土
HP−18	1	黒色土	(10YR2／1)	腐植土
HP−19	1	黒色土	(10YR2／1)	やわらかい腐植土
	2	黒褐色土	(10YR3／1)	やわらかい腐植土
HP−20	1	灰黄褐色土	(10YR4／2)	やわらかい腐植土
HP−21	1	黒褐色土	(10YR2／2)	ローム粒が微量入る腐植土
HP−22	1	黒褐色土	(10YR3／2)	ロームブロックの入る腐植土
HP−23	1	黒褐色土	(10YR2／2)	ローム粒の入る腐植土
HP−24	1	黒褐色土	(10YR2／2)	ローム粒の入る腐植土
	2	黒褐色土	(10YR3／2)	ロームブロックの入る腐植土
HP−25	1	黒褐色土	(10YR3／2)	ロームブロックの入る腐植土
HP−26	1	黒褐色土	(10YR2／2)	ローム粒が微量入る腐植土
HP−28	1	黒褐色土	(10YR2／3)	大粒のロームが入る腐植土
HP−30	1	黒褐色土	(10YR2／3)	大粒のロームが入る腐植土
HP−31	1	黒褐色土	(10YR2／3)	大粒のロームが入る腐植土
HP−32	1	黒色土	(10YR1.7／1)	腐植土
	2	黒褐色土	(10YR3／2)	ロームブロックの入る腐植土
HP−33	1	黒褐色土	(10YR2／2)	ローム粒の入る腐植土
HP−34	1	黒色土	(10YR1.7／1)	ポソポソの腐植土
HP−35	1	黒色土	(10YR1.7／1)	ポソポソの腐植土



図Ⅳ−81　H−4(2)と出土の土器(1)



図Ⅳ－82　Ｈ－４出土の土器(2)

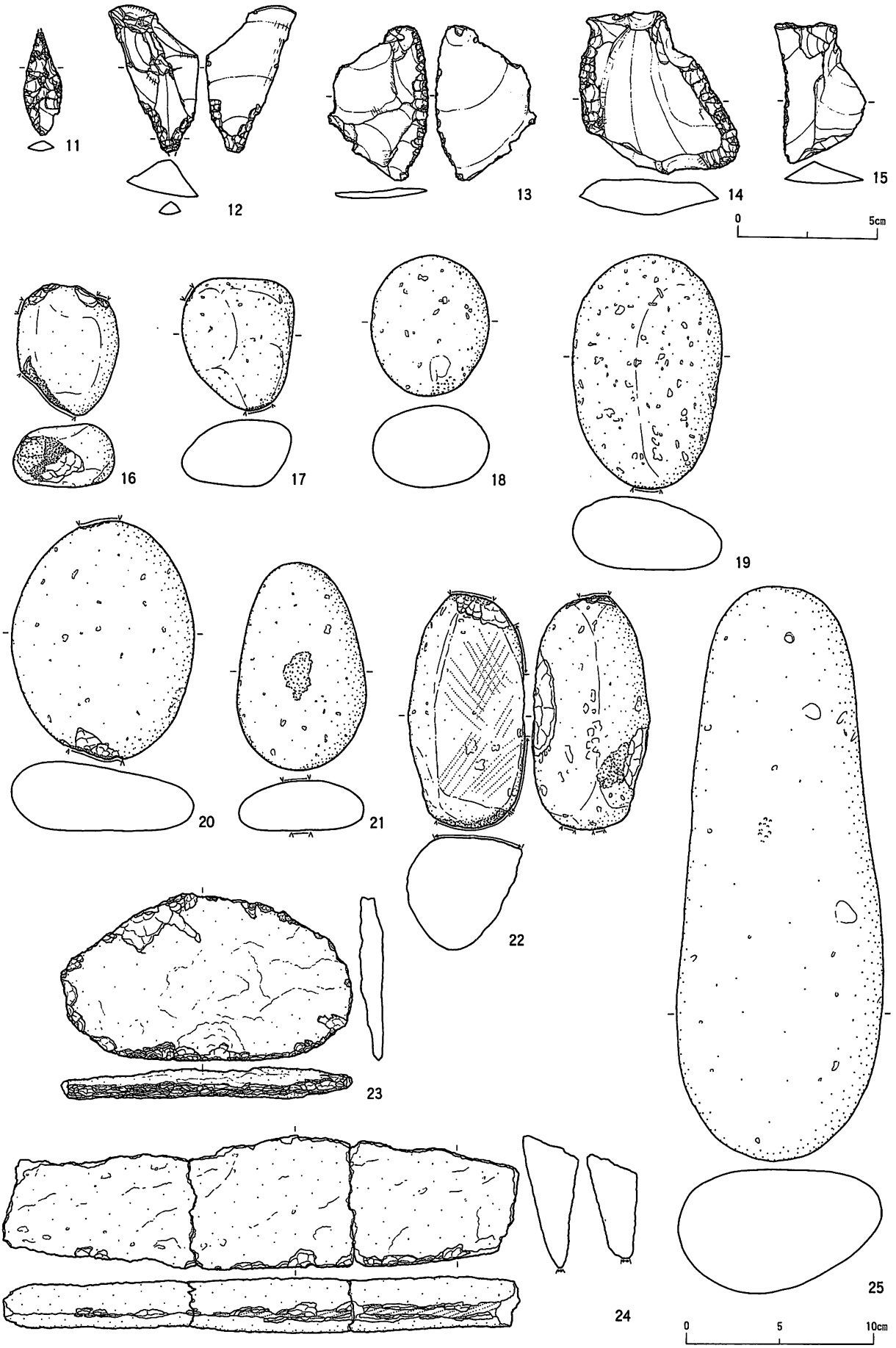
格を求める手がかりはない。

遺物出土状況　遺物は、床面とＨＰ－１～４、ＨＦ－１、そして覆土１・２層から897点が出土している。数量は床面154点、ＨＰとＨＦからは124点、覆土619点である。床面から出土したのは、Ⅱ群ｂ類土器、Ｕフレイク、フレイク、半円状扁平打製石器、台石類、礫などである。これらの中で比較的多いのは土器の89点で、礫など45点がそれに次ぐ。ＨＰ－１からはⅡ群ｂ類土器が92点出土しており突出している。これらの土器に関しては、同じ個体のものがＨ－７・８、Ｐ－42からも出土している。覆土から出土したのはⅡ群ｂ類土器、石鏃、スクレイパー、両面調整石器、石核、Ｕフレイク、フレイク、石斧片、たたき石、すり石、砥石、台石類、原石、礫などである。多いのはフレイク211点、礫・礫片243点、Ⅱ群ｂ類土器107点である。遺物は覆土１層に包含するものが数量も種類も多く、数量は覆土２層の２倍強である。

遺　物

（土器）土器は７個体のⅡ群ｂ類土器を掲載した。これらの胎土には例外なく繊維が混入する。各出土層位は、１～７が床あるいはＨＦ－１やＨＰ－１・２からのものである。従って、これらが本住居に伴う土器である。残りは、９が覆土２層、８・10が覆土１層である。

１ａ～ｃはＰ－42覆土１層と周辺の包含層から出土したものが接合した（Ｐ－42－３ａ～ｃ）。本遺構のＨＰ－１と覆土２層から未接合の同一個体の破片が出土している。口縁部にＬＲの縄線文と沈線文の施された文様帯を有する深鉢形土器である。胴部にはＲの細い撚糸文が密に施され、口縁部文様帯との境には上下段をＬＲの縄線文に挟まれる厚みの無い粘土紐が貼付され、更にその上には竹管状の施文具を用いた連続刺突文が施されている。２・４・６は床面出土の胴部と底部である。２はＬＲの自縄自巻的縄文を地紋に施し、その上からＲの綾絡文を横位に施文している。４ａ・ｂの地紋はＬＲの斜行縄文、６は右側にＬＲＬの三段複節、左側にＲの撚糸文が施される。ＨＦ－１出土の３の地紋は、ＬＲの自縄自巻的縄文で、その器面の上端にはＲの綾絡文が認められる。５はＬＲの斜行縄文が施された底部に近い胴部でＨＰ－２から出土した。７もＨＰ－１出土である。未接合ではあるが同一個体の土器がＨ－７覆土２層、Ｈ－８覆土１層、Ｐ－42覆土１層からも出土している。地紋は密に施されたＲの撚糸文で、胎土中には海綿骨針が混入している。８はＲの撚糸文が施されたもので、Ｈ－６から同じ個体と考えられる破片が見つかっている。９・10はＬＲの斜行縄文が施された上げ底気味の底部である。



図Ⅳ－83　H－4出土の石器

（石器） 石器類600点の中からここには15点を掲載した。11は基部が丸みを帯びた石鏃である（ＩＡ２ａ）。12はＨＰ－１から出土した厚みのある剥片の端部に尖頭部を作出した石錐（Ⅱ１）で、先端がかけている。13・14はスクレイパーである。13（ⅢＢ２ａ）は薄身の剥片の右側縁に細かい剥離が成されたものである。14（ⅢＢ３）は厚めの剥片の左右両側縁を刃部とするもので、剥片上位の左右に抉り込みらしき加工がなされていることからつまみ部を作りかけていた可能性がある。15は、左側縁に使用痕を有すＵフレイクである（ＶＢ２）。16～22はたたき石で（16～20：Ⅶ１、21・22：Ⅶ３）、18・19はＨＰ－２から出土している。ほとんどが楕円或いは長楕円形の円礫の長軸端部を使用している。23は半円状扁平打製石器である。下辺の加工は刃部の様相を持つ。24は覆土２層から出土した下辺の一部に細長いすり面を有するすり石である（Ⅷ３？）。Ｈ－８覆土１層出土のものと接合している（右端）。25はＨＰ－４から出土した長楕円形の円礫を用いる台石（Ｘ）である。

時　期　床面出土のⅡ群ｂ類土器から、縄文時代前期後半と考えられる。（皆川）

Ｈ－５（図Ⅳ－84～88、図版24・25・80、表Ⅳ－７・18・24）

位　置　Ｅ－13－ｂ・ｃ、Ｆ－13－ｃ・ｄ、Ｆ－14、Ｇ－14－ａ・ｄ

規　模　491×462／445×419／39cm

床面積　15.86㎡

平面形　不整円形

長軸方向　Ｎ－60°－Ｗ

確認・調査　調査区の最も西側に位置する竪穴住居である。Ⅲ層上面にＫｏ－ｄが堆積する窪みを手がかりにトレンチを設けて確認したものである。

竪穴の南側には、Ⅲ層検出の焼土１カ所（Ｆ－９）と柱穴状小土壙９カ所（ＳＰ－386～394）が検出されている。後者の中のＳＰ－387～392は、「方形柱穴列１」を構成しており、これらは竪穴を伴わない小屋状の構築物の柱穴である可能性が高い。さらに、北側のやや離れた地点には墓と考えられる土壙が一基（Ｐ－１）見つかっている。以上の遺構はその配置から見てＨ－５と関連するものと考えられ、それらは「セットとなる遺構」の可能性がある。しかし、同時期と考えられる他の住居との関わりは薄く、やや孤立気味の住居と言える。

また、炭化種子を目的に床上とＨＰ－３の土壌各5.0Ｌを採取しフローテーションを実施した。床面からは抽出に至らなかったが、ＨＰ－３からは不明の炭化種子が得られている。

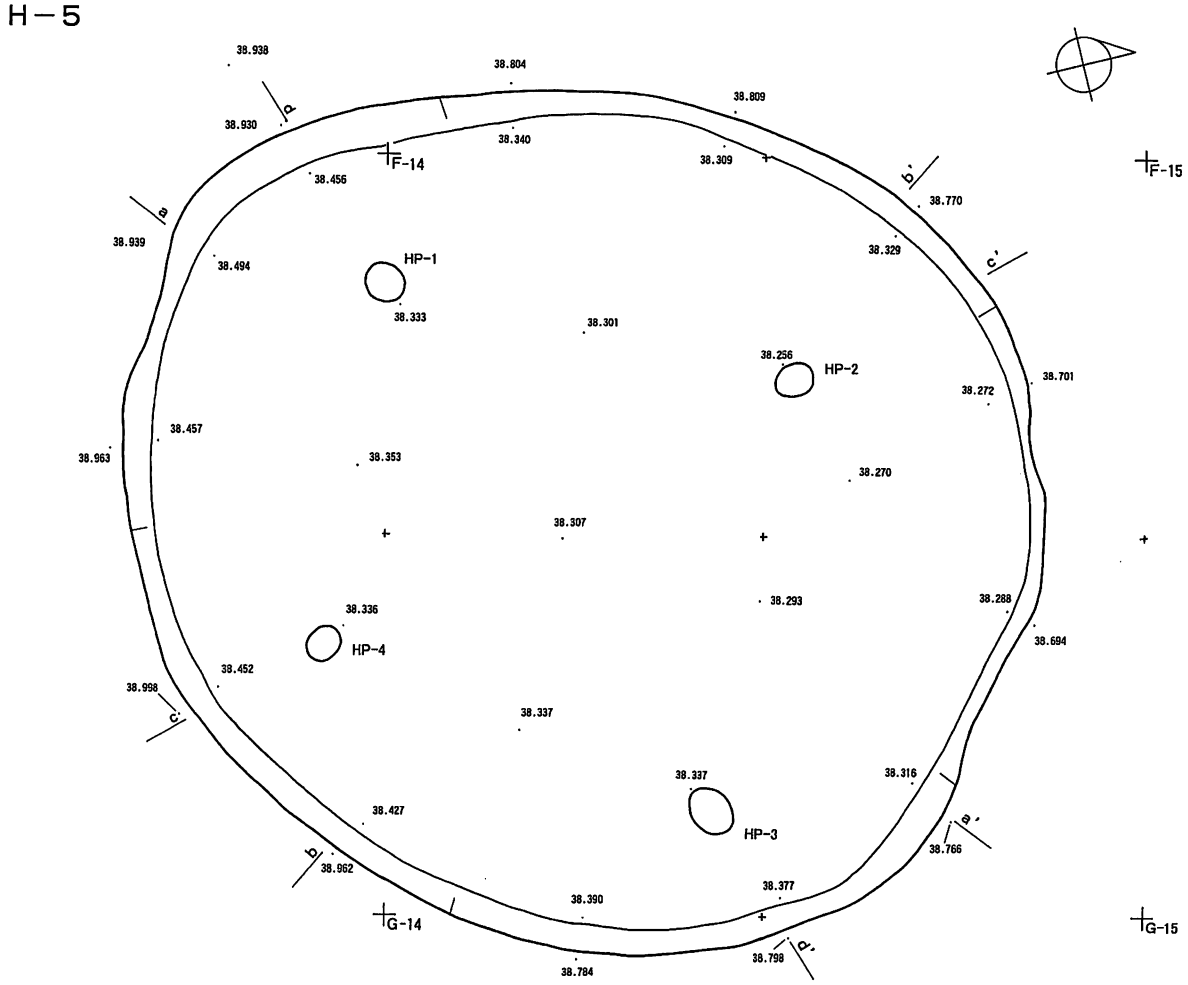
覆　土　上位に堆積する覆土１～３・５層はⅢ層の腐植土を主体とする流れ込みと考えられる。第２層からは、フレイクが北側から流れ込んだ様子が伺えることから、住居の周囲にフレイク類が廃棄された時期に堆積したものと考えられる。下位に堆積する覆土４・６～８層はロームを含む腐植土層で、その大半は周囲からの流れ込みが原因と考えられる。住居の構造は、Ｈ－１・３・15と異なり上屋を土で覆うようなものではなく、せいぜい壁に近い部分に土を盛る様なものであったと考えられる。掘り込み面は、掘上土の検出されたⅢ層上位と考えられる。

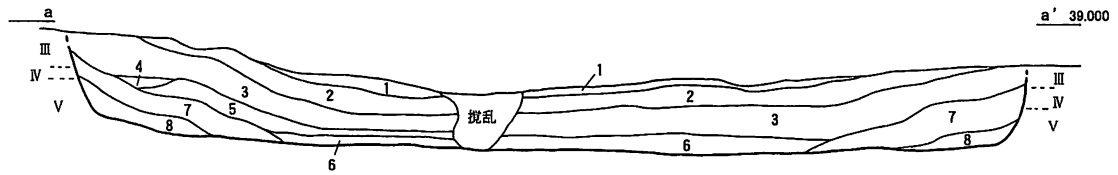
壁・床　床面はほぼ平坦なもので、壁は僅かに傾斜しながら立ち上がっており構築時にほぼ垂直であった可能性が高い。

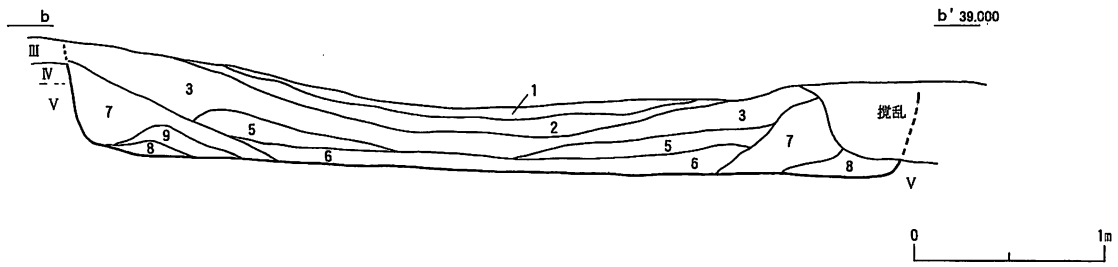
炉　床面からは検出されていない。但し、竪穴に近い北側には焼土（Ｆ－９）が検出されており、これが屋外炉として使われていた可能性がある。

付属ピット・柱穴　床面から検出されたピットは４カ所（ＨＰ－１～４）で、これらは主柱穴と考えられる。その配置は間隔が２ｍ前後の四角を組む様に作られている。規模は径20～30cm、深さ40～60

H－5

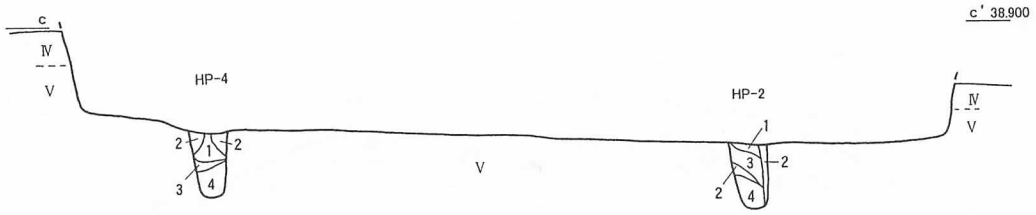






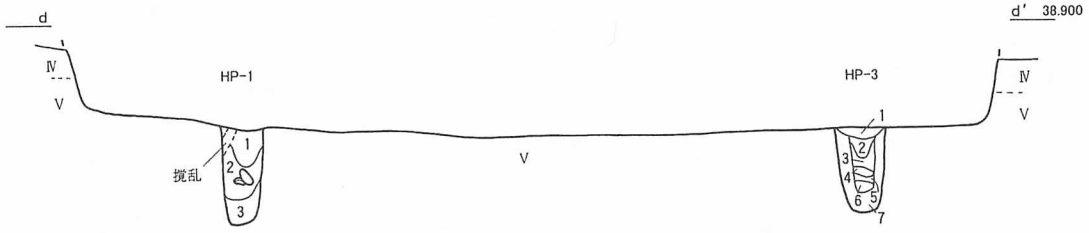
1	暗褐色土	(10YR3／4)	Ko－dが混じる
2	黒色土	(10YR1.7／1)	粘性少なく しまっている 腐植土層　乾燥するとクラックが無数に入る
3	黒褐色土	(10YR2／2)	粘性があり、しまりのある腐植土層
4	暗褐色土	(10YR3／3)	しまりのない 腐食土中にロームブロックが等量混じる
5	黒色土	(10YR1.7／1)	粘性少なく しまっている 腐植土層　乾燥するとクラックが無数に入る
6	黒褐色土	(10YR2／3)	粘性があり しまりのある腐植土とロームブロック(小粒)が等量に混じる 床面直上に堆積する
7	暗褐色土	(10YR3／3)	粘性があり しまりのあるローム(Ⅳ？)に腐植土が混じる
8	黒褐色土	(10YR3／2)	粘性があり しまりのあるロームと腐植土が等しく混じる
9	暗褐色土	(10YR3／3)	しまりのややない 腐食土中にロームブロックが等量混じる

図Ⅳ－84　H－5(1)



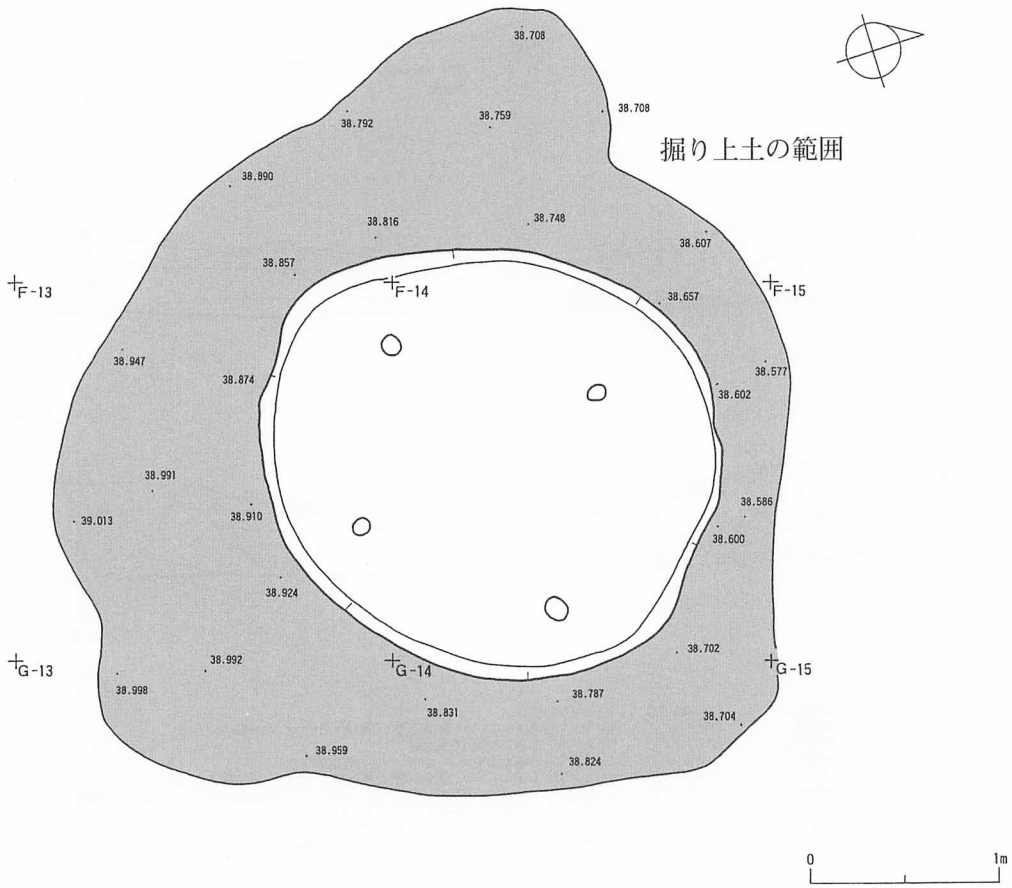
HP−4	1	黒褐色土	(7.5YR3／1)	腐植土にロームが少量混じる
	2	にぶい黄褐色土	(10YR5／4)	ロームに腐植土が微量混じる
	3	褐灰色土	(10YR4／1)	しまり少し　ロームに腐植土が少量混じる
	4	にぶい黄褐色土	(10YR5／4)	ロームに腐植土が微量混じる

HP−2	1	黒褐色土	(7.5YR3／1)	腐植土にロームが少量混じる
	2	にぶい黄褐色土	(10YR5／4)	ロームに腐植土が微量混じる
	3	褐灰色土	(10YR4／1)	しまりのないロームに腐植土が少量混じる
	4	灰黄褐色土	(10YR4／2)	ロームと腐植土が少量混じる

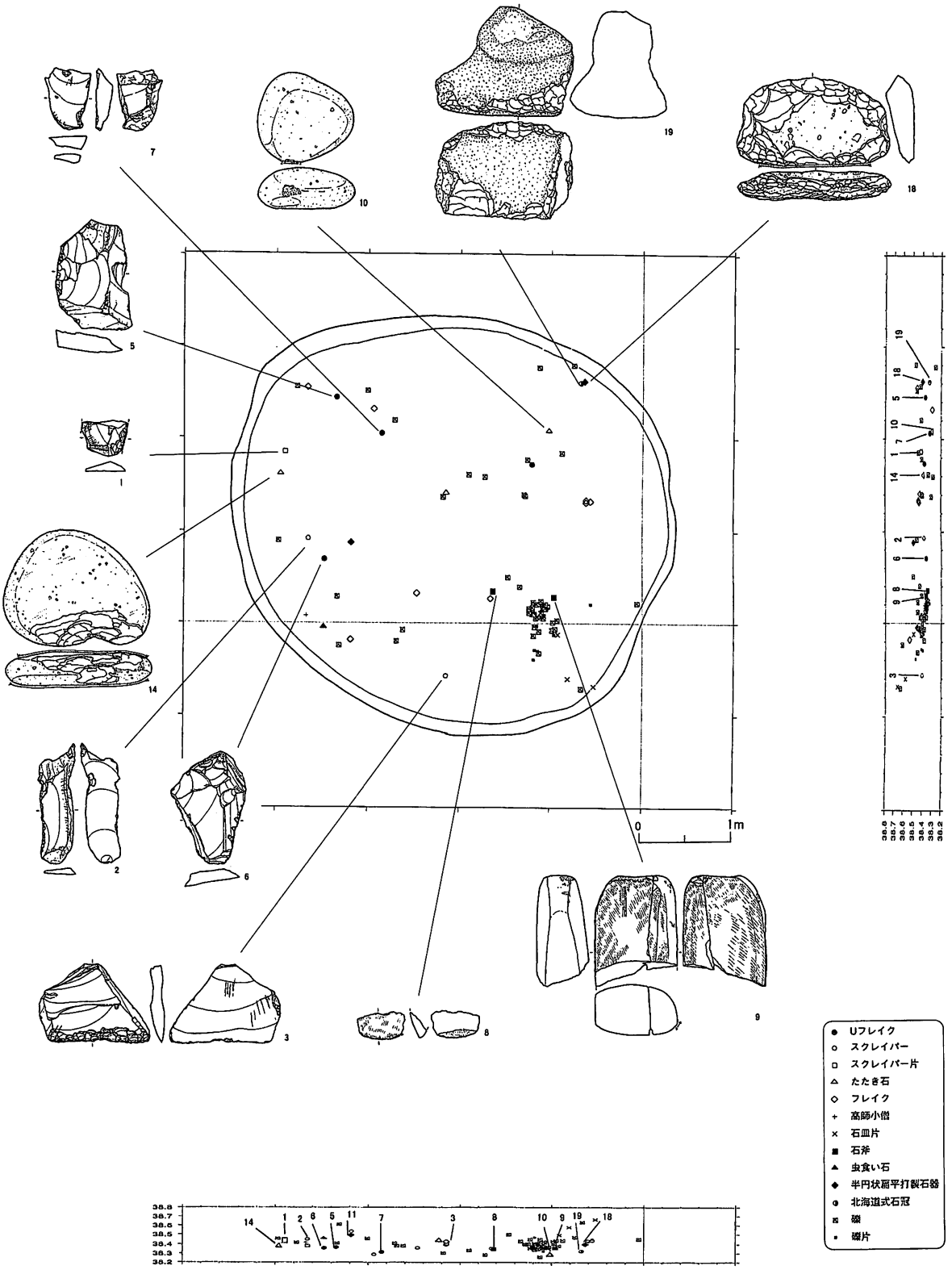


HP−1	1	黒色土	(10YR1.7／1)	腐植土
	2	黒褐色土	(10YR3／1)	腐植土　Ⅳ・Ⅴ層が微量入る
	3	褐色土	(7.5YR4／4)	ロームに腐植土が微量入る

HP−3	1	黒褐色土	(10YR3／1)	腐植土
	2	灰黄褐色土	(10YR4／2)	腐植土
	3	にぶい黄褐色土	(10YR5／3)	腐植土　ロームに腐植土が微量入る
	4	灰黄褐色土	(10YR4／2)	腐植土
	5	にぶい黄褐色土	(10YR5／3)	腐植土　ロームに腐植土が微量入る
	6	灰黄褐色土	(10YR4／2)	腐植土
	7	にぶい黄橙色土	(10YR6／4)	Ⅴ層ローム　埋めている？



図Ⅳ−85　H−5(2)



図Ⅳ－86　Ｈ－５遺物出土状況

cm程で、いずれも掘り込んだ後に柱材を埋め込むタイプである。その中で比較的規模の大きなＨＰ－１は、埋没状況が他の３カ所とはやや異なる。ピット内は腐植土を主体とする土壌で埋没し、その中位からは礫・礫片29点と共に北海道式石冠の細片20点、たたき石４点などが出土している。これらは、柱材の埋没部を強化する所謂「根固め石」の可能性がある。本竪穴の調査中においても各柱穴内には絶えず伏流水が滲み出しており、柱穴も腐りやすい状況にあったものと推定される。ＨＰ－１の柱材も根腐れなどのために交換された可能性がある。また、壁外柱穴に関して掘り込みがⅣ層に及ぶようなものは認められなかった。

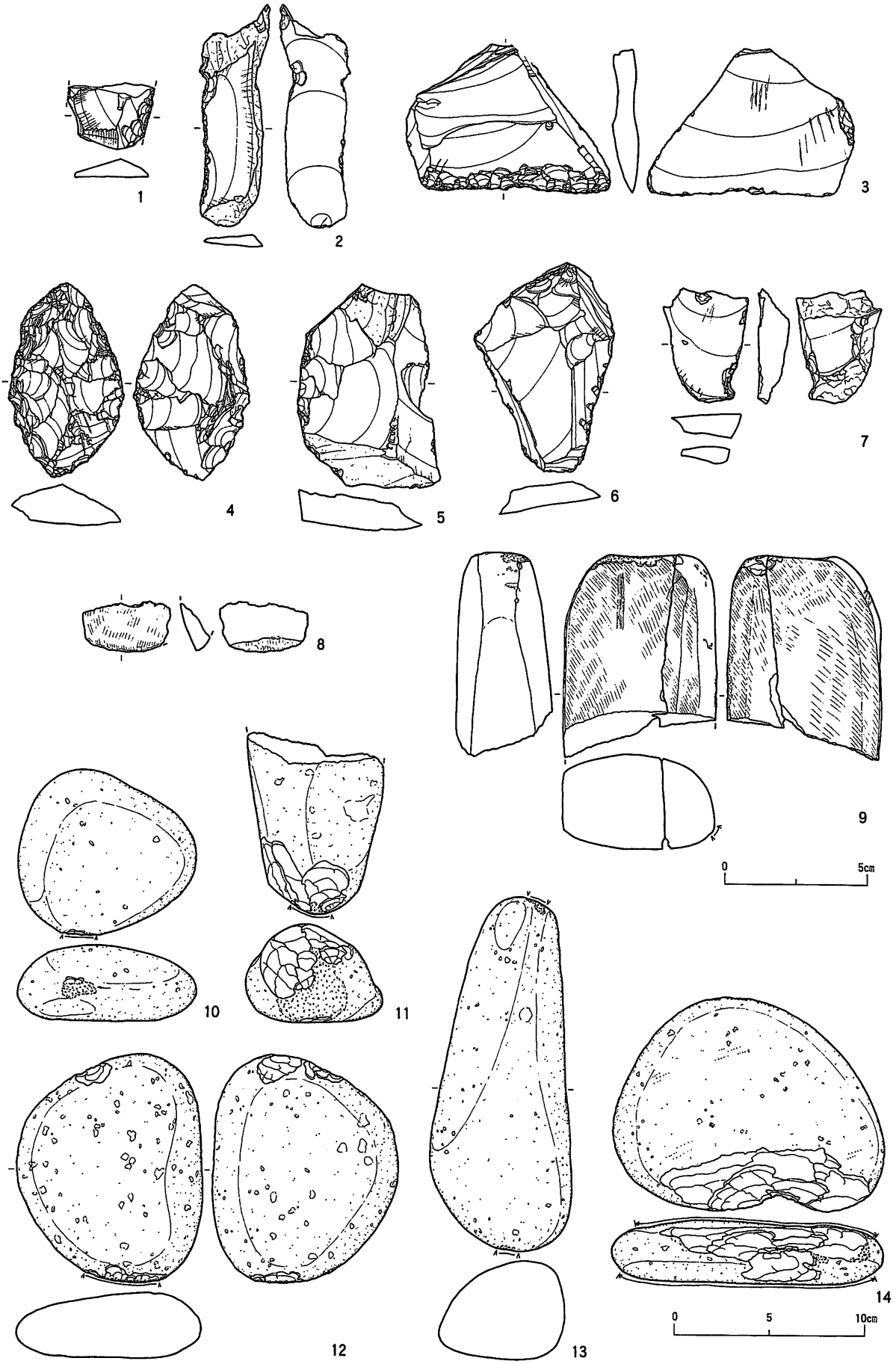
遺物出土状況　遺物は、床面と覆土から224点が出土している。数量は床面27点、覆土197点である。床面から出土したのは、Ⅱ群ｂ類土器、スクレイパー、Ｕフレイク、フレイク、石斧、擦り切り残片、たたき石、半円状扁平打製石器、北海道式石冠、礫、有孔石製品などである。土器の大半は細片で石器類の頻度が高い。覆土から出土したのは、Ⅱ群ｂ類、Ⅳ群ａ類土器、両面調整石器、石核、Ｕフレイク、フレイク、石斧、たたき石、半円状扁平打製石器、北海道式石冠、台石類、礫などである。フレイクが多いのは先述の通り周囲の包含層に廃棄されたものが流れ込んでいるためである。

遺　物　土器は、全て小破片のため掲載を見合わせた。

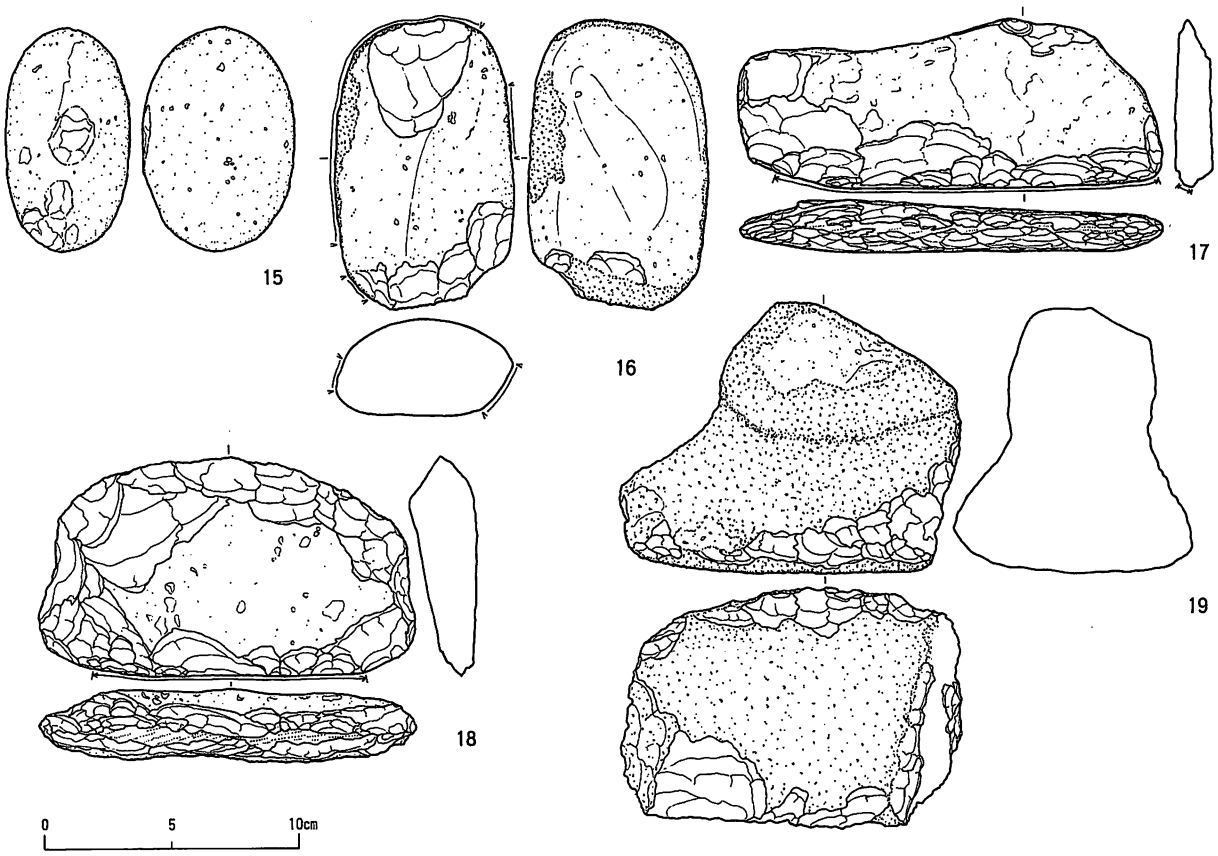
石器類211点の中からここには19点を掲載した。１～３は床面から出土したスクレイパーである（１：ⅢＢ２ａ、２：ⅢＢ２ｂ、３：ⅢＢ３）。１は上下が欠失したもので、右側縁の刃部が良く使い込まれている。２は縦長剥片の左側縁部に刃部を有するものである。側縁上位に対となる抉り部が作られていることから、つまみ付ナイフの可能性もある。３は下辺に刃部を有するものである。４は小型の両面調整石器である（Ⅳ２）。石槍の形態を持つが、尖頭部の作りが甘く腹面の剥離も粗いことなどから、石槍あるいはナイフの未成品の可能性もある。５～７は床面出土のＵフレイクである（ⅤＢ２）。７は小破片の右側縁にノッチ状の使用痕が見られる。

８・９は床面出土の石斧である（ⅥＡ４）。８の刃部片には土のような柔らかい対象物に用いた使用痕が認められる。９はＨＰ－１出土のものと接合した上半部で、胴下半から刃部までは欠失している。10～16はたたき石である（10～14：Ⅶ１、15・16：Ⅶ２）。10・14は床面、11・13・15・16は柱穴と考えられるＨＰ－１から出土したもので、10・12・14は扁平礫、11・13・15・16は楕円礫を各用いている。17・18は半円状扁平打製石器（Ⅷ３）で、下辺に細長いすり面が認められる。18は左右の側縁部に若干の抉りが見られる。19は一部が破損している北海道式石冠である（Ⅷ４）。下辺のすり面に見られる凹凸は、使用頻度の低さを窺わせる。

時　期　床面出土のⅡ群ｂ類土器から、縄文時代前期後半と考えられる。（皆川）



図Ⅳ－87　H－5出土の石器(1)



図Ⅳ－88　Ｈ－５出土の石器(2)

Ｈ－６（図Ⅳ－89～94、図版26・27、81～83、表Ⅳ－７・18・24）

位　置　Ｋ－14、Ｌ－14、Ｋ－15－ｂ、Ｌ－15－ａ・ｄ

規　模　545×523／372×345／37cm

床面積　14.32㎡

平面形　不整楕円形

長軸方向　Ｎ－87°－Ｗ

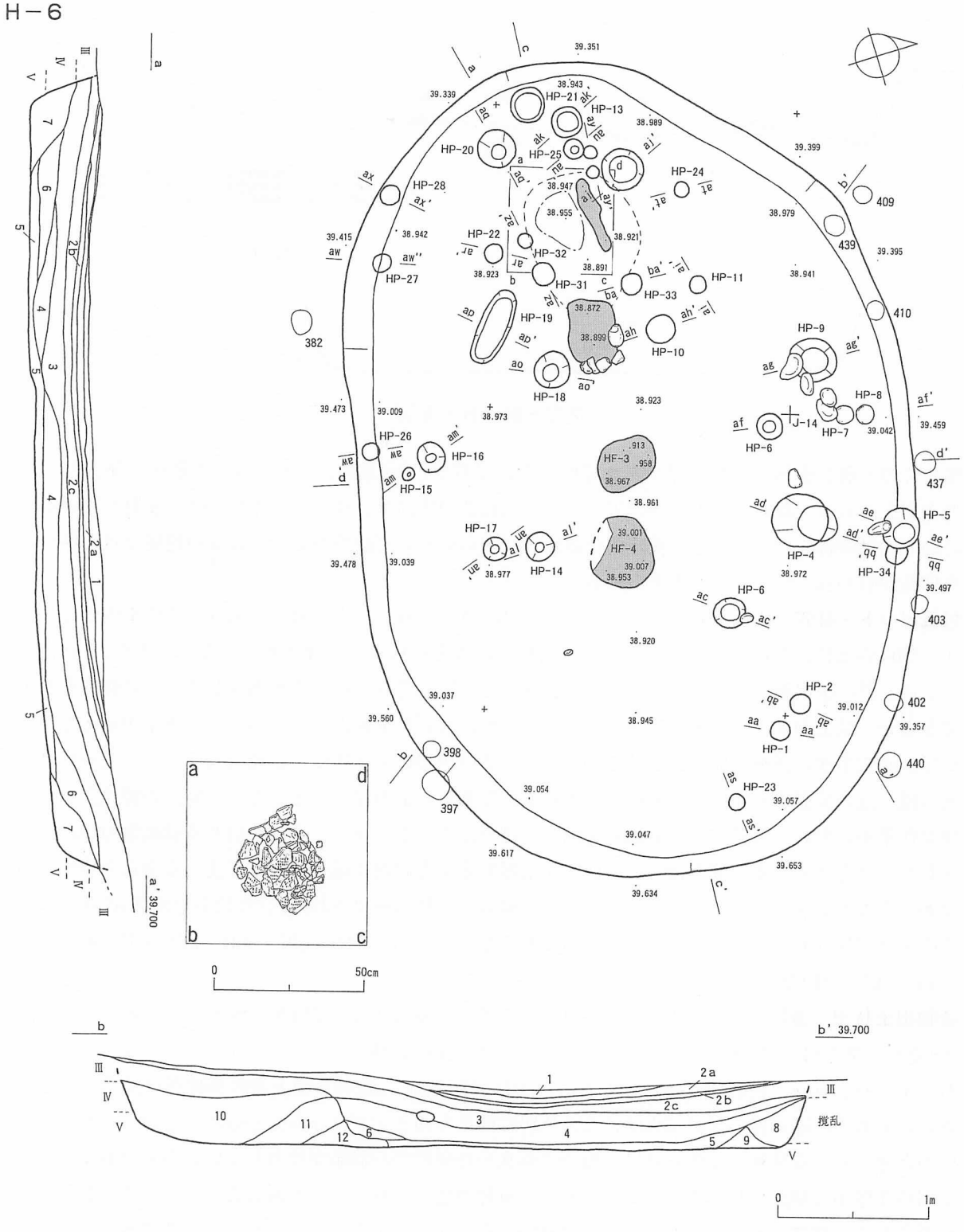
確認・調査　標高37～38ｍの西向き緩斜面に設けられた縄文後期前葉の竪穴住居である。Ⅲ層上面の窪みに堆積したＫｏ－ｄを手がかりにトレンチを設けて確認した。Ｈ－17とは重複しＨ－４・７とは近接するが、前期後半のこれらとは基本的に時期が異なる。また、床面検出の土器から採取した土壌と覆土３層からは炭化したクルミ属の皮殻片が検出されている。

覆　土　覆土の大半は腐植土の流れ込みであるが、一部に風倒木が原因と考えられるロームの撹乱が認められる（覆土10～12層）。覆土２層上位からは焼土（Ｆ－10）が検出されている。また、覆土３層からは調査中に炭化したクルミ属の皮殻片が検出されている。なお、覆土２層の中位に堆積する２ｂ層中には、Ｋｏ－ｄ以前、後期前葉以降の時期に降下した起源不明の火山ガラスが混じる可能性がある。掘り込み面はⅢ層上位と考えられる。

壁・床　床面はほぼ平らであるが、地形の傾斜に合わせて西側に向かって僅かに傾いている。壁は床から緩やかに広がりながら立ち上がっている。

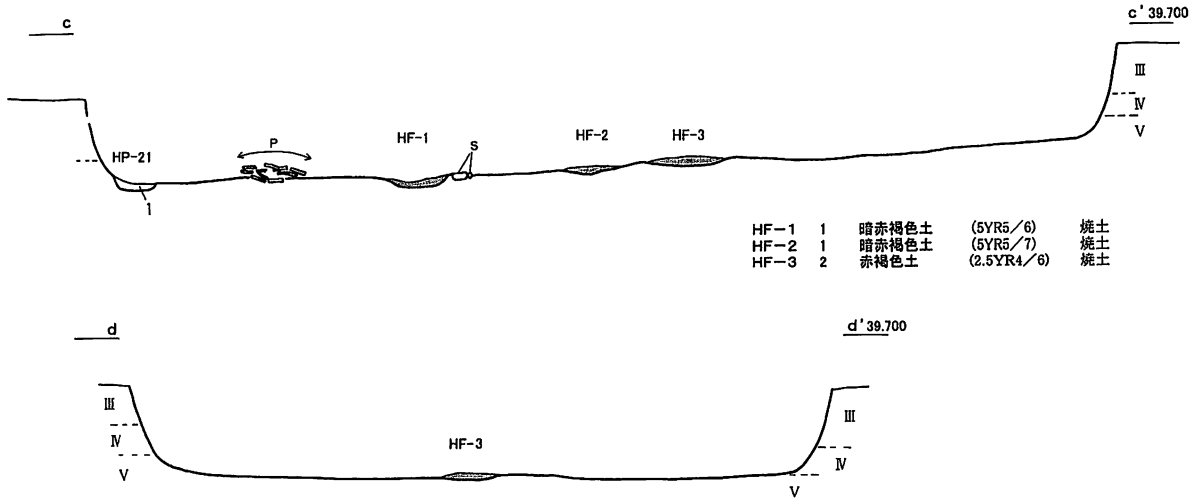
炉　平面の長軸に沿って直線的に配置される４カ所の炉跡が検出された（ＨＦ－１～４）。比較的長時間使用されたと考えられるのは、ＨＦ－１とＨＦ－４である。ＨＦ－１の輪郭に沿って礫が並べられており、石囲炉の可能性がある。また、最も規模の小さなＨＦ－２の傍らには、口縁部から胴部下

H－6



1			Ko－d
2a	黒色土	(7.5YR2／1)	粘性があり しまりのない腐植土
2b	黒色土	(7.5YR2／1)	粘性があり しまりのない腐植土 火山ガラスを含む可能性がある　乾燥すると白色を帯びる
2c	黒色土	(7.5YR1.7／1)	粘性のある 腐食土層　かたくしまっている
3	黒色土	(7.5YR2／1)	粘性が少しあり しまりのある腐植土　乾燥すると無数のクラックが入る
4	黒色土	(7.5YR2／1)	粘性があり しまりのある腐植土　ローム粒が微～少量混入する
5	黒色土	(10YR2／1)	粘性が多く しまりのある腐植土にロームが少量混じる
6	黒褐色土	(10YR2／2)	粘性があり しまりのややある腐食土層 4層よりもローム粒が混じる割合がやや多い
7	黒色土	(10YR1.7／1)	粘性があり しまりのややある腐食土
8	黒褐色土	(7.5YR2／2)	粘性があり しまりのある腐植土に微量のローム、Ⅴ層、Ⅳ層が混じる
9	黒褐色土	(7.5YR3／2)	しまりのある腐植土とⅣ層が混じる
10	黒褐色土	(7.5YR2／2)	粘性があり しまりのややある腐食土層　ローム粒が混じる
11	明黄褐色土	(10YR7／6)	風倒木のよって上がってきたローム(Ⅴ層)
12	黒褐色土	(10YR2／3)	腐植土にロームブロックが入る　風倒木による撹乱

図Ⅳ－89　H－6(1)



図Ⅳ−90　H−6(2)

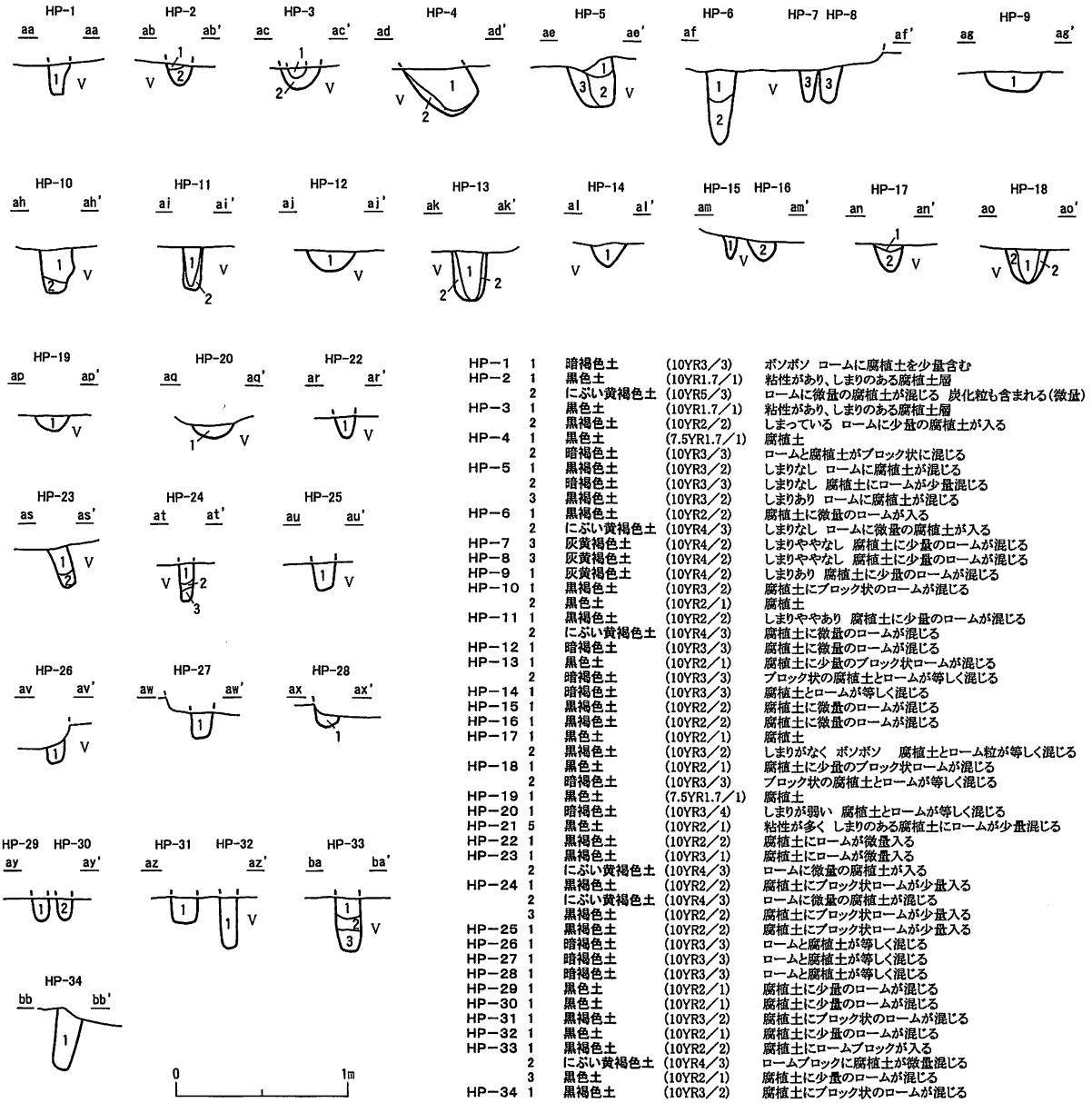
端までの土器が横倒しの状態でつぶれて検出されており、「複式炉」あるいは「土器囲い炉」との関連が想定される。なお、図Ⅳ−89の破線で示した範囲の床面は、ロームが非常に堅く変質している。この原因は炉跡を中心とする「長時間の被熱」に求められる可能性が高く、破線の範囲は熱を伴う様な作業が行われていたものと考えられる。

付属ピット・柱穴　床面から検出されたピットは34カ所（ＨＰ−１～34）である。性格不明のＨＰ−４・19以外は柱穴の可能性があるものの、主柱穴と考えられるものは認められない。また、「柱穴状小土壙」群の検出範囲と重なることから、ＨＰ−１～34にそれらの一部が混在している可能性も否定できない。以上のような状況ではあるが、検出された柱穴の配置からは次の二つの特徴が窺える。一つは、竪穴平面の長軸西側のＨＦ−１からＨＦ−２の周辺の分布密度が比較的高いこと。二つ目は竪穴の壁に近い位置から検出される柱穴が多いことである。前者は、先述した「長時間の被熱」を伴う様な作業が行われたと推定される破線範囲とほぼ一致することから、それに関わる構築物の柱の跡を含むものと考えられる。後者は、この住居が上屋の重量を周囲に巡らせた柱で支える構造を持つものであったことを示すと考えられる。そのため、竪穴の内外に検出された「柱穴状小土壙群」の中には、この竪穴に伴うものも含まれる可能性のあるものもある（ＳＰ−382・397～400・402・403・409・410・437・439・440など）。

遺物出土状況　遺物は、床面と覆土１～４・６・８・10層などから744点が出土している。数量は床面403点、覆土341点である。床面から出土したのは、Ⅳ群ａ類土器、Ｕフレイク、フレイク、たたき石、すり石、砥石、台石類、礫などである。391点が出土したⅣ群ａ類土器の個体数は図示した１個体だけである。礫石器の類は本来的にこの住居に伴うものとするには疑問が残る。と言うのも、石囲い炉と考えられるＨＦ−１の石には、周囲に存在した前期の石器類が使われているからである。特に床面の北側から検出された礫類には、被熱した痕跡が認められるものもあることから元来はＨＦ−１を囲う石の一部であったものもあるのではないだろうか。覆土から出土したのは、Ⅱ群ｂ類、Ⅳ群ａ類土器、石槍、ナイフ、つまみ付ナイフ、スクレイパー、石核、Ｕフレイク、フレイク、石斧、たたき石、すり石、石鋸、台石類、礫などである。これらの遺物の出土層は１～４・６層と上位層のものが多く、その中にはⅡ群ｂ類土器24点も含まれることから大半が流れ込みと考えられる。

遺　物

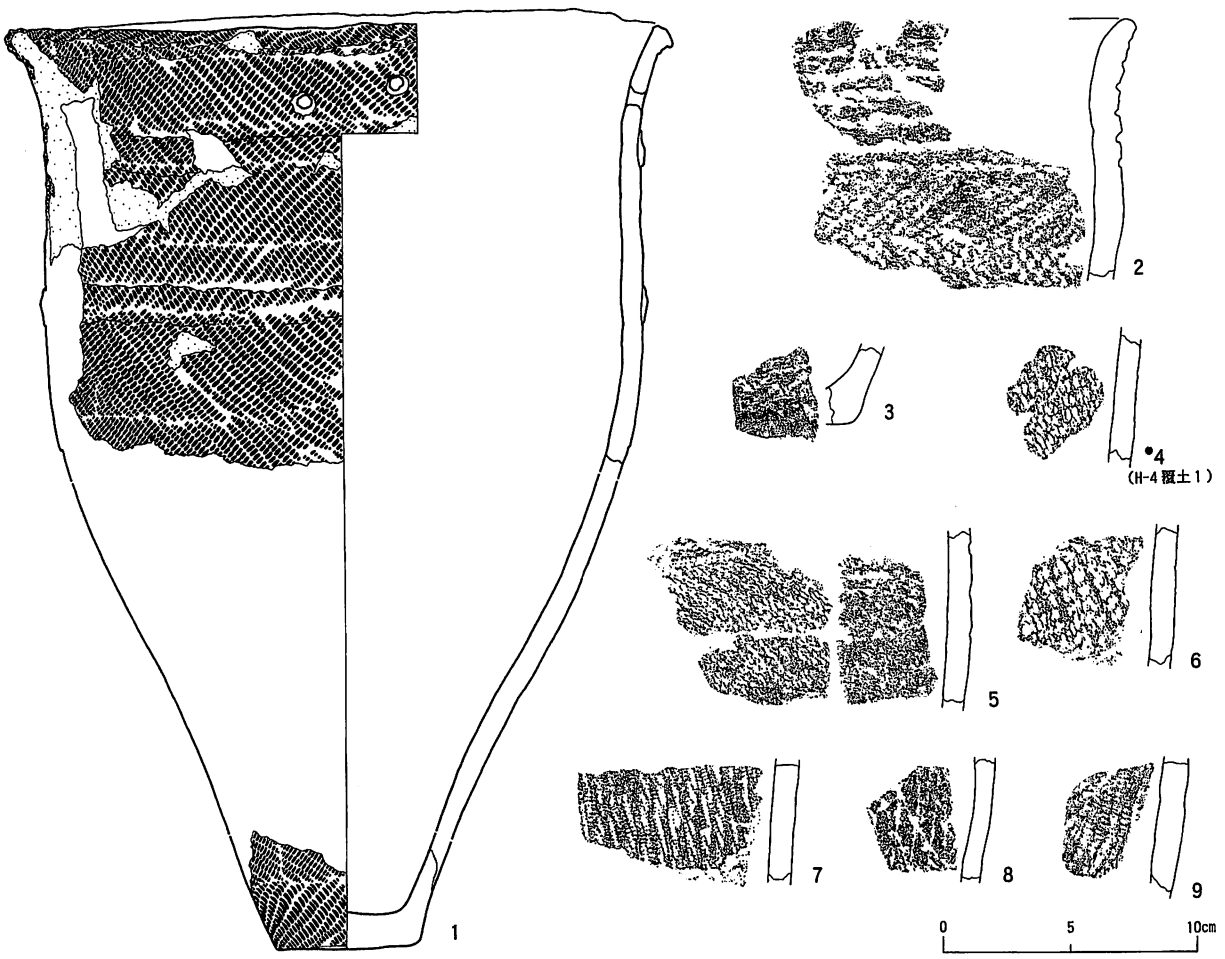
（土器）識別されたⅣ群ａ類土器（１）とⅡ群ｂ類土器（２～９）の９個体を掲載した。



HP−1	1	暗褐色土	(10YR3／3)	ボソボソ ロームに腐植土を少量含む
HP−2	1	黒色土	(10YR1.7／1)	粘性があり、しまりのある腐植土層
	2	にぶい黄褐色土	(10YR5／3)	ロームに微量の腐植土が混じる 炭化粒も含まれる(微量)
HP−3	1	黒色土	(10YR1.7／1)	粘性があり、しまりのある腐植土層
	2	黒褐色土	(10YR2／2)	しまっている ロームに少量の腐植土が入る
HP−4	1	黒色土	(7.5YR1.7／1)	腐植土
	2	暗褐色土	(10YR3／3)	ロームと腐植土がブロック状に混じる
HP−5	1	黒褐色土	(10YR3／2)	しまりなし ロームに腐植土が混じる
	2	暗褐色土	(10YR3／3)	しまりなし 腐植土にロームが少量混じる
	3	黒褐色土	(10YR3／2)	しまりあり ロームに腐植土が混じる
HP−6	1	黒褐色土	(10YR2／2)	腐植土に微量のロームが入る
	2	にぶい黄褐色土	(10YR4／3)	しまりなし ロームに微量の腐植土が入る
HP−7	3	灰黄褐色土	(10YR4／2)	しまりややなし 腐植土に少量のロームが混じる
HP−8	3	灰黄褐色土	(10YR4／2)	しまりややなし 腐植土に少量のロームが混じる
HP−9	1	灰黄褐色土	(10YR4／2)	しまりあり 腐植土に少量のロームが混じる
HP−10	1	黒褐色土	(10YR3／2)	腐植土にブロック状のロームが混じる
	2	黒色土	(10YR2／1)	腐植土
HP−11	1	黒褐色土	(10YR2／2)	しまりややあり 腐植土に少量のロームが混じる
	2	にぶい黄褐色土	(10YR4／3)	腐植土に微量のロームが混じる
HP−12	1	暗褐色土	(10YR3／3)	腐植土に微量のロームが混じる
HP−13	1	黒色土	(10YR2／1)	腐植土に少量のブロック状ロームが混じる
	2	暗褐色土	(10YR3／3)	ブロック状の腐植土とロームが等しく混じる
HP−14	1	暗褐色土	(10YR3／3)	腐植土とロームが等しく混じる
HP−15	1	黒褐色土	(10YR2／2)	腐植土に微量のロームが混じる
HP−16	1	黒褐色土	(10YR2／2)	腐植土に微量のロームが混じる
HP−17	1	黒色土	(10YR2／1)	腐植土
	2	黒褐色土	(10YR3／2)	しまりがなく ボソボソ 腐植土とローム粒が等しく混じる
HP−18	1	黒色土	(10YR2／1)	腐植土に少量のブロック状ロームが混じる
	2	暗褐色土	(10YR3／3)	ブロック状の腐植土とロームが等しく混じる
HP−19	1	黒色土	(7.5YR1.7／1)	腐植土
HP−20	1	暗褐色土	(10YR3／4)	しまりが弱い 腐植土とロームが等しく混じる
HP−21	5	黒色土	(10YR2／1)	粘性が多く しまりのある腐植土にロームが少量混じる
HP−22	1	黒褐色土	(10YR2／2)	腐植土にロームが微量入る
HP−23	1	黒褐色土	(10YR3／1)	腐植土にロームが微量入る
	2	にぶい黄褐色土	(10YR4／3)	ロームに微量の腐植土が入る
HP−24	1	黒褐色土	(10YR2／2)	腐植土にブロック状ロームが少量入る
	2	にぶい黄褐色土	(10YR4／3)	ロームに微量の腐植土が混じる
	3	黒褐色土	(10YR2／2)	腐植土にブロック状ロームが少量入る
HP−25	1	黒褐色土	(10YR2／2)	腐植土にブロック状ロームが少量入る
HP−26	1	暗褐色土	(10YR3／3)	ロームと腐植土が等しく混じる
HP−27	1	暗褐色土	(10YR3／3)	ロームと腐植土が等しく混じる
HP−28	1	暗褐色土	(10YR3／3)	ロームと腐植土が等しく混じる
HP−29	1	黒色土	(10YR2／1)	腐植土に少量のロームが混じる
HP−30	1	黒色土	(10YR2／1)	腐植土に少量のロームが混じる
HP−31	1	黒褐色土	(10YR3／2)	腐植土にブロック状のロームが混じる
HP−32	1	黒色土	(10YR2／1)	腐植土に少量のロームが混じる
HP−33	1	黒褐色土	(10YR2／2)	腐植土にロームブロックが入る
	2	にぶい黄褐色土	(10YR4／3)	ロームブロックに腐植土が微量混じる
	3	黒色土	(10YR2／1)	腐植土に少量のロームが混じる
HP−34	1	黒褐色土	(10YR3／2)	腐植土にブロック状のロームが混じる

図Ⅳ−91　H−6(3)

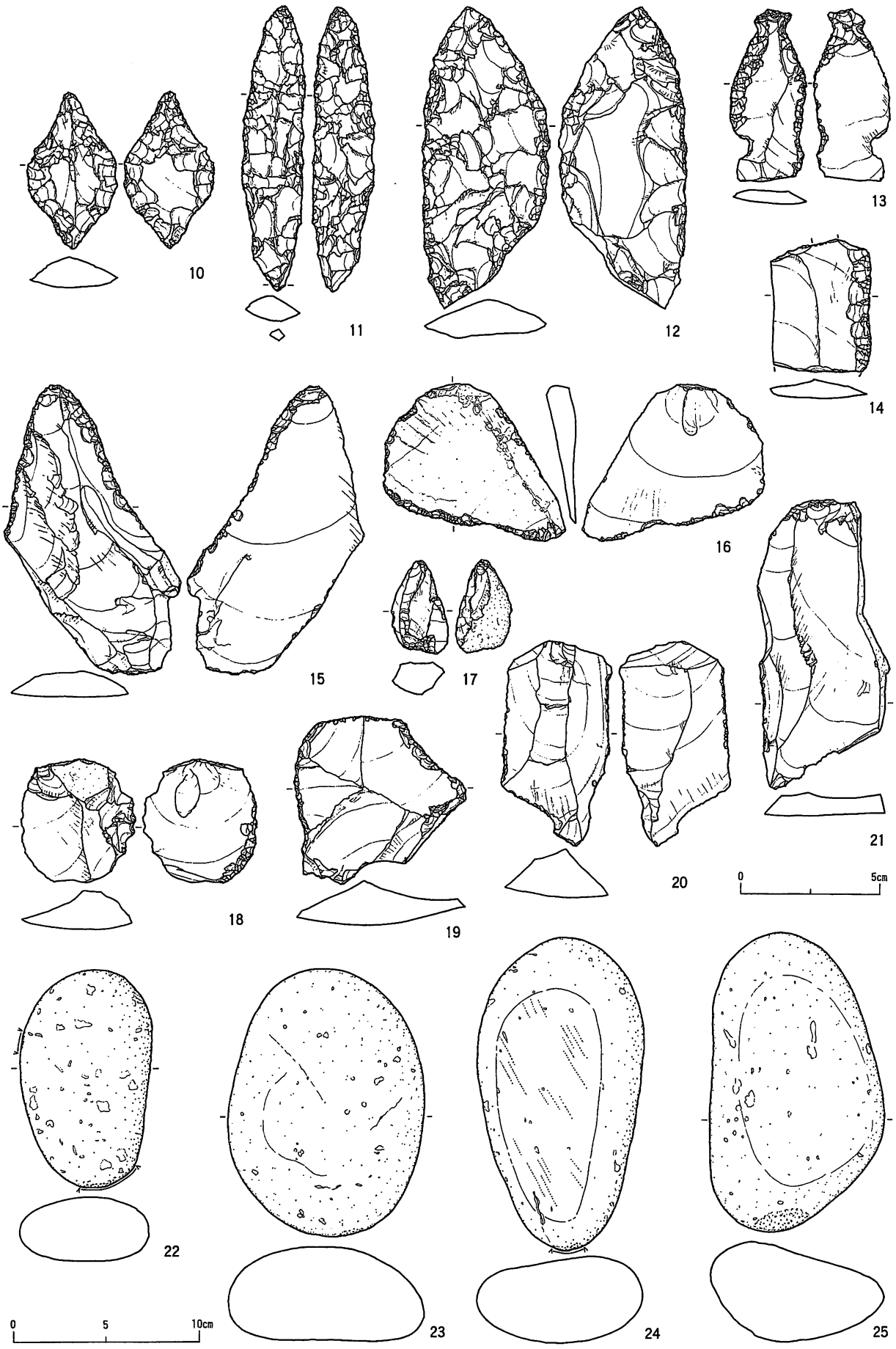
1は床面から検出されたⅣ群a類の復元土器である。口縁部から胴部の大半はHF−1と共に出土しており炉跡に伴う何らかの設備として用いられていた可能性がある。底部はやや離れた床面から出土した。器形は平縁で径の大きな口縁部と小径の底部を有する深鉢形土器で、器高は示した復元図よりも低い可能性もある。口縁部と胴部には厚みの少ない粘土紐が横環しており、粘土紐の貼付以前に施された地紋は口縁部と胴部付近が0段多条のLR縄文、底部付近は0段多条の縄を使った羽状縄文である。余市式土器に相当すると考えられる。2はLRの縄線文が施された文様帯を有する口縁部で、胴部には三段複節の羽状縄文が施文されている。表面には煮沸時に吹きこぼれたものが炭化して付着している。3はLRの斜行縄文が施された底部。4はH−4覆土1層出土のもの（H−4−8）。本遺構覆土6層から未接合の破片1点が出土している。撚糸文の施された胴部である。5・6はRLRの三段複節が施された胴部である。5の器面上端には絡条体圧痕文も認められる。7はRRLの撚り戻しと考えられるもの、8は網目状の撚糸文、9はRLの斜行縄文の施されたいずれも胴部である。2〜9の胎土には繊維が混入する。



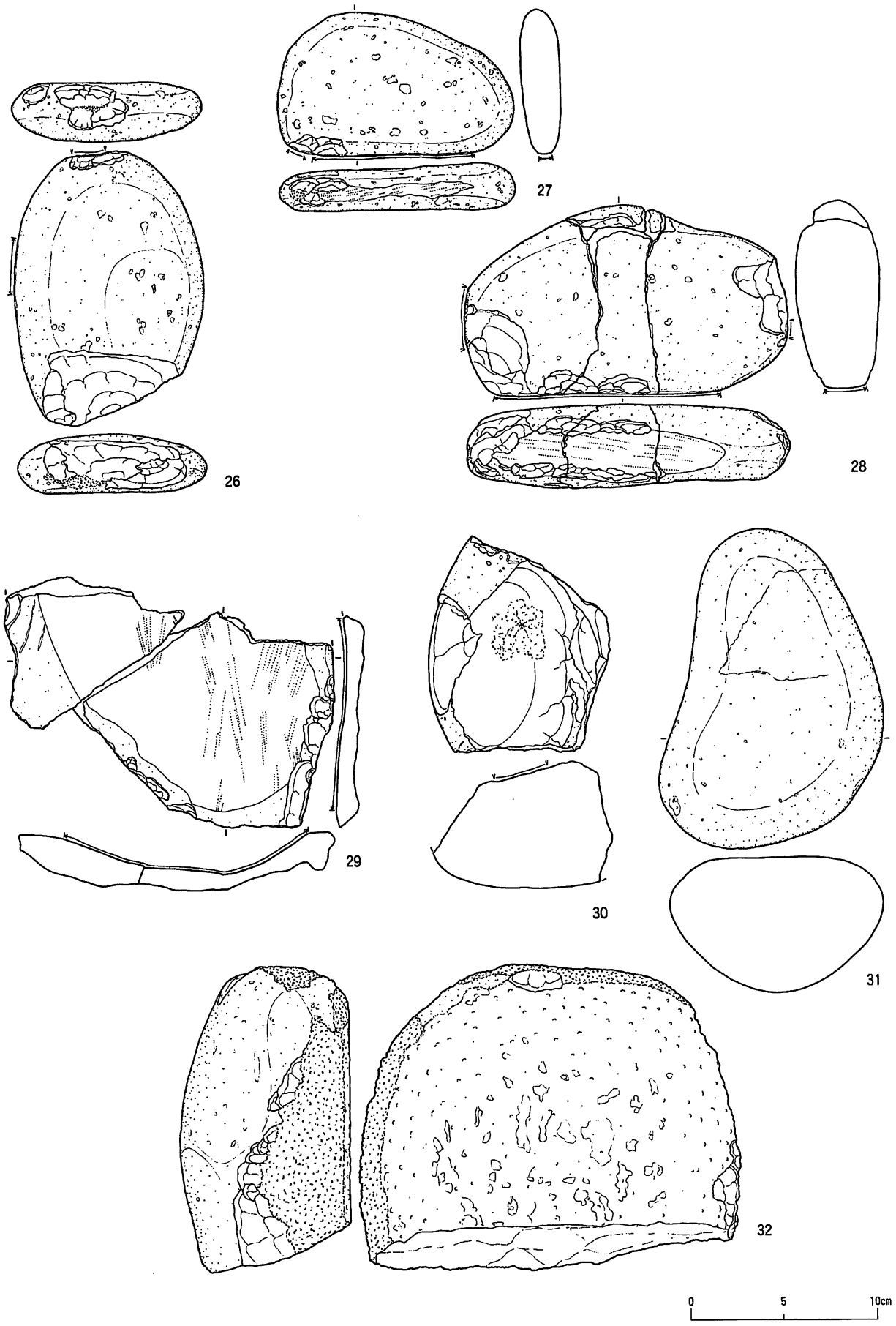
図Ⅳ－92　Ｈ－６出土の土器

（石器） 石器類260点の中からここには23点を掲載した。10～12は石槍またはナイフである（ＩＢ２）。10は背面と腹面に主剥離面を残すもので尖頭部の作出も不十分なことから、未成品の可能性がある。11の下端部が石錐として使用した可能性がある。12の下位は欠失している。13はつまみ部と左側縁に最小限の加工を施しただけの小型のつまみ付ナイフである（ⅢＡ１ｃ）。14～16はスクレイパーである（14・15：ⅢＢ２ｂ、16：ⅢＢ３）。14は右側縁に刃部を持つもので、下位は欠失し、上端にはつまみ部の取れたような痕跡が認められる。15は比較的大型の剥片の上位側縁に刃部を有するもので腹面左側にも若干の剥離が施されている。16の刃部の腹面側には部分的な光沢が認められる。17の石核（ＶＡ１）は原産地不明の黒曜石が使われている。小型であること上下の端部に両極打法の痕跡が窺われることなどから、くさび形石器の可能性もある。18～21はＵフレイクである（ＶＢ２）。

22～26はたたき石である（Ⅶ１）。これらは、いずれも長軸の端部を使用したもので、23・25は床面出土、26は炉跡（ＨＦ－１）を囲う石に使われていた。27・28は扁平礫の側縁を使うすり石である（Ⅷ２）。27は床面出土で最後に左側縁の上部と下部をたたき石として使っている。28は炉跡（ＨＦ－１）を囲う石に使われていたもので左右の端部に敲打痕が認められる。29は破損した砥石である。中央と見なせる部分がなめらかに大きく窪んでおり、そのすり面には石斧の整形に使用したような浅い数条の溝が認められる。床面からの出土であるが、包含層のＰ－14－ｃのものと接合しており、接合面の一部に見られる摩滅から破損品をこの住居で再利用したものと考えられる。30～32は台石・石皿である（Ｘ）。30は炉跡（ＨＦ－１）を囲う石に使われていた破片で、表面には敲打による窪みが



図Ⅳ－93　H－6出土の石器(1)



図Ⅳ－94　H－6出土の石器(2)

できている。31は床面出土のもの、32は多孔質の大型礫を整形して作られた後期前葉に特徴的な台石である。本来的には小判形の平面を有する。

時　期　床面出土のⅣ群ａ類土器から、縄文時代後期前葉と考えられる。（皆川）

Ｈ－７（図Ⅳ－95～101、図版27・28、表Ⅳ－７・18・24）

位　置　Ⅰ－13－ｂ・ｃ、Ｊ－14－ａ・ｂ、Ｊ－13－、Ｋ－13－ａ・ｄ、Ｋ－14－ａ

規　模　588×557／523×488／29cm

床面積　22.14㎡

平面形　不整楕円形

長軸方向　Ｎ－32.5°－Ｗ

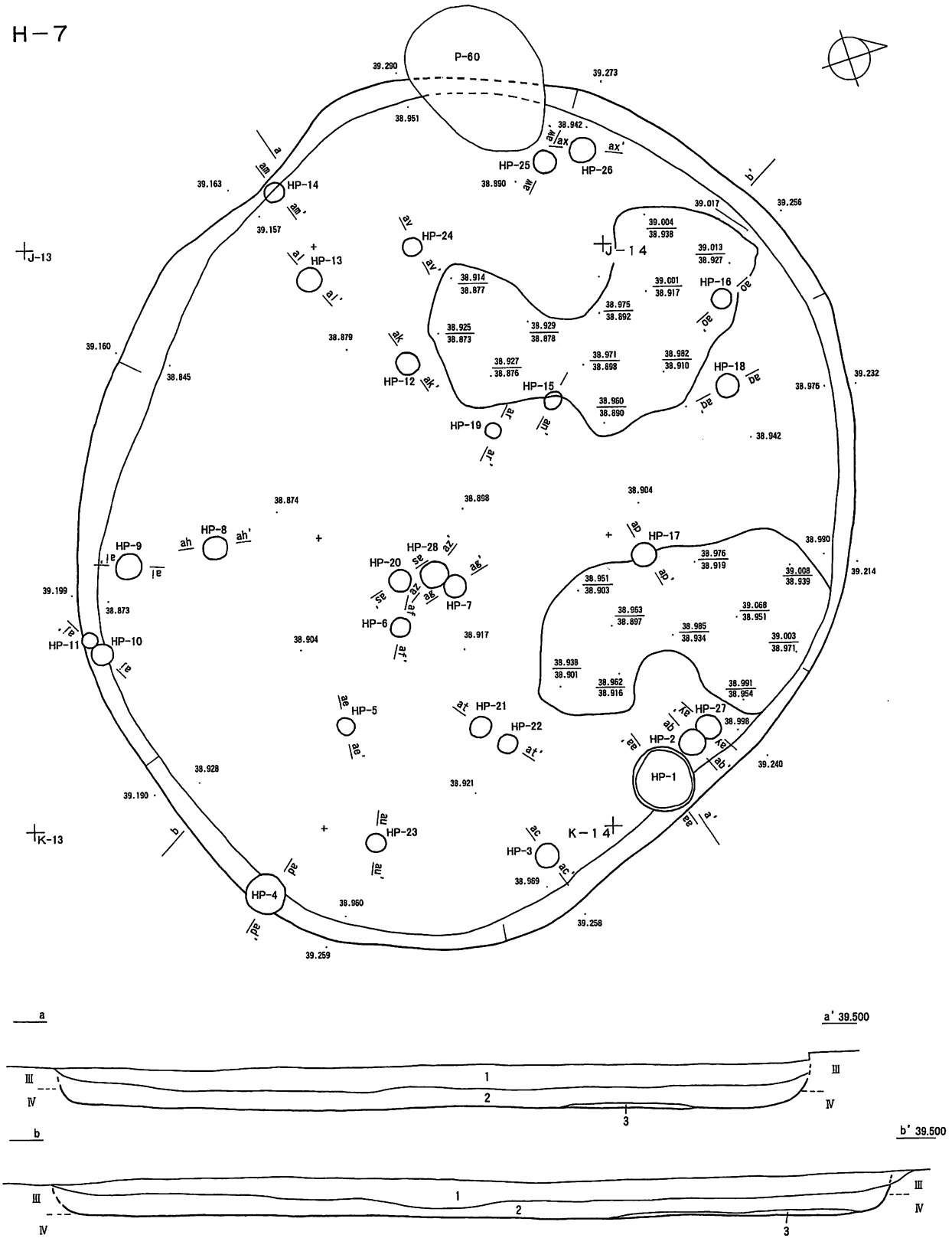
確認・調査　Ｈ－７はⅢ層上面の遺物分布の薄い範囲に設けたトレンチによって確認された掘り込みの浅い竪穴式住居である。床面上には、範囲の広い性格不明の焼土（覆土３層）が検出されている。柱穴と重複するものも少なくないことや赤化が弱く長時間の被熱とは考えられないことなどから炉跡の可能性は低い。また、微量の炭化物を含むものの総体的には所謂「焼失家屋」の可能性も低いと言える。重複する遺構はＨ－17とＰ－60、近接する遺構はＨ－４である。Ｈ－17を切って掘り込まれていることから、Ｈ－７はＨ－17よりも新しい遺構と考えられる。そして、近接するＨ－４もＨ－17を切って掘り込まれていることから、これらは同じ頃に作られた類似の形態と用途を持つ遺構と推定される。Ｐ－60はＨ－７と同時期の土壙の可能性が高く、本住居に付属する可能性もある。遺物の接合した遺構は、Ｈ－１・４・８、Ｐ－７・42である。これらとの接合関係から判断して、Ｈ－７はこれらの遺構の中で比較的新しい時期の可能性が高い。また、床面から検出された26カ所のピット（ＨＰ－１～26）に関しては「柱穴状小土壙」群の検出範囲と重なることからその一部を含む可能性が高い。Ｈ－７の柱穴と「柱穴状小土壙」群とを判別する手がかりはなく、従ってこれらの先後の関係も捉えるには至らなかった。

覆　土　覆土の主体は腐植土で、焼土粒の有無と遺物量で２層に分けている。覆土１層は、含まれる遺物量の多い流れ込みの腐植土層である。最も多い遺物は頁岩製のフレイクである。Ⅱ群ｂ類土器と礫などがそれに次ぐ。覆土２層は覆土１層よりも含まれる遺物量が少なく焼土粒を含む腐植土層である。この焼土粒は床面に広がる焼土（覆土３層）を起源とする。掘り込み面はⅢ層上位と考えられる。

壁・床　床面は、中央部で僅かに窪むものの全体的には平坦な印象の方が強いもので、壁は緩やかに広がりながら立ち上がる。

炉　検出されていない。

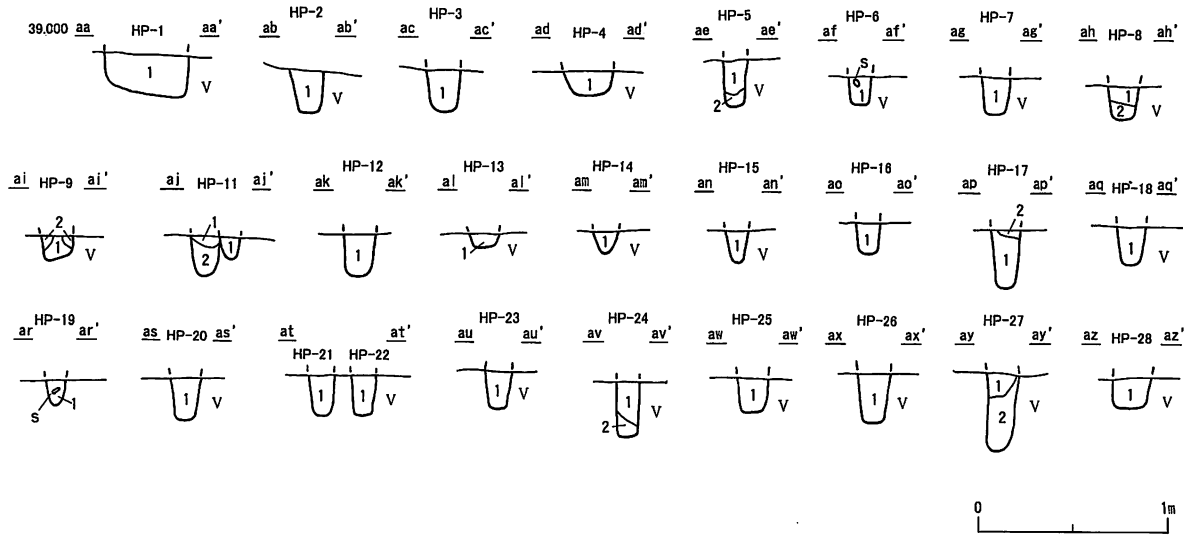
付属ピット・柱穴　床面から検出されたピットは26カ所（ＨＰ－１～26）である。ＨＰ－２～26は、柱穴の可能性があるものの各柱穴規模にそれ程大きな差異はなく所謂「主柱穴」と考えられるものも認められない。また、「柱穴状小土壙」群の検出範囲と重なることから、１～26にそれらの一部が混在している可能性も否定できない。以上のような状況ではあるが、検出された柱穴の配置からは次の二つの特徴が窺える。一つは、竪穴平面の中央部に密集するＨＰ－６・７・20・25を中心に、ＨＰ－５・８・12・15・17・19・21・22が取り巻くように配置されていること。もう一つは竪穴の壁に近い位置から検出される柱穴が多いことである。以上のことから、構築物は、竪穴中央部付近に配置される複数の柱に重量が配分される、主柱を待たない上屋を持っていたと考えられる。竪穴の掘り込みが浅いことや主柱穴を持たないことから、長期間の生活を行うための住居内ではない可能性がある。ＨＰ－１は、他と比較して大型を呈す性格不明の土壙である。覆土の上位からは頁岩製のフレイクが59



1　黒色土　(7.5YR1.7／1)　粘性すくなし しまりあり 乾くと白く変色し、クラックが入る 遺物を多量に含む Ⅲ層腐植土相当層
2　黒色土　(7.5YR2／1)　わずかに粘性のみられる腐食土層 微量の焼土粒を含む
3　暗赤褐色土　(2.5YR3／3)　腐植土に少量の焼土が含まれる

0　1m

図Ⅳ－95　H－7(1)



HP−1	1	黒褐色土	(10YR2／3)	しまりあり 層上位にフレイクを多数含む 土中には焼土粒あり 腐食土中にロームブロック 埋め戻し
HP−2	1	黒褐色土	(10YR3／2)	腐植土にロームブロックが入る
HP−3	1	黒褐色土	(10YR3／1)	腐植土にローム粒が少量混じる
HP−4	1	黒褐色土	(10YR3／2)	腐植土にロームブロックが入る
HP−5	1	黒色土	(10YR2／1)	腐植土にロームが少量混じる
	2	灰黄褐色土	(10YR4／2)	腐植土に少量のロームが混じる
HP−6	1	黒褐色土	(10YR3／1)	腐植土にローム粒が少量混じる
HP−7	1	黒褐色土	(10YR3／2)	腐植土にロームブロックが入る
HP−8	1	黒褐色土	(10YR3／2)	腐植土にロームブロックが入る
	2	黒色土	(10YR1.7／1)	腐植土
HP−9	1	黒褐色土	(10YR2／2)	腐植土にロームブロックが入る
	2	暗褐色土	(10YR3／3)	腐植土にロームブロックが多く入る
HP−10	1	黒褐色土	(10YR2／3)	腐植土にロームが微量入る
	2	黒褐色土	(10YR3／2)	ロームブロックに腐植土が混じる
HP−11	1	黒褐色土	(10YR2／3)	腐植土にロームが微量混じる
HP−12	1	黒褐色土	(10YR2／2)	腐植土にロームブロックが入る
HP−13	1	黒色土	(10YR2／1)	腐植土にローム粒が少量混じる
HP−14	1	灰黄褐色土	(10YR4／2)	腐植土にロームが混じる 炭化物を少量含む
HP−15	1	黒褐色土	(10YR2／2)	腐植土にロームブロックが入る
HP−16	1	灰黄褐色土	(10YR4／2)	ロームに腐植土が少量混じる
HP−17	1	黒褐色土	(10YR3／2)	腐植土にロームブロックが入る
	2	黒褐色土	(10YR2／2)	腐植土
HP−18	1	黒褐色土	(10YR3／2)	腐植土にロームブロックが入る
HP−19	1	黒褐色土	(10YR3／2)	腐植土にロームブロックが入る
HP−20	1	黒褐色土	(10YR3／2)	腐植土にロームブロックが入る
HP−21	1	黒褐色土	(10YR3／2)	腐植土にロームブロックが入る
HP−22	1	黒褐色土	(10YR2／2)	腐植土にロームブロックが入る
HP−23	1	黒褐色土	(10YR2／2)	ロームを微量含む腐植土
HP−24	1	黒褐色土	(10YR3／2)	腐植土にロームブロックが入る
	2	黒褐色土	(10YR2／2)	腐植土にロームが少量混じる
HP−25	1	黒褐色土	(10YR3／2)	腐植土にロームブロックが入る
HP−26	1	にぶい黄褐色土	(10YR5／3)	ロームに腐植土が微量混じる

図Ⅳ−96　H−7(2)

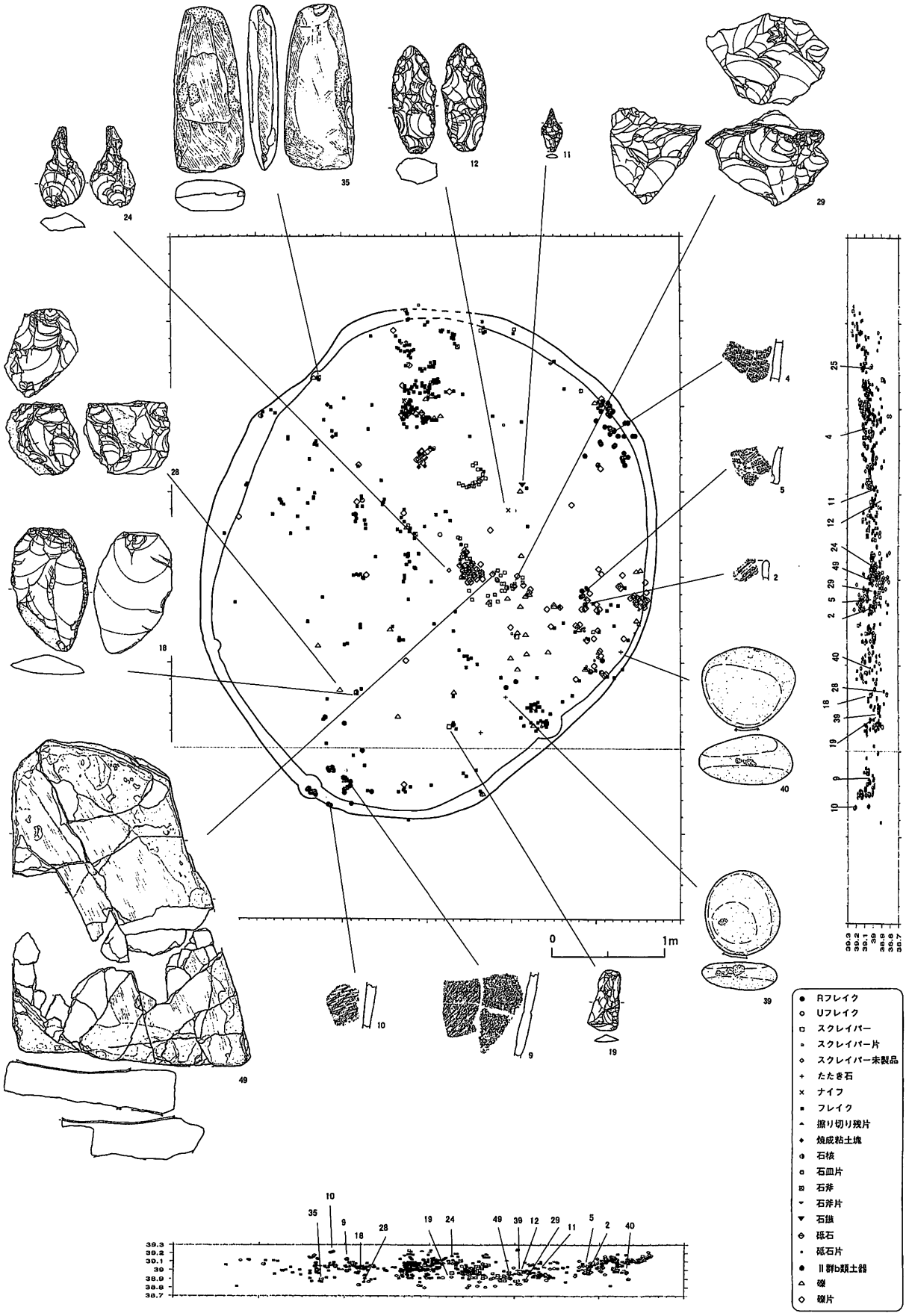
点出土しており、その下位の焼土粒を含む覆土は埋め戻されたものと考えられる。

なお、重複するP−60は貯蔵穴と考えられる大型の土壙であるが、同じ時期と判断されることから本遺構に付属する可能性がある。しかし、竪穴内に深さ2m以上の土壙を設けること自体が不自然に感じられることから、H−4・17に伴う可能性の方がより高いものと考えられる。

遺物出土状況　遺物は、床面と覆土1・2層などから1,988点が出土している。数量は床面384点、覆土1,604点である。

床面から出土したのは、Ⅱ群b類土器、石鏃、ナイフ、スクレイパー、石核、原石、Rフレイク、Uフレイク、フレイク、石斧、たたき石、砥石、台石片、礫などである。数量が多いのは、フレイク131点、台石片98点、礫など102点である。台石片は覆土のものと多く接合するため、竪穴が埋没する過程の比較的早い時点で廃棄されたものと考えられる。床面の遺物は、土器が少なくフレイクが多いことから石器制作を中心とした作業が行われた可能性が高い。

覆土から出土したのは、Ⅱ群b類、Ⅳ群a類土器、石錐、つまみ付ナイフ、スクレイパー、石核、原石、Rフレイク、Uフレイク、フレイク、石斧、石のみ、擦り切り残片・研磨石材、たたき石、半円状扁平打製石器、砥石、礫などである。これらの中で数量が多いのは頁岩製のフレイクで、Ⅱ群b類土器や台石片、礫などがそれに次ぐ。フレイクは700点弱と突出しており、且つ覆土2層よりも覆土1層の方が倍近くも点数が多いことから、H−7が埋没した以降もフレイクの投棄が行われていた可能性が高い。Ⅱ群b類土器や台石片、礫などは覆土中でそれ程大きな差異は認められないものの、総体的には覆土1層のほうが点数が多いと言えよう。これらのことは、包含層に廃棄された遺物の先後関係を反映している可能性がある。即ち、H−7周辺ではⅡ群b類土器、フレイク、礫などの廃棄



図Ⅳ－97　Ｈ－７遺物出土状況

が先行して行われ、次段階においてフレイクが多く廃棄されると言った変遷が想定できる。

遺　物

（土器）土器は個体識別された１～10のⅡ群ｂ類土器10点を掲載した。主な出土層位は２～５が床面、１・６～10が覆土２層で、これらの胎土中には繊維の混入が認められる。

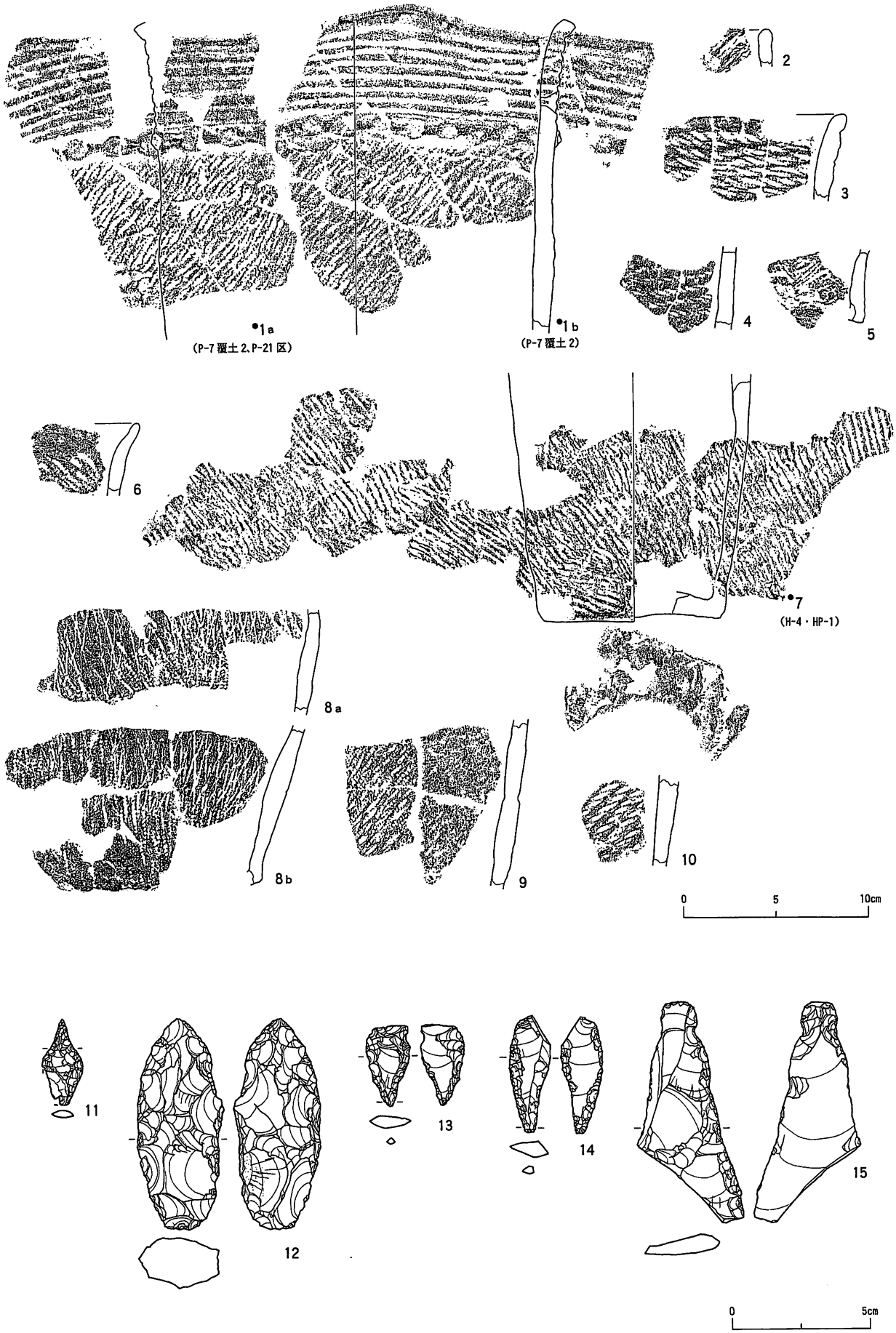
１ａ・ｂはＰ－７覆土２層から出土したもの（Ｐ－７－１ａ・ｂ）。本遺構の覆土２ｂ層から未接合の破片１点が出土している。同じ個体の土器がＨ－１覆土２ｂ層やＰ－７覆土２層などからも出土した。低く緩やかな山形突起を有する深鉢形土器の上半部である。口縁部文様帯には８条の細い撚糸を用いた絡条体圧痕文、胴部に撚り戻しと考えられる縄文が施されている。それらの境には指頭による連続した刻み或いは押捺の施された太い粘土紐が貼付されている。胎土中には白色の小岩片が無数に混入している。

２・３は撚り戻しの縄文が施文される口縁部で、２はＬＬＲと考えられる原体、３はＲＲＬの原体が用いられている。３は口唇直下の器面にＬＲの縄線文も施されている。４はＬＲの縄線文で構成される口縁の文様帯部分、５はＲの撚糸文の施された底部である。

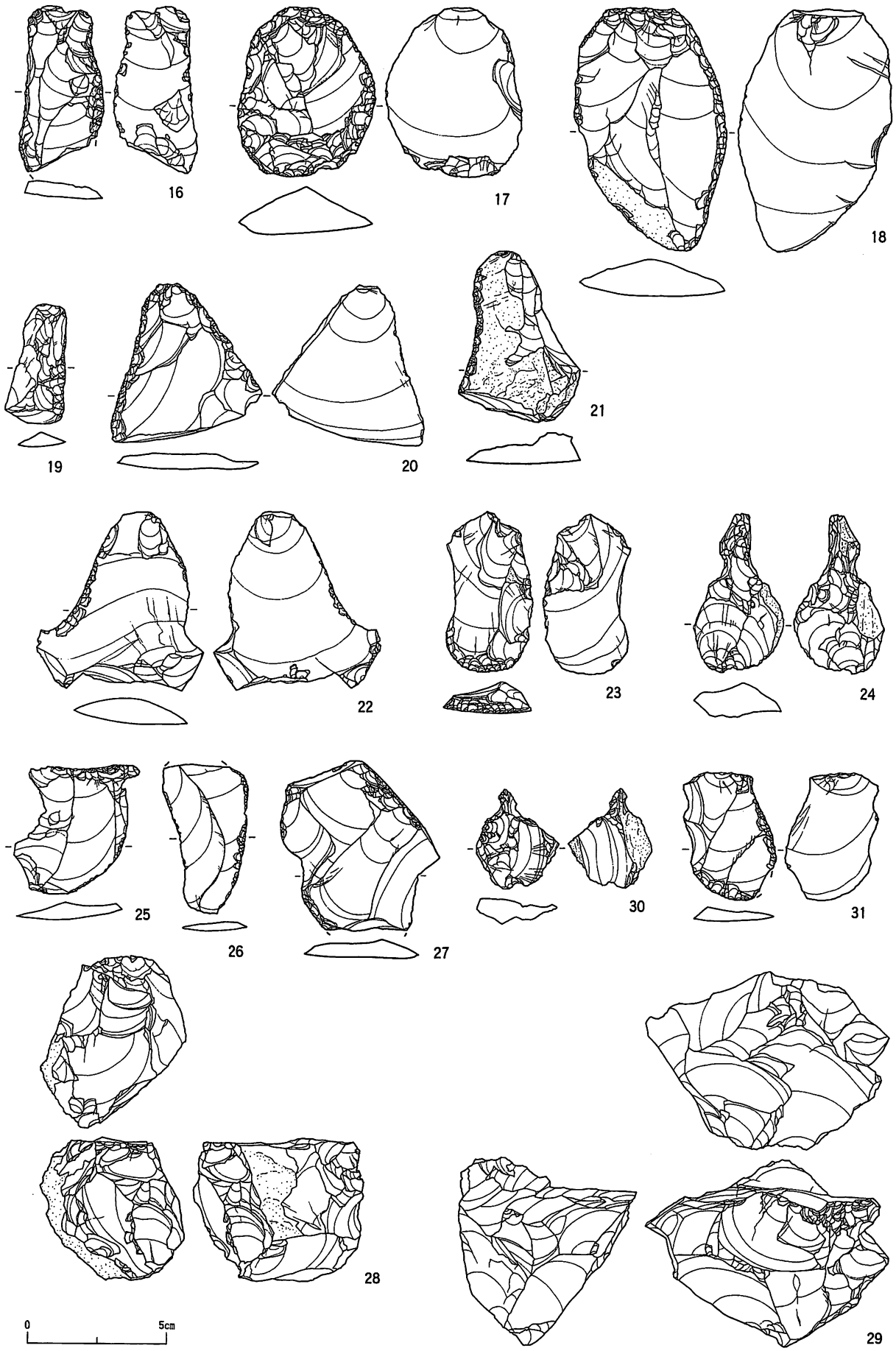
６は器壁の薄い口縁部で、器面にはＲＬの斜行縄文が施されている。７はＨ－４ＨＰ－１から出土したもの（Ｈ－４－７）。本遺構覆土２層からは、同一個体で未接合の破片が２点出土している。同じ個体の破片が本遺構以外にＨ－８の覆土１層、Ｐ－42の覆土１層からも出土した深鉢形土器の胴下半部である。地紋は密に施されたＲの撚糸文で、胎土中には海綿骨針が混入する。８ａ・ｂは網目状に施したＲの撚糸文とＲＬの自縄自巻的縄文を混在させて施文した胴部と底部で、胎土には海綿骨針の混入が認められる。９・10はＬＬＲの撚り戻しと考えられる地紋を有した胴部である。10はＬＲの縄を軸に巻き付けて撚糸状に施文した可能性もある。

（石器）石器類1,744点の中からここには39点を掲載した。11は床面出土の基部が欠損した石鏃（ＩＡ４）である。腹面には主剥離面を大きく残す。12も床面出土の石槍またはナイフである（ＩＢ２）。中央部の厚みが取りきれていないため未成品の可能性もある。13・14は小型の石錐である（Ⅱ１）。13は尖頭部が摩滅している。15は縦に長い不整形の剥片につまみ部と若干の剥離を施した刃部を有したつまみ付ナイフである（ⅢＡ１ｃ）。左側縁の刃部が摩滅で丸身を帯るまで使われている。16～27はスクレイパーである（16～18：ⅢＢ２ａ、19・20：ⅢＢ２ｂ、21・22：ⅢＢ２ｃ、23：ⅢＢ５、24：ⅢＢ７、25～27：ⅢＢ８）。この中で18・19・21・24は床面、17がＨＰ－１、20がＨＰ－19から出土した。16～19は右側縁に刃部を有するものである。16は下端部が欠損したもので被熱による弾けが腹面に認められる。これについては、上位が括れの太いつまみ部の機能を有した可能性がある。17は下端の一部も掻器として使われている。18は刃部の腹面左上側に光沢が認められる。19は石材に珪質頁岩を使った小型の縦長剥片が用いられており、この石材は本遺跡で珍しい部類に入る。20～22は左側縁部に刃部を有するもの、23は下端部が掻器として使われたものである。28・29は床面から出土した石核である（ＶＡ１）。どちらも一定の打面を持っていない。30はＲフレイク（ＶＢ１）、31はＵフレイク（ＶＢ２）である。24・28はつまみ部を有するもので、どちらも黒曜石製で顕著な刃部を持たない点で類似する。黒曜石の原産地は、肉眼観察で24が豊泉産、28が不明である。

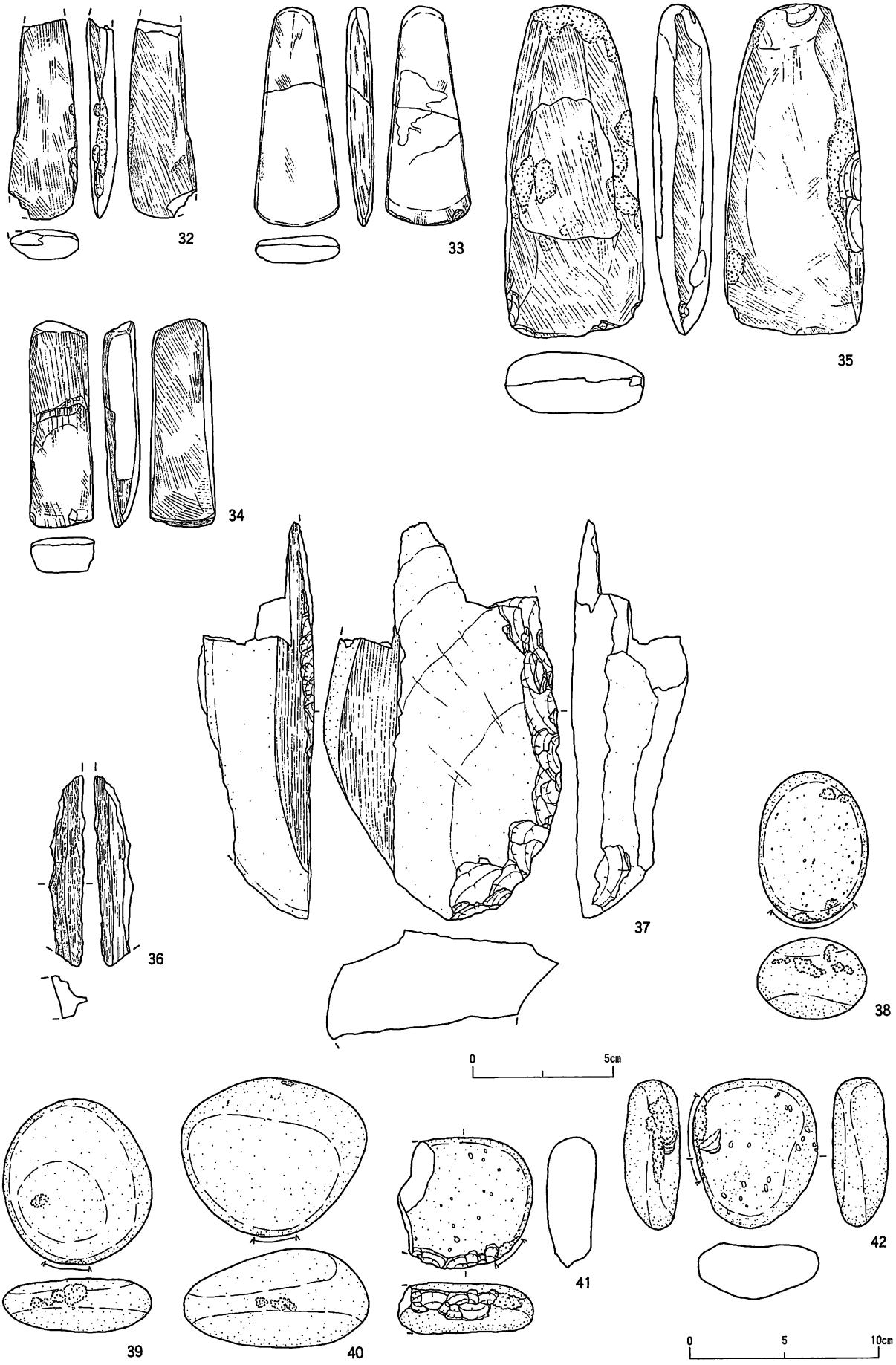
32～35が石斧（ⅥＡ４）、36が擦り切り残片（ⅥＡ５）、37が研磨石材（ⅥＡ６）である。32～34は刃渡りが３㎝以内の小型の石斧で、これらの刃部は使用によって摩滅している。35は床面から出土した比較的大型のもので、刃部の使用よりもむしろ基部の敲打の方が著しい。なお、この石斧表面の２/３程度には、黒色のタールあるいは煤状のものが付着している。これも本住居の焼失を示している可能性がある。38～45はたたき石である（38～41：Ⅶ１、42～44：Ⅶ２、45：Ⅶ４）。これらの大半



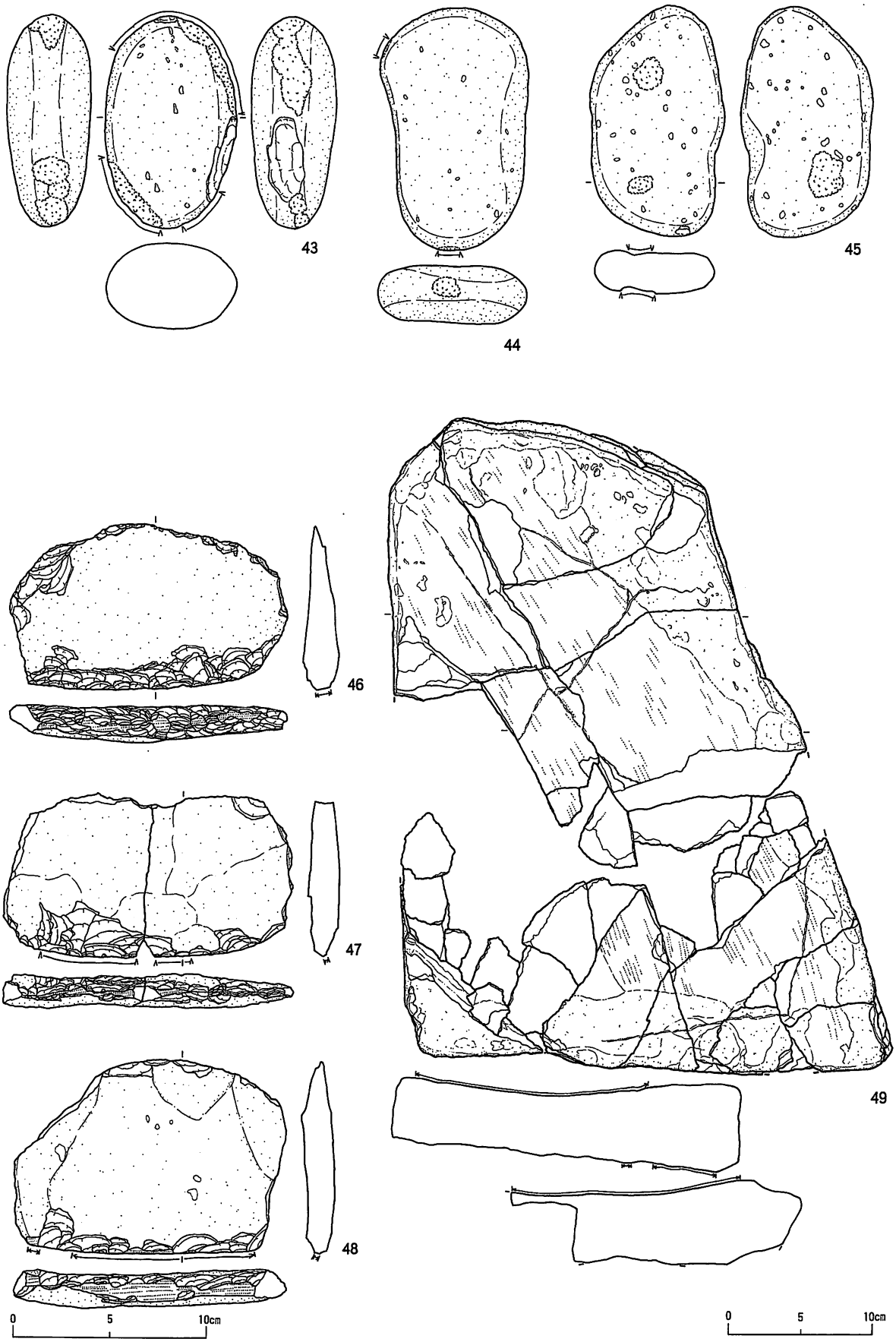
図Ⅳ－98　Ｈ－７出土の土器・石器(1)



図Ⅳ－99　H－7出土の石器(2)



図Ⅳ－100　H－7出土の石器(3)



図Ⅳ－101　Ｈ－７出土の石器(4)

にも被熱した痕跡が認められる。46～48は半円状扁平打製石器で（Ⅷ３）、46はＨＰ－10から出土している。使用痕は46・47が敲打痕、48はすり痕が顕著である。49は接合復元された大型の石皿である（Ｘ）。覆土１・２層～床面にかけて出土した破片を接合したもので、大型の剥片が数個欠落することから、再利用のため持ち去られたものと考えられる。その形状と石材的な観点から、この欠落部分は北海道式石冠に加工された可能性がある。

時　期　床面出土のⅡ群ｂ類土器から、縄文時代前期後半と考えられる。（皆川）

Ｈ－８（図Ⅳ－102～109、図版28・29、表Ⅳ－７・18・24）

位　置　Ｋ－20－ｃ、Ｋ－21、Ｌ－20－ａ・ｃ・ｄ、Ｌ－21

規　模　620×585／557×516／33cm

床面積　23.52㎡

平面形　不整円形

長軸方向　Ｎ－26°－Ｗ

確認・調査　沢に向かって傾斜する北向きの緩斜面で検出した遺構である。Ⅲ層上面の僅かな窪みを手がかりに、トレンチを設けて確認した。近接する遺構は、Ｈ－３とＰ－42、Ｆ－８である。各土器の個体識別から見出された関連遺構はＨ－４・６・７・９・15、Ｐ－42である。同時期の中では、Ｈ－４・７よりはＨ－８が方が古いと考えられる。Ｈ－９・15とは同じかやや新しい可能性がある。なお、本遺構とＨ－15との間に位置しながら、接合遺物や同一個体の土器が認められないＨ－３はこの時点で存在していない可能性もある。また、Ｐ－42とは同時期の可能性がある。Ｆ－８は撹乱を受けているが、本住居の屋外炉の可能性がある。

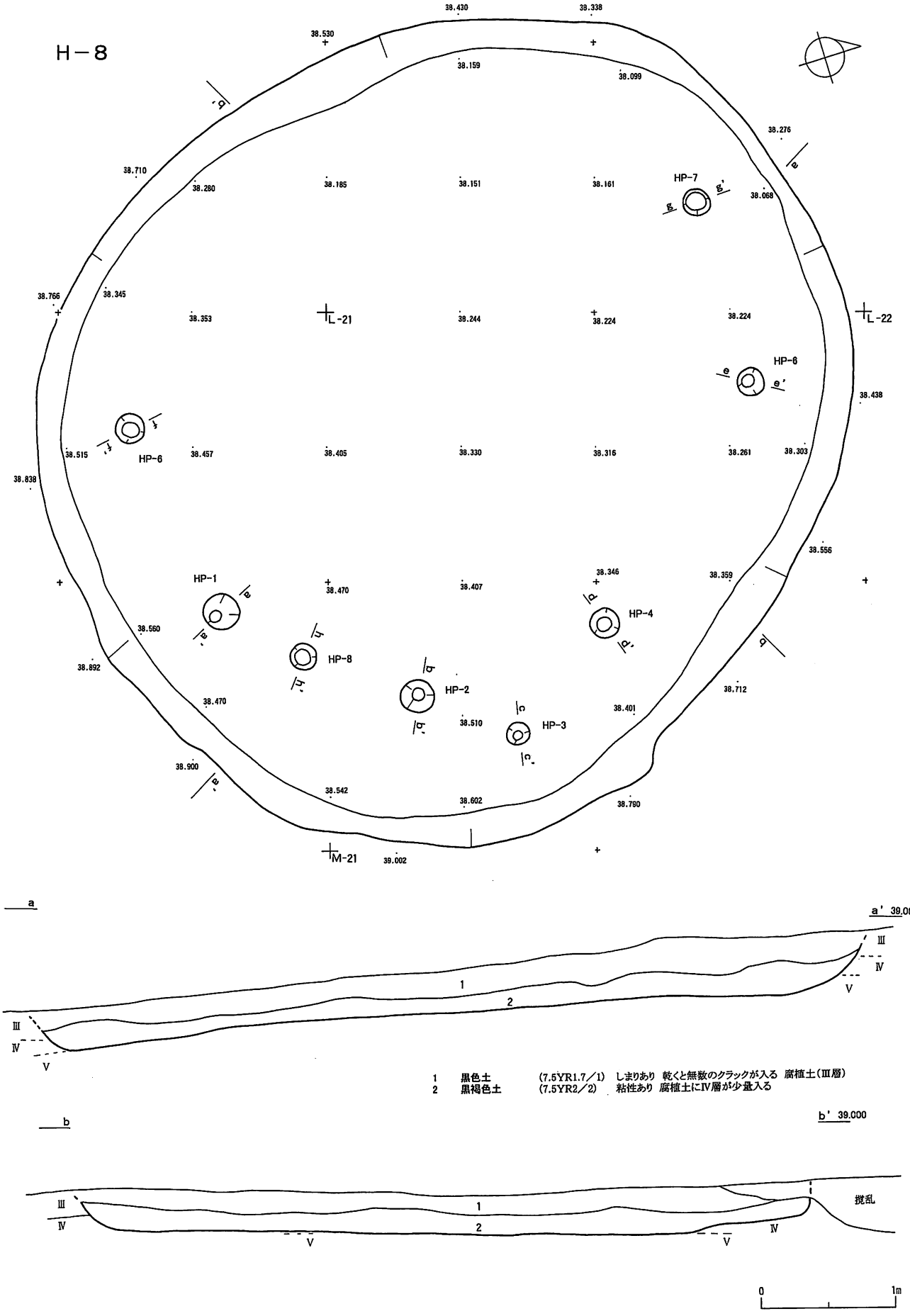
覆　土　上位に黒色土主体の覆土１層、下位に少量の暗褐色ロームを含む覆土２層が形成されている。上位の黒色土は周囲から流れ込んだⅢ層が主体と考えられ、投棄された遺物を大量に含む。覆土２層に関してはローム質土を多く含み、遺物も少なく標高の高い方から短時間に流れ込んだ様子が伺えることから、その起源は削平部分の排土或いは上屋を覆っていた土の崩落の可能性がある。掘り込み面はⅢ層中～上位と考えられる。

壁・床　床面は作られた斜面に沿って若干の傾きが認められるもので、壁はそこから緩やかに立ち上がる。床面が斜面に沿って傾斜する点について、その部分に関しては床が不明瞭であったため掘りすぎて消失した可能性がある。後述する柱穴（ＨＰ－１～８）が斜面上側の床面でしか検出されていないのは、それが原因かもしれない。

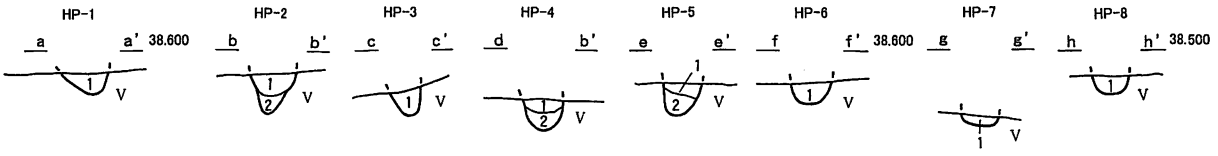
炉　床からは検出されていない。近接するＦ－８は、本住居の屋外炉の可能性がある。

付属ピット・柱穴　床面から検出されたピットは８カ所（ＨＰ－１～８）である。全て斜面上側の壁付近の床に作られており、これらは柱穴と考えられる。各柱穴は全て掘り込みの浅い類似の規模を持っており主柱穴らしきものも認められないことから、上屋は床に配置されたＨＰ－１～８の柱などによって支えられる構造の簡易な構築物であったことが想定される。なお、壁外柱穴に関して掘り込みがⅣ層に及ぶようなものは認められていない。

遺物出土状況　遺物は床面と覆土１・２層から4,178点が出土している。数量は床面58点、覆土4,120点と圧倒的に覆土からの出土点数が多い。床面から出土したのはⅡ群ｂ類土器、石核、フレイク、礫などで、最も多いものでも土器の35点と床面の遺物が少ないのが特徴となっている。覆土から出土したのは、Ⅱ群ｂ類土器、石鏃、石錐、つまみ付ナイフ、スクレイパー、両面調整石器、石核、原石、Ｒフレイク、Ｕフレイク、フレイク、くさび形石器、石斧、擦り切り残片、たたき石、半円状扁平打


H－8
HP-1
HP-2
HP-3
HP-4
HP-6
HP-6
HP-7
HP-8
L-21
L-22
M-21
38.430
38.338
38.530
38.159
38.099
38.276
38.710
38.280
38.185
38.151
38.161
38.068
38.766
38.345
38.353
38.244
38.224
38.224
38.438
38.515
38.457
38.405
38.330
38.316
38.261
38.303
38.838
38.556
38.346
38.359
38.470
38.407
38.560
38.892
38.712
38.470
38.401
38.510
38.900
38.542
38.602
38.790
39.002
a
a' 39.000
b
b' 39.000
Ⅲ
Ⅳ
Ⅴ
1
2
1　黒色土　(7.5YR1.7／1)　しまりあり　乾くと無数のクラックが入る　腐植土(Ⅲ層)
2　黒褐色土　(7.5YR2／2)　粘性あり　腐植土にⅣ層が少量入る
撹乱
0
1m

図Ⅳ－102　H－8(1)



HP−1	1	黒色土	(10YR2/1)	腐植土	HP−5	1	黒色土	(10YR2/1)	腐植土
HP−2	1	黒色土	(10YR2/1)	腐植土		2	褐色土	(10YR4/4)	腐植土とロームが等しく混じる
	2	褐色土	(10YR4/4)	腐植土とロームが等しく混じる	HP−6	1	黒色土	(10YR2/1)	腐植土
HP−3	1	黒色土	(10YR2/1)	腐植土	HP−7	1	黒色土	(10YR2/1)	腐植土
HP−4	1	黒色土	(10YR2/1)	腐植土	HP−8	1	黒色土	(10YR2/1)	腐植土
	2	褐色土	(10YR4/4)	腐植土とロームが等しく混じる					

図Ⅳ−103　H−8(2)

製石器、北海道式石冠、石錐、台石類、擦り切り痕のある礫、礫などである。これらの遺物の大半を占める覆土１層のものは本竪穴が覆土２層の土壌で埋没した後でこの周囲に投棄された遺物群と一連のものであると考えられる。最も多いのはⅡ群ｂ類土器の約2,000点強である。頁岩製のフレイク約1,400点強、礫など約400点強がそれに次ぐ。覆土１層の遺物出土状況からこれらの投棄の先後を検討する情報は得られなかったものの、少なくとも本住居が廃絶した後に、包含層に大量の遺物の投棄が始まったと言えるであろう。

遺　物

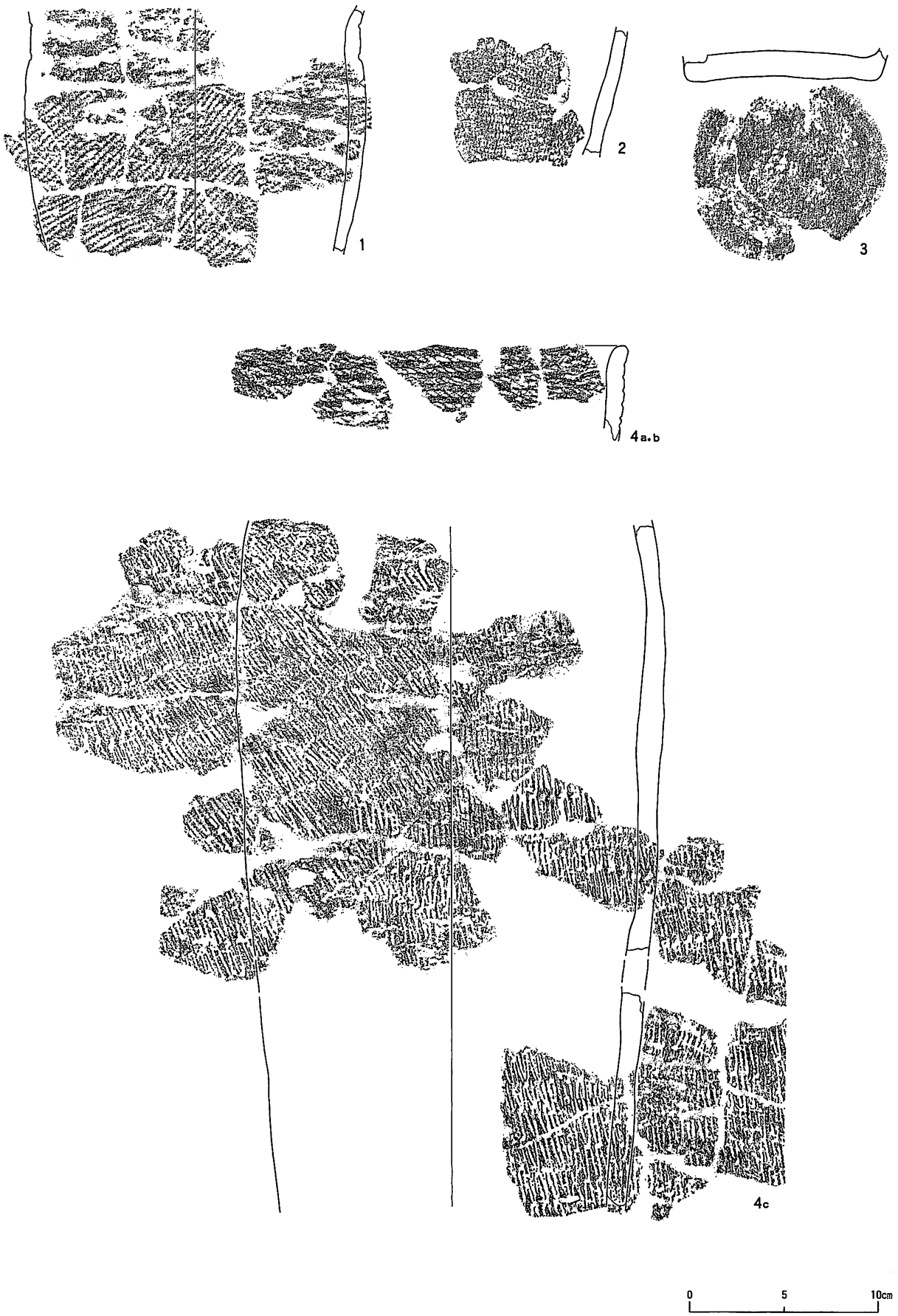
（土器） 土器は個体識別された１～26のⅡ群ｂ類土器26点を掲載した。各土器の主な出土層位は、１～４が床面、５が覆土２層、６～26は覆土１層である。なお、全てのⅡ群ｂ類土器の胎土には繊維の混入が認められる。

１はＬＲの縄線文数条を口縁部文様帯に巡らせたもので胴部の地紋にはＬＲの二段単節とＬＲの多条の両原体が用いられている。２はＬＲの縄を条が水平近くになるように施した胴部、３は底面にＬＲＬの三段複節が施文された底部である。４ａ～ｃは包含層出土の破片と接合した深鉢形土器である。主体部は包含層から出土した。同一個体の破片はＨ−15の覆土２ｃ層からも出土している。平縁の口縁にはＬＲの縄線文を使って構成される文様帯を有し、胴部には単軸絡条体第６類の撚糸文が施されている。

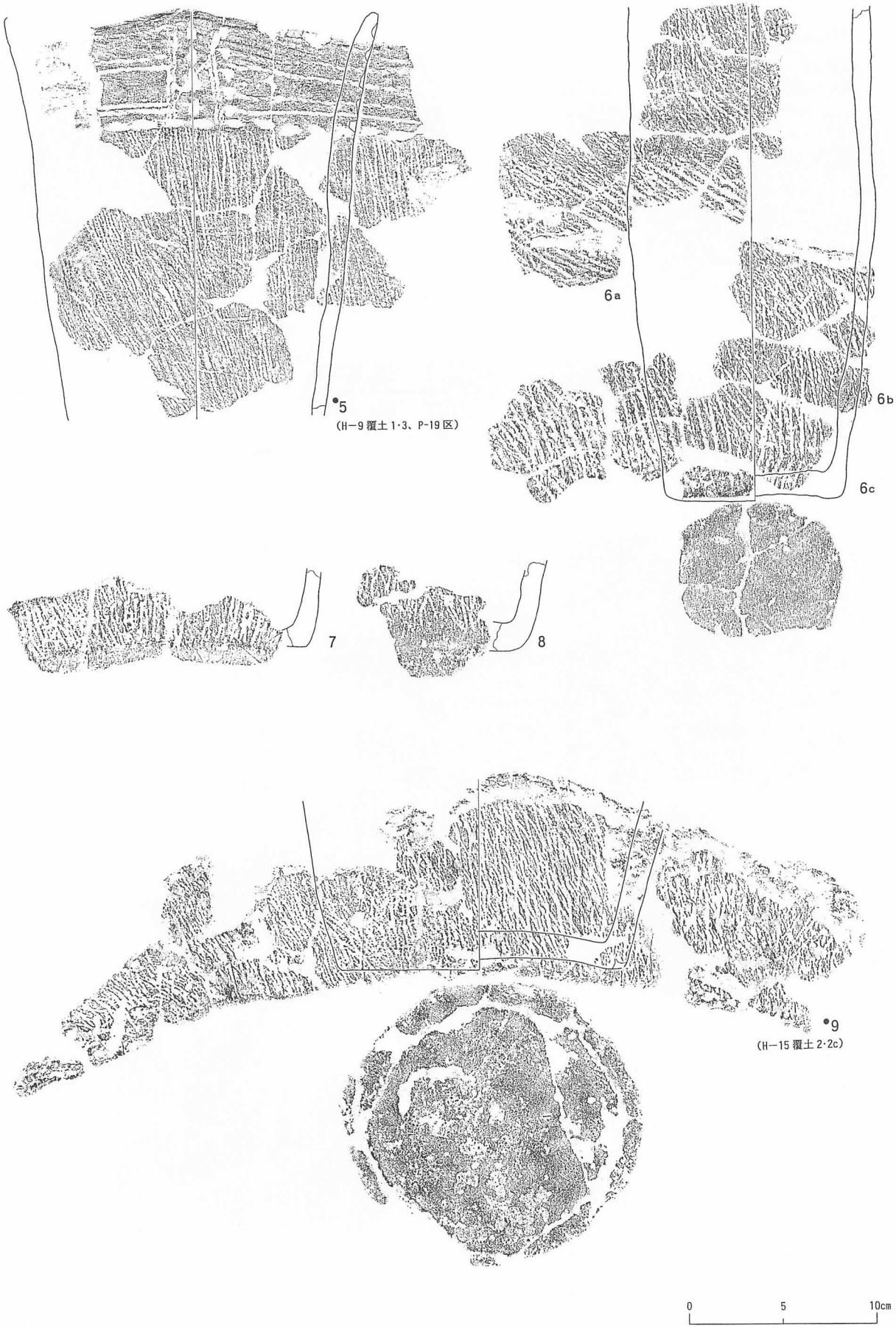
５は主体がＨ−９覆土１・３層と包含層から出土したもの（Ｈ−９−１）で本遺構からは覆土２層で未接合の破片１点が出土している。底部の欠失する土器で、極めて低い山形の突起を持つ口縁部の文様帯は、ＬＲの縄線文と半截竹管状の施文具による斜めからの連続刺突文とで構成される。これらの文様を施した口縁部の器面は基本的に無地であるが、部分的（特に口唇直下の器面）に横位の条痕らしきものが認められる。胴部にはＲの撚糸文が施され、胎土中には微量の海綿骨針が混入する。

６～10は地紋にＲの撚糸文が施文される土器である。６は口縁部が欠失し、上げ底気味の底部を有する小型の土器で、地紋は広く間隔をあけた太めの撚糸を使っている。胴部の中位の地紋は意図的に施文方向を変化させたものと思われる。７～９は撚糸文が複雑な構成で密に施された底部である。７は４（或いはＨ−15−23）の底部の可能性がある。９は主体がＨ−15覆土２ｃ層から出土したもの（Ｈ−15−27）。本遺構からは覆土１層で未接合の破片３点が出土している。内面に顕著な研磨がなされる上げ底で大型の底部である。10も主体がＨ−４ＨＰ−１出土のものである（Ｈ−４−７）。本遺構からは覆土２層で未接合の破片が２点出土している。同じ個体の破片はＨ−７の覆土２層、Ｐ−42の覆土１層からも出土した。深鉢形土器の胴下半部で、地紋は密に施されたＲの撚糸文、胎土中には海綿骨針が混入する。

11・12・18はＲＬＲの三段複節が地紋に使われるものである。11は底部の欠失する平縁の土器で、口縁部の文様帯には５条の太いＬＲの縄線文が巡らされ、胴部との境には竹管状の施文具で上から連



図Ⅳ－104　H－8出土の土器(1)



図Ⅳ－105　H－8 出土の土器(2)

続刺突を加えた低い隆起線を作出している。12ａ・ｂは地紋が全面に施されるもので、口縁部は小さく波状を呈すようだ。18ａ・ｂはＬＲの縄線文の施された山形突起を有する口縁部と地紋の施された胴部である。18の上部右端の器面には撚糸文も施されている。

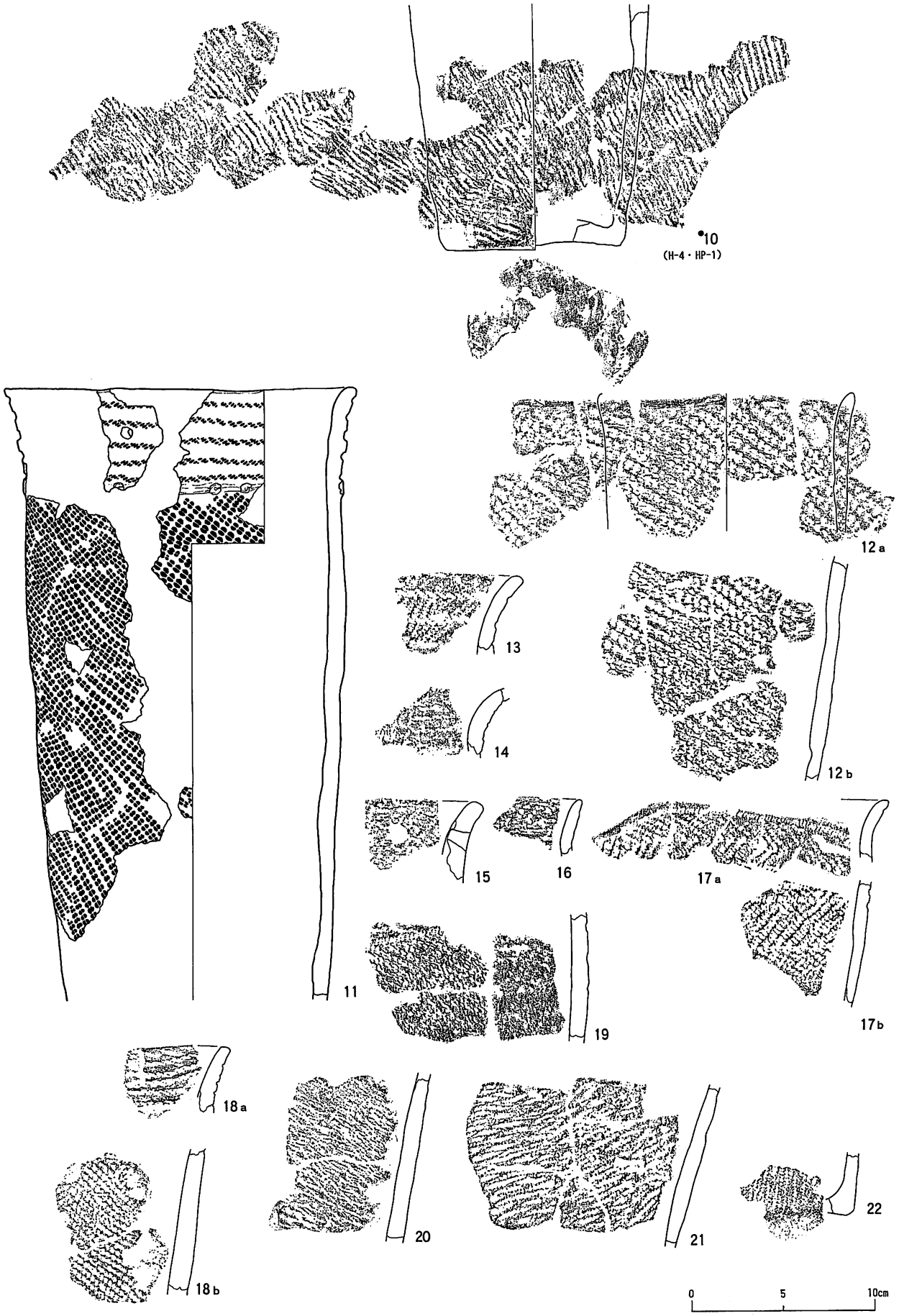
19～21は胴部の破片である。19はＲＬＲの三段複節が施された胴部で、器面上端には絡条体圧痕文も認められる。20は網目状に施されたＲの撚糸文、21はＬＬＲの撚り戻しが施されるもので、20の胎土には海綿骨針が混じっている。22～26は底部である。22は胎土に微量の海綿骨針が混入する上げ底気味の底部で、器面にはＬＲの自縄自巻的縄文が施されている。23は密に施されたＲの撚糸文、25がＬＲの斜行縄文、26がＬＲＬの三段複節が、各地紋に使われている。24の地紋は不明である。13～18はその他の口縁部である。13・14はＬＲの縄線文が口縁部文様帯に施されるもので、13には地紋にＬＲの斜行縄文も施される。15・16も同じ地紋を有するもので、16にはその上から貝殻によると思われる横位の条痕文が施される。17は細い撚糸を使った絡条体圧痕文と結束の羽状縄文の施された土器で、口縁部には低い山形突起を備える。

（石器）石器類2,092点の中からここには27～59の33点を掲載した。27～31は石鏃である（27：ＩＡ２ａ、28・29：ＩＡ４、30・31：ＩＡ５）。27・29は前期後半のもので、28・30・31は形態から時期が異なる可能性がある。30は黒曜石製で原産地は赤井川と推定される。32・33は石錐である（Ⅱ１）。32は本遺跡内において最も小型で、33は最も大型である。34・35はつまみ付ナイフである（34：ⅢＡ１ｃ、35：ⅢＡ４）。34はつまみ部が大型で下端部が欠失している。35は未製品の可能性がある。36～38はスクレイパーである（36：ⅢＢ２ａ、37：ⅢＢ２ｃ、38：ⅢＢ６）。主な刃部は、36が右側縁、37が左側縁、38が下端部に各作られている。38の下端に見られる突起部は石錐的な使われた可能性がある。39・40は両面調整石器（39：Ⅳ１、38：Ⅳ２）、41・42は石核（ＶＡ１）である。これら４点は大量のフレイク類と共に投棄されていたものである。43～46はＵフレイクである（ＶＢ２）。45は上位につまみ部を持つ。46は下端の左右の突起が石錐として使われた可能性がある。47は扁平な小円礫を素材とするくさび形石器である（ＶＢ３）。

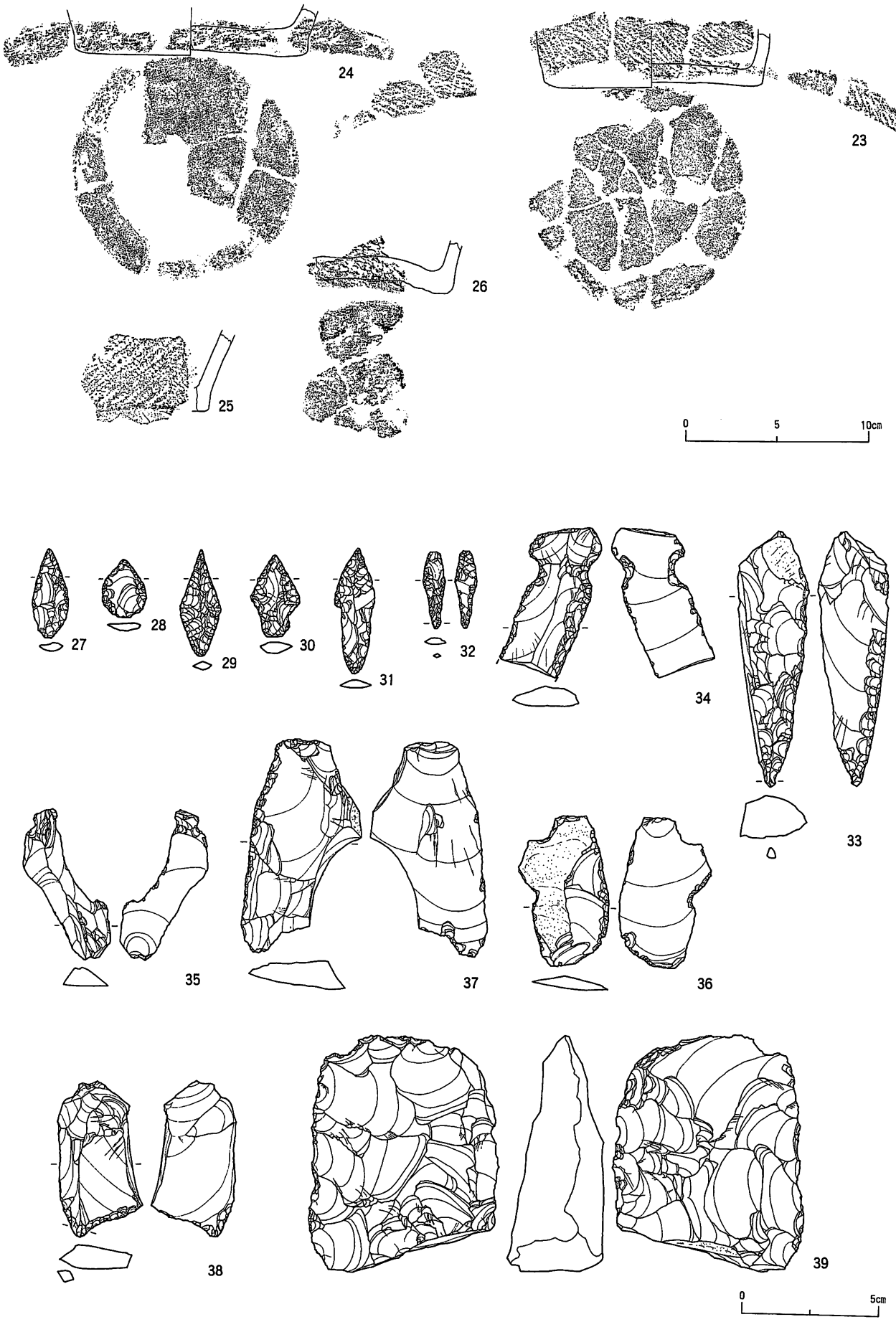
48・49は側縁にすり切り痕を残した石斧である（ⅥＡ４）。どちらも刃部には欠損が全く見られない。なお、48は約25m離れた包含層（Ｐ－17－ｄ）出土の基部と接合している。50～55はたたき石である（50～54：Ⅶ１、55：Ⅶ２）。51の下端部の敲打面には、マイナスドライバーのような道具の先端で何度も突いた痕跡が見られる。53の使用痕は右側縁の下端部と左側縁の上端部に集中している。56は、約25m離れたＨ－17、約５m離れた包含層（Ｊ－19－ｃ）のものと接合した半円状扁平打製石器である（Ⅷ３）。使用面に見られるのは主に敲打痕である。57は約10m離れた包含層（Ｌ－18－ｂ）のものなどと接合した北海道式石冠である（Ⅷ４）。Ｌ－18－ｂから出土した大きな部分の方には整形し直して使おうとした痕跡が認められる。58は主に下端の右側を使用した石鋸片である（ⅨＡ）。59は上下辺の中央に細かい切れ目が作出された小型の石錘である（Ⅺ３）。遺跡内における小型石錘の類例はこれ以外に見られない。

時　期　床面出土のⅡ群ｂ類土器から、縄文時代前期後半と考えられる。（皆川）

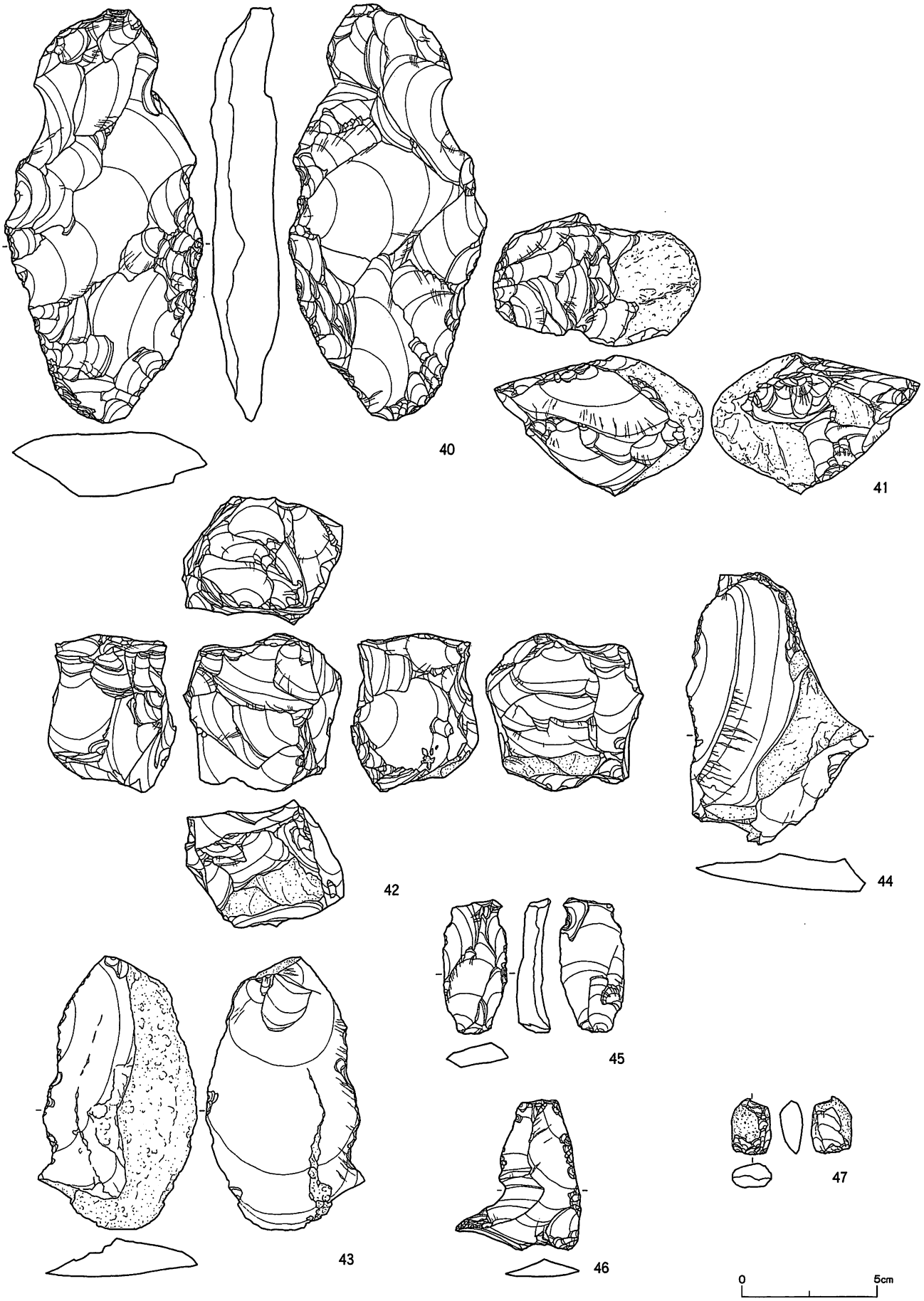
Ｈ－９　（図Ⅳ－110・111、図版　56・67・90、表Ⅳ－７・18・24）
位　置　Ｒ－19－ａ・ｄ、Ｒ－20－ａ
規　模　（429）×（395）／（115）×（93）／54cm
床面積　2.77㎡
平面形　円形？



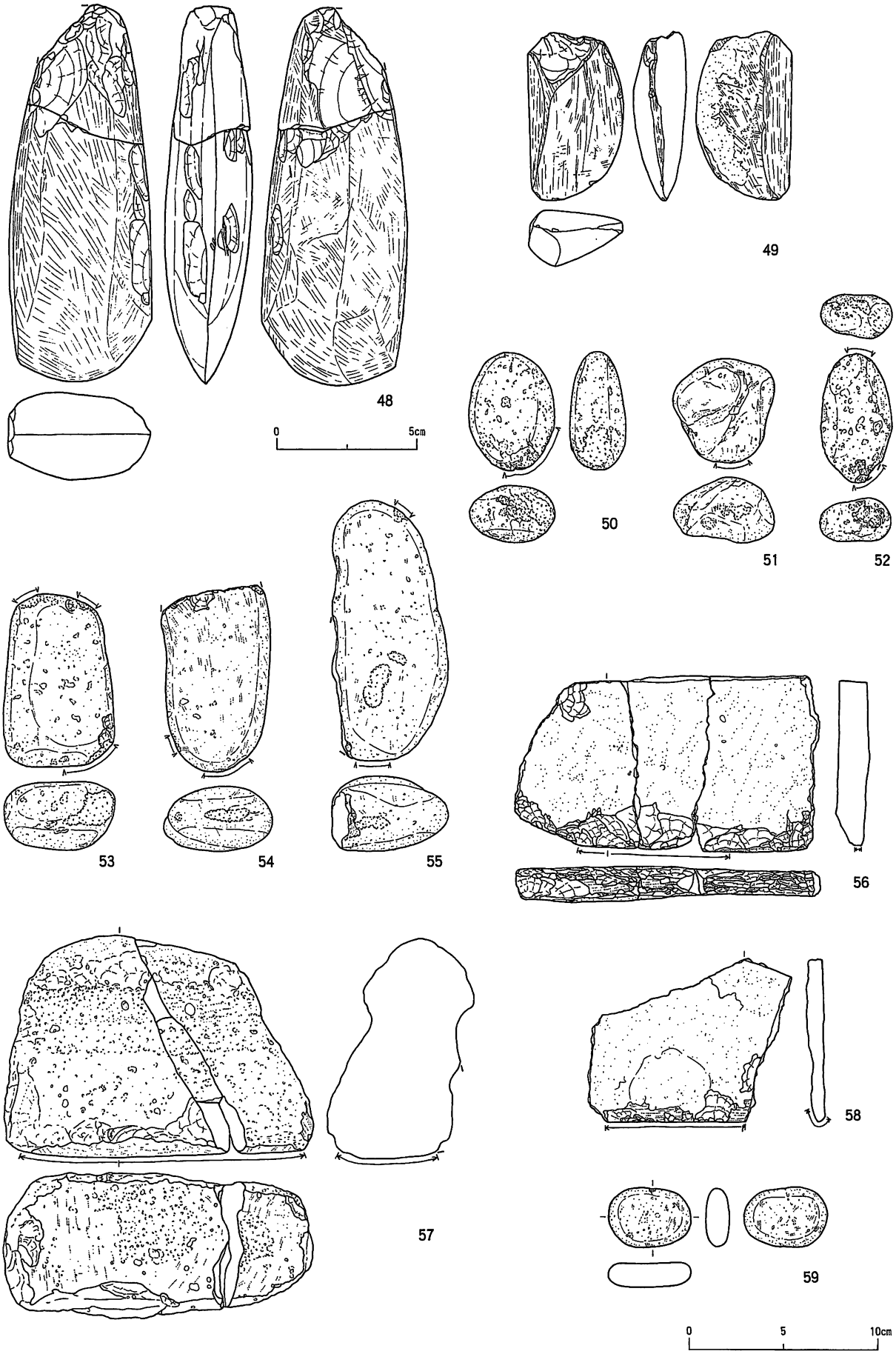
図Ⅳ－106　H－8出土の土器(3)



図Ⅳ－107　Ｈ－８出土の土器(4)・石器(1)



図Ⅳ－108　H－8出土の石器(2)



図Ⅳ－109　H－8 出土の石器(3)

長軸方向　－

確認・調査　Ｒ－19区において調査区境の土層を確認するため壁面に沿ってトレンチを設けⅥ層まで掘り下げた。その結果、明瞭な落ち込みを確認した。落ち込みの中心に直交するトレンチを入れ、１ｍほど掘り進んだところで壁を確認できた。床も明瞭であったため住居跡であることがわかった。本住居跡はそのほとんどが調査区外におよんでいるため形状は不明である。南側でＰ－６と重複し、本遺構が古い。

覆　土　10層に分層した。Ⅲ層に相当するとみられる自然堆積と黄褐色土の混じる灰褐色土の二つに大別できる。前者は覆土１、２層が相当し、５～８層が後者に相当する。両者間に位置する３、４、５層から多くの遺物が出土している。９、10層は床面直上に堆積した黒褐色土である。掘り込み面はⅢ層下部である。

壁・床面　壁は急激に立ち上がり、床面は中央部がわずかにくぼむが、ほぼ平坦である。

炉　確認できなかった。

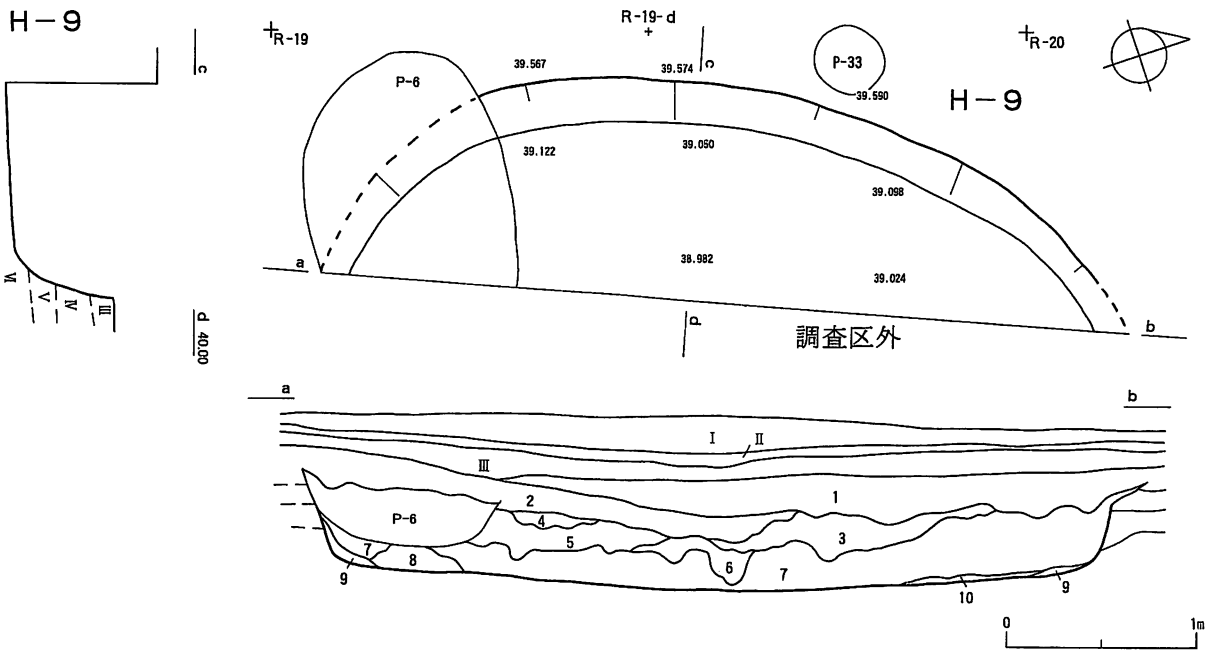
付属ピット・柱穴　確認できなかった。

遺物出土状況　覆土５層においてフレイクの集中域を１ヵ所、覆土３層で土器の集中が１ヵ所検出された。土器は覆土から56点、石器等は覆土からつまみ付きナイフ１点、スクレイパー１点、石核３点、フレイク104点、たたき石４点、原石１点、礫・礫片21点が出土し、床面からはフレイク２点が出土している。（立田）

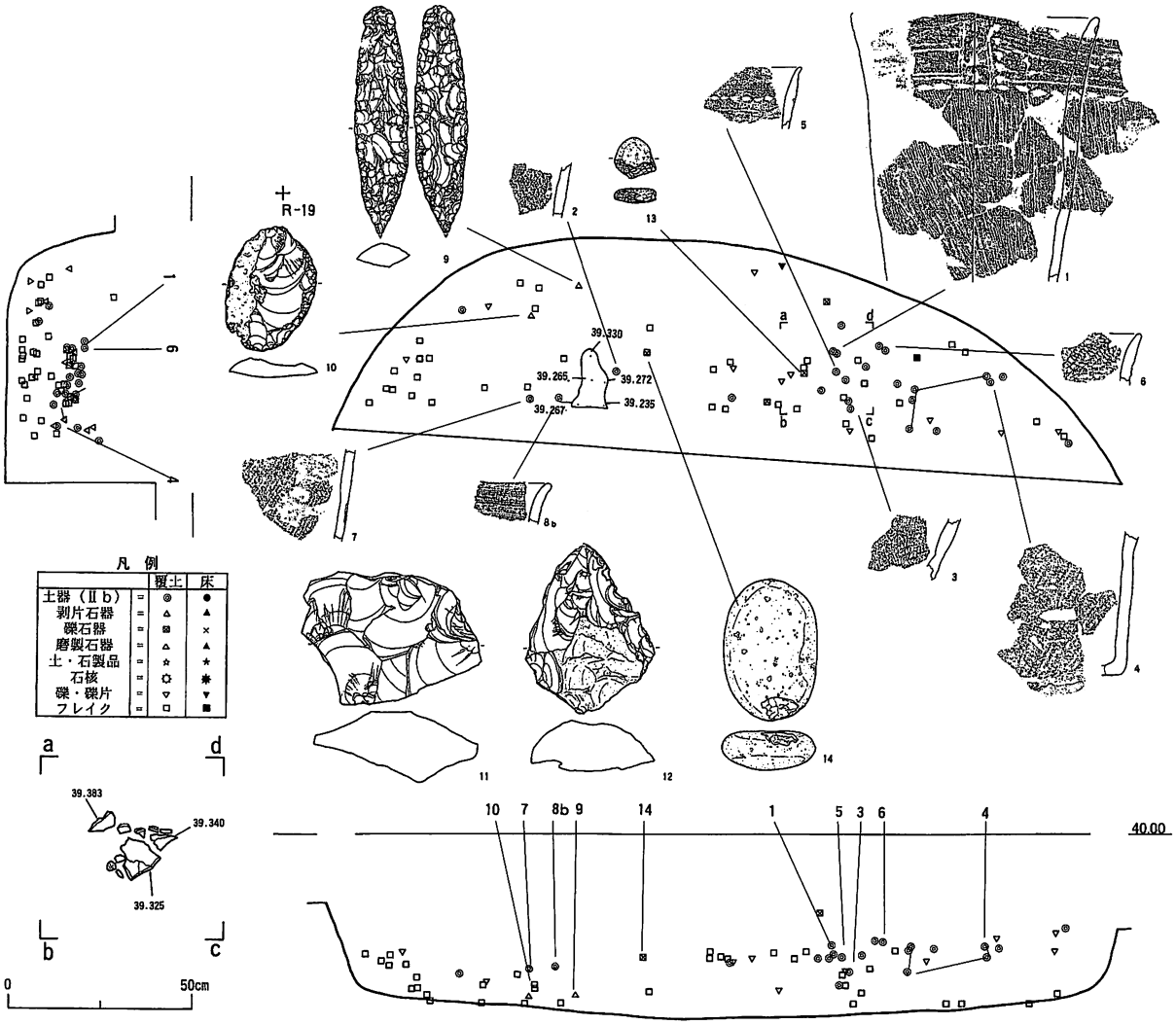
遺　物

（土器）土器は識別された１～８のⅡ群ｂ類土器８点を掲載した。主な出土層位は、２が覆土５層、１・３～５が覆土３層、67～８が覆土２層、６が覆土１層である。これらの胎土には繊維が混入する。１は同じ個体の土器がＨ－８の覆土２層（Ｈ－９－５）からも出土した底部の欠失する土器である。極めて低い山形の突起を持つ口縁部の文様帯は、ＬＲの縄線文と半截竹管状の施文具による斜めからの連続刺突文とで構成される。これらの文様を施した口縁部の器面は基本的に無地であるが、部分的（特に口唇直下の器面）には横位の条痕らしきものが認められる。胴部にはＲの撚糸文が施され、胎土中には微量の海綿骨針が混入する。２は器面にＬＲの斜行縄文が施された胴部である。３・４も同じ地紋の施される底部間際の胴部と底部である。５は無文部にＬの細い二本の撚糸を束ねた押捺と径の小さな竹管を使った連続刺突文とを交互に施文した口縁部である。３条の連続刺突文の施文方向は、中段が斜めから、上下段が正面からのものである。６は小柄な山形突起を持つ口縁部で、器面にはＬＲの斜行縄文と同じ撚りの縄を使った数条の縄線文が施される。７は胎土に微量の海綿骨針が混入するＬＲの自縄自巻的縄文の施された胴部である。８ａ～ｃは８ａがＨ－１の覆土２ｂ層（Ｈ－１－78ａ）から出土した口縁部、８ｃがＭ－２から出土した（Ｍ－２－16ｃ）文様帯部分のある胴部である。無地の器面には、撚りの異なった三本の組み合わせから構成される撚糸のユニットを五条巡らせ、その下に棒状の工具を用いた横位の刺突を連続させて施している。胴部の地紋はＬＲの自縄自巻的縄文と考えられる。（皆川）

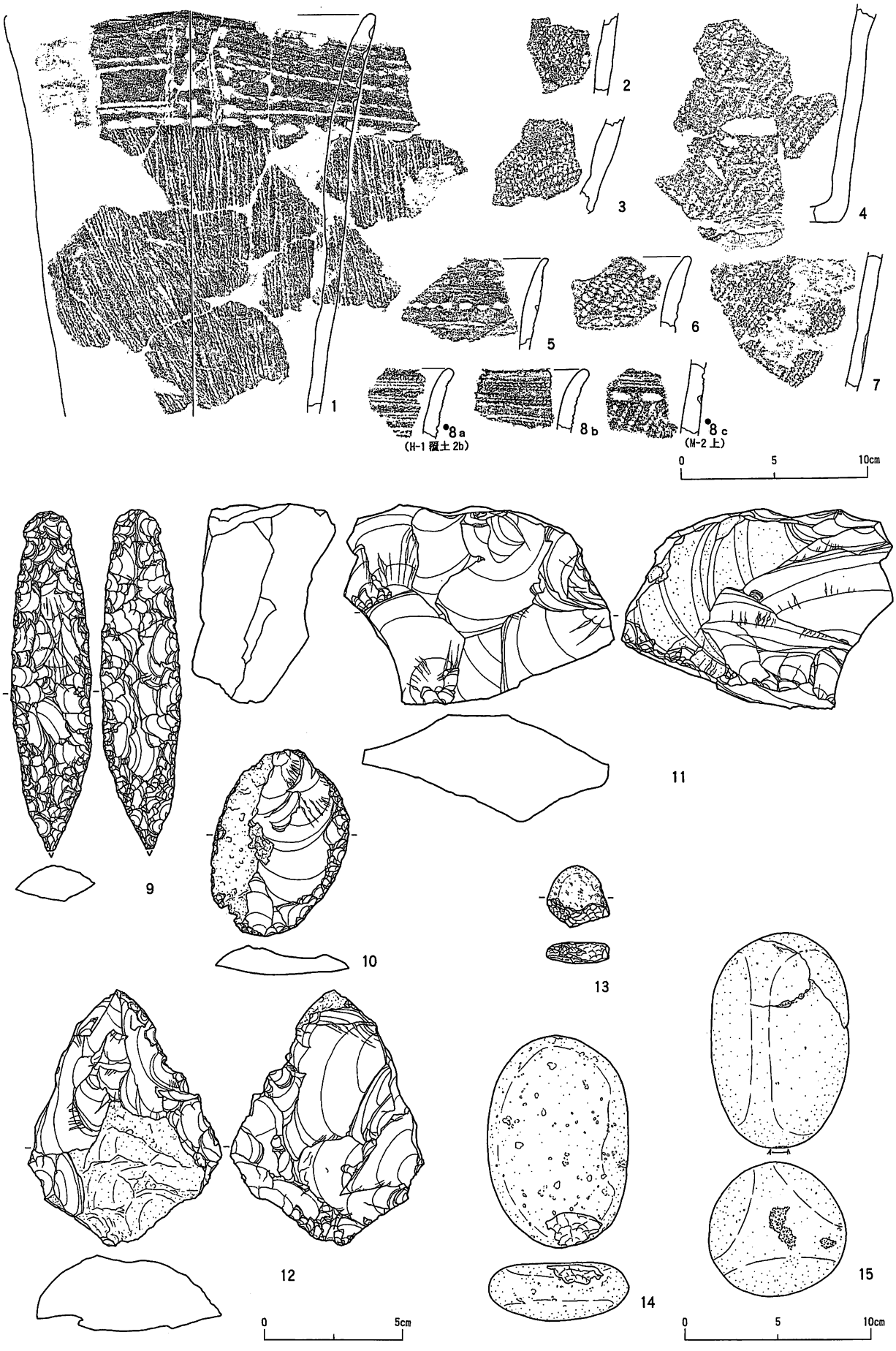
（石器）９はつまみ付きナイフ（ⅢＡ２）である。石材には頁岩を用いており、刃部の稜線はほぼ直線に作出される。つまみ部は明瞭ではないが、先端部は入念な細部調整が施されている。10はスクレイパー（ⅢＢ２ａ）である。背面に表皮の残る剥片を利用し、背面側の右側縁に凸刃が作出される。11は石核（ＶＡ１）である。節理割れの多い頁岩片を利用し、図の上下にあたる節理面を打面としている。裏面の剥離は階段状を呈する。12はＵフレイク（ＶＢ２）である。原石面の残る剥片を利用し、数枚の剥片を剥離した後、腹面側の下端左に細部調整が施される。９～12までの剥片石器の石材はす



1 黒褐色土(7.5YR3/1) 粘性なし しまりなし Ⅲ4～5回目相当
2 黒褐色土(7.5YR3/2) やや粘性あり ややしまる Ⅲ4～5回目相当
3 灰黄褐色土(10YR4/2) やや粘性あり しまりなし 7を斑状に含む
4 黒褐色土(7.5YR3/1) やや粘性あり ややしまる 遺物含む
5 黒褐色土(7.5YR3/1) 粘性なし しまりなし 斑状に7が混じる
6 にぶい黄褐色土(10YR5/4) 粘性あり ややしまりあり ロームブロック、灰黄褐色土をまだら状に含む
7 灰黄褐色土(10YR4/2) 粘性あり しまりややあり ロームブロックを混じる
8 明黄褐色土(10YR6/8) 粘性あり しまりややあり 6よりロームブロック多い
9 黒色土(10YR2/1) 粘性あり しまりなし
10 黒褐色土(10YR3/2) 粘性あり しまりなし



図Ⅳ－110　H－9とH－9遺物出土状況



図Ⅳ－111　Ｈ－９出土の遺物

べて頁岩である。13～15はたたき石(Ⅶ1)で、石材は安山岩である。出土層位は10、11が覆土6層、12、13が覆土5層、14が覆土3層、15、16が覆土2層である。

時　期　覆土中から出土した遺物、また掘り込み面から縄文時代前期後半円筒土器下層式の時期とみられる。（立田）

H－12（図Ⅳ－112～115、図版30・31・91、表－7・18・24）

位　置　O－19－c、O－20、O－21－b、P－19－d、P－20、P－21－a

規　模　521×490／492×466／26cm

床面積　18.62㎡

平面形　隅丸方形

長軸方向　N－116°－W

確認・調査　表土除去後、Ko－dが薄く堆積していた。トレンチを設定し掘り下げたが、明瞭な床面はとらえられず、Ⅴ層（漸移層）とⅥ層の境界が周囲と比較してやや不自然であったこと、およびⅤ層まで掘り下げると柱穴様の落ち込みが廻るように確認できたことから遺構と考えた。断面観察から、掘り込みはⅣ層中と推測される。なお、東側の床面は周囲よりも5cmほど深く掘り下げてしまった。重複関係は、近接するP－70を切り、H－15に切られている。また、M－1はH－12の埋まりきらない窪みに一部かかるように土が盛られたものである。

覆　土　4層に分層した。覆土1層には赤味を帯びたKo－gが混じっている。遺物を取り上げる際には住居跡上面に堆積しているⅢ層と覆土1層をまとめて取り上げている。

壁・床面　壁は緩やかに立ち上がる。床面はⅤ層中で不明瞭であり、若干しまりがある程度で硬くはない。

炉　住居に伴う炉は無い。覆土1層上面にはH－12廃絶後の窪みに投げ捨てられたと推測される2次堆積の焼土のまとまりが2ヶ所確認された（HF－1・2）。なお、HF－1は調査時にはF－9として取り扱ったもので、報告書作成時にHF－1とした（図版45－6）。また、東側ではM－1直下の覆土2層上面において炭化物のまとまりが検出された（HC－1）。これはむしろ、M－1構築時に関連する炭化物集中と思われる（図Ⅳ－114）。

付属ピット・柱穴　付属ピットは1基（HP－14）、柱穴は13基（HP－1～13）を検出した。HP－14は住居の北壁際に掘り込まれた円形の土壙である。柱穴はいずれも浅く、住居の壁際をめぐっている。

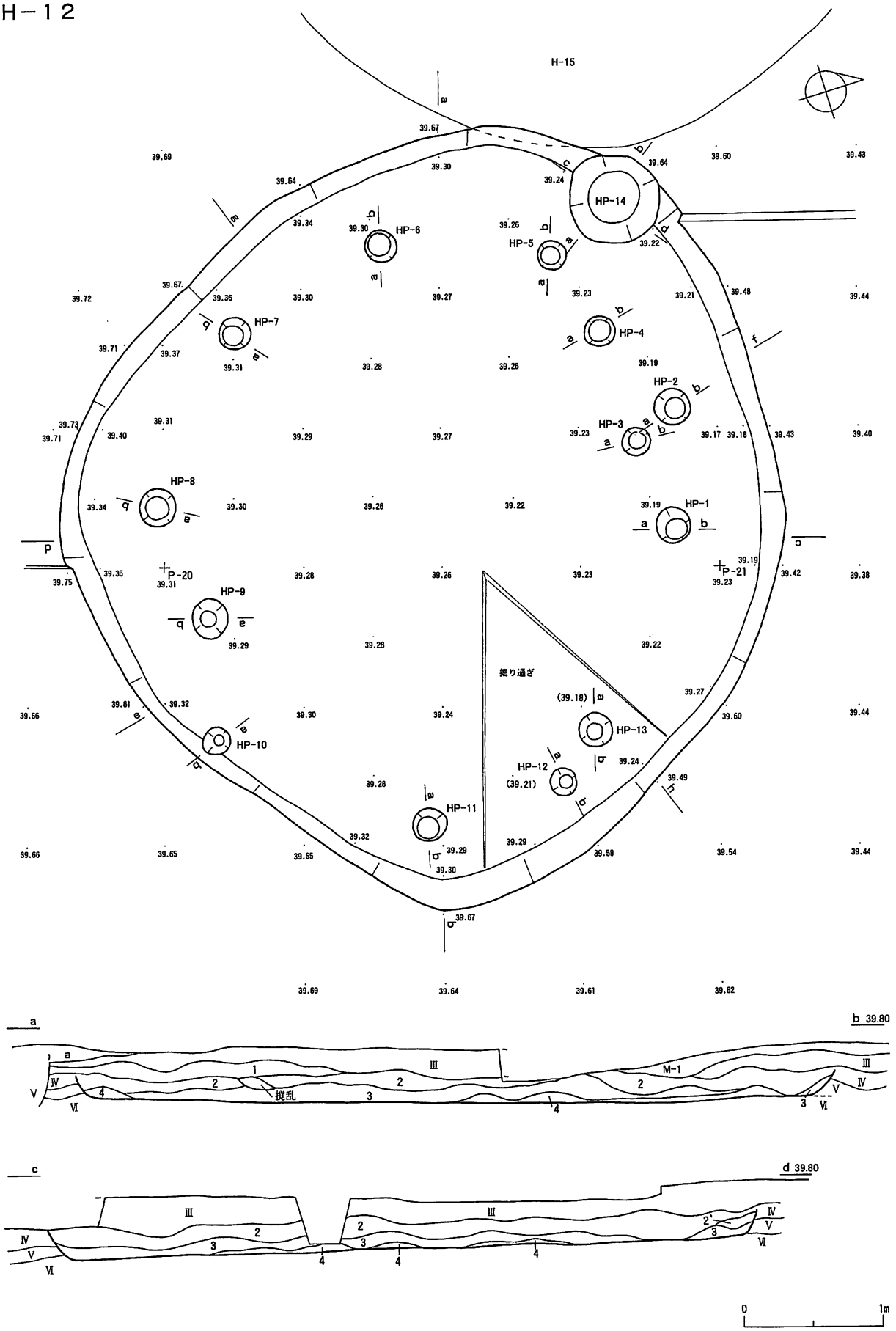
遺物出土状況　遺物はⅢ層も含めた覆土1層から土器23点・石器など78点、覆土2層から土器4点・石器など12点、覆土3層からフレイク1点の合計118点が出土した。ほとんどが住居廃絶後に堆積したⅢ層中のもので、住居に伴うものはない。（藤原）

遺　物

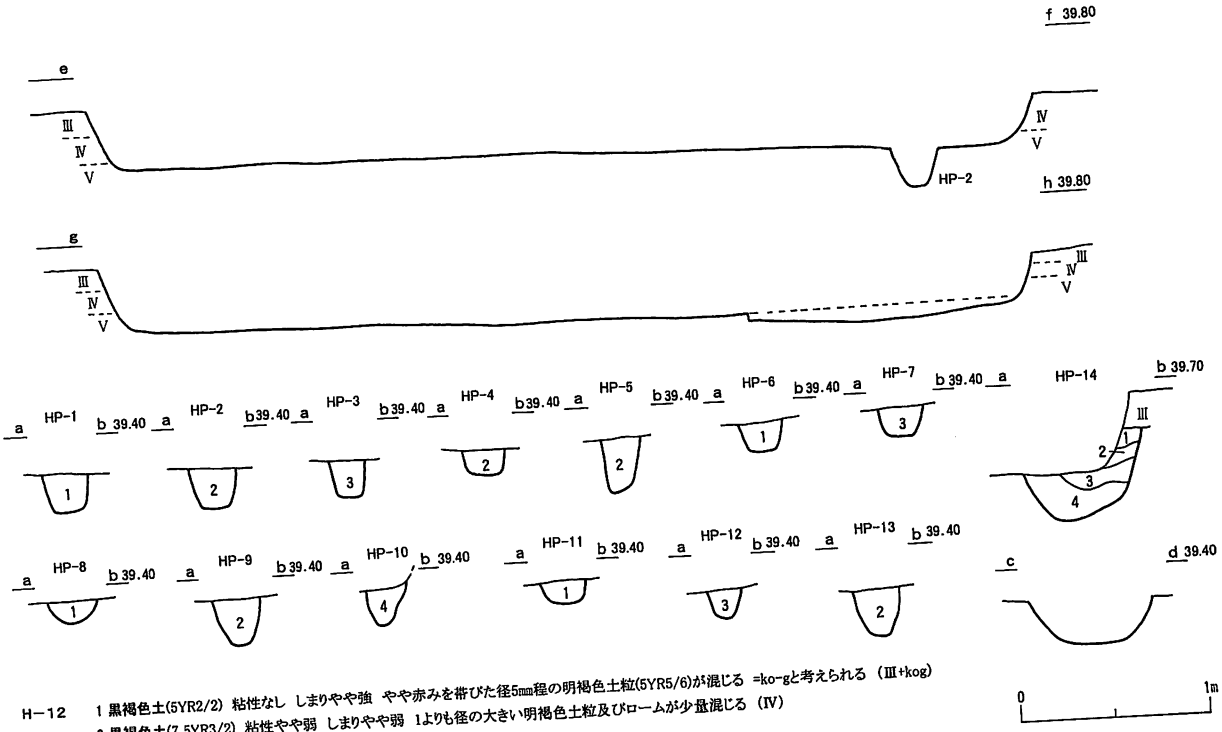
（土器）土器は個体別に識別された1～6のⅡ群b類土器6点を掲載した。主な出土層位は、1が覆土2層、それ以外が覆土1層で、これらの土器の胎土には繊維が混入する。

1は直前段合撚の原体を使ったと思われる縄文が施される胴部の小破片である。2・5・6はRの撚糸文を使った文様を持つものである。2は撚糸が密に施される胴部、5は撚糸の間隔が空き気味に施される底部である。6a・bは主体がH－3覆土2層と包含層から出土したもの（H－3－11a・b）である。本遺構からは覆土1層で未接合の破片6点が出土している。撚糸文が鋸歯状に構成された口縁部文様帯と、地紋に網目状の撚糸文が施された胴部を持つもので、これらの境界にも同じ撚糸

H－１２

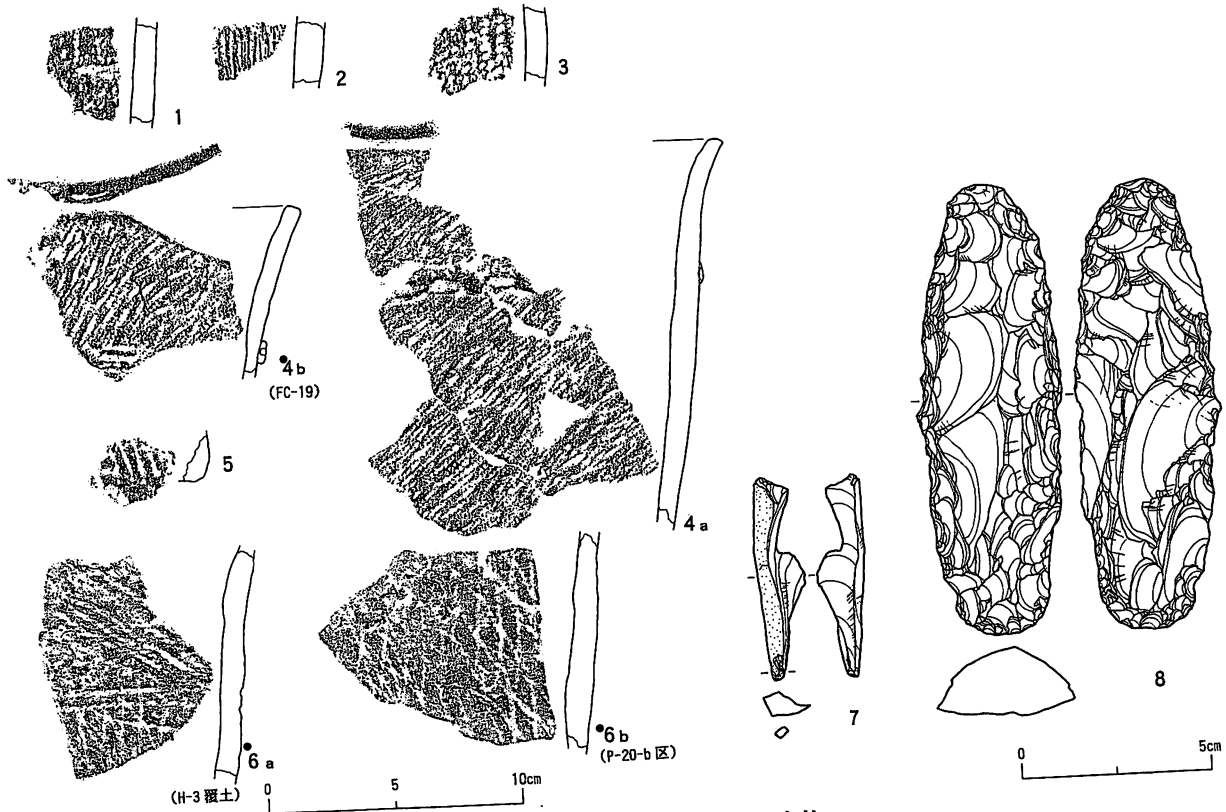


図Ⅳ－112　H－12(1)

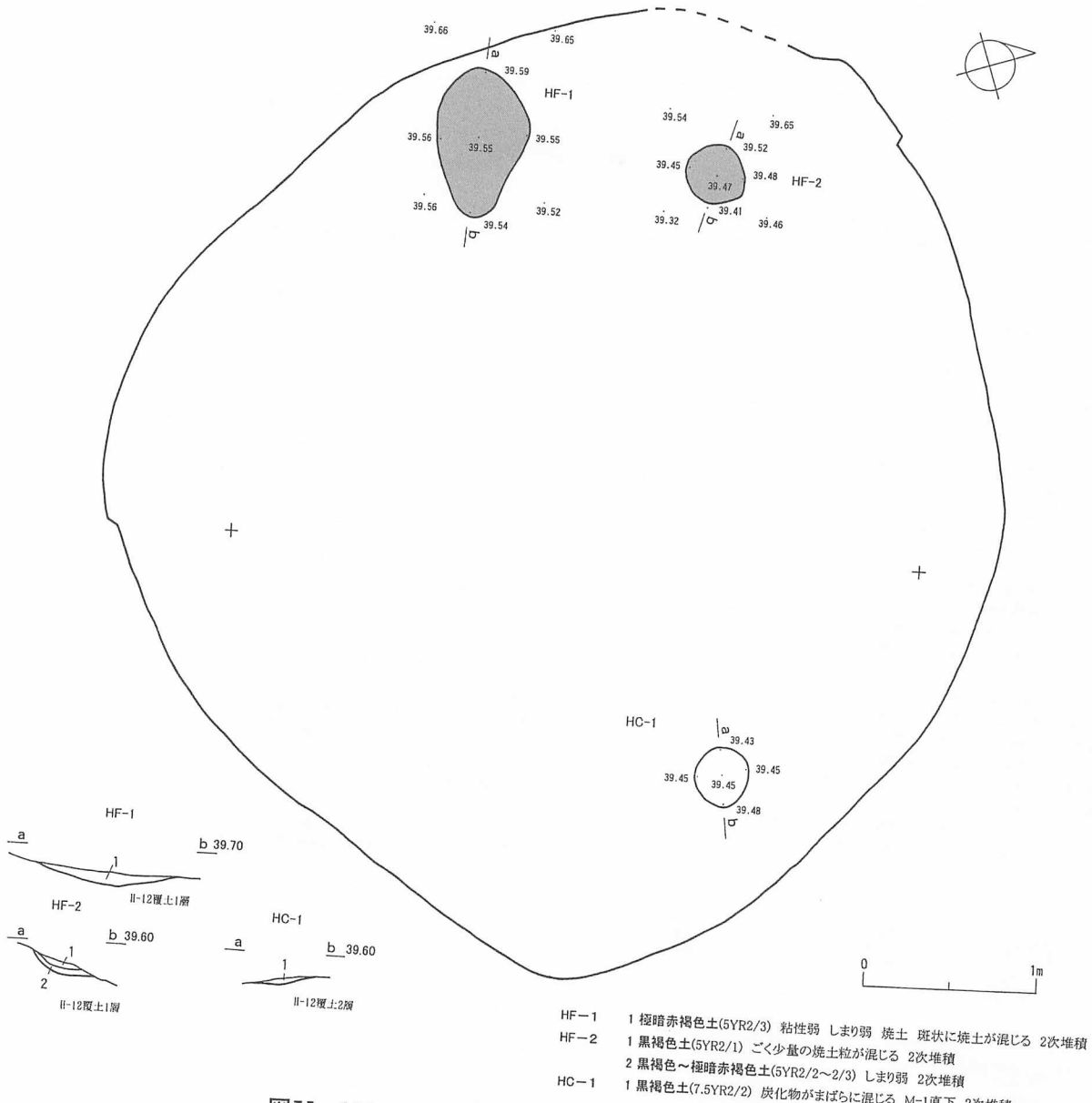


H－12　1 黒褐色土(5YR2/2) 粘性なし しまりやや強 やや赤みを帯びた径5㎜程の明褐色土粒(5YR5/6)が混じる =ko-gと考えられる (Ⅲ+kog)
2 黒褐色土(7.5YR3/2) 粘性やや弱 しまりやや弱 1よりも径の大きい明褐色土粒及びロームが少量混じる (Ⅳ)
3 暗褐色土(7.5YR3/3) 粘性やや強 しまり弱 (Ⅴ)
4 暗褐色土(10YR3/4) 粘性やや強 しまり弱 (Ⅴ)

HP－1　1 暗褐色土(7.5YR3/3) 粘性やや強 しまりやや弱
HP－2　2 褐色土(7.5YR4/3) 粘性強 しまり強
HP－3　3 暗褐色土(7.5YR3/4) 粘性やや強 しまり強
HP－4　2 褐色土(7.5YR4/3) 粘性強 しまり強
HP－5　2 褐色土(7.5YR4/3) 粘性強 しまり強
HP－6　1 暗褐色土(7.5YR3/3) 粘性やや強 しまりやや弱
HP－7　3 暗褐色土(7.5YR3/4) 粘性やや強 しまりやや弱め
HP－8　1 暗褐色土(7.5YR3/3) 粘性やや強 しまりやや弱
HP－9　2 褐色土(7.5YR4/3) 粘性強 しまり強
HP－10　4 極暗褐色土(7.5YR2/3) 粘性やや弱 しまりやや弱
HP－11　1 暗褐色土(7.5YR3/3) 粘性やや強 しまりやや弱
HP－12　3 暗褐色土(7.5YR3/4) 粘性やや強 しまり強
HP－13　2 褐色土(7.5YR4/3) 粘性強 しまり弱め
HP－14　1 =H-12 覆土1層
2 =H-12 覆土2層
3 極暗褐色土(7.5YR2/3) 粘性なし しまり弱 ごく少量のロームが混じる
4 暗褐色土(7.5YR3/4) 粘性やや弱 しまり弱 3よりも多くのロームが混じる



図Ⅳ－113　H－12(2)と出土遺物

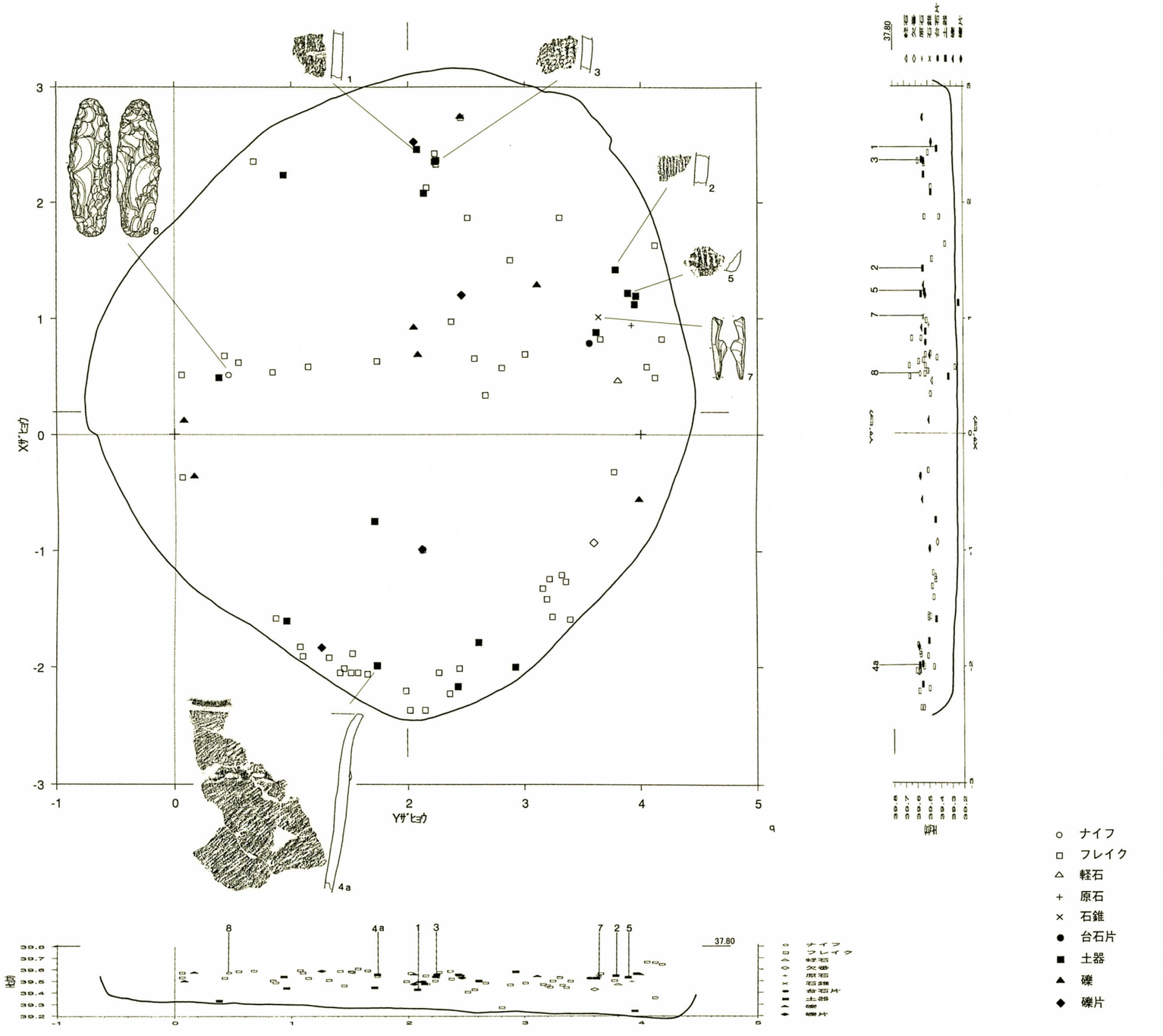


図Ⅳ－114　Ｈ－12覆土中検出の焼土・炭化物集中

文が横環している。内面は研磨が著しい。３はＬＲＬの三段複節が施される胴部。４ａ・ｂは山形の突起を有する口縁部から胴部である。４ｂはＦＣ－19から出土したもの（ＦＣ－19－23ａ）。山形突起の頂部の口唇には、先端が鋭い道具を使って長さ２㎝程の切り込みが入れられており、頸部には半截竹管状の施文具で刺突文の施された粘土紐が貼付されている。地紋はＬＬＲの撚り戻しである。なお、同じ個体の土器がＦＣ－17からも出土している。（皆川）

（石器） ７は剥片に刺突部を作出した石錐（Ⅱ１）で、節理面が残る。機能部には回転使用による摩滅が見られる。８は両面加工の石篦・篦状石器（ⅢＢ１ｂ）。長円形を呈するもので、分類基準にある台形状ではないが、下側縁の刃部の作出が包含層出土の84・85と共通することから、ここに分類した。いずれも石材は頁岩である。

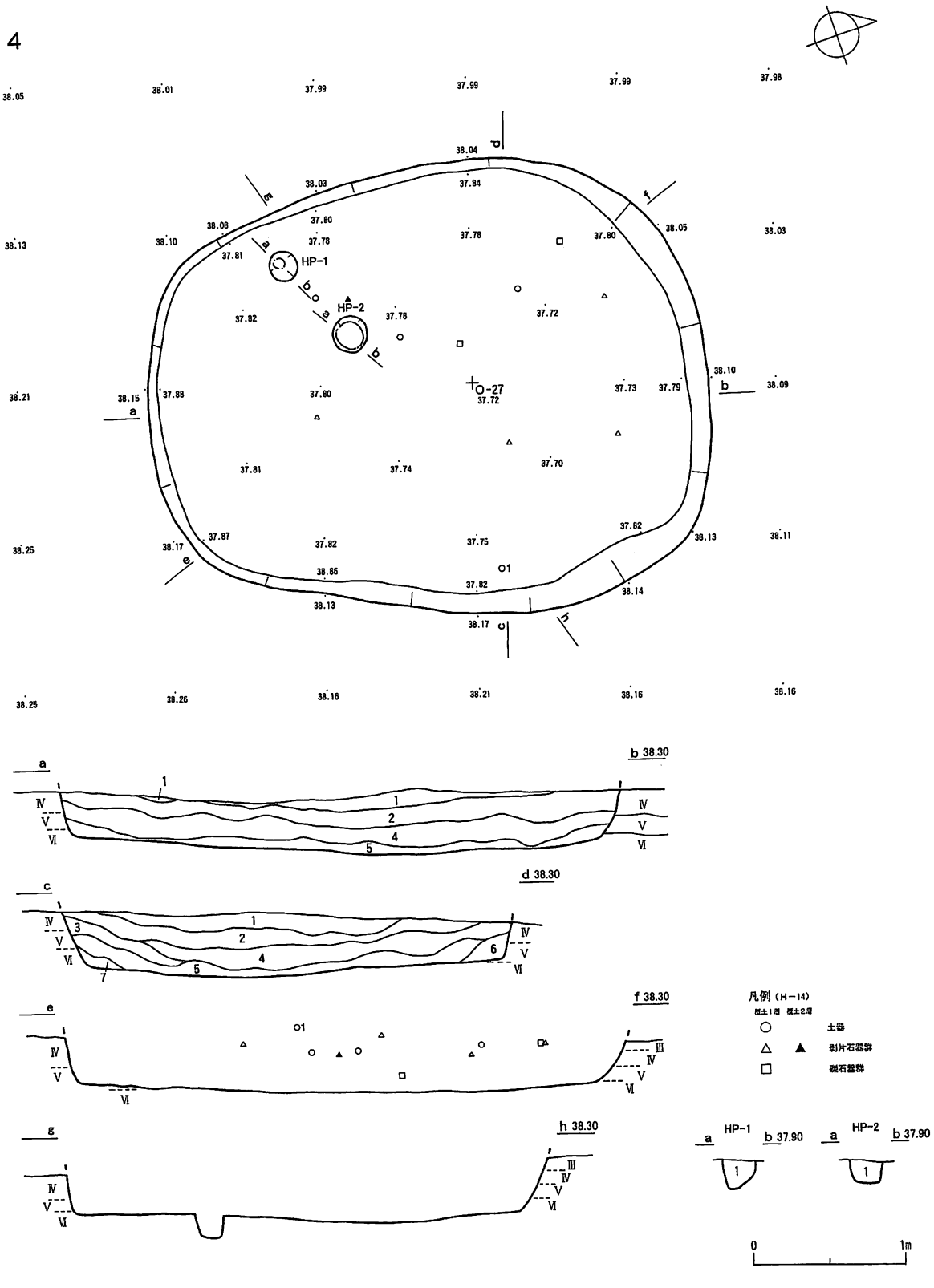
時　期　住居に伴う遺物が無く不明である。Ｈ－15に切られること、覆土中にＫｏ－ｇが堆積していることからその降下以前で、遺跡の主体となる縄文時代前期後半よりも古い遺構である。（藤原）



図Ⅳ－115　Ｈ－12遺物出土状況

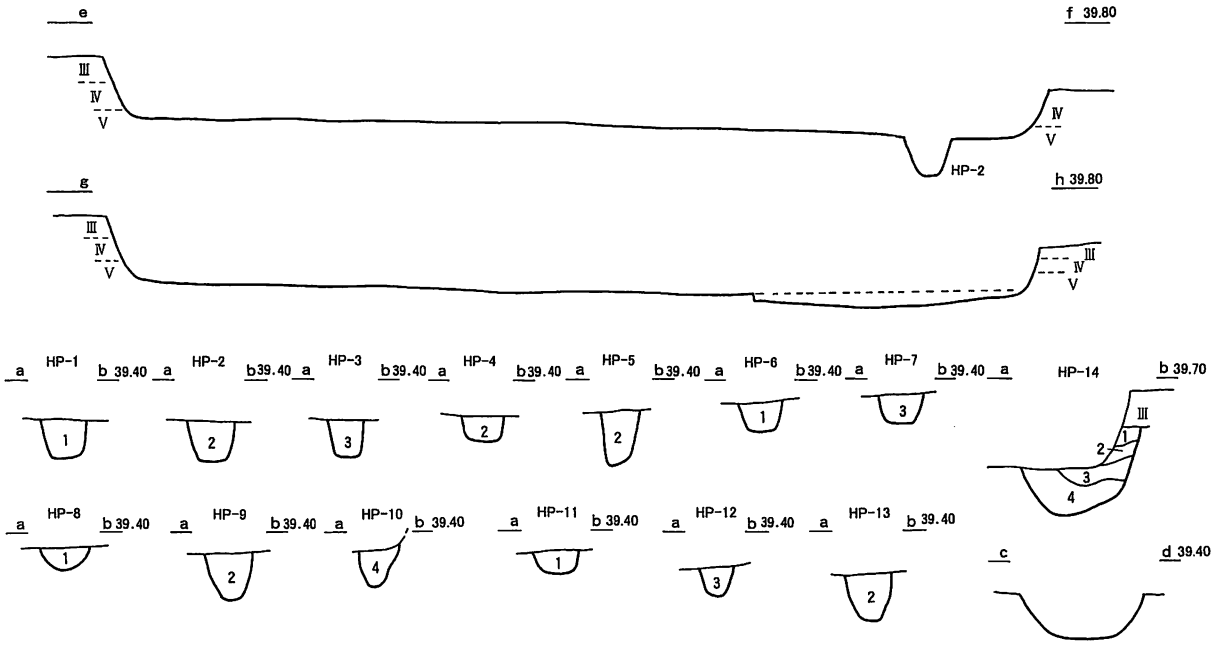
3
2
1
0
-1
-2
-3
-1
0
8
8

H－１４



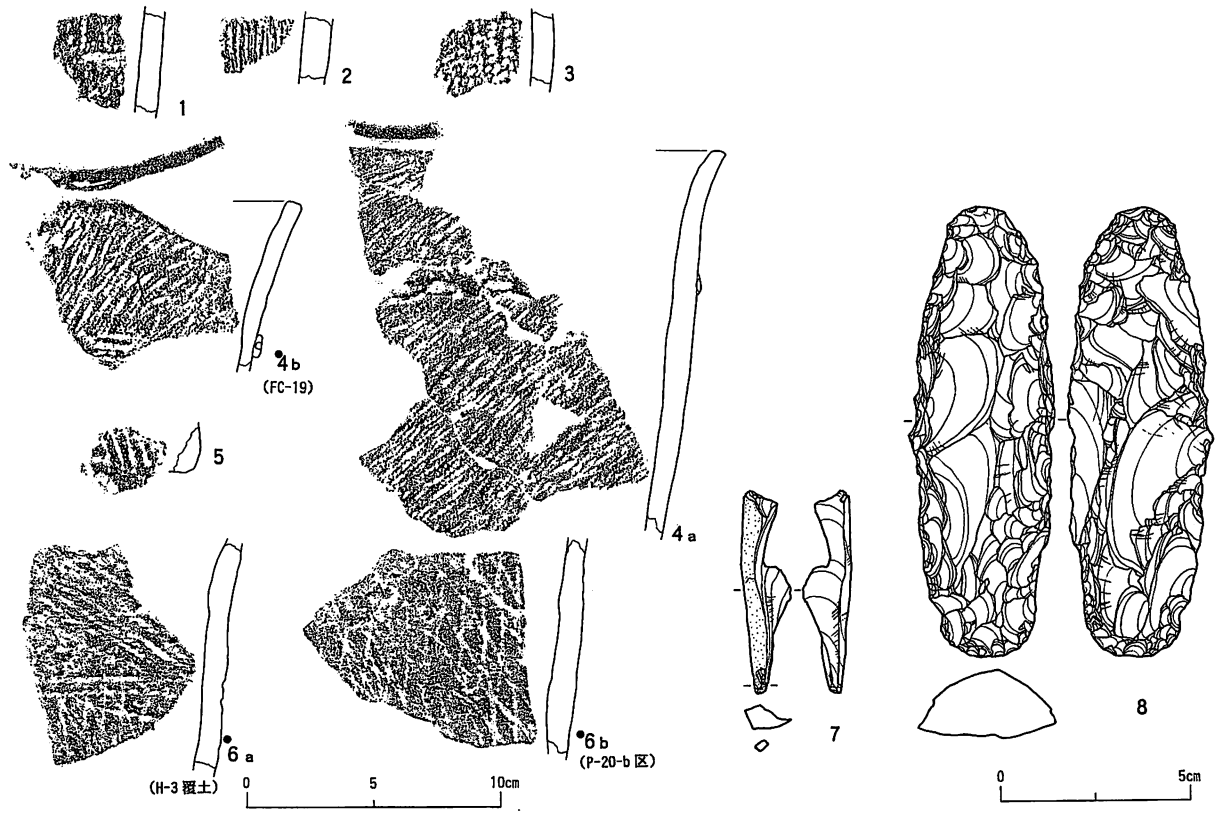
H－14　1 黒色土(7.5YR2/1) 粘性なし しまりやや弱 乾燥するとクラックが入る (Ⅲ)
2 極暗褐色土(7.5YR2/3) 粘性なし しまりやや弱 径10㎜程度のロームブロックがごく少量混じる Ⅳ>>Ⅵ
3 黒褐色土(7.5YR3/2) 粘性やや弱 しまりやや強 ロームが混じる Ⅳ+Ⅴ
4 黒褐色土(7.5YR2/2) 粘性なし しまりやや弱 Ⅳ
5 褐色土(7.5YR4/3) 粘性やや強 しまりやや弱 ロームが多く混じる Ⅴ>Ⅵ
6 黒褐色土(7.5YR2/2) 粘性やや強 しまりやや弱 ロームがごく少量混じる Ⅳ>>Ⅴ
7 褐色土(7.5YR4/4) 粘性やや強 しまり弱 Ⅵ層の崩落と考えられる
HP－1　1 黒褐色土(7.5YR3/2) 粘性強 しまり強 ロームとごく少量の焼土粒が混じる
HP－2　1 黒褐色土(7.5YR3/2) 粘性強 しまり強 ロームとごく少量の焼土粒が混じる

図Ⅳ－116　H－14と出土遺物



H－12　1 黒褐色土(5YR2/2) 粘性なし しまりやや強 やや赤みを帯びた径5㎜程の明褐色土粒(5YR5/6)が混じる =ko-gと考えられる (Ⅲ+kog)
2 黒褐色土(7.5YR3/2) 粘性やや弱 しまりやや弱 1よりも径の大きい明褐色土粒及びロームが少量混じる (Ⅳ)
3 暗褐色土(7.5YR3/3) 粘性やや強 しまり弱 (Ⅴ)
4 暗褐色土(10YR3/4) 粘性やや強 しまり弱 (Ⅴ)

HP－1　1 暗褐色土(7.5YR3/3) 粘性やや強 しまりやや弱
HP－2　2 褐色土(7.5YR4/3) 粘性強 しまり強
HP－3　3 暗褐色土(7.5YR3/4) 粘性やや強 しまり強
HP－4　2 褐色土(7.5YR4/3) 粘性強 しまり強
HP－5　2 褐色土(7.5YR4/3) 粘性強 しまり強
HP－6　1 暗褐色土(7.5YR3/3) 粘性やや強 しまりやや弱
HP－7　3 暗褐色土(7.5YR3/4) 粘性やや強 しまりやや弱め
HP－8　1 暗褐色土(7.5YR3/3) 粘性やや強 しまりやや弱
HP－9　2 褐色土(7.5YR4/3) 粘性強 しまり強
HP－10　4 極暗褐色土(7.5YR2/3) 粘性やや弱 しまりやや弱
HP－11　1 暗褐色土(7.5YR3/3) 粘性やや強 しまりやや弱
HP－12　3 暗褐色土(7.5YR3/4) 粘性やや強 しまり強
HP－13　2 褐色土(7.5YR4/3) 粘性強 しまり弱め
HP－14　1 =H-12 覆土1層
2 =H-12 覆土2層
3 極暗褐色土(7.5YR2/3) 粘性なし しまり弱 ごく少量のロームが混じる
4 暗褐色土(7.5YR3/4) 粘性やや弱 しまり弱 3よりも多くのロームが混じる



図Ⅳ－113　H－12(2)と出土遺物



図Ⅳ－114　Ｈ－12覆土中検出の焼土・炭化物集中

文が横環している。内面は研磨が著しい。３はＬＲＬの三段複節が施される胴部。４ａ・ｂは山形の突起を有する口縁部から胴部である。４ｂはＦＣ－19から出土したもの（ＦＣ－19－23ａ）。山形突起の頂部の口唇には、先端が鋭い道具を使って長さ２㎝程の切り込みが入れられており、頸部には半截竹管状の施文具で刺突文の施された粘土紐が貼付されている。地紋はＬＬＲの撚り戻しである。なお、同じ個体の土器がＦＣ－17からも出土している。　（皆川）

（石器） ７は剥片に刺突部を作出した石錐（Ⅱ１）で、節理面が残る。機能部には回転使用による摩滅が見られる。８は両面加工の石篦・篦状石器（ⅢＢ１ｂ）。長円形を呈するもので、分類基準にある台形状ではないが、下側縁の刃部の作出が包含層出土の84・85と共通することから、ここに分類した。いずれも石材は頁岩である。

時　期　住居に伴う遺物が無く不明である。Ｈ－15に切られること、覆土中にＫｏ－ｇが堆積していることからその降下以前で、遺跡の主体となる縄文時代前期後半よりも古い遺構である。　（藤原）

H－14（図Ⅳ－116、図版91、表Ⅳ－７・18）

位　置　Ｎ－26－ｂ・ｃ、Ｎ－27－ｂ、Ｏ－26－ａ・ｄ、Ｏ－27－ａ

規　模　370×350／297×274／46cm

床面積　7.95㎡

平面形　隅丸方形

長軸方向　Ｎ－168.5°－Ｗ

確認・調査　Ⅳ層上面において黒褐色土のまとまりを確認した。トレンチを設定し掘り下げるとゆるやかな壁と硬い床面を確認した。床面に焼土粒が散在していたことからも住居跡とした。しかし位置や平面プラン、遺物の出土状況などから他の一般的な住居跡とは性格が異なると推測される。

覆　土　７層に分層した。このうち、１層は住居廃絶後に堆積したⅢ層の黒色土である。なお、遺物の取り上げは覆土１・２層をまとめて「１層」として取り上げている。そのため、取り上げの「２層」は覆土３層に対応する。

壁・床面　壁は傾斜の上方にあたる住居の東側で特に明瞭に確認できた。床面は中央部が窪む浅い皿状を呈する。床面にはごく少量の焼土粒が散在しており、一部は柱穴に流れ込んでいた。

炉　確認できなかった。

付属ピット・柱穴　柱穴は２ヶ所確認できた。深さは20cmほどで、規則的な配列は認められなかった。覆土にはごく少量の焼土粒が混じっている。

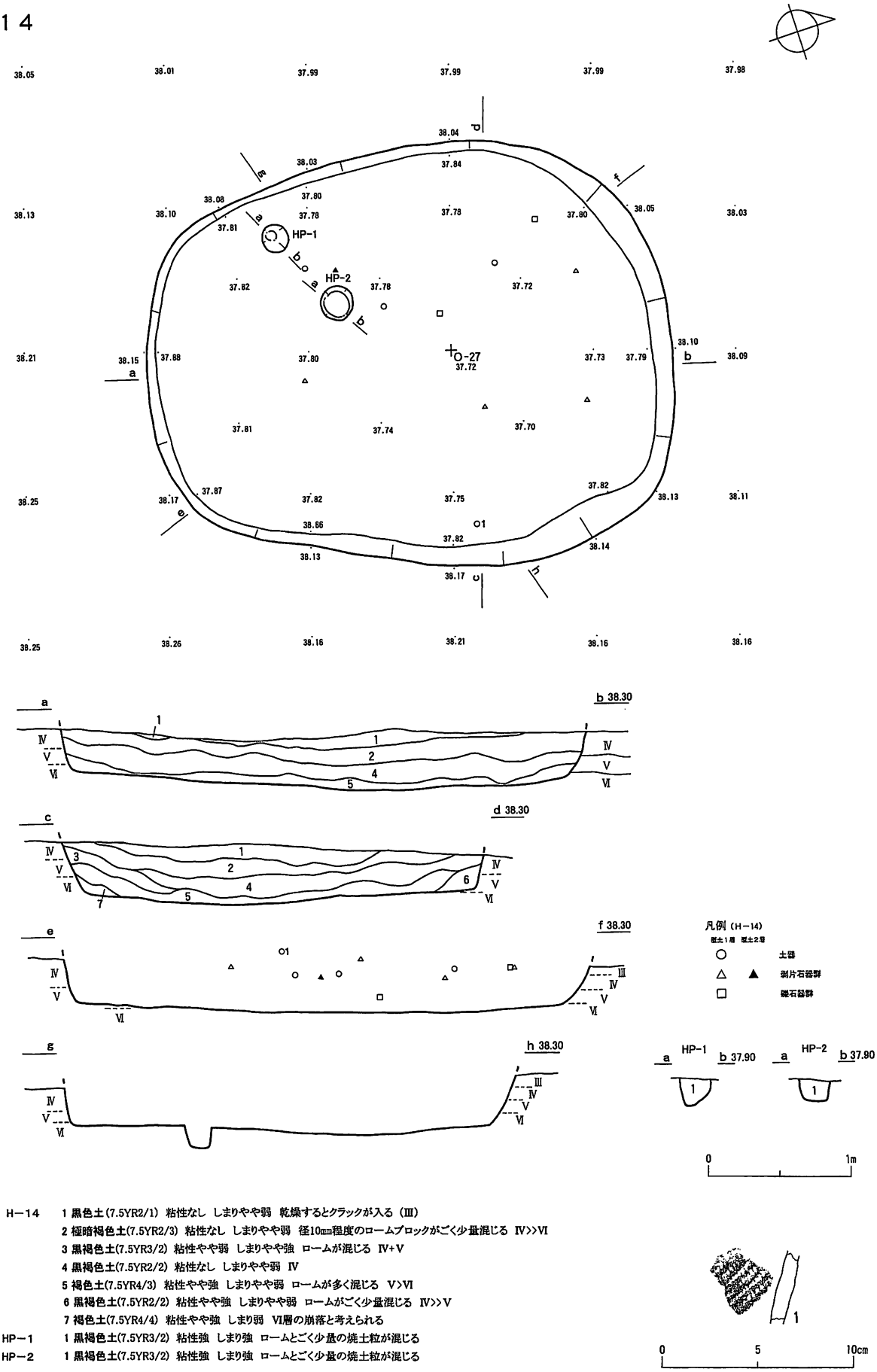
遺物出土状況　取り上げの１層からは土器７点、石器など６点、２層からはフレイク１点の合計14点が出土した。いずれも覆土上位からの出土で、住居跡に伴う遺物は無い。

遺　物　１はＬＲの斜行縄文の施されたⅡ群ｂ類土器の胴部である。

時　期　覆土の堆積状況および、覆土中・周辺の遺物から縄文時代前期後半の遺構と推測される。

（藤原）

H－１４



H－14　1 黒色土(7.5YR2/1) 粘性なし しまりやや弱 乾燥するとクラックが入る (Ⅲ)
2 極暗褐色土(7.5YR2/3) 粘性なし しまりやや弱 径10㎜程度のロームブロックがごく少量混じる Ⅳ>>Ⅵ
3 黒褐色土(7.5YR3/2) 粘性やや弱 しまりやや強 ロームが混じる Ⅳ+Ⅴ
4 黒褐色土(7.5YR2/2) 粘性なし しまりやや弱 Ⅳ
5 褐色土(7.5YR4/3) 粘性やや強 しまりやや弱 ロームが多く混じる Ⅴ>Ⅵ
6 黒褐色土(7.5YR2/2) 粘性やや強 しまりやや弱 ロームがごく少量混じる Ⅳ>>Ⅴ
7 褐色土(7.5YR4/4) 粘性やや強 しまり弱 Ⅵ層の崩落と考えられる

HP－1　1 黒褐色土(7.5YR3/2) 粘性強 しまり強 ロームとごく少量の焼土粒が混じる

HP－2　1 黒褐色土(7.5YR3/2) 粘性強 しまり強 ロームとごく少量の焼土粒が混じる

図Ⅳ－116　H－14と出土遺物

H－15（図Ⅳ－117～139、図版32～34・91～99、表Ⅳ－7・18・24）
位　置　N－20、N－21－a・b、O－20－a・d、O－21－a
規　模　496×452／484×434／90cm
床面積　16.20㎡
平面形　円形
長軸方向　－
確認・調査　Ⅲ層を10cmほど掘り下げた際に黒色土と褐色土のまとまりを確認した。当初は遺構の重複を想定し、トレンチを設定した。更に掘り下げると覆土上位から中位にかけて大量に遺物が出土し、覆土下位には褐色ローム質土が見られた。その下から中央部が窪む硬い床面と、急角度で立ちあがる壁を確認したので住居跡とした。掘り込み面は確認面とほぼ同一と推測される。また、覆土中に黒色土の落ち込みが2ヵ所確認された。埋没時に自然にできた窪みと考えられたが土壙P－50・51として扱った。

なお、覆土中の焼土HF－2・5・6・8についてはフローテーションを実施し炭化種子を検出した。詳細については第Ⅵ章3で述べている。

覆　土　18層に分層した。H－1に準じてロームの混じり具合から、大きく7層に大別できる。黒色土でⅢ層を主体とするもの（1層）、黒色土主体であるがやや色調が明るい部分があるもの（2層）、ほぼ純粋な褐色ローム質土（3層）、黒色土にⅥ層起源のロームが混じるもの（4～6層）、黒色土が主体となるもの（7層）、より下位にありロームブロックが主体となるもの（12～17層）、いわゆる三角堆積で黒色土が主体となりしまりが弱いもの（18層）である。遺物の取り上げもこの大別にしたがった。なお、8～11層は住居内の土壙P－50・51の覆土である。このうち8～10層は5・6層に、11層は7層に類似する。また、覆土12b層中に砂がまとまる部分があった。

覆土下位にありロームが主体となる12～17層はH－1と同じく住居構築の際の掘り上げ土もしくは土葺き屋根の崩落に由来すると推測される。覆土上位のローム質土である3層はほぼ純粋なロームであることや位置的な片寄り（図Ⅳ－117、図版32－2・3）、分布の縁部分でも崩れの少ないこと、ほとんど遺物が混じらないこと、下位のローム主体層との間に間層があること、などから起源が異なり人為的に他所から運ばれ投げ込まれたロームであると考えられる。方向的には住居の南側から投げ込まれたもので、遺物の接合状況・分布などから遺跡内の小高い部分を掘り窪めた竪穴住居様遺構H－10・13に由来すると推測される。

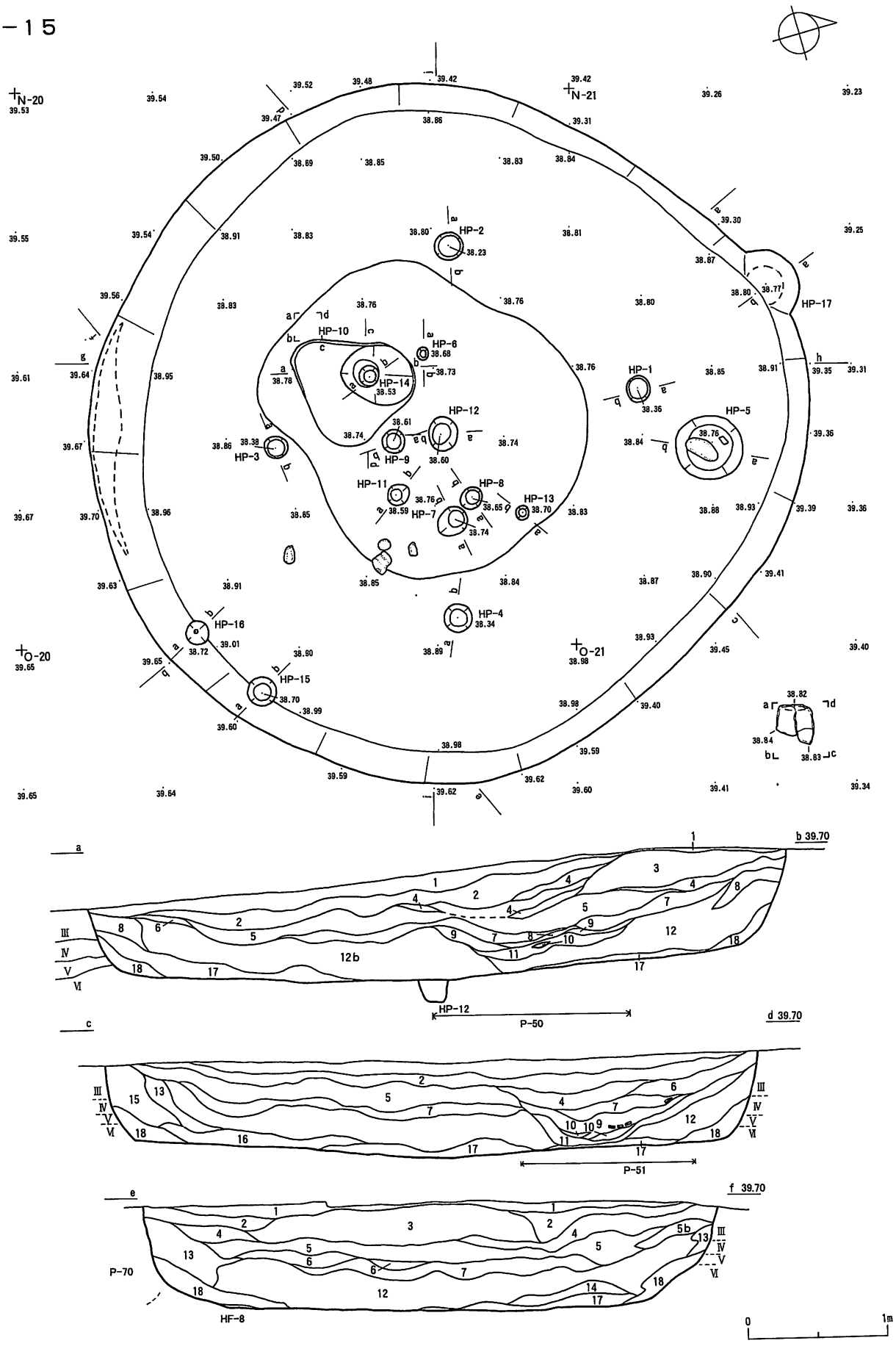
壁・床面　壁は南西部分を除き、急角度で立ちあがる。南西部の壁は他と比較して崩落が著しく階段状となった。床面は浅い皿状で硬くしまっており、中央部が5cmほど窪んでいる。

炉　床面に炉は確認できなかった。覆土中に焼土粒・炭化物が散在しており、このうちまとまりの良いもの8ヵ所をHF－1～8として扱った。HF－1は覆土中の窪みP－51のそばで確認されたもので、薄く不明瞭であるが断面観察からその場で焚かれた可能性の強いものである。残りのHF－2～8は住居廃絶後の窪地に投げ込まれた2次堆積の焼土である。HF－3を除いて12～17層中で検出された。

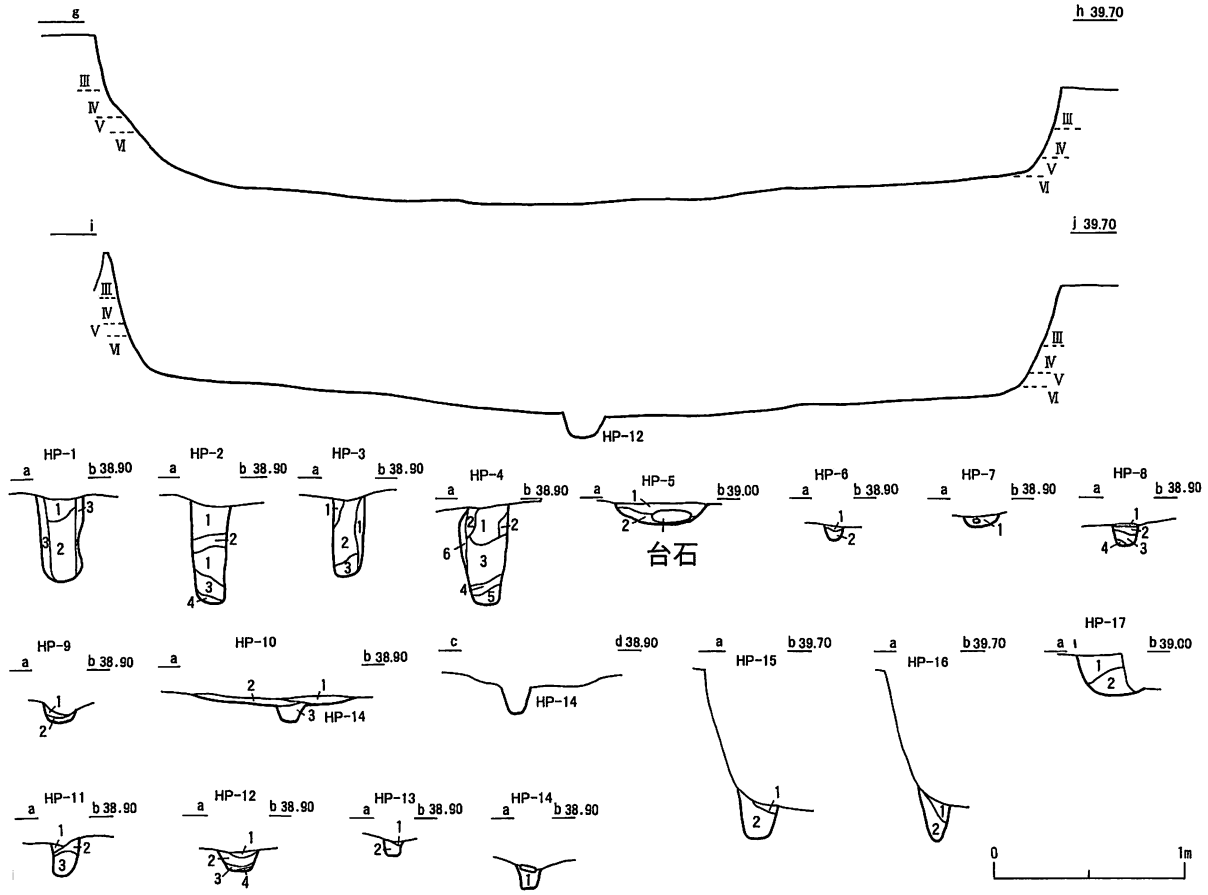
付属ピット・柱穴　主柱穴は4基（HP－1～4）を検出した。深さ50cm前後で中央部に正方形に配置されている。付属するピットは12ヵ所である。このうち、大きめのHP－5は円形の浅い皿状のピットで台石が置かれていた（図Ⅳ－117、図版33－3）。主柱穴に囲まれた部分には小さいピット8ヵ所（HP－6～9、11～14）とくぼみ1ヵ所（HP－10）がある。

このうち、HP－10は浅いくぼみで壙底面には砂が散在していた。HP－6・8・11・13・14はほ

H－15



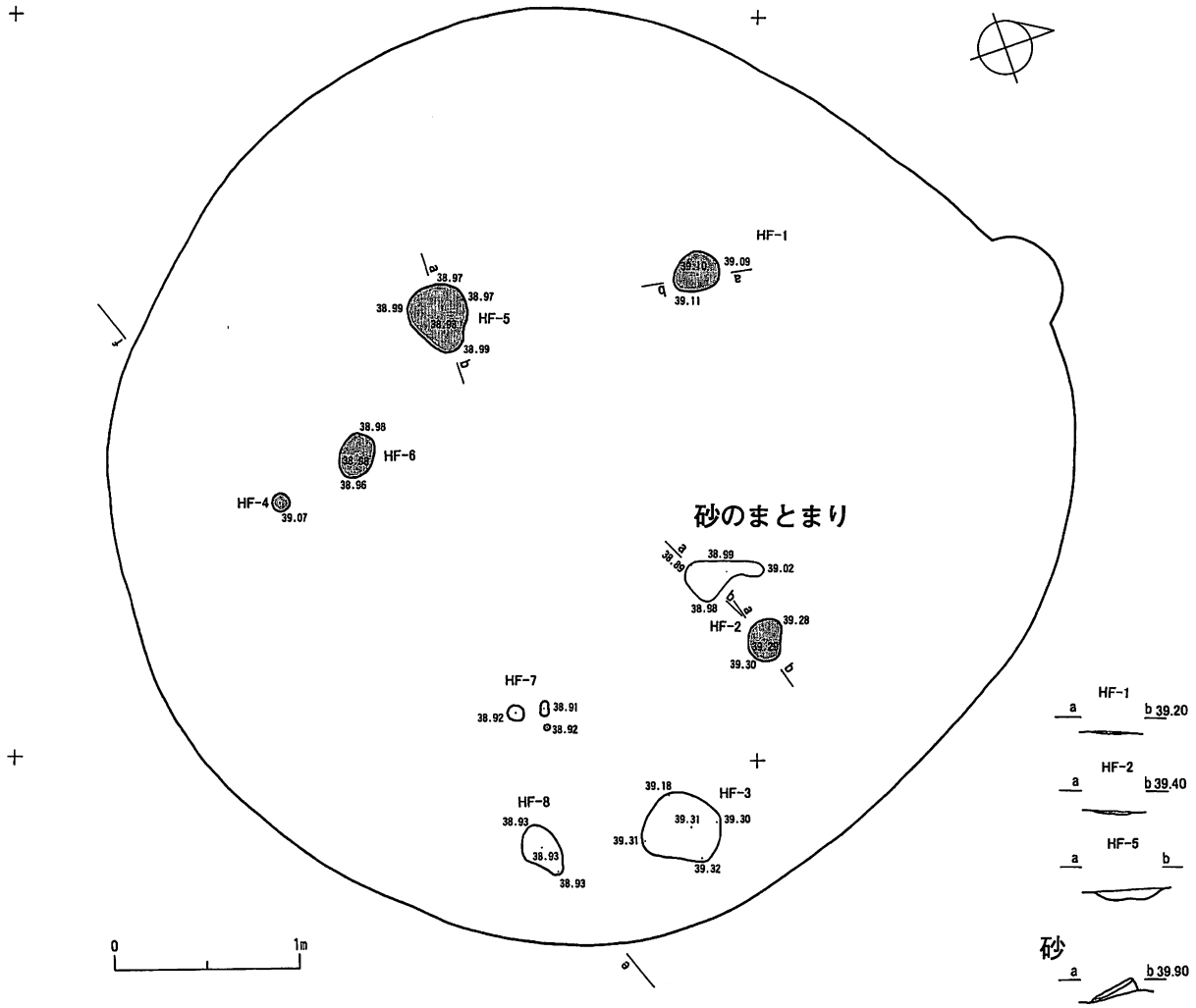
図Ⅳ－117　H－15(1)



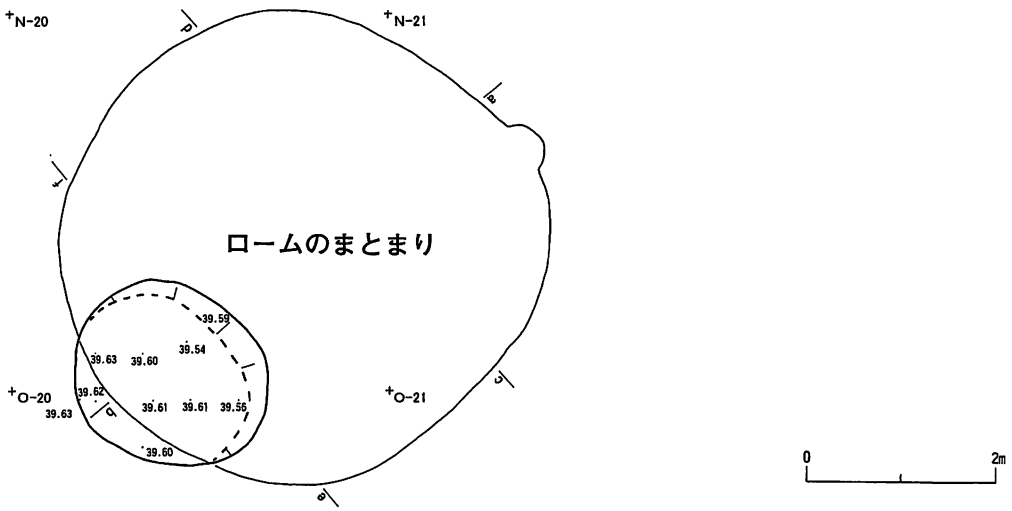
1 黒色土(7.5YR2/1) 粘性なし しまり弱 粒子細かく、乾燥するとクラックが入る (Ⅲ)
2 黒色土(7.5YR1.7/1) 粘性やや弱 しまり弱 1よりも明るい部分あり (Ⅲ)
3 明褐色土(7.5YR5/6) 粘性強 しまり強 ほぼ純粋なローム質土 (Ⅵ)
4 黒褐色土(7.5YR3/2) 粘性やや強 しまりやや強 焼土粒が混じる 3が流れたもの (Ⅲ+Ⅵ)
5 極暗褐色土(7.5YR2/3) 粘性やや強 しまり弱 少量のロームと炭化物が混じる (Ⅲ+Ⅵ)>>Ⅳ
6 黒褐色土(10YR2/2) 粘性やや強 しまりやや強 5より多くのロームが混じる (Ⅲ+Ⅵ)Ⅳ
7 黒色土(7.5YR2/1) 粘性弱 しまりやや強 粒子細かい (Ⅲ)
8 黒褐色土(7.5YR3/2) 粘性やや強 しまり弱　4に似る ロームが少量混じる (Ⅲ+Ⅵ)>Ⅵ
9 黒褐色土(7.5YR2/2) 粘性やや強 しまり弱 5に似る 8よりも少量のロームが混じる (Ⅲ+Ⅵ)>Ⅳ
10 黒褐色土(7.5YR2/2) 粘性弱 しまり弱 9に似る (Ⅲ+Ⅵ)>Ⅳ
11 黒褐色土(7.5YR2/2) 粘性弱 しまりなし 9よりもより暗い Ⅲ>>Ⅳ
12 褐色土(7.5YR4/4) 粘性やや強 しまり弱 黒褐色土が混じる Ⅵ+Ⅳ
12b 褐色土(7.5YR4/6) 粘性やや強 しまり強 ほぼ純粋なローム質土 Ⅵ
13 暗褐色土(10YR3/3) 粘性やや強 しまりやや強 ロームブロックが混じる Ⅵ+Ⅳ
14 暗褐色土(10YR3/3) 粘性やや強 しまり強 13より多くのロームブロックが混じる Ⅵ>Ⅳ
15 黒褐色土(7.5YR3/1) 粘性やや強 しまりやや弱 ロームがごく少量混じる (Ⅳ+Ⅲ)>Ⅵ
16 暗褐色土(10YR3/3) 粘性やや強 しまりやや強 ロームブロックが多く混じる Ⅵ>(Ⅵ+Ⅴ)
17 暗褐色土(10YR3/4) 粘性やや強 しまりやや弱 少量のロームブロックが混じる Ⅳ>Ⅵ
18 黒褐色土(10YR2/2) 粘性なし しまり弱 Ⅲ

HP－1　1 にぶい黄褐色土(10YR4/3) しまりやや弱 ロームブロックが少量混じる
2 暗褐色土(10YR3/4) しまり弱 ボソボソでロームブロックが混じる
3 褐色土(10YR4/6) 粘性弱 しまり弱 黒色土がごく少量混じる 掘り方か
HP－2　1 暗褐色土(10YR3/4) 粘性弱 しまり弱 ボソボソでロームブロックが混じる
2 暗褐色土(10YR3/3) 粘性弱 しまり弱 ボソボソ
3 褐色土(10YR4/6) 粘性強 しまり強
4 褐色土(10YR4/4) 粘性強 しまり強 ボソボソ
HP－3　1 黄褐色土(10YR5/8) 粘性強 しまり強 黒色土が少量混じる
2 暗褐色土(10YR3/3) 粘性弱 しまり弱 ボソボソでロームが混じる
3 にぶい黄褐色土(10YR4/3) しまり弱 ボソボソでロームブロックが多く混じる
HP－4　1 黒褐色土(10YR2/2) 粘性弱 しまり弱 ロームが混じる
2 褐色土(10YR4/4) 粘性強 しまり弱 ボール状となったロームに黒色土が少量混じる
3 にぶい黄褐色土(10YR4/3) 粘性やや強 しまり弱 ボソボソ
4 暗褐色土(10YR3/3) 粘性やや強 しまり弱
5 黄褐色土(10YR5/6) 粘性やや強 しまりやや強 ボソボソ 灰黄褐色土(10YR4/2)が混じる
6 黄褐色土(10YR5/6) 粘性強 しまり強
HP－5　1 黒褐色土(10YR2/3) 粘性やや強 しまり弱 ロームブロックが混じる
2 黒褐色土(10YR2/2) 粘性なし しまりなし
HP－6　1 暗オリーブ褐色砂(2.5Y3/3) 砂＋ローム
2 オリーブ黒色砂(5YR3/1) しまり強
HP－7　1 暗褐色土(7.5YR3/4) 粘性やや強 しまり弱 ロームブロックが混じる
HP－8　1 黒褐色土(10YR3/1) 粘性やや強 しまり弱
2 褐色土(10YR4/6) 粘性強 しまり強 蓋として機能
3 黒色砂(2.5Y2/1) 砂＋ローム
4 黒色砂(7.5Y2/1) しまり強
HP－9　1 褐色土(10YR4/6) 粘性強 しまり強
2 黒色土(7.5YR1.7/1) 粘性弱 しまり弱 ネチョネチョで湿り気あり
HP－10　1 にぶい黄褐色土(10YR4/3) 粘性強 しまり強 暗褐色土が混じる
2 暗褐色土(7.5YR3/3) 粘性強 しまり強 ロームブロックと炭化物が混じる
3 オリーブ黒色砂(7.5Y3/1) しまり強
HP－11　1 褐色土(10YR4/4) 粘性強
2 暗オリーブ褐色砂(2.5Y3/3) しまり弱
3 オリーブ黒色砂(5Y3/2) しまり強
HP－12　1 褐色土(10YR4/6) しまり強
2 暗褐色土(10YR3/3) 粘性強 しまり弱
3 褐色土(10YR4/6) 粘性強 しまり強
4 黒色土(7.5YR1.7/1) 粘性弱 しまり弱 ネチョネチョで湿り気あり
HP－13　1 褐色土(10YR4/6) しまり強
2 オリーブ黒色砂(5Y3/2) しまり強
HP－14　1 オリーブ黒色砂(5Y3/2) しまり強
HP－15　1 褐色土(10YR4/6) 粘性強 しまり強
2 暗褐色土(10YR3/4) 粘性やや強 しまり弱 ボソボソでロームブロックが少量混じる
HP－16　1 褐色土(10YR4/6) 粘性強 しまり強
2 暗褐色土(10YR3/3) 粘性弱 しまり弱 ボソボソ
HP－17　1 黒褐色土(10YR2/2) 粘性弱 しまり弱
2 暗褐色土(10YR3/4) 粘性強 しまり弱

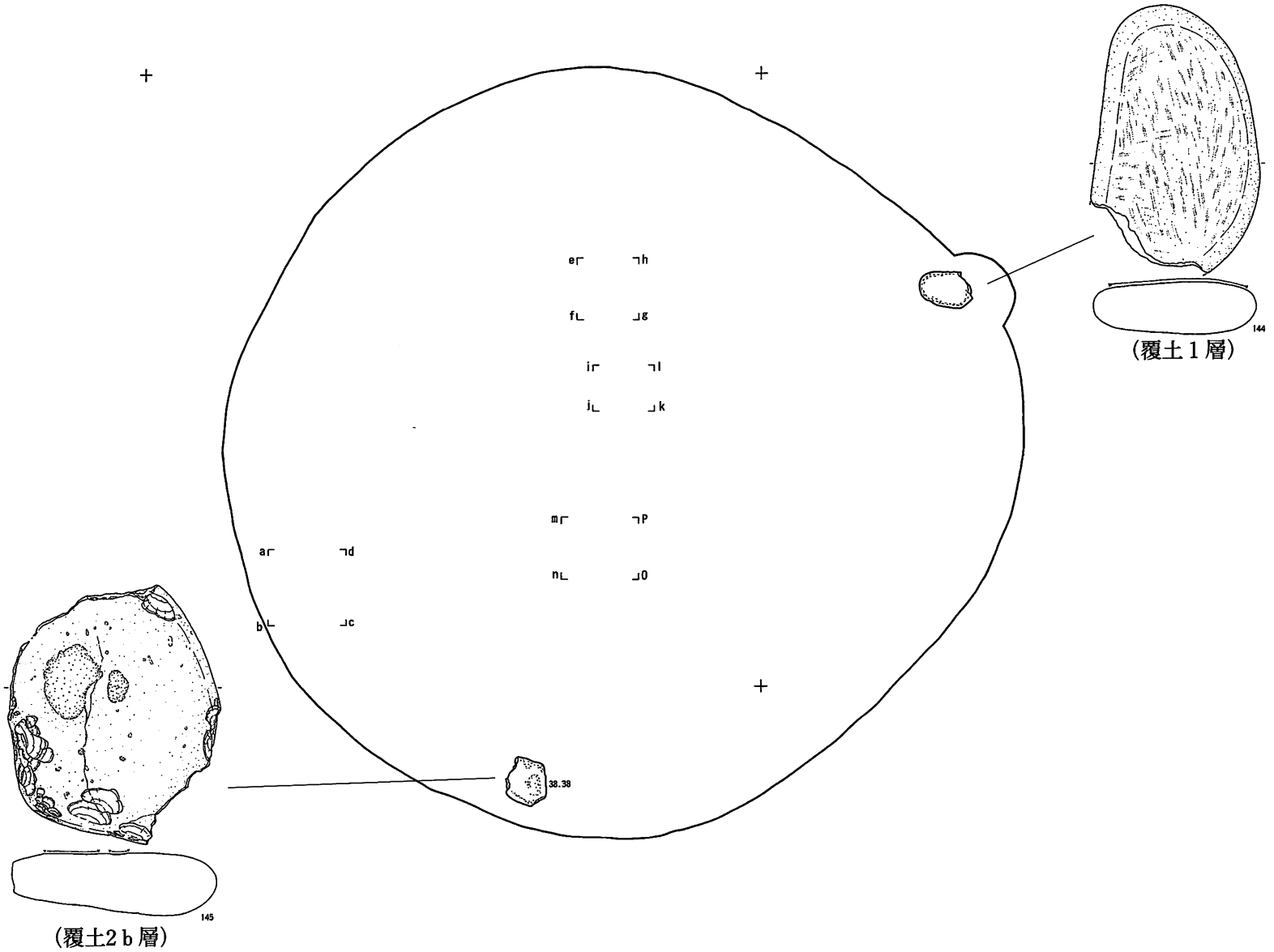
図Ⅳ－118　H－15(2)



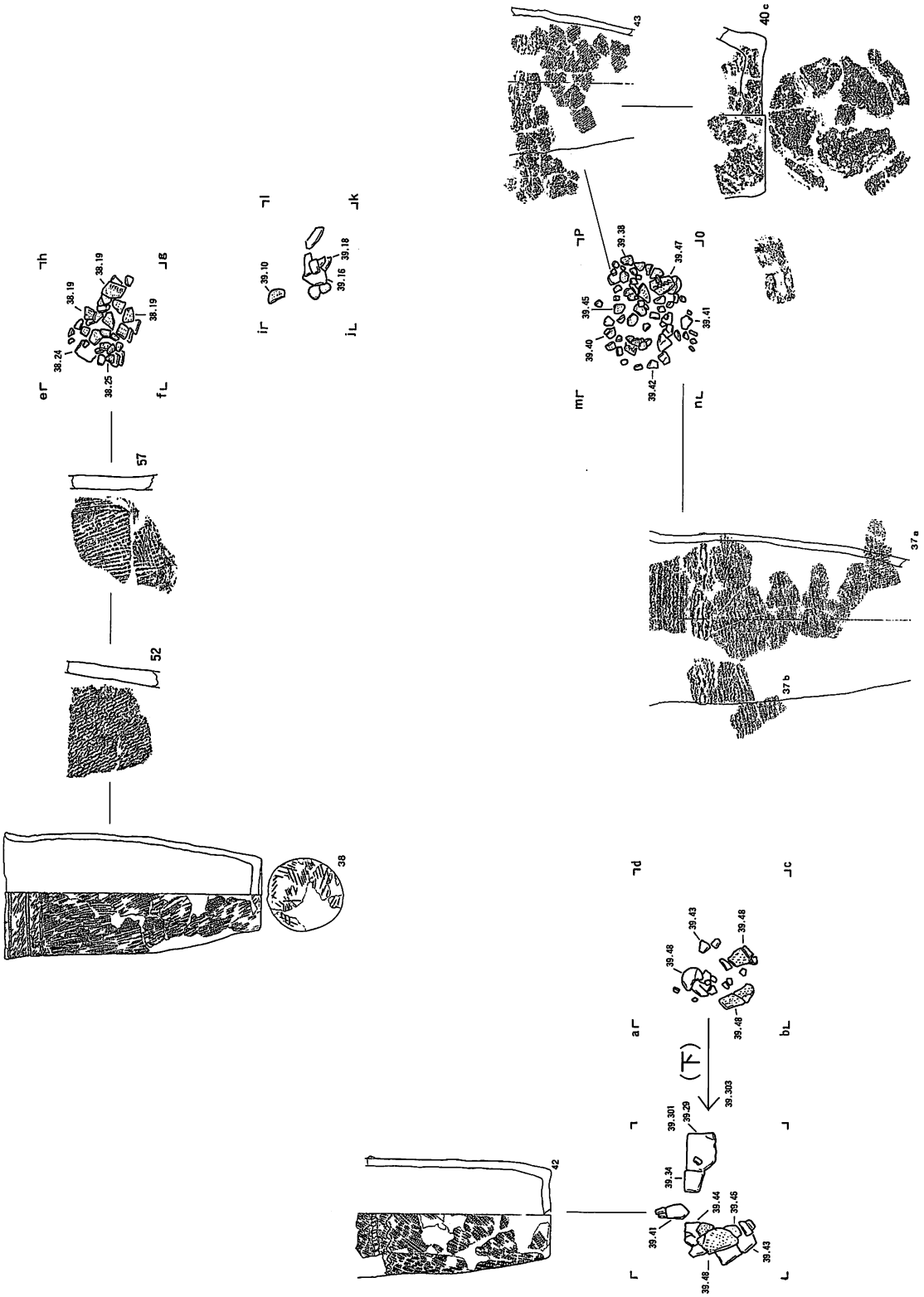
HF－1　1 暗赤褐色土(5YR3/4) 粘性やや強 しまり強 焼土 境界は漸移的でこの場で焚かれた焼土か フクド3(覆土12層中) P-51と関連するかと思われる
HF－2　1 黒褐色土(5YR2/2) しまり弱 焼土 暗赤褐色(5YR3/4)焼土粒がまばらに混じる フクド3層上位 2次堆積
HF－3　1 暗赤褐色土(5YR3/6) 厚さ最大3cm まばらな焼土のまとまり フクド2b中 2次堆積
HF－4　1 暗赤褐色土(5YR3/2) 厚さ最大1.5cm 最大径10mm程のにぶい赤褐色(5YR3/2)の焼土粒が混じる フクド3上位 2次堆積
HF－5　1 にぶい赤褐色土(5YR4/4) しまり弱 焼土 黒色土が混じり境界明瞭 フクド3層中 2次堆積
HF－6　1 暗赤褐色土(5YR3/4) しまり弱 厚さ最大1cm弱 径10mm程の赤褐色土(5YR4/8)焼土粒が混じる フクド3上位 2次堆積
HF－7　1 暗赤褐色土(5YR3/6) 粘性やや強 厚さ2cm 周辺に散在 フクド3中 2次堆積
HF－8　1 にぶい赤褐色土(5YR4/4) 黒色土が混じる 厚さ2cm 床面近く 2次堆積



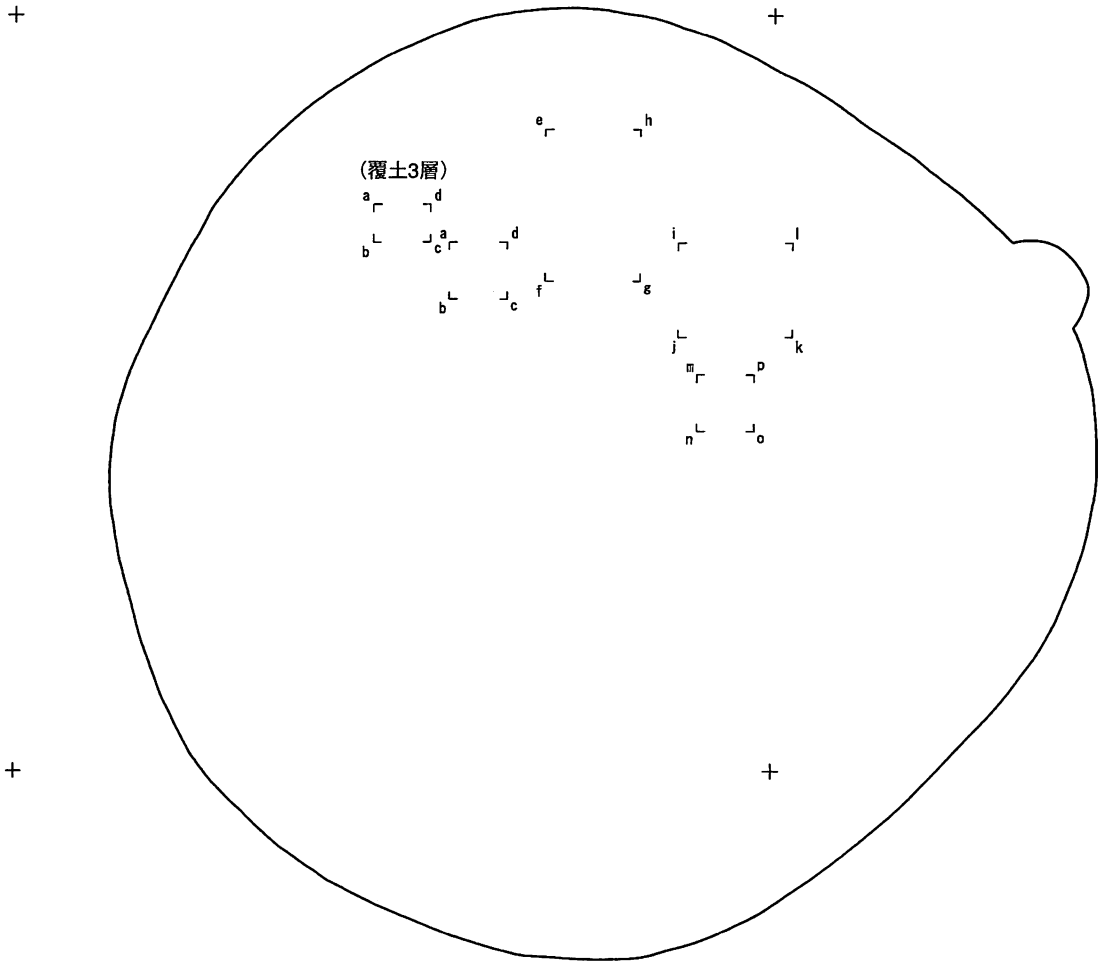
図Ⅳ－119　Ｈ－15覆土中検出の焼土、砂と覆土３層（ローム）検出状況

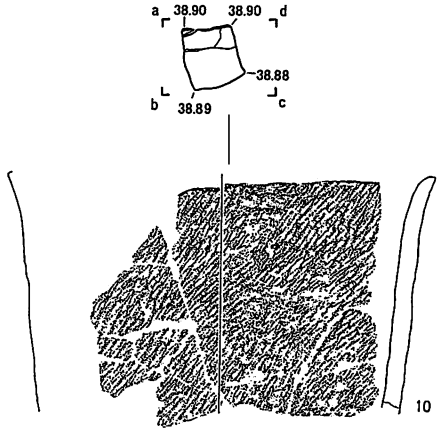


図Ⅳ－120　Ｈ－15覆土１層・２ｂ層石皿・台石出土状況、覆土２ｂ層遺物出土状況図の位置



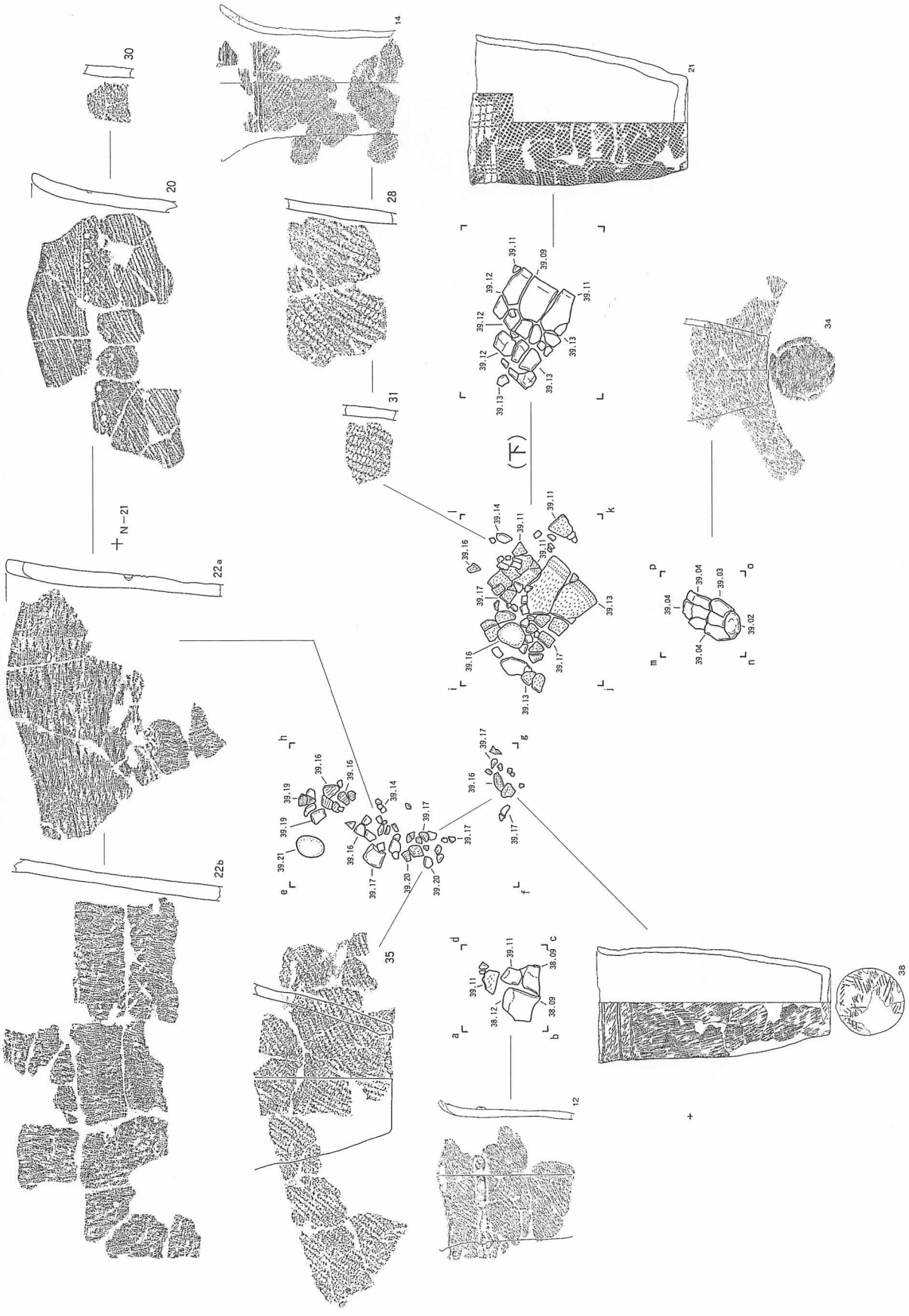
図Ⅳ－121　Ｈ－15覆土２ｂ層遺物出土状況



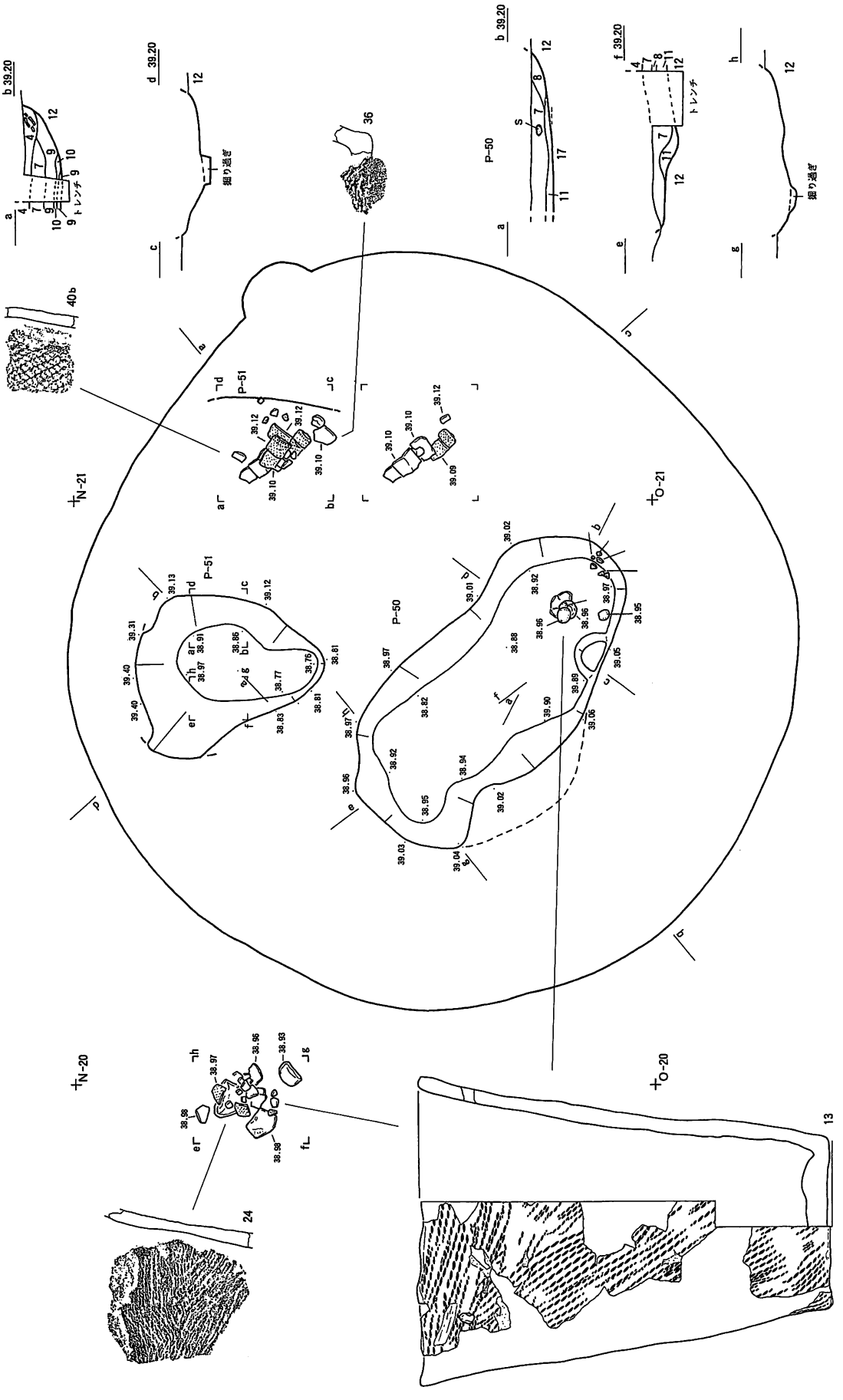


(覆土３層)

図Ⅳ－122　Ｈ－15覆土３層遺物出土状況、２ｃ層遺物出土状況図の位置



図Ⅳ−123　H−15覆土２ｃ層遺物出土状況



図Ⅳ－124　覆土中検出のＰ－50・51と遺物出土状況

ぼ純粋な砂が充満していたもので（図版33－４）、ＨＰ－14を除き壙口部には硬くしまったロームが見られ、蓋の役割を果たしていると考えられる。ＨＰ－14では壙口部の礫が同様の機能を果たしていたのであろう。これらの砂については第Ⅵ章５で詳しく触れている。ＨＰ－９・12は壙底に粘性の強い、ねっとりとした黒色腐植土が見られたものである。これらはいずれも、中央部の窪みにあるもので住居内における何らかの作業や行為に関連するものと推測される。

残るＨＰ－15～17は壁際に位置する（図版33－５）。ＨＰ－15・16は対になるもので、覆土上部はロームで硬くしまっている。主柱穴を見通す中央に位置すること、直立すること、ロームが充填された部分があることから出入口に関連するものと想定される。ＨＰ－17の性格は不明である。

遺物出土状況　遺物の取り上げは覆土の７層の大別に準拠して行った。よって覆土１層を取り上げの「１層」、覆土２層を「２層」、覆土３層を「２ａ層」、覆土４～６（８～10）層を「２ｂ層」、覆土７（11）層を「２ｃ層」、覆土12～17層を「３層」、覆土18層を「４層」として取り上げた。

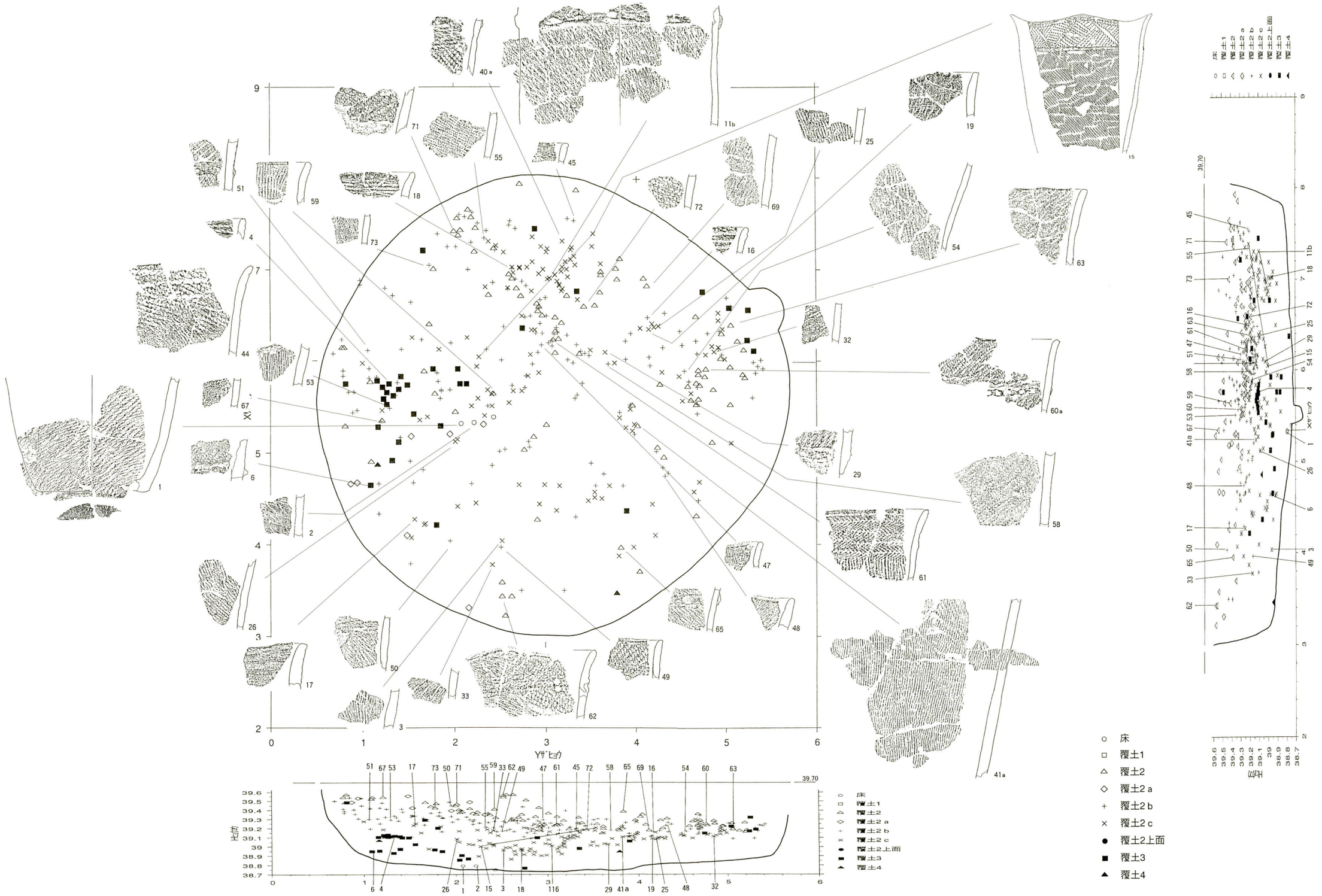
出土点数は取り上げの１層から土器313点・石器など693点、２層から土器357点・石器など1,394点、２ａ層から土器26点・石器など234点、２ｂ層から土器985点・石器など2,033点、２ｃ層から土器1,002点・石器など1,389点、３層から土器107点・石器など594点、４層から土器２点・石器など110点、床面から土器６点・石器など250点、付属ピット・柱穴から石器など198点である。総出土点数は土器2,798点・石器など6,895点の合計9,693点である。フレイクの比率は56.7％で、土器28.9％、礫・礫片11.6％と続き、Ｈ－１と異なりフレイクの出土比率が高い。また、層位別では覆土２ｂ層が31.1％、２ｃ層が24.7％、２層が18.1％、１層が10.4％と続く。ロームが主体となる２ａ層は2.7％、３層は7.2％で、層厚の厚さに比して遺物点数はかなり少ない。

遺物の多くは窪地に投げ込まれたかのように出土し、層位的に土器の変遷が観察できる。（藤原）

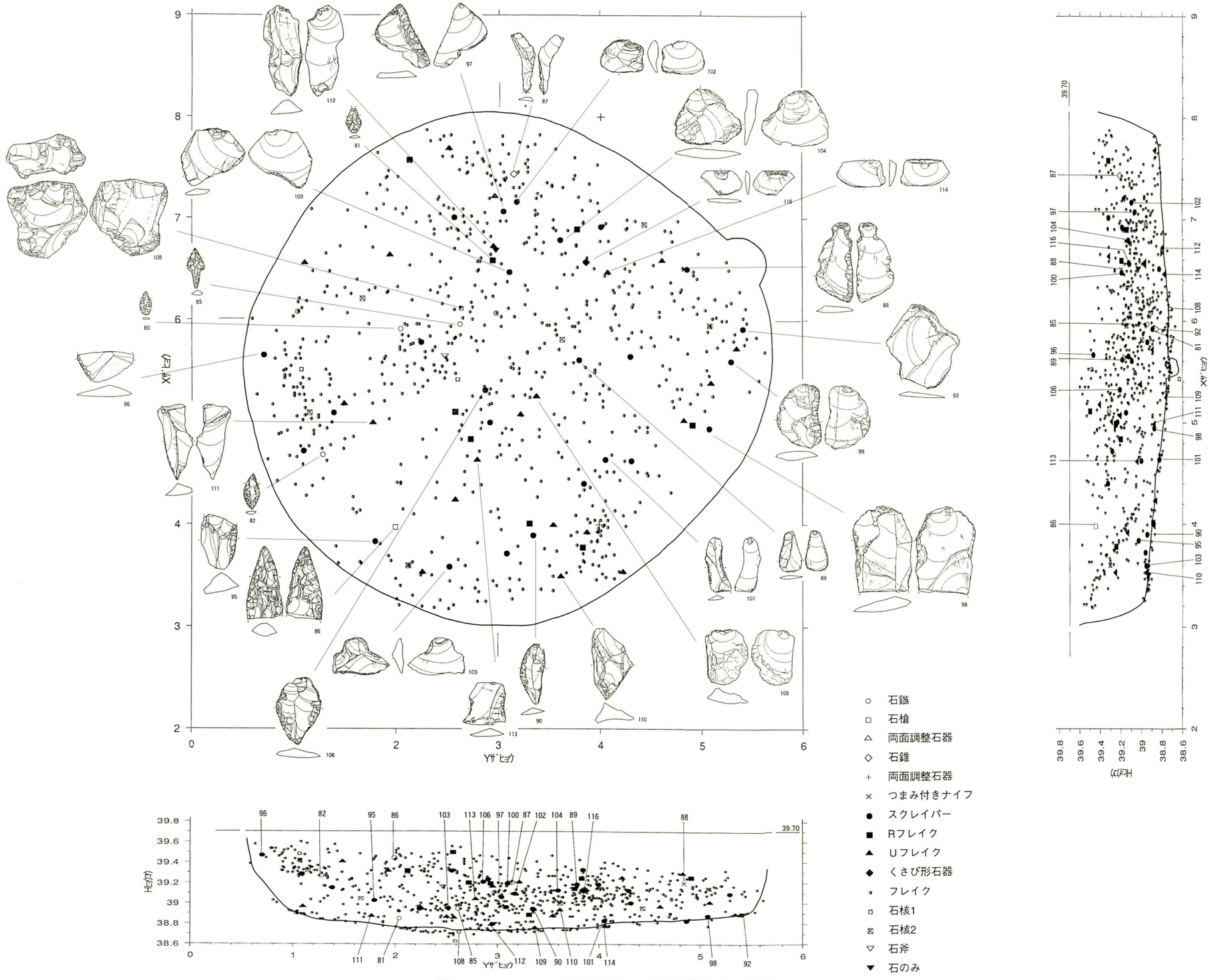
遺　物

（土器）土器は識別されたⅡ群ｂ類土器79点を掲載した。主な出土層位は、１・２が床面、３～11が覆土２ｃ～３層、12～36と38～41が覆土２ｃ層、37・42～58が覆土２ｂ層、59～74が覆土２層、75～79が覆土１層である。この中で覆土２ｂ・２ｃ・３層の遺物は量的に多く、他のＨ－１・３などの遺構と接合或いは同一個体のものが出土する場合が多い。なお、１～79の胎土には繊維が混入する。

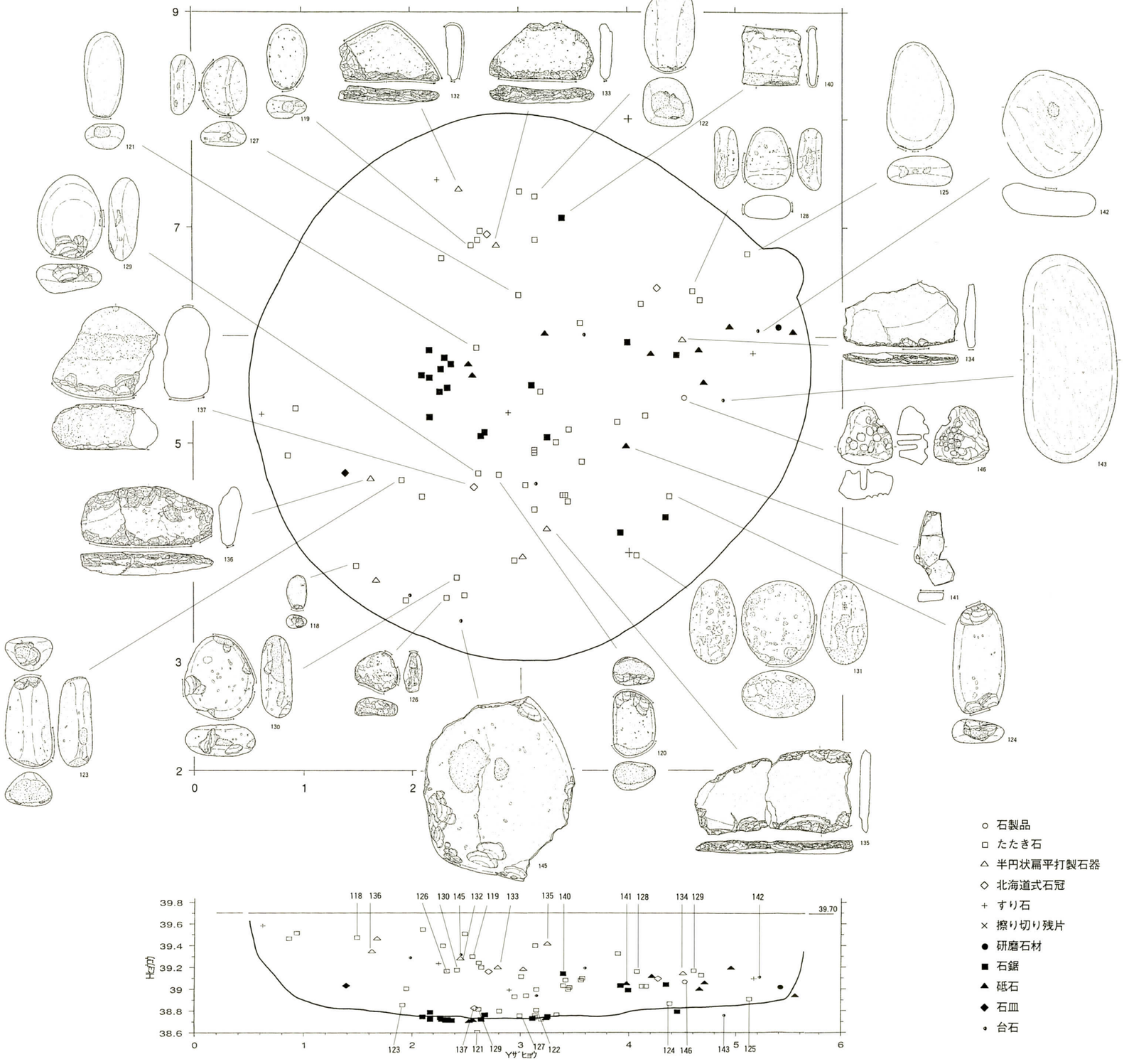
１はＬＬＲの撚り戻しが施された胴下半部である。２は細いＲの網目状撚糸文の施された胴部である。３はＲの撚糸文が密に施された胴部で、Ｈ－３の覆土３層から出土したＨ－３－７と同一個体と考えられる。４は無地の口縁部にＬＲの縄線文２条が施された口縁部の小片である。５は弱い波状を呈する口縁を有する器壁の厚い土器である。口唇の断面は角形で、口縁部にはＬＲの縄線文を使った鋸歯状の文様帯を持つ。同じ個体の土器がＨ－１の覆土３層出土している。６はＬＲの斜行縄文の地紋と篦状の道具で斜めの刻みを連続して施した粘土紐が貼付される口縁部近くの胴部である。７ａ・ｂは主体がＨ－１覆土３層から出土したものである（Ｈ－１－44ａ・ｂ）。本遺構からは覆土３層で未接合の破片２点が出土している。ＬＲの斜行縄文の地紋を胴部の上位と下位で施文の方向を変化させた土器である。８ａ・ｂは周辺の包含層出土、８ｃはＨ－１の覆土３層とＭ－１、包含層から出土したものと接合したものである。網目状のＲの撚糸文が施される土器で、底部が上げ底になっている。９は主体がＨ－１覆土２ｂ層から出土したものである（Ｈ－１－69）。本遺構からは、覆土３層で未接合の破片が２点出土している。器壁の厚い口縁部近くの胴部の破片で、指頭状の道具で刻みの施された粘土紐の貼付を境に、上位はＬＲの斜行縄文、下位にはＲの撚糸文が施されている。撚糸文は下位になるほど施文密度が粗になっている。10はＬＬＲの撚り戻しが施された平縁の口縁部である。胎土中には白色の岩片を多く含む。11ａ・ｂはＲの撚糸文を網状に施したもので、さらに口縁部文様帯

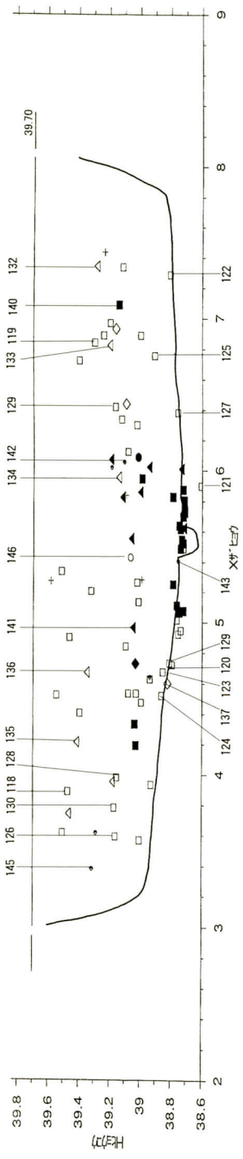


図Ⅳ－125　H－15土器出土状況



図Ⅳ－126　Ｈ－15剥片石器群、磨製石器群出土状況





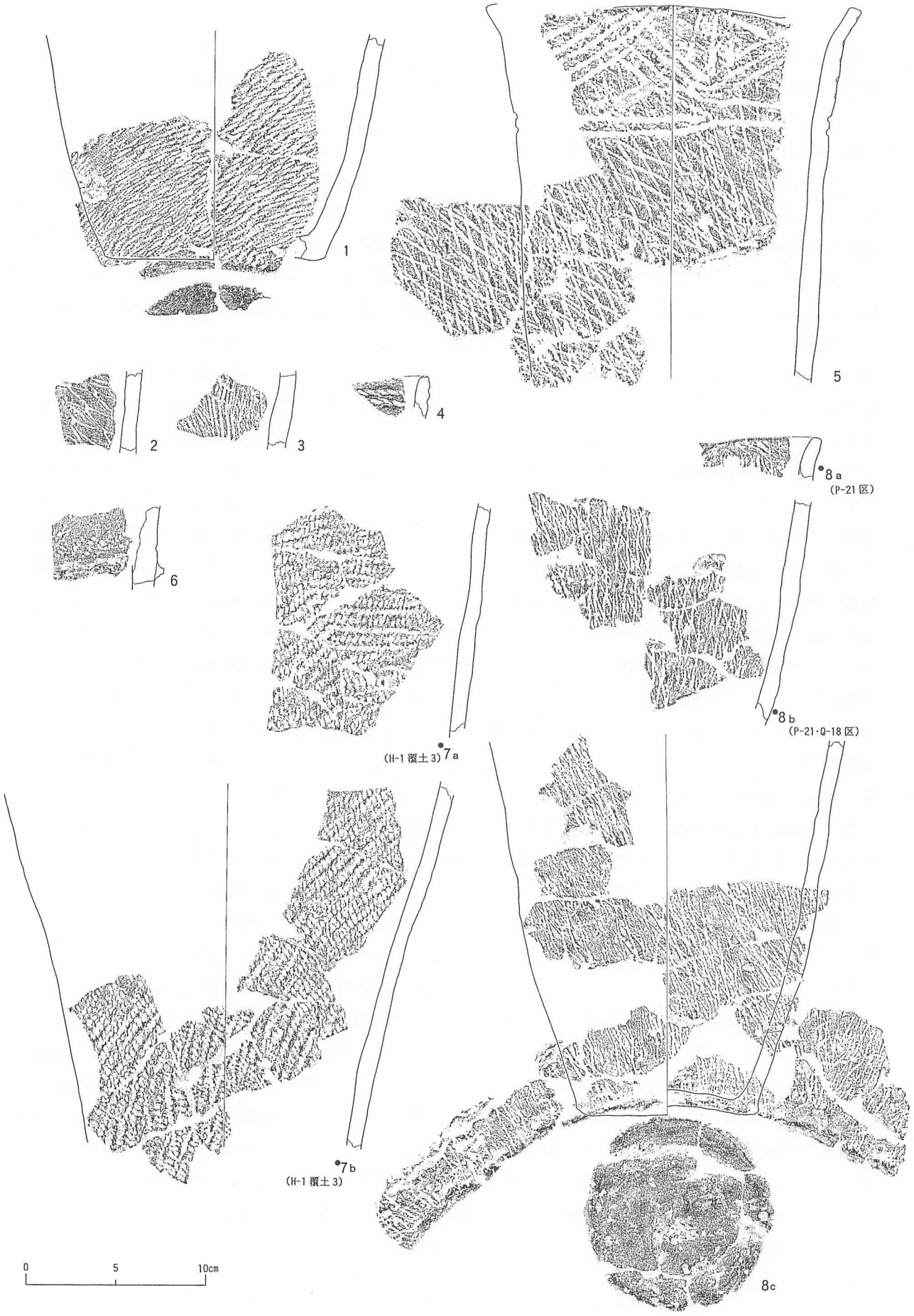
図Ⅳ－127　H－15礫石器群出土状況

に絡条体圧痕文が施され、胴部との境界には棒状の工具で連続刺突文の施された厚みのない粘土紐が貼付けられている。胎土には海綿骨針が混入する。11ａはＨ－１の覆土２層から出土している（Ｈ－１－73ａ）。

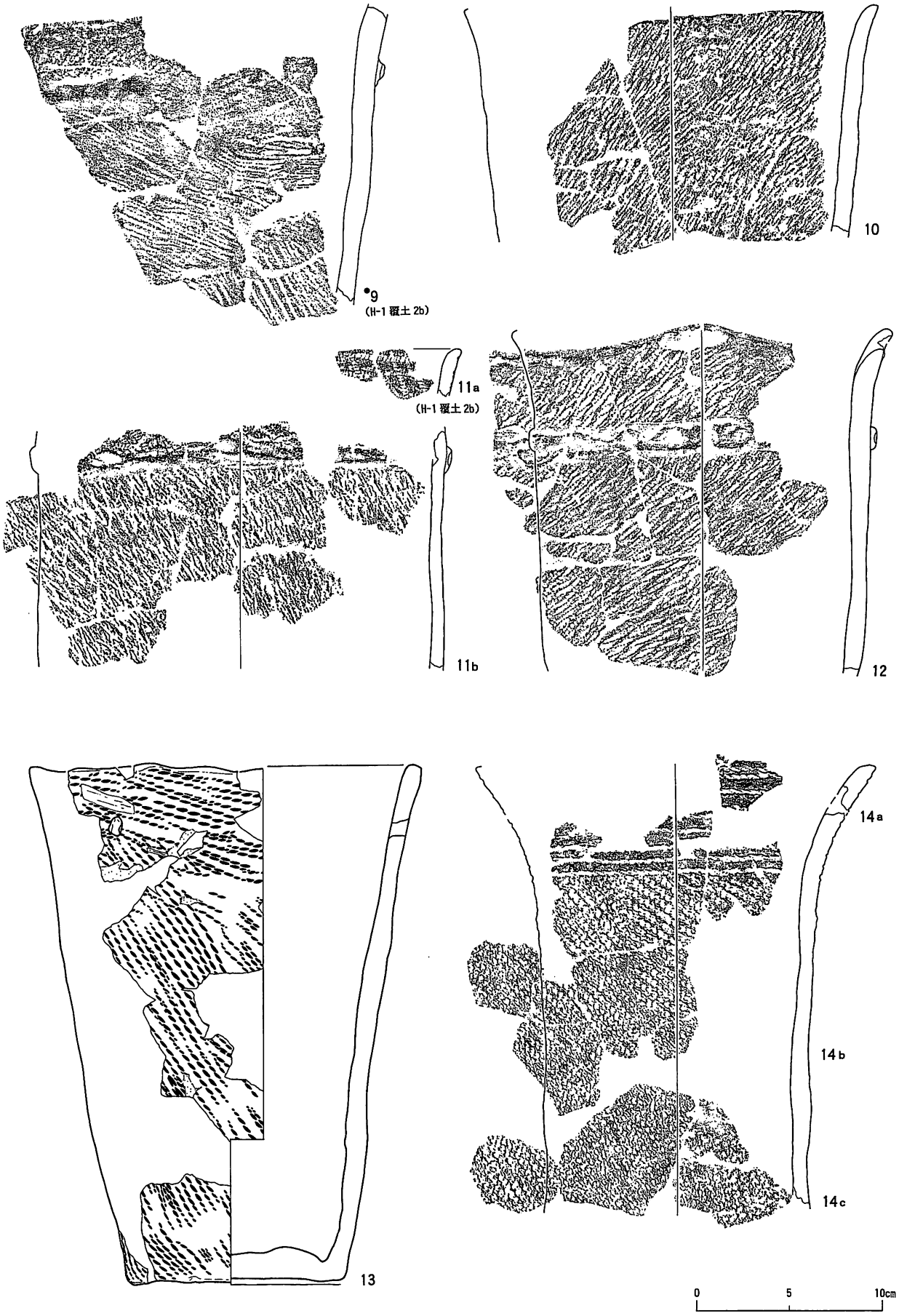
12は低く緩やかな山形突起を有する器壁の厚い口縁～胴部である。地紋はＬＬＲの撚り戻しで、その上には指頭状の施文具で刻みの施された幅の広い粘土紐が貼付けられている。内面には研磨が施される。13は太いＲの撚糸文が全面に施された器壁の厚い平縁の深鉢形土器である。口縁部の器面には施文方向を横位にしたものが施され、底部は僅かに上げ底気味である。14ａ～ｃは口縁部が外側に広がる深鉢形土器の上半部である。無文の面にＬＲの縄線文が８条以上巡らされた口縁部は、恐らく平縁を呈すると考えられるもので、胴部にはＲＬＲの三段複節の縄文が施されている。主体部は本遺構からの出土であるが、同じ個体の土器がＨ－３の覆土１層とＰ－14の覆土１層からも出土している。15は主体がＨ－１覆土２ｂ・３層から出土したものである（Ｈ－１－30）。本遺構からは、覆土２ｃ層で未接合の破片が２点出土している。緩やかな山の波状を呈した口縁を持つ大型深鉢形土器で、わずかに外に向かって開く口縁部と胴部の境には、太い棒状の施文具を使った刻みが施される、厚みのない粘土紐の貼付が横環している。口縁部文様帯にはＬＲの縄線文を用いた鋸歯的な幾何学模様が施され、胴部の地紋には比較的良く整ったＲＬの斜行縄文が施されている。口縁の波頂部は四箇所と推定される。16～19は口縁部である。16・17は無地に細いＲの撚糸を使う絡条体圧痕文が施されたもので、絡条体の撚糸は16が３条、17が５条である。18はＲの撚糸文を横位に施している。19はＬＲの斜行縄文が施されたものである。20は低く緩やかな山形突起を有する口縁部である。口縁部と胴部の地紋には同じＬＲの自縄自巻的縄文と考えられるものが施されており、頸部には上位にＲとＬとＲの三本の撚糸を束ねて押捺した文様、中位に径の小さな竹管状の施文具を使った連続刺突文、下位にはＲの撚糸からなる３条の綾絡文が施されている。なお、地紋に使われた原体の節は、前々段多条のそれに類似する。また、胎土には微量の海綿骨針が混入する。21は筒型を呈した平縁で器壁の厚い上げ底気味の深鉢形土器である。地紋はＬＲＬの三段複節で口縁部にはその上からＬＲの縄線文を横位と縦位に施文する構成の文様帯が作出されている。

22は単軸絡条体第２類かとみられる撚糸文を全面に施した口縁部と胴部で、低く緩やかな山が突起を有する口縁部には横位方向の施文が、胴部には縦位方向の施文がなされ、その境には太目の棒状工具の先端で横方向から刺した連続刺突文と２条の綾絡文が施されている。内面は良く研磨されており、胎土中には微量の海綿骨針が混入する。22ａは本遺構から、22ｂは包含層から出土したものである。一部はＨ－３の覆土１～２層からも出土している。23ａ～ｃは主体がＨ－８覆土と包含層から出土し接合したものである（Ｈ－８－４ａ～ｃ）。本遺構からは覆土２ｃ層で未接合の破片12点が出土している。底部の欠失した比較的大型の深鉢形土器で、平縁の口縁にはＬＲの縄線文を使って構成される文様帯を有し、胴部には単軸絡条体第６類とみられる複雑な構成の撚糸文が施されている。27は内面に顕著な研磨がなされている上げ底で大型の底部である。24～26はＲの撚糸文が密に施される胴部である。28・30～32・35はＬＲの斜行縄文が施されるもので、35の底部以外は全て胴部である。28は胎土には海綿骨針が混入する。29・33・34はＬＬＲの撚り戻しと考えられる地紋が施されるものである。29・33は胴部、34は底部でＰ－８の覆土２層出土の破片が接合している（Ｐ－８－５）。

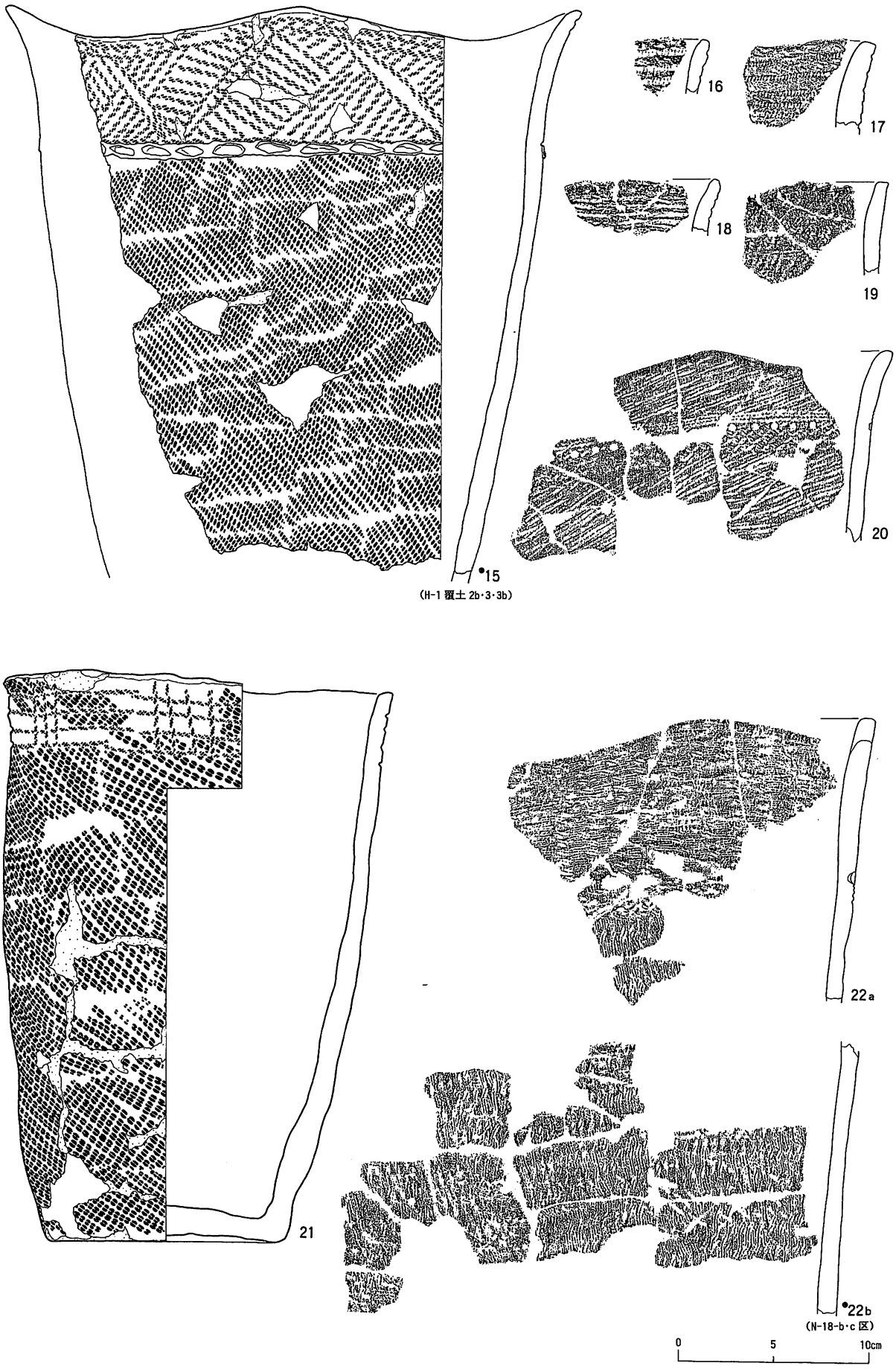
37ａ・ｂは低く緩やかな山形突起を口縁部に持つ比較的大型の深鉢形土器である。37ｂは包含層出土のもの。頸部に巡らされた連続刺突文の施される粘土紐の上位に器面には、無地の面に綾絡文と絡条体圧痕文で構成される文様帯が、下位の胴部には多軸絡条体と網目状撚糸文の地紋二種とやはり綾絡文が施されている。これらの文様には全てＲの撚糸が用いられている。36はＲの撚糸文が施される



図Ⅳ－128　Ｈ－15出土の土器(1)



図Ⅳ－129　H－15出土の土器(2)



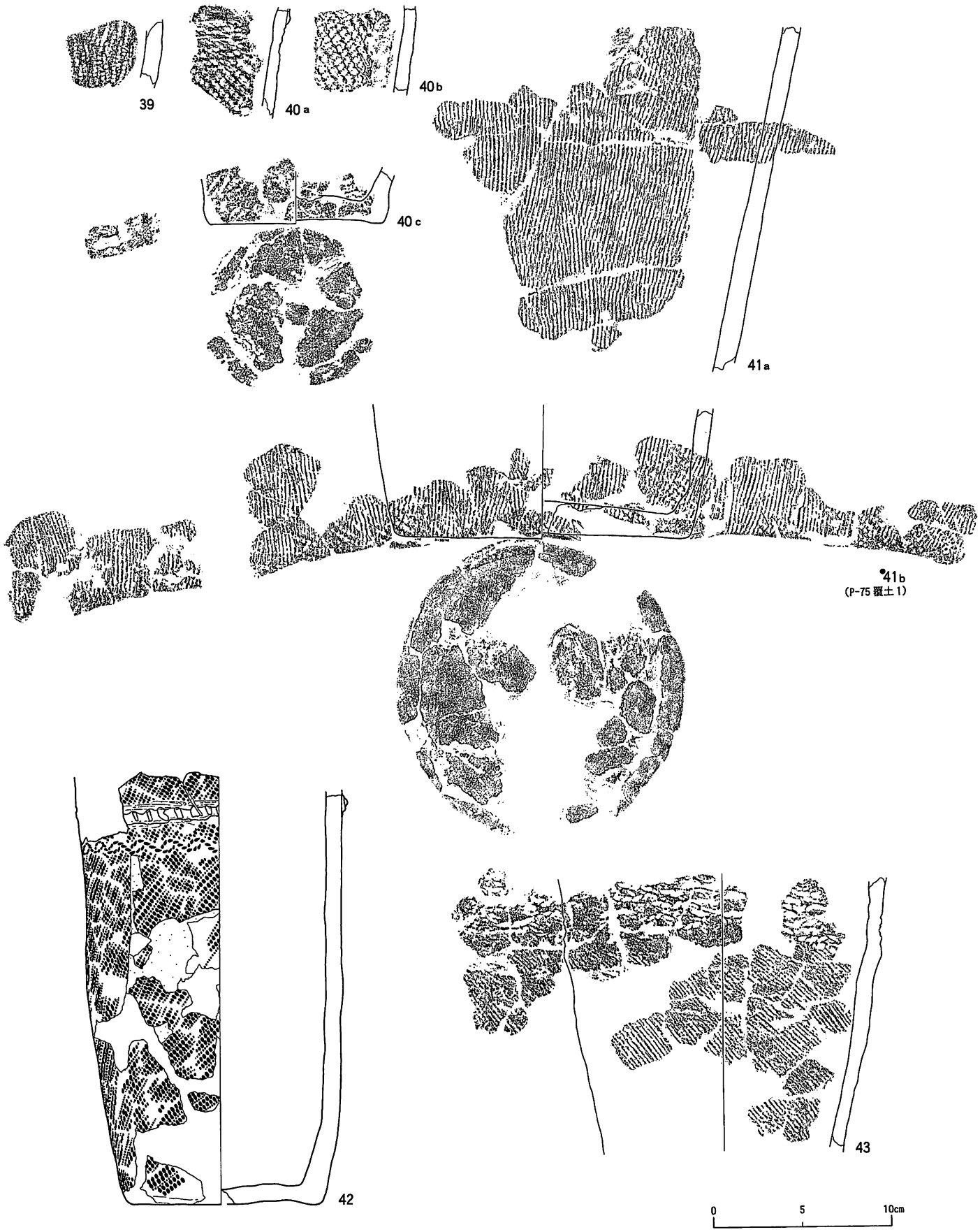
図Ⅳ－130　H－15出土の土器(3)



図Ⅳ－131　Ｈ－15出土の土器(4)



図Ⅳ－132　Ｈ－15出土の土器(5)



図Ⅳ－133　H－15出土の土器(6)

底部である。38はＬＲの自縄自巻的縄文が器面と底面に施された平縁で上げ底の深鉢形土器である。口縁部ではその地紋の施文方向を横位に変化させ、その上に撚りの異なる二本を束ねた撚糸の押捺を３条巡らせ文様帯としている。39はＲＬの自縄自巻的縄文の施された胴部である。40ａ～ｃはＲＬＲの三段複節が施された胴部と底部で、40ａの器面上端には指頭状の道具で上から刻みを施した粘土紐が貼付され、その直下の器面にはＲの撚糸を使った綾絡文も施されている。41ａ・ｂは胎土中に白色の岩片が混入する大型の深鉢形土器下半部である。このうち41ｂはＰ－75の覆土１層から出土したものである（Ｐ－75－41ｂ）。

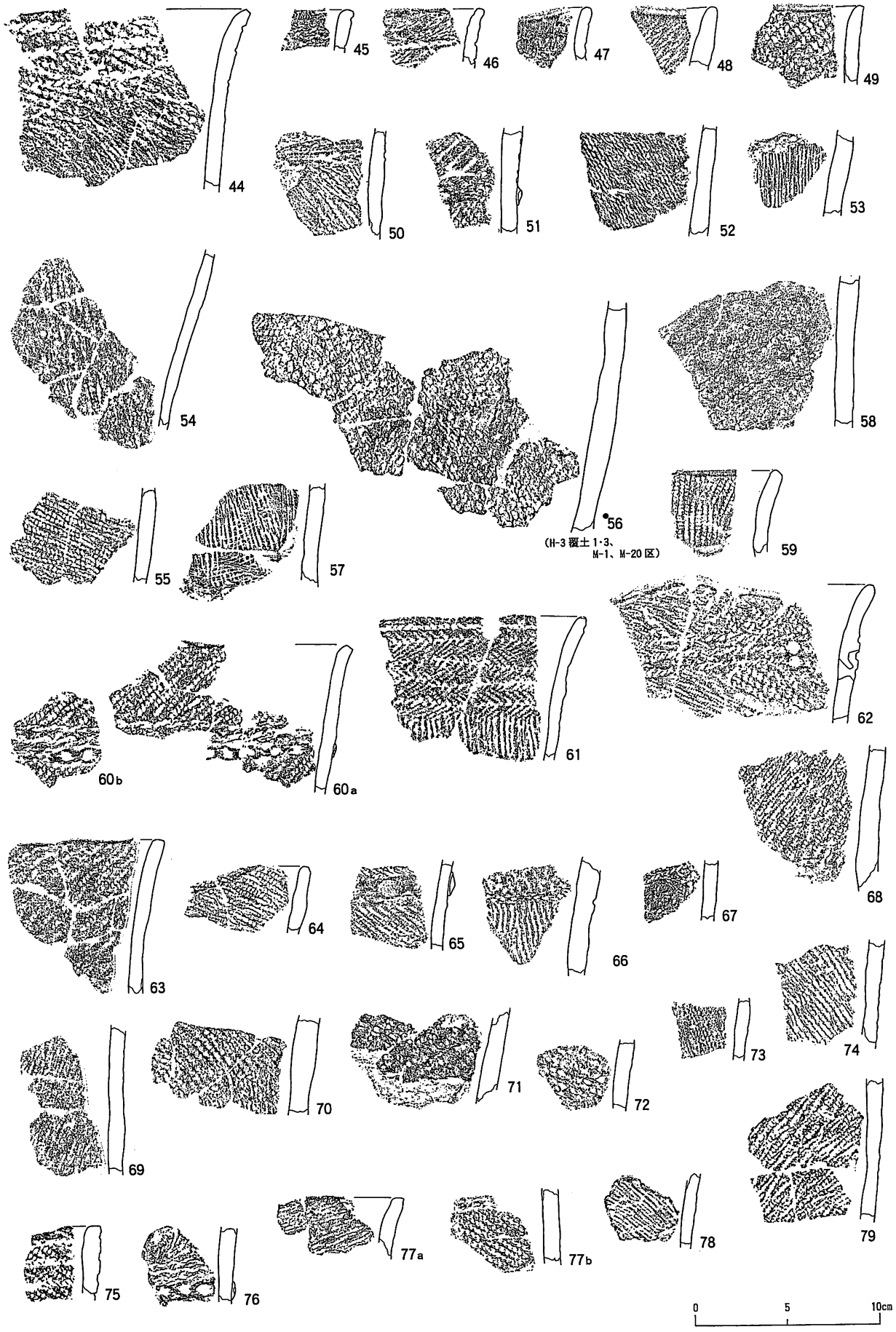
42は全面に整ったＬＲの斜行縄文が施される深鉢形土器である。口縁部は欠失するものの、残存部上端の器面には厚みの少ない粘土紐の貼付とその上に施された半截竹管状の施文具による刺突文が認められる。43は口縁部文様帯に太いＲの撚糸を使った綾絡文、その下位の胴部の器面に細いＲの撚糸文を密に施した土器で、胎土には海綿骨針が混入する。44はＲＬＲの三段複節の上にＲＬの縄線文を施した文様帯を有する口縁部で、胎土に微量の海綿骨針が入る。同じ個体の土器がＨ－10の覆土１層からも出土している。45～49は口縁部で、45は異なるＲの撚糸を用いた絡条体圧痕文と綾絡文、46はＲの撚糸文の上にＬＲの縄線文、47はＬＲの地紋の上にＬＲの縄線文、48はＬＬＲの撚り戻し、49はＬＲの斜行縄文が各施されている。46・47の胎土には微量の海綿骨針が含まれている。50～58は胴部である。50は器面の上位に貝殻条痕文、下位に細いＲの撚糸文が密に施されている。51は口縁部文様帯に細いＲの撚糸を使った絡条体圧痕文、胴部の地紋にＬＲの斜行縄文が各面に施文され、その境には指頭状の刻みの入る粘土紐が貼付されている。52・53・57はＲの撚糸文が密に施されたもの、54・55はＲＬの縄文、56はＲＬＲの三段複節、58はＬＲの斜行縄文が施されている。56はＨ－３覆土１・３層、Ｍ－１、包含層出土のものが接合したもの（Ｈ－３－９）。本遺構の覆土２ｂ層から未接合の破片が出土した。同じ個体の土器はＭ－２でも出土している。57の胎土には微量の海綿骨針が混入している。

59～64は覆土２層で出土した口縁部である。59・64はＲＬの縄文、63はＬＲの縄文が施されている。60ａ・ｂは地紋にＬＲの縄文、頸部に半截竹管状の施文による刺突文の加えられた粘土紐の貼り付けとＲの撚糸を使った綾絡文とが施されている。61は口縁部にＬＲの縄線文と結束第一種羽状縄文、胴部にＲの撚糸文が施されている。62は低く緩やかな山形突起を有するもので、地紋はＲＲＬの撚り戻しとＲＬＲの三段複節の２種類で、頸部にはＲＬの縄線文が３条巡らされている。

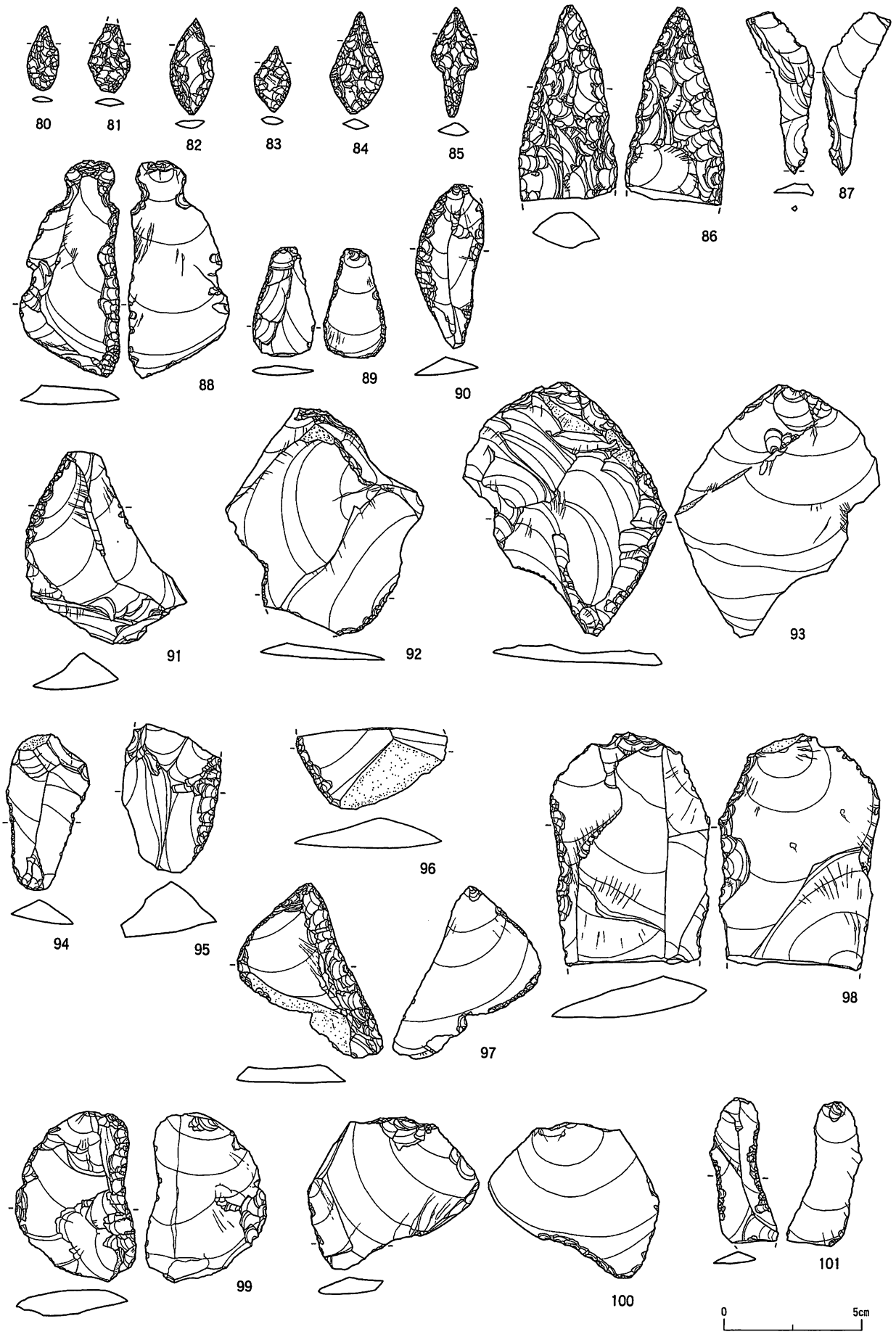
65～74は覆土２層で出土した胴部である。65は指頭状の施文具で刻みを施した幅広の粘土紐の貼付とその直下の器面に綾絡文が施されるもので、地紋はＬＲの自縄自巻的縄文と考えられる。66の器面には太いＬＲの縄線文の上位にＲＲＬの撚り戻し、下位にＲの撚糸文が施されている。67は無地の器面にＲの撚糸文が曲線を描くように施されている。68・69・71はＬＲの斜行縄文、72はＲＬＲの三段複節、73・74はＲの撚糸文が密に施されている。70は器面の上位にＲＬの斜行縄文、下位にＲの撚糸文が密に施される胴部である。

75～79は覆土１層出土のもので、75～77は口縁部、78・79は胴部である。75はＲＬの地紋の上に同じ原体で縄線文を施したものである。76にはＬＲの自縄自巻的縄文を施した上に、綾絡文と半截竹管状の施文具を使った刺突文を施した粘土紐の貼付けが備わっている。77は口縁部にＬＲの自縄自巻的縄文が施され、胴部にＲＬＲの三段複節が施されている。78はＲの撚糸文が密に施されている胴部で、胎土には海綿骨針が混入する。79はＬＲの斜行縄文が施された胴部である。　（皆川）

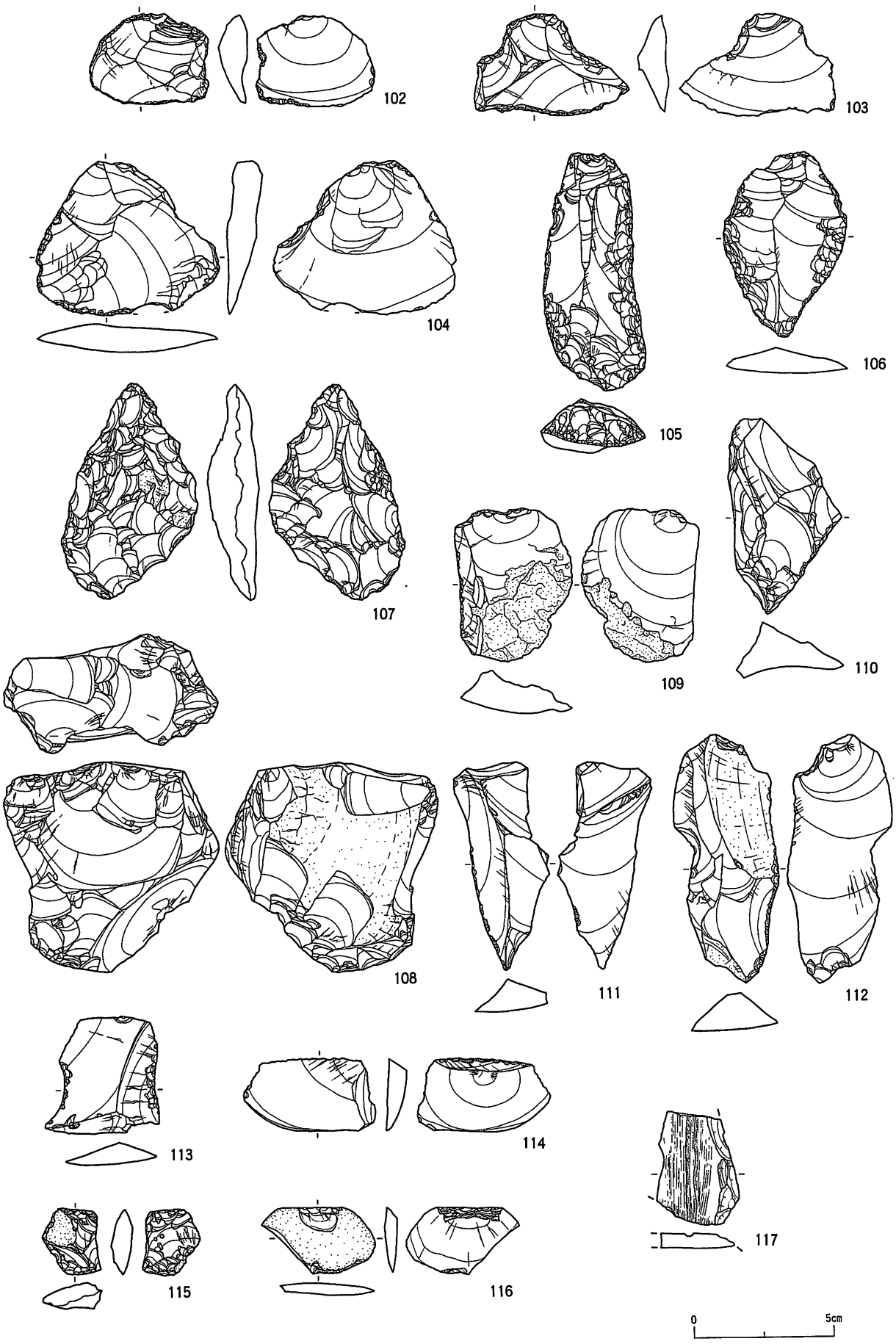
（石器） 80～84は木葉形の無茎鏃（ＩＡ４）。80・82・83は一次剥離面を残す。85は有茎鏃（ＩＡ５）。86は石槍またはナイフ（ＩＢ）で、中央部で欠損している。87は石錐（Ⅱ１）で、機能部には回転使



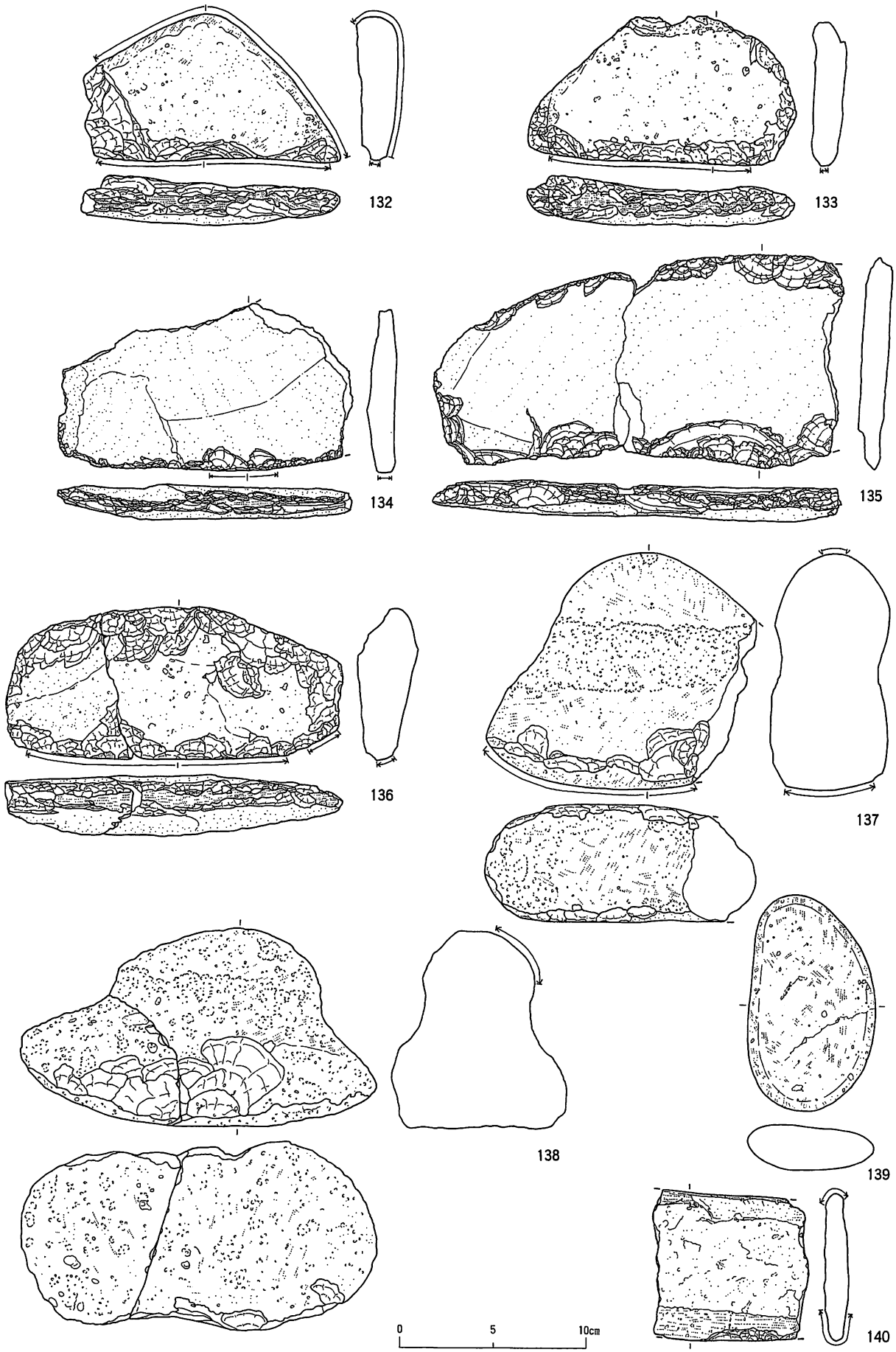
図Ⅳ－134　H－15出土の土器(7)



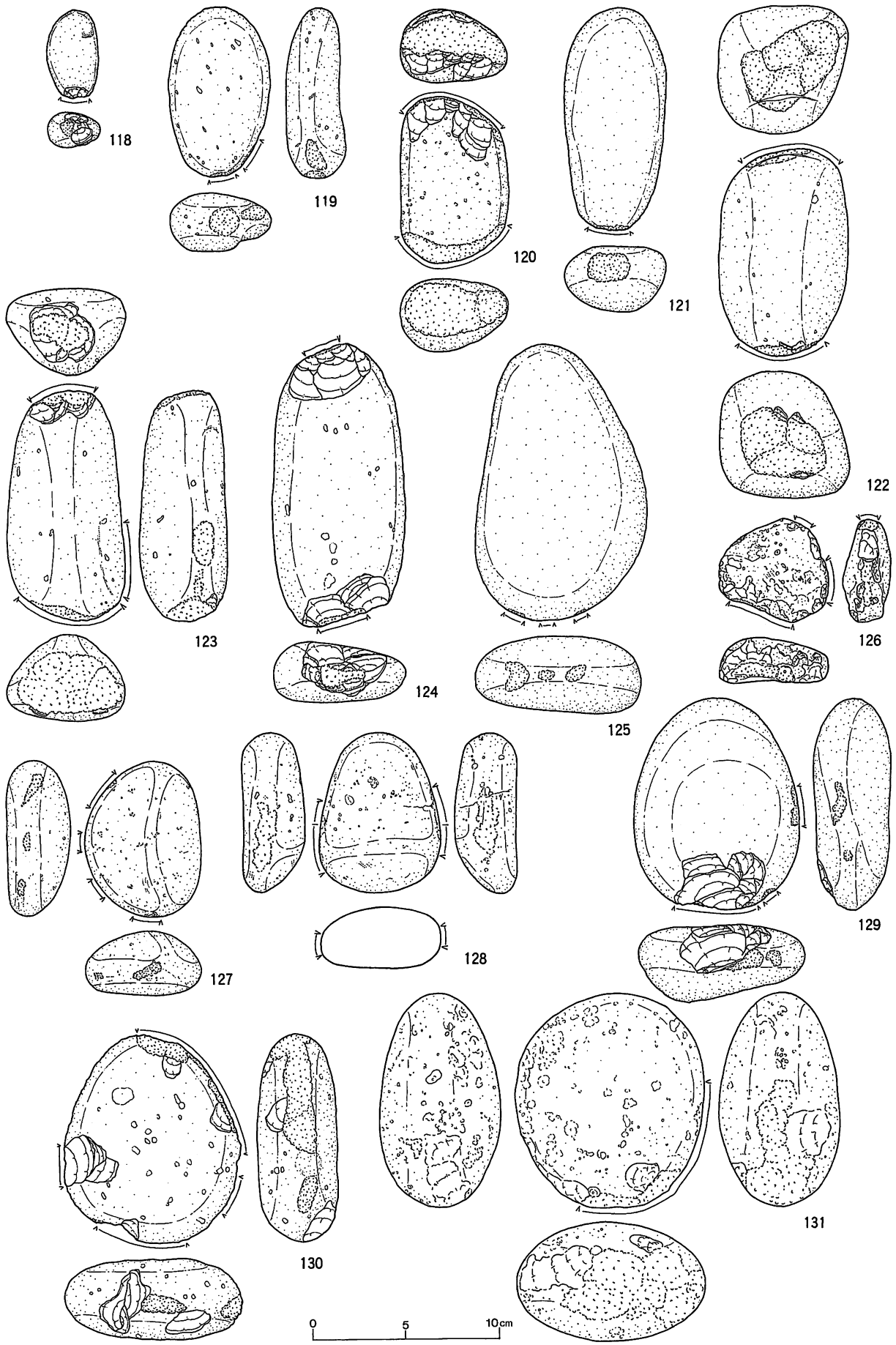
図Ⅳ－135　Ｈ－15出土の石器(1)



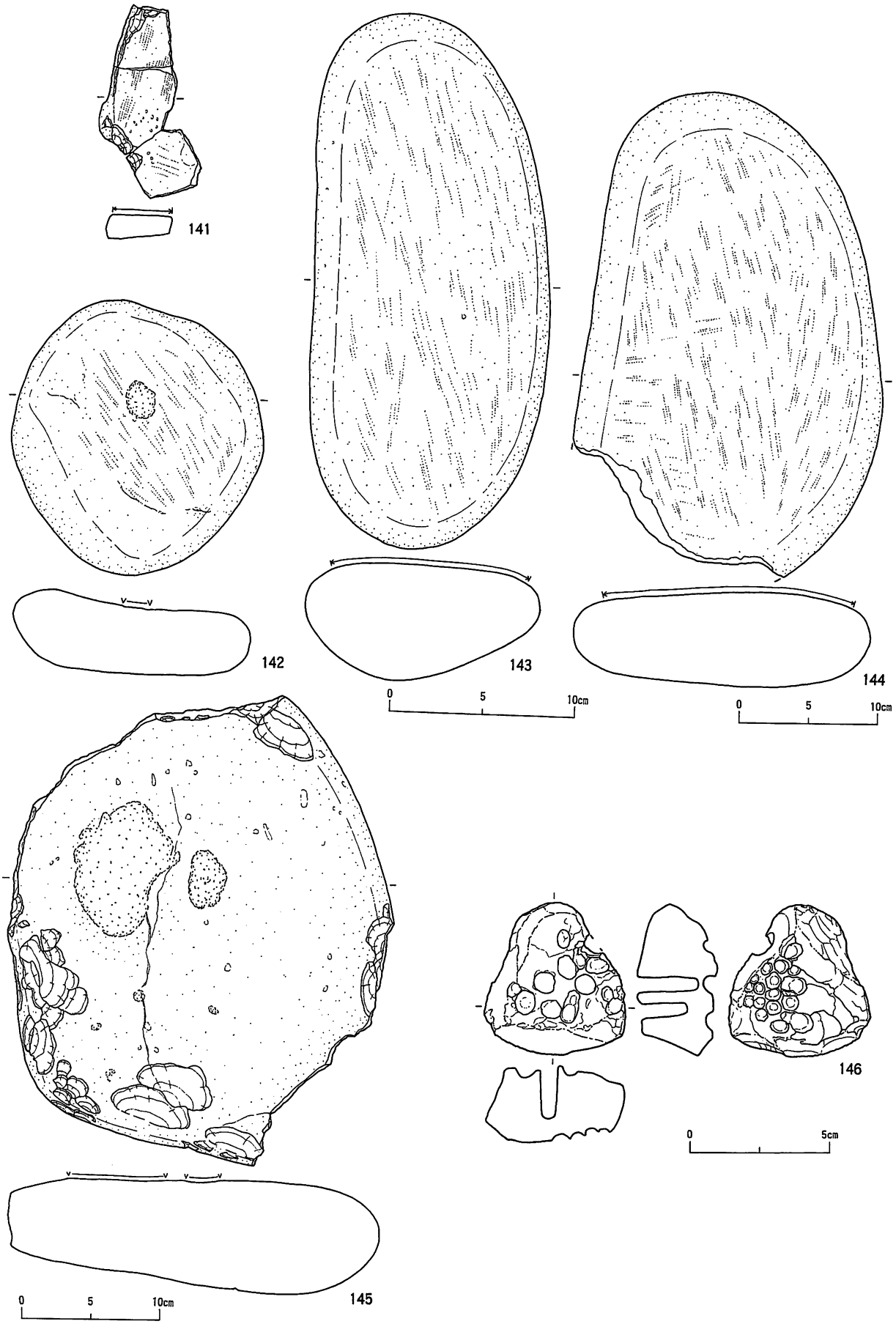
図Ⅳ－136　H－15出土の石器(2)



図Ⅳ－137　Ｈ－15出土の石器(3)



図Ⅳ－138　H－15出土の石器(4)



図Ⅳ－139　H－15出土の石器等(5)

用による擦痕・摩滅が見られる。88は片面の一側縁を加工したつまみ付きナイフ(ⅢＡ１ｃ)。89～106はスクレイパー。89～93は縦長剥片を用い刃部が外湾するもの（ⅢＢ２ａ)、94～98は直線状（ⅢＢ２ｂ)、99～101は内湾するもの（ⅢＢ２ｃ)。102～104は横長剥片を用いたもの（ⅢＢ３)。105はエンドスクレイパー(ⅢＢ５)。106は尖端部のあるもの(ⅢＢ６)。107は尖頭部のある両面調整石器(Ⅳ２)。108は打面転移のある石核(ＶＡ１)で、腹面は節理面である。109～114はＵフレイク(ＶＢ２)。109は礫表皮面を残し、腹背面に炭化物が付着している。114は横長剥片を用いたもの。115・116はくさび形石器（ＶＢ３）で、116は礫表皮面を残す。石材は80～114・116が頁岩、115が赤井川産と推測される黒曜石である。

117は擦り切り残片(ⅥＡ５)で、中央に断面が「Ｖ」字状の擦り切り痕がある。石材は緑色泥岩。

118～131はたたき石で、この内120・122・123・127・129は床面から出土したもの。118～125は一端もしくは両端にたたき痕のあるもの（Ⅶ１)。118は焼成を受けている。123は側縁の一部にもたたき痕がある。126～131は扁平礫の周縁にたたき痕があるもの（Ⅶ２)。132～136は半円状扁平打製石器（Ⅷ３)。132・133は扁平礫を半割したもので、礫面が残る。いずれも平坦なすり面がある。134は板状礫を折り、周縁の一部を加工したもの。135・136は周縁を打ち欠いたもの。134・136は平坦なすり面があり、135は断面「Ｖ」字状である。137・138は北海道式石冠（Ⅷ４)。137は床面から120・129のたたき石と近接して出土したもの（図版34－６）で、礫面を残しており把握部を敲打し作出している。138は全面敲打整形のもの。139は背面が平滑で、その部分を利用したすり石（Ⅷ５）と推測される。140は両側縁に機能部を持つ石鋸（ⅨＡ)。141は砥面が平坦な砥石（ⅨＢ２)。142～145は台石・石皿（Ｘ)。いずれも平滑で擦痕が確認できる部分がある。142・145はたたき痕もある。145は焼成を受け、器表面が剥落している。143は円形の付属土壙であるＨＰ－５内から据え置かれたように出土した（図Ⅳ－117・118、図版33－３)。144は住居北側の覆土１層、145は南側の覆土２ｂ層から出土した（図Ⅳ－120)。石材は126・134～136・140が流紋岩、128・141が砂岩、138が凝灰岩、124が不明で、その他は安山岩である。146は石製品（図版34－５)。河川の流れなどで自然に穿孔されたと推測される穴を多数持つもので、貫通しているものもある。実体顕微鏡で観察したが人為的な加工は認められなかったことから、有孔自然石の可能性が高い。石材は流紋岩である。

時　期　床面および覆土出土の遺物から縄文時代前期前半、円筒土器下層ｂ式のなかでは新しい時期に相当する遺構である。なお、床面、覆土２ｃ層、同２ｂ層から得られた炭化物についての^{14}Ｃ補正年代はそれぞれ4780±50ｙＢＰ(床面)、4550±50ｙＢＰ(床面)、4630±50ｙＢＰ(覆土２ｃ層)、4790±40ｙＢＰ（同２ｂ層）という結果が出ており（第Ⅵ章３)、覆土の方が古い年代が出ている。床面・覆土出土の遺物からＨ－１よりも古いと考えられるため、覆土のＣ14年代がより妥当と考えられる。（藤原）

Ｈ－16（図Ⅳ－140、図版35・100、表Ⅳ－７・18・24)

位　置　Ｑ－35－ｃ、Ｑ－36－ｂ、Ｒ－35－ｄ、Ｒ－36－ａ

規　模　(204×182)／271×240／36cm

床面積　(3.77) ㎡

平面形　隅丸長方形？

長軸方向　Ｎ－101.5°－Ｗ

確認・調査　北側の調査区で表土Ｋｏ－ｄ除去後の黒味の薄いⅣ層（Ⅲ層相当層）を５cmほど掘り下げた際に遺物がまとまって出土した。調査区に沿ってトレンチを設定し更に掘り下げると立ち上がり

を確認したので住居跡とした。全体の２分の１ほどは調査区の範囲外に及んでいる。断面観察から掘り込みはＫｏ－ｄ直下のⅣ層（Ⅲ層相当層）中である。

覆　土　８層に分層した。北側には攪乱があり一部判然としない部分があったが自然堆積と考えられる。

壁・床面　壁は緩やかに立ち上がり、ほぼ明瞭に確認できた。床面は平坦である。

炉　確認できなかった。

付属ピット・柱穴　柱穴は２基を検出した。深さは10cmほどで、規則的な配列は認められなかった。

遺物出土状況　覆土１層からは礫・礫片１点、２層から土器９点・石器など９点、３層から土器５点、石器など７点、覆土中から礫・礫片12点の合計43点が出土した。いずれも覆土上位からの出土で、住居に伴う遺物は無い。（藤原）

遺　物　１は覆土３層から出土したⅣ群ａ類土器の口縁部で、器面にはＬＲの斜行縄文が施され胎土には砂粒が多く含まれている。（皆川）

時　期　床面から遺物が出土せず不明である。覆土の堆積状況および、覆土中および周辺の遺物から縄文時代前期後半よりも古い早期前半の遺構と推測される。（藤原）

Ｈ－17（図Ⅳ－141・142、図版35、表Ⅳ－７・18・24）

位　置　Ｊ－13－ｃ、Ｊ－14、Ｋ－14

規　模　514×503／×／－cm

床面積　－m^2

平面形　円形？

長軸方向　－

確認・調査　標高38.4～38.6ｍの比較的平坦な部分に作られた竪穴住居と考えられる遺構である。Ｈ－４・６・７と重複しておりこれらの中では最も古い住居と言える。また、遺物からは関連する遺構の情報が得られていない。Ⅲ層を調査し終えた段階で、検出された焼土（ＨＦ－１）とピット（ＨＰ－１）、台石によって確認された住居である。住居の存在を予想して設けたトレンチでは、ＨＦ－１や台石などが検出されていたが立ち上がりは最後まで認識できなかった。三方の床と壁をＨ－４・６・７によって切られており、残った一方の壁も立ち上がりが不明瞭なため平面形は明らかでなく、図中の破線で示した平面形は検出状況や残存する土層を基に推定した部分が大きい。調査した印象では、Ｈ－４・７と類似の形態が想定される。

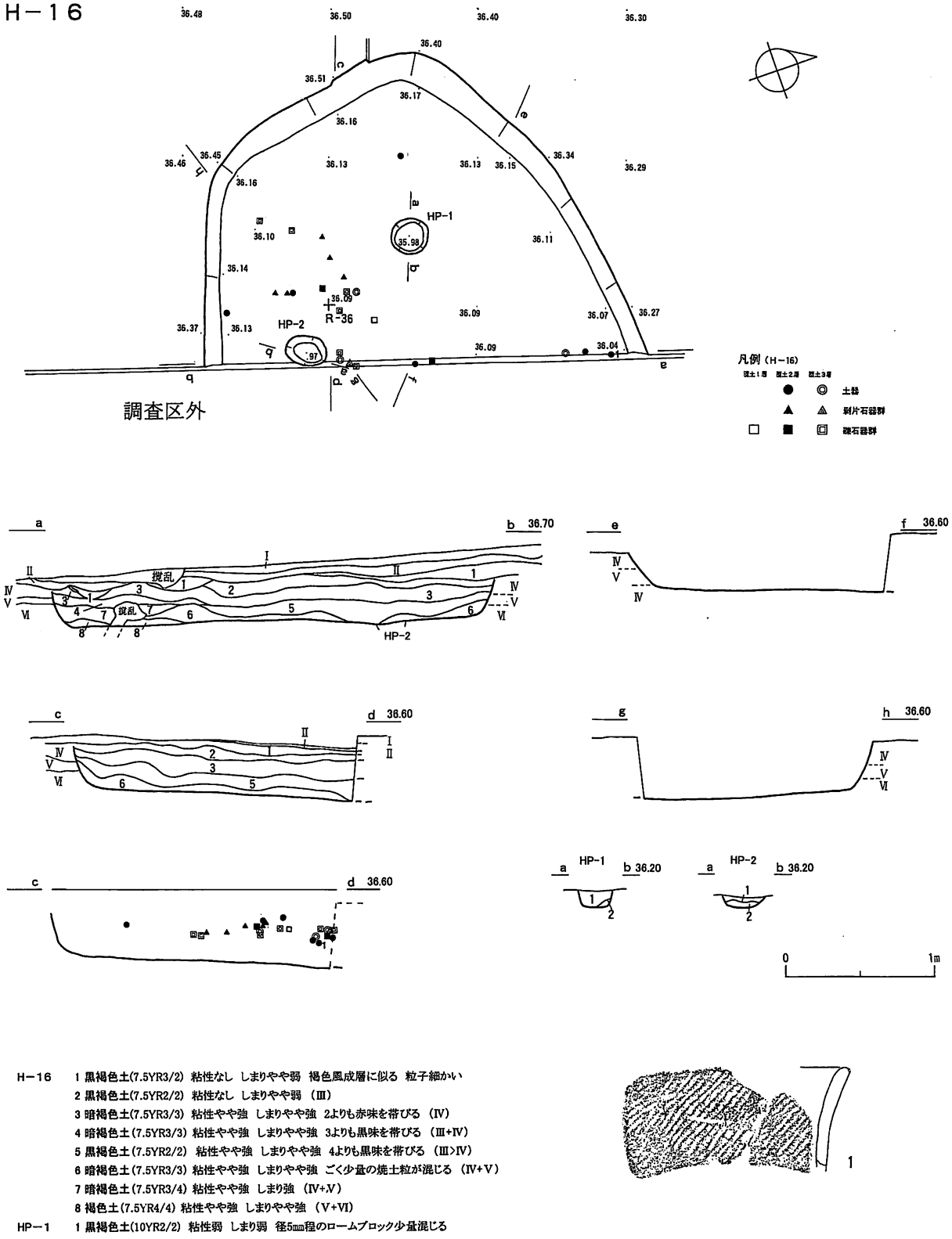
覆　土　黒色土を主体する覆土である。周囲のⅢ層と差異は認識できなかった。

壁・床　床面は平坦である。壁あるいは立ち上がりは不明である。

炉　Ⅳ層上面で検出された焼土（ＨＦ－１）が、本住居の炉跡と考えられる。ＨＦ－１はＨＰ－１と僅かであるが重複しており、ＨＰ－１を埋めた跡で設けられた炉と考えられる。

付属ピット・柱穴　床面から検出されたピットは１カ所（ＨＰ－１）である。ＨＰ－１は平面が長楕円形を呈するもので、ＨＦ－１と重複することから埋め戻された可能性が高い。内部からはたたき石としており、道具類の置き場所的な性格が推定される。柱穴については図示されていないが、「柱穴状小土壙」群と検出範囲が重なるため、重複或いは近接するＳＰにその可能性がある。

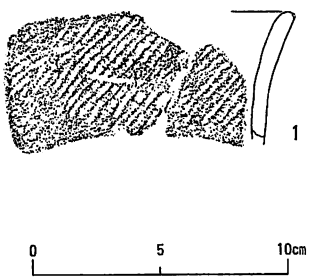
遺物出土状況　遺物は床面などから58点が出土している。数量は床面48点、ＨＰ－１が４点、ＨＦ－１が６点である。床面から出土したのは、Ⅱ群ｂ類土器、スクレイパー、Ｕフレイク、フレイク、たたき石、すり石、石鋸、砥石、台石類、原石、礫などで、比較的礫石器の比重が高いと言える。また、



H－16　1 黒褐色土(7.5YR3/2) 粘性なし しまりやや弱 褐色風成層に似る 粒子細かい
2 黒褐色土(7.5YR2/2) 粘性なし しまりやや弱 (Ⅲ)
3 暗褐色土(7.5YR3/3) 粘性やや強 しまりやや強 2よりも赤味を帯びる (Ⅳ)
4 暗褐色土(7.5YR3/3) 粘性やや強 しまりやや強 3よりも黒味を帯びる (Ⅲ+Ⅳ)
5 黒褐色土(7.5YR2/2) 粘性やや強 しまりやや強 4よりも黒味を帯びる (Ⅲ>Ⅳ)
6 暗褐色土(7.5YR3/3) 粘性やや強 しまりやや強 ごく少量の焼土粒が混じる (Ⅳ+Ⅴ)
7 暗褐色土(7.5YR3/4) 粘性やや強 しまり強 (Ⅳ+Ⅴ)
8 褐色土(7.5YR4/4) 粘性やや強 しまりやや強 (Ⅴ+Ⅵ)

HP－1　1 黒褐色土(10YR2/2) 粘性弱 しまり弱 径5㎜程のロームブロック少量混じる
2 褐色土(10YR4/6) 粘性強 しまり弱 黒色土がわずかに混じる

HP－2　1 黒褐色土(10YR3/1) 粘性弱 しまり弱 径10㎜程のロームブロックが少量混じる
2 暗褐色土(10YR3/3) 粘性強 しまり強 径15㎜程のロームブロックが混じる



図Ⅳ－140　H－16と出土の遺物

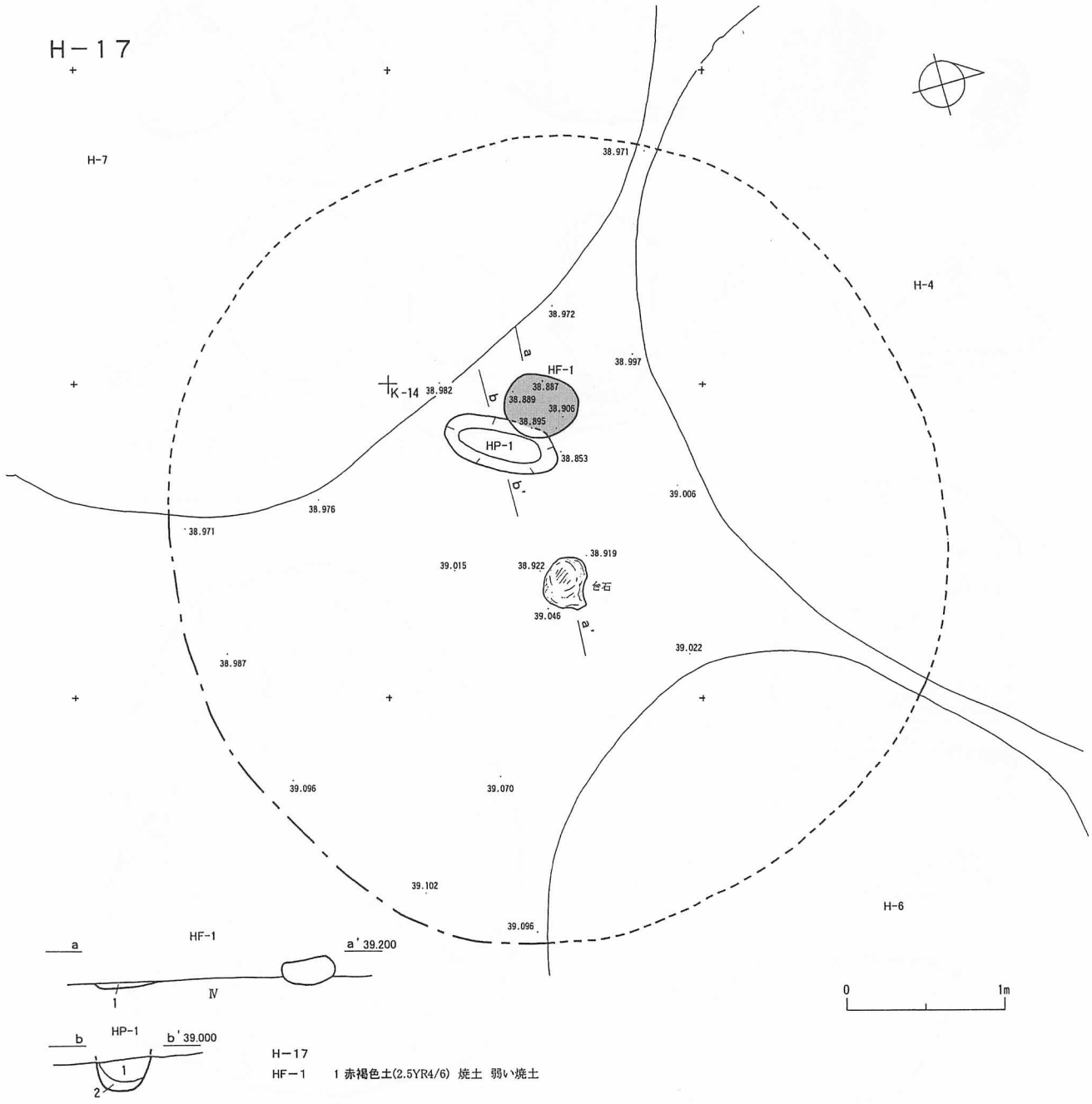
ＨＰ－１からもすり石と北海道式石冠が出土している。

遺　物

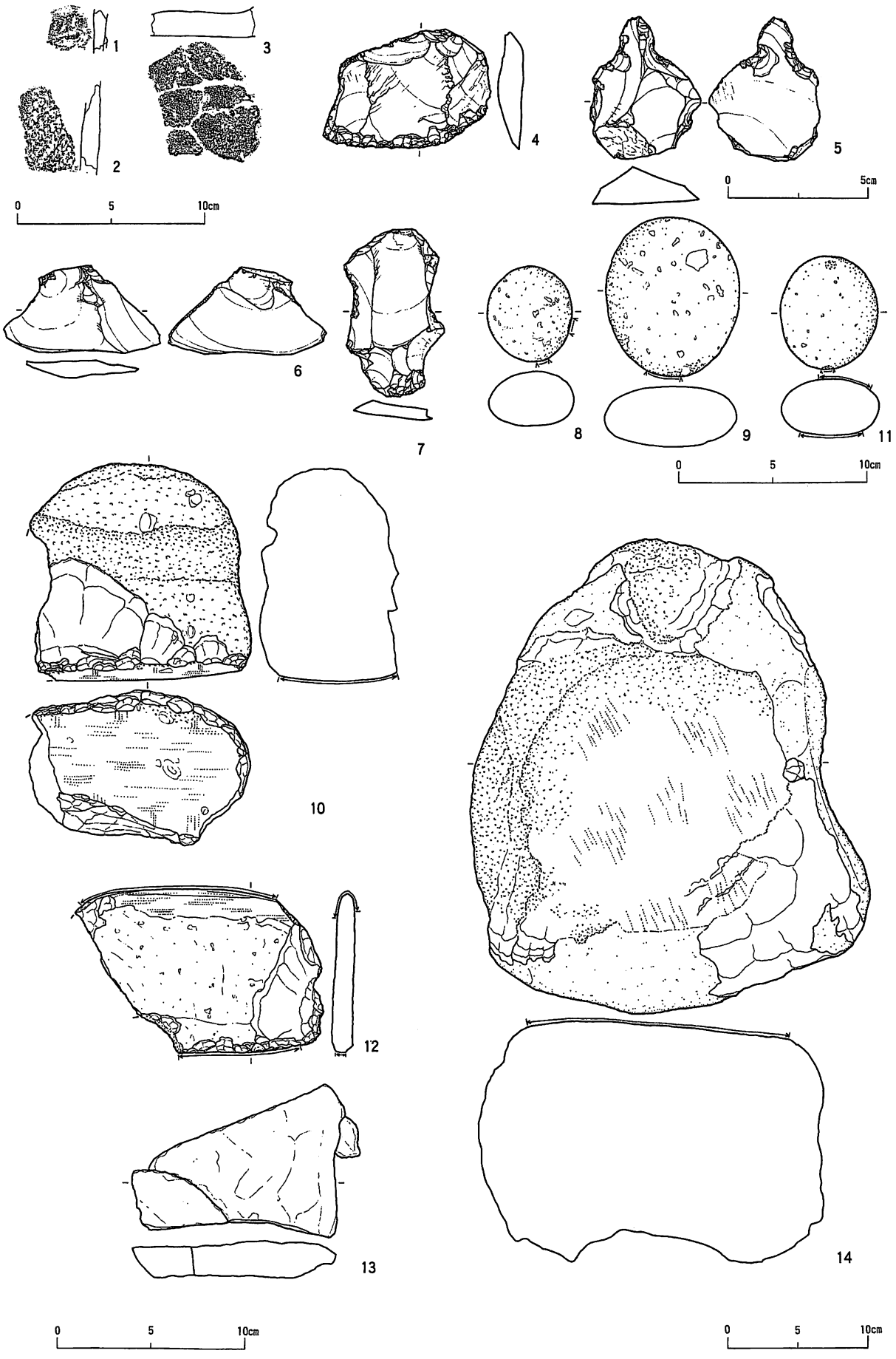
（土器） 土器は床面から出土したⅡ群ｂ類土器３点を掲載した。１～３の胎土には繊維が混入されている。１は器面にＬＬＲの撚り戻しを施文してから半截竹管状の施文具で刺突を施した粘土紐を貼付た胴部の小破片である。Ｈ－12の覆土１層（Ｈ－12－４）やＦＣ－17、ＦＣ－19から出土したものと同じ個体の土器である可能性がある。２は器面にＬＲＬの三段複節と考えられる文様の施された器壁が厚めの胴部、３は無文の底部である。

（石器） 石器類48点の中からここには４～14の11点を掲載した。全て床面あるいは床面の遺構出土である。４・５はスクレイパー（４：ⅢＢ３、５：ⅢＢ７）、６・７はＵフレイク（ＶＢ２）である。４は下辺に刃部が作られるもので、５はつまみ部を持つ掻器である。６・７はいずれも左側縁を使っている。８・９はたたき石である（Ⅶ１）。いずれも小型の礫が素材となっている。10はＨＰ－１から出土した北海道式石冠である（Ⅷ４）。すり面からの打ち欠きが随所に見られるが、その角が摩滅し丸味を帯びていることからこの状態で使われていたことが解る。11は小型の礫を使ったすり石である（Ⅷ５）。12は上辺を加工した石鋸である（ⅨＡ）。下辺には半円状扁平打製石器の使用面に見られるような敲打痕が認められる。13は砂岩製の砥石片である（ⅨＢ２）。14はＨ－17床面の中央付近と見なされる位置に据え置かれていた台石・石皿である（Ⅹ）。使用によって、中央部付近がなめらかに落ち窪んである。

時　期　床面出土のⅡ群ｂ類土器から、縄文時代前期後半と考えられる。　（皆川）


H－17
H-7
H-4
H-6
38.971
38.972
38.997
38.982
K-14
HF-1
38.887
38.889
38.906
38.895
HP-1
38.853
38.976
38.971
39.006
39.015
38.922
38.919
台石
39.046
39.022
38.987
39.096
39.070
39.102
39.096
a
a'
39.200
HF-1
1
Ⅳ
b
b'
39.000
HP-1
1
2
0
1m
H－17
HF－1　1 赤褐色土(2.5YR4/6) 焼土 弱い焼土

図Ⅳ－141　H－17



図Ⅳ－142　H－17出土の遺物

⑵土壙墓

Ｐ－１（図Ⅳ－143、図版36、表Ⅳ－８）

位　置　Ｍ－15－ａ・ｄ

規　模　129×110／88×89／37cm

平面形　楕円形

長軸方向　Ｎ－132°－Ｗ

確認・調査　Ｍ－15グリッドをⅤ層上面まで掘り下げた段階で黒褐色土の落ち込みを検出した。半截した結果、土壙であることが判明した。壙底はほぼ平坦で壁の立ち上がりは全体的に急角度に立ち上がるが、南西部はやや緩やかである。また、北壁は部分的にオーバーハングしている。

覆　土　３層に分層した。Ⅳ層の土とロームブロックが主体で覆土の下部からは炭化物が検出された。堆積状態から人為的な埋め戻しと考えられる。

遺　物　出土していない。

時　期　周辺で検出されている遺構の時期から縄文時代前期後半の時期の可能性が高い。　（広田）

Ｐ－４（図Ⅳ－143、図版37、表Ⅳ－８）

位　置　Ｑ－15－ｄ、Ｑ－16－ａ

規　模　149×115／104×78／50cm

平面形　楕円形

長軸方向　Ｎ－00°－Ｗ

確認・調査　Ｏ－15区を精査していたところ、北東側の壁面に土壙の一部が現れていた。グリッドに沿うようにベルトを残し、Ⅳ層付近まで掘り下げたところで灰褐色土の落ち込みを検出した。落ち込みの長短軸にあわせてトレンチを設定してⅥ層まで掘り下げた結果、壙底、壁を確認した。埋め戻しとみられる堆積状況から土壙墓とみられる。土壙の平面形は隅丸長方形に近い楕円形を呈し、長軸方向は真北である。壁は急激に立ち上がり、壙底は平坦である。

覆　土　５層に分層した。灰褐色土中に黄褐色土がブロック状に混入する土を主体とし、３層とした壙底付近の堆積には炭化物が混じっている。また５層とした検出面から垂直に伸びる細長い層位は埋め戻した後に立てた杭状のものである可能性がある。掘り込み面はⅢ層下部付近とみられる。

遺　物　覆土から土器11点、フレイク、26点、礫・礫片が14点出土しているが、いずれも混入したものとみられる。なお覆土３層から得られた炭化物についての14Ｃ補正年代は4720±50ｙＢＰの結果が出ている（第Ⅵ章２参照）。

時　期　周辺から出土する遺物、また14Ｃ年代の分析結果から縄文時代前期後半円筒土器下層式の時期のものである。　（立田）

Ｐ－38（図Ⅳ－143、図版37・101、表Ⅳ－８・24）

位　置　Ｏ－13－ｃ

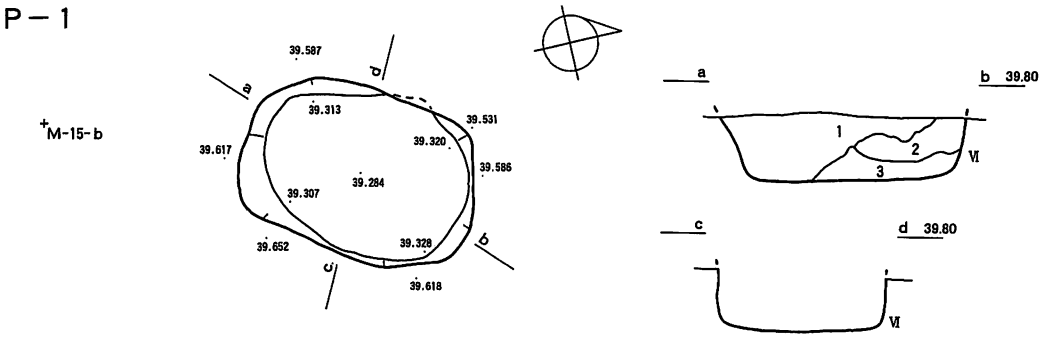
規　模　129×83／80×49／29cm

平面形　不整楕円形

長軸方向　Ｎ－163.5°－Ｗ

確認・調査　Ⅴ層上面を精査中、黒色土が混じる灰黄褐色土の落ち込みを確認した。平面形が明瞭でなかったため単軸方向にトレンチを設定してⅥ層まで掘り下げた。その結果、壁と壙底を確認し、土

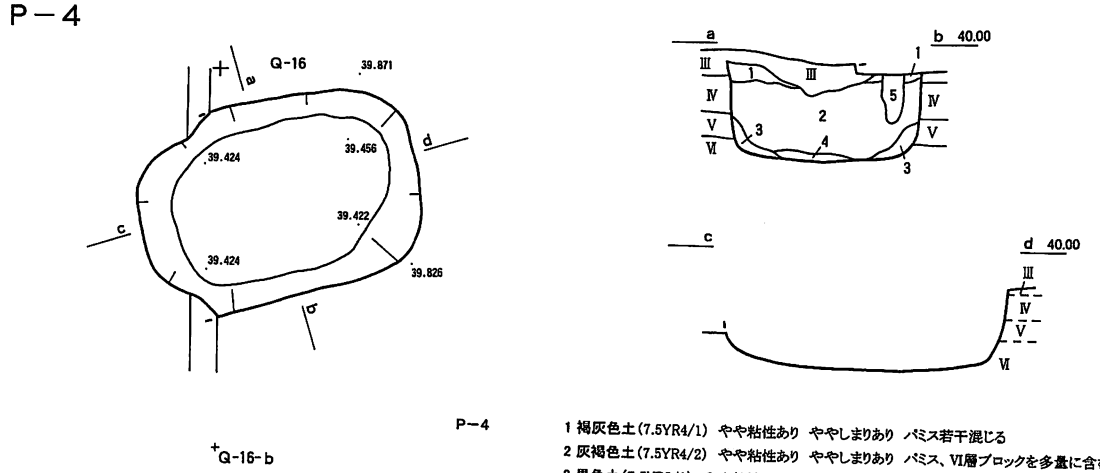
P－1



P－1

1 黒褐色土(7.5YR3/2) 粘性あり しまりあり Ⅲ層下土にⅤ層土粒～ブロックを含む
2 暗褐色土(7.5YR3/3) 粘性あり しまりあり Ⅲ層下土＋Ⅴ層土(5:5) Ⅴ層土ブロック少量含む
3 暗褐色土(10YR3/4) 粘性あり しまりややあり Ⅲ層下土＋Ⅴ層土(4:6) Ⅲ層土ブロック、Ⅴ層土ブロック少量含む

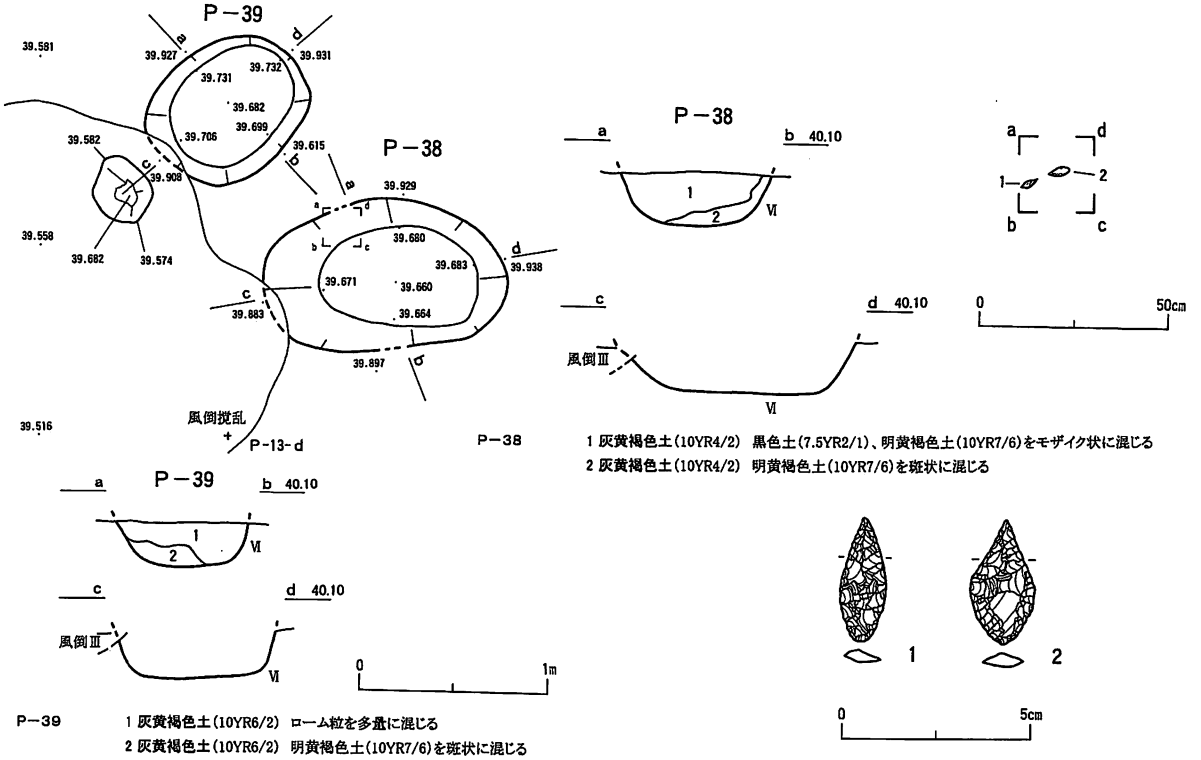
P－4



P－4

1 褐灰色土(7.5YR4/1) やや粘性あり ややしまりあり パミス若干混じる
2 灰褐色土(7.5YR4/2) やや粘性あり ややしまりあり パミス、Ⅵ層ブロックを多量に含む 埋め戻し土
3 黒色土(7.5YR2/1) やや粘性あり ややしまりあり パミス、Ⅵ層ブロックを若干含む 炭化物？を含む
4 黒色土(7.5YR2/1) やや粘性あり ややしまりあり
5 黒褐色土(7.5YR3/1) 粘性あり ややしまりあり Ⅵ層ブロックを含む

P－38
P－39



P－38

1 灰黄褐色土(10YR4/2) 黒色土(7.5YR2/1)、明黄褐色土(10YR7/6)をモザイク状に混じる
2 灰黄褐色土(10YR4/2) 明黄褐色土(10YR7/6)を斑状に混じる

P－39

1 灰黄褐色土(10YR6/2) ローム粒を多量に混じる
2 灰黄褐色土(10YR6/2) 明黄褐色土(10YR7/6)を斑状に混じる

図Ⅳ－143　土壙墓（P－1・4・38・39）と出土遺物

壙であることがわかった。埋め戻しを呈する土層堆積状況、また副葬品と見られる出土遺物から土壙墓とした。壁は南端以外では急で、壙底は短軸方向で椀状、長軸方向ではほぼ平坦である。50cm程はなれて西にはＰ－39がある。

覆　土　２層に分層した。基調となる土はなく、灰黄褐色土、黒色土、明黄褐色土がモザイク状に混入する状況を呈する。

遺　物　壙底を精査中、土壙の西壁面で石鏃が２点出土した。石鏃は先端を向きあわせ、器軸を土壙の輪郭に沿うように並べられている。

１、２は壙底から出土した石鏃である。１は薄手で柳葉形のもの（ＩＡ２ａ）。腹面の一部が残っているが、両面全体に入念な細部調整が施される。２は薄手のもの（ＩＡ４）。背腹両面の一部が残るが、先端部は入念な細部調整が施される。両者とも頁岩製である。

時　期　検出状況および壙底出土遺物から縄文時代前期後半円筒土器下層式の時期のものである。

（立田）

Ｐ－39（図Ⅳ－143、図版37、表Ⅳ－８）

位　置　Ｏ－13－ａ～ｄ

規　模　89×65／76×59／23cm

平面形　不整円形

長軸方向　Ｎ－172°－Ｗ

確認・調査　Ⅴ層上面を精査中、灰黄褐色土の落ち込みを確認した。輪郭が明瞭であり、遺構であることはほぼ明らかであったため、半截してⅥ層まで掘り下げた。その結果、壁と壙底を確認し、土壙であることがわかった。土壙は南側を風倒木痕によってわずかに壊されている。風倒木中からは、大型礫が出土しており、本土壙に伴う可能性がある。埋め戻しとみられる土層堆積状況から土壙墓と考えられる。壁はやや急で、壙底は平坦である。50cmほど離れて東側にはＰ－38がある。

覆　土　２層に分層した。灰黄褐色土中に黄褐色土粒、ブロックが混じる土で構成される。

遺　物　出土していない。

時　期　検出状況、また周辺から検出される遺構の時期から縄文時代前期後半円筒土器下層式の時期とみられる。

（立田）

Ｐ－55（図Ⅳ－144、図版38・101、表Ⅳ－８・24）

位　置　Ｑ－16－ａ

規　模　81×59／74×53／30cm

平面形　不整楕円形

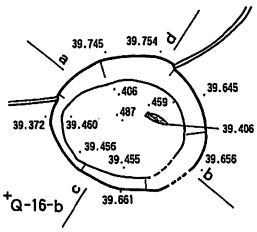
長軸方向　Ｎ－132°－Ｗ

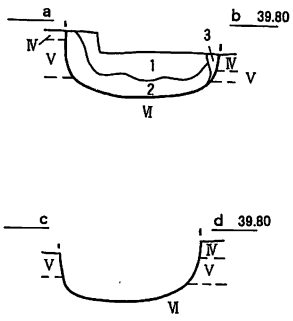
確認・調査　Ⅲ層下部からⅣ層を調査中に暗褐色土の落ち込みを検出した。落ち込みの東側に近接してＰ－４がある。長軸方向に半截して壙底、壁を確認し、土壙であることがわかった。埋め戻しとみられる土層堆積状況、また壙底出土の遺物から土壙墓とした。土壙の平面形は不整な楕円形であり、南西方向に長軸がある。壁は急激に立ち上がり、壙底は椀状を呈する。

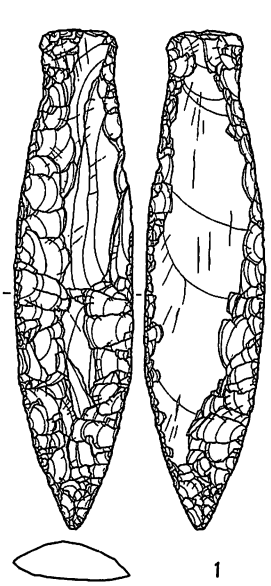
覆　土　３層に分層した。黄褐色土がブロック状に混入する暗褐色土を主体とする。１層とした暗褐色土には炭化物が若干混じっている。

遺　物　土壙の中央からやや北よりの壙底付近から、つまみ付ナイフが先端を北東に向けて出土して

P－55

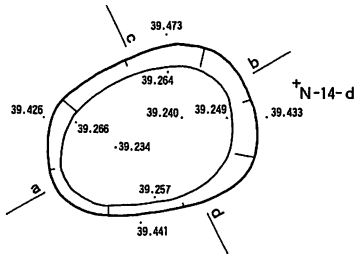


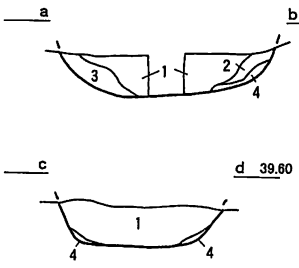


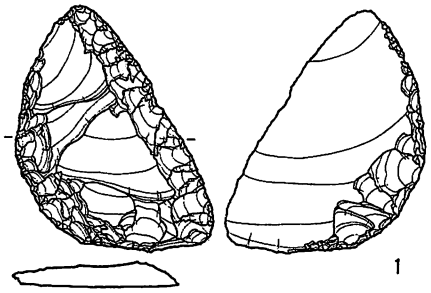


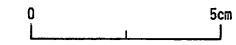
P－55
1 暗褐色土(10YR3/3)　粘性あり しまりあり 黄褐色ローム粒多量に混じる 黄褐色ロームブロック少量混じる 炭化物混じる
2 黒褐色土(10YR2/2)　粘性あり しまりあり 黄褐色ローム粒、ブロック少量混じる
3 オリーブ褐色土(2.5Y4/3)　粘性やや強 しまりあり

P－56



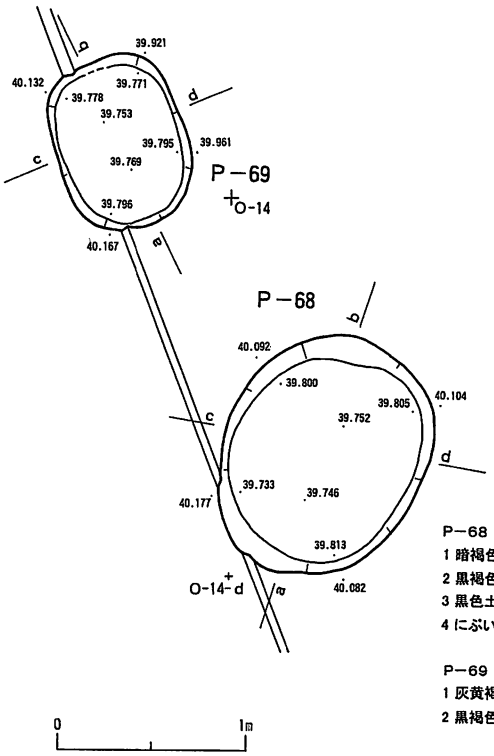


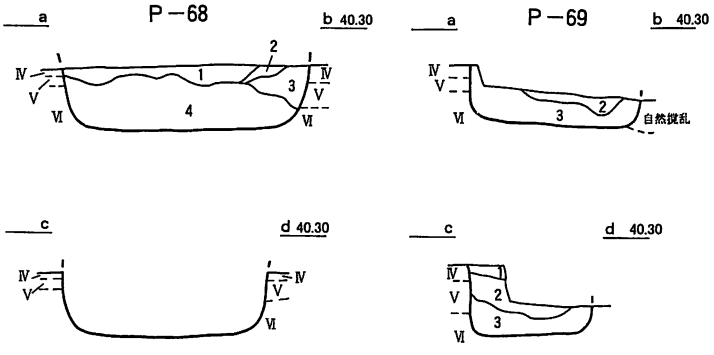




P－56
1 灰褐色土(7.5YR4/2)　黒褐色土(10YR3/1)、黄褐色土(10YR5/6)をモザイク状に混じる
2 灰褐色土(7.5YR4/2)　ローム粒子を多量に混じる
3 灰褐色土(7.5YR4/2)　ローム粒子を少量混じる
4 灰黄褐色(10YR4/2)

P－68
P－69





P－68
1 暗褐色土(10YR3/3)　粘性やや強 しまりよい 黄褐色ローム粒多く混じる
2 黒褐色土(10YR3/1)　粘性あり しまりよい 黄褐色ローム粒、ブロック多く混じる
3 黒色土(10YR2/1)　粘性あり しまりやや弱 黄褐色ローム粒、ブロック多く混じる
4 にぶい黄褐色土(10YR4/3)　粘性強 しまりやや弱 黄褐色ローム、黒色土、黒褐色土のブロックが斑状に非常に多く混じる モザイク状になる

P－69
1 灰黄褐色土(10YR4/2)　粘性やや強 しまりよい 黄褐色ローム粒、ブロック多量に混じる
2 黒褐色土(10YR3/2)　粘性やや強 しまり弱 黄褐色ローム粒、ブロック多量に混じる 黒色土ブロックわずかに混じる

図Ⅳ－144　土壙墓（P－55・56・68・69）と出土遺物

いる。出土状況から副葬品とみられる。

1は壙底から出土したつまみ付きナイフである。背面に表皮の一部が残る頁岩の縦長剥片を素材とする。尖頭部を含む刃部は入念に細部調整され稜線は直線状に作出されるが、主要剥離面は広く残る。

時　期　周辺から出土する遺物、また検出状況から縄文時代前期後半円筒土器下層式の時期のものとみられる。（立田）

P－56（図Ⅳ－144、図版38・101、表Ⅳ－8・24）

位　置　M－14－b、N－14－a

規　模　114×96／84×69／22cm

平面形　楕円形

長軸方向　N－125°－W

確認・調査　Ⅵ層上面を精査中、ロームがやや汚れる部分があることがわかった。平面形は不明瞭ながら楕円形を呈しており、土壙であることが予想された。短軸にトレンチを設定し掘り下げた結果、壙底、壁を確認し、土層断面図を作成した後長軸方向にトレンチを延ばして同様に調査した。埋め戻しを呈する土層堆積状況、また副葬品と見られる出土遺物から土壙墓とした。壁は長軸方向において緩やかで、短軸方向ではやや急である。壙底は短軸方向でほぼ平坦であり、長軸方向で緩やかな椀状である。

覆　土　4層に分層した。灰褐色土、黒褐色土、黄褐色土がモザイク状に混入する土を基調とする。覆土の構成はP－38に類似する。

遺　物　土壙南西端の壁際からスクレイパーが出土している。1は両側縁に刃部があり（ⅢB2b）、腹面にも細部調整がなされている。

時　期　周辺から検出される遺構の時期から、縄文時代前期後半円筒土器下層式の時期のものとみられる。（立田）

P－68（図Ⅳ－144、図版39、表Ⅳ－8）

位　置　O－13－d、O－14－d

規　模　132×115／106×96／34cm

平面形　楕円形

長軸方向　N－54°－W

確認・調査　Ⅲ層を掘り下げていたところ、暗褐色土の落ち込みを2ヵ所検出した。落ち込みは近接しており、平面形の輪郭が明らかであったため、東をP－68、西をP－69として調査した。半截して壁、壙底を確認し、さらに埋め戻しとみられる堆積状況から土壙墓とした。壁は急激に立ち上がり、壙底は平坦である。

覆　土　4層に分層した。黄褐色土粒、ブロックが混じる黒褐色土を基調とする。覆土の下位で黄褐色土の割合が増える傾向がある。

遺　物　出土していない。

時　期　周辺から検出される遺構の時期から、縄文時代前期後半円筒土器下層式の時期のものとみられる。（立田）

P－69（図Ⅳ－144、図版39、表Ⅳ－8）

位　置　N－13－c、O－13－d

規　模　92×81／77×68／23cm
平面形　隅丸方形
長軸方向　N－63°－W
確認・調査　Ⅲ層を掘り下げていたところ、暗褐色土の落ち込みを検出した。落ち込みはP－68から約1m程離れて位置している。堆積状況を確認するため、南東端にあたる4分の1を先行して掘り下げた。その結果、壁と壙底を確認した。長軸方向にトレンチを延長して半截し、土壙であることを確認した。埋め戻しとみられる土層堆積状況から土壙墓とみられる。壁はほぼ直角に立ち上がり、壙底は平坦である。
覆　土　3層に分層した。黄褐色土粒、ブロックが多量に混じる黒褐色土を主体とする。
遺　物　覆土からフレイクが2点出土している。
時　期　周辺から検出される遺構の時期から、縄文時代前期後半円筒土器下層式の時期のものとみられる。（立田）

P－71（図Ⅳ－145、図版39・101、表Ⅳ－8・24）
位　置　N－15－a
規　模　135×119／108×85／31cm
平面形　楕円形
長軸方向　N－69°－W
確認・調査　標高40.0mの削平部分周辺に位置する土壙墓である。Ⅳ層上面で確認されたもので、壙底面は平坦を意識したと考えられる作りになっており、壁は僅かに開きながら立ち上がる。

本遺構の東側にも土壙墓（P－72）が隣接して作られており、このような配置は両者の強い関わりを窺わせる。また、削平部近くに位置することから、削平された空間の性格や時期にも関わる可能性がある。なお、柱穴状小土壙の分布範囲と重なりながらも重複しない点から、これらにも何らかの関連が想定されるものの、本遺構から先後も含めてそれらを知るデータは得られなかった。
覆　土　覆土1～5層は基本的に掘り上げられた土を埋め戻したものである。これらの中で大きな比重を占めるのはⅣ・Ⅴ層と考えられる土壌であるが、Ⅲ層（黒色土）は存在が著しく不明瞭なことから基本的に混入量が少ないことが想定された。このため本遺構の掘り込み面は、確認面とそれ程大きな差のないⅣ層中を考えねばならないが、時期的なものを考慮するなら本来はⅢ層中となるべきであろう。このことは削平部分の範囲がP－71の作られた部分まで及んでおり、それによってP－71が作られた時点でこの部分のⅢ層が既に失われていた可能性が出てくる。同時に、このことは削平部分とP－71とが接点を持つことを示しており、両者の時期や性格などに関連性があることを示す可能性の一つとも言える。
遺　物　覆土1層と壙底から13点が出土している。壙底からはつまみ付ナイフ、スクレイパー、フレイクが各図示した位置から出土しており、これらは副葬されたものと考えられる。覆土1層からはフレイク、たたき石などが出土しており、これらは埋め戻しの際に紛れ込んだ可能性もある。

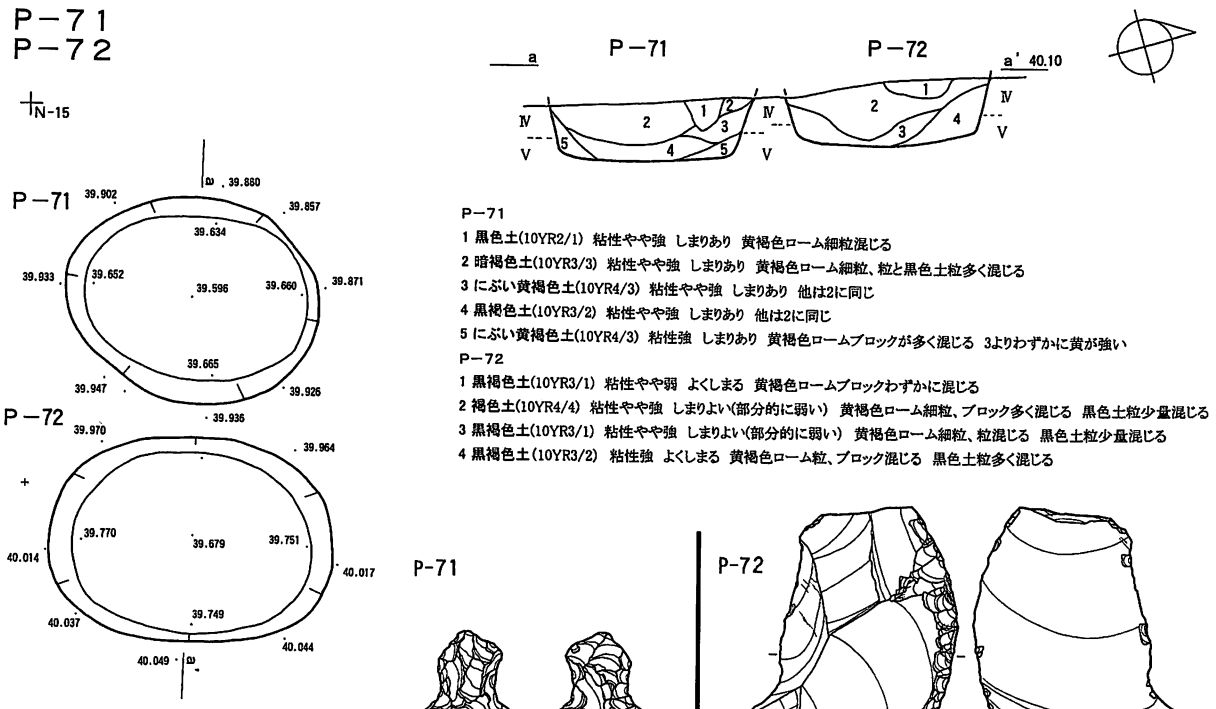
1・2は黒曜石製のつまみ付ナイフである（1：ⅢA2、2：ⅢA4）。1はつまみ部の大きなもので主体となる刃部が右側縁に作出されている。2は両面加工のもので下半部が欠失している。原産地は、肉眼観察によると1が赤井川産、2が豊泉産と推測される。3は右側縁に最小限の剥離を施しただけのスクレイパーである（ⅢB2b）。4は扁平礫を素材とするたたき石である（Ⅶ2）。
時　期　周囲の遺構との関連性から縄文時代前期後半の可能性がある。（皆川）

P－72（図Ⅳ－145、図版39・101、表Ⅳ－8・24）
位　置　N－15－a・b
規　模　150×128／106×94／33cm
平面形　楕円形
長軸方向　N－72.5°－W
確認・調査　標高40.0mの削平部分周辺に位置する土壙墓である。Ⅳ層上面で確認されたもので、壙底面は平坦を意識したと考えられる作りになっており、壁は僅かに開きながら立ち上がる。

本遺構の西側にも土壙墓（P－71）が隣接して作られており、このような配置は両者の強い関わりを窺わせる。また、削平部近くに位置することから、削平された空間の性格や時期にも関わる可能性がある。なお、柱穴状小土壙の分布範囲と重なりながらも重複しない点から、これらにも何らかの関連が想定されるものの、本遺構から先後も含めてそれらを知るデータは得られなかった。
覆　土　覆土1～4層は基本的に掘り上げられた土を埋め戻したものである。これらの中で大きな比重を占めるのはⅣ・Ⅴ層と考えられる土壌であるが、Ⅲ層（黒色土）は存在が著しく不明瞭なことから基本的に混入量が少ないことが想定された。このため本遺構の掘り込み面は、確認面とそれ程大きな差のないⅣ層中を考えねばならないが、時期的なものを考慮するなら本来はⅢ層中となるべきであろう。このことは削平部分の範囲がP－72の作られた部分まで及んでおり、それによってP－72が作られた時点でこの部分のⅢ層が既に失われていた可能性が出てくる。同時に、このことは削平部分とP－72とが接点を持つことを示しており、両者の時期や性格などに関連性があることを示す可能性の一つとも言える。
遺　物　覆土1層と壙底から5点が出土している。壙底からはスクレイパーが各図示した位置から出土しており、これらは副葬されたものと考えられる。覆土1層からはフレイク、礫などが出土しており、これらは埋め戻しの際に紛れ込んだ可能性もある。1・2はスクレイパーである（ⅢB2a）。1は右側縁から下辺にかけて丹念に刃部が作出されたもので、その刃部の腹面側にはかなり明瞭な光沢が認められる。2は背面のほぼ全体に加工が施されたもので、この腹面にも若干の光沢が見られる。
時　期　周囲の遺構との関連性から縄文時代前期後半の可能性がある。（皆川）

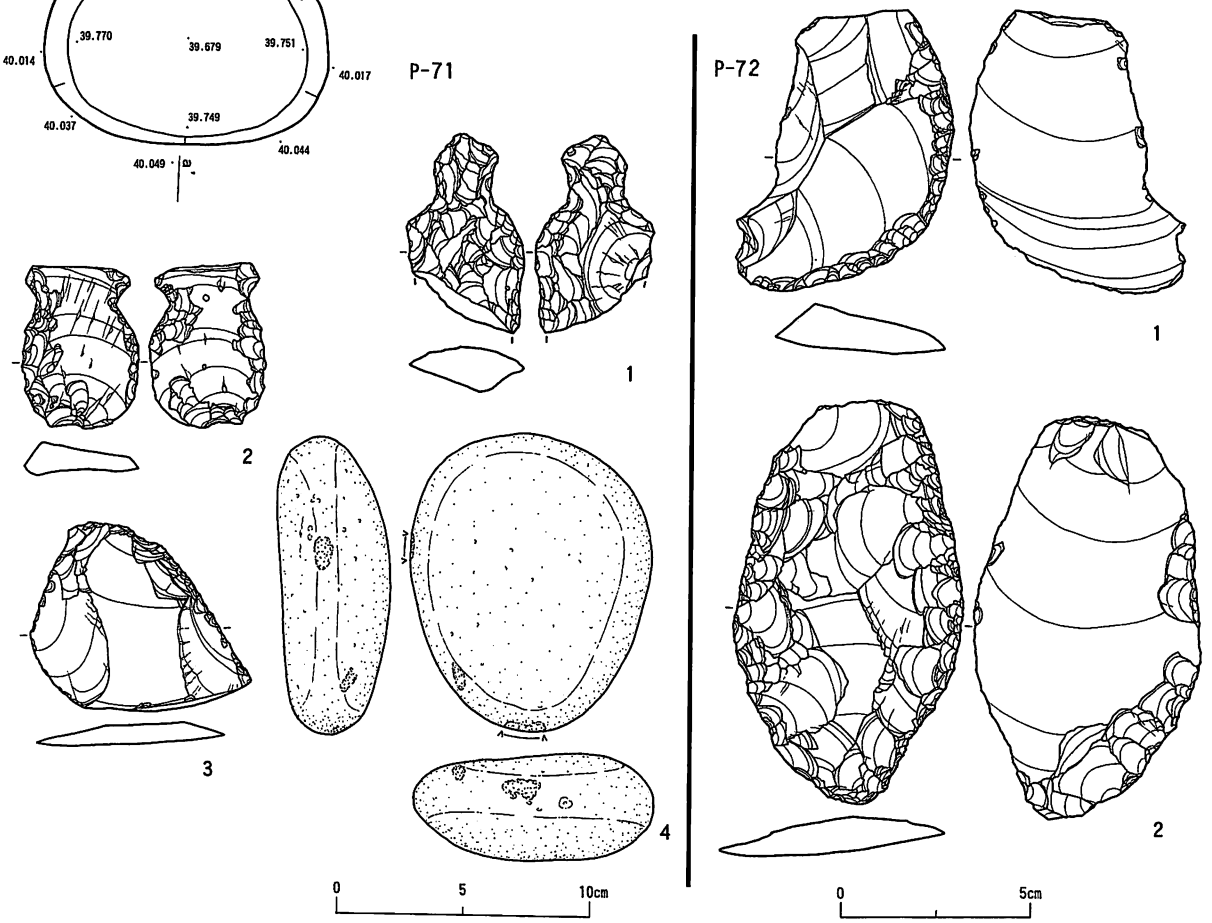
P－76（図Ⅳ－145、図版40、表Ⅳ－8）
位　置　E－16－b・c
規　模　86×55／65×41／22cm
長軸方向　N－23°－W
平面形　楕円形
確認・調査　標高38.0m付近の北向き斜面肩口に作られた比較的規模の小さな土壙墓である。Ⅴ層上面で確認されたもので、壙底は僅かな平坦面を作出するもので、壁は大きく開きながら立ち上がっている。最も近い遺構は、8m程離れた南側に位置する竪穴住居（H－5）である。P－76は削平部周辺に位置する他の土壙墓から離れた地点にある孤立した墓と言える。またH－5に関しても同様な状況が指摘できることから、これらはある意味でセットとなる遺構で、他とは異なる時期あるいは性格を有する可能性がある。
覆　土　基本的に掘り上げられた土を埋め戻したものである。覆土3層は撹乱の影響による。
遺　物　出土していない。
時　期　周囲の遺構との関連性から縄文時代前期後半の可能性がある。（皆川）

P－71
P－72

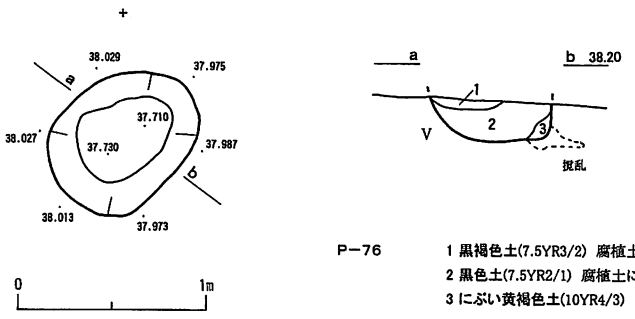


P－71
1 黒色土(10YR2/1) 粘性やや強 しまりあり 黄褐色ローム細粒混じる
2 暗褐色土(10YR3/3) 粘性やや強 しまりあり 黄褐色ローム細粒、粒と黒色土粒多く混じる
3 にぶい黄褐色土(10YR4/3) 粘性やや強 しまりあり 他は2に同じ
4 黒褐色土(10YR3/2) 粘性やや強 しまりあり 他は2に同じ
5 にぶい黄褐色土(10YR4/3) 粘性強 しまりあり 黄褐色ロームブロックが多く混じる 3よりわずかに黄が強い

P－72
1 黒褐色土(10YR3/1) 粘性やや弱 よくしまる 黄褐色ロームブロックわずかに混じる
2 褐色土(10YR4/4) 粘性やや強 しまりよい(部分的に弱い) 黄褐色ローム細粒、ブロック多く混じる 黒色土粒少量混じる
3 黒褐色土(10YR3/1) 粘性やや強 しまりよい(部分的に弱い) 黄褐色ローム細粒、粒混じる 黒色土粒少量混じる
4 黒褐色土(10YR3/2) 粘性強 よくしまる 黄褐色ローム粒、ブロック混じる 黒色土粒多く混じる



P－76



P－76
1 黒褐色土(7.5YR3/2) 腐植土にⅣ層が等しく混じる
2 黒色土(7.5YR2/1) 腐植土にブロック状のロームが少量混じる
3 にぶい黄褐色土(10YR4/3) ロームにⅣ層が少量混じる

図Ⅳ－145　土壙墓（P－71・72・76）と出土遺物

(3)土壙

P－3（図Ⅳ－146、表Ⅳ－9）

位　置　Q－28－d

規　模　146×120／142×117／27cm

平面形　円形

長軸方向　－

確認・調査　Ⅴ層上面で黒褐色土のまとまりを確認した。円形で浅い皿状の土壙である。床面および床面近くに炭化物が散在していた。

覆　土　4層に分層した。自然堆積で、覆土2層以下はⅣ層を主体とする。

遺　物　出土しなかった。

時　期　不明である。周辺の遺物から縄文時代前期後半の遺構と推測される。ただし、覆土下位がⅣ層を主体とすることから更に遡る可能性もある。（藤原）

P－5（図Ⅳ－147・148、図版101、表Ⅳ－9・19・24）

位　置　K－17－b・c、L－18－a・d

規　模　307×250／241×184／234cm

平面形　不整形

長軸方向　N－40.5°－W

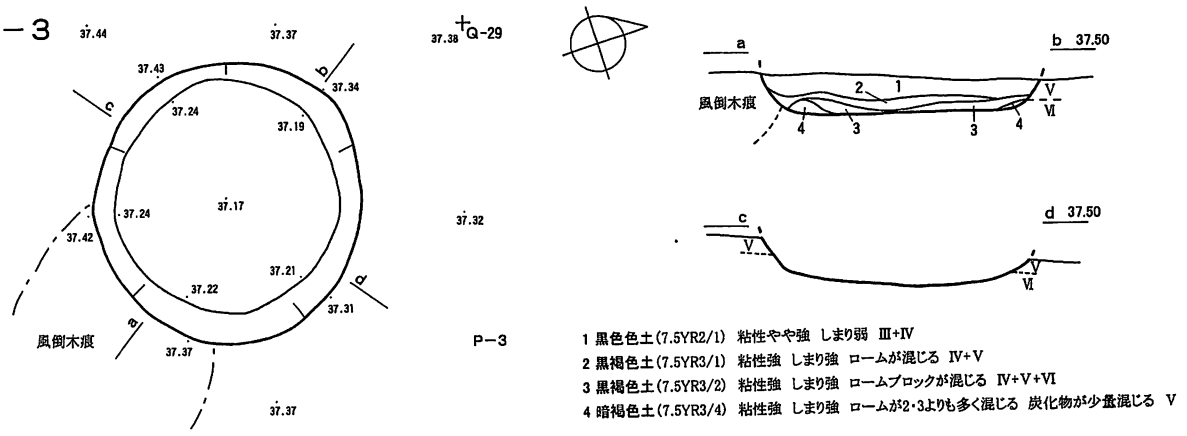
確認・調査　標高38.4m付近に作られたフラスコ状ピットと考えられる大型の土壙である。FC－11と重複しており、そのフレイク・チップが覆土1～7層に流れ込んでいることから、P－5はそれよりも古いと言える。また、周辺の比較的近くにはH－3とP－42が位置している。また、遺跡内における類似の遺構にはP－60がある。

確認面から2.5m以上掘り込まれた壙底面は比較的フラットなもので、確認された時点においても口径よりも底径が勝っており、覆土の様子から見て作られた直後はその差が更に大きかったことが推定される。その形態と埋没の状況から見て、貯蔵の役割を担う所謂「フラスコ状ピット」が有力と考えられるが、若干の疑問点もある。それは調査時点においても、雨天に伴って土壙内が伏流水で満水となり、それが無くなるのに数日から10日以上を要した点である。これは、季節によって貯蔵の役目が果たせないことを意味するのではないだろうか。当時、雨が極端に少なかったか、季節を限定した使われ方がなされていた可能性が高い（例えば秋から冬の季節）。また、遺跡内で検出されたフラスコ状ピットが全部で2基と少ないのは、このような季節によって機能が失われる点が関わっているものと考えられる。

覆　土　流れ込んだ黒色土主体の覆土1～7層と崩落と考えられるローム質土主体の覆土12～17層とに大きく分かれる。埋没のプロセスは、廃棄後にまず周囲のローム質土（Ⅴ層以下）が崩落し、その窪みにⅢ層の黒色土が周囲から流れ込んだものと考えられる。先に述べた雨天時の伏流水がその大きな要因であることは間違いないであろう。FC－11のフレイク・チップは黒色土が流れ込む段階ですぐ近くに投棄されたものと考えられる。覆土9～11層は、この土層断面の中でやや変則的な堆積を見せており、これはこの穴の出入りに必要な「梯子のような構築物」の痕跡なのかもしれない。掘り込み面はⅢ層中と考えられる。

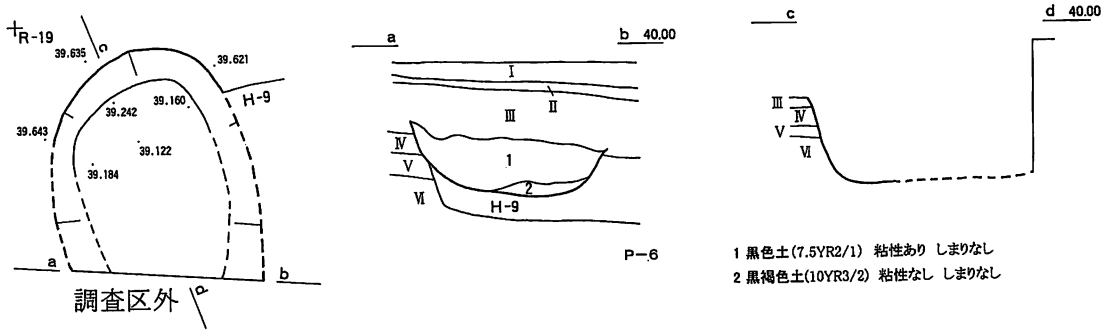
遺　物　遺物は覆土1～7層から1,113点が出土している。数量的には覆土1層のものが大半を占めており、その中でもFC－11の一部が流れ込む頁岩製のフレイク864点が突出している。Ⅱ群b類土器170点、礫など57点がそれに次ぐ。その他にはスクレイパー、両面調整石器、石核、砥石、原石な

P－3



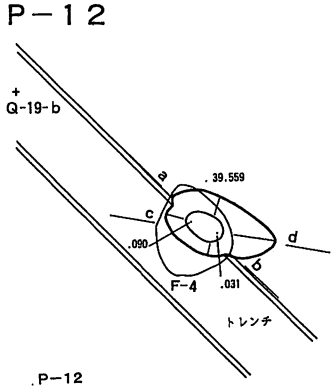
1 黒色土(7.5YR2/1)　粘性やや強　しまり弱　Ⅲ+Ⅳ
2 黒褐色土(7.5YR3/1)　粘性強　しまり強　ロームが混じる　Ⅳ+Ⅴ
3 黒褐色土(7.5YR3/2)　粘性強　しまり強　ロームブロックが混じる　Ⅳ+Ⅴ+Ⅵ
4 暗褐色土(7.5YR3/4)　粘性強　しまり強　ロームが2・3よりも多く混じる　炭化物が少量混じる　Ⅴ

P－6



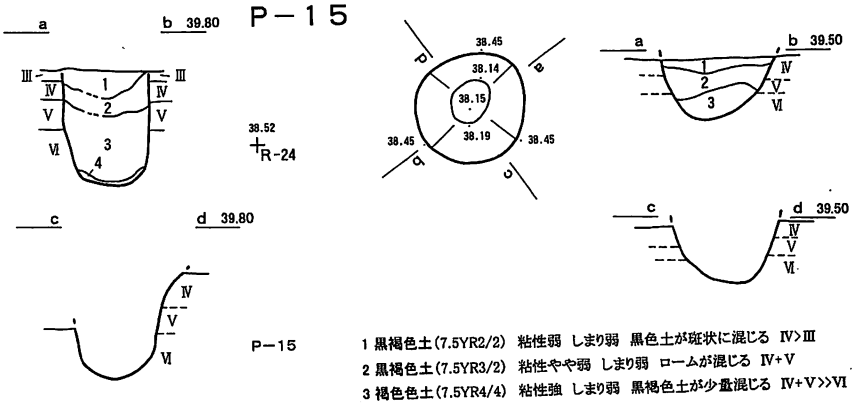
1 黒色土(7.5YR2/1)　粘性あり　しまりなし
2 黒褐色土(10YR3/2)　粘性なし　しまりなし

P－12



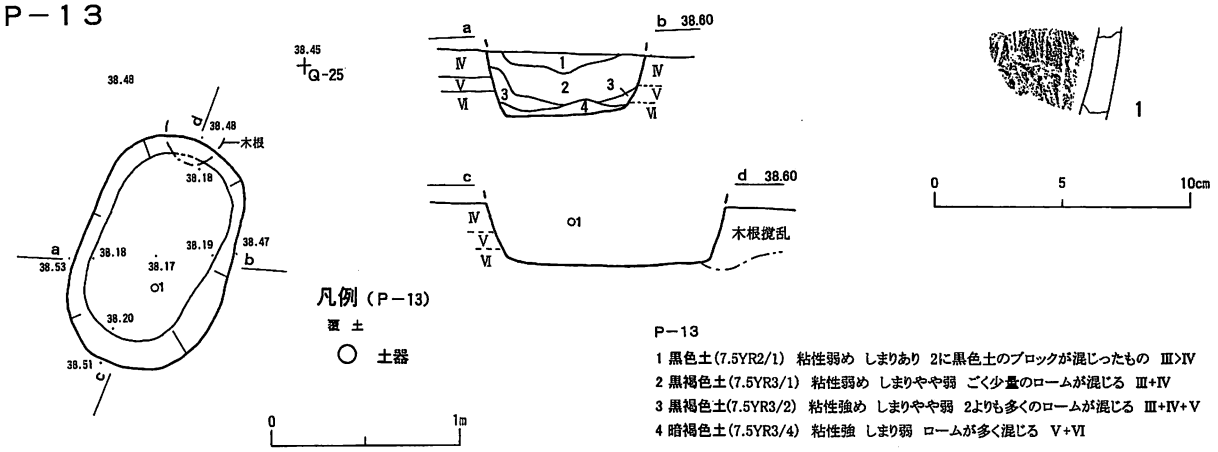
P－12
1 にぶい赤褐色土(5YR5/4)　粘性なし　ややしまる
2 褐灰色土(10YR4/1)　粘性なし　ややしまる　ローム粒を若干含む　埋め戻し
3 にぶい黄橙色土(10YR7/4)　粘性なし　ややしまる　Ⅴ層ブロック、Ⅳ層が斑状に混じる　埋め戻し
4 黒褐色土(10YR3/2)　粘性あり　しまりなし

P－15



1 黒褐色土(7.5YR2/2)　粘性弱　しまり弱　黒色土が斑状に混じる　Ⅳ>Ⅲ
2 黒褐色土(7.5YR3/2)　粘性やや弱　しまり弱　ロームが混じる　Ⅳ+Ⅴ
3 褐色土(7.5YR4/4)　粘性強　しまり弱　黒褐色土が少量混じる　Ⅳ+Ⅴ>>Ⅵ

P－13



1 黒色土(7.5YR2/1)　粘性弱め　しまりあり　2に黒色土のブロックが混じったもの　Ⅲ>Ⅳ
2 黒褐色土(7.5YR3/1)　粘性弱め　しまりやや弱　ごく少量のロームが混じる　Ⅲ+Ⅳ
3 黒褐色土(7.5YR3/2)　粘性強め　しまりやや弱　2よりも多くのロームが混じる　Ⅲ+Ⅳ+Ⅴ
4 暗褐色土(7.5YR3/4)　粘性強　しまり弱　ロームが多く混じる　Ⅴ+Ⅵ

図Ⅳ－146　土壙（P－3・6・12・13・15）と出土遺物

ども出土しており、全て流れ込んだものと考えられる。

（土器） 土器はⅡ群ｂ類土器７点を掲載した。これらの胎土中には繊維が混入する。

１は周辺の包含層出土のもの。本遺構からは未接合の破片３点が出土している。主体は包含層である。頸部に粘土紐が貼付される口縁部である。文様帯は無地に絡条体圧痕文と綾絡文とが施されるもので、前者の施文は粘土紐の上にも施されている。胴部の地紋は多軸絡条体が用いられる。２はＬＲの斜行縄文が施される口縁部、３は器面の上位に原体不明の条痕文、中位にＲＬの斜行縄文、下位にＲの撚糸文が施される口縁部近くの胴部である。４～５は胴部で、地紋は４・５がＲの撚糸文、６がＬＲの斜行縄文である。７は器面にＬＲの斜行縄文が施される底部である。５は同じ個体の土器がＰ－13からも出土している（Ｐ－13－１）。

（石器） 石器類938点の中からここには８～11の４点を掲載した。８は石鏃（ＩＡ２ａ）で、基本的な形態は前期後半に伴うものであるが、その後基部を作出しようとした可能性がある。９は下辺刃部の腹面側に光沢が見られるスクレイパー（ⅢＢ３）である。10・11は石核である（ＶＡ１）。いずれも礫面を残しており、11は比較的安定した打面を有す。

時　期　覆土のⅡ群ｂ類土器から、縄文時代前期後半と考えられる。（皆川）

Ｐ－６（図Ⅳ－146、表Ⅳ－９）

位　置　Ｒ－19－ａ

規　模　（121）×（103）／（109）×（75）／44cm

平面形　楕円形？

長軸方向　Ｎ－84°－Ｗ

確認・調査　Ｈ－９の覆土を調査中、南西部の方向に広がる黒色土の落ち込みを検出した。そのため、Ｈ－９の中心から南西方向にトレンチを設定してⅥ層まで掘り下げた。その結果、壁が確認でき、この落ち込みがＨ－９の覆土２層中から掘り込まれている土壙であることがわかった。東側３分の１程は調査区外におよんでおり、平面形は確認できる部分では楕円形である。壁と壙底は緩やかに連続し、椀状を呈する。

覆　土　黒褐色土のレンズ状堆積を基調とする。自然堆積とみられる。

遺　物　出土していない。

時　期　Ｈ－９より新しいものであるが、覆土中から出土した遺物、掘り込み面から縄文時代前期後半円筒土器下層式の頃のものとみられる。（立田）

Ｐ－12（図Ⅳ－146、図版40、表Ⅳ－９）

位　置　Ｑ－19－ｂ

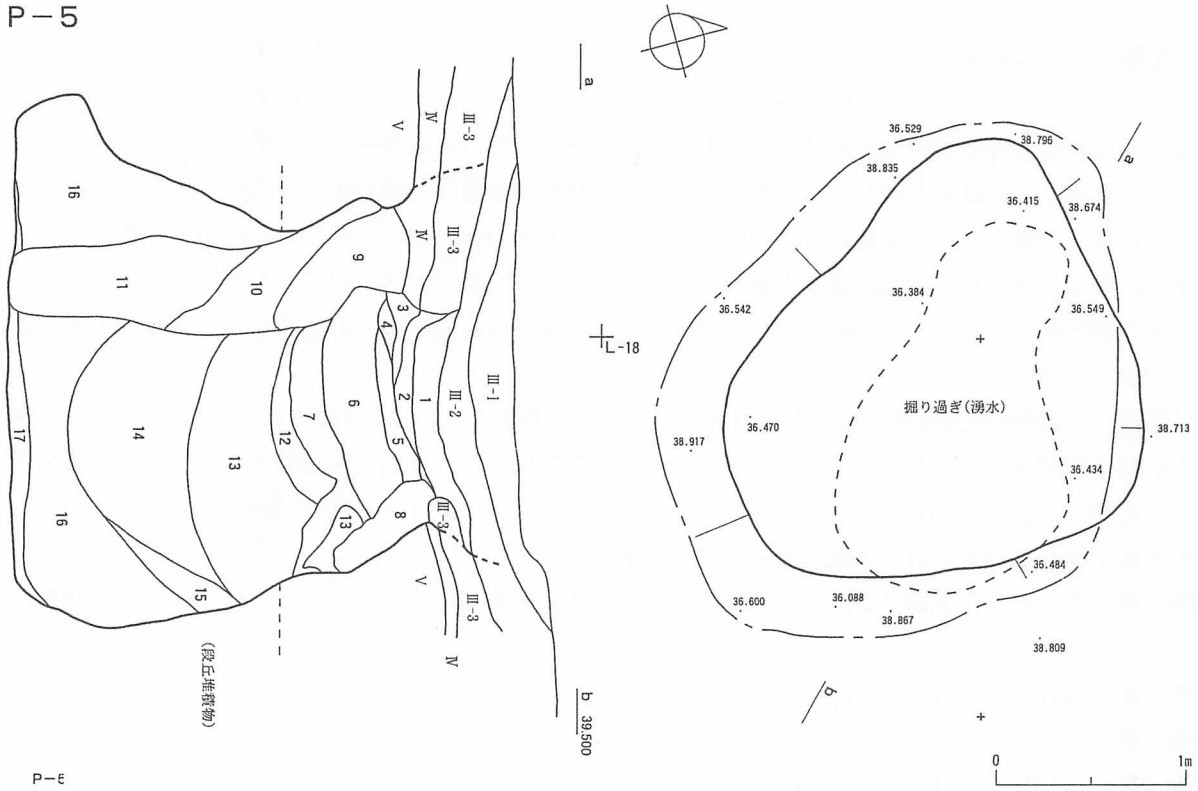
規　模　59×21／32×13／58cm

平面形　楕円形

長軸方向　Ｎ－150°－Ｗ

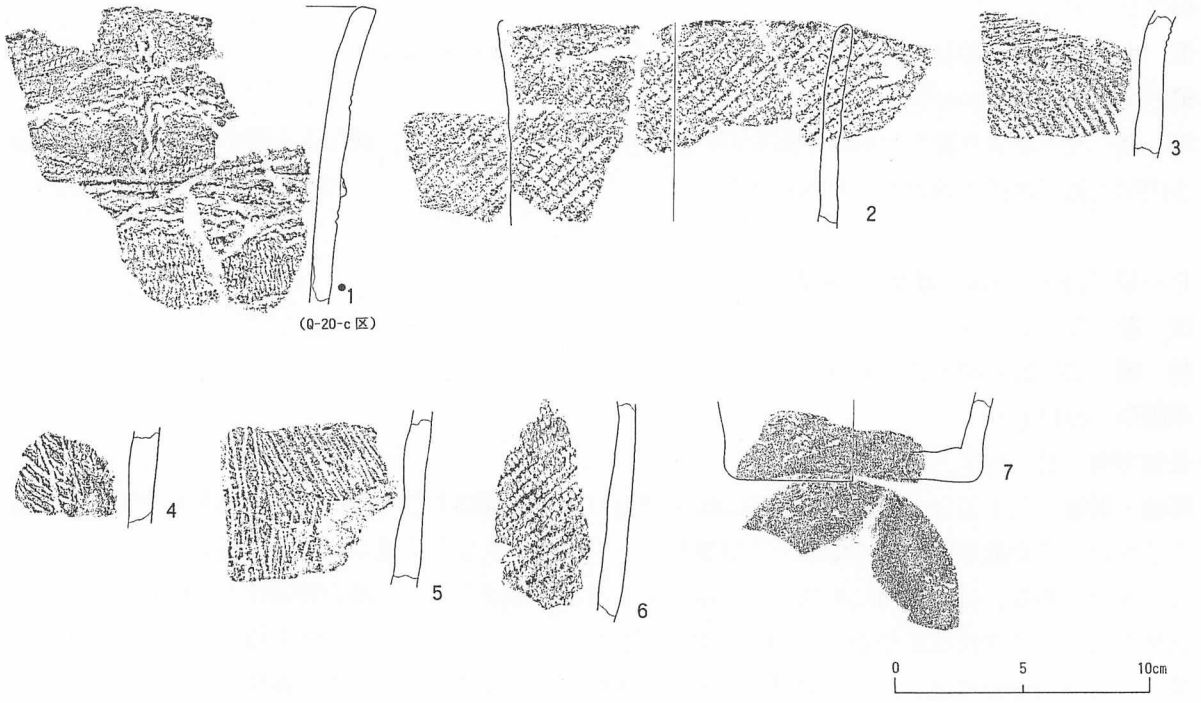
確認・調査　削平部分の範囲とＨ－10の掘上げ土の有無を確認するために設定したトレンチにより検出された。また前年度の調査でＦ－４調査時のトレンチに重なる位置で褐色土の落ち込みとして確認したものである。長軸方向に半截して土壙であることを確認した。土壙の断面は太い柱穴状を呈し、長軸方向の壁は比較的緩やかで、短軸方向では急激に立ち上がる。なお、上面の焼土であるＦ－４は、焼土の色調が中心付近において明瞭で、色調が漸移的に変化することから本遺構の覆土堆積後にその

P－5

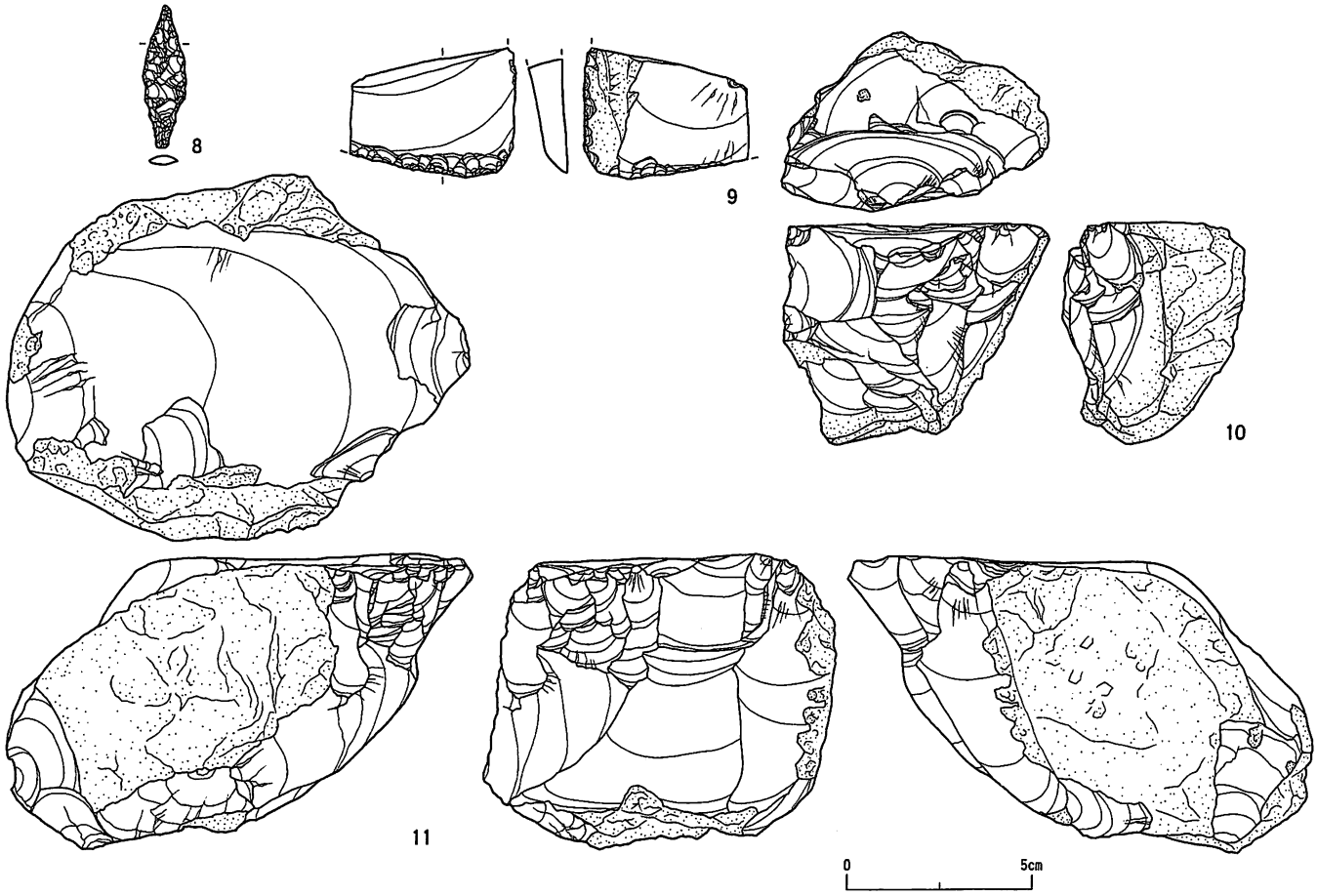


P－ε

1 黒色土(7.5YR1.7/1) Ⅲ層腐植土流れ込み
2 黒色土(7.5YR2/1) 微量のⅣ層を含む
3 黒色土(7.5YR2/1) 微量のⅣ層を含む Ⅳ層の量は2層よりも少ない
4 黒色土(7.5YR2/1) 微量のⅣ層を含む
5 黒色土(7.5YR1.7/1) Ⅲ層腐植土流れ込み
6 黒色土(7.5YR2/1) 微量のⅣ層を含む
7 黒褐色土(10YR3/2) 腐植土とⅣ層が等しく混じる
8 黒褐色土(10YR2/2) 腐植土とⅣ層が等しく混じる層にⅤ層が交互縞状に混じる
9 暗褐色土(10YR3/3) しまりなし 腐植土とⅤ層ロームが等しく互層に混じる
10 灰黄褐色土(10YR4/2) しまりなし ロームに少量の腐植土が混じる
11 にぶい黄褐色土(10YR4/3) しまりなし ロームに微量の腐植土が混じる
12 にぶい黄褐色土(10YR4/3) ややしまりあり ロームに微量の腐植土が混じる
13 褐色土(10YR4/4) かたくしまっている Ⅴ層ローム崩落
14 褐色土(10YR4/4) 13層よりもややもろい Ⅴ層ローム崩落
15 灰褐色土(7.5YR5/2) しまりなし ロームと灰白色還元ロームとの互層
16 褐色土(10YR4/6) 粘性あり しまりやや欠ける ロームに灰白色還元ロームが少量混じる
17 灰黄褐色土(10YR4/2) 粘性にとむ しまりなし 16層に微量の腐植土が混じるように思える



図Ⅳ－147　土壙（Ｐ－５）と出土遺物(1)



図Ⅳ－148　Ｐ－５出土の遺物(2)

場で形成されたものである可能性が高い。

覆　土　４層に分層した。にぶい黄褐色土を基調とする。Ⅴ層、Ⅵ層に相当する黄褐色土がブロック状に混じるため、埋め戻しによる人為的堆積とみられる。

遺　物　出土していない。

時　期　周囲から出土する遺物から、縄文時代前期後半円筒土器下層式の時期とみられる。（立田）

Ｐ－13（図Ⅳ－146、図版40、表Ⅳ－９）

位　置　Ｑ－24－ｄ

規　模　127×103／76×62／35cm

平面形　楕円形

長軸方向　Ｎ－53°－Ｗ

確認・調査　Ⅳ層を５cmほど掘り下げた際に黒褐色土のまとまりを確認した。壙底面は硬くしまっており、炭化物が少量散在している。また、北側には木根攪乱があり、土壙は根に引きずられるようにたまったＫｏ－ｇを切っていた。平面プランや覆土の堆積状況から土壙墓の可能性もある。

覆　土　4層に分層した。黒色土もしくはロームがブロック状に混じっており、埋め戻しと考えられる。

遺　物　覆土１層から土器１点が出土した。１はＲの撚糸文が施された胴部で同じ個体の土器がＰ－５からも出土している（Ｐ－５－５）。（皆川）

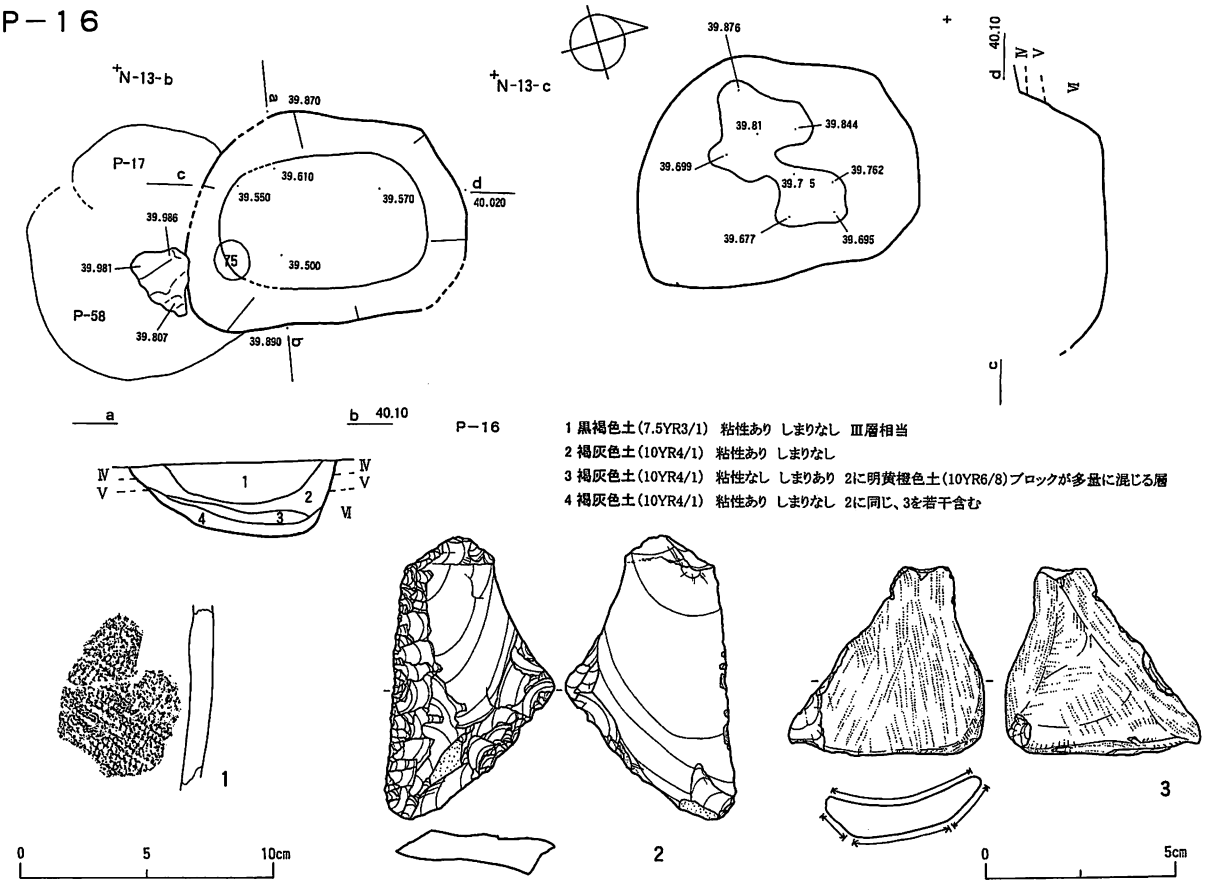
時　期　覆土出土の土器、埋土の状況から縄文時代前期後半の遺構である。（藤原）

Ｐ－15（図Ⅳ－146、表Ⅳ－９）
位　置　Ｑ－24－ｂ、Ｒ－24－ａ
規　模　61×24／56×19／33cm
平面形　円形
長軸方向　－
確認・調査　Ⅳ層を10cmほど掘り下げた際に黒褐色土が円形にまとまっていた。半截するとしまりの弱いⅥ層中で立ち上がった。自然堆積とは推測し難く、木根攪乱の可能性もある。
覆　土　３層に分層した。
遺　物　出土しなかった。
時　期　不明である。周辺の遺物から縄文時代前期後半と推測される。　（藤原）

Ｐ－16（図Ⅳ－149、図版41・102、表Ⅳ－９・19・24）
位　置　Ｎ－13－ｂ
規　模　153×103／122×77／40cm
平面形　不整楕円形
長軸方向　Ｎ－16°－Ｗ
確認・調査　Ⅳ層上面を精査中、黒褐色土の落ち込みを確認した。短軸方向にトレンチを設定してⅥ層まで掘り下げたところ、壁・壙底が確認できた。覆土１層を除去した後、長軸方向のトレンチを延長してＶ層まで掘り下げた。この結果新たに南側に重複する２基の土壙Ｐ－17とＰ－58を検出した。本遺構が新しいが、Ｐ－58との関係は不明である。また覆土２層の上位ではフレイクの集中域が検出され、南側の壙口には大きな礫を伴っている（図Ⅳ－149）。この礫はひと抱え程の大きさで重量は19kgである。壁は南西側でやや急、他は緩やかである。壙底は南に向かって幾分傾斜している。
覆　土　４層に分層した。３層は黄橙色土ブロックが混じる褐灰色土である。成因は不明であるが、削平部分の排土の可能性もある。
遺　物　覆土から土器片14点、フレイク1,410点、スクレイパー１点、石核１点、たたき石１点、半円状扁平打製石器１点、砥石１点、台石・石皿１点が出土している。　（立田）
１はⅡ群ｂ類土器。斜行縄文が施された胴部である。　（皆川）
２はスクレイパー（ⅢＢ２ｂ）である。末端に大きなヒンジのみられる頁岩の剥片を利用し、背面左側縁に直線上の刃部が作出されるものである。３は砥石（ⅨＢ２）である。緻密な砂岩を用いている。ほぼ全面が使用され、そのうち１面はよく使い込まれくぼんでいる。出土層位は１、２とも覆土１層である。
時　期　周囲から出土している遺物から、縄文時代前期後半円筒土器下層式の時期ものとみられる。　（立田）

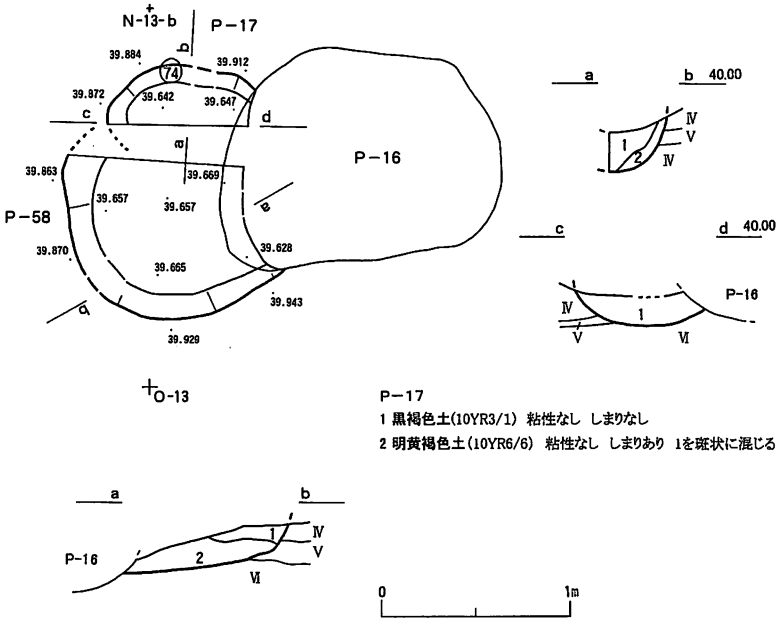
Ｐ－17（図Ⅳ－149、表Ⅳ－９）
位　置　Ｎ－12－ｃ、Ｎ－13－ｂ
規　模　（74）×（64）／（31）×（22）／18cm
平面形　楕円形？
長軸方向　Ｎ－156°－Ｗ
確認・調査　Ｐ－16のトレンチ調査中に落ち込みとして確認した。直交するようにトレンチを設け、

P－16



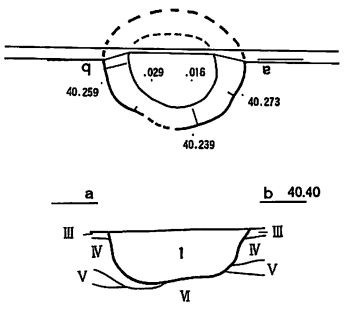
P－16
1 黒褐色土(7.5YR3/1)　粘性あり　しまりなし　Ⅲ層相当
2 褐灰色土(10YR4/1)　粘性あり　しまりなし
3 褐灰色土(10YR4/1)　粘性なし　しまりあり　2に明黄橙色土(10YR6/8)ブロックが多量に混じる層
4 褐灰色土(10YR4/1)　粘性あり　しまりなし　2に同じ、3を若干含む

P－17
P－58



P－17
1 黒褐色土(10YR3/1)　粘性なし　しまりなし
2 明黄褐色土(10YR6/6)　粘性なし　しまりあり　1を斑状に混じる

P－19



P－19
1 黒褐色土(10YR3/1)　粘性なし　しまりなし　層界は不明瞭

P－58
1 褐灰色土(10YR5/1)　粘性やや弱　しまりあり　黄褐色ローム粒、暗褐色土ブロック混じる
2 暗褐色土(10YR3/3)　粘性あり　しまりあり　黄褐色ロームブロック混じる

図Ⅳ－149　土壙（P－16・17・19・58）と出土遺物

Ⅵ層まで掘り下げた結果、壁を確認できた。Ｐ－16とは重複関係にあり、本遺構が古い。確認できた部分の壁はやや急で壙底は丸く、椀状を呈する。

覆　土　２層に分層した。レンズ状を呈する黒褐色土を基調とする。自然堆積とみられる。

遺　物　出土していない。

時　期　周囲から出土している遺物から、縄文時代前期後半円筒土器下層式の時期とみられる。(立田)

Ｐ－19（図Ⅳ－149、表Ⅳ－９）

位　置　Ｎ－14－ｂ・ｃ、Ｏ－14－ａ・ｄ

規　模　75×46／（40）×（28）／31cm

平面形　円形？

長軸方向　Ｎ－164°－Ｗ

確認・調査　Ｎ－14区の調査終了後壁面を精査したところ、椀状の断面形を確認した。グリッドに直交するトレンチを設定してⅥ層まで掘り下げた結果、短軸方向で壁の立ち上がりを確認し土壙であることがわかった。壁はやや急で、壙底は北西の部分がややくぼんでいる。

覆　土　黒褐色土の単一層である。自然堆積とみられる。

遺　物　出土していない。

時　期　周囲から出土する遺物から、縄文時代前期後半円筒土器下層式の時期とみられる。（立田）

Ｐ－20（図Ⅳ－150、表Ⅳ－９）

位　置　Ｏ－11－ｂ

規　模　62×39／35×23／23cm

平面形　円形？

長軸方向　Ｎ－121.5°－Ｗ

確認・調査　Ｍ－２の範囲を確認するために設定したトレンチに壁の立ち上がりが現れていたもので、周辺をⅣ層上面まで掘り下げた時点で黒褐色土の落ち込みとして確認できた。Ｍ－２のトレンチに直交するトレンチを設定してⅥ層まで掘り下げ、土壙の形状を確認できた。壁は急で壙底は椀状を呈する。

覆　土　褐灰色土の単一層である。

遺　物　出土していない。

時　期　詳細な時期は不明であるが、検出面と覆土の色調から縄文時代のものと考えられる。(立田)

Ｐ－21（図Ⅳ－150、図版41、表Ⅳ－９）

位　置　Ｒ－21－ａ・ｄ

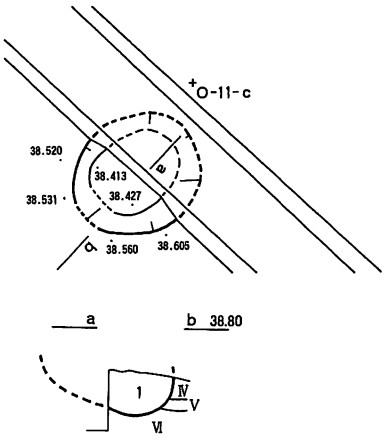
規　模　（149）×（129）／234×199／38cm

平面形　楕円形？

長軸方向　Ｎ－70.5°－Ｗ

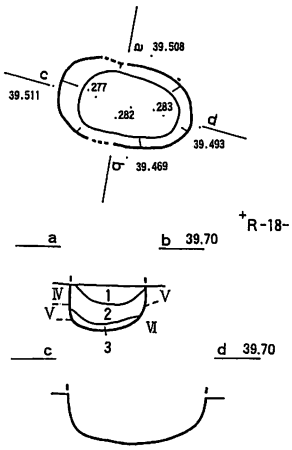
確認・調査　Ⅳ層を10cmほど掘り下げた際に黒褐色土のまとまりを確認した。調査区に沿ってトレンチを入れると不明瞭ながら立ちあがりを確認したので遺構とした。全体の２分の１ほどは調査区の範囲外に及んでいる。床面は平坦で硬くしまっているが、壁面は明瞭ではない。断面観察からⅣ層中の掘り込みで、Ｋｏ－ｇが混じる層（Ⅲｂ層とした）がより上位にある。なお、風倒木痕により一部攪

P－20



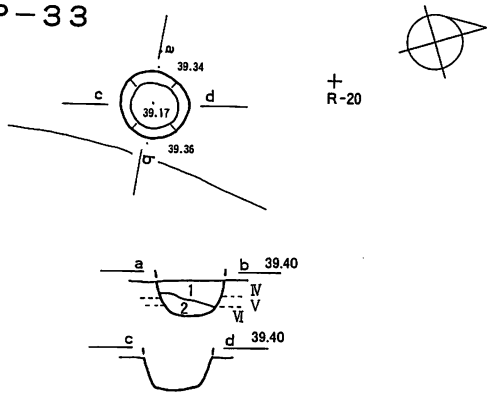
P－20
1 褐灰色土(10YR4/1)　粘性なし　しまりあり
　明黄褐色土(10YR6/6)、黒色土(10YR2/1)若干混じる

P－23



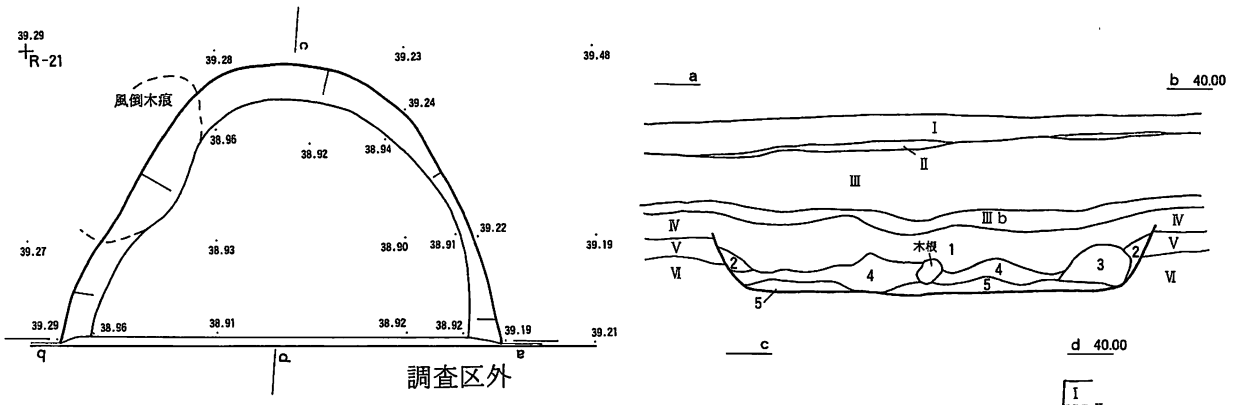
P－23
1 褐灰色土(10YR4/1)　粘性なし　しまりあり　炭化物、焼土粒が少量混じる
2 黒褐色土(10YR3/1)　粘性なし　しまりあり　黄褐色土粒を少量含む
3 黒色土(10YR2/1)　粘性あり　しまりなし

P－33



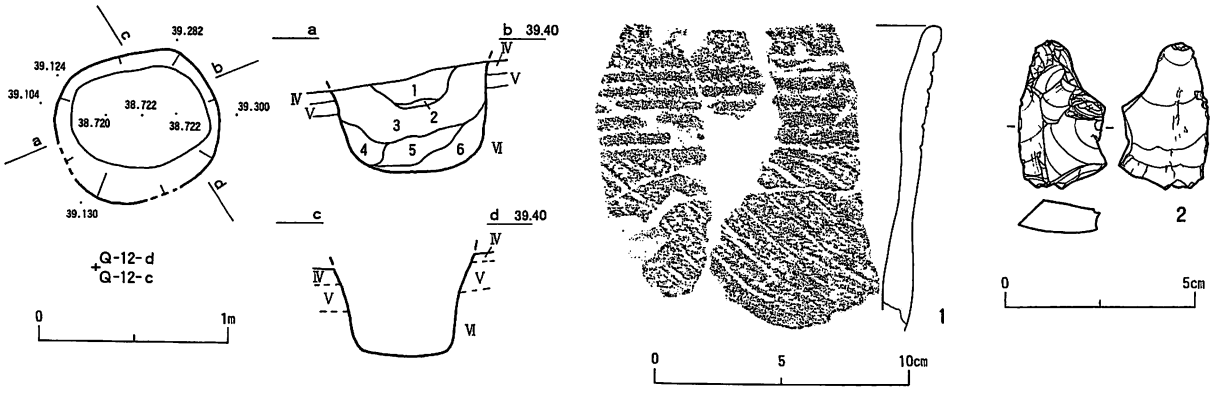
P－33　1 黒褐色土(7.5YR2/2)　しまり弱　ロームが少量混じる
　　2 暗褐色土(7.5YR3/3)　1よりもロームが多く混じる

P－21



P－21
1 黒褐色土(7.5YR3/2)　粘性やや強　しまりやや弱　ロームが混じる　Ⅳ
2 褐色土(7.5YR4/4)　粘性やや強　しまり弱　黒褐色土が少量混じる　Ⅴ
3 黒褐色土(7.5YR2/2)　粘性弱　しまり弱　少量のロームが混じる　Ⅲ+Ⅳ>>Ⅴ
4 暗褐色土(7.5YR3/4)　粘性やや強　しまり弱　ロームブロックが混じる　Ⅳ+Ⅴ
5 褐色土(7.5YR4/4)　粘性強　しまりやや強　Ⅴ
Ⅲb 黒褐色土(7.5YR2/2)　粘性やや強　しまり弱　暗赤褐色土(5YR3/2)=ko-gがごく少量混じる

P－26



P－26　1 黒色土(7.5YR2/1)　粘性なし　しまりなし
　　2 褐灰色土(10YR4/1)　粘性ややあり　しまりなし　橙色土(5YR6/6)焼土粒を混じる
　　3 褐灰色土(10YR4/1)　粘性ややあり　しまりなし
　　4 にぶい黄橙色土(10YR5/4)　粘性ややあり　しまりなし
　　5 明黄褐色土(10YR6/8)　粘性ややあり　しまりなし
　　6 にぶい黄褐色土(10YR5/3)　粘性ややあり　しまりなし　明黄褐色土(10YR6/8)ブロック混じる

図Ⅳ－150　土壙（P－20・21・23・26・33）と出土遺物

乱を受け平面形はややゆがんでいる。
覆　土　５層に分層した。自然堆積と推測され、全体的にしまりが弱い。
遺　物　出土しなかった。
時　期　Ｋｏ－ｇとの関係や掘りこみ面から遺跡の主体となる縄文時代前期後半よりも古いと推測される。（藤原）

Ｐ－23（図Ⅳ－150、図版41、表Ⅳ－９）
位　置　Ｑ－18－ｂ
規　模　72×53／43×32／23cm
平面形　楕円形
長軸方向　Ｎ－147°－Ｗ
確認・調査　Ⅴ層上面を精査中に炭化物の混じる灰褐色土の落ち込みを検出した。落ち込みの形状が不明瞭であったため、短軸方向にトレンチを設定して５cm下げたところ、明瞭な輪郭を検出した。そこで南西半分を半截して土壙であることがわかった。壁は急激に立ち上がり、壙底は椀状を呈する。なお、壙底から得られた炭化物の14Ｃ補正年代は4680±40ｙＢＰという結果が出ている（Ⅳ章２）。
覆　土　３層に分層した。１層は炭化物、焼土粒子の混じる褐灰色土の堆積である。２層は黒褐色土にロームブロックが混じる埋め戻しとみられる状態を呈する。３層とした壙底付近の堆積はやや粘性がある黒褐色の堆積である。規模の点でやや無理があるが、土壙墓の可能性も考えられる。
遺　物　覆土から土器６点、フレイク３点、礫・礫片４点が出土している。
時　期　周辺で検出される遺構の時期、Ｃ14年代の分析結果から縄文時代前期後半円筒土器下層式の時期のものである。（立田）

Ｐ－26（図Ⅳ－150、図版41・102、表Ⅳ－９・19・24）
位　置　Ｑ－12－ａ・ｄ
規　模　87×73／79×51／50cm
平面形　不整円形
長軸方向　Ｎ－168°－Ｗ
確認・調査　Ⅴ層上面を精査中にやや汚れたⅤ層が落ち込む部分を検出した。落ち込みが不明瞭なためトレンチ設けⅥ層まで掘り下げたところ、椀状を呈する断面を確認した。東側を半截して壙底、壁を検出して土壙であることがわかった。壁は急で壙底はほぼ平坦である。
覆　土　６層に分層した。大きくは上位に堆積する褐灰色土と下位のにぶい黄褐色土にわかれる。２層の褐灰色土は橙色の焼土粒が混じる。
遺　物　土器４点、Ｕフレイク１点、フレイク26点、たたき石１点、礫・礫片７点が出土している。
１はⅡ群ｂ類土器。５条のＬＲの縄線文が巡らされた口縁部で、地紋は合撚と考えられる。（皆川）
２はＵフレイク（ＶＢ２）、石材は頁岩で、出土層位は覆土１層である。
時　期　周囲から出土する遺物から、縄文時代前期後半円筒土器下層式の時期とみられる。（立田）

Ｐ－33（図Ⅳ－150、図版41、表Ⅳ－９）
位　置　Ｒ－19－ｄ
規　模　36×25／36×24／19cm

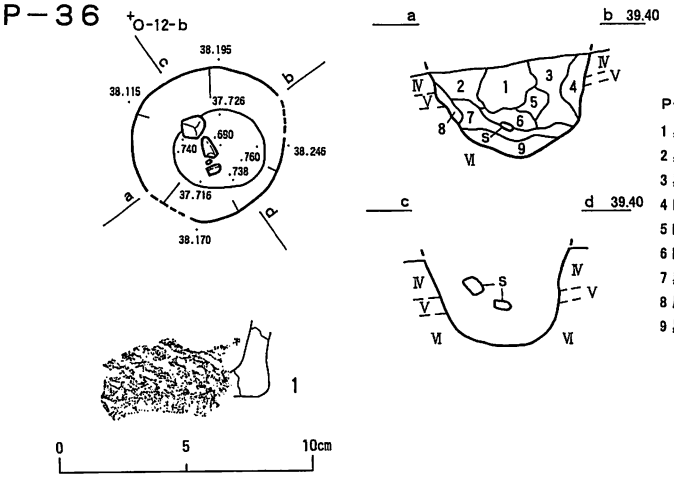
平面形　円形
長軸方向　－
確認・調査　Ⅳ層を15cmほど掘り下げた際に黒褐色土の円形のまとまりを確認した。壙底面は皿状に窪んでいる。
覆　土　２層に分層した。ロームが多く混じり、埋め戻しと考えられる。
遺　物　出土しなかった。
時　期　不明である。周辺の遺物や覆土の状況から縄文時代前期後半の遺構と推測される。（藤原）

Ｐ－36（図Ⅳ－151、図版42・102、表Ⅳ－９・24）
位　置　Ｏ－12－ｂ
規　模　85×46／78×36／51cm
平面形　円形
長軸方向　－
確認・調査　Ⅴ層上面を精査中、黒褐色土の落ち込みを確認した。段丘斜面に位置していたため、中心をとおり、斜面に直交する方向にトレンチを設けてⅥ層まで掘り下げたところ、壙底と壁を確認して土壙であることがわかった。土壙の形状は椀状を呈するが、東西方向では小さな平坦面がある。
覆　土　９層に分層した。黒褐色土を基調とする。
遺　物　覆土から土器１点、石核、原石各１点、フレイク６点、たたき石２点、礫・礫片１点が出土している。１は、斜行縄文の施されたⅢ群ｂ類土器の底部。２は石核（ＶＡ１）である。２面に表皮が残っており、上面右側縁に細部調整が認められる。残核をスクレイパー状に利用したものとみられる。３はたたき石（Ⅶ１）。たたき痕は不明瞭である。石材は１が頁岩、２は安山岩である。１は覆土３層、２は覆土６層の出土である。
時　期　周囲で出土する遺物から、縄文時代前期後半円筒土器下層式の時期のものとみられる。（立田）

Ｐ－37（図Ⅳ－151、表Ⅳ－９）
位　置　Ｏ－19－ｄ
規　模　90×51／72×39／41cm
平面形　楕円形
長軸方向　Ｎ－10.5°－Ｗ
確認・調査　Ⅳ層を10cmほど掘り下げた際に黒色土のまとまりを確認した。壁面は急角度で立ち上がり、壙底面は皿状に窪む。
覆　土　３層に分層した。自然堆積である。
遺　物　出土しなかった。
時　期　周辺の遺物や覆土の状況から縄文時代前期後半の遺構と推測される。（藤原）

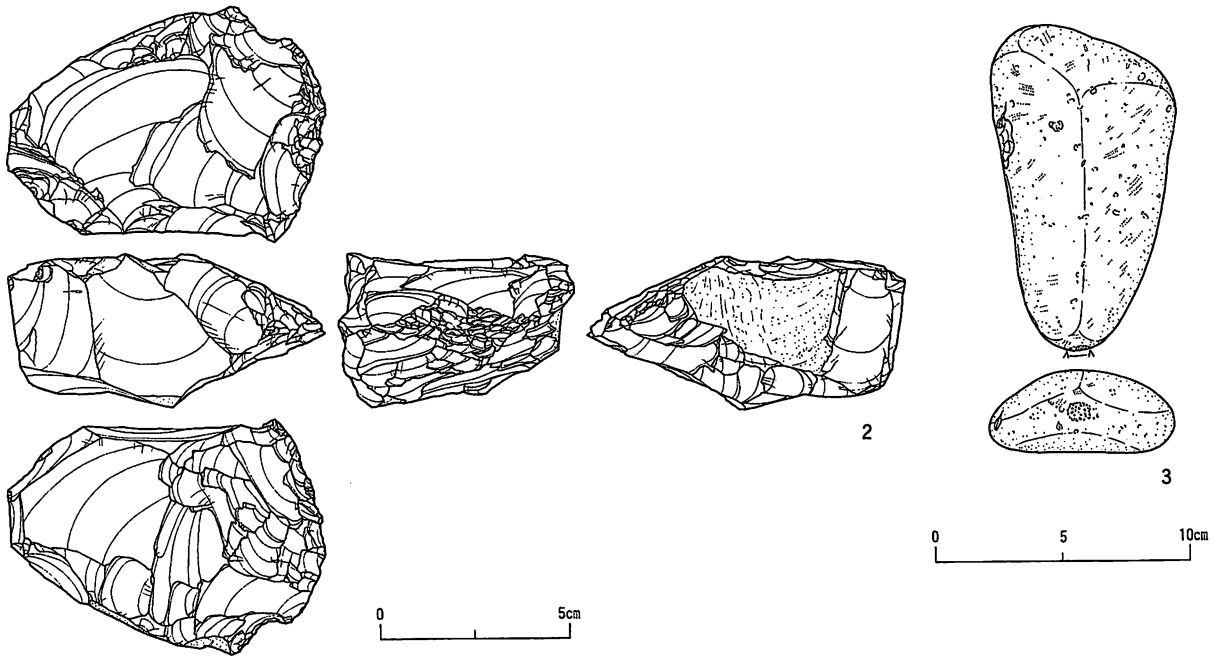
Ｐ－40（図Ⅳ－152、表Ⅳ－９）
位　置　Ｎ－９－ｃ・ｄ
規　模　153×114／134×91／41cm
平面形　不整円形

P－36

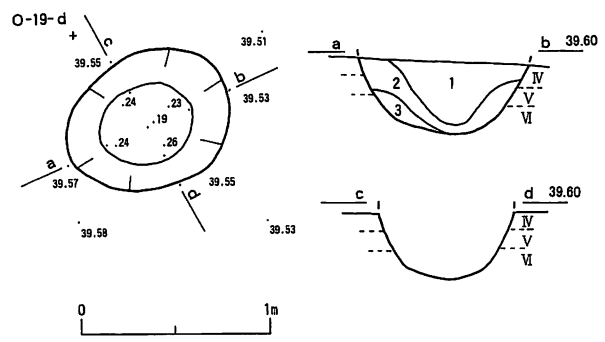


P－36

1 黒褐色土(10YR2/2)　粘性あり　しまりあり　赤褐色小礫混じる
2 黒褐色土(10YR2/3)　粘性あり　しまりあり
3 黒褐色土(10YR3/2)　粘性やや強　しまりあり　炭化物わずかに混じる
4 にぶい黄褐色土(10YR4/3)　粘性やや強　しまりあり　小礫混じる
5 暗褐色土(10YR3/3)　粘性あり　しまりあり　褐色土ブロック(しまりなく、粒子粗い)混じる
6 暗褐色土(10YR3/3)　粘性強　しまりやや弱　黄褐色(2.5Y5/3)の大ブロックが混じる
7 黒褐色土(10YR3/2)　粘性強　しまりやや弱　黄褐色ローム細粒少量混じる
8 灰黄褐色土(10YR4/2)　粘性強　しまりよい
9 黒色土(10YR2/1)　粘性強　しまり弱　黄褐色土ブロックが斑状に少量混じる



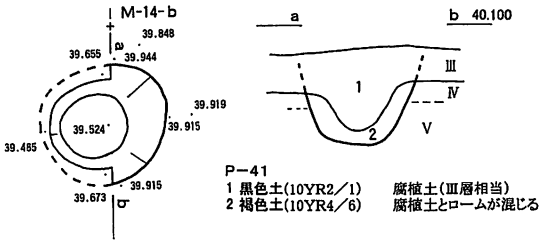
P－37



P－37

1 黒色土(7.5YR2/1)　粘性弱　しまり弱
2 黒褐色土(7.5YR3/2)　粘性やや強　しまり弱　ロームが混じる
3 暗褐色土(7.5YR3/4)　粘性弱　しまり強　黒色土が少量混じる

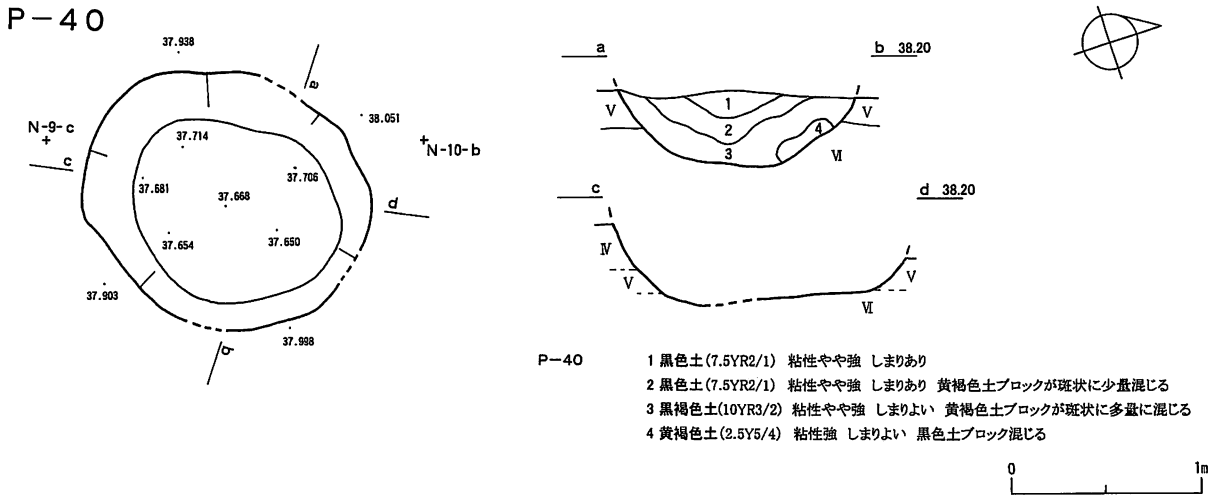
P－41



P－41

1 黒色土(10YR2／1)　腐植土(Ⅲ層相当)
2 褐色土(10YR4／6)　腐植土とロームが混じる

図Ⅳ－151　土壙（P－36・37・41）と出土遺物



図Ⅳ－152　土壙（P－40）

長軸方向　N－144.5°－W

確認・調査　Ⅴ層上面を精査中に黒褐色土の落ち込みを検出した。中心を通るようにトレンチを設定してⅥ層まで掘り下げた。その結果、椀状を呈する断面形を確認した。さらに直交するトレンチを設けⅥ層まで掘り下げ、同様な壁を確認して土壙であることがわかった。しかし、壙底は凸凹がある。木根による撹乱の可能性もある。

覆　土　4層に分層した。レンズ状の黒褐色土の堆積を基調とする。自然堆積とみられる。

遺　物　出土していない。

時　期　詳細な時期は不明であるが、覆土の色調から縄文時代のものとみられる。（立田）

P－41（図Ⅳ－151、表Ⅳ－9）

位　置　M－13－c、M－14－b

規　模　(69)×35／(61)×32／30cm

平面形　円形？

長軸方向　N－14°－W

確認・調査　標高39.6～40.0mに作られた小型の土壙である。周辺の比較的近くには土壙墓と考えられるP－1・56などが位置している。しかし、これらとの関連性を知り得る情報は得られていない。なお、上位の半分近くは前年度の調査によって既に失われている状態であった。性格は不明である。

覆　土　覆土1層は流れ込んだ黒色土主体の堆積層である。覆土2層は流れ込みと考えられるがローム粒を多く含む。掘り込み面はⅢ層中と考えられる。

遺　物　遺物は出土していない。

時　期　周囲の遺構との関連性から縄文時代前期後半の可能性がある。（皆川）

P－42（図Ⅳ－153～157、図版42・103、表Ⅳ－9・19・24）

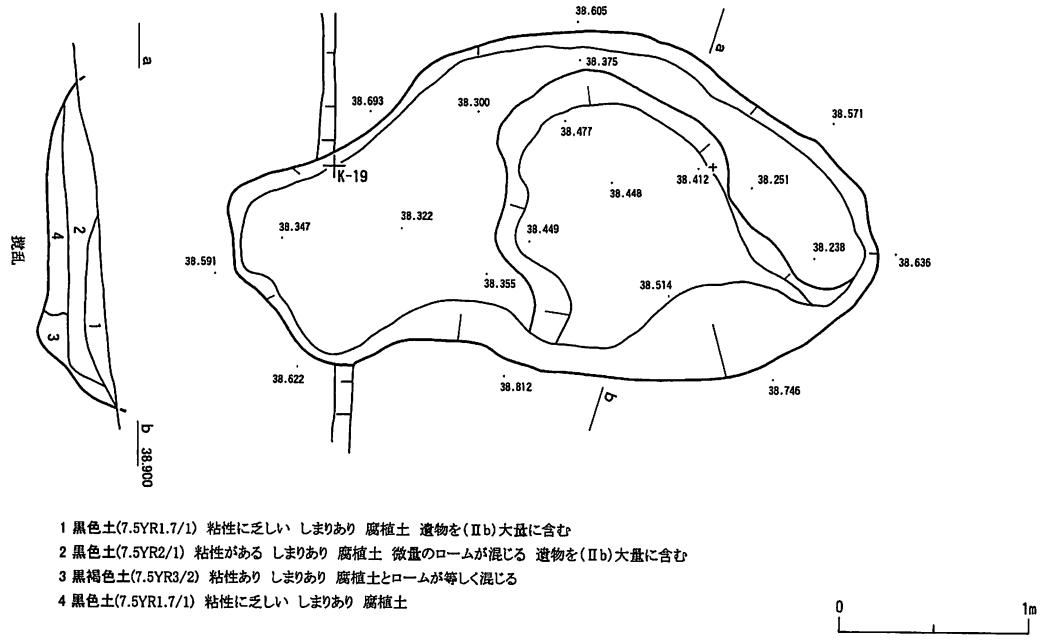
位　置　J－19－b・c、K－18－d、K－19－a・d

規　模　338×320／181×158／37cm

平面形　不整形

長軸方向　N－164°－W

P－42



P－42
1 黒色土(7.5YR1.7/1) 粘性に乏しい しまりあり 腐植土 遺物を(Ⅱb)大量に含む
2 黒色土(7.5YR2/1) 粘性がある しまりあり 腐植土 微量のロームが混じる 遺物を(Ⅱb)大量に含む
3 黒褐色土(7.5YR3/2) 粘性あり しまりあり 腐植土とロームが等しく混じる
4 黒色土(7.5YR1.7/1) 粘性に乏しい しまりあり 腐植土

図Ⅳ－153　土壙（P－42）

確認・調査　標高38.4m付近に位置する土壙である。人為的な掘り込みとするにはかなりの確率で疑わしいと言えるが、壙内から大量の遺物が出土することから土壙として扱うこととした。本来的には風倒木を原因とする自然の窪みであり、その埋没過程の一時期に大量の遺物を投棄したものと考えられる。土器の個体識別によって得られた遺構間の関連性は、本遺構の覆土１層出土の土器とＨ－４・７・８などから出土したものとの間に認められる。Ｈ－７のＨＰ－１から同一個体の土器が出土していることから、本遺構はＨ－４よりも古いと考えられる。また、Ｈ－７の覆土２層、Ｈ－８の覆土１層からも同一個体と考えられる土器が出土しており、本遺構はＨ－７よりは古くＨ－８と同時期ぐらいの可能性がある。特にＨ－８の覆土１層にも大量の遺物が投棄されており、本遺構の遺物の出土状況と良く類似する。

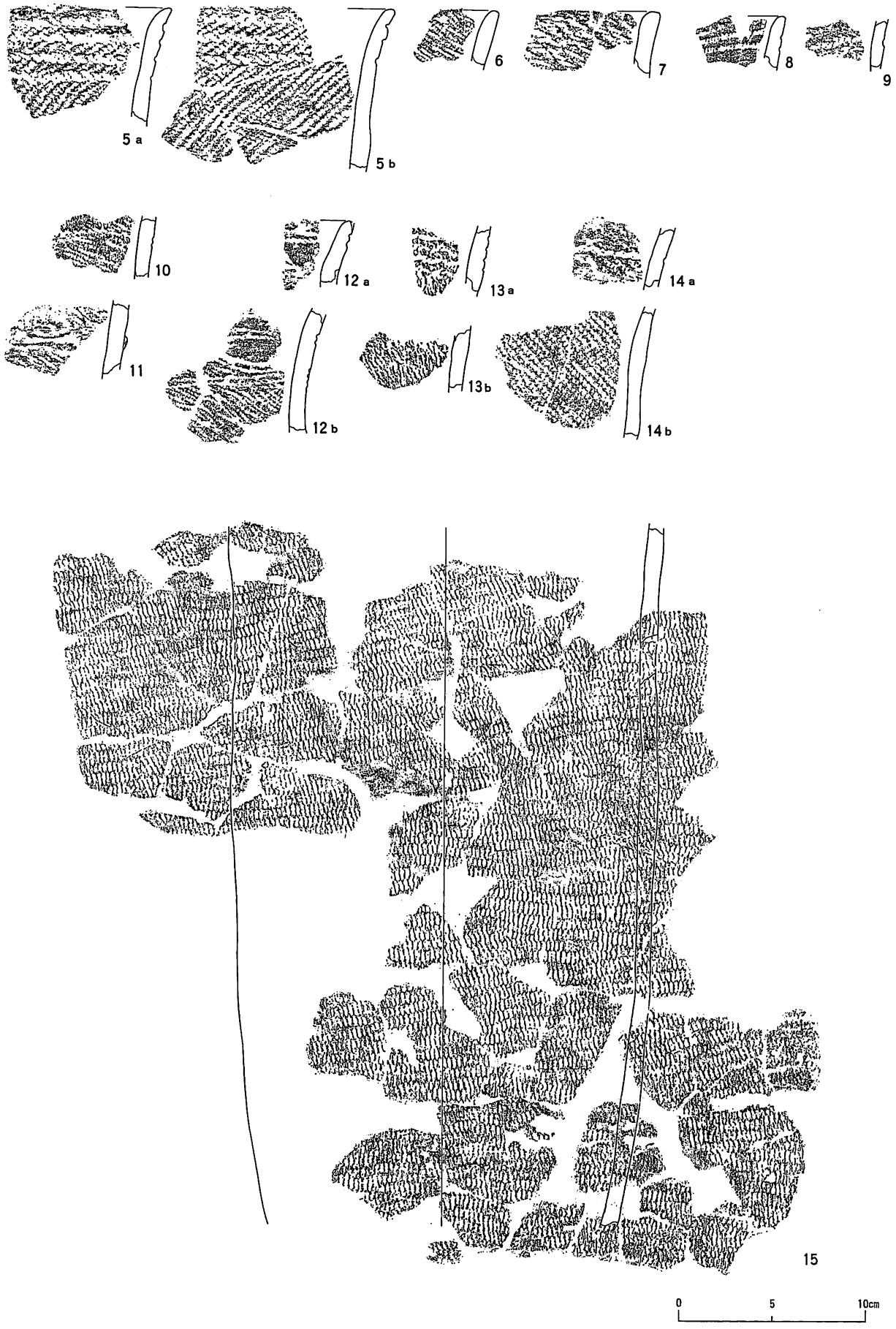
覆　土　流れ込んだ黒色土を主体とする覆土１～４層で埋没している。遺物の大半は覆土１層から出土している。

遺　物　遺物は覆土１・２層から1,743点が出土しており、数量的には覆土１層のものが1,739点と圧倒的に多い。その中ではⅡ群ｂ類土器の約1,300点強が突出しており、礫など247点、頁岩製のフレイク146点がそれに次ぐ。その他には石鏃、石錐、スクレイパー、両面調整石器、石核、Ｒフレイク、Ｕフレイク、たたき石、砥石なども出土している。全て投棄されたものと考えられる。

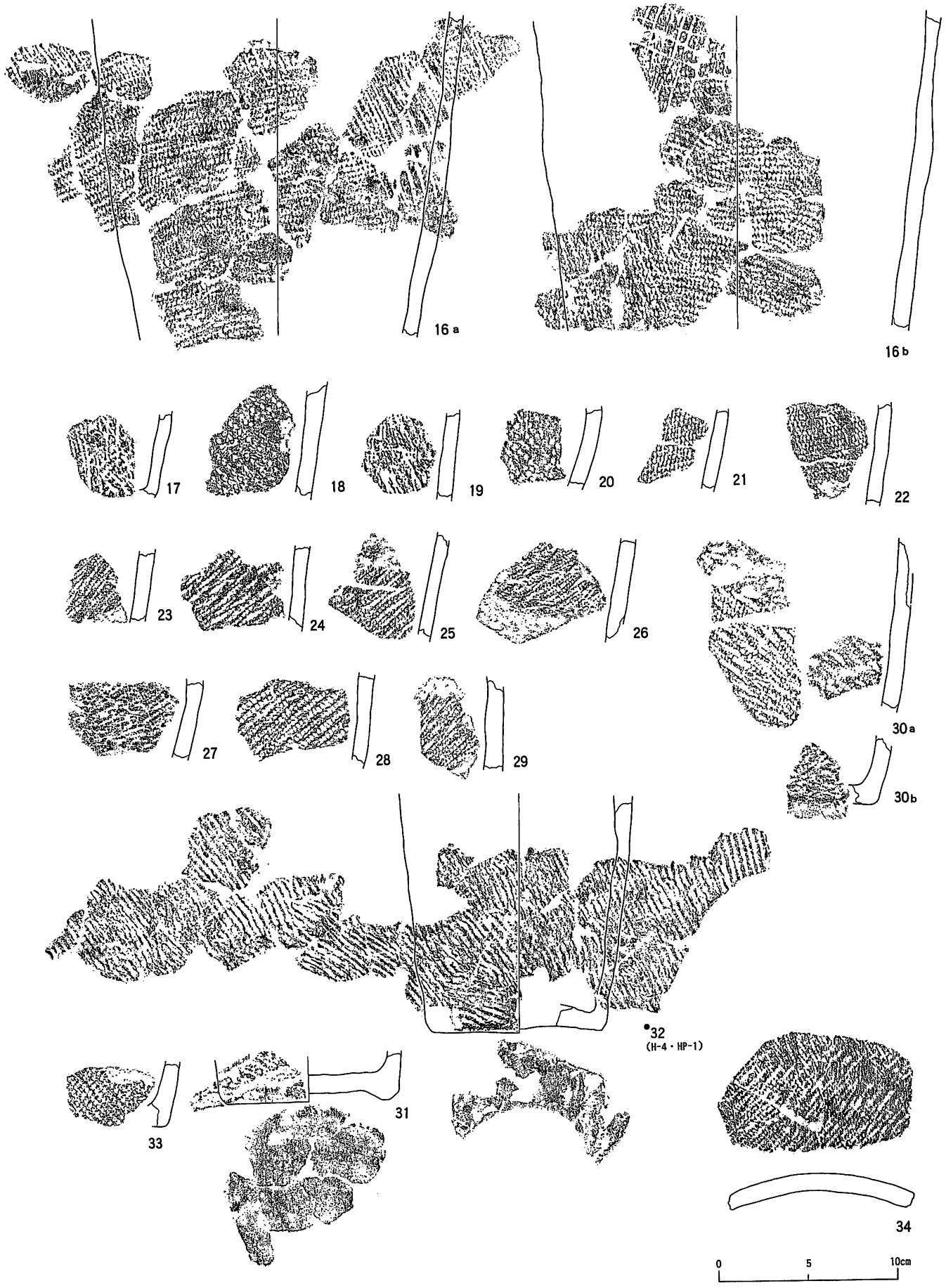
（土器）土器は識別されたⅡ群ｂ類土器34点を掲載した。全て覆土１層からの出土で、胎土には繊維を含む。１ａ～ｃは低い山形突起を有する開きの大きな口縁部で、その口唇の断面は丸形を呈している。口縁部の文様帯には細いＲの撚糸を使った絡条体圧痕文と同じくＲの撚糸による綾絡文とによって構成されており、その下位の文様帯と胴部との境には棒状の施文具を用いた横長の刺突文が施された粘土紐の貼付と綾絡文が施されている。胴部の地紋はＬＲの斜行縄文で、胎土には微量の海綿骨針が混入する。２も低い山形突起を口縁部に有する小型の土器で、口縁部文様帯には５条の綾絡文が施され胴部にはＲの撚糸文が施されている。胎土には海綿骨針が混入する。３ａ～ｃは口縁部にＬＲの縄線文と沈線文の施された文様帯を有する深鉢形土器である。胴部にはＲの細い撚糸文が密に施さ



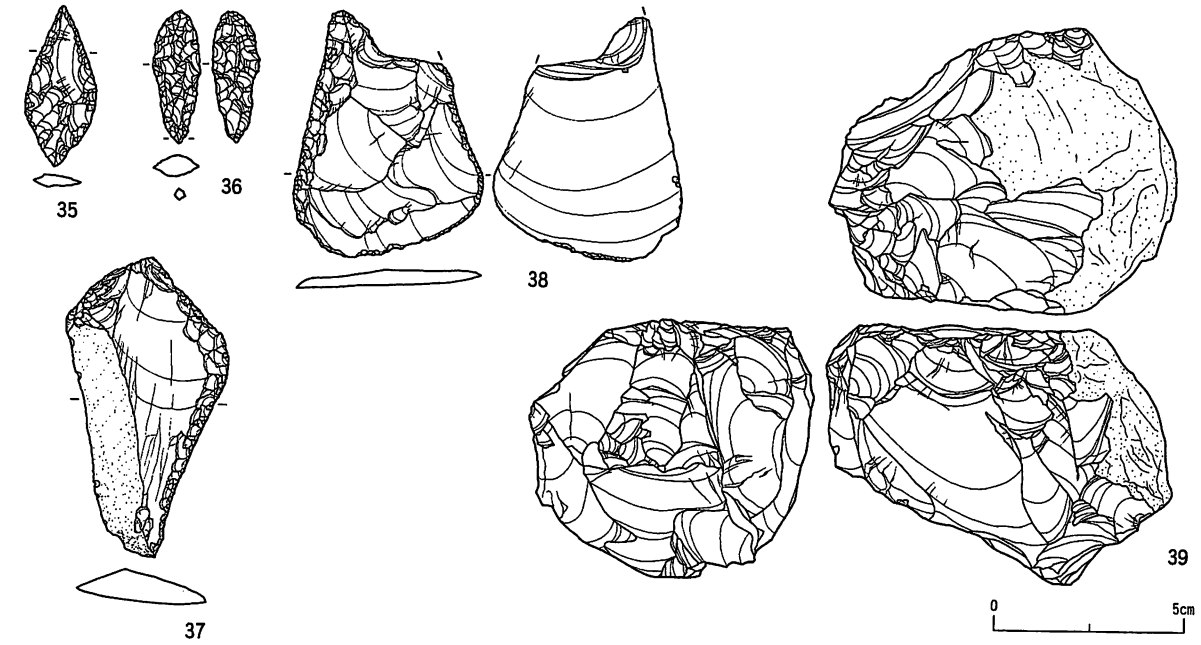
図Ⅳ－154　Ｐ－42出土の遺物(1)

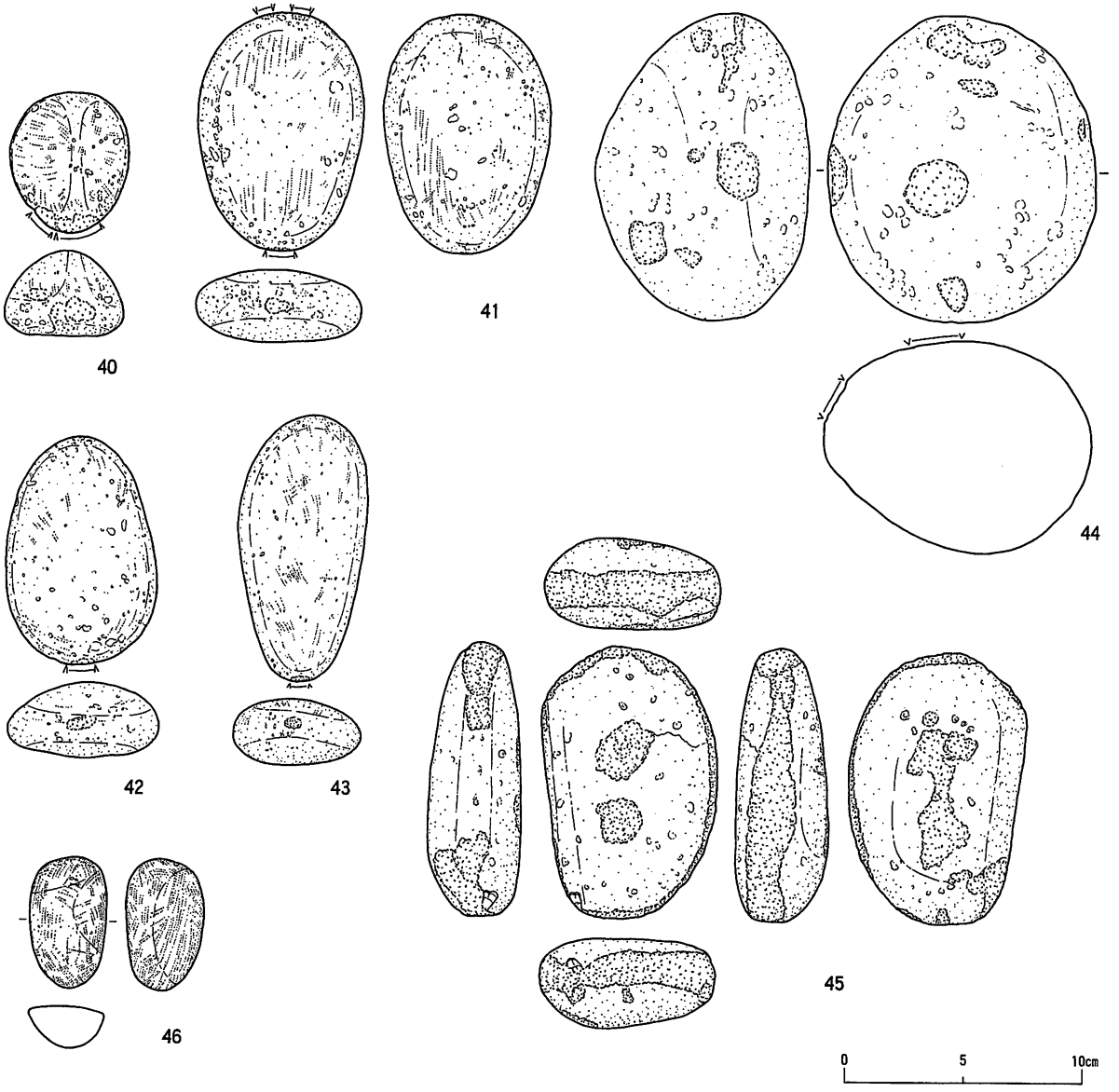


図Ⅳ－155　Ｐ－42出土の遺物(2)



図Ⅳ－156　Ｐ－42出土の遺物(3)





図Ⅳ－157　Ｐ－42出土の遺物(4)

れ、口縁部文様帯との境には上下段をＬＲの縄線文に挟まれる厚みの無い粘土紐が貼付され、更にその上には竹管状の施文具を用いた連続刺突文が施されている。同じ個体の土器がＨ－４のＨＰ－１からも出土している。大半は包含層出土である。4は口縁部に低い山形突起を持つ大型の土器である。口縁部文様帯には無地の器面にＬの縄線文と綾絡文が施されており、その下位の器面には同じ縄線文が施される粘土紐の貼付と再度綾絡文が施される。胴部の地紋は多軸絡条体が全面に施されている。５ａ・ｂは口縁部にＬＲの縄線文が４条巡らされる土器で地紋はＬＲの斜行縄文である。６・７はＲＲＬの撚り戻しと考えられる地紋が施された口縁部である。8は無地の器面に絡条体圧痕文を施した口縁部、9は地紋のＲの撚糸文の上にＲＬの縄線文と綾絡文を施した口縁部である。10はＲＬの斜行縄文の上からＬＲの２本の縄線文を施した胴部である。11はＲＬの自縄自巻的縄文と粘土紐が貼付された口縁近くの胴部である。12ａ・ｂは無地の口縁部に２条の異なる撚糸を一組としたもので曲線的な構成の文様を描いた土器である。胴部にはＲＬの自縄自巻的縄文が施されている。13ａ・ｂは口縁部文様帯に綾絡文、胴部にＬの撚糸文を施したものである。14ａはＲＬＲの原体で地紋と縄線文を施したものである。

15はＲの撚糸を使った多軸絡条体を地紋とする大型の深鉢胴部である。16は器面の上位にＲの撚糸文、下位にＬＲの斜行縄文の施された深鉢の胴部である。Ｐ－18から出土したものと同一個体の可能性がある（Ｐ－18－２）。17はＲの撚糸文とＬＲの斜行縄文が施された底部間際の胴部である。20の地紋もＲの撚糸文である。18・19はＲＬＲの三段複節が施文される胴部である。21・22はＲの撚糸を使った多軸絡条体が施された胴部である。23・24・26・30は撚り戻しと考えられる地紋、25・27～29は二段単節の地紋が施された胴部である。

31～33は底部である。31は器面にＲの撚糸文が施されたもの、32はＲの撚糸文が密に施されたもの、33はＲＬＲの三段複節が施されたものである。31・32の底部は上げ底を呈している。32はＨ－４のＨＰ－１出土のもの（Ｈ－４－７）。本遺構からは未接合の破片１点が出土した。海綿骨針を含む胎土を有している。同一個体の破片はＨ－７、Ｈ－８からも出土している。34は土製円盤の可能性がある胴部破片である。

（石器） 石器類430点の中からここには35～46の12点を掲載した。35は円筒土器下層式に伴う石鏃（ＩＡ４）、36は両面加工の石錐（Ⅱ１）である。37・38はスクレイパーである（37：ⅢＢ２ａ、38：ⅢＢ２ｂ）。37は右側縁に、38は左側縁に主な刃部が作出されている。39は礫面の一部を残す石核である（ⅤＡ１）。40～45はたたき石である（40～43：Ⅶ１、44：Ⅶ３、45：Ⅶ４）。44は特に大型の礫を使ったもので、45は側縁全周に敲打痕が見られる。46は礫片の全面に研磨を施した用途不明の石製品である。

時　期　覆土のⅡ群ｂ類土器と関連遺構との遺物出土状況から縄文時代前期後半と考えられる。

（皆川）

Ｐ－43（図Ⅳ－158、図版42・103～105、表Ⅳ－９・19・24）

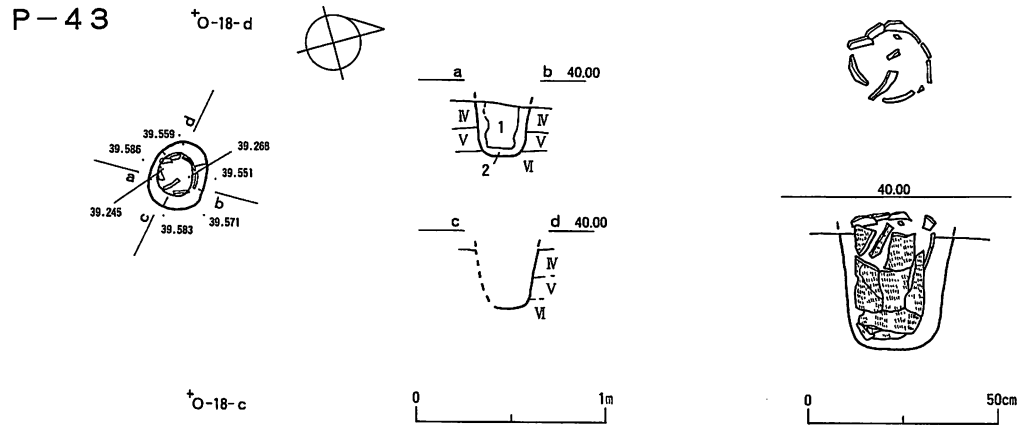
位　置　Ｏ－18－ａ・ｄ

規　模　37×23／29×19／28cm

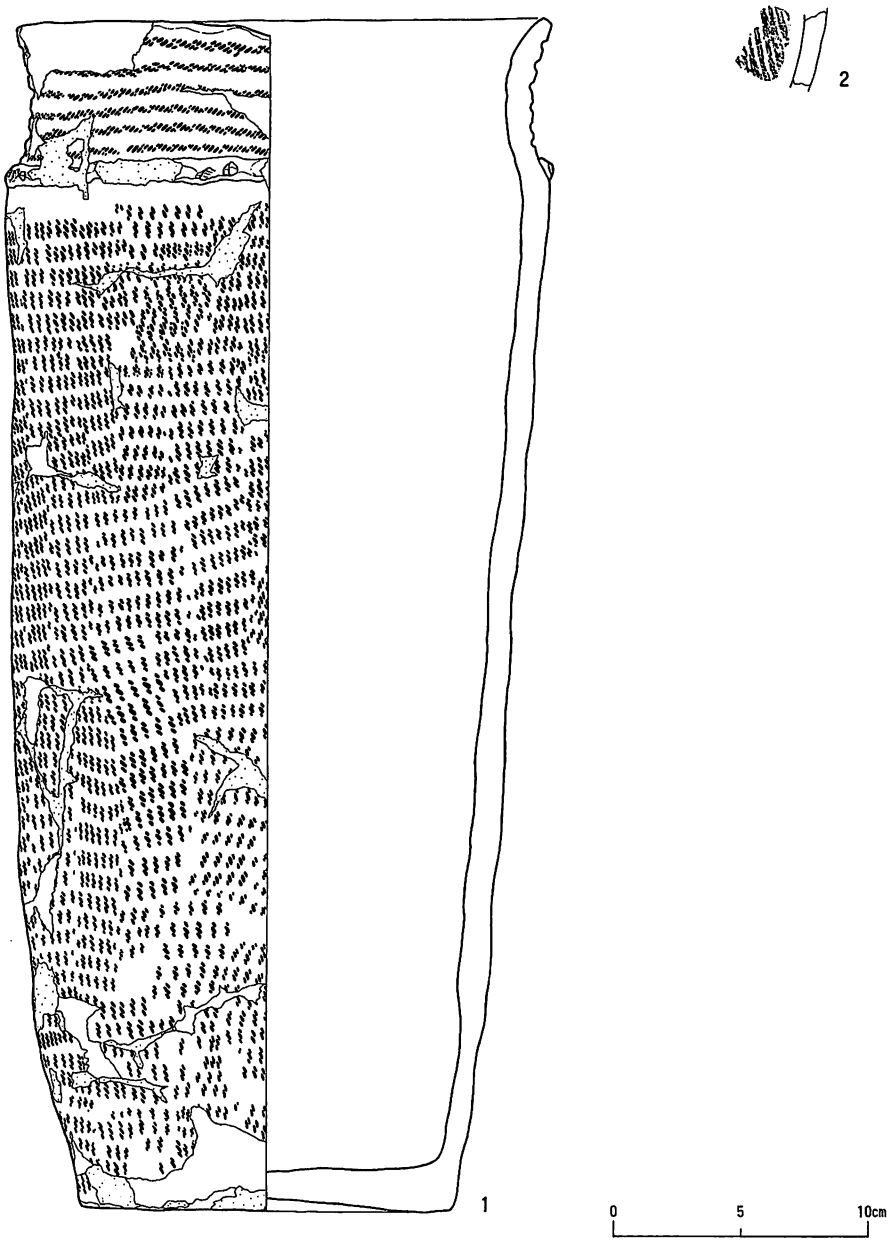
平面形　楕円形？

長軸方向　Ｎ－58°－Ｗ

確認・調査　Ⅳ層調査中、土器片が検出され土壙の存在が予想された。半截したところ掘り方のあまり認められない、土器の埋設された土壙であることがわかった。断面は円筒形を呈し、上部を欠く正立状態の土器が埋設されていた。この土器の口縁部はＭ－１上面から出土し接合している（図Ⅳ－11）。



P－43　1 黒色土(10YR1.7/1)　粘性なし　しまりややあり　黄褐色土粒を混じる　橙色土粒(5YR6/6)、炭化物片を若干混じる
2 黒色土(10YR2/1)



図Ⅳ－158　土壙（P－43）と出土遺物

覆　土　2層に分層した。（立田）

遺　物　土器103点、フレイク1点が出土した。土器はⅡ群b類土器2点を掲載した。これらの土器の胎土中には繊維が混入する。1は口縁部にLRの縄線文が施される文様帯を持つ平縁の大型土器である。文様帯の直下には棒状の施文具で刻みのはいる粘土紐の貼付文があり、胴部には多軸絡条体の地紋が施されている。2は細いRの撚糸文が施される胴部である。

時　期　周囲の遺構との関連性から縄文時代前期後半と考えられる。（皆川）

P－44（図Ⅳ－159、表Ⅳ－9）

位　置　M－15－b

規　模　109×89／80×65／14cm

平面形　隅丸長方形

長軸方向　N－74.5°－W

確認・調査　標高38.6～40.0mの削平部に近い平坦面に作られた土壙である。V層上面で輪郭を確認し調査を行っている。覆土はローム粒を多く含む土壌で、これは埋め戻されている可能性がある。そのため小柄ではあるが墓の可能性もある。また、削平部に位置することから、それらと一連の遺構である可能性がある。

覆　土　覆土はローム粒を多く含む黒色土で、これは埋め戻されている可能性が少なからずある。掘り込み面は、覆土に混じりのない黒色土が見られないことから確認面の上位約10cm以内のところにあったものと考えられる。

遺　物　壙底から頁岩製のフレイクが3点出土している。

時　期　周囲の遺構との関連性から縄文時代前期後半と考えられる。（皆川）

P－46（図Ⅳ－159、表Ⅳ－9）

位　置　O－19－b

規　模　146×124／99×73／27cm

平面形　長円形

長軸方向　N－118°－W

確認・調査　Ⅳ層を10cmほど掘り下げた際に黒褐色土のまとまりを確認した。木根攪乱の影響を受けており、一部の壁面は判然とせず掘り過ぎた部分もあった。

覆　土　3層に分層した。一部攪乱の影響を受けているが、埋め戻しの可能性がある。

遺　物　出土しなかった。

時　期　不明である。周辺の遺物や覆土の状況から縄文時代前期後半の遺構と推測される。（藤原）

P－47（図Ⅳ－159、表Ⅳ－9）

位　置　M－15－a・b

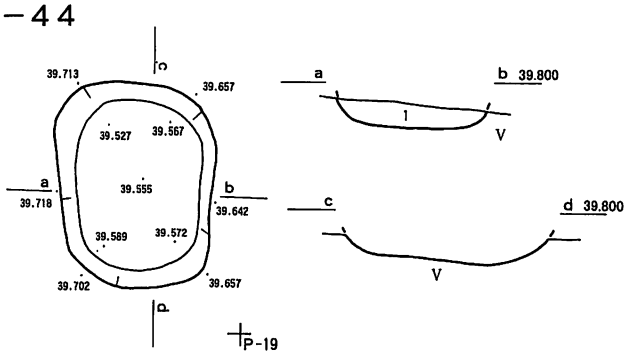
規　模　57×41／43×25／13cm

平面形　隅丸長方形

長軸方向　N－133°－W

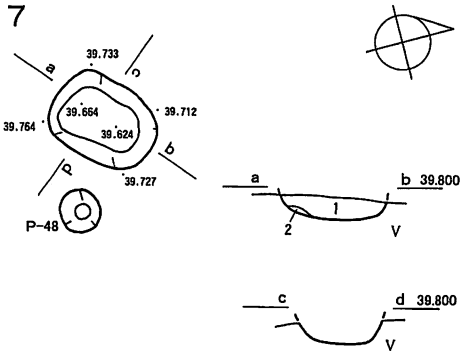
確認・調査　標高38.6～40.0mの削平部に近い平坦面に作られた小型の土壙である。V層上面で輪郭を確認し調査を行っている。削平部に位置することから、それらとの関わりが強い遺構と考えられる。

P－44



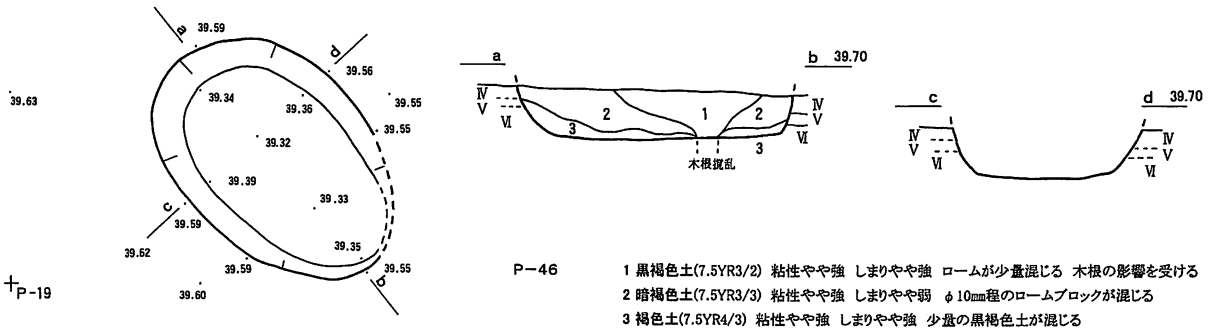
P－44　1　黒色土　(7.5YR2／1)　しまりがあり、粘性に富む

P－47



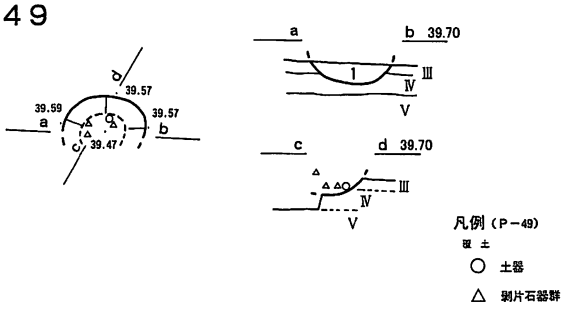
P－47　1　黒褐色土　(7.5YR3／2)　しまりがなく、粘性が強い腐植土　炭化物を含む

P－46



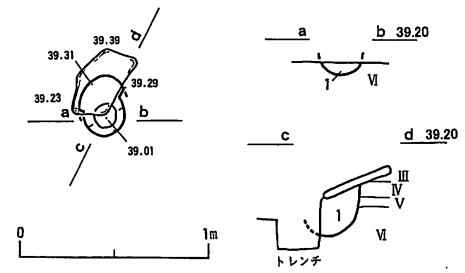
P－46　1 黒褐色土(7.5YR3/2) 粘性やや強 しまりやや強 ロームが少量混じる 木根の影響を受ける
2 暗褐色土(7.5YR3/3) 粘性やや強 しまりやや弱 φ10㎜程のロームブロックが混じる
3 褐色土(7.5YR4/3) 粘性やや強 しまりやや強 少量の黒褐色土が混じる

P－49

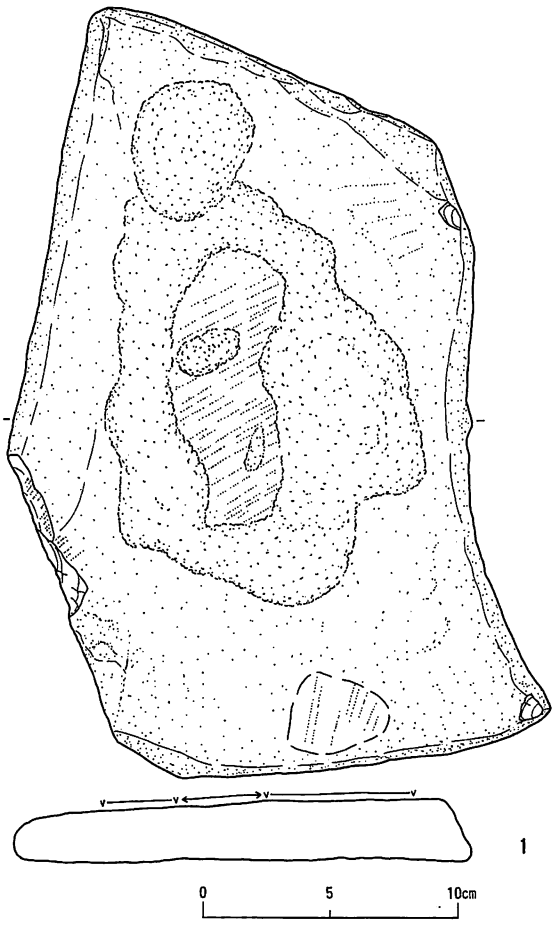


P－49　1 黒褐色土(7.5YR2/2) 粘性やや強 しまりやや弱 黒色土が斑状に混じる (Ⅲ)

P－52



P－52
1 黒褐色土(7.5YR3/2) 粘性やや強 しまり弱 焼土粒、径10㎜程のロームブロックが混じる 埋め戻し



図Ⅳ－159　土壙（P－44・46・47・49・52）と出土遺物

覆　土　覆土はローム粒を含む黒色土である。掘り込み面は、覆土に混じりのない黒色土が見られないことから確認面の上位約10cm以内のところにあったものと考えられる。
遺　物　遺物は覆土１層から頁岩製のフレイクが２点出土している。
時　期　周囲の遺構との関連性から縄文時代前期後半と考えられる。（皆川）

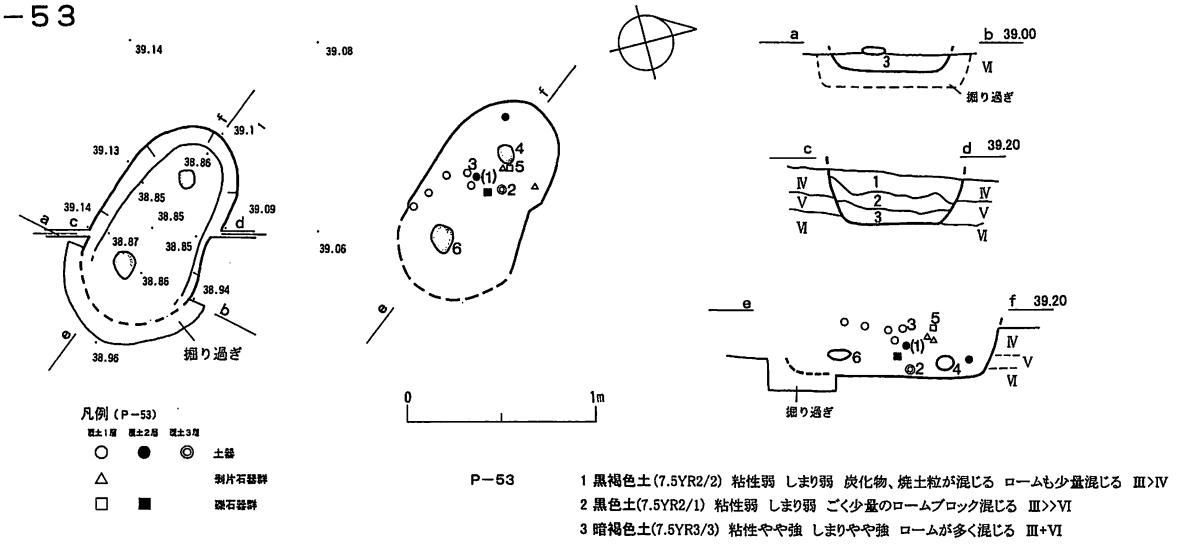
Ｐ－48（図Ⅳ－167、表Ⅳ－８）
位　置　Ｏ－18－ｃ
規　模　22×10／（９）×（５）／18cm
長軸方向　Ｎ－85°－Ｗ
確認・調査　規模の点から判断し柱穴状土壙として扱うこととした【Ⅳ章－(5)】。（藤原）

Ｐ－49（図Ⅳ－159、表Ⅳ－９）
位　置　Ｎ－19－ｃ（、Ｏ－19－ｄ）
規　模　42×（20）／23×（11）／（12）cm
平面形　楕円形？
長軸方向　Ｎ－170°－Ｗ
確認・調査　Ｏ－19区のⅢ層を20cmほど掘り下げた際に、Ｎ－19区側の断面に皿状の黒褐色土のまとまりを確認した。既に約半分ほどは削平していた。浅い皿状の土壙でⅢ層中の掘り込みである。壙底面はⅣ層中でさほど硬くはしまっていない。
覆　土　分層できず、埋め戻しと推測される。
遺　物　覆土中から土器１点、フレイク３点の合計４点が出土した。
時　期　覆土中出土の土器、および掘りこみ面から縄文時代前期後半の遺構である。（藤原）

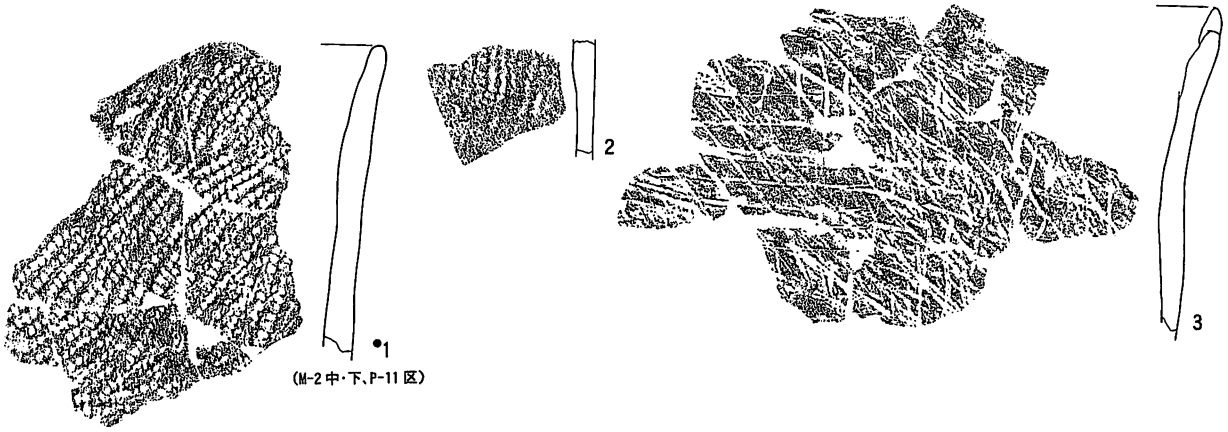
Ｐ－50（図Ⅳ－124、図版43、表Ⅳ－９）
位　置　Ｎ－20－ｂ・ｃ（Ｈ－15覆土中）
規　模　（240）×214／（116）×65／（18）cm
平面形　不整楕円形
長軸方向　Ｎ－124°－Ｗ
確認・調査　Ｈ－15覆土12層上面において黒褐色土の落ち込みを確認した。壁面・壙底ともやわらかくしまりがないこと、壙底面は凹凸が著しいことから、覆土12層堆積時に自然にできたくぼみで、人為的に掘り込んだものではなく、土壙として利用された可能性も少ないと推測される。
覆　土　Ｈ－15の覆土８～11層としたもので、自然堆積である。
遺　物　Ｈ－15覆土７層相当層から土器、たたき石、台石片などが出土した。いずれも、Ｈ－15覆土中のものと考えられる。これらの遺物についてはＨ－15で触れている。
時　期　検出状況からＨ－15廃絶後の縄文時代前期後半の遺構である。（藤原）

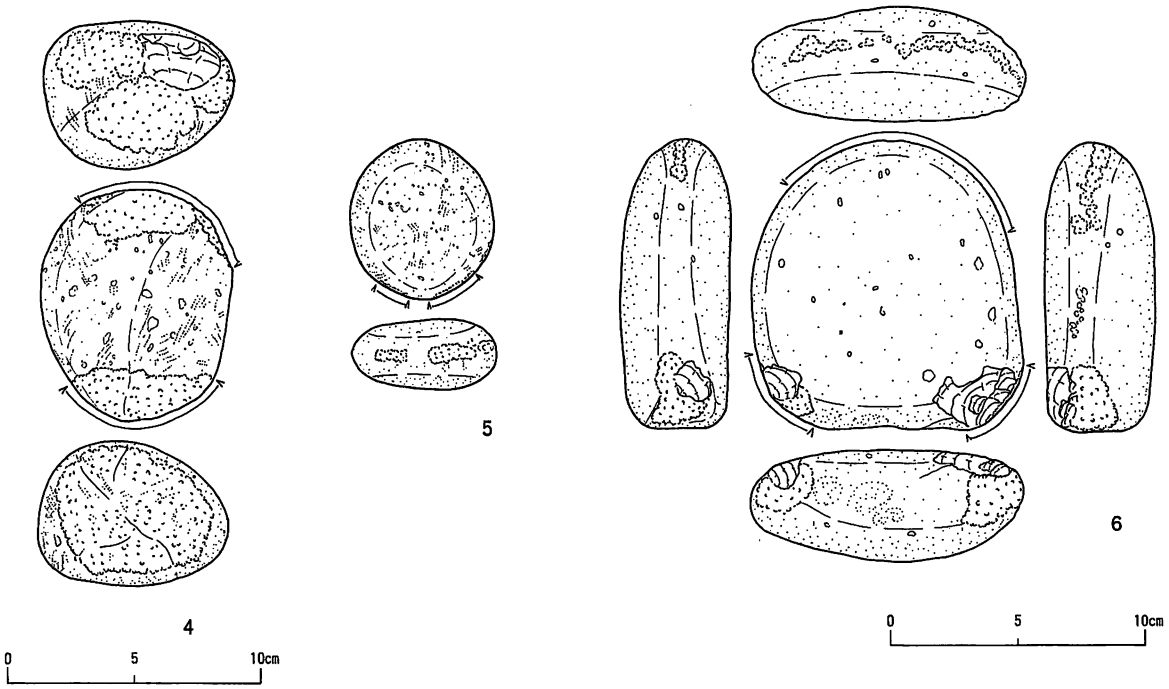
Ｐ－51（図Ⅳ－124、図版43、表Ⅳ－９）
位　置　Ｎ－20－ｄ（Ｈ－15覆土中）
規　模　（129）×96／（112×55）／（26）cm
平面形　楕円形

P－53



1 黒褐色土(7.5YR2/2) 粘性弱 しまり弱 炭化物、焼土粒が混じる ロームも少量混じる Ⅲ>Ⅳ
2 黒色土(7.5YR2/1) 粘性弱 しまり弱 ごく少量のロームブロック混じる Ⅲ>>Ⅵ
3 暗褐色土(7.5YR3/3) 粘性やや強 しまりやや強 ロームが多く混じる Ⅲ+Ⅵ



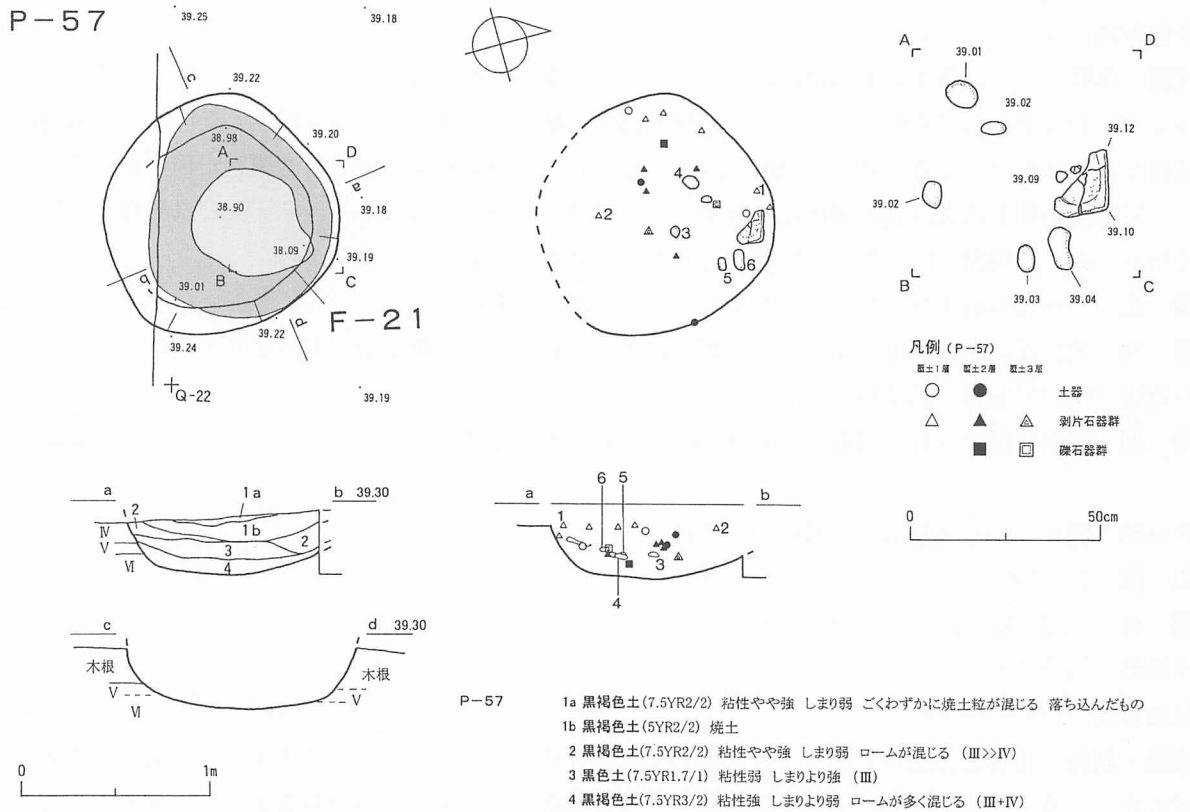


図Ⅳ－160　土壙（Ｐ－53）と出土遺物

長軸方向　N－75°－W
確認・調査　H－15覆土12層上面において黒褐色土の落ち込みを確認した。P－50と同様に壁面・壙底ともやわらかくしまりがないことから、覆土12層堆積時に自然にできたくぼみと推測され、人為的に掘り込んだものとは考え難い。しかし、近接してHF－1がありレベル的にも関連が伺われること、P－51周辺の覆土12層は他の場所と比べてしまりが強めであったことから、P－50とは異なり自然のくぼみをごく短期間、何らかの形で利用したものと推測できる。
覆　土　H－15の覆土9～11層としたもので、自然堆積である。
遺　物　壙口部に土器がまとまっていたが（図Ⅳ－124）、H－15覆土中のものと考えられる。これらの遺物についてもH－15で触れている。
時　期　検出状況からH－15廃絶後の縄文時代前期後半の遺構である。（藤原）

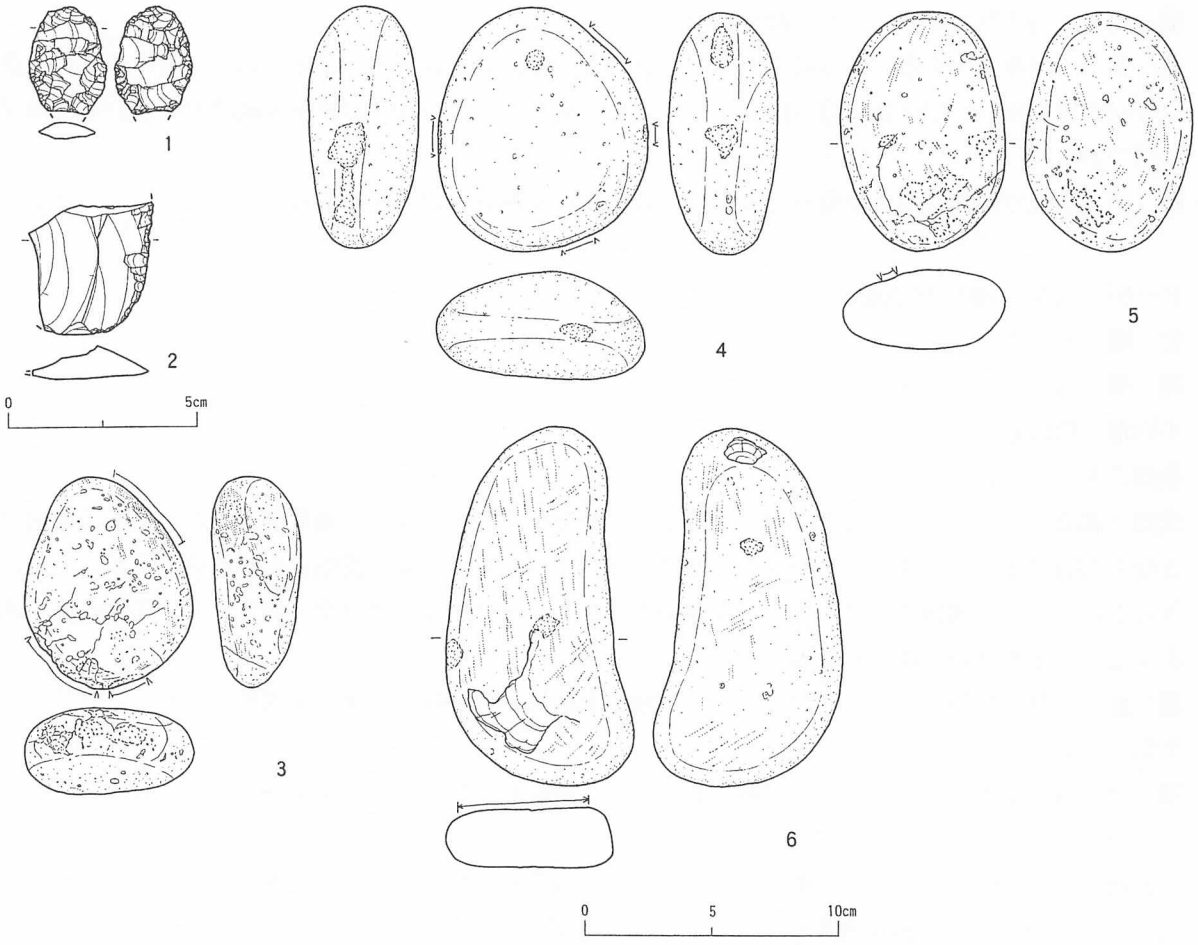
P－52（図Ⅳ－159、図版43、表Ⅳ－9・24）
位　置　N－19－d
規　模　（32×12）／（21×11）／33cm
平面形　円形？
長軸方向　－
確認・調査　Ⅲ層を15cmほど掘り下げた段階で台石を検出した。台石をそのままにしてⅥ層まで掘り進めたところ、柱状に残した土層断面に掘り込みを確認した。断面観察からⅢ層下位の掘り込みで、土壙埋土が窪んだため台石が傾いたと推測される。規模・形状などは埋設土器の土壙に類似する。
覆　土　人為的埋め戻しである。焼土粒が混じっている。
遺　物　1は壙口部を塞ぐように出土した台石（X）で、図正面＝使用面を下にして検出された。薄い板状の礫を用い、中央部を取り囲むようにたたき痕がある。一部には擦痕も確認できる。石材は安山岩である。
時　期　周辺の遺物、および掘り込み面から縄文時代前期後半の遺構である。（藤原）

P－53（図Ⅳ－160、図版43・102、表Ⅳ－9・24）
位　置　P－22－c
規　模　（113）×－／64×53／29cm
平面形　楕円形
長軸方向　N－45.5°－W
確認・調査　Q－22区をV層まで掘り下げた際に暗褐色土のまとまりと礫を確認した。P－22区側はⅢ層を20cmほど下げた際にぼんやりした輪郭がとらえられた。土壙の長軸上の対称的な位置からたたき石が出土した。隣接するH－1との関連が推測され、また埋土の状況や平面プラン、遺物の出土状況などから土壙墓の可能性もある。
覆　土　3層に分層した。埋め戻しである。埋土上面には焼土粒と炭化物が混じっており、P－57と類似している。
遺　物　覆土1層から土器16点・石器など3点、2層から土器3点・石器など4点、3層から土器1点の合計27点が出土した。（藤原）
（土器）　Ⅱ群b類土器3点を掲載した。これらの土器の胎土中には繊維が混入する。1・2はLRの斜行縄文が施された口縁部と胴部。1はM－2と包含層から出土したもの（M－2－7）。本遺構か



P－57

1a 黒褐色土(7.5YR2/2) 粘性やや強 しまり弱 ごくわずかに焼土粒が混じる 落ち込んだもの
1b 黒褐色土(5YR2/2) 焼土
2 黒褐色土(7.5YR2/2) 粘性やや強 しまり弱 ロームが混じる (Ⅲ>>Ⅳ)
3 黒色土(7.5YR1.7/1) 粘性弱 しまりより強 (Ⅲ)
4 黒褐色土(7.5YR3/2) 粘性強 しまりより弱 ロームが多く混じる (Ⅲ+Ⅳ)



図Ⅳ－161　土壙（P－57）と出土遺物

らは未接合の破片２点が出土した。３は網目状のＲの撚糸文が施され胎土に海綿骨針を含む口縁部である。（皆川）

（石器） ４は両端にたたき痕のあるたたき石（Ⅶ１）、５・６は周縁にたたき痕のあるもの（Ⅶ２）。５は一端とするよりは、たたき痕の範囲が側縁にも一部に及んでいるため、Ⅶ群２類とした。また、背面には擦痕も確認できる。６は角張った部分に主にたたき痕が集中している。石材は４・５が安山岩、６が石英安山岩である。

時　期　覆土出土の遺物、および掘り込み面から縄文時代前期後半の遺構である。（藤原）

Ｐ－57（図Ⅳ－161、図版43・106、表Ⅳ－９・24）

位　置　Ｐ－22－ｂ（、Ｐ－21－ｃ）

規　模　（123）×（94）／120×91／35cm

平面形　円形

長軸方向　－

確認・調査　Ⅲ層下位で焼土を確認した（Ｆ－21）。調査のためトレンチを設定し掘り進めたところ土壙Ｐ－57を確認した。皿状で緩やかに立ち上がる土壙である。Ｐ－21区側は土壙確認以前に掘り下げてしまったがおおよその規模と形状は推測できる。土壙中からは砥石と焼成を受けた礫が出土した。砥石はＨ－１床面出土のものと接合し、この土壙がＨ－１と密接な関連を有していることを物語っている。壙口部の焼土Ｆ－21はＰ－57埋め戻し後、壙口部で焚かれたもので、土壙覆土が落ち込んだため焼土中央部が窪んだものである。

覆　土　４層に分層した。覆土１層はＦ－21に対応する。土壙の覆土は埋め戻しと推測される。

遺　物　覆土１層から土器２点・石器など７点、２層から土器２点・砥石19点・石器など10点、３層から石器など２点、その他覆土中からフレイク28点の合計70点が出土した。１は形状が石鏃に類似するものの、尖頭部が作出されておらず、また調整が粗いことから未成品（ＩＡ）と推測される。２は縦長剥片を用い刃部が外湾するスクレイパー（ⅢＢ２ａ）。いずれも石材は頁岩である。３～６はたたき石で、３は下端に（Ⅶ１）、４は周縁に（Ⅶ２）、５は腹背面にたたき痕のあるもの。６はたたき痕は不明瞭であるが、くぼみ石に類似するもの（Ⅶ４）。３・６は擦痕も確認できる。いずれも覆土２層出土で５・６は焼成を受けている。石材は３が不明の他は安山岩である。砥石はＨ－１床面出土のものと接合した。詳細についてはＨ－１で述べている（図Ⅳ－63）。

時　期　覆土中出土の遺物およびＨ－１との関連から縄文時代前期後半、円筒土器下層ｃ式の古手に相当する時期の遺構である。（藤原）

Ｐ－58（図Ⅳ－149、表Ⅳ－９）

位　置　Ｎ－12－ｃ、Ｎ－13－ｂ

規　模　（100）×（86）／（91）×（78）／17cm

平面形　楕円形？

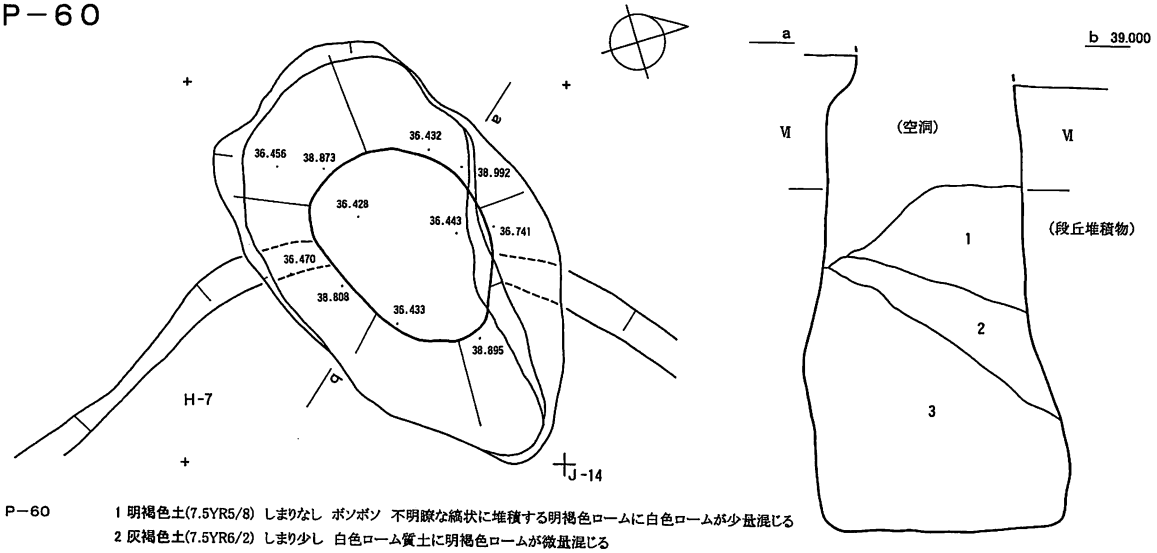
長軸方向　Ｎ－10.5°－Ｗ

確認・調査　Ｐ－17の確認調査の際、南に向かって設定したトレンチにより確認された。Ｐ－16、Ｐ－17と重複関係にあるが先後関係はわからない。壁は緩やかで壙底はほぼ平坦である。

覆　土　２層に分層した。黒褐色土のレンズ状堆積である。自然堆積とみられる。

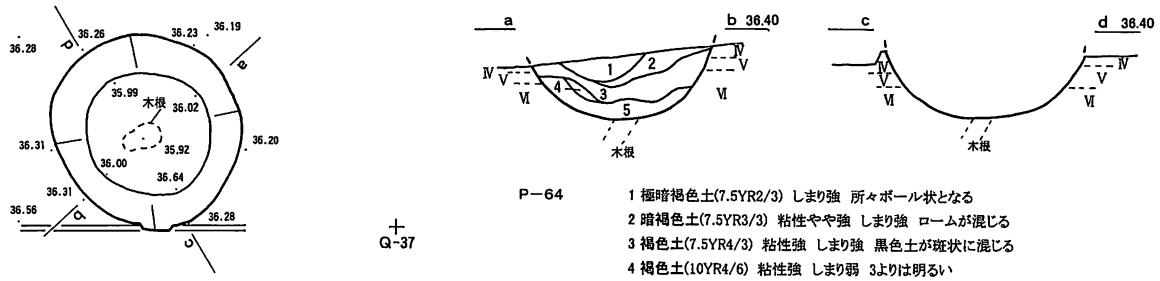
遺　物　覆土から台石・石皿が１点出土している。

P－60



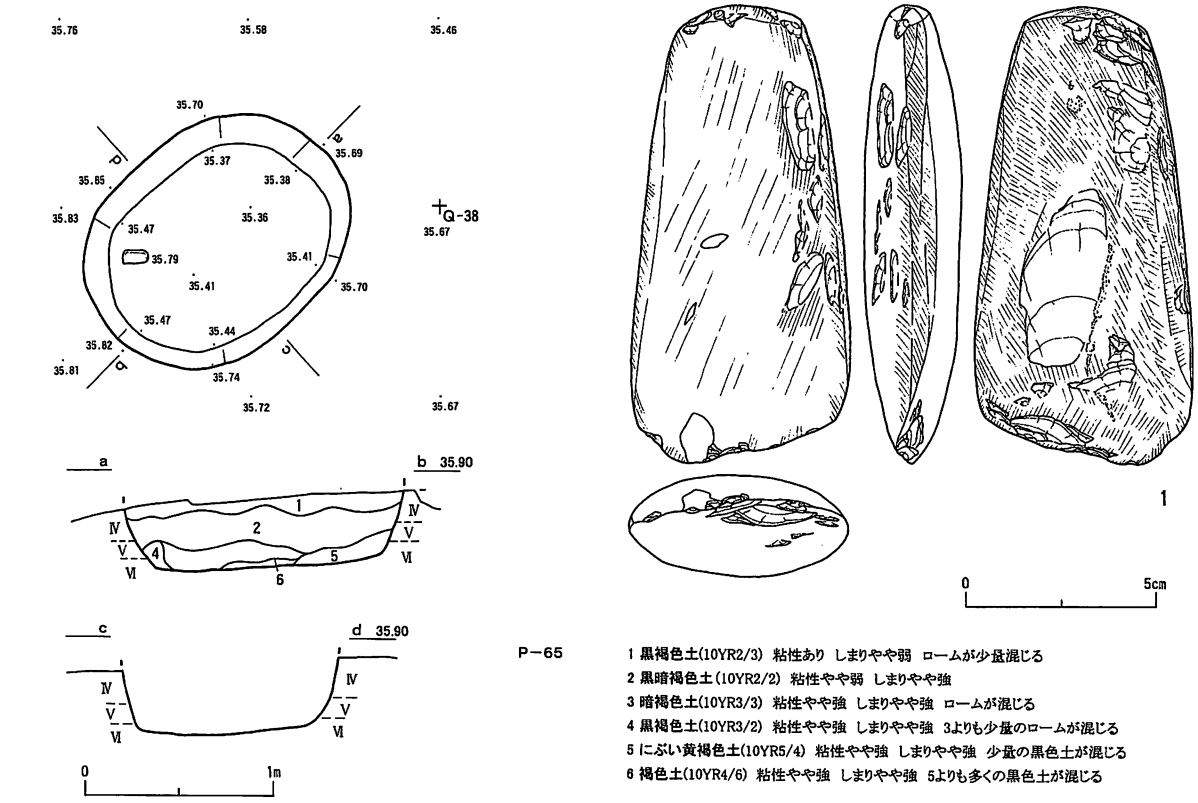
P－60
1 明褐色土(7.5YR5/8) しまりなし ボソボソ 不明瞭な縞状に堆積する明褐色ロームに白色ロームが少量混じる
2 灰褐色土(7.5YR6/2) しまり少し 白色ローム質土に明褐色ロームが微量混じる
3 明褐色土(7.5YR5/8) しまりなし ボソボソ 不明瞭な縞状に堆積する明褐色ロームに白色ロームが少量混じる

P－64



P－64
1 極暗褐色土(7.5YR2/3) しまり強 所々ボール状となる
2 暗褐色土(7.5YR3/3) 粘性やや強 しまり強 ロームが混じる
3 褐色土(7.5YR4/3) 粘性強 しまり強 黒色土が斑状に混じる
4 褐色土(10YR4/6) 粘性強 しまり弱 3よりは明るい
5 褐色土(10YR4/6) 粘性強 しまり4より強 ごく少量の黒色土が混じる

P－65



P－65
1 黒褐色土(10YR2/3) 粘性あり しまりやや弱 ロームが少量混じる
2 黒暗褐色土(10YR2/2) 粘性やや弱 しまりやや強
3 暗褐色土(10YR3/3) 粘性やや強 しまりやや強 ロームが混じる
4 黒褐色土(10YR3/2) 粘性やや強 しまりやや強 3よりも少量のロームが混じる
5 にぶい黄褐色土(10YR5/4) 粘性やや強 しまりやや強 少量の黒色土が混じる
6 褐色土(10YR4/6) 粘性やや強 しまりやや強 5よりも多くの黒色土が混じる

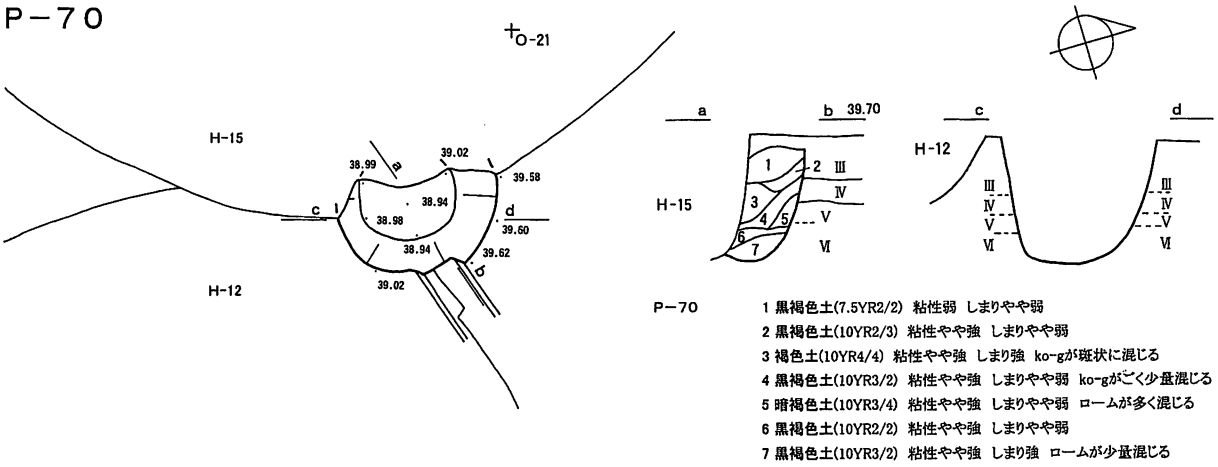
図Ⅳ－162　土壙（P－60・64・65）と出土遺物

時　期　詳細な時期は不明であるが、覆土の色調から縄文時代のものとみられる。　（立田）

P－60（図Ⅳ－162、図版44、表Ⅳ－9）
位　置　Ⅰ－13－c・d
規　模　111×229／77×109／243cm
平面形　不整形
長軸方向　N－105°－W
確認・調査　標高38.8～39.2m付近の平坦面に作られたフラスコ状ピットと考えられる大型の土壙である。H－7の調査中に確認し重複しているが、その先後関係は不明である。周辺にはH－4・17が位置している。本遺構は同じ時期と判断されるため重複するH－7に付属する可能性もある。しかし、竪穴内に深さ2m以上の土壙を設けること自体が不自然に感じられることから、H－4もしくはH－17に伴う可能性の方がより高いものと考えられる。また、遺跡内における類似の遺構にはP－5がある。確認当初、土壙の上位はまだ埋没しきっておらず空洞の状態であった。内部の崩落もそれほど進行して居らず、壙径とセクションに見られる形態は当時の様相の大半を止めていると考えられる。確認面から2.5m以上掘り込まれた壙底面は比較的フラットで、口径よりも底径が勝る形態を有している。その形態と埋没の状況から見て、貯蔵の役割を担う所謂「フラスコ状ピット」が有力と考えられるが、若干の疑問点もある。それは調査時点においても、雨天に伴って土壙内が伏流水で満水となり、それが無くなるのに数日から十日以上を要した点である。これは、季節によって貯蔵の役目が果たせないことを意味するのではないだろうか。当時、雨が極端に少なかったか、季節を限定した使われ方がなされていた可能性が高い（例えば秋から冬の季節）。また、遺跡内で検出されたフラスコ状ピットが本遺構を含めて2基と少ないのはこのような季節によって機能が失われる点が関わっているものと考えられる。
覆　土　崩落したと考えられるローム質土によって途中まで埋没している。黒色土の中がれ込みが殆ど認められないことから、埋め戻された可能性も考慮すべきであろう。P－5で認められたような「梯子のような構築物」の痕跡は検出されなかった。掘り込み面はⅢ層中と考えられる。
遺　物　出土していない。
時　期　類似遺構の時期と周囲の遺構の配置から、縄文時代前期後半の可能性が高い。　（皆川）

P－64（図Ⅳ－162、図版44、表Ⅳ－9）
位　置　P－36－c
規　模　104×68／97×66／（39）cm
平面形　円形
長軸方向　－
確認・調査　北側の調査区に位置し、Ⅲ層に相当するが黒味が薄いⅣ層とした表土直下の暗褐色土を5cmほど掘り下げた際、極暗褐色土のまとまりを確認した。皿状になだらかに立ちあがる土壙であるが、木根攪乱の可能性もある。
覆　土　5層に分層した。中央部に木根攪乱がある。また、覆土中には黒色土の混入が少ない。
遺　物　出土しなかった。
時　期　不明である。周辺の遺物も多様な時期のものが出土しており、覆土の状況からも推測し難い。
（藤原）

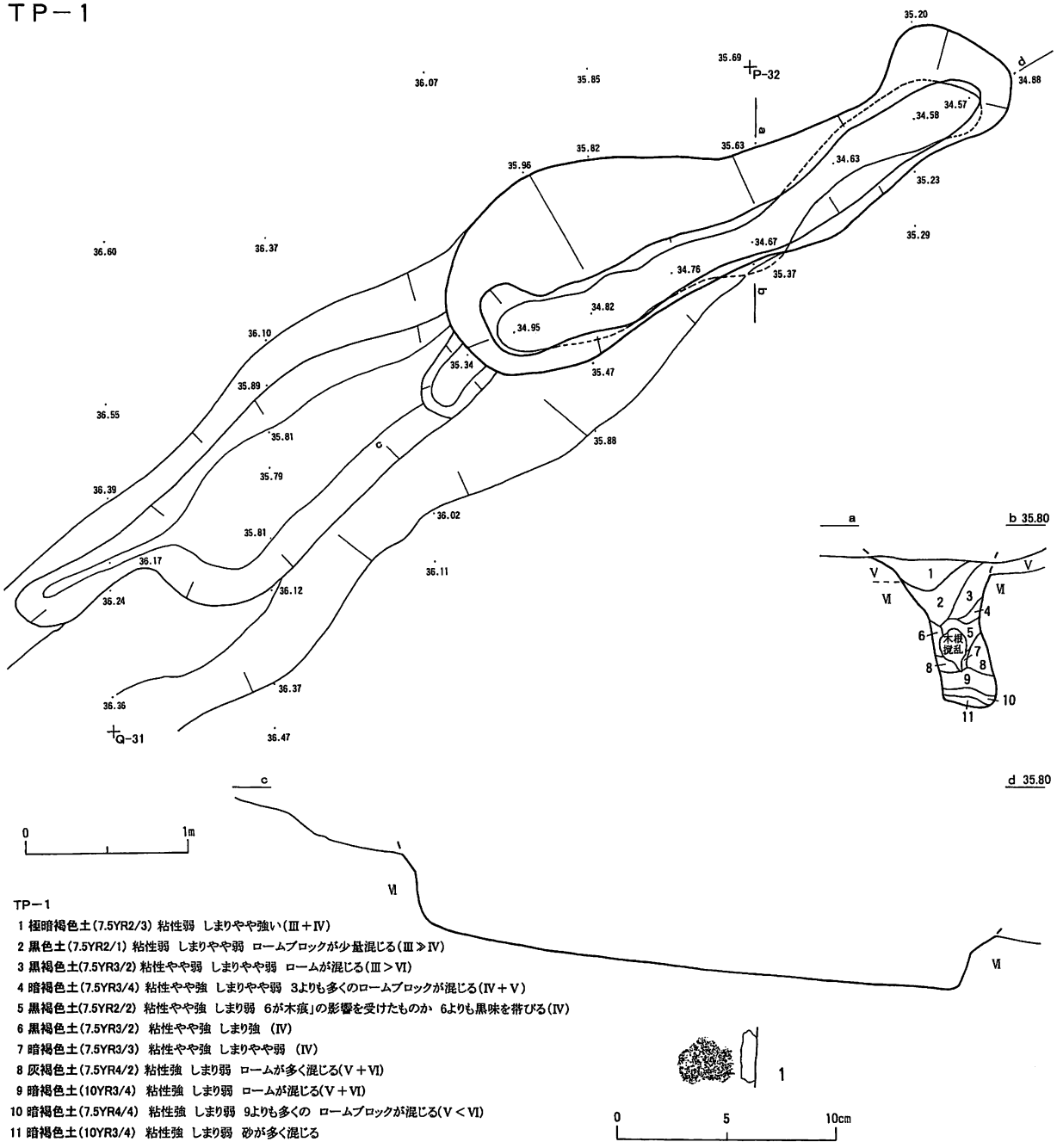
P－70



P－70

1 黒褐色土(7.5YR2/2) 粘性弱 しまりやや弱
2 黒褐色土(10YR2/3) 粘性やや強 しまりやや弱
3 褐色土(10YR4/4) 粘性やや強 しまり強 ko-gが斑状に混じる
4 黒褐色土(10YR3/2) 粘性やや強 しまりやや弱 ko-gがごく少量混じる
5 暗褐色土(10YR3/4) 粘性やや強 しまりやや弱 ロームが多く混じる
6 黒褐色土(10YR2/2) 粘性やや強 しまりやや弱
7 黒褐色土(10YR3/2) 粘性やや強 しまり強 ロームが少量混じる

ＴＰ－１



TP－1

1 極暗褐色土(7.5YR2/3) 粘性弱 しまりやや強い(Ⅲ＋Ⅳ)
2 黒色土(7.5YR2/1) 粘性弱 しまりやや弱 ロームブロックが少量混じる(Ⅲ≫Ⅳ)
3 黒褐色土(7.5YR3/2) 粘性やや弱 しまりやや弱 ロームが混じる(Ⅲ＞Ⅵ)
4 暗褐色土(7.5YR3/4) 粘性やや強 しまりやや弱 3よりも多くのロームブロックが混じる(Ⅳ＋Ⅴ)
5 黒褐色土(7.5YR2/2) 粘性やや強 しまり弱 6が木痕」の影響を受けたものか 6よりも黒味を帯びる(Ⅳ)
6 黒褐色土(7.5YR3/2) 粘性やや強 しまり強 (Ⅳ)
7 暗褐色土(7.5YR3/3) 粘性やや強 しまりやや弱 (Ⅳ)
8 灰褐色土(7.5YR4/2) 粘性強 しまり弱 ロームが多く混じる(Ⅴ＋Ⅵ)
9 暗褐色土(10YR3/4) 粘性強 しまり弱 ロームが混じる(Ⅴ＋Ⅵ)
10 暗褐色土(7.5YR4/4) 粘性強 しまり弱 9よりも多くの ロームブロックが混じる(Ⅴ＜Ⅵ)
11 暗褐色土(10YR3/4) 粘性強 しまり弱 砂が多く混じる

1

図Ⅳ－163　土壙（Ｐ－70）・Ｔピット（ＴＰ－１）と出土遺物

P－65（図Ⅳ－162、図版44・106、表Ⅳ－9・24）
位　置　P－37－c、Q－37－d
規　模　147×121／116×92／44cm
平面形　楕円形
長軸方向　N－25.5°－W
確認・調査　P－64と同じく北側の調査区に位置する。同様にⅣ層（Ⅲ層相当層）を5cmほど掘り下げた際に石斧が出土し、その周囲に黒褐色土のまとまりを確認した。半截すると平坦な床面と急角度に立ちあがる壁を検出した。堆積状況や平面プラン、遺物の出土状況などから土壙墓の可能性もある。
覆　土　6層に分層した。埋め戻しと推測される。同地区の他の遺構に比べて黒色土が多い。
遺　物　1は壙口部から出土した全面磨製の石斧（Ⅵ4）。片刃円刃で、刃部の研ぎ出しは斜め方向である。右側縁を中心に敲打による剥離がある。石材は緑色泥岩である。
時　期　石斧の他に遺物が出土せず、不明である。確認面や覆土に黒色土が多いことから周辺で出土した土器の中では最も新しい時期に相当する縄文時代後期前葉の遺構の可能性もある。（藤原）

P－70（図Ⅳ－163、図版44、表Ⅳ－9）
位　置　O－21－d
規　模　85×52／（47）×（48）／66cm
平面形　円形？
長軸方向　－
確認・調査　H－12のHP－14およびH－15調査中にそれぞれの壁面に黒色土の落ち込みを確認した。壙底面の中央部が窪み、壁面は垂直に近い急角度で立ち上がる。重複関係はP－70→H－12→H－15の順となり、P－70がもっとも古い。2軒の住居跡に切られ、全体の半分以下しか検出できなかった。断面観察からⅢ層下位もしくはⅣ層上面の掘りこみと推測される。
覆　土　7層に分層した。自然堆積である。覆土3・4層にはKo－gが混じっている。
遺　物　出土しなかった。
時　期　H－12に切られること、覆土中にKo－gが混じっていることから本遺跡の主体となる縄文時代前期後半よりは古い遺構である。（藤原）

(4)Tピット

TP－1（図Ⅳ－163、図版44・106、表Ⅳ－9・19）
位　置　P－31－d、P－32－a
規　模　370×328／116×26／84cm
平面形　溝状
長軸方向　N－12°－W
確認・調査　Ⅳ層上面まで掘り下げた際、調査区の南側から北側にかけての流路跡にあたる部分に溝状に暗～黒褐色土が堆積していた。流路跡よりも深く掘り込まれており、壁の立ち上がりも確認できたため人為的な遺構と判断し、形状が類似するTピットとした。しかし、その立地や底面が傾きかつ蛇行することから実際に重力罠として機能したかは疑問である。流路を利用した水場関連の施設とも推測できるが、周辺から遺物が出土しないことから性格は不明である。
覆　土　11層に分層した。自然堆積で、しまりは弱い。底面に近い11層には砂が混じっている。

遺　物　土器、フレイク各１点が底面近くから出土した。（藤原）
１は壙底から出土したⅡ群ｂ類土器と考えられる胴部の小破片である。胎土には若干の繊維を含み、器面には不明瞭なＲＬと考えられる縄文が施されている。（皆川）
時　期　壙底面出土の土器から縄文時代前期後半の遺構の可能性がある。（藤原）

⑸柱穴状土壙と方形柱穴列（図Ⅳ－164～170、図版49～52・55、表Ⅳ－１・20）

Ｅ地区の南東側、段丘頂部にあたる標高38.5～40mの範囲から集中的に検出された。この周辺ではⅤ層からⅥ層付近まで掘り下げると黒褐色土の「しみ」が多数検出された。当初は木の根などの自然撹乱と判断していたが、これらの「しみ」が削平部分を含む段丘の最も高い部分に限定して検出されること、またそれが遺物の分布とも一致していることがわかった。半截してみたところ、明らかな自然撹乱とみられるものもあったが、直線的で層界の明瞭な柱穴状のものがあり、遺構とみなせるものも多い状況であった。このような経過から、検出された「しみ」のうち概ね平面形が円形、楕円形を呈するもの、またそれ以外でも、遺構の疑いのあるものについては半截を行った。そして明らかに遺構と判断できるものについて、ＳＰ番号を付し記録を作成した。なお木根など自然撹乱との区別はむずかしかったが概ね以下のような特徴を示すものは人為的に形成できるとは考えがたいので記録の作成は行わなかった。

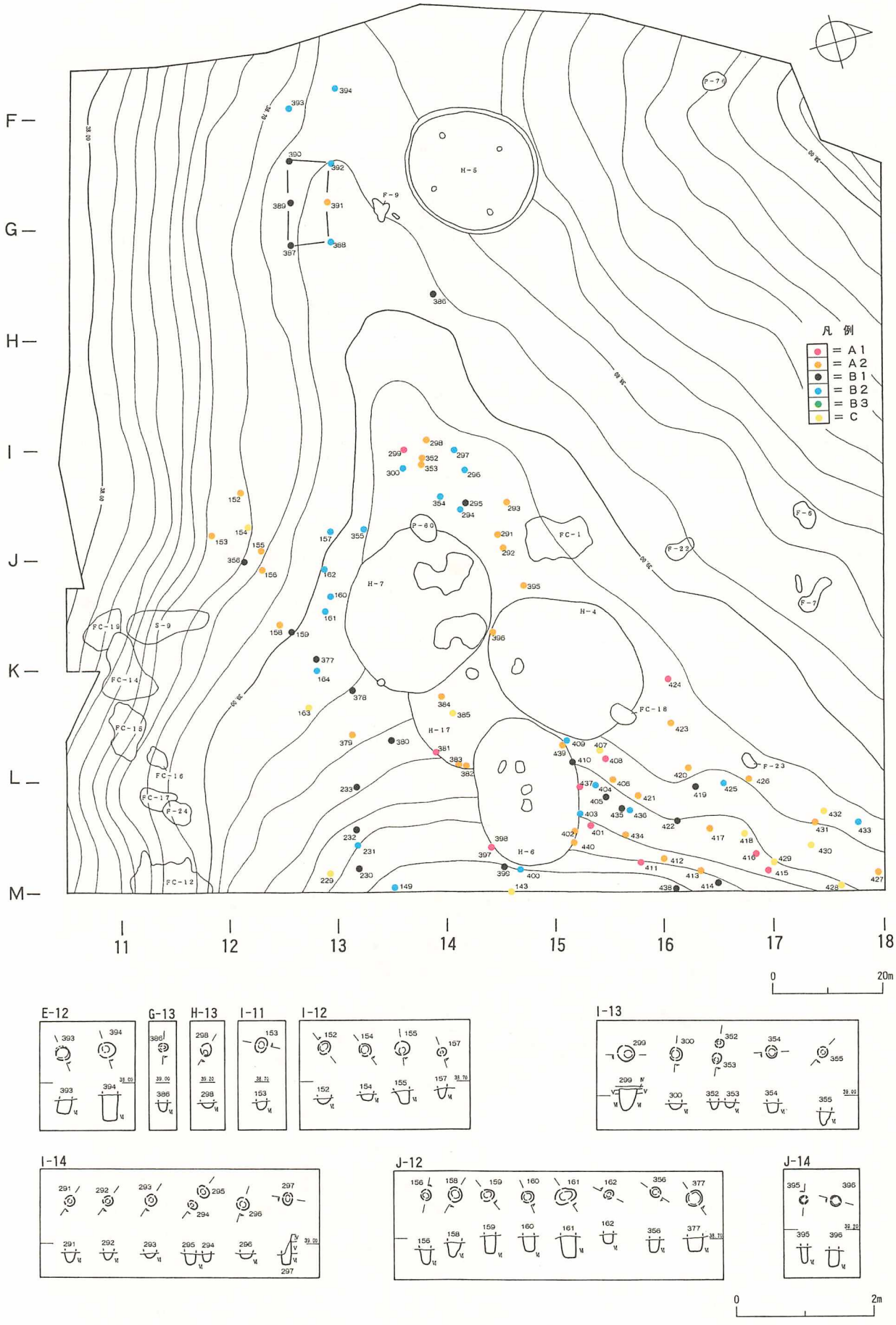
・断面形が屈曲するもの（半截した後の断面が直線でなく、「く」の字状になるものなど）
・先端が枝分かれするもの

調査の結果これらの柱穴状小土壙は441基あった。覆土の色調を黒色・黒褐色・灰褐色の３つに大別し、それぞれＡ、Ｂ、Ｃとした。さらにその中間に相当するものとして多いもので１～３の３段階に区分した。数字が小さいほど色調が濃い。

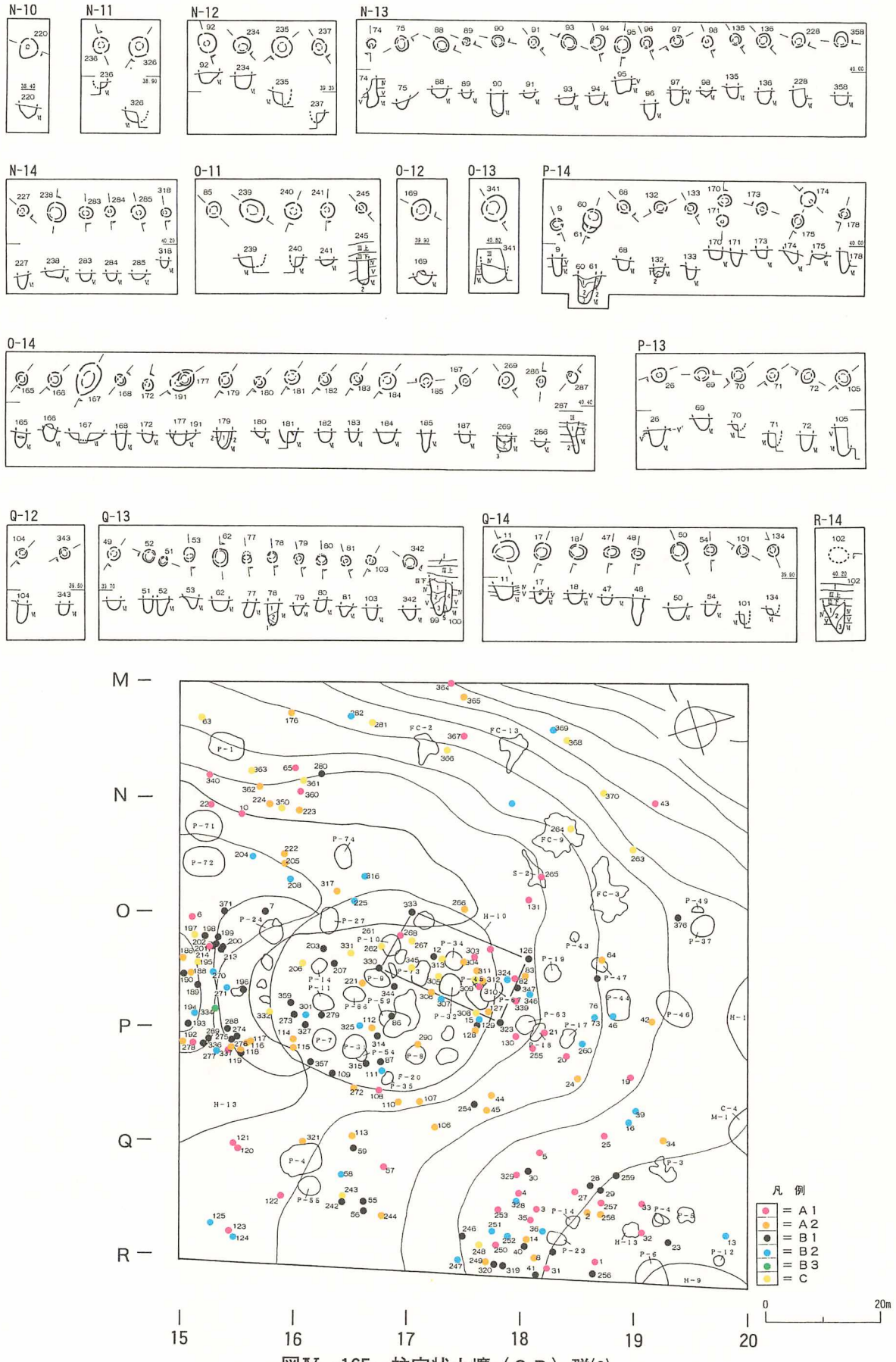
型	色　調	その他の特徴	典型例
Ａ－１	(10ＹＲ1.7/1～2/1)黒	層界が斑状に漸移し、ぼそぼそでしまりがない	108、340
Ａ－２	(10ＹＲ2/1～3/1)黒～黒褐	１よりもやや粘性があり、色調がやや淡い	107、114
Ｂ－１	(7.5ＹＲ3/1～4/1)黒褐～灰褐	ロームブロックが混じる、層界は画然とする	126、419
Ｂ－２	(7.5ＹＲ3/1～4/1)黒褐～灰褐	ロームブロックが混じる、層界はやや不明瞭	149、133
Ｂ－３	(7.5ＹＲ3/1～4/1)黒褐～灰褐	ロームブロックが多量に混じる、他は１と同じ	334
Ｃ	(7.5ＹＲ4/1～5/1)灰褐	ぼんやりとして、不明瞭なもの	113、144

これらのうち、Ｂ型としたものは覆土にロームブロックが混じり明瞭なものが多いことから、比較的丈夫な建築物を作った可能性があるものと考え図面上でその配置を検討し遺構の抽出に努めた。その結果４カ所において何らかの構築物とみられる遺構と推定された。その他の小土壙に関しては、杭列、墓標などといった役割が想定できるものもあるが、いずれも可能性の域を出ない。（立田）

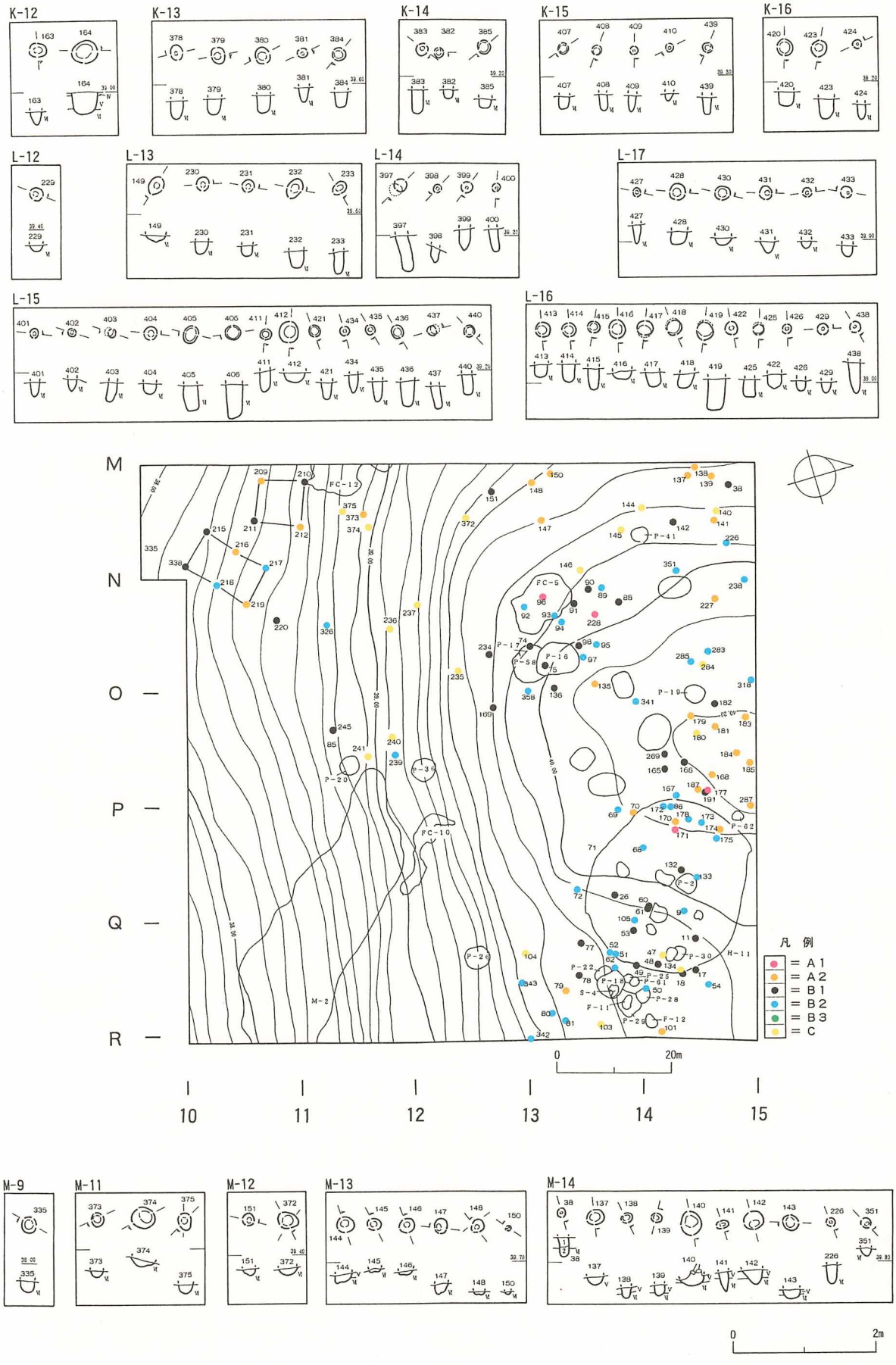
方形柱穴列１（図Ⅳ－168、図版51）（ＳＰ－387・388・389・390・391・392）
位　置　Ｆ－12－ｃ・ｄ、Ｇ－12－ｄ
規　模　328×168cm
特　徴　調査区西部の段丘平坦面に位置する。Ⅵ層上面を精査中に検出した。南東側を半截して断面形を確認した。Ｈ－５から３m程南東側に位置し、その間に焼土Ｆ－９がある。覆土の特徴は387、389、390、がＢ－１、388、392がＢ－２、391がＡ－２である。検出面からの深さはいずれも14～20cmで比較的均質であるが、先端の形状は北側の３つが比較的平坦なのに対し、他は丸い。位置関係からＨ－５に関連する施設の可能性がある。



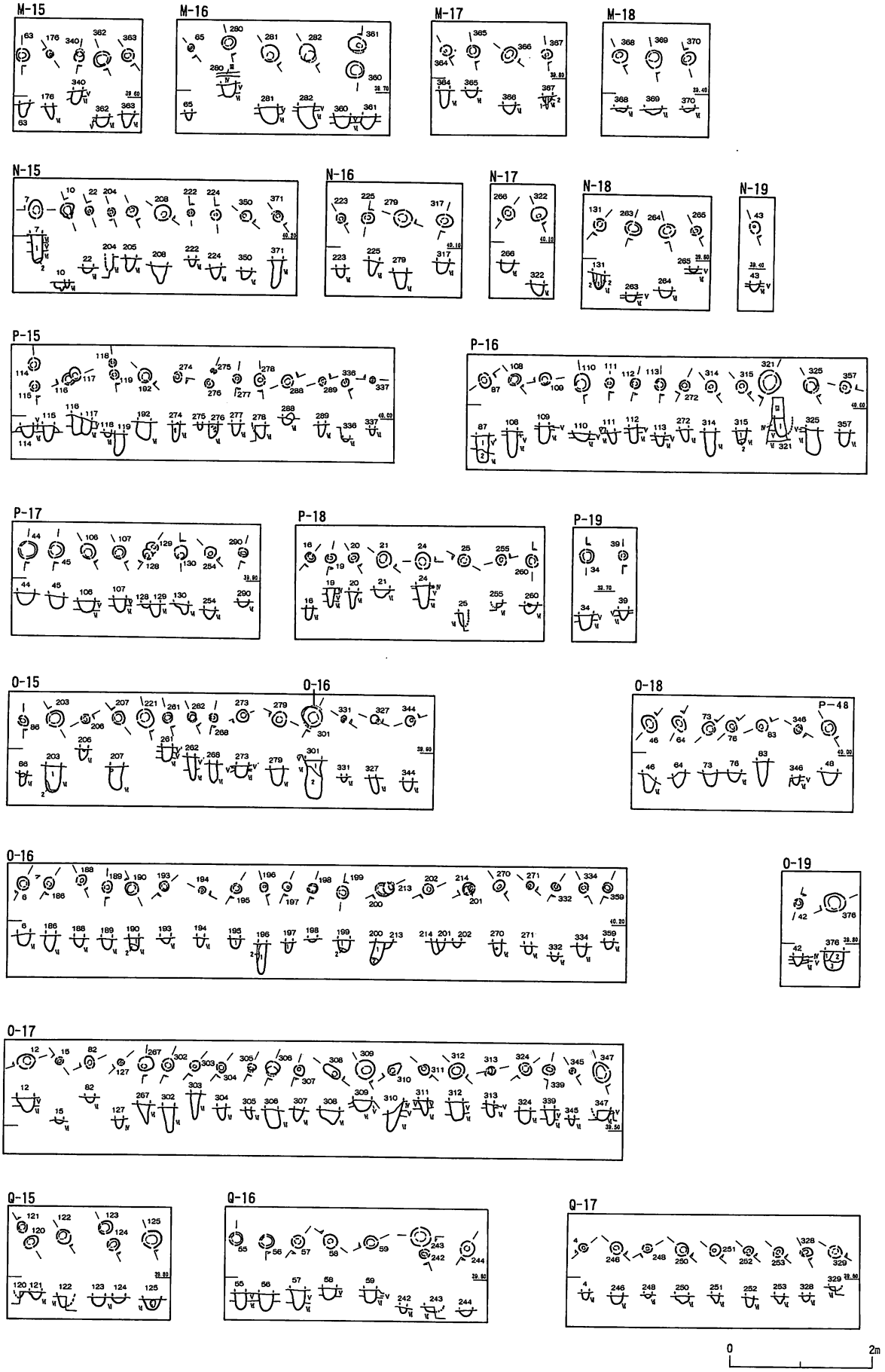
図Ⅳ－164　柱穴状土壙（ＳＰ）群(1)



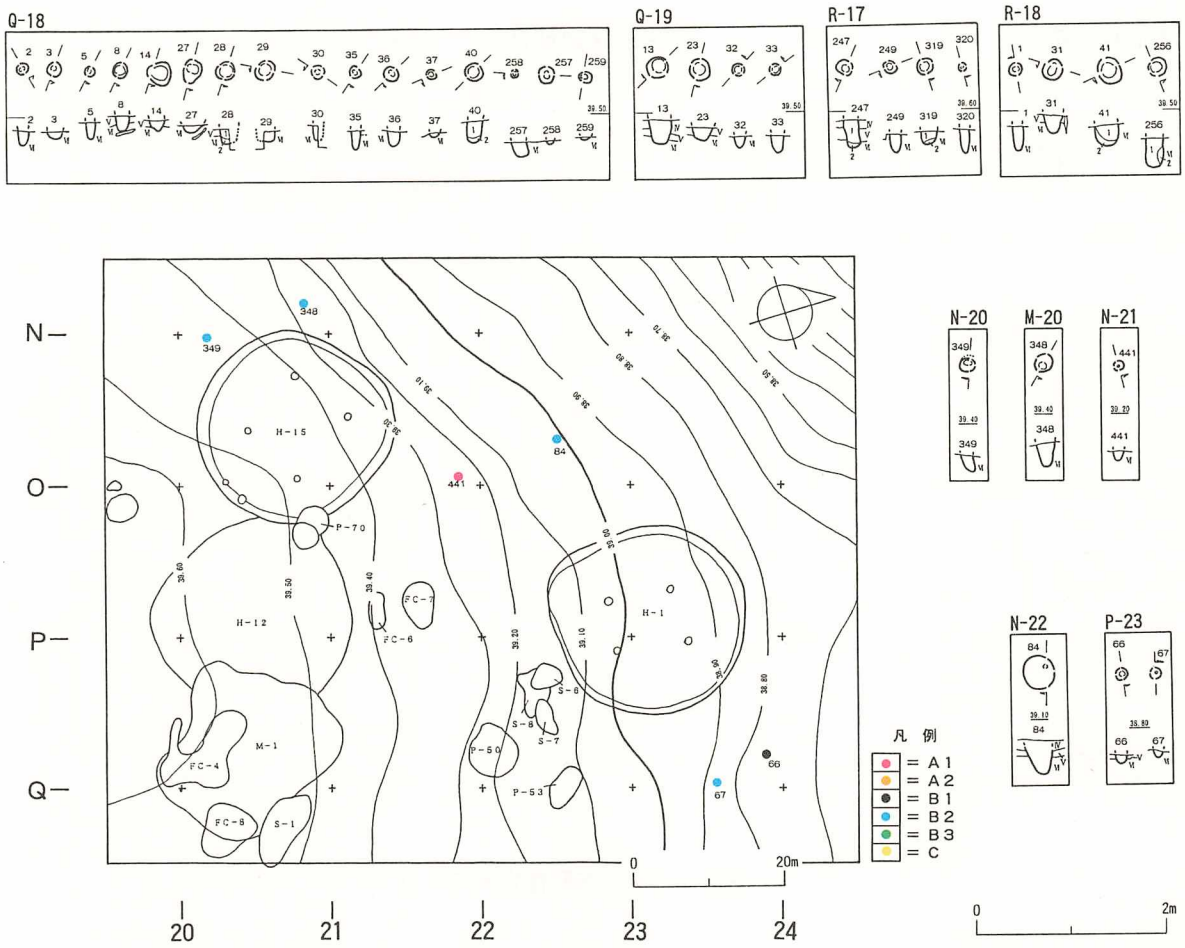
図Ⅳ－165　柱穴状土壙（ＳＰ）群(2)



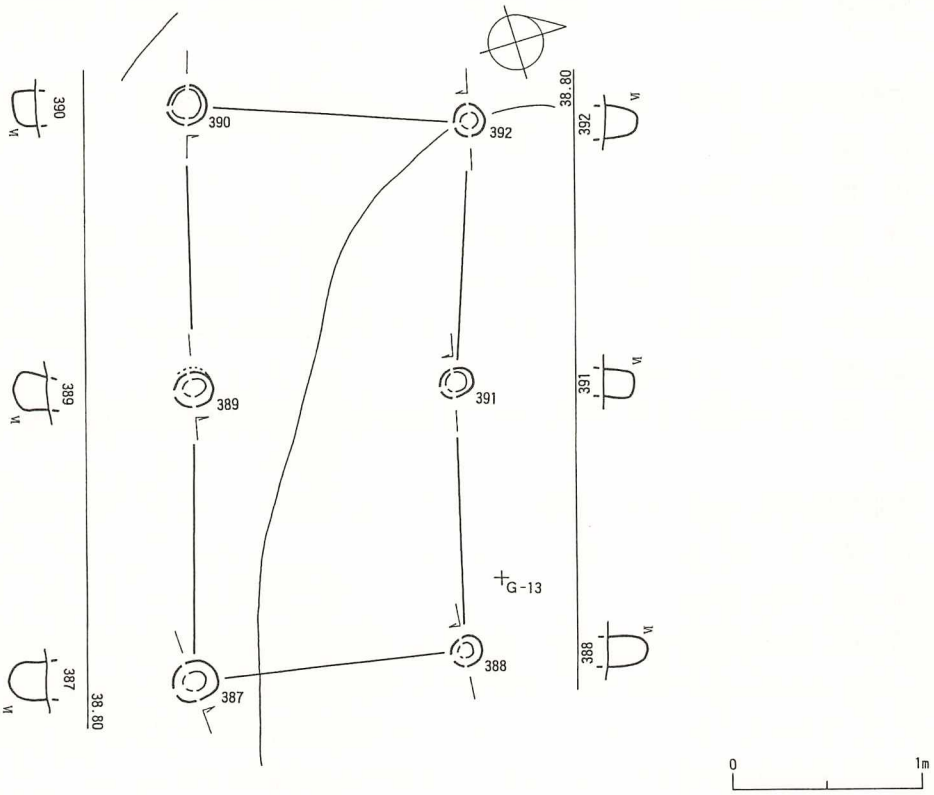
図Ⅳ－166　柱穴状土壙（ＳＰ）群(3)



図Ⅳ－167　柱穴状土壙（ＳＰ）群(4)

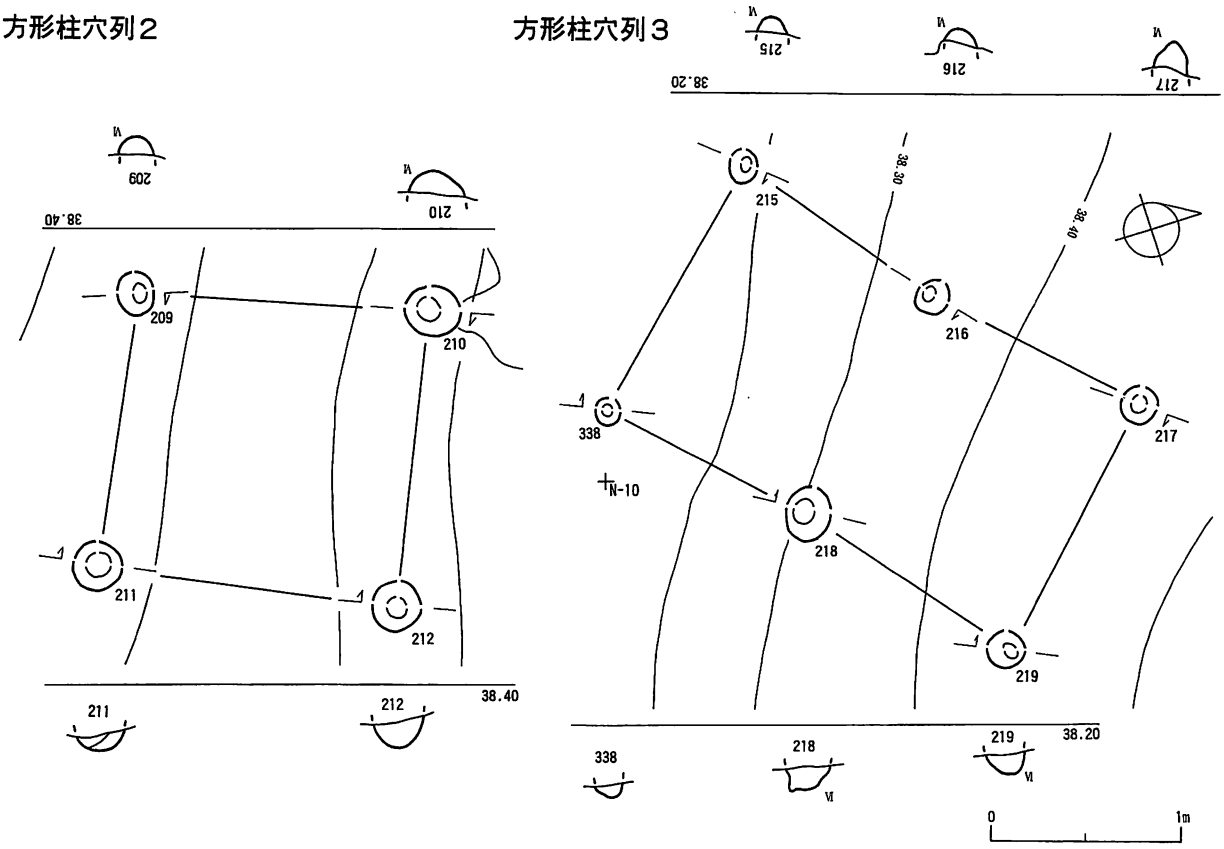


方形柱穴列1



図Ⅳ－168　柱穴状土壙（ＳＰ）群(5)・方形柱穴列1

方形柱穴列２　　方形柱穴列３



図Ⅳ－169　方形柱穴列２・３

遺　物　出土していない。

時　期　周辺で検出される遺構の時期から、縄文時代前期後半円筒土器下層式の時期とみられる。

方形柱穴列２（図Ⅳ－169、図版51）（ＳＰ－209・210・211・212）

位　置　Ｍ－10－ｃ・ｄ

規　模　186×182cm

特　徴　調査区南東端の段丘斜面に位置し、ＳＰ－209、210、211、212の４基で構成される。平面形はほぼ正方形である。覆土の分類は209、211がＢ－１、210がＡ－１、212がＡ－２である。先端の形状はすべて椀状である。Ⅳ層上面からの深さで平均42cmになるため、建物の可能性がある。

遺　物　出土していない。

時　期　同一性格の遺構であるため、縄文時代前期後半円筒土器下層式の時期のものとみられる。

方形柱穴列３（図Ⅳ－169、図版52）（ＳＰ－215・216・217・218・219・338）

位　置　Ｍ－10－ｂ・ｃ、Ｎ－10－ａ・ｄ

規　模　260×166cm

特　徴　調査区南部の段丘斜面に位置する。Ⅵ層上面を精査中に検出した。ＳＰ－215・216・217・218・219・338の６基で構成され、平面形は長方形を呈する。覆土の分類は215、338がＢ－１、217がＢ－２、218がＡ－１、219がＡ－２である。断面形は概ね椀状を呈するが、ばらつきが多い。平面形は東西に長軸のある長方形を呈するため、建物である可能性が高い。

遺　物　出土していない。

時　期　同一性格の遺構であるため、縄文時代前期後半円筒土器下層式の時期のものとみられる。

（立田）

柱穴状土壙出土の遺物（図Ⅳ－170、図版55　表Ⅳ－20・24）

（土器）ここではＳＰから出土した土器をまとめて報告する。これらは、全て胎土中に繊維を含むⅡ群ｂ類土器である。１・２はＳＰ－26から出土したＲＬの斜行縄文が施される胴部である。２の器面にはＲの撚糸を使った綾絡文が２条付加されている。３・４はＳＰ－87から出土した斜行縄文の施される胴部で、原体は３がＲＬ、４がＬＲである。５・６はＳＰ－129から出土したＬＲの斜行縄文が施された胴部である。７はＳＰ－206から出土した口縁近くの土器で、貝殻によると考えられる横位の条痕文が施されている。８はＳＰ－301から出土した口縁近くの土器で、地紋となるＲＲＬの撚り戻しの上から、上下段にＲの綾絡文、中段にＬＲの縄線文が施されている。胎土中には海綿骨針も混入している。（皆川）

（石器）９～15はたたき石である。９、10、15はⅦ３、３～６はⅦ２である。９はＳＰ－17、10はＳＰ－86、３はＳＰ－135、12はＳＰ－165、13はＳＰ－207、14はＳＰ－233、15はＳＰ－288の覆土中から出土したもので、９は被熱によるとみられる赤化した部分、黒斑がある。11、14は礫の周縁に断続的なたたき痕があるもののうち、比較的痕跡が明瞭なものである。（立田）